

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院

看護職員等宿舎 1 号棟地点

臨床試験棟地点

看護職員等宿舎 3 号棟地点 (1)

2021



東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院

看護職員等宿舎 1 号棟地点

臨床試験棟地点

看護職員等宿舎 3 号棟地点 (1)

2021



卷頭図版 1



看護職員等宿舎 1 号棟地点 D 面全景



看護職員等宿舎 1 号棟地点 SI1001 出土遺物



看護職員等宿舎 1 号棟地点 SK299 出土建窯天目



看護職員等宿舎 1 号棟地点 SK299 出土被災遺物



臨床試験棟地点 D面全景



臨床試験棟地点 S104 出土遺物



看護職員等宿舎 3号棟地点 SX15 玉石検出



看護職員等宿舎 3号棟地点 SX15 漆喰検出



## 例 言

1. 本書は、東京大学医学部附属病院 看護職員等宿舎1号棟地点 臨床試験棟地点 看護職員等宿舎3号棟地点新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 看護職員等宿舎3号棟地点の報告は江戸時代編、古墳時代編の2編に分離して報告、江戸時代編は本書にて行い、古墳時代編は医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期（HHN308）にて行う。
3. 各地点の略称は以下のとおりである。
  - 看護職員等宿舎1号棟地点：HN
  - 臨床試験棟地点：MRI
  - 看護職員等宿舎3号棟地点：HNⅡ
4. 各調査地は、調査・整理時に工事名称を地点名とし、既出の年報・報告書などでそれを用いてきた。本報告作成にあたり、以下の通り現在の施設名称に改称した。
  - (旧) 看護婦宿舎地点 (本報告) 看護職員等宿舎1号棟地点
  - (旧) MRI-CT 棟地点 (本報告) 臨床試験棟地点
  - (旧) 看護婦宿舎Ⅱ期地点 (本報告) 看護職員等宿舎3号棟地点
5. 全地点は、東京都文京区本郷7丁目3-1に所在する。
6. 全地点は、東京都遺跡地図「文京区No.47 本郷台遺跡群」内に位置している。
7. 各地点の調査面積は下記のとおりである。
  - 看護職員等宿舎1号棟地点：746㎡
  - 臨床試験棟地点：400㎡
  - 看護職員等宿舎3号棟地点：525㎡
8. 各地点の調査・整理期間は下記の通りである。
  - 看護職員等宿舎1号棟地点
    - 試掘調査：1993年4月19・20日
    - 本調査：1993年8月4日～1994年1月17日
    - 整理作業：2003年7月3日～7月17日、2005年2月7日～6月27日、2008年3月24日～7月15日（遺物基礎整理）  
2008年1月31日～4月1日、2011年5月13日～年12月8日（遺物図デジタル化・図版作成）  
2007年5月30日～8月21日、2017年4月1日～9月28日、2020年3月17日～9月8日（遺構図デジタル・図版作成）  
2019年2月19日～7月30日、2020年3月3日～9月9日（事実記載）
    - 編集：2020年10月7日～2021年1月25日
  - 臨床試験棟地点
    - 試掘調査：1993年7月27日
    - 本調査：1994年1月18日～3月12日
    - 整理作業：2003年6月19日～20日、2005年3月7日～6月24日、2008年5月28日～8月8日（遺物基礎整理）  
2008年3月3日～2011年4月8日、2019年7月27日～9月8日（遺物図デジタル化・図版作成）  
2019年10月15日～30日、2020年8月31日～9月9日（遺構図デジタル化・図版作成）  
2019年7月30日～9月9日、2020年8月28日～9月4日（事実記載）
    - 編集：2020年10月7日～2021年1月25日
  - 看護職員等宿舎3号棟地点
    - 本調査：1996年11月5日～1997年1月31日
    - 整理作業：2003年6月25日～7月2日、2005年3月7日～6月27日（遺物基礎整理）  
2008年3月13日～2011年4月11日（遺物図デジタル化・図版作成）  
2015年8月21日～2016年6月15日（遺構図デジタル化・図版作成）  
2016年4月1日～6月29日、2017年9月28日～12月4日（事実記載）

編集：2020年10月7日～2021年1月25日

9. 発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、看護職員等宿舎1号棟地点、臨床試験棟地点は成瀬晃司が、看護職員等宿舎3号棟地点は原祐一、大成可乃が担当した。
10. 本報告の編集は大成、小林が行った。
11. 調査時の遺構写真は調査担当者が、遺物写真は青山正昭が撮影した。
12. 執筆分担は下記のとおりである。
  - I 遺跡の位置と環境 大成
  - II 看護職員等宿舎1号棟地点 第I章～第IV章 成瀬、第V章第1節 成瀬、第V章第2節 平石、第VI章 成瀬・香取、第VII章 阿部 第VIII章 成瀬、
  - III 臨床試験棟地点 第I章～第II章 成瀬、第III章第1節 成瀬、第III章第2節 平石、第IV章 成瀬
  - IV 看護職員等宿舎3号棟地点 第I章～第II章第1節 大成、第II章第2節 大成、大貫（瓦）、第III章 阿部、第IV章 大成
13. 石材鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
14. 動物遺体の同定及び分析は阿部常樹氏（國學院大學学術資料センター）に依頼し、原稿を賜った。
15. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場Ⅱ構内（東京都目黒区駒場4-6-1）、同工学系研究科柿岡教育研究施設内（茨城県石岡市柿岡414）において、管理・保管・運用している。
16. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する（敬称略、五十音順）  
片山まび、杉森哲也、谷川章雄、早坂廣人、考古学研究室、東京都教育委員会、文京区教育委員会、水子貝塚資料館

発掘調査参加者（所属は調査時）

看護職員等宿舎1号棟地点

君島俊行 鶴見英成 米川裕治（文学部考古学研究室学生）、加藤建設（株）

臨床試験棟地点

君島俊行（文学部考古学研究室学生）、加藤建設（株）

看護職員等宿舎3号棟地点

加藤建設（株）

整理作業参加者（所属は参加時）

青山正昭 安芸毬子 阿部常樹 池田奈津代 今井雅子 大貫浩子 小川祐司 加藤理香 香取祐一 小林照子 川原良子 坂野貞子 田中美奈子 野々村遊 山田くりか（埋蔵文化財調査室） 君島俊行 米川裕治（考古学研究室大学院生）

## 凡 例

- 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。  
SA：境（石列） SB：基礎列 SD：溝 SE：井戸 SF：炉跡 SI：竪穴住居址 SK：土坑 SL：便槽 SP：ピット SU：地下室 SX：性格不明、未略号化の遺構
- 遺構図版の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は基本的に1/3であるが、その他の縮尺は各図版に記した。
- 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
  - ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
  - ・—は、断面を表している。
  - ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
  - ・\——／は、口唇部の口銹を表している。
  - ・播鉢の↓——↓は、体部播目の範囲を表している。
  - ・口唇部の\←→／は、敲打痕を表している。
- 本文中に記載した陶磁器・土器類は、「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」（いわゆる東大分類）の最新バージョンである『医学部附属病院入院棟 A 地点』で示した分類（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）、人形・玩具類は「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」（安芸・小林・堀内 2012）、瓦類は「御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」（加藤・金子 1990）に準拠している。
- 遺物観察表は、全て添付の CD-ROM に xlsx ファイルにて、収納している。
- 各地点の調査では、調査区の形状に適した任意のグリッドを設定して行った。詳細は各地点第 I 章第 2 節を参照されたい。
- 遺構断面図などに記された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、基標番号「郷（2）」本郷七丁目 3 東大赤門前から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお各地点の値は、調査前年度に刊行された東京都土木技術研究所『水準基標測量成果表』に基づいている。
- 遺構平面図に記載された方位記号は、平面直角座標系による方眼北を示し、真北より 2 分 20 秒西偏している

○胎質

J (磁器)      T (陶器)      D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

- A1 景德鎮窯系
- A2 漳州窯系
- A3 德化窯系
- A4 龍泉窯系
- A5 宜興窯系
- A6 朝鮮
- A7 ベトナム
- A8 ヨーロッパ
- A9 福建・広東系
- A10 西アジア

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

E - 備前系

F - 志戸呂系

G - 常滑系

H - 萩系

I - 万古系

J - 大堀・相馬系

K - 丹波系

L - 堺系

M - 益子・笠間系

N - 九谷系

O - 壺屋系

P - 淡路系

Q - 薩摩系

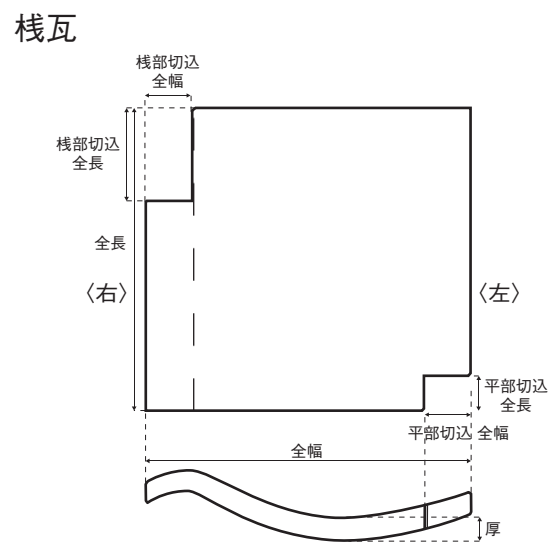
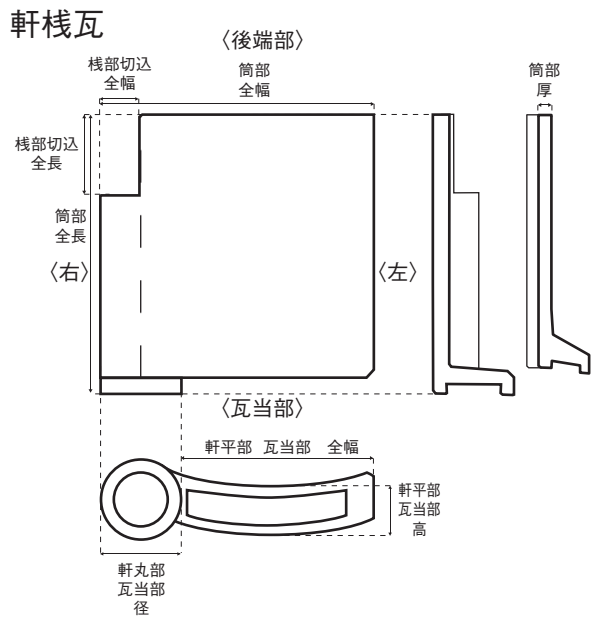
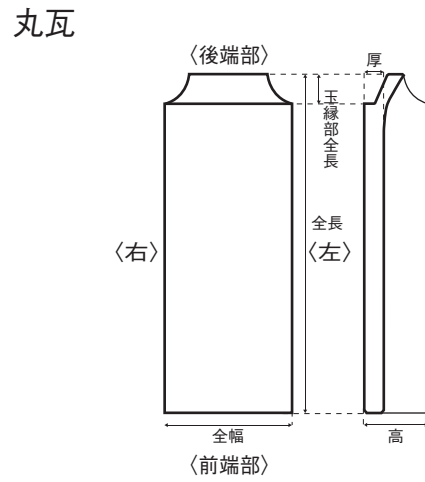
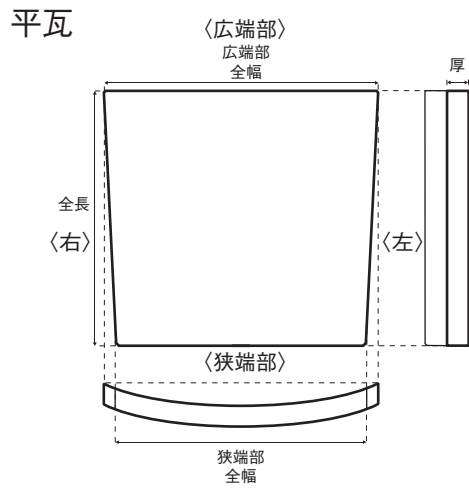
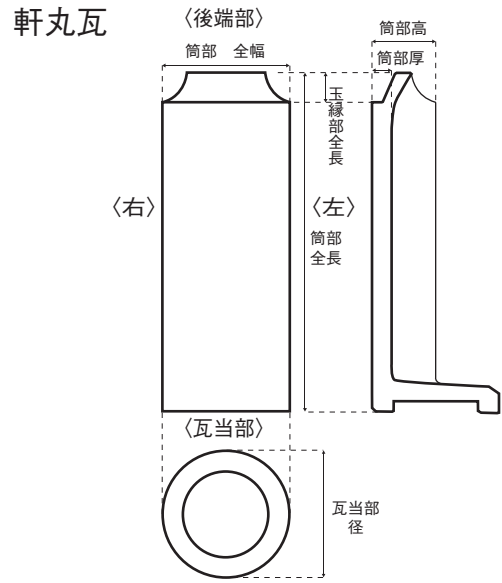
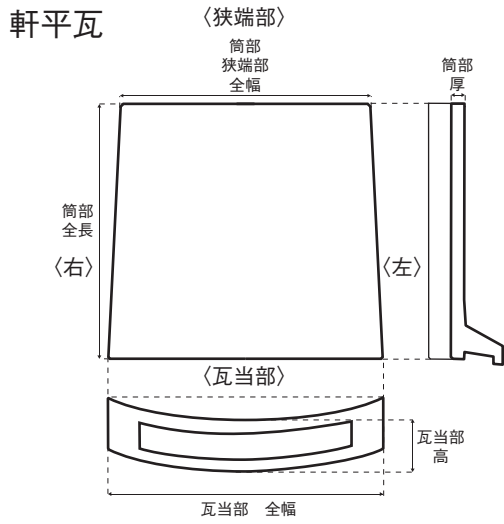
R - 三田系

S - 飯能系

Z - 不明

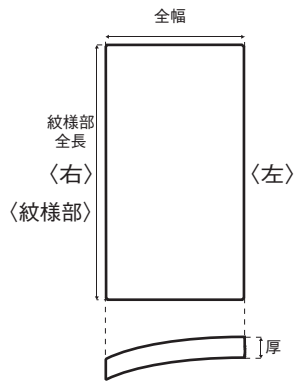
○器種

- |           |          |           |           |          |
|-----------|----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 碗      | 2. 皿・平鉢  | 3. 大皿・大平鉢 | 4. 爛徳利    | 5. 鉢     |
| 6. 坏      | 7. 猪口    | 8. 仏飯器    | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶    |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺   | 13. 蓋物    | 14. 筆立て   | 15. 壺・甕  |
| 16. 急須    | 17. 爛鍋   | 18. 合子    | 19. 水滴    | 20. 蓮華   |
| 21. 植木鉢   | 22. 花生   | 23. 片口鉢   | 24. 灰落し   | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ   | 27. 水注   | 28. 洩瓶    | 29. 搦鉢    | 30. 餌入れ  |
| 31. 火鉢    | 32. 柄杓   | 33. 鍋     | 34. 土瓶    | 35. 戸車   |
| 36. ちろり   | 37. 薬研   | 38. 手焙り   | 39. おろし皿  | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利   | 42. 行平鍋  | 43. 十能    | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈   |
| 46. カンテラ  | 47. ほうろく | 48. 七輪    | 49. 涼炉    | 50. 五徳   |
| 51. 塩壺    | 52. 燭台   | 53. 蒸し器   | 54. 懐炉    |          |
| 63. あんか   | 64. 煙硝搦鉢 | 65. 乳棒    | 66. 硯屏    | 67. 釜    |

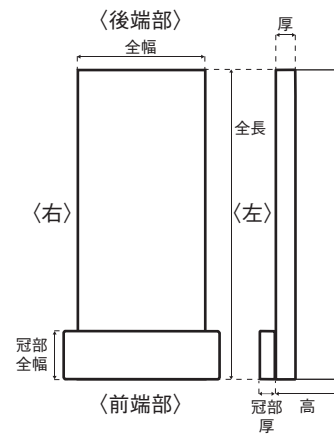


瓦凡例(1) 軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、軒棧瓦、棧瓦

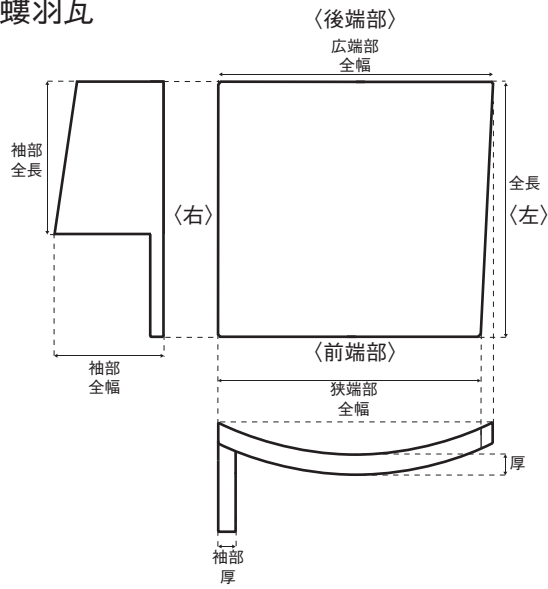
### 熨斗瓦



### 冠瓦



### 螻羽瓦



瓦凡例(2) 熨斗瓦、冠瓦、螻羽(けらば)瓦

東京大学本郷構内の遺跡  
看護職員等宿舎1号棟地点 臨床試験棟地点 看護職員等宿舎3号棟地点(1)  
発掘調査報告書

目 次

例 言  
凡 例  
目 次

I 遺跡の位置と環境

第I章 調査の経緯と概要

第1節 調査地点の位置と周辺調査	3
第2節 調査地点の地理的・歴史的環境	4

II 看護職員等宿舎1号棟地点

遺構一覧表	9
第I章 調査の経緯と概要	
第1節 調査に到る経緯	15
第2節 調査の方法と経過	15
第3節 基本層序	15
第II章 近代の遺構	18
第III章 江戸時代の遺構	
第1節 A・B面の遺構	21
第2節 C面の遺構	38
第3節 D面の遺構	48
第IV章 江戸時代以降の遺物	64
主要遺構出土磁器・陶器・土器組成表	118
第V章 古墳時代の遺構と遺物	
第1節 遺構	123
第2節 遺物	140
第VI章 縄文時代の遺構と遺物	152
第VII章 看護職員等宿舎1号棟地点出土の動物遺体	155
第VIII章 まとめ	170

III 臨床試験棟地点

遺構一覧表	175
第I章 調査の経緯と概要	
第1節 調査に至る経緯	176
第2節 調査の方法と経過	176
第3節 基本層序	176

第Ⅱ章 江戸時代の遺構と遺物	
第1節 A面の遺構	179
第2節 D面（ローム面）の遺構	179
第3節 遺物	186
第Ⅲ章 古墳時代の遺構と遺物	
第1節 遺構	192
第2節 遺物	203
第Ⅳ章 おわりに	207

#### Ⅳ 看護職員等宿舎3号棟地点（1）

遺構一覧表	211
第Ⅰ章 調査の経緯と概要	
第1節 調査に至る経緯	213
第2節 調査の方法と経過	213
第3節 確認面と遺構の概要	213
第Ⅱ章 江戸時代の遺構と遺物	
第1節 遺構	215
第2節 遺物	246
主要遺構出土磁器・陶器・土器組成表	274
第Ⅲ章 看護職員等宿舎3号棟地点出土の動物遺体	279
第Ⅳ章 まとめ	294

#### 引用・参考文献

#### Ⅴ 考察

看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点の古墳時代遺跡調査成果と今後の展望	
平石 冬馬	299
看護職員等宿舎1号棟地点からみた富山藩上屋敷	
成瀬 晃司	302
藩邸内斜面地における空間利用について	
大成 可乃	313

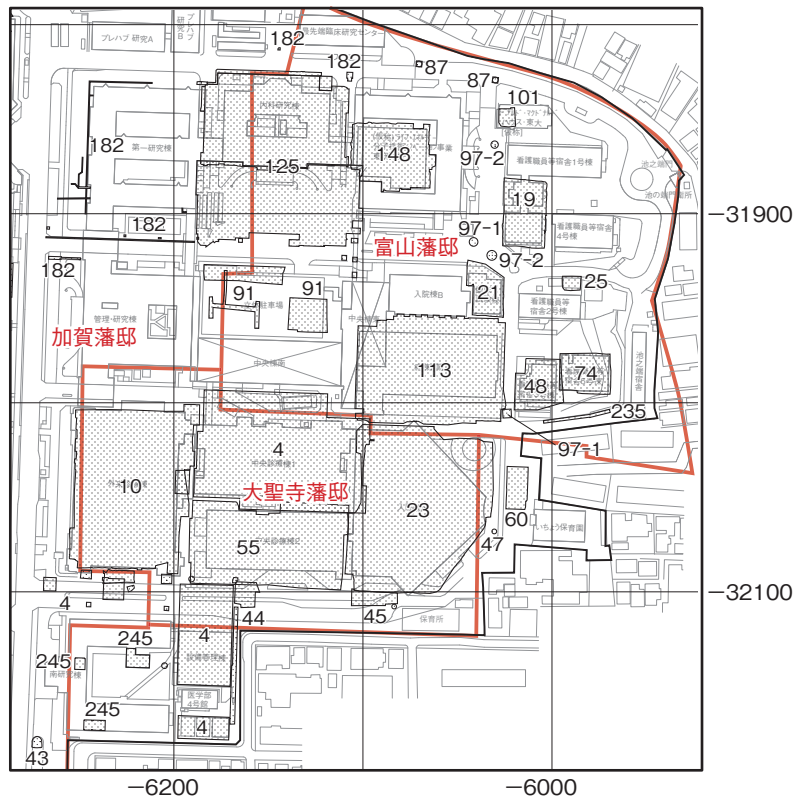
#### 報告書抄録



# I 遺跡の位置と環境



## 第 I 章 調査の経緯と概要



I-1図 調査地点の位置(1/4000)

### 第 1 節 調査地点の位置と周辺調査

3箇所の調査地点(19看護職員等宿舎1号棟地点(以下、1号棟地点)、21臨床試験棟地点、48看護職員等宿舎3号棟地点(以下、3号棟地点))は、東京都文京区本郷7丁目3番1号、東京大学本郷構内(以下、本郷構内)の東部、医学部附属病院の東側に位置する(I-1図)。

本郷構内は全域を文京区No.47本郷台遺跡群として周知の遺跡に登録されており、3箇所の調査地点が位置する病院地区でも埋蔵文化財調査室において継続的に発掘調査を実施している。すでに報告書が刊行されている4医学部附属病院中央診療棟地点(以下、病中)、10医学部附属病院外来診療棟地点、23医学部附属病院入院棟A地点(以下、入院棟A地点)では、天和2(1682)年のいわゆる「八百屋お七の火事」や元禄16(1706)年の「水戸様火事」の大規模火災の痕跡と、その火災を契機とした藩邸内の大規模な土地造成痕跡などが確認された。大聖寺藩邸と富山藩邸との地境、大聖寺藩邸と加賀藩邸との地境も確認されたが、これらの地境も天和2年の火災を契機に大きく変動したことが報告されている。江戸時代以前の遺構として病中では平安時代の井戸、古墳時代後期の竪穴住居址が、入院棟A地点では、

中世の井戸と道路状遺構、古墳時代の前期から後期の竪穴住居址、縄文時代の土器廃棄場、旧石器時代の石器類や礫群が確認された。整理が継続している113医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点では、1号棟地点、3号棟地点との関連が想定される庭園関連遺構(植栽痕、飛び石抜き取り穴など)や、天和2年以前の屋敷割に関連する藩邸内の区割り道と想定される道路状遺構(SR444)などが確認されている。江戸時代以前の遺構としては中世の井戸、古墳時代前期から後期の竪穴住居址、縄文時代のTピット、炉跡、旧石器時代の石器ブロックなどが確認されている。なお3号棟地点南東部分に入院棟A地点から続く埋積谷を検出、その谷が東北東方向から東南東方向へと伸びる事が確認されたことから、この谷が台東区茅町二丁目遺跡で確認された埋積谷へ続き、上野不忍池へ抜ける谷筋である事が想定された。125クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期地点では100基以上のおびただしい数の地下室や、塵穴と推定される大形土坑、堀の可能性を指摘されている溝状遺構が確認されている。江戸時代以前の遺構としては古墳時代の竪穴住居址12軒と周溝、縄文時代ではTピットと集石遺構なども確認されている。148国際科学イノベーション総括棟地点では、遺構範囲が東西南北12m以上、確認面からの深さ

が8mを越え、坑底が関東ローム層下の砂礫層に到達していた性格不明の大形遺構(SX207)が確認されている。SX207の覆土下層には、元禄16年の火災に伴う焼土層とその火災で二次的な火熱を受けた陶磁器土器類や木製品も確認されており、元禄16年の火災後まもなく埋め戻されていることが推定される。SX207が埋め戻された後は、その直上にローソク基礎による大形建物址や、大小の河原石を根石あるいは栗石として利用した礎石が複数回作り替えられる状況が確認されている。江戸時代以前の遺構としては古墳時代の竪穴住居址6軒や溝などが検出されている。

以上のように近年の病院地区では、これまでの東側エリアの調査に加え、北側エリアの発掘調査(医学部附属病院立体駐車場地点、医学部附属病院クリニカルリサーチセンター地点、国際科学イノベーション総括棟地点など)も増加し、後述する小松氏の詳細な文献調査と考古学的成果との照合が可能になりつつある。

## 第2節 調査地点の地理的・歴史的環境

### (1) 地理的環境

本郷構内の地理的環境については理学部7号館地点(鈴木1989)、東京大学史紀要(阪口1990)、浅野地区I(パリノ2016)などに、病院地区の地理的状况については入院棟A地点研究編(成瀬2016)において詳細に述べられており、それらを参照されたい。

3箇所調査地点の概況のみ述べると、現在の標高は1号棟地点が約15.6m、臨床試験棟地点と3号棟地点が約15mを測り、3箇所調査地点を結ぶ構内道路は北から南へ緩やかに傾斜している。地形的には武蔵野台地東端のM2面に対比される本郷台上の東端に立地し、東の方向に根津谷を望む緩斜面上に立地している。明治16年測量の「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図」によると、1号棟地点、臨床試験棟地点の標高は約15mと現在の標高と大きくは変わらないが、3号棟地点の標高は北西部で14m、南東部では12mと大きな勾配がある事が確認され、現在の標高に至ったのは明治16年以降であることがわかる(I-2図)。前述の明治16年の測量原図でも確認できる3号棟地点の西から南東方向への傾斜は、入院棟A地点などで指摘されている根津谷方向へ開く埋積谷の存在が影響していると考えられるが、3箇所調査地点を含め、病院地区の各調査地点の17世紀前半段階の遺構主軸が、この埋積谷に対し平行、もしくは垂直の軸を有しており、江戸時代初期の開発が旧地形を意識した開発であったことが指摘されている(成瀬2016)。

### (2) 歴史的環境

3箇所調査地点における最も古い遺構は、1号棟地点の縄文時代早期末葉の炉跡や3号棟地点の縄文時代前期中葉の竪穴住居址である。その後は1号棟地点では古墳時代前期、後期の竪穴住居址が、臨床試験棟地点と3号棟地点では古墳時代前期から中期の竪穴住居址が確認されるが、古代、中世に帰属する遺構、遺物は確認されていない。ただI-1表に示したように近隣調査地点においては、濃淡はあるものの旧石器時代や古代、中世の遺構、遺物などが確認されており、本来は3箇所調査地点を含め病院地区全体が旧石器時代から連続的に人間の活動が認められる場所であったと推測される<sup>(1)</sup>。

江戸時代の遺構、遺物は3箇所調査地点を含め病院地区全体で確認されている。既報告の文献調査や絵図面との照合から、病院地区は元和2・3(1616～1617)年以降は加賀藩下屋敷、寛永16(1639)年からは概ね西側は加賀藩邸、加賀藩が貸与した北東エリアは富山藩、南東エリアが大聖寺藩邸となる。その後は天和2(1682)年の大火(いわゆる八百屋お七の火事)を契機として、各藩邸間で地境の変動などはあるが、基本的に慶応4(1868)年まで加賀藩、富山藩、大聖寺藩の上屋敷が存在したことが明らかとなっている。この間、前述した天和2年、元禄16(1703)年、文政8(1825)年、弘化3(1846)年の計4回の大火があり、各藩の屋敷が全焼または一部被災したと記録されており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお3箇所調査地点はI-3図に示した位置にあり、天和の火災前後での地境変動の影響は受けておらず、貸与されてから一貫して富山藩邸に該当する。以上のような状況から、17世紀初期段階に位置づけられる遺構・遺物は当該地における加賀藩邸の様子を示すものであり、それ以降の遺構・遺物は富山藩邸の様子を示すものといえる。富山藩江戸屋敷に関する絵図資料は少なく、現存する最古の絵図は文政8(1825)年のものであり(小松2015)、今回報告する地点を含め病院地区北東エリアの発掘調査で検出される17～18世紀代の遺構は、文政8年以前の藩邸内の様子を復元する重要な資料となりえるものである。

I-4図は、1号棟地点の発掘調査で検出された「教師館」(I-2図、「19」横の赤い建物)基礎や、10医学部附属病院外来診療棟地点で検出された「東京医学校本館」基礎などを基準として、江戸時代に近く、精度の高い明治16年測量の「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図」と病院地区の現況図を照合し、安政5(1858)年の富山藩上屋敷の様子が描かれた「江戸御上屋敷図」と病院地区の調査地点を合わせるように重ねた



I-2 図 明治 16 (1883) 年の調査地点  
(明治 16 年測量の「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図」に加筆。赤字は標高)



I-3 図 天和 2 (1682) 年以前の調査地点  
(「江戸方角安見図」延宝 8 (1680) 年板行。★が調査地点)



I-4 図 安政 5 年 (1858) 年の調査地点  
(「江戸御上屋敷図」と調査地点を合成)

ものである。「江戸御上屋敷図」の空間構成については先の小松論文の中で詳細な分析がなされており、それによると 1 号棟地点、臨床試験棟地点は御殿空間に、3 号棟地点は御殿空間と詰人空間にまたがる部分に該当する。さらに絵図面に描かれた部屋の文字をみると、1 号棟地点は「御居間」「御納戸」「御書齋」「御台子」「老女席」などの文字がみえ藩主やその家族を世話する女中の詰所や作業スペースであり、臨床試験棟地点は御玄関奥の能舞台があった場である。また 3 号棟地点の概ね調査区北側は御殿空間の「御露地」、南側は詰人空間で緑の带状に描かれた部分と「呉服御土蔵」と描かれた建物が確認できる。

近代以降は明治 4 (1871) 年に御用地として明治政府に召し上げられ、明治 7 (1874) 年に医学校用地となり、3 箇所の調査地点をはじめ現在の病院地区に該当する区域は、主に学校として利用され、富山藩表御殿を利用した別課医学教場、御雇外国人教師館などが建てられた。明治 26 (1893) 年別課医学教場として使用していた表御殿を山上会議所として移築したのを契機に、病院地区として整備が進められ、現在に至る。

【註】

- (1) 古代・中世は、病院地区はもちろん本郷構内の遺跡全体を見渡しても確認される遺構、遺物が極端に限られ、遺物は

I 遺跡の位置と環境

古代・中世以降の遺構覆土や整地層からの出土にとどまる  
事などから利用状況が非常に希薄であったことが推測される。

I-1表 周辺調査

番号	略称	調査名 (旧略称)	掲載書名	遺構・遺物の年代				
				旧石器	縄文	古墳	古代 中世	江戸
4	HHC	医学部附属病院中央診療棟 (病中)・設備管理棟 (エネセン)・給水設備棟 (給水)・共同溝 (共同溝)	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 医学部附属病院地点』	●	●	● (後)	●	●
10	HG	医学部附属病院外来診療棟	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点』					●
19	HN	医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収		● (早)	● (前・後)		●
21	MRI	医学部附属病院臨床試験棟地点	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収			● (前)		●
23	HW	医学部附属病院入院棟A	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』	●	● (晩)	● (前～後)	●	●
25	HND	医学部附属病院看護師宿舍ゴミ置き場	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収		● (前～中)	● (前～中)		●
43	HWK1	医学部附属病院基幹整備共同溝等	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』					●
44	HWK2	医学部附属病院基幹整備共同溝等	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』					●
45	HWK3	医学部附属病院基幹整備共同溝等	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』					●
47	HWK4	医学部附属病院基幹整備共同溝等	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』					●
48	HN II	医学部附属病院看護職員等宿舍3号棟地点	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収		● (前)	● (前～中)		●
55	HHC299	医学部附属病院第2中央診療棟 (2中)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収		● (晩)	●		●
60	HWK6	医学部附属病院基幹整備外構施設等	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収					●
74	HHN308	医学部附属病院看護師宿舍Ⅲ期	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収	●	● (早～前)	● (前～中)		●
87	HTG08	東京都下水道	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7、8所収			●		●
91	HHP09	医学部附属病院立体駐車場	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収					●
97-1	HKS09	基幹整備 (流域⑧排水) A区	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収			●		●
97-2	HKS09	基幹整備 (流域⑧排水) B区	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収			●		●
101	HMH10	ドナルド・マクドナルド・ハウス東大	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収	●		● (前～中)		●
113	HHWB12	医学部附属病院入院棟Ⅱ期	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9、10所収	●	● (早～前)	● (前～後)	●	●
125	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10、11、12所収	●	●	● (前～中)		●
148	HIN14	国際科学イノベーション総括棟新営	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収			● (前～中)		●
182	HCRG15	医学部附属病院CRC棟ほか外構設置	未報告					●
235	HNY	看護職員等宿舍5号棟南側擁壁	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収					●
245	HCRB17	クリニカルリサーチセンターB棟	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収					●

## Ⅱ 看護職員等宿舎 1 号棟地点





遺構一覽表

近代遺構

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SB	2	A	E8-I9	II-4	
SK	3	A	K8	II-3	II-69
SB	10	A	H7-I7	II-4	
SE	83	A	E8	II-4	

近世遺構

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SL	1	A	L9	II-29	
SK	4	A	J6-K7	II-5	
SK	5	A	K5-L5	II-5	
SK	6	A	J6-J7	II-5	
SK	7	A	J6-J7	II-5	
SK	8	A	L6	II-5	
SP	9	A	L5	II-5	
SB	11	A	K5	II-6、7	II-69
SE	12	A	K6	II-12	
SK	13	A	L6	II-12	II-70
SK	14	A	J5-K5	II-17	
SB	15	A	I6-K6	II-6、7	
SP	16	A	K5	II-30	
SP	17	A	K5	II-5	
SK	18	A	J5	II-18	II-70
SP	19	A	J5	II-6	
SP	20	A	J5	II-5	
SP	21	A	K6	II-6	
SP	22	A	K6	II-6	
SP	23	A	I7	II-5	
SP	24	A	I6	II-5	
SP	25	A	K5	II-5	
SP	26	A	K5	II-6、7	
SP	27	A	K5	II-6、7	
SB	28	A	K5	II-6、7	
SB	29	A	K6	II-6、7	
SB	30	A	J6	II-6、7	
SB	31	A	I5-J5	II-6、7	
SP	32	A	K6-L6	II-31	II-70
SK	33	A	J5-J6	II-5	
SP	34	A	K6	II-5	
SP	35	A	K6	II-5	
SK	37	A	H5-I6	II-19	II-70~73
SK	38	A	H6-I6	II-5	
SK	40	A	H5-I5	II-5	
SK	41	A	I5	II-5	II-73
SK	42	A	I6-J7	II-5	

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SP	43	A	I6	II-5	
SK	44	A	I6	II-5	
SP	45	A	L6	II-5	
SK	46	A	K6	II-5	
SB	47	A	K6	II-6	
SD	48	A	I5-L5	II-5	
SB	49	B	I8-J8	II-8、9	
SK	50	B	K9	II-20	II-73
SP	51	B	K9	II-5	
SP	52	B	K9	II-5	
SP	53	B	K9	II-5	
SP	54	B	K9	II-5	
SK	55	B	K9	II-21	II-73
SK	56	B	K9	II-5	
SK	57	B	K7-L8	II-22	II-73
SP	58	B	J8	II-5	
SP	59	B	J8	II-5	
SP	60	B	J8	II-5	
SP	61	B	J8	II-5	
SP	62	B	J8	II-5	
SP	63	B	J8	II-5	
SP	64	B	J8	II-5	
SP	65	B	J8	II-5	
SP	66	B	J8	II-32	
SP	67	B	J9	II-8	
SP	68	B	J9	II-8	
SP	69	B	J9	II-5	
SP	70	B	J9	II-5	
SB	71	B	J8-J9	II-8、9	
SP	72	B	I8	II-5	
SP	73	B	J8	II-5	
SP	74	B	J8	II-5	
SP	75	B	I8	II-5	
SE	76	B	L8	II-13	II-74
SB	77	B	K8-L8	II-8、9	
SB	80	B	J8	II-8、9	
SK	81	B	J8-K9	II-5	
SK	82	B	I8	II-8、9	
SK	84	B	E8	II-23	II-74
SP	85	B	I7	II-5	
SP	86	B	I7	II-5	
SP	87	B	I7	II-5	
SP	88	B	I7	II-5	
SP	89	B	I7	II-5	
SP	90	B	I7	II-5	

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SK	91	B	I7	II-5	
SP	92	B	I7	II-5	
SP	93	B	I7	II-5	
SP	94	B	I7	II-5	
SK	95	B	I7	II-5	
SP	96	B	I7	II-5	
SP	97	B	I7	II-5	
SK	98	B	I7	II-5	
SP	99	B	I7	II-5	
SP	100	B	I7	II-5	
SP	101	B	I7	II-5	
SP	102	B	I7	II-5	
SK	103	B	I7	II-5	
SP	104	B	I7	II-5	
SP	105	B	I7	II-5	
SK	106	B	I7	II-5	
SK	107	B	I7	II-5	
SK	108	B	I7	II-5	II-75
SP	109	B	I7	II-8、9	II-75
SP	110	B	I7	II-5	
SP	111	B	I8	II-5	
SP	112	B	I8	II-5	
SB	113	B	I7	II-8、9	
SK	114	B	E7-F7	II-24	II-75
SP	115	B	E8	II-5	
SB	116	B	E9-F9	II-10	
SP	117	B	F9	II-5	
SP	118	B	F8	II-5	
SP	119	B	F8	II-5	
SP	120	B	F8	II-5	
SP	121	B	F9	II-5	
SB	122	B	F9	II-5	
SP	123	B	F8	II-5	
SP	124	B	F8	II-5	
SP	125	B	F9	II-5	
SP	126	B	G8	II-5	
SP	127	B	F9	II-10	
SK	128	B	G9	II-5	
SP	129	B	F8	II-5	
SP	130	B	F8	II-10	II-75
SP	131	B	F8	II-5	
SP	132	B	G8	II-5	
SP	133	B	G8	II-5	
SP	134	B	G8	II-5	
SP	135	B	G8	II-5	

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SP	136	B	G8	II-5	
SP	138	B	G8	II-5	
SP	139	B	G8	II-5	
SP	140	B	G8	II-5	
SK	141	B	I8	II-25	II-75
SK	142	B	I8	II-5	
SP	143	B	I8	II-5	
SP	144	B	I7-I8	II-5	
SK	145	B	F9-G9	II-5	
SK	146	B	H9	II-5	
SE	147	B	H9	II-14	
SD	148	B	H8-H9	II-5	
SP	149	B	H8	II-5	
SP	150	B	H8	II-5	
SP	152	B	H8	II-5	
SP	153	B	H8	II-5	
SP	154	B	H8	II-5	
SP	155	B	H8	II-5	
SP	156	B	H8	II-5	
SP	158	B	H8	II-5	
SP	159	B	H8	II-5	
SP	160	B	H8	II-5	
SP	161	B	H8	II-8	
SP	162	B	H8	II-5	
SP	163	B	H8	II-5	
SK	164	B	H9	II-26	II-75
SE	165	B	H8-I9	II-5	II-76
SK	166	B	J6	II-27	II-77
SK	167	C	H6-I6	II-37	II-77
SK	168	C	G5-H6	II-38	II-78~89
SK	169	B	K7	II-28	II-90
SK	170	C	K5	II-39	II-90
SB	171	C	H9-I9	II-33	
SP	173	C	I8	II-33	
SU	174	C	I9-J9	II-44	II-90
SB	175	B	K6-L7	II-11	
SP	177	C	L8	II-33	
SP	178	C	L8	II-33	
SP	179	C	L8	II-33	
SP	180	C	I7	II-33	
SB	181	C	I7	II-33	
SP	182	C	I7	II-33	
SP	183	C	I7	II-33	
SK	184	C	L8-L9	II-33	
SD	185	C	F9-G9	II-35	

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SB	186	C	E8-G8	II-34	
SK	187	C	I9	II-33	
SD	188	C	H7-H8	II-33	
SE	189	B	H9	II-15	
SE	190	B	H6	II-16	II-90
SB	191	C	H6	II-33	
SP	192	C	F9	II-43	
SK	193	D	L6	II-46	
SK	194	D	L5	II-46	
SP	195	D	L5	II-46	
SP	196	D	L5	II-46	
SP	197	D	L5	II-46	
SP	198	D	L5	II-46	
SP	199	D	L5	II-46	
SP	200	D	L5	II-46	
SP	201	D	L5	II-46	
SP	202	D	L5	II-46	
SP	204	D	L5	II-46	
SK	206	D	L5	II-46	
SP	207	D	L5	II-46	
SP	208	D	L5	II-46	
SP	209	D	L5	II-46	
SP	210	D	L5	II-46	
SP	211	D	K5	II-46	
SP	212	D	K5	II-46	
SP	213	D	L5	II-46	
SP	214	D	K5-K6	II-46	
SP	215	D	K6	II-46	
SP	216	D	K5	II-46	
SP	217	D	K5-K6	II-46	
SP	218	D	K5	II-46	
SP	219	D	L6	II-46	
SP	220	D	L6	II-46	
SP	221	D	L6	II-46	
SP	222	D	L6	II-46	
SP	223	D	L6	II-46	
SP	224	D	L6	II-46	
SP	225	D	L6	II-46	
SP	226	D	L6	II-46	
SP	227	D	K6	II-46	
SP	228	D	K6-L6	II-46	
SP	229	D	L6	II-46	
SP	230	D	L6	II-46	
SP	231	D	L6	II-46	
SP	232	D	L6	II-46	

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SP	233	D	K5	II-46	
SK	234	D	L5-L6	II-46	
SK	235	D	K6	II-46	
SP	236	D	K6	II-46	
SP	237	D	K6	II-46	
SP	238	D	K6	II-46	
SP	239	D	K6	II-46	
SP	240	D	L6	II-46	
SP	241	D	L6	II-46	
SK	242	D	K6	II-46	
SK	243	D	K5	II-46	
SP	244	D	K6	II-46	
SK	245	D	J5-K5	II-54	
SP	246	D	H8	II-46	
SP	247	D	H8	II-46	
SP	248	D	G7	II-46	
SP	249	D	G7	II-46	
SP	250	D	G7	II-46	
SP	251	D	H8	II-46	
SP	252	D	L5-L6	II-46	
SP	253	D	L5	II-46	
SU	254	C	J5-K7	II-45	II-90~98
SP	255	D	K6	II-46	
SP	256	D	K6	II-46	
SP	257	D	K6	II-46	
SP	258	D	K6	II-46	
SP	259	D	K6	II-46	
SP	260	D	K6	II-46	
SP	261	D	K6	II-46	
SP	262	D	K6-K7	II-46	
SP	263	D	K7	II-46	
SP	264	D	K7	II-46	
SP	265	D	K6	II-46	
SK	266	D	K6	II-46	
SK	267	D	K6	II-46	
SP	268	D	K5	II-46	
SP	269	D	K5	II-46	
SP	270	D	K5	II-46	
SP	271	D	K6	II-46	
SL	272	C	J8	II-42	II-98
SU	273	C	J8-K8	II-42	
SK	274	C	K9	II-40	II-96~98
SK	275	D	I9-J9	II-57	II-98
SU	276	D	E9-F9	II-68	
SP	277	D	L6	II-46	

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SP	278	D	L6	II-46	
SP	279	D	L6	II-46	
SP	280	D	L6	II-46	
SP	281	D	L6	II-46	
SP	282	D	L6	II-46	
SP	284	D	L6	II-46	
SP	285	D	L6	II-46	
SP	286	D	L6	II-46	
SP	287	D	L6	II-46	
SP	288	D	L6	II-46	
SP	289	D	K6	II-46	
SP	290	D	K9	II-46	
SP	291	D	K7-L7	II-46	
SP	292	D	K7	II-46	
SP	293	D	K7	II-46	
SP	294	D	K7	II-46	
SP	295	D	K7	II-46	
SP	296	D	K7	II-46	
SE	297	D	I8-J8	II-50	
SE	298	D	K9	II-51	
SK	299	D	E6-G9	II-58	II-99~105
SK	300	D	L7-L8	II-46	
SP	301	D	L9	II-46	
SP	302	D	L9	II-46	
SP	303	D	L9	II-46	
SP	305	D	L8-L9	II-46	
SP	306	D	L8-L9	II-46	
SP	307	D	L9	II-46	
SK	308	D	L6	II-46	
SP	309	D	L6	II-46	
SP	310	D	L9	II-46	
SP	312	D	L8	II-46	
SP	313	D	L8	II-46	
SP	314	D	L8	II-46	
SP	315	D	L8	II-46	
SK	316	D	L8	II-46	
SK	317	D	H5	II-46	
SP	318	D	L6	II-46	
SP	319	D	K6-L6	II-46	
SP	320	D	K6-K7	II-46	
SP	321	D	K7	II-46	
SK	322	D	K6-K7	II-46	
SP	323	D	L8	II-46	
SP	324	D	L8	II-46	
SP	325	D	L8	II-46	

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SP	326	D	L7-L8	II-46	
SP	328	D	L7	II-46	
SP	329	D	L7	II-46	
SP	330	D	L7	II-46	
SP	331	D	H9	II-46	II-106
SK	332	D	H9-I9	II-46	
SK	333	D	H9	II-55	II-106
SK	334	D	H9-I9	II-46	
SP	335	D	K7	II-46	
SP	336	D	K7	II-46	
SP	337	D	K7	II-46	
SP	338	D	K7-L7	II-46	
SP	340	D	K7	II-46	
SP	341	D	K7	II-46	
SP	342	D	J7-K7	II-46	
SP	343	D	J7	II-46	
SK	344	D	G9	II-46	
SP	345	D	L9	II-46	
SP	346	D	L9	II-46	
SP	347	D	L9	II-46	
SK	349	D	L9	II-46	
SP	350	D	L8	II-46	
SK	351	D	L8	II-46	
SP	352	D	L8	II-46	
SP	353	D	L8	II-46	
SP	354	D	L8	II-46	
SP	355	D	L8	II-46	
SK	356	D	K9	II-56	
SK	357	C	J5-J6	II-41	II-107
SP	358	D	K7	II-46	
SK	359	D	I9	II-46	
SK	360	D	K7	II-46	
SK	361	D	K7-K8	II-46	
SP	362	D	K8-K9	II-46	
SP	363	D	J7	II-46	
SK	364	D	K7	II-59	II-107
SK	365	D	K7	II-59	II-108
SK	366	D	J7-K8	II-46	
SK	368	D	G9-H9	II-61	II-108
SP	369	D	K8	II-46	
SP	370	D	K8	II-46	
SP	371	D	K8	II-46	
SP	372	D	K8	II-46	
SP	373	D	K8	II-46	
SP	374	D	K8	II-46	

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SP	376	D	K8-K9	II-46	
SP	377	D	K8	II-46	
SP	378	D	K9	II-46	
SP	379	D	K9	II-46	
SP	380	D	K7	II-46	
SP	382	D	K8	II-46	
SP	383	D	K8	II-46	
SP	384	D	K8	II-46	
SP	385	D	K8	II-46	
SP	386	D	K8	II-46	
SP	387	D	J8	II-46	
SP	389	D	K8	II-46	
SP	390	D	K9	II-46	
SP	391	D	K8	II-46	
SP	393	D	K8	II-46	
SP	394	D	K8	II-46	
SP	395	D	K8	II-46	
SP	396	D	K8	II-46	
SP	397	D	J8-K8	II-46	
SK	398	D	J7	II-46	
SK	399	D	K9	II-46	
SK	400	D	K9	II-46	
SP	401	D	K9	II-46	
SP	402	D	K9	II-46	
SP	403	D	K6	II-46	
SP	404	D	K6	II-46	
SP	405	D	K5-K6	II-46	
SP	406	D	K5	II-46	
SP	407	D	J5	II-46	
SP	408	D	J5	II-46	
SP	410	D	I8	II-46	
SK	411	D	I8	II-46	
SP	412	D	K6	II-46	
SP	413	D	K6	II-46	
SP	414	D	K5	II-46	
SP	416	D	K6	II-46	
SP	417	D	K6	II-46	
SP	418	D	K6	II-46	
SP	419	D	J6-K6	II-46	
SP	421	D	J5	II-46	
SK	422	D	K7	II-46	
SK	424	D	I8	II-46	
SK	425	D	J8-K8	II-46	
SK	426	D	J8-J9	II-46	
SK	427	D	J8-K8	II-46	

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SK	428	D	J8-K8	II-60	
SD	430	D	J8-K8	II-46	
SK	431	D	J9	II-46	
SK	432	D	J8	II-46	
SK	433	D	J8	II-46	
SK	434	D	H8-I8	II-46	
SK	435	D	I9	II-46	
SK	436	D	K9	II-46	
SK	437	D	J9	II-46	
SP	438	D	J9	II-46	
SK	440	D	H8	II-46	
SK	441	D	H8	II-46	
SK	449	D	J9	II-46	
SK	450	D	I8-J9	II-46	
SP	456	D	L9	II-46	
SP	457	D	L9	II-46	
SP	458	D	J8	II-46	
SP	459	D	J8	II-46	
SK	460	D	J7	II-46	
SP	461	D	J8	II-46	
SP	462	D	J8	II-46	
SP	463	D	J7	II-46	
SP	464	D	J7	II-46	
SD	465	D	K5-K6	II-46	
SK	466	D	I7-J7	II-46	
SP	467	D	I7	II-46	
SK	469	D	J9	II-46	
SK	471	D	J7	II-46	
SP	472	D	H8	II-46	
SK	473	D	J8	II-46	
SK	474	D	I8-J8	II-46	
SK	475	D	I8	II-46	
SK	476	D	I6	II-46	
SK	477	D	H7	II-46	
SK	478	D	G9	II-46	
SK	479	D	I6-I7	II-62	
SK	480	D	J5-K5	II-63	
SK	481	D	I6	II-64	II-108
SK	485	D	I7-I8	II-46	
SK	486	D	I8	II-65	
SK	487	D	I7-I8	II-65	
SK	488	D	I6-J7	II-62	
SK	489	D	H5-I5	II-66	
SP	492	D	J5	II-46	
SK	493	D	I5-J5	II-46	

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SE	494	D	H6	II-52	
SK	495	D	I6	II-46	
SK	496	D	I6	II-46	
SP	497	D	H8-I8	II-46	
SK	498	D	H8-I8	II-46	
SK	499	D	I7-I8	II-46	
SK	500	D	I8	II-46	
SD	503	D	I5-J6	II-49	
SP	504	D	I5-J5	II-46	
SP	505	D	I5-I6	II-46	
SP	506	D	I7	II-46	
SK	507	D	H7-I7	II-46	
SP	508	D	H8	II-47	
SP	509	D	H8-H9	II-46	
SK	510	D	H8-H9	II-46	
SK	512	D	I6	II-46	
SP	513	D	I6	II-46	
SB	514	D	G7-H7	II-48	
SP	515	D	H6	II-46	
SE	516	D	H7-I7	II-53	II-109
SK	517	D	H7-H8	II-46	
SA	518	D	G5-H8	II-47	
SP	519	D	I6	II-46	
SP	520	D	I6	II-46	
SP	521	D	I6	II-46	
SP	522	D	I6	II-46	
SP	523	D	I6	II-46	
SP	524	D	H6-I6	II-46	
SP	525	D	H6	II-46	
SE	526	C	H8	II-36	II-109
SP	527	D	H7-I7	II-46	
SP	528	D	H6	II-46	
SP	529	D	J6	II-46	
SP	530	D	J6	II-46	
SP	531	D	J6	II-46	
SD	535	D	G5-H9	II-47	
SK	537	D	I5	II-46	
SK	538	D	H5-I5	II-46	
SK	539	D	G6-H7	II-46	
SK	540	D	I5-I6	II-46	
SK	541	D	G6-H6	II-46	
SK	542	D	G6	II-46	
SK	543	D	H8-H9	II-46	
SK	544	D	H8	II-46	
SK	545	D	H7	II-46	

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SK	546	D	H8	II-46	
SK	547	D	G7-H7	II-46	
SP	548	D	G7	II-46	
SK	549	D	G7	II-46	
SK	551	D	F6-G6	II-46	
SK	552	D	H6-I7	II-47	
SK	553	D	I6-I7	II-47	
SK	554	D	G6-G7	II-46	
SK	556	D	F7-G7	II-46	
SP	557	D	G7	II-46	
SK	561	D	H9	II-46	

古墳時代遺構

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SI	1001		G7-H8	II-113~117	II-138~140
SI	1002		G9	II-118~121	
SI	1003		H6-H7	II-122	II-141
SI	1004		K7-L7	II-133~137	II-142
SI	1005		H5-I6	II-123~125	II-141
SI	1006		F6	II-126~129	II-141
SI	1007		I6-J7	II-130~132	II-141

縄文時代遺構

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SF	555	D	I8-I9	II-144	II-145

## 第 I 章 調査の経緯と概要

### 第 1 節 調査に到る経緯

東京大学医学部附属病院では、老朽化した諸施設の立替による大規模再開発を計画している。病院地区を含む本郷キャンパス全体では、昭和 58 (1983) 年度より諸建物の新営計画が相次ぎ、各建物の建築に先だって実施した埋蔵文化財発掘調査によって、当初の予想を凌駕して江戸時代の遺構、遺物が遺存していることが確認された。その結果を受けて本郷キャンパス全域が、文京区 No.47 本郷台遺跡群として遺跡登録された。附属病院地区でも昭和 59 (1984) 年から昭和 62 (1987) 年にかけて調査を実施した中央診療棟地点、設備管理棟地点、給水設備棟地点において、大聖寺藩前田家上屋敷、富山藩前田家上屋敷、榊原家中屋敷に関する膨大な量の遺構・遺物が確認されるとともに、病院地区の東半は旧石神井川が開析した根津谷に向う緩斜面上に立地するため、江戸時代を通し大規模な盛土造成が行われたことが確認され、その結果、江戸時代以前の自然堆積層、遺構が比較的良好な状態で遺存していることも明らかになった。

平成 5 (1993) 年、病院再開発の一環として、東第一病棟跡地とその南側に隣接する空地に老朽化した看護師宿舎の新築を計画した。概所は江戸時代には富山藩前田家上屋敷敷地内に該当し、近接する中央診療棟地点の成果から、それに伴う遺構、遺物が遺存していることが予想されたため、附属病院より埋蔵文化財の遺存状況の確認を依頼された調査室は、これを受けて平成 5 年 4 月 19、20 日に遺構遺存状況の確認を目的として試掘調査を実施した。

試掘調査は、現存する東第一病棟の南側に 4 本のトレンチを設定して実施した。その結果、3 枚の江戸時代生活面が比較的良好な状態で遺存していることが確認され、大学施設部と協議の結果、平成 5 年 8 月より事前調査を行うことで合意した。

### 第 2 節 調査の方法と経過

発掘調査は、新看護師宿舎建設予定地のうち、植樹帯を含む空地となっている東第一病棟南側部分について 8 月 4 日より重機による表土掘削を開始した。それと平行して構内の既知座標点から座標移動を行い、調査区内に日本測地系に即した 5m グリッドを設定し、各グリッド北西角を基準杭とし、東西方向に算用数字、南北方向に英大文字を付した。またグリッドは本調査区に加え、引

き続き建設が計画されている MRI-CT 棟 (現、臨床試験棟) 地点を網羅する形を採った。よって本調査区内北西端には F6 グリッド杭が位置し、日本測地系による座標値は、 $X = -32240.00\text{m}$ 、 $Y = -5730.00\text{m}$  である (II-1 図)。

表土掘削後第 1 遺構面 (A・B 面) の遺構調査を行い、10 月 22 日終了した。また調査終了範囲から随時、人力掘削によって第 2 遺構面 (C 面) まで掘り下げ、C 面の遺構確認及び遺構調査を行い、10 月 29 日終了した。11 月 1 日～5 日に調査区北西部及び南部のシノキ移植が行われ、その完了を受けて第 3 遺構面 (D 面) までの盛土掘削を実施、15 日より D 面の遺構調査を開始し、翌平成 6 (1994) 年 1 月 17 日に D 面の調査を完了した。

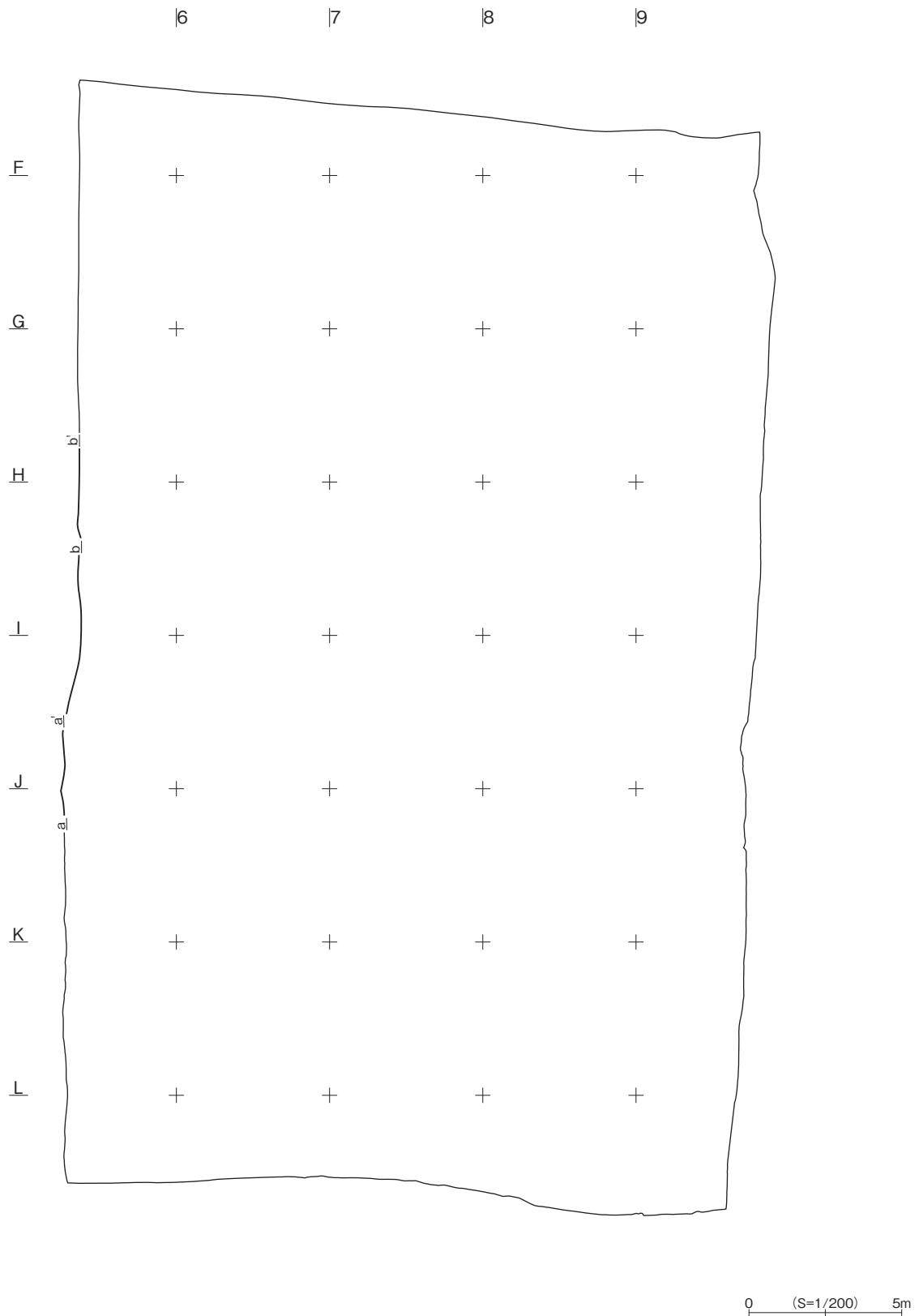
また、調査と並行して 10 月下旬より東第一病棟の解体工事が開始された。1 月中旬、その完了を受けて遺構遺存状況を確認したが、地中梁及びフーチング基礎が現表下 5～8.5m に及び、ハードルーム中を基礎基盤としていることが確認されたことから、既存建物範囲とほぼ等しい新営予定地北側は調査不要と判断され、前述した D 面調査終了をもって全ての調査を完了した。

### 第 3 節 基本層序

本地点では、A～D までの 4 枚の遺構面を確認した (II-2 図)。そのうち A 面は確認範囲が限定的であることから、報告では A・B 面を 1 段階と認識して取り扱った。以下、各面の状況を列記する。

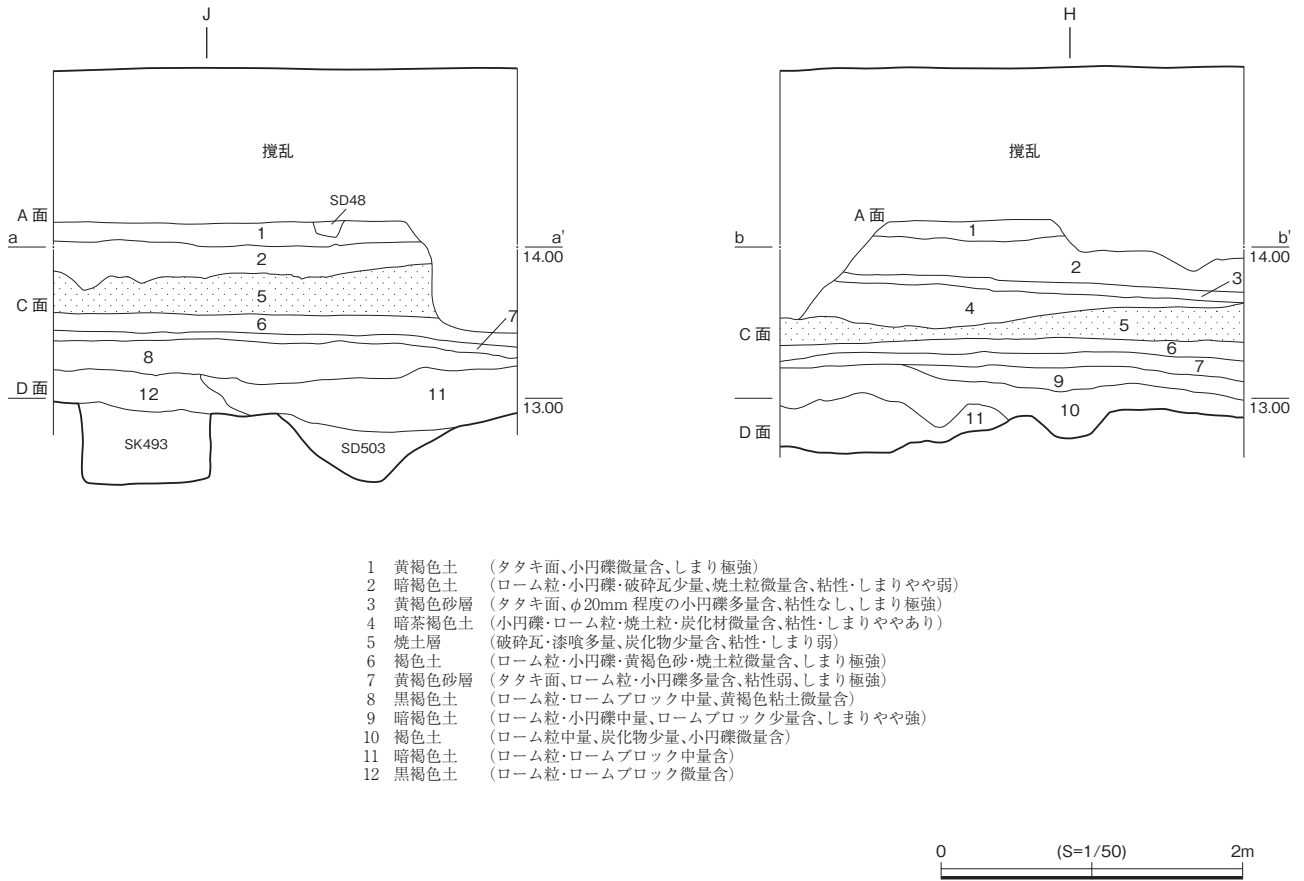
現表下約 1m で確認された硬化面を A 面とした。小円礫を含む非常にしまりの強い黄褐色土で形成されている (1 層)。A 面下約 20cm にある硬化面を B 面とした。小円礫を含む非常にしまりの強い暗褐色土で形成されている。B 面は調査区 8 ライン以西に拡がり、8 ライン付近では 1 層との重なりが認められる。A 面下約 60～80cm にある硬化面を C 面とした。C 面はローム粒、砂粒、小円礫を含む非常にしまりが強い褐色土で形成されている (6 層)。6 ライン以西では C 面直上に焼土層が拡がり、出土遺物より藩邸が全焼した元禄 16 (1703) 年の火災に比定される (5 層)。火災瓦礫整理土である 5 層が広範囲に拡がっていることから、火災を契機に A・B 面まで嵩上げされたと推定される。D 面は C 面下約 50～70cm にある地山ローム面である。本遺構面から検出された古墳時代堅穴住居址の多くが床面付近まで削平され

ていることから、緩斜面の平準化を目的とした藩邸初期  
開発段階の切土造成事業によって作出された遺構面であ  
る。



II-1 図 グリッド・基本土層ポイント位置図





II-2 図 調査区西壁基本土層

## 第II章 近代の遺構

A面で検出された近代遺構で、建物布掘基礎（SB2）、井戸（SE83）、石列（SB10）、土坑（SK3）が検出された（II-3図）。

### SB2（II-4図）

D8～I9グリッドにかけて位置する礎石建物跡である。本遺構は布掘状掘方を有する礎石建物基礎である。南北840cm、東西最大幅430cmを測り、南西角から西側へ70cmを測る張出を有する。南北主軸方向はグリッドY軸より約4°東傾し、近世A・B面主軸2と等しい。溝幅は60～95cmを測る。確認面からの深さは約20cmを測り、溝底はおおむね平坦であるが、近世遺構に掛かる箇所はローム層を求め、その坑底まで掘削されている。溝底内全域に栗石を敷き詰め、その上に平均45cm（1/4間）間隔で礎石を配している。栗石には川原石、破碎礫が用いられ、一部に間知石、石塔屋根の再利用品が用いられている。礎石も川原石、破碎礫、間知石再利用品などが用いられ、旧富山藩邸で使用された資材を再利用した可能性が高い。布掘内から束柱と考えられる礎石が検出された。各遺構は川原石、破碎礫など数点の根石をほぼ平坦に敷き詰めた上に礎石を設置している。攪乱の影響で全貌を把握することはできないが、南壁から北へ90cmの位置に東西方向へおおよそ90cm間隔に並ぶ1列、それと直交し調査区際を南北に並ぶ1列が確認できる。本遺構構造のあり方は、同病院敷地内外来診療棟地点で検出された医学校本館基礎遺構と類似性が高い。

本礎石建物基礎は、明治13年刊行の『医学部便覧』に掲載された「東京大学医学部全図」から、御雇外国人ベルツが居住した教師館に比定される。施設部所蔵の本郷建物配置変遷図によれば、明治29年度図面では、北側のL字状張出部が無くなり長方形建物となり、翌年「小児科遊戯（育嬰）室」と使用目的が変更された。明治32年度の図面で南西部の西側張出が認められる。この張出部が遺構として確認された張出に比定されると考えられる。また35年度までの配置図には建物北側に隣接して方形の小建物？が認められる。明治43年度に建物名が小児科病室に変更される。大正2年度の配置図では再び北側に逆L字状の施設が付設される。そして大正12年度の変遷図を最後に本建物は認められない。続く変遷図が大正15年度となりその間に解体されたと推定される。

なお本遺構北側に隣接する石組柵に関しては変遷図に

は認められず、性格、時期は不明である。

### SK3（II-3図）

K8グリッドに位置する土坑である。平面形は不整長方形を呈し、東西最大65m、南北最大32cmを測る。覆土中よりコンテナ1箱分の近代陶磁器類が出土した。

### SB10（II-4図）

H・I7グリッドに位置する石列遺構である。明瞭な掘方は確認されなかった。長楕円形川原石及び長方形状破碎礫を用い、南北方向に配置されている。最北には西側へ折れる様に一石配置されているが、詳細は不明である。



II-3図 近代遺構配置図

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



II-4 図 SB2、SB10、SE83

## 第三章 江戸時代の遺構

### 第1節 A・B面の遺構

#### A・B面の概要

本遺構面からは、建物遺構19基、溝2基、井戸7基、土坑40基、便槽2基、小穴93基が検出された(Ⅱ-5図)。

A面を構成するA層は、主に7～8ライン以西で確認された。検出標高は、A面が14.1～14.2m、B面が13.9～14.0mとおおむね20cmの標高差が認められる。A面盛土範囲内でのB面には全く遺構が認められないことから、A面盛土範囲を一段高くした意図が窺われる。A・B面共に礎石列が主体をなしているが、礎石列の主軸方向角から、最低2段階の時期設定が可能である。また9ライン以西では7ライン上に位置するSK42、SK7、SK6、SK4、K5グリッドに位置するSK5などの植栽痕と推定される不整形遺構、5区を蛇行して南北に伸びるSD48、SP32上の手水鉢など庭園構成要素と評価できる遺構が分布し、またSK6上から東側に広がる漆喰貼付遺構は、攪乱によって大きく破壊され断片的な遺存状況であったが、表面が平滑に仕上げられた数センチ厚の漆喰が広がっている様相は、医学部附属病院入院棟A地点で検出されたSX1095、SX1138事例に類似し、人工泉水の一部と考えられ、本区域が庭園として機能していた段階が想定される。SP32上の手水鉢が被熱していること、SD48上に栗石と推定される破碎礫が存在していること、礎石遺構の覆土に焼土が含まれていることなどから、A・B面における土地利用は、庭園から建物群へと変遷していることが推定される。

本遺構面の上限は、SK18など18世紀前半の遺物を含む遺構が存在すること、直下のC面が元禄16年の火災後の後片付けとして、生活上に広く焼土を廃棄していることから、18世紀初頭と推定される。

SB11、SB15、SB19、SB21、SB22、SB26、SB27、SB28、SB29、SB30、SB31、SB47(Ⅱ-6、7図)

A面に検出された礎石列群で、I～K5・6グリッドに位置する。栗石などの遺存状態によって確認レベルが異なり、検出順に遺構番号を付与したため、多数の遺構名が存在する結果となった。

SB11は、K5グリッドに位置し、南北82cm、東西62cmを測る不整形の掘方を呈す。礎石、栗石などはほぼ抜き取られ、破碎礫による栗石が壁際に数点確認され

たにすぎない。北側のSB31-1とは芯々で約540cm(江戸間三間)の距離にあり関連性が推定される。覆土中から「桃州浪花」銘を有す塩壺蓋が出土した(Ⅱ-69図1)。

I6～K6グリッドにかけて南北方向に並ぶ礎石5基をSB15とした。枝番1～5間は芯々で約730cmを測り、江戸間4間と考えられる。そのうち1、3～5は確認面からの深さ50～70cmを測り、坑底上に根石を据え周囲をローム主体土で埋めている。その上に栗石を敷き詰め、砂利を多量に含む褐色土で突き固めている。砂質土上には再びローム土が埋積し、本来はこの栗石上に礎石が据えられていたと推定される。2は形態、規模ともに他のピットと異なるが位置関係から本礎石列に共伴すると考えた。束柱の可能性を考えたい。

SB19はJ5グリッドに位置する。坑底より栗石と考えられる破碎礫が2点検出された。東側2箇所の礎石と北側の礎石の延長にあるが、関連性は不明である。

K6グリッドに位置するSB21は、長方形切石の礎石を有する遺構である。北方約180cmの位置に同規模の礫が存在するが関連性は不明である。

同グリッドに位置するSB22は、坑底上から円礫が1点検出されたが、関連する遺構は認められなかった。

SB26・SB27はK5グリッドに位置し、芯々約45cm間隔で東西方向に並ぶ。周囲の礎石遺構と比較すると、掘方規模は小さい。

SB28はK5グリッドに位置する。東西65cm、南北46cmを測る楕円形掘方を呈し、やや東寄り坑底上に根石を据え、その周囲に3点の栗石が認められる。SB11、SB15-1を結ぶラインからは約20cm南に位置し、SB29南東に隣接する単一礫が対応する可能性がある。

K6グリッドに位置するSB29は、坑底上に約40cm大の根石を据え、その周囲に栗石を置きロームブロック主体土で突き固めている。北方のSB30とは芯々距離360cm、さらにSB15-4の東側に重複する礎石とも芯々540cmを測る。またSB15とは芯々90cmで並行に位置することから共伴する可能性が高い。SB30も約40cm大の根石を据えその周囲を栗石で固めている。隣接するSB15-3とはほぼ同規模である。

I・J5・6グリッドに位置する4基の礎石をSB31とした。枝番1は間知石を転用した根石を置き、その直上に破碎礫の栗石が数点残存している。2は北側のSK41と重複し、それより古い。坑底直上に破碎礫を平坦に配置し、その上に川原石による根石を設置し、その周囲及び

上部に栗石を詰め突き固めている。さらにその直上に約40cm大の破碎礫を据えている。3は坑底に栗石を配した上に約45×55cm大の間知石を据え、更にその上に栗石を設置している。4も坑底に破碎礫を配置し、その上に一辺約45cm、厚さ約20cmの角礫を置いている。いずれも礫周囲をローム埋土で固め、その上に砂質褐色土を詰めている。また各ピット上面レベルの比較から4の角礫は礎石と推定される。本遺構は東側のSB15とは、SB31-4・SB15-5、SB31-3・SB15-4が各々芯々約180cmを測り、一連の建物の可能性があるが、それ以外で明確な共伴関係は認められない。K6グリッドに位置するSB47は東西100cm、南北90cmを測る不整楕円形の掘方内に、約50cm大の川原石を用いた根石を置き、周囲に破碎礫による栗石が詰められている。埋土は砂質褐色土である。西側のSB29とは、芯々で約180cmを測る。

以上の様に、各礎石は江戸間を基準尺度として配置されたと考えられる。それを前提に各礎石の位置関係を整理すると、実線で示したグループ（主軸1a）と破線で示したグループ（主軸1b）が導き出され、それらの重なりから2時期の建物が想定される。ほとんどの礎石が抜き取られた状態で検出されたが、主軸1bの栗石上面レベルが主軸1aより約20cm高いことから、調査時には確認できなかったA面上位遺構面に伴う可能性がある。また主軸1aの版築状覆土には焼土粒子を含む事例が多くあることから、火災後の再建建物の可能性が高い。

#### SB49、SB71、SB77、SB80、SB113、SK82、 SP67、SP68、SP109、SP161（Ⅱ-8、9図）

B面で検出された礎石列群のうち、H～L・7～9グリッドに位置する一群である。そのうち主軸方向角と位置関係より3グループの存在が想定される。実線で結んだ一群の南北方位角はグリッドY軸（方眼北）より約7°東傾する。この方向角は西側のA面礎石群のうち主軸1aと同一であり、SB71-1からA面礎石群SB15までは芯々で江戸間6.5間を測り、一連の建設計画に基づいた遺構群と推定される。破線で結んだ一群の主軸方向角はグリッドY軸より約4°40′東傾し、主軸1との角度差は、2°20′を測る。これを主軸2とする。一点鎖線で結んだ一群の主軸方向角・位置関係は、A面礎石群主軸1bと共通する。

続いて各々のグループの礎石の特徴を列記する。

主軸1aに属する礎石は掘方が不明瞭で、多くは栗石のみ検出された。そのうちSB71は、J8・9グリッドに位置する。SB71-1の覆土は、栗石直下の2層に焼土粒を多量に含み、A面礎石列群の様相と類似する。SB67、

SB68はローム粒を多量に含む褐色土上に栗石が据えられている。SB71-1の3層と対応する可能性がある。

主軸2に属する礎石群は、B面が確認された調査区東側ほぼ全域で確認された。Ⅱ-10図に示した礎石列方向もこれに対応し、SB113とSP161を結ぶ東西ラインからSB116-1とSP127を結ぶ東西ライン間は、江戸間5.5間を測り、一連の建設計画に基づいた礎石群と推定される。I8～L8グリッドにかけて南北方向に伸びるSB49のうち、調査時に本礎石列に共伴すると想定したSB49-7は、軸線よりやや東にあり、覆土の類似性も低いことから、別遺構と考えられる。1～6の掘方は、円形ないし隅丸方形を呈し、ほぼ坑底直上に栗石が置かれている。その周囲にローム粒を多量に含む褐色土を詰め、その直上に砂利を極めて多量に含む暗褐色土が版築状に埋積している。1・2間はSK57で攪乱されており、2はSK57に攪乱されている。本来はその間に1基存在していたと推定される。3・4間には全く遺構の痕跡は無く、SB80が属する西側礎石列上にも遺構痕跡が認められないことから、3・4間で建物が区切られる可能性もある。SB80とした2基の礎石ピットは、SB49とは1間間隔に位置し、1がSB49-4、2がSB49-5に対応する。1の覆土は坑底直上にローム粒を多量に含む褐色土（2層）で栗石を突き固め、その上に砂利を多量に含む1層を詰めている。2は坑底に約40cm角の根石を置き、その上に1層を詰めている。本遺構軸線上、北側に位置するSK82は位置関係から、本遺構に共伴する礎石採取坑と考えられ、西のSP109、東のSB49-6との対応が推定される。SB77はSB49の東側1間に位置し、2がSB49-2に対応する。1はSE76より古い。坑底直上にローム粒を多量に含む褐色土で栗石を固め、その上に砂利を多量に含む褐色土を詰める構造は、SB49、SB80と同様である。1の西方2間に位置する礎石ピットはSB80の延長にも対応する。また1・2間の単一川原石は半間の位置にあり、その東方2間の栗石が対応する。さらにその栗石の北方2間半に掘方を伴う栗石が1基、南方1間に破碎礫が1基確認され、いずれも共伴する可能性がある。SB49の西方2間にはSB113、SP109が位置する。調査時に3基の礎石ピット列としたSB113は1間間隔で南北方向に並ぶ。1は坑底直上に根石を2、3は栗石を置き、その周囲をローム土で固め、その上層に砂利を多量に含む暗褐色土を詰めている。SP109には根石、栗石などは存在しないが、SB113との位置関係から採取坑と推定される。埋土上部に焼土を多量に含む暗赤褐色土が埋積していることから、火災に関連して抜き取られたことが考えられる。SB113-3の東方2間にあるSP161は栗石を伴う礎石

ピットで、SB49の延長に対応する。覆土は2層に分けられ、破碎礫より上部には砂利を多量に含む暗褐色土、破碎礫の周囲には暗黄褐色土が詰められている。本遺構は焼土を多量に含むSP163より古く、火災以前の建物基礎といえる。またSB113-1東方3間半の位置にある栗石を伴うピットも本礎石列群に共伴する可能性がある。

主軸1bに属する遺構は、J・K9グリッドに位置する4基、L8グリッドに位置する東西方向の2基が該当する。

#### SB116、SP127 (II-10 図)

B面に検出された礎石列群のうちE9、F8・9グリッドに位置する一群である。南北主軸方向角はY軸より4°40'東傾し、Hライン以南の主軸2と等しい。そのうち9ライン付近を南北に並ぶ3基をSB116とした。1-2間は1間、2-3間は2間を測る。1、2は根石のみ、3は根石とその周囲に栗石が残存していた。根石周囲をローム主体土で固め、その上に砂利を多量に含む暗褐色土が埋積している。SP127は、SB116-1の東方1間に位置する。坑底直上に破碎礫を用いた栗石を設置している。またSB116-3の東方1間に位置する破碎円礫遺構は、近代の石組拵とSB2によって攪乱され、遺存状態は悪いが、SP127の軸線上にあり、共伴する可能性が高い。

#### SP130 (II-10 図)

B面に帰属する遺構で、F8グリッドに位置する。平面形は隅丸不整形を呈し、一辺36~38cm、確認面からの深さ45cmを測る。覆土はローム土を主体とし、一気に埋め戻された様相を示す。SP129、SP131を結ぶ軸の方向角は主軸1と等しいが、各々との距離は約120cmを測り、関連性は不明である。

#### SB175 (II-11 図)

K・L6・7グリッドに位置する建築遺構で、B面に帰属する。Lライン以南はシイノキ移植時期との関係から、D面調査時に調査を実施した。また本遺構は当初C面を確認面としたが、調査区南壁土層堆積状況の観察からB面に帰属することが確認された。主軸方向角は、主軸2とほぼ等しい。南側は調査区外へ達するため全体規模は不明であるが、東西約440cm、調査区内南北残存値375cm、確認面からの深さ最大110cmを測る。溝幅は50~90cmと不均一である。覆土は暗褐色土、ローム埋土、砂利含有土などの互層で版築状に堆積している。坑底直上に根石を配し、間層を挟んで更に栗石を埋設している。石配置にはバラツキが認められるが、基本的には半間間隔で配置され、東西幅は芯々で約360cm、江

戸間2間を示す。

遺物は出土していない。

#### SE12、SK13 (II-12 図)

A面で確認された遺構で、K6、K7グリッドに位置する。本遺構半截時に覆土が崩落したため、断面観察ができなかったが、半截途中の所見で、SK13からSE12方向、即ち南から北方向へ傾斜する灰褐色土が確認されていたことから、本来は、SK13下部の常滑焼大甕埋設遺構、SE12、両遺構上に構築された遺構の3基が重複した結果と考えられる。また甕の破片が両遺構範囲に含まれることもそれを傍証している。甕はSK13の南壁際に埋設されており、その口縁部位置はC面レベルに対比されるが、甕の形態が寸胴形を呈し、口唇部には合わせ口による窯道具痕が認められることから、C面の下限とする元禄16年まで遡る可能性は考え難く、A・B面に帰属する遺構と判断される。よって以下の変遷を推定したい。記述にあたり甕埋設遺構上部遺構をSK13とする。甕埋設遺構の構築から廃絶・埋め戻し→SE12の構築・使用・廃絶。そしてSK13の構築は、SE12を埋め戻しながら掘削作業が行われ、甕口縁部に達した時、それを破損したため、破片も含めてSE12内に廃棄された。SE12との接続部の形態から、構築されたSK13は長方形土坑と推定される。

#### SE76 (II-13 図)

L8グリッドに位置する井戸で、B面に帰属する。西側でSK57と重複し、それより古い。平面形は円形を呈し、直径120~130cmを測る。確認面より約180cm掘り下げたが、井戸側痕は確認されなかった。覆土には焼土粒を含み、火災後に廃絶されたと推定される。

19世紀前半の遺物がコンテナ1箱分出土した。

#### SE147 (II-14 図)

H9グリッドに位置する井戸で、B面に帰属する。北側に重複するSK146より新しく、東西両側で重複するSK148とは同時期もしくはそれより新しい。平面形は不整形円形を呈し、直径85~95cmを測る。掘方壁面より約20cm内側に井戸側痕が確認された。井戸側内は焼土塊・焼土粒を極多量に含む暗赤褐色土で埋め戻され、火災後に廃絶され、焼土整理遺構として利用されたことを物語っている。

#### SE189 (II-15 図)

H9グリッドに位置する井戸で、B面に帰属する。確

認面では直径約190cmを測る不整形円形を呈する。東側壁面は約50cm下に三日月状のテラスを有し、西側壁面は確認面下約140cmからやや開き気味に立ち上がっている。東側で掘方覆土が確認された(3層)。推定される井戸側規模は90cmである。調査深度内の覆土はほぼロームの埋土で、一気に埋め戻された様相を呈している(2層)。

19世紀代と考えられる陶磁器が少量出土している。

#### SE190 (II-16 図)

H6グリッドに位置する遺構で、B面に帰属する。平面形は不整形円形を呈し、直径約100cmを測る。断面観察から東壁寄りに井戸側痕と考えられる約1cm幅の空洞を伴う立ち上がり確認された。確認面下約130cmまで掘削したが坑底が検出されなかったため井戸と判断して調査を終了したが、井戸側内の直径が約70cmと井戸側にしては小さいこと、覆土が砂質灰褐色土を呈していることから、便槽の可能性も考えられる。

18世紀後半の陶磁器類がコンテナ1箱分出土している。

#### SK14 (II-17 図)

J5グリッドに位置する土坑で、A面に帰属する。平面形は略方形を呈し、南北120cm、東西110cm、確認面からの深さ60cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底はおおむね平坦である。覆土は粘性の強い灰褐色土で、瓦片が多量に出土した。

#### SK18 (II-18 図)

J5グリッドに位置する遺構で、A面に帰属する。平面形は不整形を呈し、南北160cm、東西143cmを測る。坑底は直径約85cmを測る略円形を呈し、西壁際に位置する。坑底東側には鏝形のテラスを有し、坑底との比高差は約20cmを測る。覆土下層(4層)には貝、2、3層には焼土粒を含む。坑底の立ち上がり際はリング状に一段凹んでおり、桶枠が設置されていた可能性がある。18世紀前半の遺物がコンテナ1箱分出土している。

本遺構の南北にはI5～L5グリッド方向に蛇行して伸びる溝状遺構SD48が重複する。SD48の覆土最下層には水が流れていた痕跡を示す淡褐色粘質土が堆積しており、本遺構と何らかの関係が推測される。また両遺構上には建築遺構基礎と推定される破碎礫群が存在し、A面建築遺構群構築以前(出土遺物年代から18世紀前半)の土地利用を示す遺構と位置づけられる。

#### SK37 (II-19 図)

H・I5・6グリッドに位置する遺構で、A面に帰属する。SK38、SK40と重複し、いずれよりも新しい。最大規模は東西255cm、南北185cm、確認面からの深さ22cmを測る。坑底はほぼ平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積を呈し、2層からⅧb期を主体とする人工遺物、自然遺物がコンテナ4箱分出土した。

#### SK50 (II-20 図)

K9グリッドに位置するカワラケ埋設遺構で、B面に帰属する。平面形は不整形を呈し、最大規模南北70cm、東西60cm、確認面からの深さ23cmを測る。壁、坑底共に凹凸が著しい。坑底直上北壁寄りより、口径20cmを測るカワラケが合わせ口の状態で2枚出土した。その状態より胞衣埋納遺構と推定される。

#### SK55 (II-21 図)

K9グリッドに位置する遺構で、B面に帰属する。SP54、SK56と重複し、いずれよりも新しい。平面形は不整形を呈し、一辺約65cm、確認面からの深さ20cmを測る。覆土は褐色土を基調とし、ほぼ水平堆積を呈す。性格は不明。

19世紀前半の陶磁器が10数点出土している。

#### SK57 (II-22 図)

K・L7・8グリッドに位置する遺構で、B面に帰属する。SB49、SE76と重複し、いずれよりも新しい。平面形は不整形を呈し、最大規模南北270cm、東西340cm、確認面からの深さ58cmを測る。壁面、坑底共に緩やかな凹凸が認められる。坑底は南東部で一段落ち込む。覆土は2層が大半を占め、そこからコンテナ4箱分の瓦片と19世紀前半の陶磁器片が出土した。出土遺物には被熱痕跡は認められない。

#### SK84 (II-23 図)

E8グリッドに位置する遺構で、B面に帰属する。北部が調査区外に及ぶため全容は確認できなかった。調査区内では方形を呈し、東西110cmを測る。東側に一段テラス状の張出が設けられ、確認面から坑底までの深さは55cmを測り、テラスとの比高差は約35cmを測る。覆土はローム粒を含む褐色土を基調とする。

V期の陶磁器類が少量出土している。

#### SK114 (II-24 図)

E・F7グリッドに位置する遺構で、B面に帰属する。



南側は樹木移植未調査区域、西側は攪乱の影響を受け、全容は不明である。調査対象区域内での平面形態及び断面形態より、方形を呈する土坑と推定される。確認面からの深さは106cmを測り、坑底はほぼ平坦、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は褐色土を呈し、ほぼ全域から18世紀中葉の陶磁器類、瓦などが出土している。

#### SK141 (II - 25 図)

I8グリッドに位置する遺構で、B面に帰属する。平面形は略円形を呈し、直径約100cm、確認面からの深さ45cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁はやや開きながら直線的に立ち上がる。覆土はローム粒を含む褐色土を基調とし、多量の礫が含まれていた。

II - 75 図1の刀身は坑底付近より出土した。19世紀前半の陶磁器類が10数点出土している。

#### SK164 (II - 26 図)

H9グリッドに位置する遺構で、B面に帰属する。確認面での平面形は不整形を呈し、東西185cm、南北190cm、確認面からの深さ70cmを測る。坑底は長方形を呈し、ほぼ平坦である。壁は垂直に立ち上がり、中位から外傾して拡がり確認面に至る。坑底付近壁際に釘が横位の状態で遺存していたことから、木枠が埋設されていたと考えられる。よって上部が開口して不整形に変化しているのは、遺構廃絶時に掘り起こされた可能性がある。

18世紀中葉～19世紀前半の陶磁器類が10数点出土している。

#### SK166 (II - 27 図)

J6グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、南北165cm、東西110～115cmを測る。本遺構はC面調査時に確認されたが、遺構確認時に瀬戸・美濃産柿釉甕の胴部片が確認され、周囲の覆土を取り去ったところ、坑底よりやや浮いた状態で胴下半部がほぼ完全な状態で出土した。甕周囲の覆土はしまりが強い状態を呈していた。また覆土内出土同一破片を接合したところ、口縁部まで復元された(II - 77 図1)。本遺構は甕の生産年代が、C面下限(1703年)と矛盾することから、A・B面帰属遺構と推定した。A面段階では本遺構上にはSB30が位置し、その周囲はA面を形成するローム盛土層で覆われていることから、その直下、即ちB面相当の生活面に構築された遺構と推定される。

遺物は図示した瀬戸・美濃産柿釉甕1点である。

#### SK169 (II - 28 図)

K7グリッドに位置する甕埋設遺構で、AないしB面に帰属すると考えられる。遺構上部は全て攪乱され、遺存していない。掘方平面形は楕円形を呈し、長軸84cm、短軸75cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁はほぼ直立する。坑底より約6cm浮いた状態で常滑焼大甕が埋設されている。出土した大甕は胴下半部のみが遺存した状態で、口縁部レベルは40～50cm上だったと推定される。甕内には付着物が認められないことから、水甕として利用された可能性がある。

埋設甕以外には、香炉、塩壺などの陶磁器類が少量出土している。

#### SL1 (II - 29 図)

L9グリッドに位置する遺構で、A面に帰属する。確認面での平面形は直径約85cmを測る不整形を呈し、確認面からの深さ112cmを測る。坑底は直径約50cmを測る不整形を呈す。覆土の状態から直径約50cmの木桶が埋設されていたと考えられる。その内側には粘性が強い砂質暗灰褐色土(5層)が堆積している。これまでの調査事例から廁の下穴と考えられる。

遺物は磁器片が1点出土したのみである。

#### SP16 (II - 30 図)

K5グリッドに位置するピットで、A面に帰属する。平面形は長方形を呈し、南北30cm、東西20cm、確認面からの深さ54cmを測る。覆土断面観察から垂直に埋設された直径約9cmの柱痕が確認された。本遺構周囲には比較的ピットが点在するが、関連遺構は確認されなかった。

遺物は出土していない。

#### SP32 (II - 31 図)

L6グリッドに位置するピットで、A面に帰属する。不整形の浅い落ち込みである。本遺構直上より被熱した石製手水鉢が出土した(II - 110 図9)。手水鉢は火災後に掘り起こされ、上面が斜め下方を向く状態だった。本ピットは手水鉢基部を埋設した遺構の可能性が考えられる。

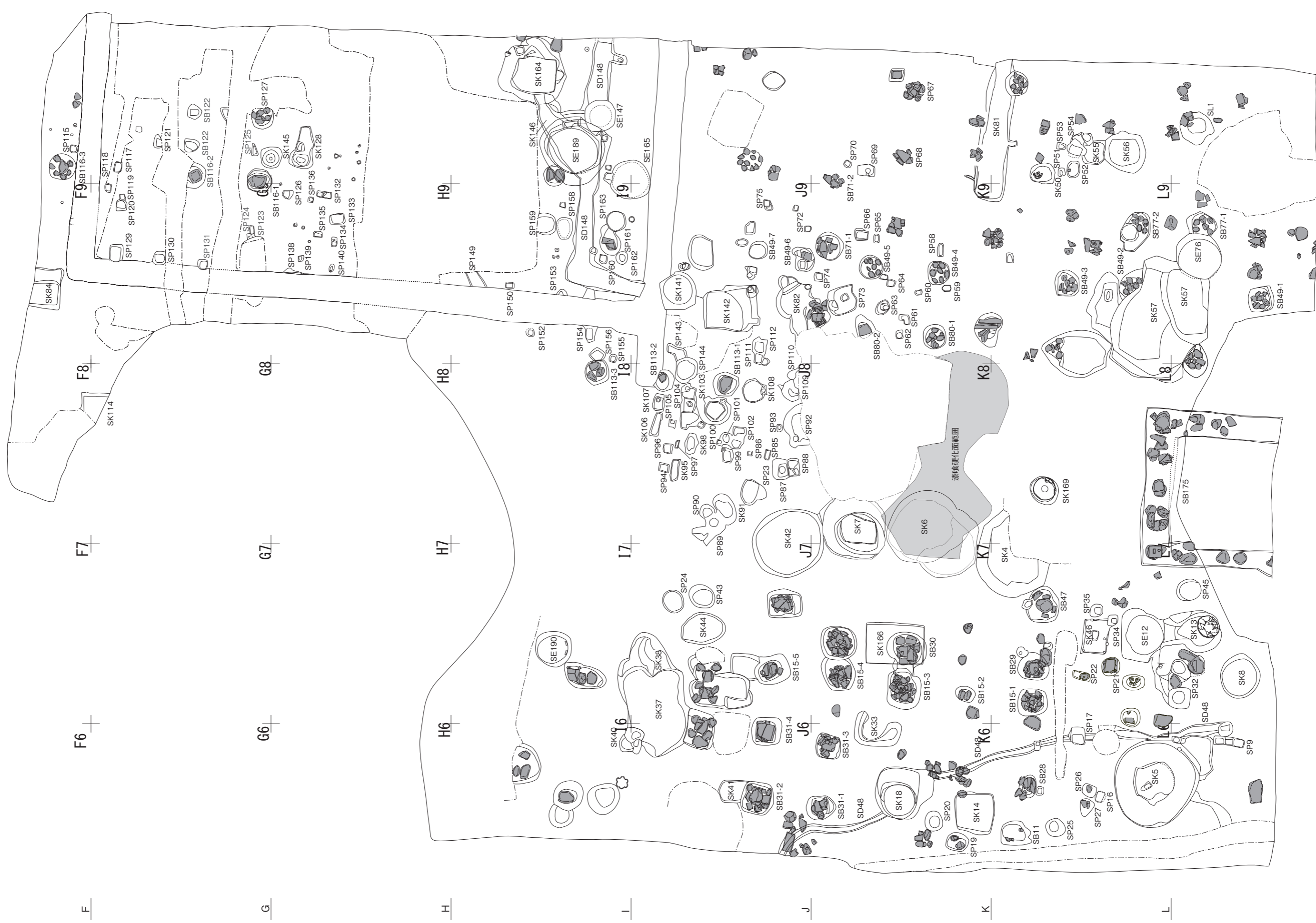
遺物は出土していない。

#### SP66 (II - 32 図)

J8グリッドに位置するピットで、B面に帰属する。平面形は長方形を呈し、南北34cm、東西25cm、確認面からの深さ50cmを測る、覆土断面観察から北壁際に

沿って埋設された幅約20cmを測る柱痕が検出された。  
柱回りはローム主体土(2層)で突き固められている。  
本遺構周辺からは多くのピットが検出されたが、関連遺  
構は見出せなかった。

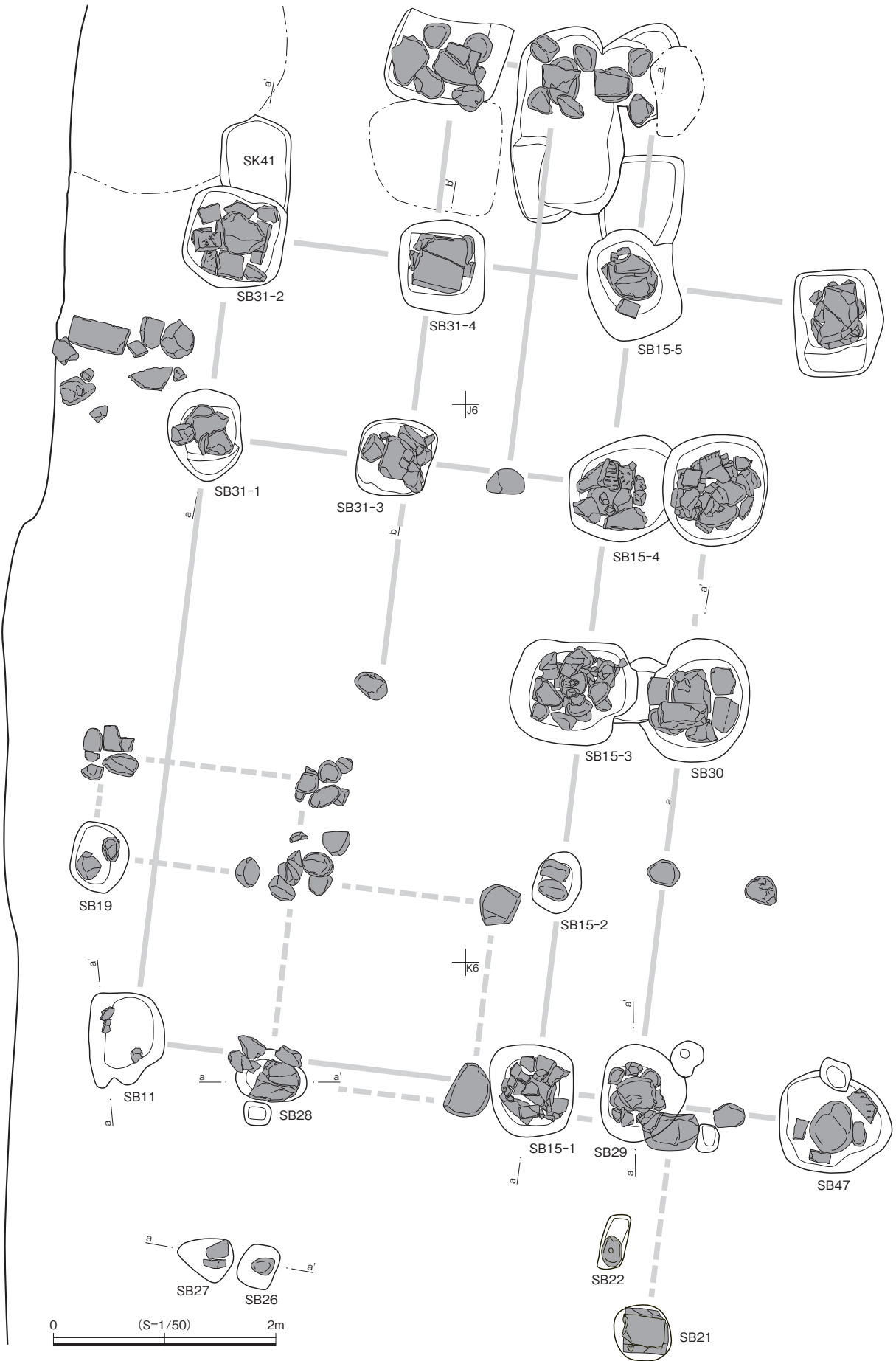
遺物は出土していない。



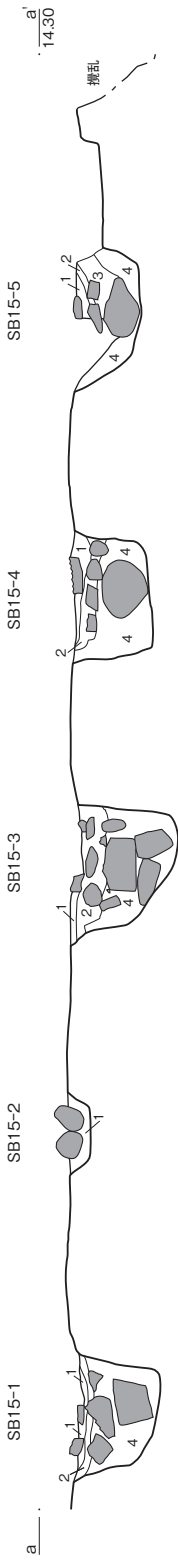
II-5図 A・B面遺構配置図







II-6 図 SB11、SB15、SB19、SB21、SB22、SB26、SB27、SB28、SB29、SB30、SB31、SB47



- 1 暗黄褐色土(ロームの埋土)
- 2 褐色土(砂利多量、焼土粒含、粘性・しまり強)
- 3 褐色土(ローム粒少量、しまり強)
- 4 暗黄褐色土

SB15



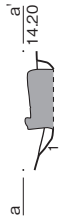
- 1 暗灰褐色土(炭化材・山砂含、粘性やや弱)
- 2 暗黄褐色土(ロームの埋土)
- 3 暗褐色土(ローム粒・焼土粒多量、砂利含、しまりやや強)

SB11



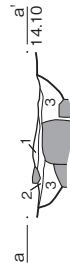
- 1 暗褐色土(焼土粒・炭化材多量含、粘性・しまり弱)

SB26, SB27



- 1 褐色土(しまりやや弱)

SB28



- 1 暗黄褐色土(ロームの埋土、粘性・しまり強)
- 2 暗褐色土(ロームブロック・焼土含、しまりやや強)
- 3 暗黄褐色土(ロームブロック主体、粘性・しまり強)

SB29



- 1 暗黄褐色土(ロームの埋土、粘性・しまり強)
- 2 暗褐色土(ロームブロック・焼土含、しまりやや強)

SB30

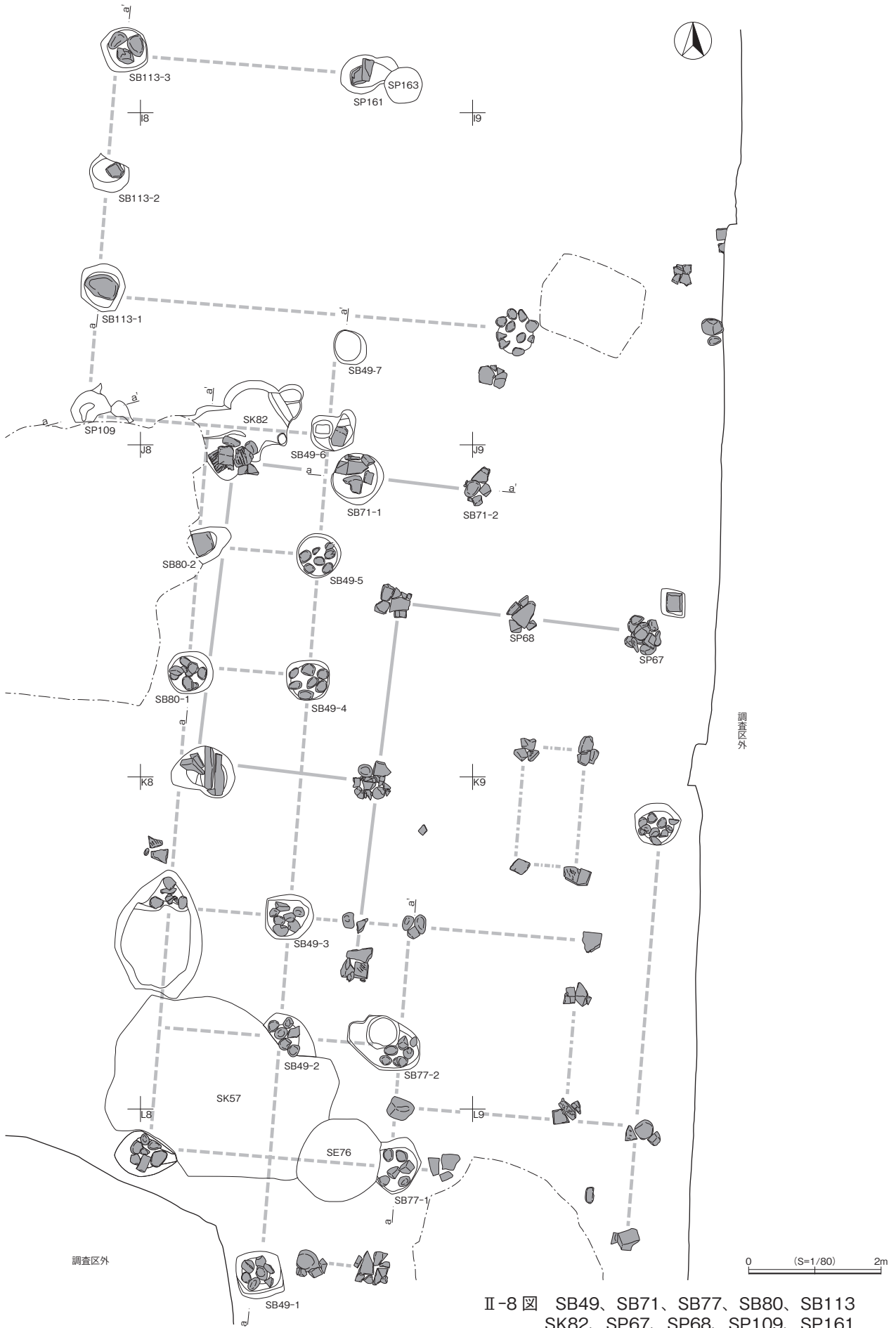


- 1 褐色土(砂利含)
- 2 暗黄褐色土(ロームの埋土、しまりやや強)

SB31

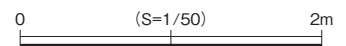
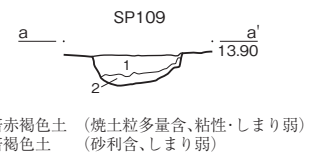
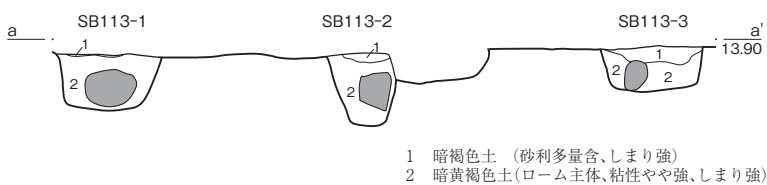
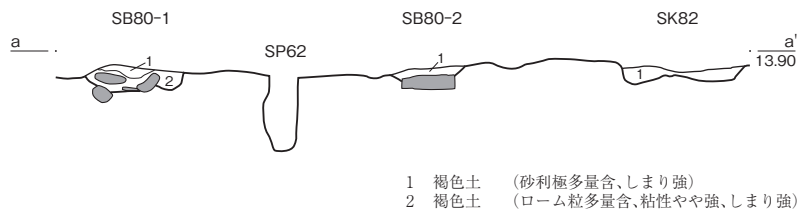
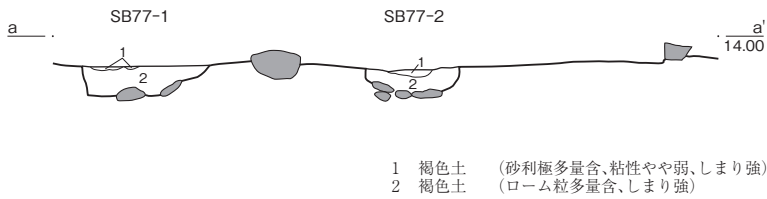
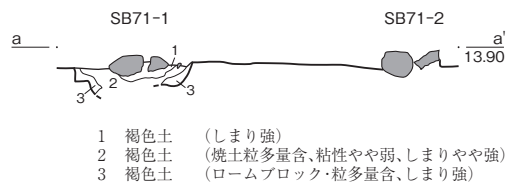
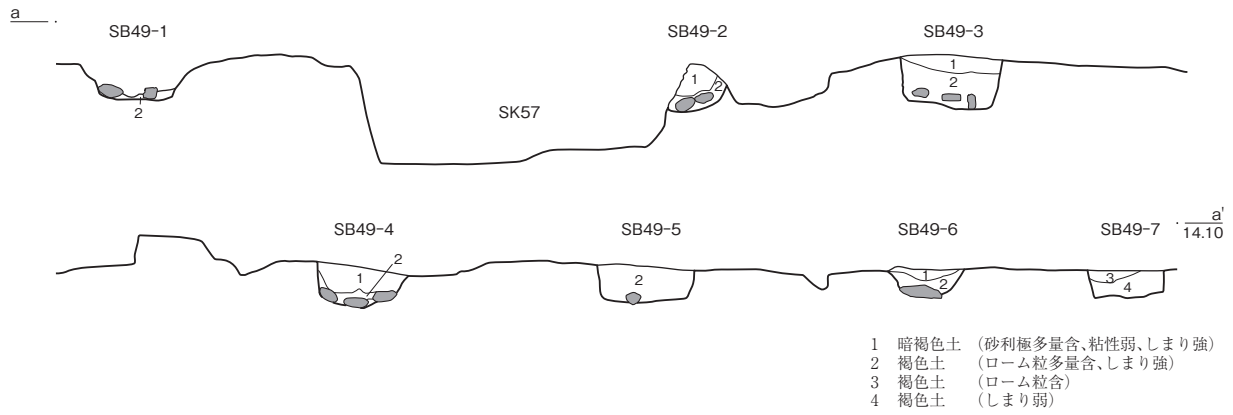


II-7 図 SB11、SB15、SB26、SB27、SB28、SB29、SB30、SB31



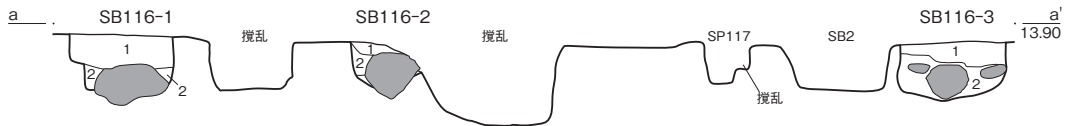
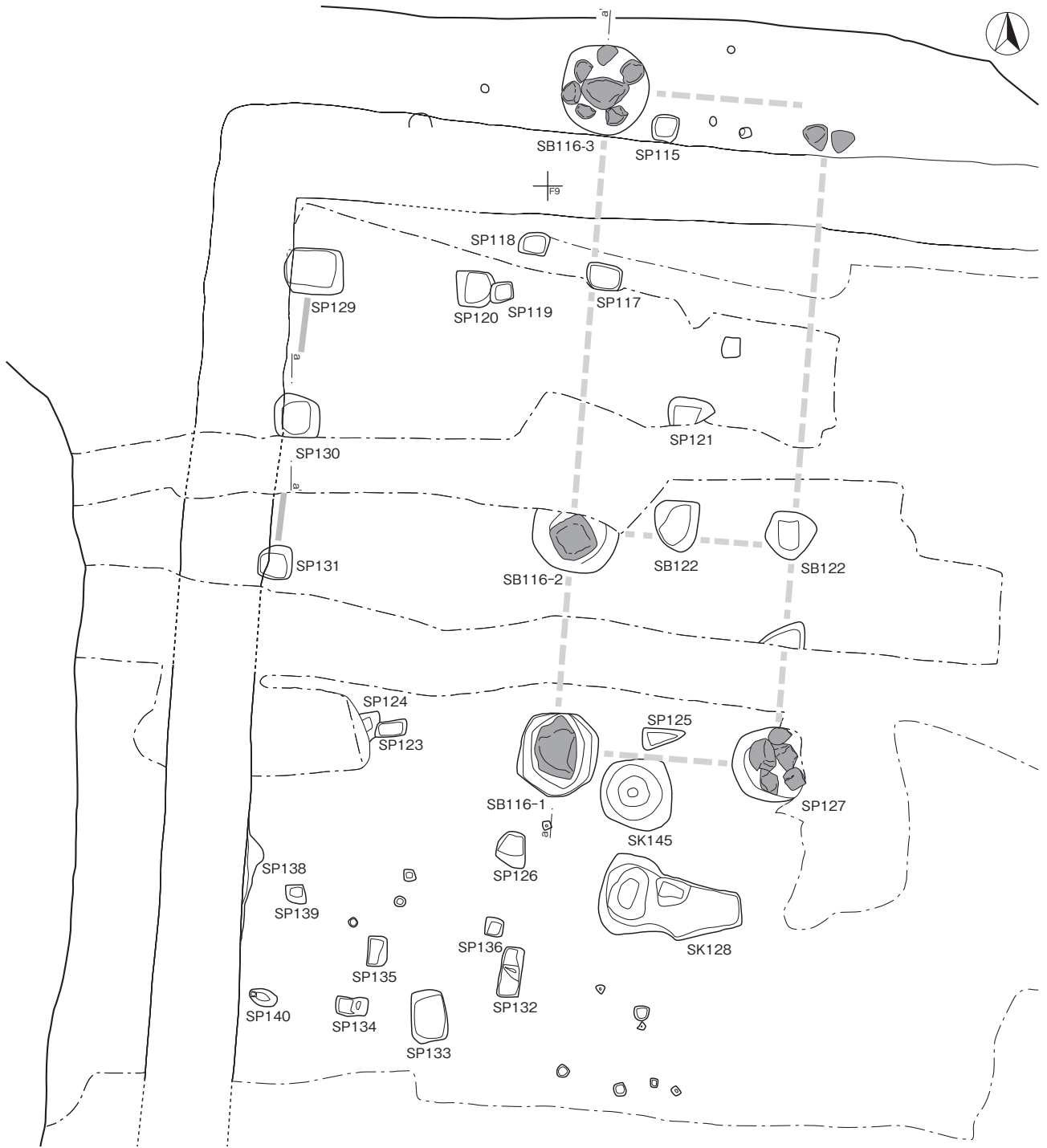
II-8 図 SB49、SB71、SB77、SB80、SB113  
SK82、SP67、SP68、SP109、SP161

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



II-9 図 SB49、SB71、SB77、SB80、SB113、SK82、SP109

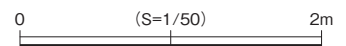




- 1 暗褐色土 (砂利多量含、粘性やや強、しまり強)
- 2 暗黄褐色土 (粘性やや強、しまり強)

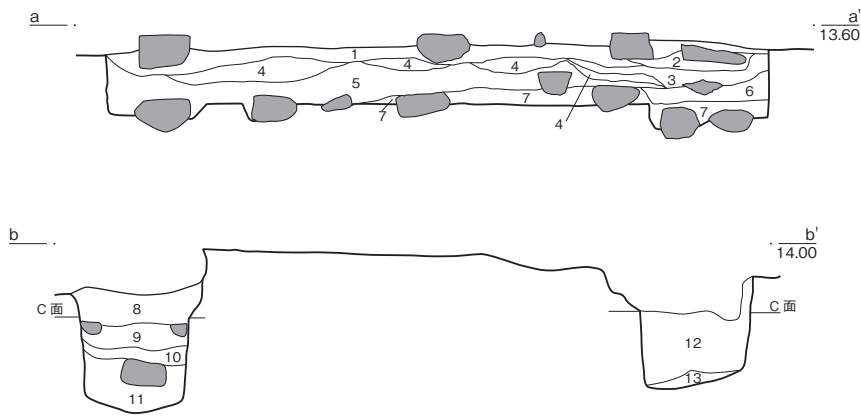
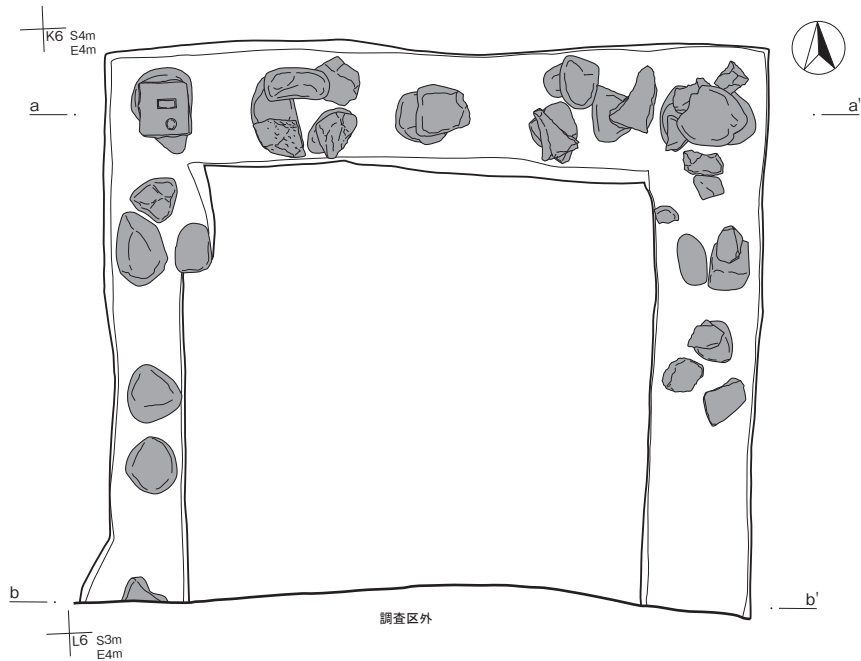


- SP130
- 1 褐色土 (ロームブロック多量含、しまりやや強)
- 2 褐色土 (ローム粒多量含、粘性・しまりやや強)

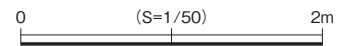


II-10 図 SB116、SP127、SP130

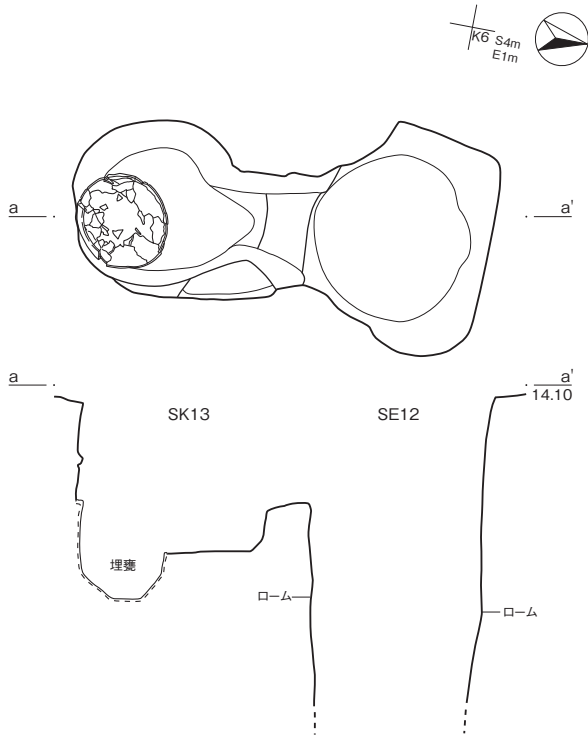
II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



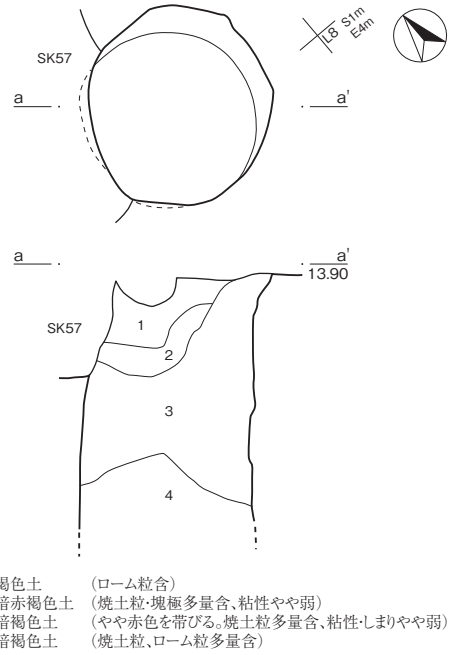
- 1 暗褐色土 (焼土粒多量含)
- 2 暗黄褐色土 (ロームの埋土、粘性やや強、しまり強)
- 3 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒少量含、しまり強)
- 4 暗褐色土 (砂利多量含、しまり強)
- 5 暗褐色土 (ローム粒含、しまり強)
- 6 暗黄褐色土 (ロームの埋土、粘性やや強、しまり強)
- 7 暗褐色土 (ローム粒少量含、しまりやや強)
- 8 褐色土 (ローム粒多量含、しまり強)
- 9 暗黄褐色土 (ロームの埋土、しまり強)
- 10 褐色土 (ローム粒含、しまり強)
- 11 茶褐色土 (ローム粒含、しまり強)
- 12 暗褐色土 (ロームの埋土、黒色土の互層、しまり強)
- 13 暗褐色土 (礫極多量含、しまり強)



II-11 図 SB175

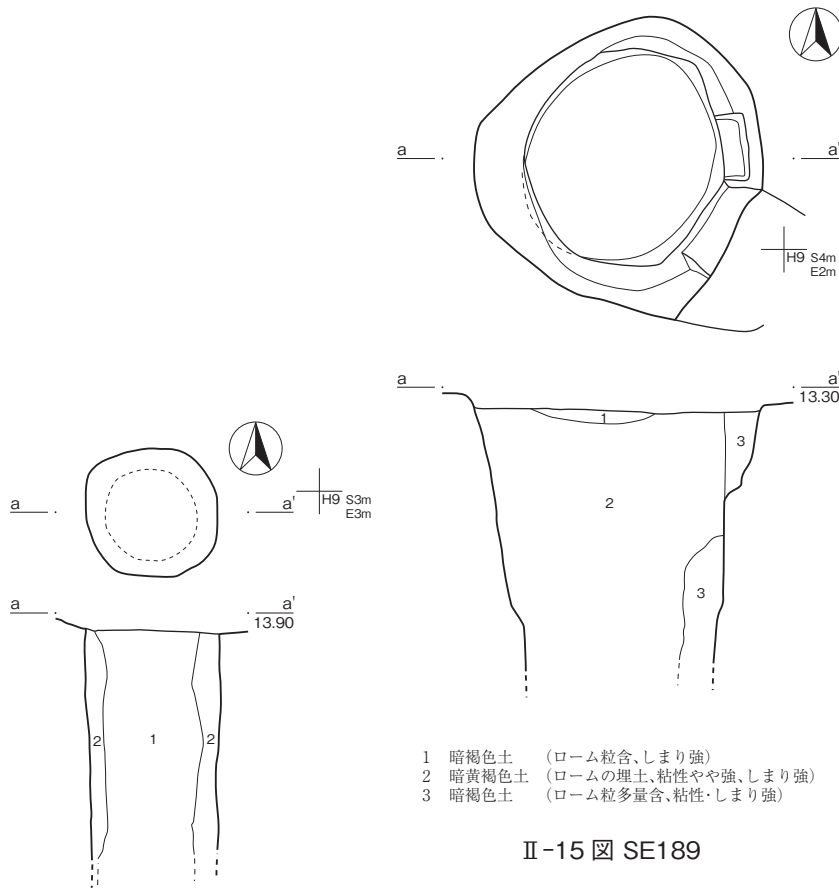


II-12 図 SE12、SK13



II-13 図 SE76

- 1 褐色土 (ローム粒含)
- 2 暗赤褐色土 (焼土粒・塊極多量含、粘性やや弱)
- 3 暗褐色土 (やや赤色を帯びる。焼土粒多量含、粘性・しまりやや弱)
- 4 暗褐色土 (焼土粒、ローム粒多量含)

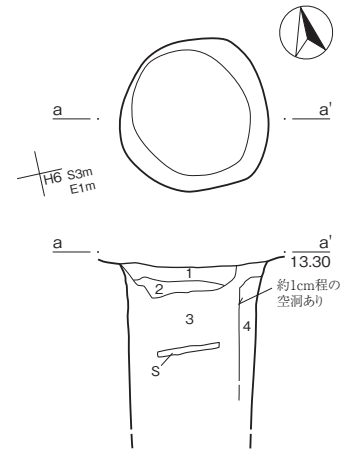


II-15 図 SE189

- 1 暗褐色土 (ローム粒含、しまり強)
- 2 暗黄褐色土 (ロームの埋土、粘性やや強、しまり強)
- 3 暗褐色土 (ローム粒多量含、粘性・しまり強)

- 1 暗赤褐色土 (焼土粒・塊極多量含、粘性・しまり弱)
- 2 褐色土 (ローム粒、ブロック多量含)

II-14 図 SE147

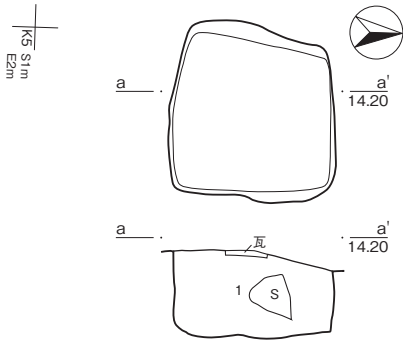


II-16 図 SE190

- 1 褐色土 (ローム粒少量含、しまりやや強)
- 2 褐色土 (ローム粒含)
- 3 灰褐色土 (砂質)
- 4 褐色土 (ロームブロック含)

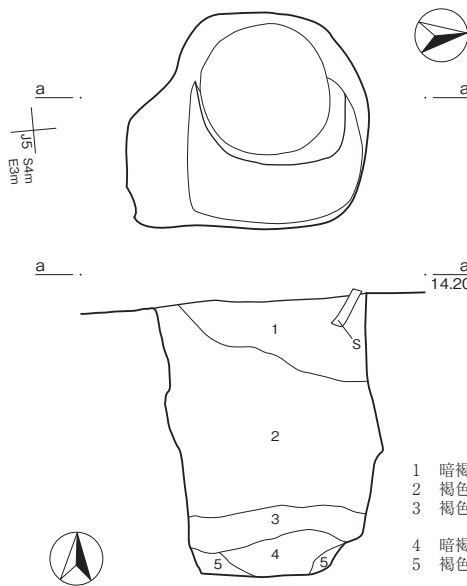
0 (S=1/50) 2m

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



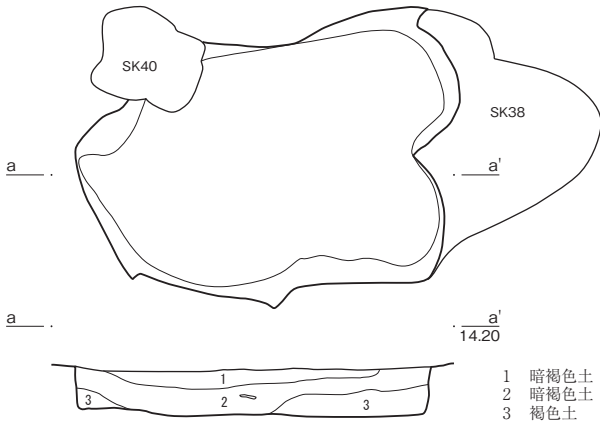
1 灰褐色土 (瓦片含、粘性・しまりやや強)

II-17 図 SK14



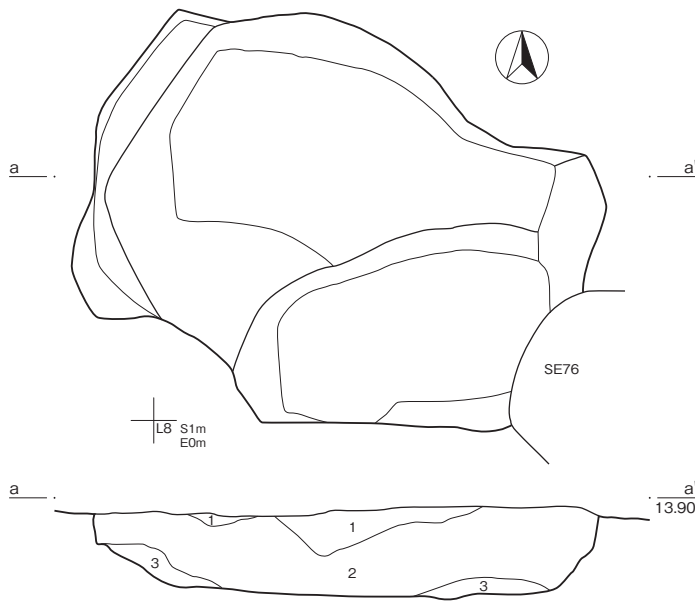
- 1 暗褐色土 (ローム粒多量含)
- 2 褐色土 (ローム粒多量、焼土粒含)
- 3 褐色土 (やや赤味を帯びる。ローム粒・焼土粒含、しまりやや弱)
- 4 暗褐色土 (貝殻少量、ローム粒含、しまり弱)
- 5 褐色土 (ローム粒多量含、しまりやや弱)

II-18 図 SK18



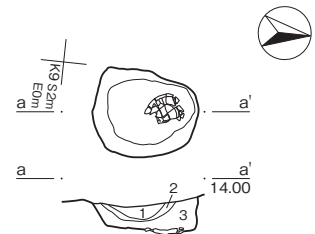
- 1 暗褐色土 (砂利少量含)
- 2 暗褐色土 (貝殻・炭化材多量含、しまりやや弱)
- 3 褐色土 (ローム粒多量含、しまりやや弱)

II-19 図 SK37



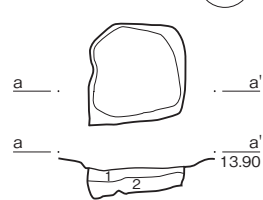
- 1 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量含)
- 2 暗褐色土 (やや灰色を帯びる。瓦片多量含、粘性やや強)
- 3 暗褐色土 (ローム粒少量含、粘性やや強)

II-22 図 SK57



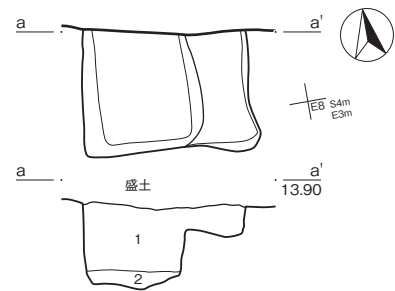
- 1 褐色土 (ロームブロック含)
- 2 暗褐色土 (やや灰色を帯びる、しまりやや弱)
- 3 褐色土 (ロームブロック多量含)

II-20 図 SK50



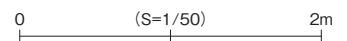
- 1 褐色土
- 2 褐色土 (ローム粒含)

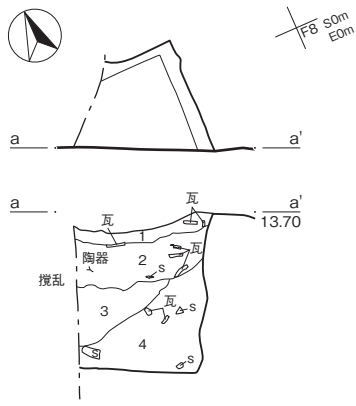
II-21 図 SK55



- 1 褐色土 (ローム粒・粘土塊含、しまりやや強)
- 2 褐色土 (ローム粗粒多量含、粘性・しまりやや強)

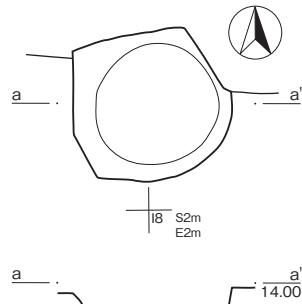
II-23 図 SK84



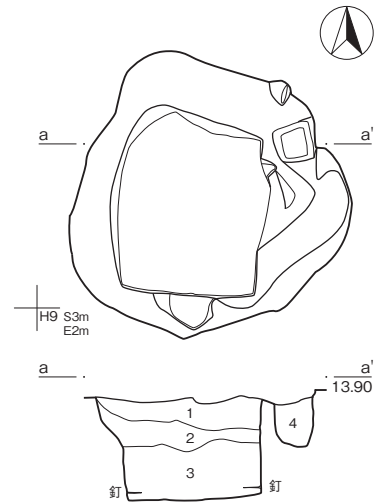


- 1 褐色土 (ローム粒多量含、しまり強)
- 2 褐色土 (やや灰褐色を帯びる、炭化物少量含)
- 3 褐色土 (山砂含)
- 4 褐色土 (炭化物少量含、しまりやや強)

II-24 図 SK114

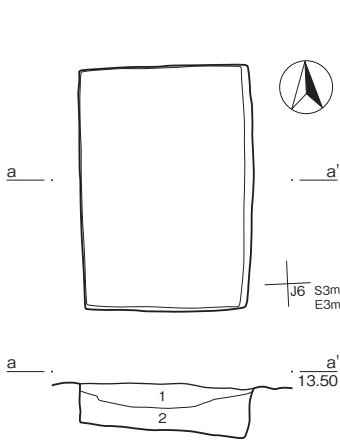


II-25 図 SK141



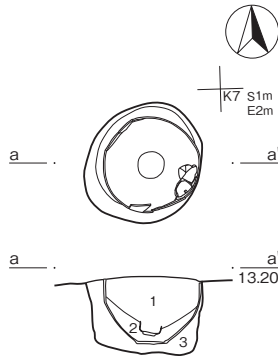
- 1 暗褐色土 (ローム粒、砂利含、しまり強)
- 2 褐色土 (ローム粒多量含、粘性やや強、しまり強)
- 3 暗褐色土 (ローム粒含、しまり弱)
- 4 暗褐色土 (ローム粒少量含、しまりやや弱)

II-26 図 SK164



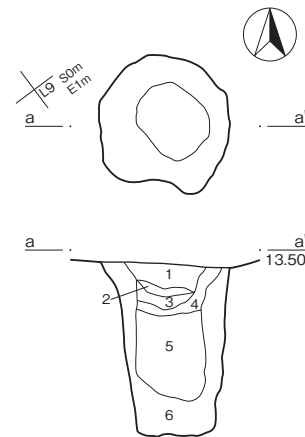
- 1 褐色土 (ローム粒多量含)
- 2 褐色土 (ローム粒・炭化物粒少量含)

II-27 図 SK166



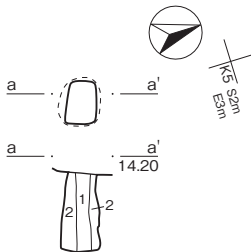
- 1 褐色土 (ローム粒・焼土粒少量含、しまりやや弱)
- 2 暗褐色土 (炭化物少量含、粘性やや強、しまりやや弱)
- 3 暗褐色土 (ローム粒少量含)

II-28 図 SK169



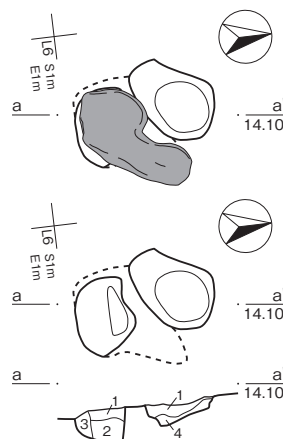
- 1 褐色土
- 2 暗黄褐色土 (ロームブロック主体)
- 3 暗褐色土 (ローム粒少量含)
- 4 灰褐色土 (砂質、粘性・しまり弱)
- 5 暗灰褐色土 (やや砂質、砂利少量含、粘性やや強、しまり弱)
- 6 暗褐色土 (ローム粒多量含、しまり強)

II-29 図 SL1



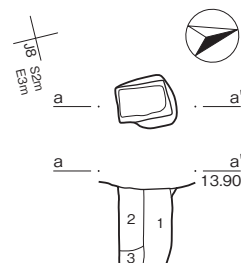
- 1 暗褐色土 (柱痕、しまり弱)
- 2 褐色土 (ローム粒含、しまり強)

II-30 図 SP16



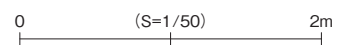
- 1 暗褐色土 (砂利含)
- 2 暗褐色土 (ローム粒多量含)
- 3 褐色土 (ローム粒含)
- 4 褐色土 (ローム粒極多量含、粘性やや強)

II-31 図 SP32



- 1 褐色土 (柱痕、しまりなし)
- 2 褐色土 (ロームブロック多量含、しまり強)
- 3 灰褐色土

II-32 図 SP66



## 第2節 C面の遺構

### C面の概要

本遺構面からは、建物遺構4基、溝2基、井戸1基、土坑7基、便槽1基、小穴8基、地下室3基が検出された(II-33図)。

C面はA面下約60～80cmで検出された遺構面で、厚さ約10cmの砂質褐色土の整地層によって形成された生活面である。6ライン以西の遺構面上には厚さ約20cmを測る焼土層が広がっている。特にH5グリッド付近では厚さ約40cmに達し、同グリッドに位置するSK168もほぼこの焼土層で埋め戻されている。一定量の焼土層が堆積する様相は、入院棟A地点で確認されたD面焼土層、C2層に類似し、火災を契機に生活面の嵩上げが行われたと考えられる。焼土層には多量の陶磁器類が含まれており、その年代観より富山藩邸が被災した元禄16(1703)年の火災に比定される。

火災以前の土地利用は、土蔵基礎と推定される布掘り礎石基礎遺構の他は、地下室、土坑、井戸、ピットが点在している程度で、比較的オープンな区域であった。

#### SB186 (II-34図)

E～G8・9グリッドに位置する布掘り建築遺構である。主軸方向はA・B面礎石列主軸1aと共通する。平面形は長方形を呈し、外寸で南北990cm、東西約470cmを測る。布掘り幅は90～110cmを測り、坑底には江戸間半間間隔で礎石が配置され、東西2間、南北5間の建物が復元される。布掘り基礎+半間間隔礎石列の建物基礎構造は、これまでの事例から土蔵基礎と考えられる。

遺物は17世紀末から18世紀初頭の陶磁器類がコンテナ1箱分出土している。

#### SD185 (II-35図)

F・G9グリッドに位置する溝状遺構である。SB186の東側約450cmに位置し、ほぼ並行である。即ちA・B面礎石列主軸1aと共通する。溝幅は遺構南側では約50～60cmで推移するが、北端に向かって徐々に細くなっている。また溝底レベルも北側に向かって下り、南北両端では約25cmの差が生じている。

遺物は出土していない。

#### SE526 (II-36図)

H8グリッドに位置する井戸である。平面形は略円形で直径135～140cmを測る。覆土はほぼ水平堆積を呈し、調査深度内では井戸側は確認されなかった。南北両側か

ら上屋施設基礎遺構が検出された。平面形態はいずれも不整形を呈し、ほぼ中央より方形切石を用いた礎石が検出された。切石上には柱抜取痕が認められ、砂利を含む覆土で埋められている。

全体調査終了後に重機で、確認面から約450cm下まで掘り下げたが、井戸底には到達しなかった。

遺物は17世紀末から18世紀初頭の陶磁器類、瓦などが少量出土している。

#### SK167 (II-37図)

H・I6グリッドに位置する遺構である。平面形は隅丸方形を呈し、南北93cm、東西100cm、確認面からの深さ40cmを測る。覆土はレンズ状堆積を呈し、1層上部には炭化材を挟み上下に貝類が多量に廃棄されていた。

遺物は17世紀末から18世紀前葉の陶磁器類が少量出土している。

#### SK168 (II-38図)

G・H5・6グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形長方形を呈し、南北最大385cm、東西最大230cmを測る。坑底には東西方向に2箇所の仕切り状テラスがある。確認面からテラス上面までの深さは約150cmを測る。逆の見方をするとこのテラスを元来の坑底とし、北壁際、中央、南壁際の3箇所が更に掘り込まれたと観ることができる。3箇所の坑底レベルはおおむね等しく確認面からの深さは約200cmを測る。覆土全てに焼土を含有し、特に5層で著しい。確認面からテラスまでの壁面は比較的平坦に整形されているが、テラス以下3箇所の掘り込みは壁面、坑底ともに工具痕が顕著に認められ凹凸が著しいことから、地下室などの大深度地下構造物作成途中に火災が生じ、そのまま火災瓦礫廃棄に利用されたと推定される。本遺構に廃棄された焼土は調査区6ライン以西全域で確認された焼土層(C面焼土)に繋がり、一連の火災瓦礫整理作業の結果と判断される。焼土層には多量の遺物が含まれており、本遺構+C面焼土でコンテナ25箱分が出土している。

出土遺物は、肥前産染付大皿、色絵中皿、京焼色絵製品などの高級陶磁器類など御殿空間で使用された一群が一定量含まれている特徴を有す。

#### SK170 (II-39図)

K5グリッドに位置する遺構で、C面に帰属する。平面形は円形を呈すると推定されるが、西側が調査区域外に及ぶため詳細は不明である。南北長115cm、確認面からの深さ最大53cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁面

はほぼ直立する。覆土はおおむね水平堆積を呈し、最上層（1層）は焼土粒を多量に含み、遺構廃絶後に火災瓦礫処理が行われたと推定される。

遺物は17世紀代の陶磁器類が少量出土している。

#### SK274（Ⅱ-40図）

K9グリッドに位置する土坑である。本遺構はD面調査段階で確認されたが、出土遺物の年代観からC面帰属遺構とした。平面形は略長方形を呈し、南北295cm、東西158cmを測る。調査時の深さは約150cmであるが、本遺構周辺のC面レベルから本来は約210cmを測ったと推測される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底もほぼ平坦であるが、D面帰属SE298と重複する部分のみ貼床が確認された（7層）。

遺物は17世紀末から18世紀初頭の陶磁器類がコンテナ1箱出土している。

#### SK357（Ⅱ-41図）

J5・6グリッドに位置する遺構である。本遺構はD面調査段階で確認されたが、出土遺物の年代観からC面帰属遺構とした。東側でSU254と重複し、それより古い。平面形は不定形を呈し、東西最大長334cm、南北最大長272cmを測る。調査時の最大深度は56cmであるが、本遺構周辺のC面レベルから本来は最大約120cmと推測される。覆土にはローム粒、ロームブロックが多く含まれ、壁面、坑底共に凹凸が著しいことから植栽痕の可能性が考えられる。

遺物は17世紀末の陶磁器類が少量出土している。

#### SL272（Ⅱ-42図）

J8グリッドに位置する遺構である。本遺構はD面調査段階で確認されたが、出土遺物の年代観からC面帰属遺構とした。東側でSU273と重複し、それより新しい。平面形は楕円形を呈し、東西155cm、南北140cmを測る。調査時の最大深度は175cmであるが、本遺構周辺のC面レベルから本来は約230cmと推測される。坑底は楕円形を呈し、東寄りに位置し、ほぼ平坦である。規模は東西118cm、南北98cmを測る。西側を中心にやや斜行する三日月状のテラスを介してほぼ直立する壁面に移行する。木質の痕跡は全く認められなかったが、断面観察の結果、幅105cm、確認面からの深さ105cmを測る桶枠状内部施設が存在が確認された。灰褐色粘質土（1層）を覆土に持つことから、便槽の可能性が考えられる。坑底直上には厚さ約50cmを測るローム土（4層）が埋積し、その中央に幅108cm、厚さ約30cmを測る純砂層（3層）

が堆積するがその立ち上がりがほぼ直立することと1層直下にあたることから、調査時には確認することができなかったが、1、3層が接続する可能性も充分考えられ、上部に堆積した粘質土の水分浸透を目的としていたと推定される。

遺物は出土していない。

#### SP192（Ⅱ-43図）

F9グリッドに位置する遺構である。平面形は略円形を呈し、直径50～58cm、確認面からの深さ約50cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土の大半が粘性が強い灰褐色土であることから、厠の下穴の可能性が高い。

遺物は出土していない。

#### SU174（Ⅱ-44図）

I・J9グリッドに位置する遺構である。確認面での平面形は不整形長方形を呈し、東西最大195cm、南北最大170cmを測る。確認面での主軸方向角はN-37°-Wを示すが、確認面下約160cm付近にかけて変化し、坑底ではN-84°-Wと約47°の変化が生じている。また西壁では確認面下約180cmで、オーバーハングし天井が形成される。壁面からの奥行きは約50cmを測る。西壁以外はほぼ垂直に立ち上がる。坑底は、確認面下約290cmにあり、東西220cm、南北115～135cmを測る長方形を呈す。室部規模に対して、深さが際だっているが、D面に構築されたSK275と重複したため、室部を形成するために必要なローム層を求めて、深く掘削された可能性がある。

遺物は17世紀末から18世紀初頭の陶磁器類がコンテナ1/2箱分出土している。

#### SU254（Ⅱ-45a・b図）

J6・J7・K6・K7グリッドに位置する地下室である。本遺構はD面調査段階で確認されたが、出土遺物の年代観からC面帰属遺構とした。西側でSK357と重複し、それより新しい。平面形は、ほぼ南北主軸の長方形堅坑とその東壁南寄りに室部が接続する形態を呈する。堅坑の規模は南北363～380cm、東西185～198cmを測る。壁面はほぼ直立し非常に丁寧な調整が施されている。床面は確認面下約370cmにある。多少の凹凸が認められるが、ほぼ平坦に調整されている。堅坑の周囲には、室部に繋がる東壁を除く三方に、幅約70cm、確認面からの深さ約50cmを測るテラス状施設が設けられている。室部は入口で幅330cm、奥壁で370cmを測る緩やかな

撥形を呈し、南壁際からの床面奥行きは330cmを測る。半截時にかろうじて遺存していた天井部の様相から天井奥行きは230cm以上あったと推定される。室部南壁は竪坑南壁から南へ約55cm張り出しており、室部入口としての幅は275cmを測る。壁面はほぼ直立し平滑に調整されている。竪坑と室部の境界床面から円礫、破碎礫を利用した掘方を伴う石列が検出された。礫はローム土で固定され、その直上に炭化した角材の痕跡が確認された。角材痕の南北両延長上に位置する竪坑北東角隅と室部南西隅壁面にはソケット状の掘り込みが認められ、約450cm長の角材が敷設されていたと推定される。入口部の補強施設と考えられる。

遺構廃絶後にはローム主体土で天井レベルまで一気に埋め戻されているが、13層から大量のかわらけを始めコンテナ6箱分の遺物が出土した。かわらけは被熱した完形品が多く重なり合っており出土していることから、火災後の処理と考えられる。また細片のため未報告であるが、藩邸内での鍛冶活動を示す鞆の羽口、坩堝が出土している。

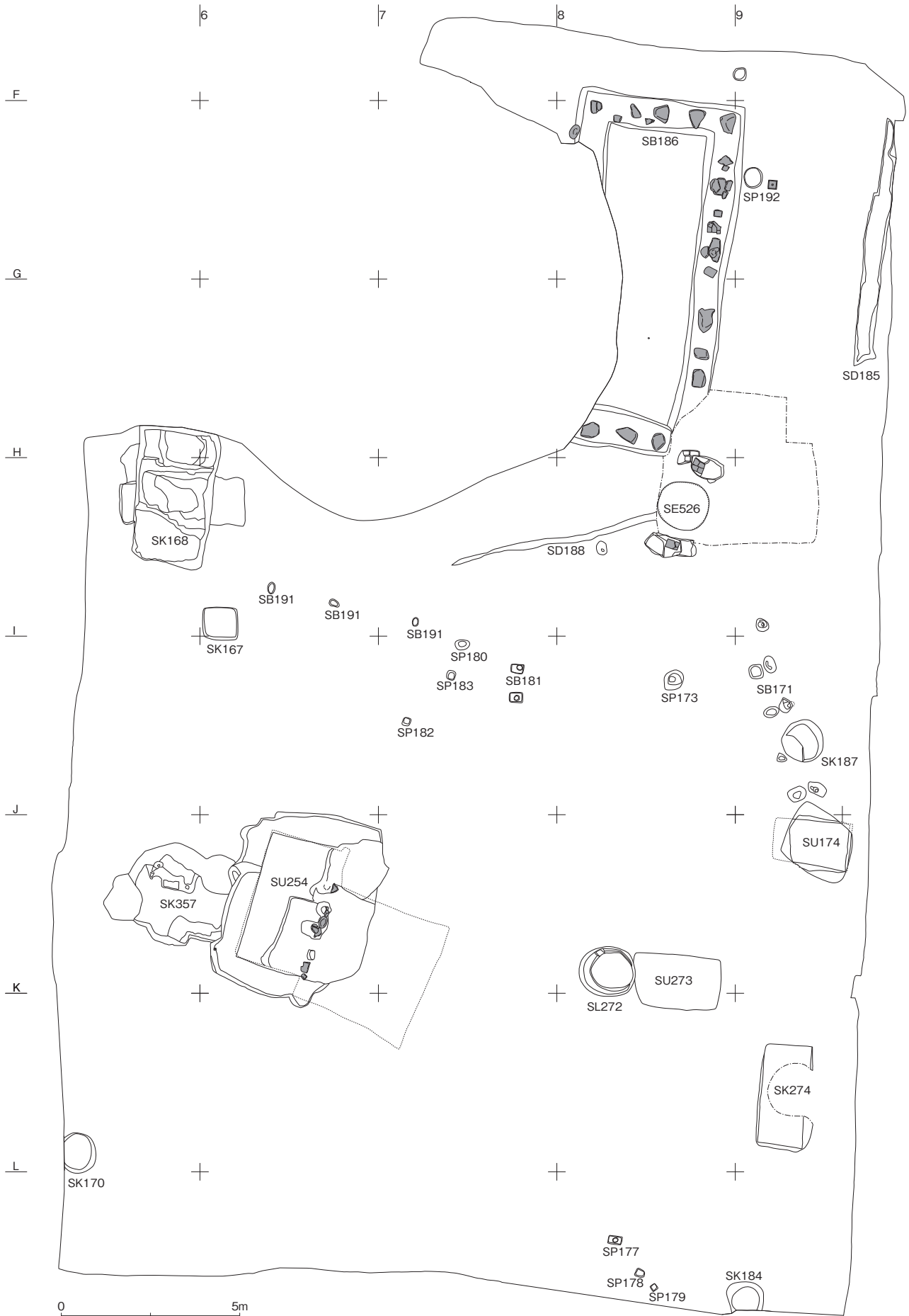
#### SU273 (II-42 図)

J8・J9グリッドに位置する遺構である。本遺構はD面調査段階で確認されたが、出土遺物の年代観からC面帰属遺構とした。西側でSL272と重複し、それより古い。平面形は略長方形を呈し、東西245cm、南北150cmを測る。安全に留意して確認面下約300cmまで掘り下げたが、坑底を確認することはできなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面は比較的平滑に調整されている。覆土はロームブロックを多量に含む褐～暗褐色土を基調とする。

全ての調査終了後に重機で掘り下げたところ、D面レベル下約420cmで坑底が確認された。壁面は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、横方向に開く室部は認められなかった。また坑底直上には厚さ約50cmを測る純砂層が埋積していた。

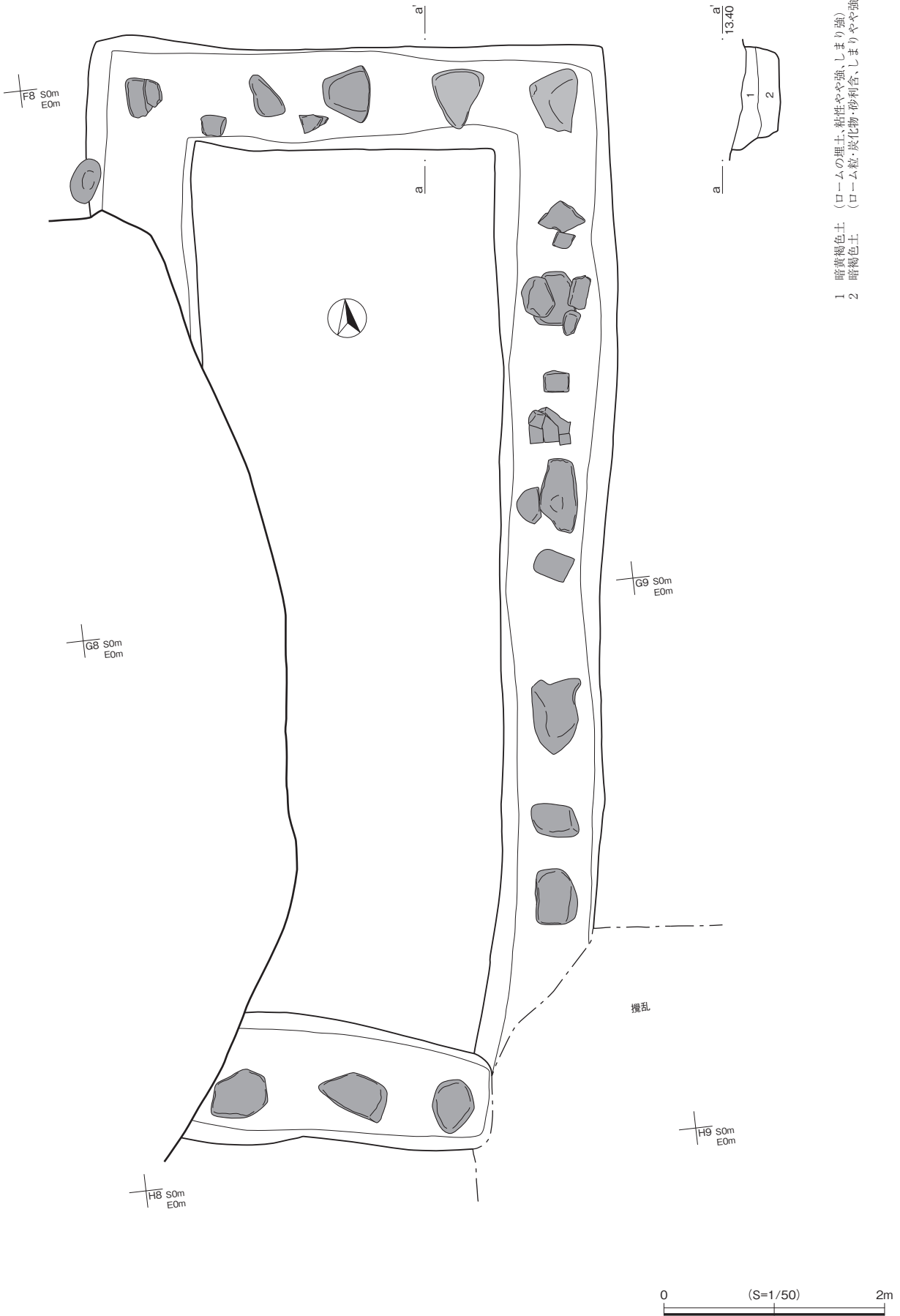
遺物は17世紀末から18世紀初頭の陶磁器類が少量出土したのみである。



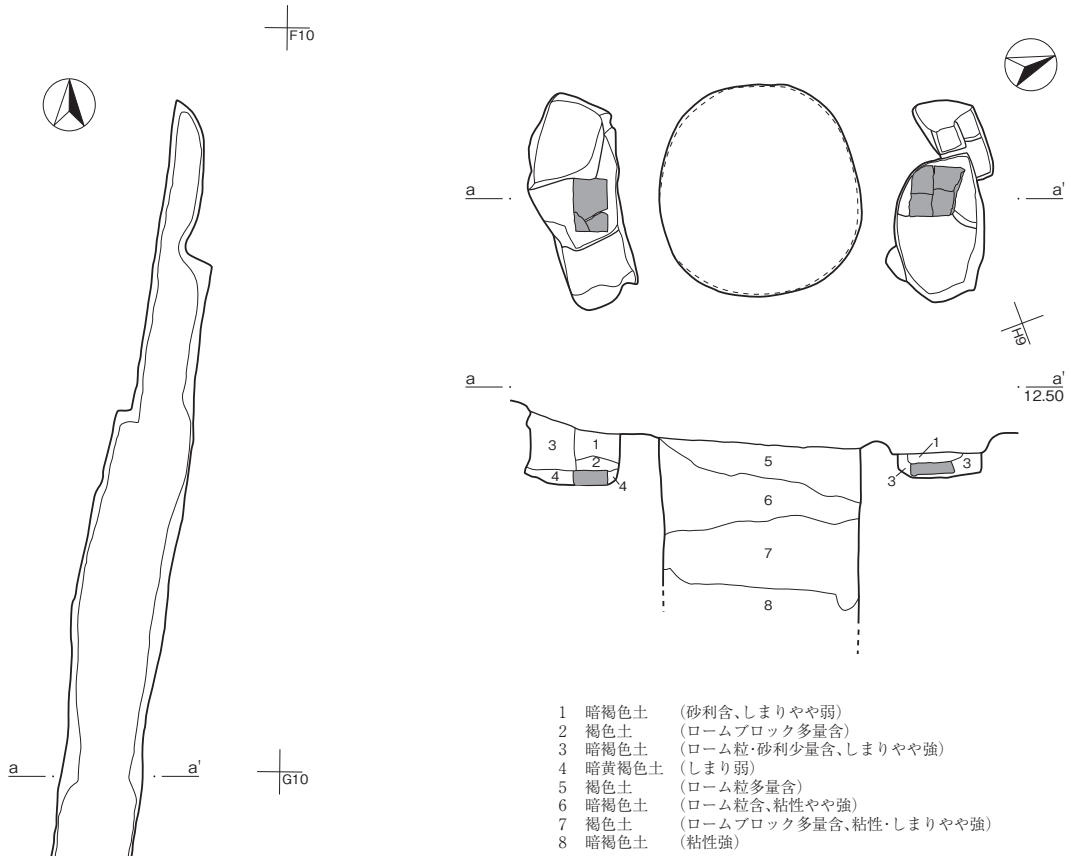


II-33図 C面遺構配置図

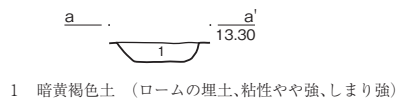
II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



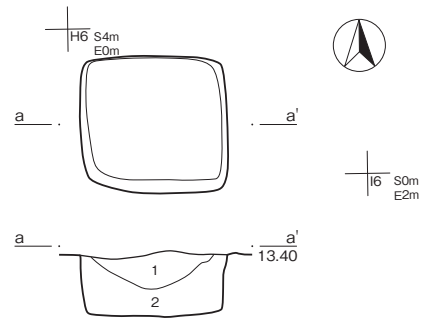
II-34 図 SB186



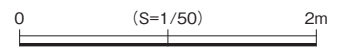
Ⅱ-36 図 SE526



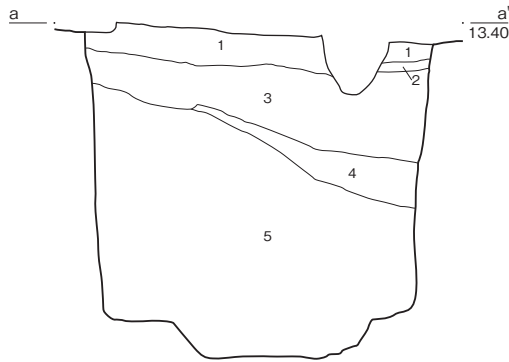
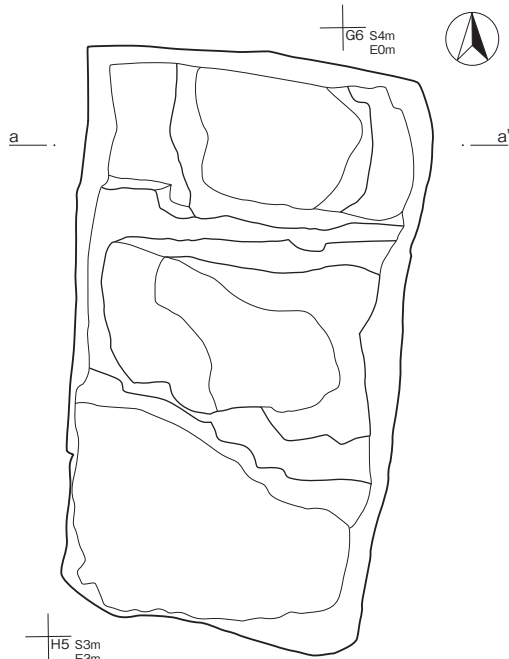
Ⅱ-35 図 SD185



Ⅱ-37 図 SK167

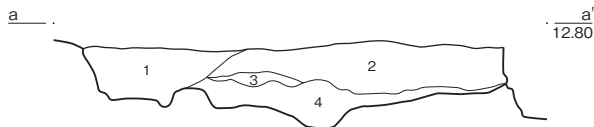
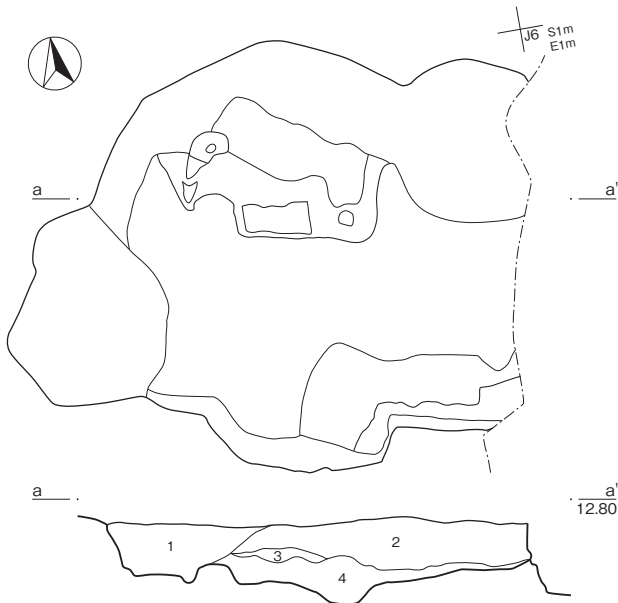


II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



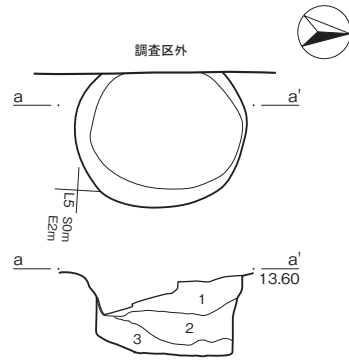
- 1 暗褐色土 (焼土塊、焼土粒、ローム粗粒多量含)
- 2 暗黄褐色土 (ロームブロック、ローム粒主体)
- 3 暗褐色土 (焼土粗粒極多量含)
- 4 黒褐色土 (焼土粗粒多量含)
- 5 暗赤褐色土 (焼土粗粒極多量、焼土塊含)

II-38 図 SK168



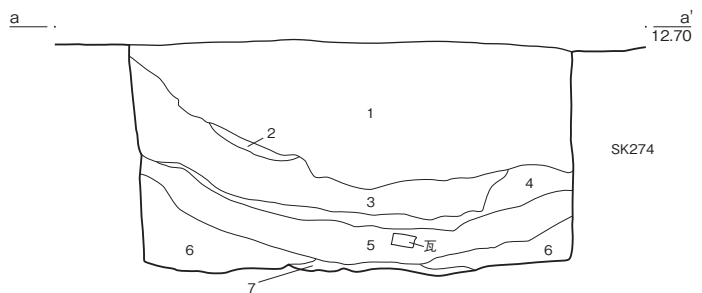
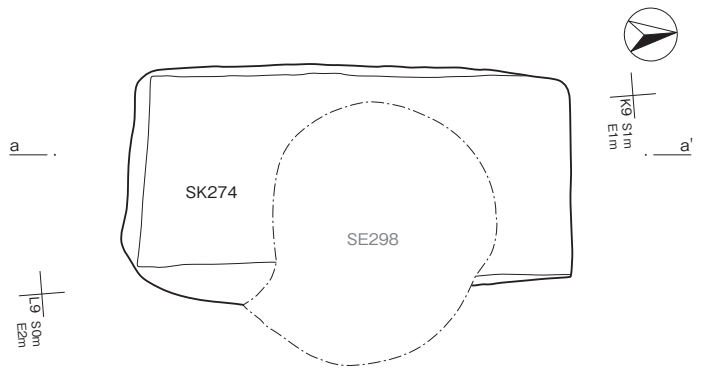
- 1 暗褐色土 (焼土粒多量・砂利含、粘性弱)
- 2 暗褐色土 (ローム粒・ブロック多量含、しまりやや強)
- 3 暗褐色土 (ローム粒含、粘性・しまりやや強)
- 4 暗黄褐色土 (ロームブロック極多量含、粘性やや強・しまり強)

II-41 図 SK357



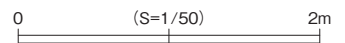
- 1 暗褐色土 (焼土粒多量含)
- 2 褐色土 (ローム粒少量含)
- 3 褐色土 (ローム粒、ブロック多量含)

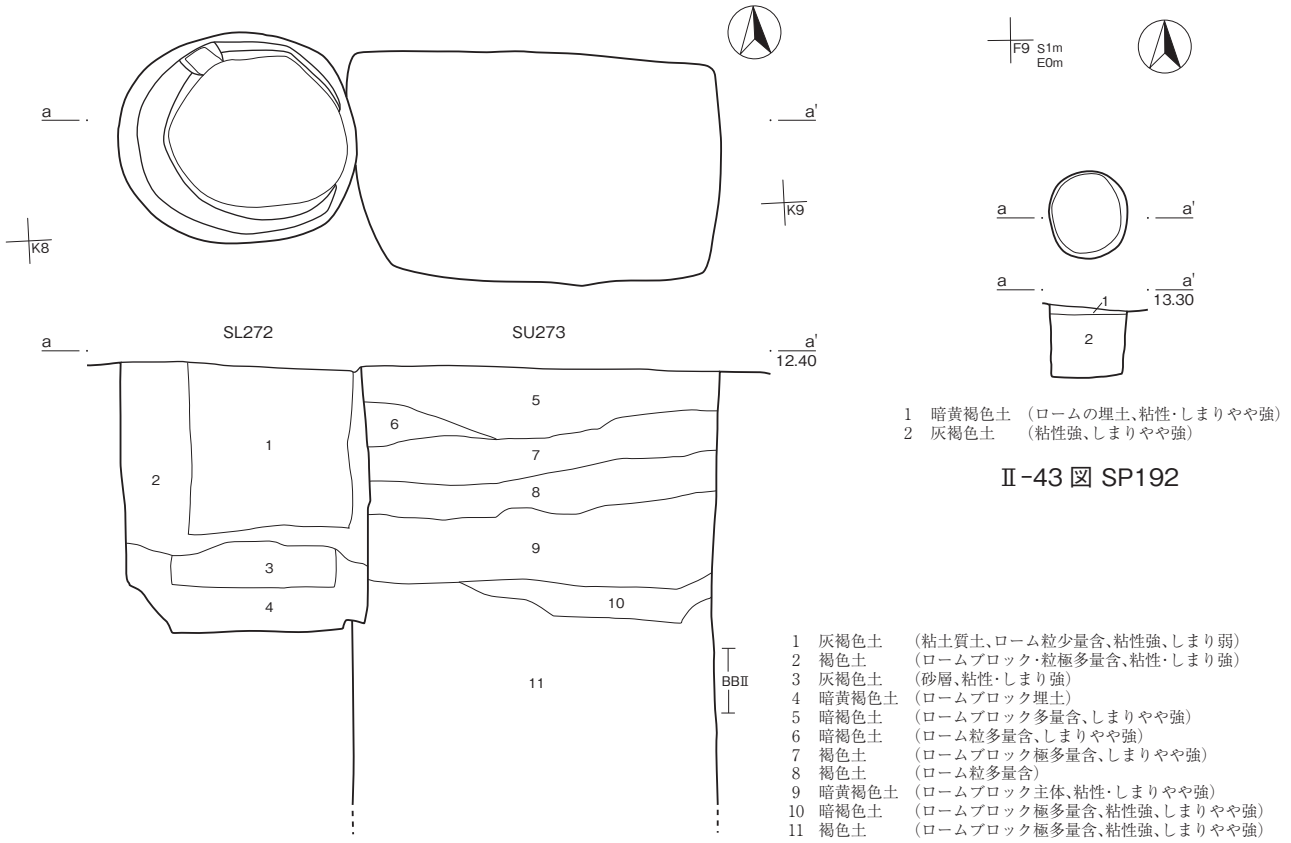
II-39 図 SK170



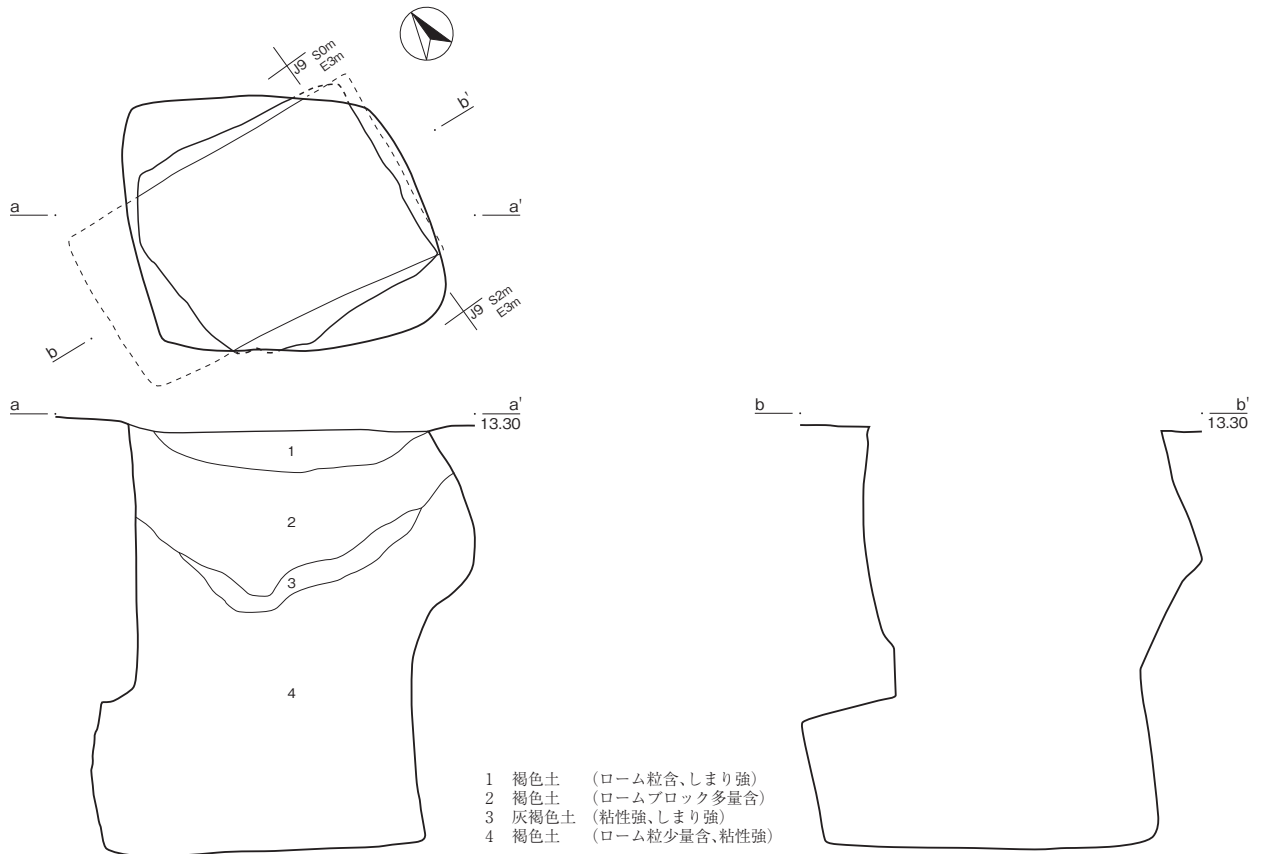
- 1 暗褐色土 (ローム粒多量含、砂利・炭化物含)
- 2 灰褐色土 (粘土質、粘性強)
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 (炭化物・自然遺物多量含、粘性やや強、しまりやや弱)
- 5 暗褐色土 (ローム粒少量含、粘性強)
- 6 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒多量含、粘性やや強)
- 7 暗褐色土 (ロームの埋土、粘性やや強)

II-40 図 SK274



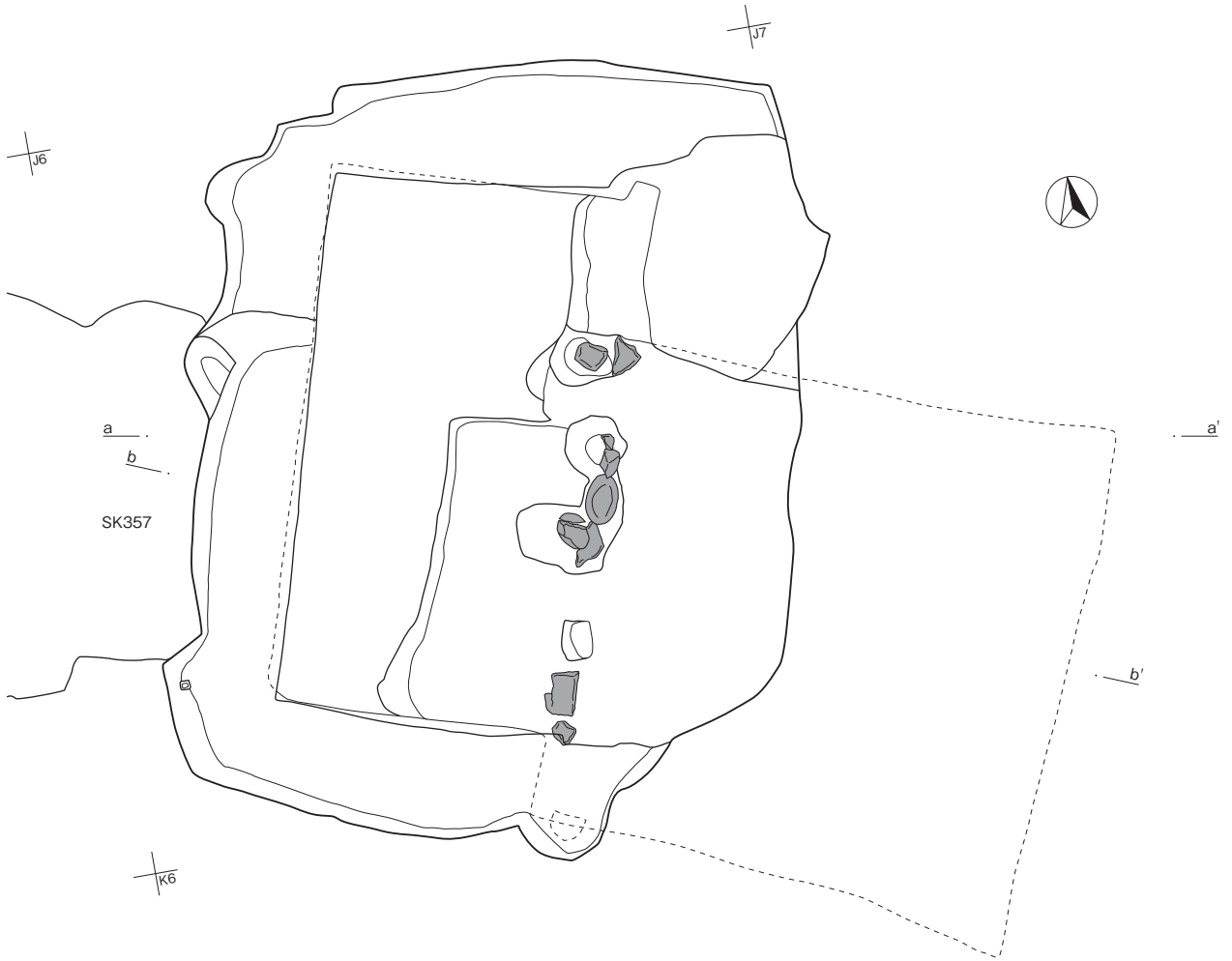


II-42 図 SL272、SU273



0 (S=1/50) 2m

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査

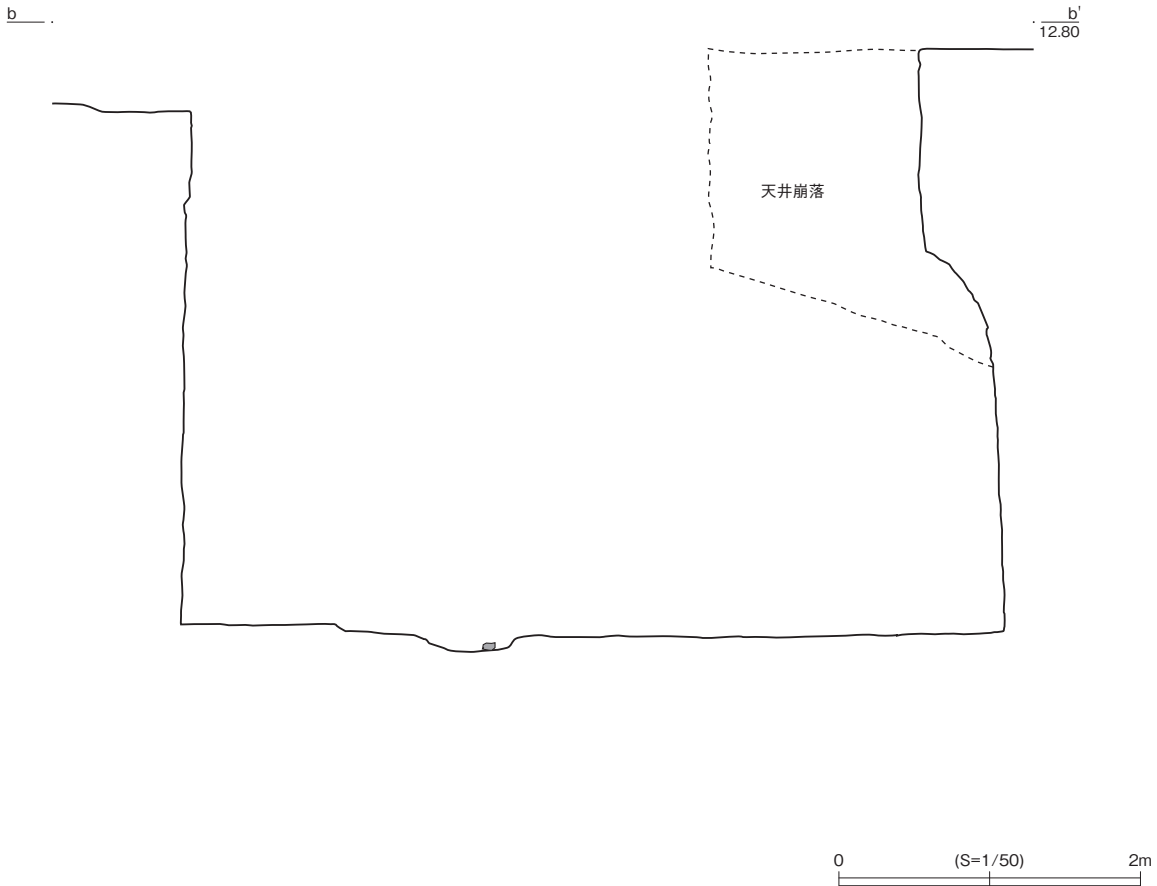


II-45a 図 SU254 (1)

第三章 江戸時代の遺構

SU254

- |    |       |                         |
|----|-------|-------------------------|
| 1  | 暗褐色土  | (炭化物・ローム粒少量含、粘性やや強)     |
| 2  | 暗褐色土  | (ローム粒・炭化物多量含)           |
| 3  | 明灰褐色土 | (粘土質土、粘性強、しまりやや強)       |
| 4  | 暗褐色土  | (ローム粒含・炭化物少量含、粘性やや強)    |
| 5  | 褐色土   | (ローム粒少量含、粘性やや強)         |
| 6  | 暗褐色土  | (ローム粒少量含)               |
| 7  | 褐色土   | (ローム粒含)                 |
| 8  | 暗褐色土  | (ローム粒少量含)               |
| 9  | 灰褐色土  | (粘土質土、炭化物少量含、粘性強)       |
| 10 | 暗黄褐色土 | (ローム粒主体、砂利含、粘性強、しまりやや弱) |
| 11 | 暗黄褐色土 | (ロームの埋土、粘性やや強、しまりやや弱)   |
| 12 | 褐色土   | (ローム粒多量含、粘性強、しまりやや弱)    |
| 13 | 褐色土   | (砂利・炭化物・ローム粒多量含、粘性やや強)  |
| 14 | 暗褐色土  | (粘性強)                   |
| 15 | 褐色土   | (ローム粒含、しまりやや弱)          |
| 16 | 灰褐色土  | (粘性・しまりやや強)             |
| 17 | 暗黄褐色土 | (ローム小ブロック主体、粘性やや強)      |



II-45b 図 SU254 (2)

### 第3節 D面の遺構

#### D面の概要

本遺構面からは、堀跡1基、建物遺構1基、溝4基、井戸4基、土坑99基、小穴201基、地下室1基が検出された(II-46図)。

Hライン付近を東西方向からやや南傾して伸びるSA518、SD535の境界遺構を境に北側ではSK299、SK368などの採土坑が分布する以外はほとんど遺構が存在しない空閑地である。それに対し南側では、境界遺構とほぼ同軸の長方形土坑が多く構築されている。Kライン以南では小穴が密集しているが、配列を復元できる共伴遺構は認められなかった。小穴には江戸以前の遺構も含まれている可能性がある。逆に小穴以外には定形遺構はほとんど無く、空閑地の様相を呈していると言っても過言ではない。

#### SA518・SP508(II-47図)

G5、G6、H6～8グリッドに位置し、SD535北側をほぼ平行して伸びるピット列である。重複するSK539、SK545より新しい。各ピットの平面形は略楕円形を呈し、芯々約150cm間隔で並んでいる。確認面からの深さは約40～60cmを測る。主軸方向角はE-17°-Sを測る。覆土はロームブロックを含む黒褐色土を基調とし、隣接するSD535と近似することから、ほぼ同年代の遺構と推定される。一部で直径約20cmを測る柱痕が確認された。本遺構には溝を伴うピットが存在するが、共伴関係は不明である。

本遺構の特徴である個々の形態が楕円形を呈し、溝で結ばれたピット列は、加賀藩邸調査では、17世紀前～中葉段階で認められる。覆土にも類似性があり、本遺構も同年代の富山藩邸内境界施設と考えられる。

遺物は出土していない。

#### SD535(II-47図)

G5・6、H5～9グリッドに位置する溝状遺構である。東西方向の主軸方向角はE-約14°-Sを測り、北側に隣接するSA518とほぼ平行して東西に伸び、調査区西端でほぼ直角に南へ折れ、約350cmで立ち上がる。SK440、SK441、SP472、SB514、SK517、SK539より古く、SK541、SK543、SK546より新しい。断面形は長方形を呈し、若干開き気味に立ち上がる。確認面での溝幅は約60cmを測り、溝底はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土を基調とする。

本遺構類似事例は、加賀藩邸17世紀段階に認められ、

断面箱薬研形を呈す溝から本形態への変化が指摘されている。

遺物は17世紀代の陶磁器類が少量出土している。

#### SB514(II-48図)

G7・H7グリッドに位置する遺構である。礎石を伴う不整形の遺構が2基検出された。重複するSK539、SD535、SK545より新しい。各遺構は東西約210cm、南北110～130cm、確認面からの深さ80～90cmを測る。礎石は2枚の切石を積み重ねて最深部の坑底直上に置かれ、礎石間は芯々で210cm、方向角はN-12°-Eを測り、ほぼSD535に直交する。礎石表面は丁寧に平滑に調整されていることから、転用品の可能性が指摘できる。北側の柱穴は東西両側に、南側の柱穴は西側にテラスを有しているが、土層堆積の観察から数度の作り替えが行われたことが確認される。本遺構周囲に関連遺構が認められないことから門基礎と推定される。

遺物は出土していない。

#### SD503(II-49図)

I5・6、J5・6グリッドに位置する溝状遺構である。主軸方向角はE-15°-Sを測り、ほぼSD535と平行する。西側は調査区外へ伸び、調査区内では東西約520cmが確認された。東に向けて溝幅は狭くなり収束する。壁は緩やかに立ち上がり、断面形はお椀形を呈する。壁面、坑底ともに凹凸が著しい。

遺物は出土していない。

#### SE297(II-50図)

I・J8グリッドに位置する井戸である。平面形は楕円形を呈し、東西145cm、南北134cmを測る。上部に幅15～20cm、深さ約10cmを測るテラスが巡り、地上施設との関連が考えられる。テラス下は直径約105cmを測る不整形を呈し、壁面は若干拡がりつつ下降する。

遺物は17世紀代の陶磁器類が数点出土したにすぎない。

#### SE298(II-51図)

K9グリッドに位置する井戸である。平面形は略円形を呈し、直径は145～165cmを測る。覆土は暗褐色土を基調として、レンズ状堆積を呈する。確認面下約200cmより井戸側痕跡を示す覆土の立ち上がりが確認された。井戸側内直径は約90cmを測る。掘方覆土はローム粒を含む黒褐色土を呈する。全調査完了後に重機で確認面下約430cmまで掘り下げたが、井戸側は残存して



いなかった。

遺物は17世紀後半の陶磁器類が少量出土している。

SE494 (II - 52 図)

H6グリッドに位置する井戸である。上方はロート状に開き東西両側に短溝状の張出部が布設されている。井戸本体は楕円形を呈し、東西110cm、南北94cmを測る。断面観察から本体延長部とロート状張出部境の覆土にはほぼ直立する空洞が認められたことから地上施設としての井戸側が存在したことが確認された。また溝状東西張出部坑底は両端部が深く掘り下げられていることから、この部分に上屋基礎が埋め込まれていたと推定される。全調査完了後に重機で確認面下約430cmまで掘り下げたが、井戸底は確認されなかった。

遺物は出土していない。

SE516 (II - 53 図)

H7グリッドに位置する井戸である。平面形は略円形を呈し、直径105～115cmを測る。覆土はほぼ水平堆積を呈し、井戸側などの内部施設は確認されなかった。全調査完了後に重機で掘り下げたところ、確認面下約300cmで坑底を確認したが湧水は認められなかった。

遺物は17世紀代の陶磁器類、小柄などが少量出土した。

SK245 (II - 54 図)

J・K5グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形楕円形を呈し、東西195cm、南北180cm、確認面からの深さ最大28cmを測る。壁面、坑底共に凹凸が認められ、坑底ほぼ中央に楕円形を呈するテラス状の高まりが存在することから、植栽痕と考えられる。

遺物は古墳時代前期土器が少量出土しているにすぎない。

SK333 (II - 55 図)

H9グリッドに位置する遺構である。南側で重複するSK334より新しい。平面形は不整形を呈し、東西215cm、南北220cm、確認面から深さ40cmを測る。坑底は凹凸が著しく多数の根穴が認められることから植栽痕と推定される。覆土は炭化物を多量に含む褐色土を基調とする。

遺物は17世紀前葉から中葉に比定される陶磁器類が数十点出土している。

SK356 (II - 56 図)

K9グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、東西150cm、南北120cm、確認面からの深さ45cmを測る。西側に三日月状のテラスを有し、壁面、坑底共に凹凸が著しい。坑底直上の間層(4層)を挟み、ヤマトシジミ約12600個体、ハマグリ約500個体を含む貝類廃棄層が確認された。貝類以外の人工遺物は、古墳時代前期土器が数点出土したにすぎない。

SK275 (II - 57 図)

I・J9グリッドに位置する大形遺構である。SK359と重複し、それより古い。調査区東端で検出され、その形態から大半が調査区外に拡がるのが推測される。調査区内では南北最大750cm、東西最大240cm、確認面からの深さ175cmを測る。壁に沿って幅数十cmのテラス状平坦部が存在する。壁面、坑底共に凹凸が著しく、遺構規模と合わせて採土坑と推測される。本遺構より北側の9ライン以東には不定形大形遺構が密に分布しており、藩邸経営初期段階の土地利用を示していることが窺われる。

遺物は17世紀後半の陶磁器類が少量出土している。

SK299 (II - 58 図)

E～G・6～9グリッドに位置する大形不整形遺構である。東西最大長855cm、南北最大長280cm、確認面からの最大深度340cmを測る。主軸方向角はおおよそE-13°-Sを示し、SD535と近似する。坑底には複数の落ち込み及びテラスが存在するが、土層断面には遺構の重複を示す様相はない。また壁面、坑底共に工具痕が認められ、凹凸が著しい。その様相から本遺構は採土坑と考えられる。覆土はかなり緩やかな傾斜を呈しており、断面上では明確な埋め戻し方向は捉えられなかった。

本遺構からはコンテナ5箱の遺物が出土したが、その中でも貿易陶磁による茶道具の一括廃棄資料が特筆される(IV-99、100図、101図15～18)。いずれも著しく被熱している点で共通し、藩邸火災の被災資料と位置づけられる。本一群は1層とした焼土層から出土したが、1、2層の西端が垂直近く立ち上がっていることから、本遺構埋没後に火災瓦礫整理のために掘削された別遺構の可能性が極めて高い。被災遺物以外は3層以下の覆土中より広く出土しているが、量産品を含む17世紀中葉に比定される国産陶磁器が主体をなしている(IV-101図19～31、102～105図)。この年代的様相から、1層焼土層と被災資料は、藩邸全体が罹災した天和2(1682)年の火災に起因すると考えられる。

SK364 (II - 59 図)

K7グリッドに位置する遺構である。重複するSK365、SK422より新しい。平面形は直径約110cmを測る略円形を呈する。確認面からの深さは110cmを測る。坑底は直径約40cmを測り、坑底上約30cmで幅10～15cmを測るテラス状の平坦面が存在し確認面までほぼ垂直に立ち上がる。壁面、坑底共に工具痕が顕著に認められ、凹凸が著しい。遺構形態、規模から甕埋設遺構の可能性が考えられる。

遺物は17世紀代に比定される陶磁器類が数点出土したにすぎないが、掲載したかわらけは覆土中位より逆位の状態で重なり合って出土している。

SK365 (II - 59 図)

K7グリッドに位置する遺構である。重複するSK364より古く、SK366より新しい。平面形は長方形を呈し、東西185cm、南北135cm、確認面からの深さ140cmを測る。主軸方向角はE - 20° - Sを示し、H～Jライン間の遺構主軸よりさらに南方向へ傾いている。坑底は東西100cm、南北75cmを測る長方形を呈し、ほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、比較的丁寧に整形されているが、中位よりやや開き凹凸が著しくなる。

遺物は17世紀代の陶磁器類が数十点出土している。

SK428 (II - 60 図)

J8、J9、K8グリッドに位置する遺構である。主軸方向角はN - 17° - Eを示し、H～Jライン間の遺構主軸よりさらに東方へ傾いている。平面形は長方形を呈し、長軸450cm、短軸160cm、確認面からの深さ約40cmを測る。覆土はロームブロック、ローム粒を極多量含む褐色土を主体とし、短期間で埋め戻された様相を呈している。坑底には凹凸が認められるが、ほぼ平坦に整形されている。

遺物は出土していない。

SK368 (II - 61 図)

G・H9グリッドに位置する不整形遺構である。SK344と重複し、それより古い。平面形は不整隅丸長方形を呈し、南北680cm、東西180cmを測る。坑底には南北に三分割する土手状の立ち上がりが認められるが、覆土堆積状況より単一遺構と判断された。坑底、壁面ともに凹凸が著しく採土坑の最終形態と考えられる。2層には貝殻、炭化物、人工遺物が含まれ、埋没過程で日常廃棄場所として二次利用されたと考えられる。

遺物は17世紀中葉の陶磁器類、貝殻などがコンテナ

2箱出土した。

SK479 (II - 62 図)

I6・7グリッドに位置する遺構である。SK488と重複し、それより新しい。東西280cm、南北160cmを測る長方形土坑の東側に階段状の張出部が付随する。主軸方向角はE - 12° - Sを示し、SD535とほぼ等しい。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底には緩やかな凹凸が認められる。階段状張出部は南北150cm、東西80cmを測る。張出部との比高差約20cmを測るテラスが接続し、その東にさらに10cm上がり鉤形テラスが繋がる。

遺物は古墳時代前期土器が少量出土したにすぎず、性格、廃絶年代は不明。

SK488 (II - 62 図)

I・J6・7グリッドに位置する遺構である。SK479と重複し、それより古い。平面形は長方形を呈し、東西470cm、南北120cm、確認面からの深さ45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底はほぼ平坦に整形されている。坑底東寄りに不整形の落ち込みが2箇所認められる。いずれも坑底との比高差は約10cmと浅い。

遺物はなく、性格、廃絶年代ともに不明。

SK480 (II - 63 図)

J・K5グリッドに位置する遺構である。西側は調査区域外に及ぶため詳細は不明。調査区内で南北170cm、確認面からの深さ13cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。東壁方向角は東傾4°とほぼ方眼北に近い。

遺物は古墳時代土器が少量出土しているのみである。

SK481 (II - 64 図)

I6グリッドに位置する遺構である。平面形は直径45～50cmを測る不整形円形を呈し、確認面からの深さは5cmと浅い。

坑底からやや浮き正位状態のかわらけが2点出土したが、性格は不明である。かわらけ以外に出土遺物はない。

SK486 (II - 65 図)

I8グリッドに位置する遺構である。重複するSK485より古い。平面形は不整形長方形を呈し、東西184cm、南北80cm、確認面からの深さ45cmを測る。主軸方向角はE - 6° - Sを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり上方でやや開く。坑底は平坦である。

遺物は17世紀代に比定される陶磁器が1点出土した

のみである。

SK487 (II - 65 図)

I7・8グリッドに位置する遺構である。重複するSK485より古い。平面形は不整長方形を呈し、東西228cm、南北最大95cm、確認面からの深さ26cmを測る。坑底はほぼ平坦で標高はSK486とほぼ等しい。主軸方向角はE - 11° - Sを示し、SK486よりやや南傾する。

遺物は17世紀代に比定される陶磁器が1点出土したのみである

SK489 (II - 66 図)

H・I5グリッドに位置する遺構である。重複するSK538より新しい。平面形は略長方形を呈し、南北430cm、東西最大160cm、確認面からの深さ64cmを測る。主軸方向角はほぼ方眼北と等しい。壁はほぼ直立し比較的丁寧な整形が施されているが、坑底には凹凸が認められ、やや粗い整形である。坑底直上には厚さ約10cmを測るロームブロック主体土がほぼ水平堆積しており、貼床の可能性もある。

遺物は出土していない。

SK552 (II - 67 図)

H・I6・7グリッドに位置する遺構である。重複するSK553より新しい。南北350cm、東西200cm、確認面からの深さ40～50cmを測る長方形掘り込みの東側に幅60cm、坑底との比高差約15cmのテラス状張出部が接続するが、別遺構の可能性もある。主軸方向角は東傾9°を示す。壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が著しい。坑底直上にはほぼ水平堆積を呈すロームブロック主体土が認められ、貼床の可能性もある。

遺物は17世紀代に比定される陶磁器が1点出土したのみである。

SK553 (II - 67 図)

I6・7グリッドに位置する遺構である。重複するSK552より古い。平面形は長方形を呈し、東西370cm、南北105cm、確認面からの深さ30～40cmを測る。主軸方向角はE - 13° - Sを示し、SD535とほぼ平行である。坑底には工具痕による凹凸が顕著に認められる。

遺物は出土していない。

SU276 (II - 68 図)

E・F9グリッドに位置する遺構で、調査区北東角で検出された。調査区内では西壁、南壁の一部が確認され

たのみで形態、規模は不明である。西壁で確認面下約1mよりオーバーハングが確認されたことから、横坑(室部)を伴う地下室と考えられる。1層上には版築盛土層が認められ、C面への嵩上げ時に補強されたことが窺われる。

遺物は出土していない。



6

7

8

9

F

G

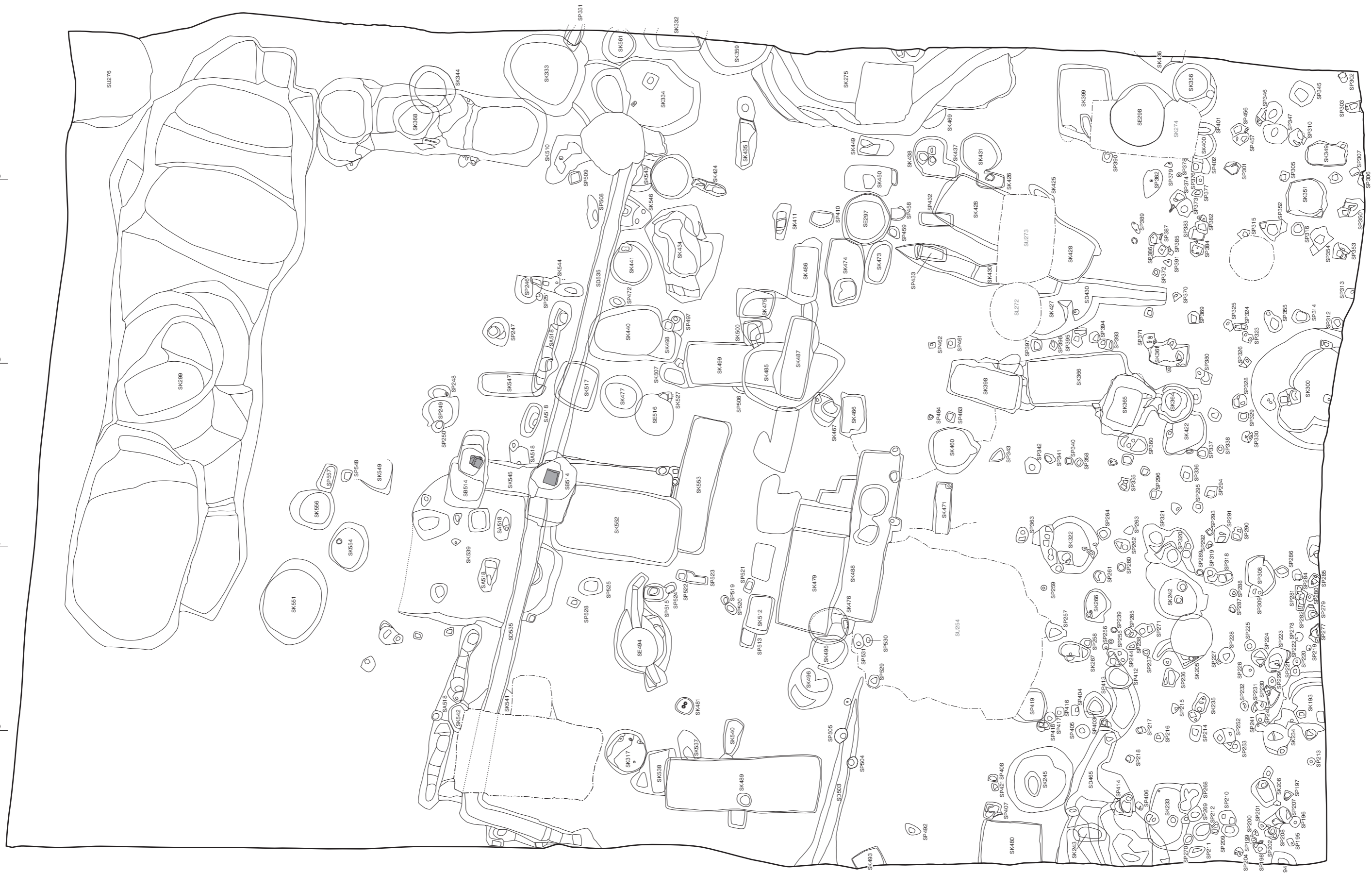
H

I

J

K

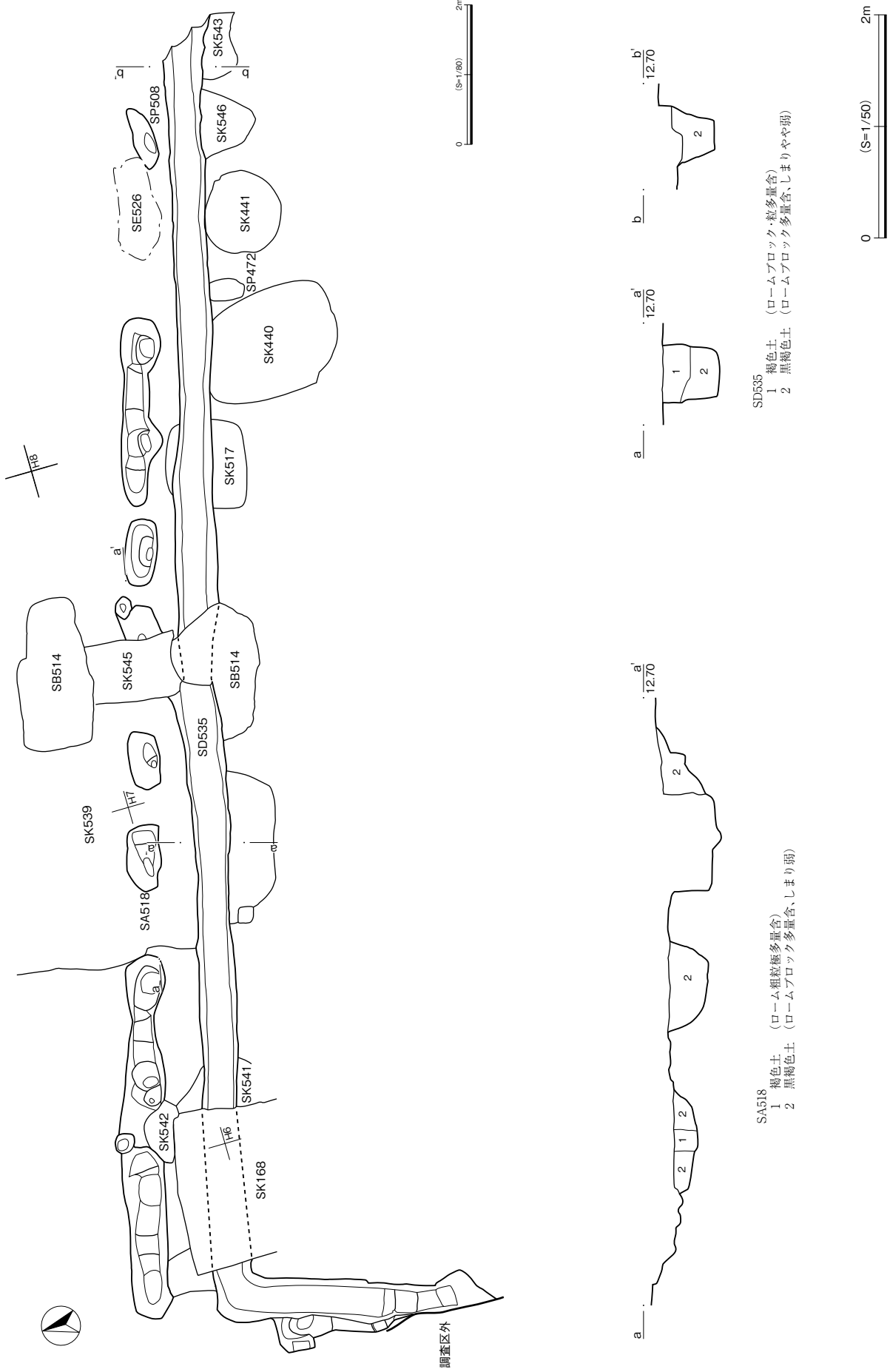
L



II-46图 D面建筑配置图

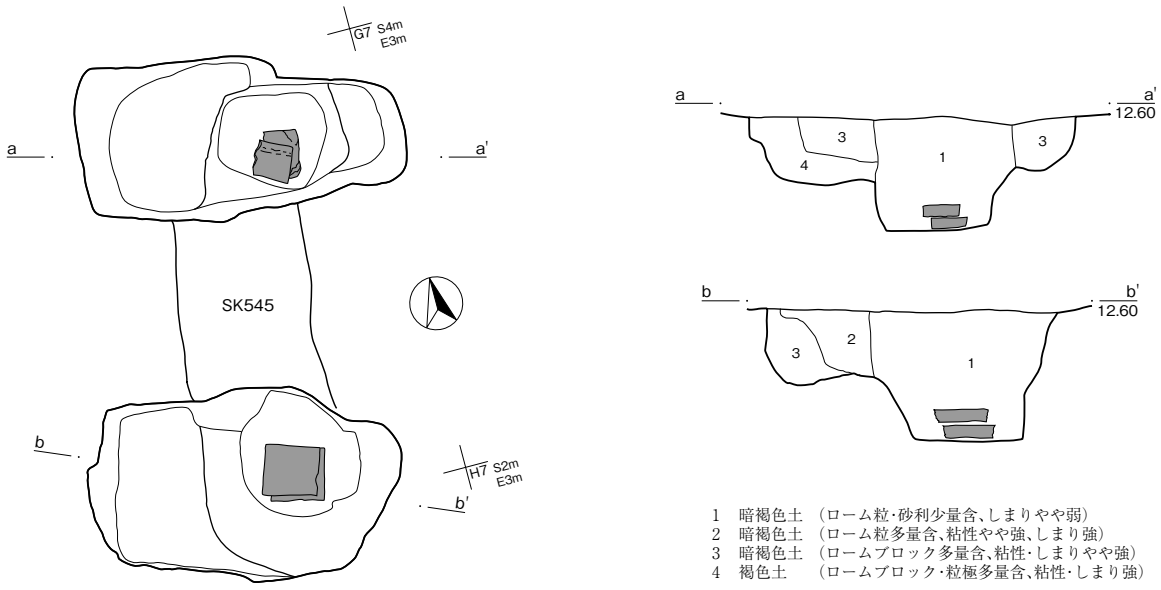




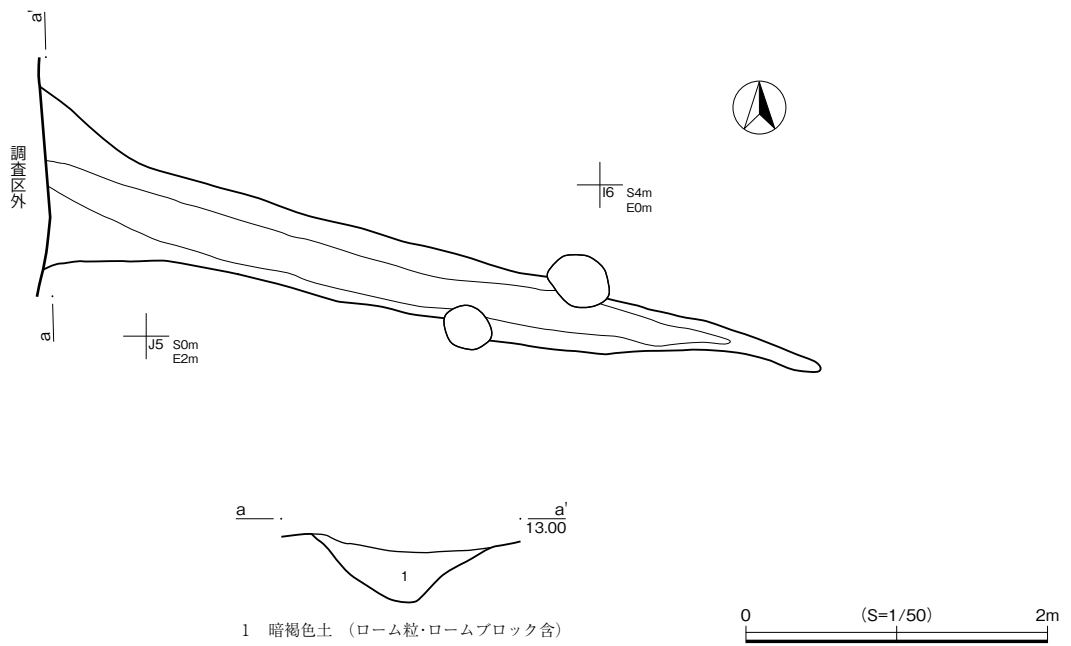


II-47 図 SA518、SD535、SP508

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査

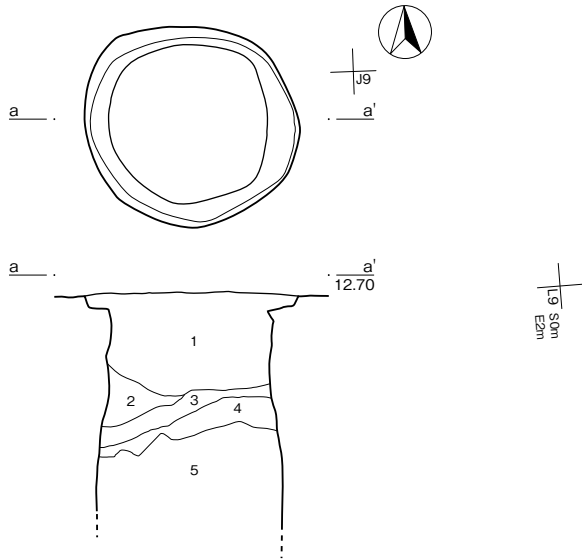


II-48 図 SB514



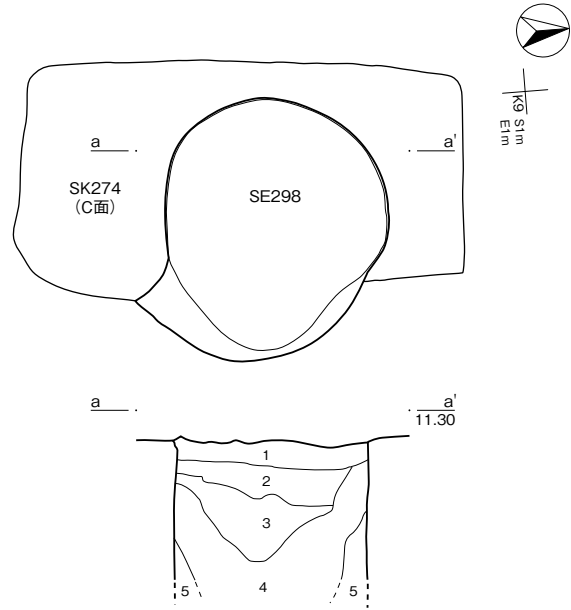
II-49 図 SD503





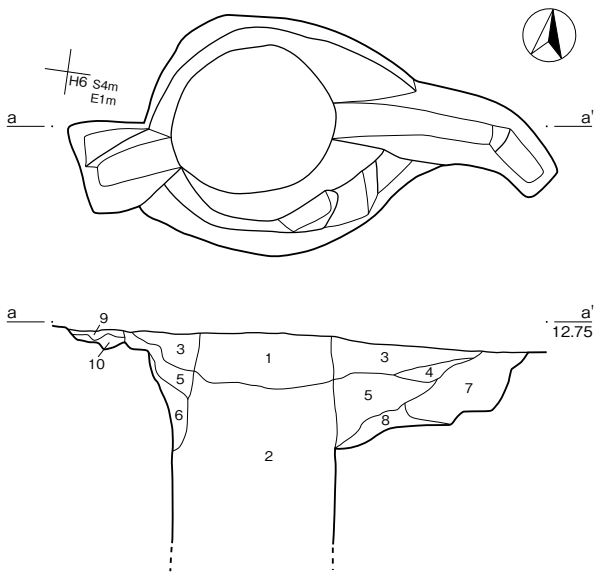
- 1 暗褐色土 (砂質粒多量、ローム粒少量含)
- 2 暗褐色土 (しまりやや弱)
- 3 褐色土 (ローム粒極多量含、しまりやや弱)
- 4 暗灰褐色土 (粘性やや強)
- 5 褐色土 (ローム粒含)

II-50 図 SE297



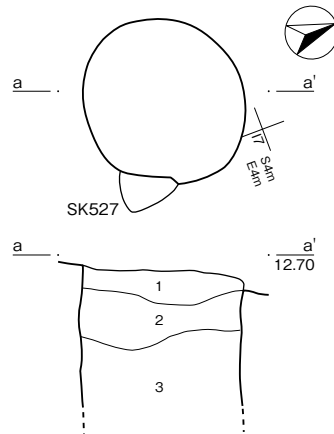
- 1 暗褐色土 (ローム粒含)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック極多量含、粘性やや強、しまりやや弱)
- 3 暗褐色土 (ローム粒含、しまり弱)
- 4 暗褐色土 (ローム粒少量含、粘性やや強、しまりやや弱)
- 5 黒褐色土 (ローム粒少量含、粘性・しまりやや強)

II-51 図 SE298



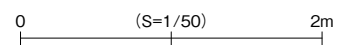
- 1 暗褐色土 (ローム粒・砂粒少量含)
- 2 黒褐色土 (しまり弱)
- 3 黒褐色土 (しまりやや弱)
- 4 暗褐色土 (焼土粒多量含)
- 5 黒褐色土 (ローム粒多量含、しまりやや弱)
- 6 黒褐色土 (しまり弱)
- 7 暗褐色土 (ローム粒含、しまりやや弱)
- 8 暗黄褐色土 (ロームの埋土)
- 9 暗褐色土
- 10 暗黄褐色土 (しまりやや強)

II-52 図 SE494

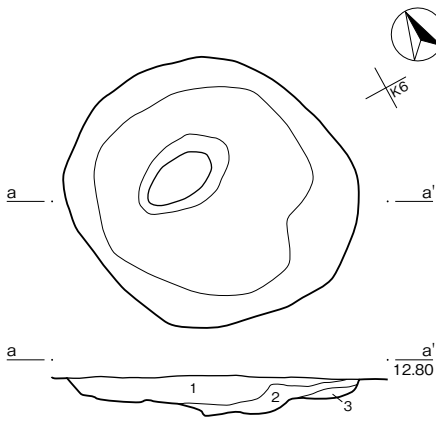


- 1 暗褐色土 (ローム粒少量含、粘性・しまり強)
- 2 暗褐色土 (1層より暗い、ローム粒微量含、しまりやや弱)
- 3 黒褐色土 (ロームブロック多量、砂粒少量含、しまり弱)

II-53 図 SE516

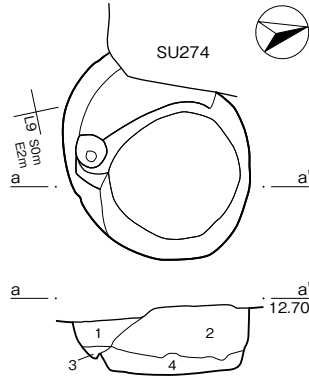


II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



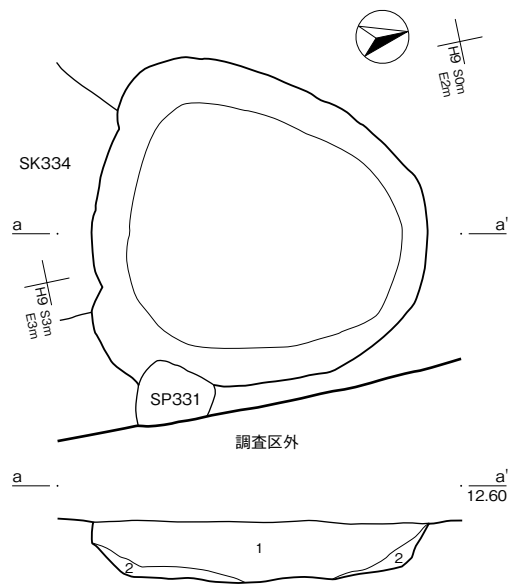
- 1 暗褐色土 (ローム粒含)
- 2 黒褐色土 (ロームブロック・粒多量含、粘性やや強)
- 3 暗褐色土 (ローム粒微量含、粘性強)

II-54 図 SK245



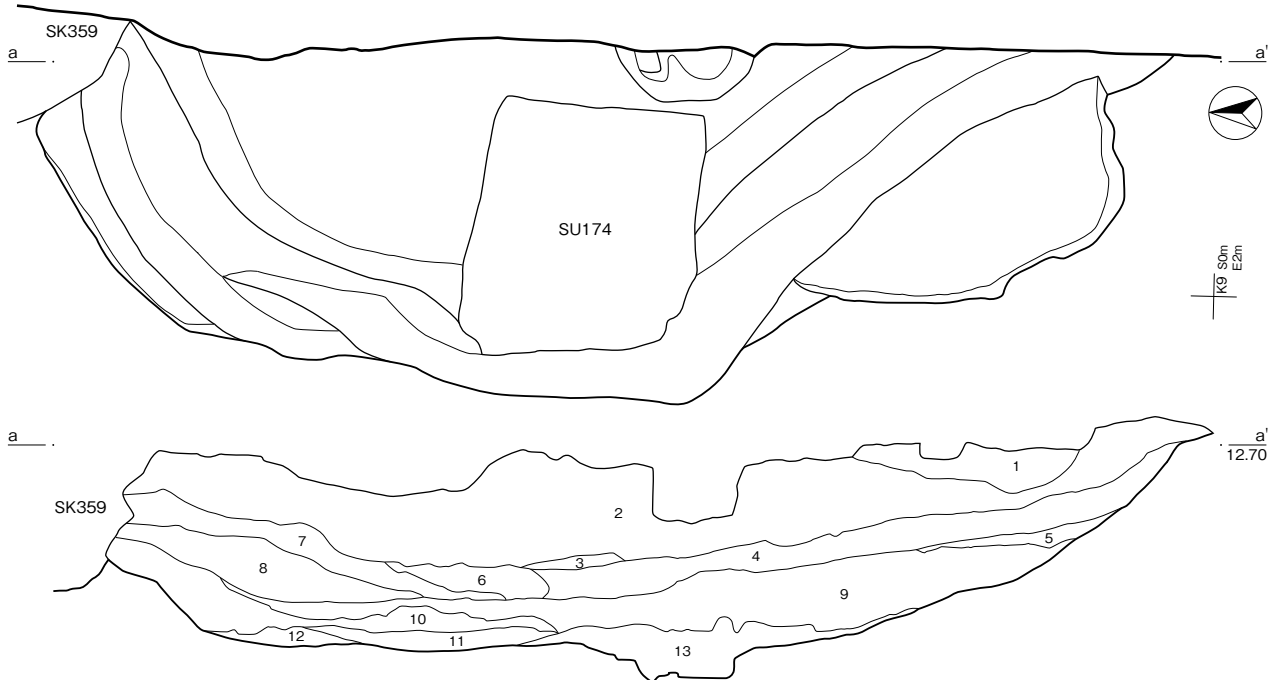
- 1 暗褐色土 (ローム粒・炭化物少量含)
- 2 貝層
- 3 暗黄褐色土 (ロームブロック主体、粘性強、しまりやや強)
- 4 黒褐色土 (ロームブロック少量含、粘性やや強)

II-56 図 SK356



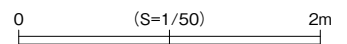
- 1 褐色土 (炭化物多量含、砂利・ローム粒少量含、粘性やや強)
- 2 褐色土 (ローム粒多量含、しまりやや強)

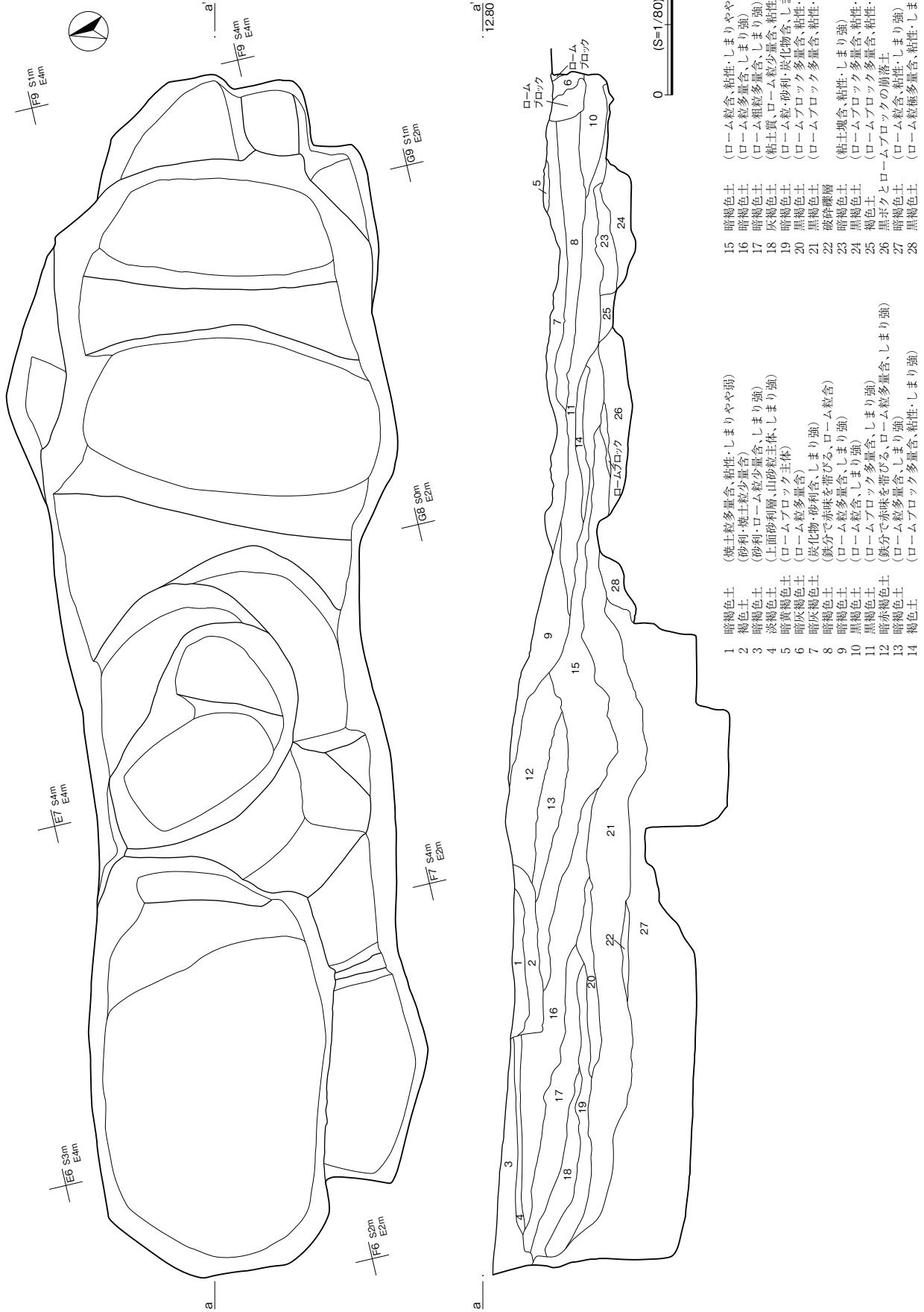
II-55 図 SK333



- |                               |                              |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1 褐色土 (粘土質、ローム粒少量含、粘性強)       | 8 黒褐色土 (ローム粒少量含、粘性・しまりやや強)   |
| 2 褐色土 (ロームブロック極多量含、粘性・しまり強)   | 9 黒褐色土 (ローム粒微量含、粘性強、しまりやや強)  |
| 3 暗灰褐色土 (粘性強)                 | 10 黒褐色土 (ローム粒多量含、粘性・しまり強)    |
| 4 暗褐色土 (ローム粒含、粘性・しまりやや強)      | 11 黒褐色土 (粘性・しまり強)            |
| 5 黒褐色土 (ローム粒極多量含)             | 12 暗黄褐色土 (ロームブロック主体、粘性・しまり強) |
| 6 暗黄褐色土 (ロームブロック主体、粘性・しまり強)   | 13 暗黄褐色土 (粘土質のローム、粘性・しまり強)   |
| 7 黒褐色土 (ロームブロック多量含、粘性・しまりやや強) |                              |

II-57 図 SK275

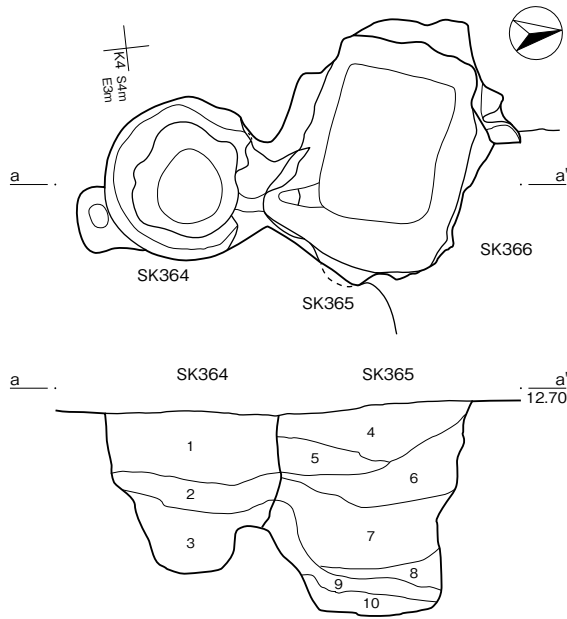




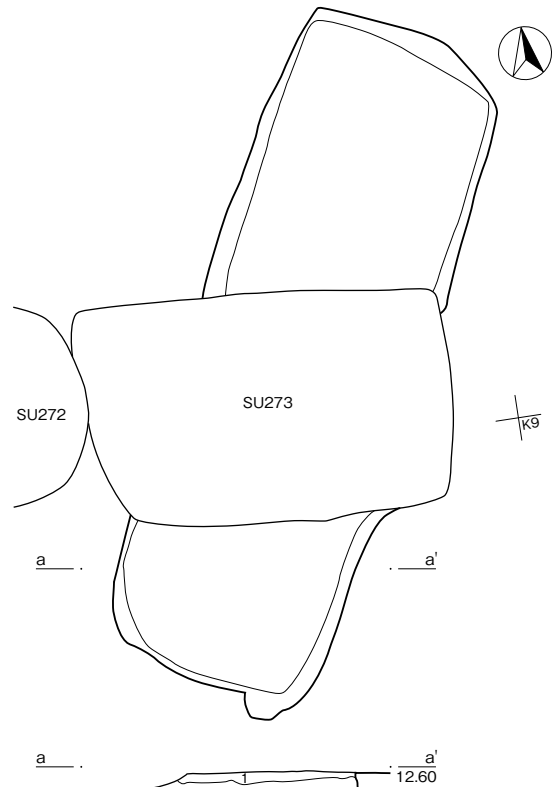
- |    |         |                          |
|----|---------|--------------------------|
| 1  | 暗褐色土    | (焼土粒多量含、粘性・しまりやや弱)       |
| 2  | 褐色土     | (砂利・焼土粒少量含)              |
| 3  | 暗褐色土    | (砂利・ローム粒少量含、しまり強)        |
| 4  | 淡褐色土    | (上面砂利層、山砂粒主体、しまり強)       |
| 5  | 暗茶褐色土   | (ロームブロック主体)              |
| 6  | 暗灰褐色土   | (ローム粒多量含)                |
| 7  | 暗灰褐色土   | (炭化物・砂利含、しまり強)           |
| 8  | 暗褐色土    | (鉄分で赤味を帯びる、ローム粒含)        |
| 9  | 暗褐色土    | (ローム粒多量含、しまり強)           |
| 10 | 暗褐色土    | (ローム粒含、しまり強)             |
| 11 | 黒褐色土    | (ロームブロック多量含、しまり強)        |
| 12 | 暗赤褐色土   | (鉄分で赤味を帯びる、ローム粒多量含、しまり強) |
| 13 | 暗褐色土    | (ローム粒多量含、しまり強)           |
| 14 | 褐色土     | (ロームブロック多量含、粘性・しまり強)     |
| 15 | 暗褐色土    | (ローム粒含、粘性・しまりやや強)        |
| 16 | 暗褐色土    | (ローム粒多量含、しまり強)           |
| 17 | 暗褐色土    | (ローム粒多量含、しまり強)           |
| 18 | 灰褐色土    | (粘土質、ローム粒少量含、粘性・しまり強)    |
| 19 | 暗褐色土    | (ローム粒・砂利・炭化物含、しまりやや強)    |
| 20 | 黒褐色土    | (ロームブロック多量含、粘性・しまり強)     |
| 21 | 黒褐色土    | (ロームブロック多量含、粘性・しまり強)     |
| 22 | 破砕礫層    |                          |
| 23 | 暗褐色土    | (粘土塊含、粘性・しまり強)           |
| 24 | 黒褐色土    | (ロームブロック多量含、粘性・しまり強)     |
| 25 | 褐色土     | (ロームブロック多量含、粘性・しまり強)     |
| 26 | 黒ボクとローム | (ロームブロックの崩落土)            |
| 27 | 暗褐色土    | (ローム粒含、粘性・しまり強)          |
| 28 | 黒褐色土    | (ローム粒多量含、粘性・しまり強)        |

II-58 図 SK299

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



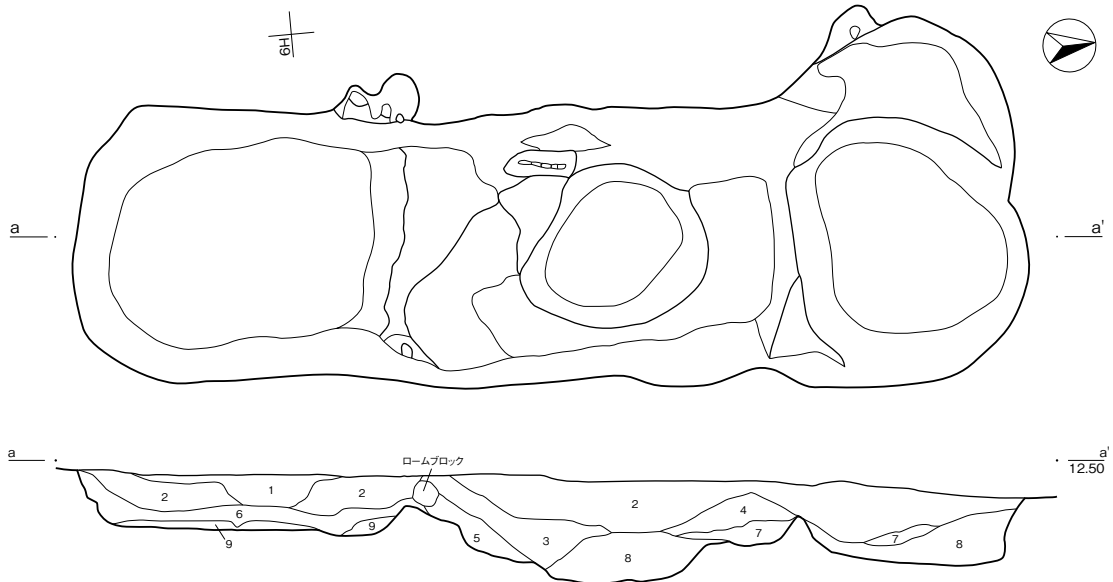
- SK364
- 1 褐色土 (ローム粒多量含、しまりやや弱)
  - 2 暗褐色土 (炭化物・灰色粘土含、粘性強、しまりやや弱)
  - 3 暗褐色土 (ローム粒多量含、しまりやや弱)
- SK365
- 4 褐色土 (ローム粒多量含、しまりややあり)
  - 5 褐色土 (ローム粒・灰色粘土粒含、しまりやや強)
  - 6 褐色土 (ローム粒含)
  - 7 暗褐色土 (ロームブロック含、粘性強、しまりやや弱)
  - 8 黒褐色土 (粘性やや強、しまりやや弱)
  - 9 暗褐色土 (ロームブロック主体、粘性強、しまりやや弱)
  - 10 暗黄褐色土 (ロームブロック多量含、粘性強、しまりやや弱)



- 1 黒褐色土
- 2 褐色土 (ロームブロック・粒極多量含、粘性やや強)

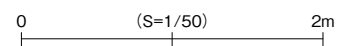
II-59 図 SK364、SK365

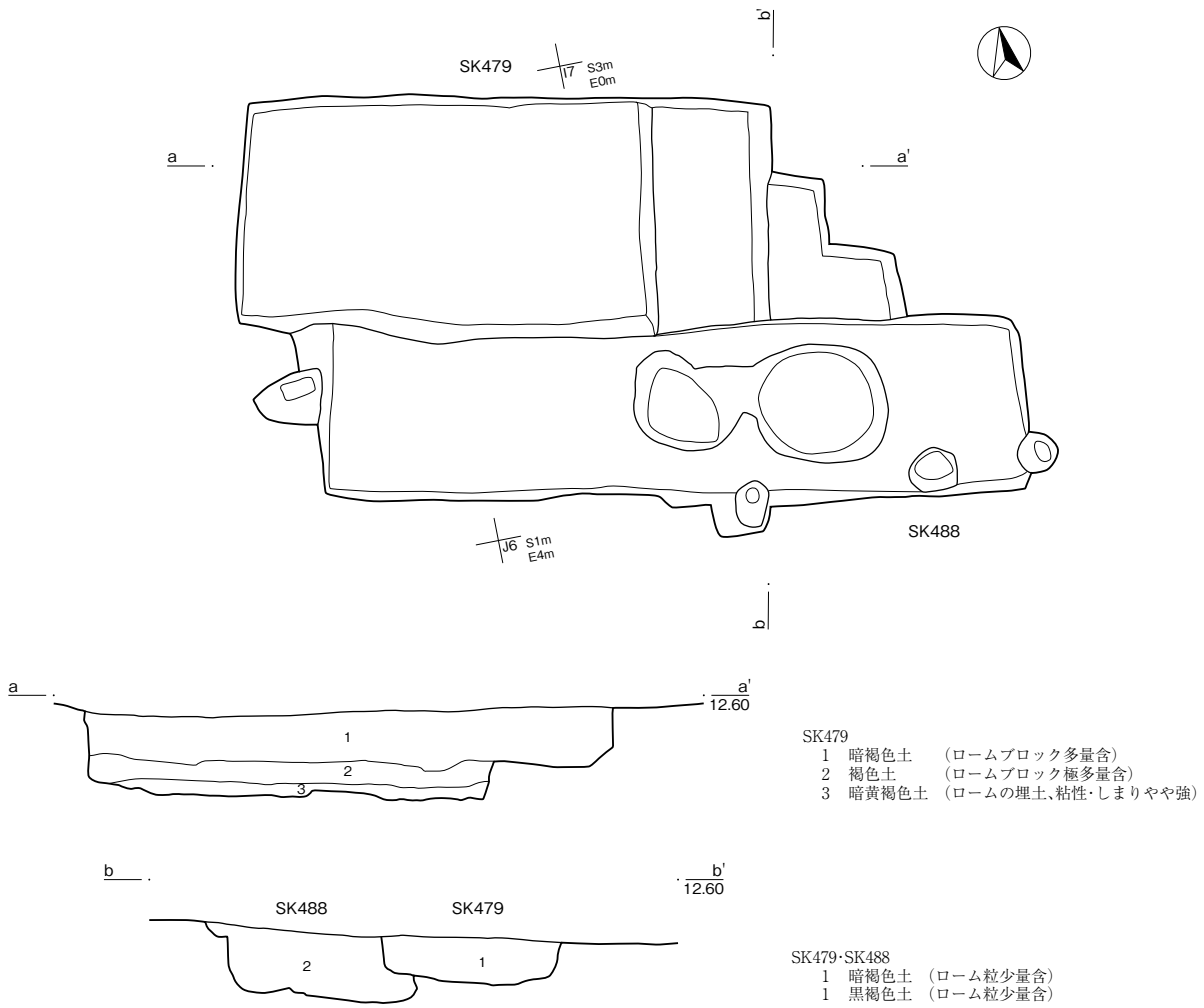
II-60 図 SK428



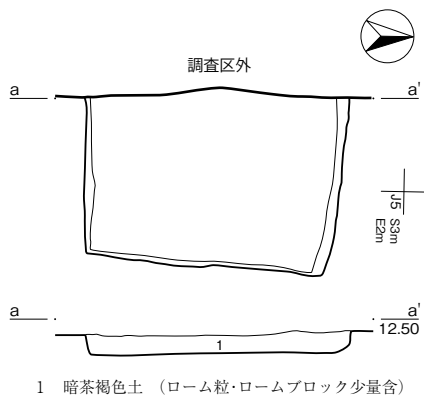
- 1 褐色土 (ローム粒多量含、粘性やや強、しまり強)
- 2 暗褐色土 (貝、炭化物、ローム粒多量含、粘性・しまりやや強)
- 3 暗褐色土 (砂利、ローム粒少量含)
- 4 暗褐色土 (ローム粒、炭化物少量含)
- 5 褐色土 (ローム粒含、粘性やや強)
- 6 暗褐色土 (炭化物、ローム粒少量含、粘性・しまりやや強)
- 7 暗褐色土 (ローム粒多量含)
- 8 褐色土 (ローム粒微量含、粘性やや強)
- 9 暗黄褐色土 (ローム粒主体、粘性・しまりやや強)

II-61 図 SK368

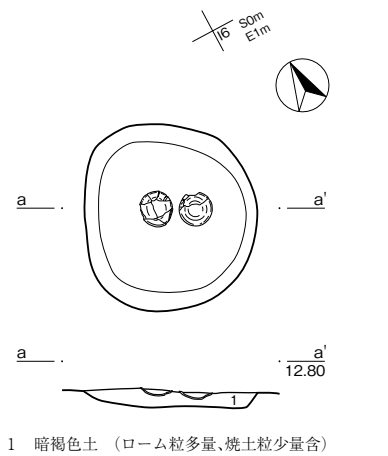
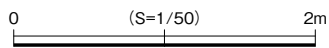




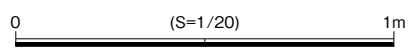
II-62 図 SK479、SK488



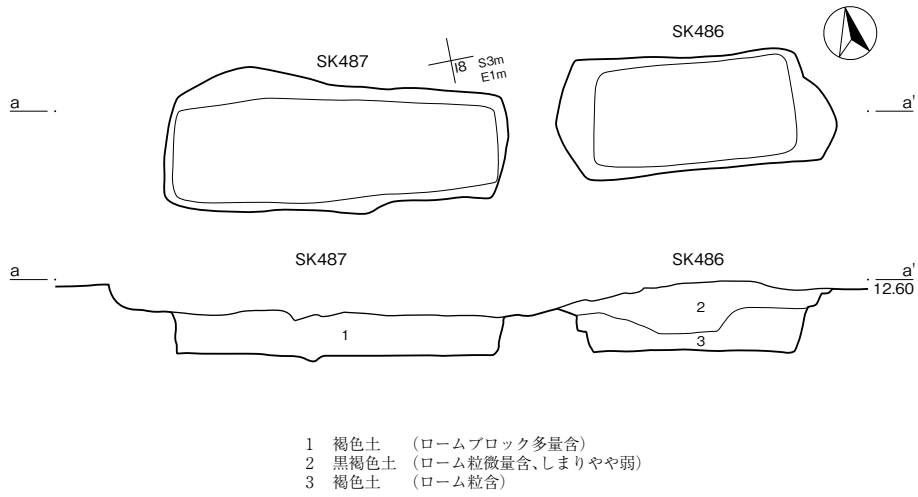
II-63 図 SK480



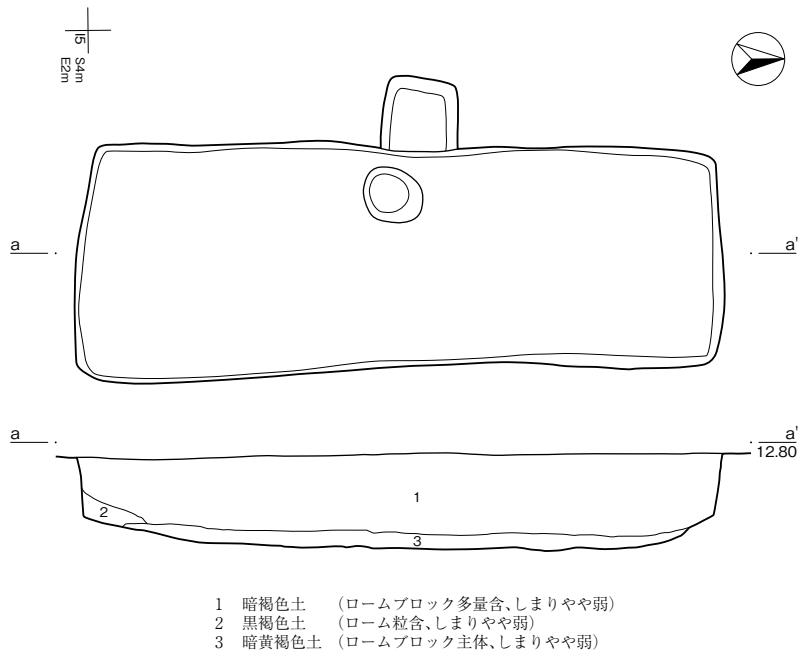
II-64 図 SK481



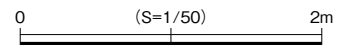
II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査

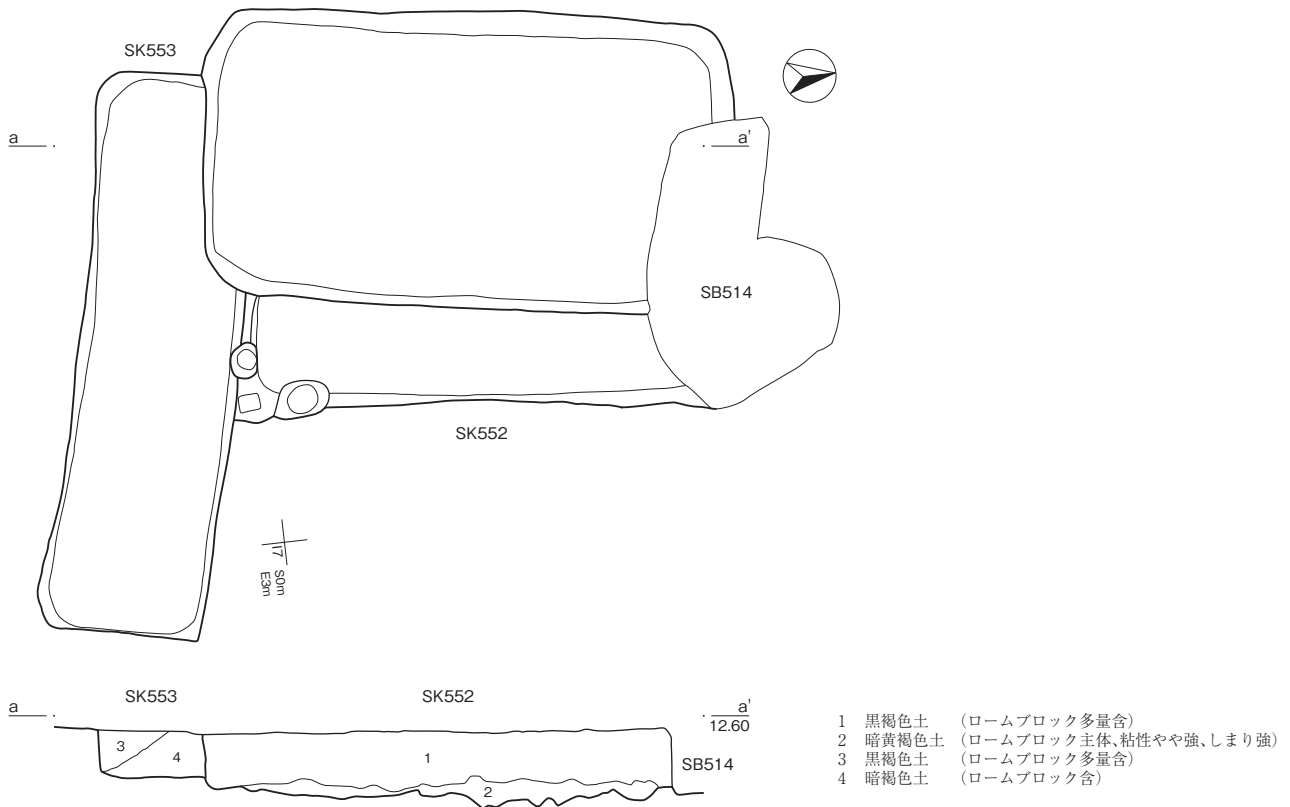


II-65 図 SK486、SK487

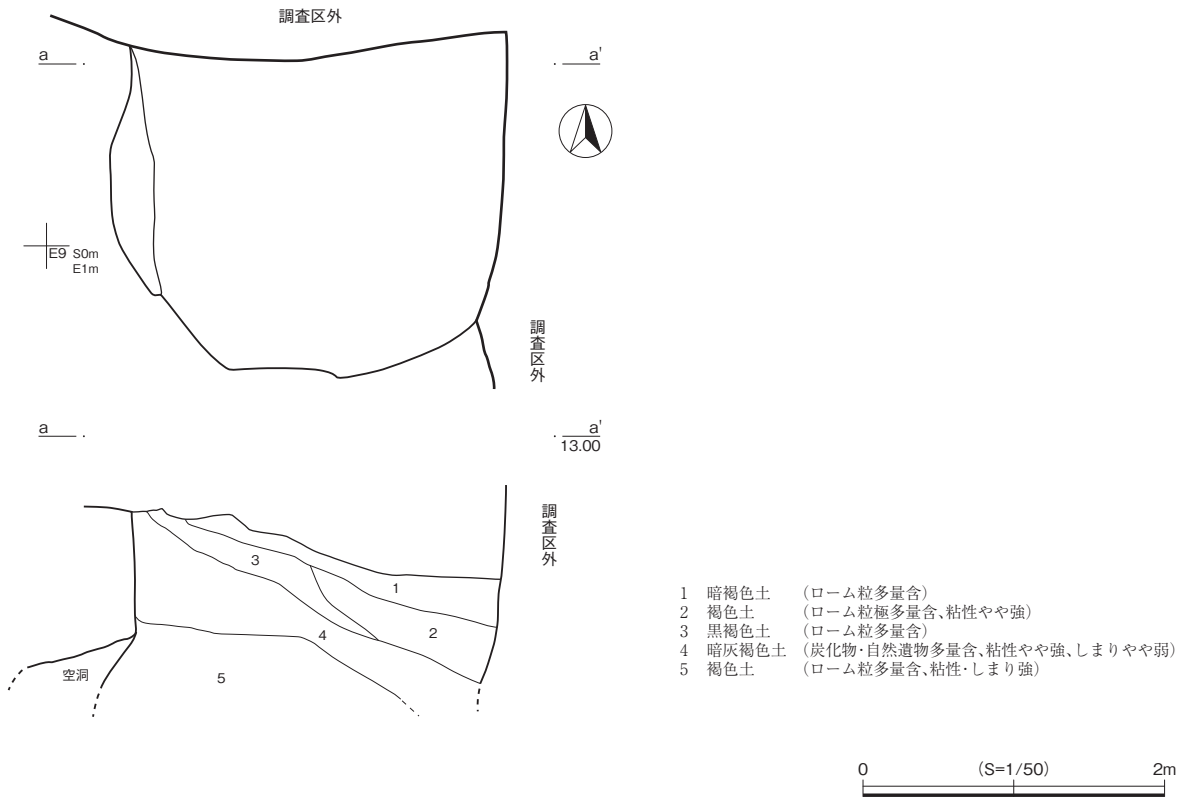


II-66 図 SK489





II-67 図 SK552、SK553



II-68 図 SU276

## 第IV章 江戸時代以降の遺物

### SK3 (II - 69 図)

1、2は瀬戸・美濃産磁器碗である。1は手描きと吹き絵によって文様が描かれている。2は銅版転写を施した後で文字丸囲い周囲をダミで埋めている。3、4は小坏である。3は瀬戸・美濃産染付碗で、吹き絵で帯文を形成している。帯文内には毛彫りと墨弾きによる文様を交互に施している。4はやや焼成が甘く色調は淡褐色を呈し、全面に細かい貫入が入っている。体部に花文が上絵付けされているが、絵の具はほとんど剥落し詳細は不明である。5は肥前産の染付変形皿である。文様は全て手描きである。6～9は瀬戸・美濃産磁器鉢である。6、7は上絵付けによって文様が描かれ、6は赤、緑、金を用いられている。7の口縁部は一段稜を有して拡がっていることから蓋付き鉢と考えられる。文様は赤、青、緑、金で描かれている。8、9は同一器形、法量で見込み文様も同じである。8の外文様は見込みと同一意匠が描かれているが、9は全面に緑色の吹き絵が施されている。10は白磁瓶である。高台内に「山田屋製」銘が染付されている。被熱している。11は土瓶の身、12はその蓋である。胎土は灰白色を呈し、緑、青による釉下彩が施されている。身には7箇所茶漉し孔が施されている。13、14は土瓶もしくは急須の蓋である。13の胎土は灰白色を呈し、身との接地面にはアルミナが施されている。14の胎土は淡褐色を呈し、緑、青による釉下彩が施されている。

### SB11 (II - 69 図)

1は鉢形塩壺の蓋である。胎土に金雲母を含む。断面形は円盤状を呈し、裏面には指頭圧痕が認められる。外面周囲に一重沈線が巡る。刻印銘は一重角枠内に「浪花桃州」

### SK13 (II - 70 図)

1は常滑産大甕でTG-15である。口唇部上面は斑状に白濁している。胴下半部には環状溶着痕と陶片溶着痕が認められ、重ね焼きによって焼成されたことが窺われる。内面には指頭圧痕が認められる。また外面には鉄泥が施されている。2は棧瓦である。胎土には金雲母が微量含まれる。

### SK18 (II - 70 図)

1、2は肥前磁器である。1は染付碗でJB-1-uである。

コンニャク印判とダミ線で文様が描かれている。2は染付猪口でJB-7-bである。体部にはコンニャク印判による文様が、内口縁にはダミ線による帯文が施されている。3、4は陶器である。3は刷毛目碗でTB-1-gである。外面には波状刷毛目、内面には打刷毛目が施されている。4は油受け皿でTF-40である。内面から外面上半にかけて鉄泥が施されている。凸レンズ状のスリットが3箇所施されている。5はかわらけでDZ-2-bである。

### SP32 (II - 70 図)

1は真鍮製の鉢である。被熱している。

### SK37 (II - 70 ~ 73 図)

1～10は磁器である。1は肥前産染付碗でJB-1-fである。2は瀬戸・美濃産染付碗でJC-1-dである。外面文様は、毛彫りで輪郭を施しダミをかけている。3、4は瀬戸・美濃産色絵小坏でJC-6-dである。3は内面に黒、赤、白?絵の具を用いて上絵付けが施され、さらに見込み周囲には鉛ガラスを団子状に貼り付け茶色で彩色された岩?が残存部で2箇所認められる。高台内には「今戸玉庄」の銘が認められる。「今戸玉庄」は今戸橋脇にある料亭で『江戸買物独案内』では「隅田川 今戸橋角 蜆汁 即席 御料理 玉屋庄八」と紹介されている。後の有明楼である。4は内面全面に赤、黒、黄、金を用いて美人画が描かれている。5は肥前産筒形白磁合子でJB-18-bである。底部無釉。6、7は瀬戸・美濃産染付植木鉢でJC-21である。6の三脚は高台を削り出した上でドーム形の切り欠きを施し作出している。7は貼付三脚で底部無釉。三脚間に3箇所耐火砂の付着が認められる。底部から胴部下半部破片上端の割れ口が鱗状に細かいのに対し、胴部側は比較的大きな破片で接合面の接点が非常に少ない。その状況から本製品が破損した後に底部片のみ割れ口を再加工した可能性がある。8は肥前産染付植木鉢でJB-21である。内底部の釉は拭き取られ、重ね焼きのためのアルミナが蛇ノ目状に施されている。9、10は肥前産の蓋である。9は蓋物の蓋、10は合子の蓋である。

11～22は陶器である。11は肥前産京焼風陶器平碗でTB-1-cである。見込み無文。12は瀬戸・美濃産の片口鉢で、TC-23-cである。見込みに3箇所のピン痕が認められる。底部には「御○○」の墨書がある。13は瀬戸・美濃産片口鉢でTC-23-cである。見込みに重ね焼きのた



め団子状釉剥ぎが5箇所認められる。底部には墨書がある。14は瀬戸・美濃産半胴甕でTC-15-aである。内底部には5箇所の目跡が認められる。底部中央には外側からの打撃による円形状穿孔があり、植木鉢として利用されていたことが判る。また胴中位に外側からの打撃による凸レンズ状の穿孔が認められるが用途は不明。15は瀬戸・美濃産瓶掛けでTC-31-aである。胴下半には沈線が上半には印花文が巡り、口縁部以外に鉄釉を施し、口縁から胴上半にかけてうのふ釉を掛けている。見込みには6箇所の目跡が認められる。底部にはドーム状の脚が貼り付けられ、その内側に直径数mmの孔が穿たれている。16は手付鍋でTZ-33-aである。見込みには5箇所の目跡が認められる。底部にはススが付着している。17、18は瀬戸・美濃産灰釉植木鉢でTC-21である。17の高台には水抜き用の切り欠きが1箇所認められる。18の底部には直径33mmの環状溶着痕が認められ、そのサイズから徳利上で焼成された可能性がある。19は常滑産大甕でTG-15である。胴下半部には環状溶着痕と凹みが認められる。内面にはほぼ全面に指頭圧痕が認められ、内底部周辺は斑状に白濁している。口唇部には円形溶着痕が巡っている。20は軟質施釉陶の蒸し器でTZ-53である。底部には12箇所の穿孔が認められる。21は鉄釉土瓶でTZ-34-eである。胎土は淡褐色を呈し、緻密である。体上半部に沈線とトビカンナによる文様が巡っている。茶漉し孔は3箇所施されている。22は青土瓶の蓋である。

23～27は土器である。23、24は土師質植木鉢でDZ-21-aである。ともに左回転のろくろ水引き成形で、底部には糸切り痕が認められる。25、26はろくろ成形の塩壺でDZ-51-wである。26の底部には左回転の糸切り痕が認められる。27は庭園・背景のパーツで、3011である。岩礁に亀が登っている様子が造形されている。

28はキセルの吸口である。ラウ接続部に2条の沈線が施されている。ラウの木質が遺存して出土した。

#### SK41 (II - 73 図)

1は瀬戸・美濃産鉄釉小壺でTC-15である。底部を除き、茶褐色の鉄釉が施されている。2は瓦質植木鉢でDZ-21-bである。底部に左回転の糸切り痕が認められる。3は土師質植木鉢でDZ-21-aである。底部に左回転の糸切り痕が認められる。

#### SK50 (II - 73 図)

1、2はかわらけでDZ-2-bである。底部には左回転の糸切り痕が認められる。坑底直上から合わせ口状態で出

土していることから、胞衣皿として使用されたと推定される。

#### SK55 (II - 73 図)

1は瀬戸・美濃産染付土瓶である。茶漉し孔は6箇所穿たれている。

#### SK57 (II - 73 図)

1、2は軒棧瓦である。1の瓦当文様は軒丸部が三巴文B、軒平部が江戸式I Ljに分類される。2の瓦当文様は、軒丸部が連珠三つ巴文C、軒平部が江戸式Ⅲ Ljに分類される。

#### SE76 (II - 74 図)

1は肥前産蛇ノ目凹形高台を有する染付鉢でJB-5-dである。高台内に「富貴長春」銘が描かれている。2はTZ-21で、内口縁から胴下半にかけて瑠璃釉が施されている。底部には水切りの切り欠きが3箇所認められる。底部には墨書が認められる。3は瀬戸・美濃産植木鉢で、TC-21である。内口縁から胴下半にかけて鉄釉が施され、内体部は拭き取られている。4は丸瓦である。内面に布目圧痕が認められる。色調は被熱の影響で橙褐色を呈している。5は頭巻釘である。長さは1寸。6は蝶番である。四隅に孔があり、1箇所直径1mm、長さ5mmの鉸が残存している。

#### SK84 (II - 74 図)

1、2は肥前産染付半球碗でJB-1-fである。3、4は上製かわらけでDZ-2-dである。胎土に金雲母が微量に含まれる。5は鉄釘である。錆の進行が著しく詳細は不明であるが、部分的に木質が付着している。

#### SK108 (II - 75 図)

1は瀬戸・美濃産甕でTC-15-cである。内底部には不整楕円形の目跡が5箇所認められる。また底部中央には外面からの打撃によって直径2cmの孔が穿たれ、植木鉢として使用されていたことが窺われる。

#### SP109 (II - 75 図)

1は肥前産染付皿でJB-2-qである。体部は型打ち成形によって輪花を形成し、口唇部には口銹が施されている。

#### SK114 (II - 75 図)

1はキセルの吸口である。

SP130 (II - 75 図)

1 は飾り金具である。鉋打ち用の孔が4箇所認められる。松竹梅文様が彫金されている。

SK141 (II - 75 図)

1 は刀子と考えられる鉄製品である。刃渡りは約24cmを測る。

SK164 (II - 75 図)

1～4 は鉄釘である。錆の浸食が著しく詳細は不明である。

SE165 (II - 76 図)

1、2 は丸瓦である。ともに表面に顕著なヘラ磨き痕、内面に布目圧痕が認められる。玉縁長は1が12mm、2が18mmと短い。3 は棧瓦である。前端部表面側の面取りされている。

SK166 (II - 77 図)

1 は瀬戸・美濃産柿釉甕でTC-15-bである。肩部から鉄釉が流し掛けされている。内底部には6箇所の目跡が認められる。

SK167 (II - 77 図)

1 は肥前産染付碗でJB-1-gである。外面にはコンニャク印判を用いた丸文が並んでいる。底裏銘は「大明年製」。2、3 はかわらけでDZ-2-bである。表面色調はいずれも内面は橙褐色であるが、外面は暗茶褐色を呈している。

SK168 + C 面焼土 (II - 78 ~ 89 図)

本資料は6ライン以西のC面直上からSK168内にかけて出土した焼土一括廃棄資料である。SK168は地下室と考えられるが、形状から製作途中で火災に見舞われ焼土処理が行われたと考えられる。火災は陶磁器の年代観から元禄16(1703)年に比定され、C面の下限を知る有用な一括資料と位置づけられる。また本資料には大皿・大平鉢(16、17)や高品質色絵製品(7)、南川原山様式製品(2)、特殊形態の京焼(50、51)などを含むあり方から藩邸御殿空間で使用された資料と評価される。

1～39 は肥前磁器である。1 は染付碗でJB-1-cである。見込みには二重圏線内に五弁花文が染付され、高台内には「宣明年製」銘が書かれている。2 は染付皿でJB-2-dである。底部中央付近にハリ支え痕が1箇所認められる。裏文様は縁取りを有す如意頭唐草文が描かれ、

底裏銘は二重角枠内に福の異形字が書かれている。本銘は南川原窯ノ辻窯出土資料に認められる。被熱している。3 は白磁皿でJB-2-dである。高台内にハリ支え痕が数箇所認められる。口唇部には口錆が施されている。被熱している。口縁部残存率から最少個体数3個体は存在する。4 は染付皿でJB-2-eである。底部中央にハリ支え痕が1箇所認められる。口唇部には口錆が施されている。底裏銘は「大明年製」。被熱している。5 は色絵輪花皿でJB-2-eである。見込みには、緑、青、赤、黒絵の具で竹、花などが描かれている。被熱している。6 は色絵変形皿でJB-2-eである。見込みには黒、黄、緑絵の具で菊花などが描かれている。被熱している。7 は色絵皿でJB-2-cである。口縁部は輪花を形成し、口唇部には口錆が施されている。見込み文様は梅と唐草文が赤、黒、緑などで描き分けられている。裏文様には蔓文が描かれているが、高台内から外側面へと連続的に蔓が描かれている。被熱している。破片数から複数個体分の資料と考えられる。8～12 は染付四寸皿である。8 はJB-2-eである。見込みには一枚絵、裏文様は線書きの如意頭唐草文、高台内には「大明年製」銘が描かれている。9～12 はJB-2-gである。裏文様には圏線唐草文が描かれている。見込み文様は周囲を圏線で区画し、中央にコンニャク印判五弁花文が施されている。いずれも被熱している。13 は染付小皿でJB-2-eである。被熱している。14 は色絵皿でJB-2である。見込み中央は蛇ノ目釉剥ぎされ、緑、黄、黒で上絵付けされている。見込み周囲には黄色絵の具による3単位の模様配が施されている。被熱している。15 は見込み蛇ノ目釉剥ぎ白磁皿でJB-2-kである。高台は台形状に成形され、底部は無釉。被熱している。16～18 は染付大皿でJB-3-bである。16の底部には残存部で2箇所のハリ支え痕が認められる。裏文様は縁取りを有す梅花唐草文が描かれている。高台内には銘が存在するが欠損部分が多く、詳細は不明である。被熱している。17の底部には残存部で5箇所のハリ支え痕が認められるが、位置関係から6箇所あったと推定される。見込み文様は見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには山水図、側面には4箇所の楕円形区画窓絵を配し、草花文を描いている。裏文様は縁取りを有す如意頭唐草文が描かれているが、如意頭にはダミが掛けられていない。底裏銘は残存部に「化年製」が認められることから、「大明成化年製」と推定される。18は体部に一段稜を有し口縁が外反する形状である。底部には残存部で4箇所のハリ支え痕が認められ、位置関係から5箇所存在したと推定される。底裏銘は残存部に「( ) 明成化年製」が認められる。被熱している。19 は青磁大皿

でJB-3-dである。蛇ノ目凹形高台を呈し、蛇ノ目無釉部にはチャツ痕が認められる。見込みには陰刻によって草花文が描かれているが、被熱によって詳細は不明である。20～25は鉢でJB-5-bである。20、21は白磁で、20は口唇部に口銹が認められる。被熱している。22～25は染付である。22、23はほぼ同一器形、同一文様の製品で、外面に岩、草花、鳥が描かれているが、花の輪郭のみ型紙摺り技法が用いられている。見込みには二重圏線内に手描き五弁花文が描かれ、高台内に「天明成化年製」銘が書かれている。被熱している。24は口径32.5cmを測る大形製品である。見込みには折枝が、側面には竹、梅が描かれている。裏文様は縁取りを有す花唐草文であるが、ややラフに描かれている。被熱している。25の口縁部は8単位の輪花を形成している。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。見込み全面に菖蒲など3種の植物が描かれている。裏文様は1本線による唐草文が描かれ、底裏銘は残存部で「( )明成化年製」が書かれている。被熱している。26～27は坏でJB-6-bである。26は白磁である。被熱している。27は染付で、外面に草花が描かれている。被熱している。28、29は猪口で、JB-7-bである。28は外面に染付、コンニャク印判併用で文様が描かれている。高台内には「(大明年)製」の銘が書かれている。被熱している。29は外面に染付、型紙摺り併用で文様が描かれている。口唇部には口銹が施されている。高台内には銘が書かれているが、欠損部が大きく詳細は不明。被熱している。30～33は蓋物である。30は型造りでJB-13-dである。高台は蛇ノ目高台で、体部は8角形の筒形を呈す。文様は体部全面に紗綾形文、柴束文などを印刻し、ダミをかけている。31は袋状を呈しJB-13である。外面には唐子が描かれ、高台内には二重圏線が施されている。整形、文様ともに丁寧に造られている。被熱している。32、33は筒形蓋物でJB-13-bである。32は外面全面に唐草文が描かれている。被熱している。33は外面に海浜図が描かれている。高台壘付内側に耐火砂の付着が認められる。被熱している。34～36は大形長頸瓶でJB-10-aである。34は胴部全面に唐草文が描かれている。内体部無釉。被熱している。35は胴部全面に草花文が描かれている。内体部無釉。被熱している。36は胴部全面に草花文が描かれている。釉は口縁部内側から壘付を除く外面全面に施されている。被熱している。37～39は蓋である。37、39は蓋物の蓋で、37は33、39は32の蓋と推定される。被熱している。38は合子の蓋である。上面に上絵付けによって梅花文が描かれているが、被熱のため色調は不明である。

40～58は陶器である。40～42は碗である。40は肥前産京焼風陶器碗でTB-1-bである。体部上半に鉄絵文様が描かれているが意匠は不明である。高台内には円圏内に「清」の刻印が認められる。被熱している。41は瀬戸・美濃産天目碗でTC-1-aである。胎土は灰褐色を呈し、比較的緻密である。釉は全体的に黒色で、口唇部のみ茶褐色を呈している。被熱している。42は瀬戸・美濃産灰釉丸碗でTC-1-cである。胎土は灰褐色を呈し、比較的緻密である。釉は全面に薄く掛けられた後、底部を除き二度掛けされている。43、44は京都・信楽産錆絵染付皿でTD-2-cである。43の胎土は淡褐色を呈し、見込みに錆絵染付で草花と流水文が描かれている。被熱している。44の胎土はやや灰色を帯びた褐色を呈し、緻密である。壘付外側に面取りが、底部中央には円圏ケズリが認められる。見込みには錆絵染付によって草花が描かれている。被熱している。45～48は鉢である。45は京都・信楽産色絵鉢でTD-5である。胎土は褐色を呈し、緻密である。壘付外側に面取りが認められる。見込み及び外側面に紅葉が上絵付けされているが、色調は不明である。被熱している。46は京都・信楽産輪花鉢でTD-5である。胎土は灰褐色を呈し、緻密である。型打ち成形によって20単位の輪花を形成し、底部は碁笥底を呈している。外面には錆絵染付によって蔓文が描かれている。被熱している。47は京都・信楽産練り込み鉢でTD-5である。胎土は褐色と黒色の練り込みである。口縁部に括れが認められるが、小破片のため単位は不明。器面も本来は練り込みを文様として仕立てていると考えられるが、著しく被熱しているため詳細は不明である。48は備前産焼き締め鉢でTE-5である。底部はベタ底で同心円状のケズリが施されている。内底部には重ね焼きによる環状溶着痕が認められる。胴部から底部にかけて火嚢が認められる。底部には菱形の刻印が押されている。被熱している。49は瀬戸・美濃産鉄釉香炉・火入れでTC-9-bである。内体部に淡褐色を呈する釉を薄く施した後、口縁部内側から高台脇にかけて暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。50は京焼の底部平面長方形の器物底部片で、底部は長辺12cm、短辺9.8cmを測る。器種は不明である。板状の体部に底部を貼り付けた痕跡が認められ、高台内側には幅約1cmを測るナデ痕が認められる。壘付けから1.5cm上には四辺全面に七宝状の透かし細工が施されている。高台から透かしまでの器面には四辺各々異なる草花などの文様が、青、緑、金で上絵付けされている。被熱している。51は京焼で、型造り製品の上部破片である。器種不明。残存部の形状と意匠から平面形は長方形と推

定される。表面には一段盛り上がった長方形区画内に金、青で、「伊勢物（語）」と書かれ、その周囲は紗綾形文と草花文で埋められている。また左側面の角は鉄絵で縁取られている。裏面は左側面は直角に折れ直立する器壁に移行するが、上端裏面ほぼ中央付近には長辺8mm、短辺5mmを測る棒状パーツの剥離痕が認められ、上端が開く形状と考えられる。表面は「伊勢物語」の和装本を表した意匠であるが、同様の意匠を有する伝世品に「色絵茶花物語冊子形硯箱」がある。これは蒔絵硯箱の蓋で四辺とも器壁がある。先述したように本製品は上端が開口しているので、蓋とは判断しがたい。被熱している。52は瀬戸・美濃産茶釜形製品でTC-67である。底部はベタ底で環状溶着痕が認められる。胴下半部は算盤玉状を呈し、そこから若干内傾して立ち上がり、屈曲して頸部に移行する。頸部下に松毬状の把手が貼り付けられており、残存部の位置関係から本来は両側に2箇所存在したと推定される。釉は外面が銹釉、内面が暗茶褐色の鉄釉が掛けられ、うのふ釉が流し掛けされている。若干被熱している。SK78と遺構間接合。53は京都・信楽産腰白茶壺でTD-15-aである。胎土は灰白色を呈し、硬質である。肩部には4箇所の橋状把手が貼り付けられている。胴下半部から底部にかけて透明釉が、口縁内側から胴上半部にかけて鉄釉が施され、さらに頸部から胴部に掛けて流し掛けされている。被熱している。54、55は瀬戸・美濃産半胴甕でTC-15-aである。54は口径24.2cm、器高15.4cmを測る大形の製品である。釉は量付際まで掛けられている。胴部下端と上部に2条の沈線が巡っている。被熱している。55は高台際からくの字状に屈曲して胴部下端の稜に移行する形態を呈す。釉は全面に掛けられた後で高台から底部を拭き取っている。胴部下端には2条の沈線が巡らされ、胴上部には1条の微隆帯が巡っている。また隆帯付近から部分的に鉄釉が流し掛けされている。被熱している。56は備前産小形瓶でTE-10である。残存部で1箇所胴部中位が楕円形状に平坦に整形されている。全体的に鉄泥が施され、頸部から肩部にかけて火襻が認められる。被熱している。57は瀬戸・美濃産播鉢でTC-29である。口縁部はクラック状に成形されている。全体的に銹釉が施され、胴下半部が拭き取られている。見込み側面には1節16条の播目が左回りで施されている。被熱している。58は京都・信楽産蓋である。上面には錆絵染付で若松文が描かれている。

59～70は土器である。59～61はかわらけでDZ-2-bである。59は底部および内底部に黒色の付着物が、口唇部に2箇所灯心痕が認められる。60は被熱によ

て全体的に黒褐色を呈する。口唇部に数箇所灯心痕が認められる。61は被熱によって斑状に黒褐色を呈する。口唇部に数箇所灯心痕が認められる。62、63は埴塙と考えられる小形坏でDZ-6である。手づくね成形によって造られている。62の胎土は黒褐色を呈し、口縁部内側から外面にかけてガラス質状の付着物が認められる。63の胎土は褐色を呈し、微細金雲母を多量に含む。64、65は懐炉でDZ-54である。粘土塊を円盤状に伸ばして成形されており、裏面には指頭圧痕が認められ、また64には1箇所、65には2箇所沈線状の凹みが認められる。表面には長方形各枠内に「南久□町 □□□」の刻印が認められる。器面は二次火熱により、淡褐色から桃褐色を呈している。66、67は塩壺である。66は2ピース板作り成形でDZ-51-mである。胎土は橙褐色を呈し、微細金雲母を少量含む。内面全面に布目圧痕が認められる。刻印は二重角枠内「泉川麻生」である。67は2ピース板作り成形でDZ-51-hである。胴上半に数条の並行沈線が巡っている。内面には右方向によじれた布目圧痕が認められる。刻印は二重角枠内「泉州麻生」である。68～70は板作り成形塩壺の蓋でDZ-00-cである。胎土は褐色を呈し、微細金雲母を少量含む。内面に布目圧痕が認められる。68の内面には直径約45mmをはかる不整形の浅い沈線が認められる。

70～83は瓦である。71～74は軒丸瓦。71～73の瓦当文様は星梅鉢紋で、花卉形状から、71、72が稜線がなく丸味をもつC類、73が稜線が明瞭なA類に分類される。胎土には金雲母が少量含まれる。72は被熱している。74は無剣梅鉢文で、花卉形状は、稜線が不明瞭でなだらかな台形状のB類である。胎土には雲母が少量含まれる。75～78は軒平瓦である。75～77は江戸式で、瓦当文様は、75がI Ha類、76がI Ea類、77は中心飾りが欠損しており唐草・子葉はAaである。胎土には雲母が微量含まれる。76は被熱している。78は東海式である。胎土には多量の雲母が含まれる。79は平瓦と考えられるが、端部に唐草が陰刻されている。中心飾りは円形状で唐草部は5回の繰り返しが認められる。熨斗瓦文様19類に近似するが、熨斗瓦の唐草部が3～4回であるのに対し、1回多い意匠を形成している。80は輪違瓦と考えられる道具瓦である。中央に直径15mmの孔が穿たれている。内面全面に布目痕が認められる。81は丸瓦である。表面にヘラケズリ痕、内面に布目圧痕が認められる。82は谷丸瓦である。表面に直径15mmの孔が穿たれている。83は平瓦である。胎土には雲母が微量含まれている。

84～111は金属製品である。84、85は新寛永通宝

である。86、87は飾金具である。86は四菱で中央に1辺5mmを測る釘孔が穿たれている。菱形形状に沿って唐草文が施されている。87は断片的で、形状は不明である。また表面には唐草状の浮文が認められるが、詳細は不明。88～97は真鍮製と考えられる鋳である。頭部はドーム形を呈している。88～90、92の胴部断面は隅丸方形、それ以外は方形を呈している。98～103はキセルである。98～102は雁首で、首部左側に接合痕が認められる。98は肩部を有し、99、100は補強体を有す。99、100、102の首部上面に敲打による凹みが認められる。103は吸口で小口よりに2条の平行沈線が2箇所施されている。104は銅製の切羽である。105は真鍮製品。何らかのパーツと考えられるが、詳細は不明。106～110は鉄釘である。いずれも頭巻釘である。106は被熱によりほとんど腐蝕していない。111は鉄製の鍵である。環状基部に2条の鍵山が付けられている。

112～115は石製品である。112は砂岩製の磨製石製品で、断面形は不整六角形を呈し、底面、頂部ともに顕著に摩耗している。各面がやや膨らみを有しており、砥石というより何らかのパーツの可能性もある。被熱している。113ははんれい岩製の搗臼である。器形はわずかにハの字状に開く円筒形を呈し、底部以外は丁寧に平滑に整形されている。胴部に持ち手用の扇形の孔が穿たれている。114、115ははんれい岩製の茶臼である。114は上臼で、目は主溝が八分画、副溝は残存部で13条を数える。ふくみはほとんど持たない。供給口（もの入れ）は直径22mmを測り、円筒形を呈す。側面には正方形装飾を施した挽き手差し込み用の孔が穿たれている。表面は被熱によって剥離しており、意匠は不明である。115は下臼で、目は主溝が八分画、副溝は残存部で14条を数える。ふくみはほとんど持たない。軸受けは上端で1辺18mmを測る正方形を呈するが、中程から工具痕を残す円錐形に変化する。

#### SK169 (II - 90 図)

1は瀬戸・美濃産灰釉香炉・火入れでTC-9-aである。釉は内外面とも体部のみに掛けられている。口唇部外側には顕著な敲打痕が認められる。2は瀬戸・美濃産鳥飼・水入れでTC-30である。3は常滑産大甕でTG-15である。外面体部上半に鉄泥が施され、その境界部分に重ね焼き時の環状痕と陶片圧痕が認められる。内面にはほぼ全面に指頭圧痕が認められる。4は塩壺の蓋でDZ-00-dである。5はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wである。4、5ともに胎土には金雲母を微量含む。

#### SK170 (II - 90 図)

1はかわらけでDZ-2-aである。胎土は、暗橙褐色を呈す。体中位から口縁部にかけて外反する。底部には右回転の回転糸切り痕が認められるが、板状圧痕によって消され、周辺部のみ残存している。見込みにはロクロ整形後のナデが認められる。口唇部には灯心痕が顕著に認められる。

#### SU174 (II - 90 図)

1はかわらけでDZ-2-aである。胎土は橙褐色を呈し、金雲母を含む。体部はやや内湾して立ち上がり、底部には離れ糸切り痕が認められる。口唇部には灯心痕が顕著に認められる。

#### SE190 (II - 90 図)

1、2は筭と考えられる銅製品である。1は下端部から11cmで、2は10.5cmで欠損している。割れ口の状況から折り切ったと推定される。断面形は楕円形を呈す。2には全体的に縦方向の微細擦痕が認められる。

#### SU254 (II - 90 ~ 98 図)

1～9は肥前磁器である。1は白磁うがい茶碗でJB-1-tである。色調はやや灰色掛かり、口錆が認められる。2～4は丸碗でJB-1-eである。2、3の釉調はやや灰色を4はやや青みを帯びる。2、3には口錆が認められる。4の見込みには茶筌痕と推定される微細擦痕が認められる。5は染付皿でJB-2-eである。口縁部は輪花を形成し高台内中央に1箇所ハリ支え痕が認められる。釉調はやや灰色を帯びる。見込み中央に手描き五弁花文、周囲に牡丹唐草文が、裏文様は縁取りを有する如意頭唐草文、高台内には二重角枠内渦福銘が描かれている。6は見込み蛇ノ目釉剥ぎ染付皿でJB-2-kである。釉調はやや灰色を帯びる。底部は無釉で放射状の鉋痕が認められる。見込み蛇ノ目釉剥ぎ部には本製品と同径の畳付痕が認められる。見込み周囲に直線状の染付線が描かれている。7は染付皿でJB-2-gである。釉調はやや灰色を帯び、畳付に耐火砂が溶着している。裏文様には雨降り文が描かれている。8、9は坏で、8は口縁部が外反するJB-6-b、9は体部が直線状に立ち上がるJB-6-dである。8は体上半に梅花流水文が描かれ、9は体部に墨弾きを併用した草花文が、高台内に「大明年製」銘が描かれている。

10～25は陶器である。10、11は肥前産呉器手碗でTB-1-aである。11の見込みはドーナツ状に光沢がなく、茶筌による摩耗痕と推定される。12は肥前産京焼

風陶器丸碗でTB-1-bである。体部は腰が張り、やや器高が低い。高台内には刻印が認められるが、欠損部が多く詳細は不明。13は京都・信楽産丸碗でTD-1である。胎土は灰褐色を呈し緻密・硬質である。高台断面は長方形を呈し、畳付幅は4.5mmを測る。畳付を除いて透明釉が施されている。14は瀬戸・美濃産天目碗でTC-1-aである。胎土は灰白色を呈し、硬質である。底部から体部下半を除き、鉄釉が施されている。15～18は京都・信楽の平碗で、TD-1-hである。15の釉は高台脇まで施され、畳付外側は面取りされている。見込みに鉄絵の一部が残存するが、詳細は不明。高台内には「音羽」銘が刻印されている。16の釉は畳付際まで施され、畳付外側は面取りされている。見込みに錆絵染付によって葡萄が描かれ、高台内には小判杵に「清閑寺」銘が刻印されている。17は畳付を除いて透明釉が掛けられている。見込みには錆絵染付によって笹が描かれ、高台内には小判杵に「清閑寺」銘が刻印されている。18の高台はやや外傾し、釉は高台外面中位まで施されているが、釉際は波打っている。見込みには錆絵染付によって草花が描かれ、高台内には小判杵に「清閑寺」銘が刻印されている。19は肥前産京焼風陶器皿・平鉢でTB-2-cである。高台高は25mmを測り、3箇所M字状の切り欠きが施され幅45mmを測る三足高台を作出している。釉は全面に施され高台内を蛇ノ目状に釉剥ぎしている。見込みには鉄絵で海浜図と推定される文様はかなり簡略に描かれている。20は肥前産象嵌文皿・平鉢でTB-2-hである。見込みには砂敷き痕が認められる。見込みから外体部上半にかけて透明釉が、体部下半には鉄釉が掛け分けられている。象嵌文様は圏線、蛇行縞文様、印花文が交互に施されている。21～24は瀬戸・美濃産鉄釉坏でTC-6である。23は体中位に稜を有し口縁は外反する。それ以外は丸碗形を呈する。21、22は錆釉、23は斑状の錆釉、24は鉄釉が施されている。25は瀬戸・美濃産半胴甕でTC-15-aである。高台は逆台形を呈し、体部は高台脇でハの字状に開いて、くの字状に屈曲しほぼ直立した状態で直線的に立ち上がる。体部上半には一条の沈線が巡り、その上部は隆帯状の膨らみを有す。また体部下半には2条の平行沈線が巡り、その間は隆帯状に突起している。全面に錆釉が施され、底部から高台脇にかけて拭き取られている。また口唇部から鉄釉が流し掛けされている。口唇部には著しい敲打痕が認められ、火入れもしくは火鉢として使用されていた可能性がある。

26～54は土器である。26～49はかわらけ。26～31は腰折れ条痕が認められる江戸式かわらけでDZ-2-bである。26～28、30、31は底部には左回転の糸切り

痕が、29は右回転の糸切り痕が認められる。26～28、30、31に灯心痕が認められる。32はDZ-2-aで、底部には左回転の糸切り痕が認められる。外体部には黒褐色に変色した放射状の痕跡が認められる。33はDZ-2-aで、底部には左回転の糸切り痕が認められ、内底部には右回り方向の渦巻き状痕が認められる。灯心痕が付着する。34はDZ-2-aで、底部には左回転の糸切り痕が認められる。胎土は黒褐色を呈し、体部には火襷状の放射状痕が認められる。口縁部には1箇所灯心痕が認められ、内底部には黒光りするタール状物質が付着している。35～49はDZ-2-aで、底部には離れ糸切り痕が認められる。35の口縁部内側には列点状の灯心痕が認められる。38の口縁部には灯心痕が認められる。39の体部には黒褐色に変色した放射状痕が認められ、見込みにはタール状物質が付着している。40は口縁部ほぼ全周で灯心痕が認められる。41の見込みには不整楕円形状を呈する被熱変色帯が認められる。42は底部から体部下半にかけて内外面ともに不整形を呈する被熱変色帯が認められる。口縁部には灯心痕が数箇所認められる。43～49は外面に黒褐色に変色した放射状痕が認められ、内面全域が黒褐色を呈する。43、44の底部にはタール状物質が付着している。45～49の外面には墨書が観られるが、放射状痕と錯綜して詳細は不明。50は皿でDZ-2である。胎土には白色微砂粒、雲母を含む。内面周囲から外底部にかけてナデ整形が認められる。底部周囲に摩耗が認められる。底部から口縁部にかけて43などに認められた放射状痕が観られる。51、52は手づくね成形による埴塙である。51は内面全面と外面の大半がガラス質化している。52は見込みが被熱により変色している。53は板作り成形の塩壺でDZ-51-iである。底部は内側から押し込まれ、内面全面に布目痕が認められる。体部に内側二段角「泉州麻生」銘が刻印されている。54は板作り成形塩壺の蓋でDZ-00-cである。

55は軒平瓦である。中心飾り、唐草下上2反転で構成。中心飾りは剣菱状の中央、上端が外曲する脇、への字状の萼、中央下の点珠で構成される。唐草は巻き込みが深い。刻印あり。御殿下記念館地点第2分冊第237図6など古手の瓦に類例がある。

56はバネ状の金属製品である。用途不明。

57、58は頁岩製の砥石である。57は表裏面が研磨されているが、特に表面が顕著で平滑に仕上げられている。58は表裏面ともに線状の研磨痕が認められる。棒状工具の研磨、刃物の刃直しの痕跡か？

59は常滑産大甕の胴部片再加工作品である。割れ口は実測図上端辺を除き山状に研磨されていることから、上

端は欠損した可能性が高い。性格不明。

SU274 (II - 96, 97 図)

1は瀬戸・美濃産御室碗でTC-1-dである。体部には呉須で笹状の文様が描かれている。2、3はかわらけでDZ-2-bである。2は口縁部に2箇所、3はほぼ全周で灯心痕が認められる。4～6は板作り成形の塩壺である。4は二重角枠内側二段角「泉州麻生」銘を有し、DZ-51-iである。体上部に数条の整形痕が横位に巡る。内体部には斜方向の布目圧痕が認められる。底部は内面から押し込まれ、底部には作業台と推定される圧痕が認められる。5は二重角枠「泉川麻生」銘を有し、DZ-51-agである。胎土には金雲母が含まれる。底部は3ピースで成形され、内体部上半に布目圧痕が認められる。体部に墨書が認められる。6は二重枠内側二段角「泉州麻生」銘で、DZ-51-iである。肩部下に数条の沈線が巡る。内体部には振れた斜方向の布目圧痕が認められる。7は板作り成形塩壺の蓋で、DZ-00-cである。内面には布目圧痕が認められる。表面には落書き状の墨書が認められる。

SU254 + SK274 (II - 97, 98 図)

1は肥前産染付五寸皿でJB-2-eである。口縁部は鏝状に外反し、上面に墨弾きによって蔓草が描かれている。見込み中央には手描き五弁花文、周囲には青海波、草花、桜花が描かれている。裏文様は線書きによる如意頭唐草文が描かれ、高台内には「大明年製」銘が書かれている。2は白泥象嵌が施された肥前産大皿・大平鉢でTB-3-bである。胎土は赤茶褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。見込みには8箇所の砂胎土目痕が認められる。見込みから口縁部外側にかけて透明釉が施され、体部下半に鉄泥が施されている。見込み周囲は二重圈線によって区画され、印花文、幾何学文、唐花唐草文などが象嵌されている。3は瀬戸・美濃産一升徳利でTC-10-eである。胎土は灰褐色を呈し、硬質・緻密である。全面に鉄釉を施した後、底部を拭き取っている。肩部残存部に、うのふ釉流し掛けが観られる。4は土師質丸火鉢でDZ-31-aである。胎土は褐色を呈し、微細金雲母を少量含む。脚は丸味を帯びた円錐台形を呈し、2.2cmと比較的高い。体部下半にはケズリ整形痕が認められる。口縁部内側に一部タール状物質が付着している。

SL272 (II - 98 図)

1は丸瓦である。玉縁長は26mmと短い。凹部には布目痕とその後で施された棒状圧痕が数条認められる。2は平瓦である。胎土に雲母が含まれている。凹面は比

較的丁寧に磨かれ、側縁と狭端部には面取りが施されている。

SK275 (II - 98 図)

1は瀬戸・美濃産長石釉丸皿でTC-2-cである。胎土は灰白色を呈する。見込みと高台内側にピン痕が認められる。

SK299 (II - 99 ~ 105 図)

本遺構は大形採土坑で、覆土最上層に焼土層が堆積していた。出土遺物のうち被熱資料は、この焼土層に伴う資料である。被熱資料は貿易陶磁主体の茶道具一括資料で、その様相から藩主所有の茶道具と推定される。13～15世紀の中国龍泉窯青磁製品(1～9)、12～13世紀の中国建窯天目碗、16世紀の朝鮮王朝陶磁陶器碗(13～16)、16世紀のベトナム陶器(17)、16世紀後葉～17世紀前葉のドイツライン炆器(18)など、被災資料の大半は伝世品貿易陶磁で占められている。覆土下層からは17世紀中葉の国産陶磁器類が出土していることから、天和2(1682)年の藩邸全焼火災による被災資料と位置づけられ、第2代藩主前田正甫所有の茶道具類と推定される。

1～18は貿易陶磁である。1～9は龍泉窯系青磁でJA4である。全て激しく被熱している。1～4は花入でJA4-22である。1はいわゆる青磁砧形耳瓶の口縁部片で、胎土は灰褐色、釉調は青緑色を呈する。頸部は直立し、口縁は皿状に開き、ほぼ直角に内曲して口唇部に移行する。かなり腰が張った様相を呈す。頸部には耳が剥離した痕跡が1箇所認められるが、詳細は不明である。2は浮遊環六角瓶の口縁部片である。胎土は灰褐色、釉調は淡青緑色を呈す。口縁部形は六角形を呈し、口縁部はやや外反する。頸部に一對の耳が付く。被熱によって釉が溶解しているため詳細は不明であるが、その形状から魚形と推定される。また下部には浮遊環が付属する痕跡が認められる。3は青磁底部片である。被熱によってかなり状態は悪く、原形の詳細は不明である。胎土は灰褐色を呈し、釉調は深緑色と推定される。盤状を呈する方形底部の脇から透かし彫りを伴う体部が立ち上がる。その内側各コーナーに柱状の円筒形パーツが貼り付けられている。この内側に体部が存在すると推定される。4は青磁琮形瓶の底部片である。胎土は灰褐色を呈し、微細気泡が入る。釉調は淡青緑色を呈し、釉厚は全体的に約5mmと薄い。高台付近のみ約1mmとやや厚く、釉際は波打っている。また内面は緩やかな起伏が認められ、釉飛びが認められる。高台断面はやや内傾した逆台形を

呈し、畳付外側は丸味を持つが、内側は鋭く整形されている。体部は直立し、隆帯は浅い蒲鉾状の断面を呈す。5は青磁硯屏片でJA4-66ある。胎土は灰白色を、釉調は淡緑色を呈す。障壁部は透かし彫りで獅子と思われる動物が造形され、台脚部は鯨の造形と推定される。6は青磁香炉の蓋と推定される。胎土は灰白色、釉調は深緑色を呈す。平面形は円形、断面形はドーム形を呈し、下端部からやや内傾して立ち上がり緩やかな稜を有して内湾する。上部には中空成形の獅子と推定される動物意匠の紐が貼り付けられ、その外形に沿って本体が削り抜かれている。7は青磁獅子紐香炉蓋である。胎土は灰褐色を呈し、白色微細粒を少量含む。釉調はやや緑がかかった水色を呈し、下端部釉際は、外面では端部上約2mmでほぼ直線的に処理されているが、内面は大きく波打っている。上部に貼り付けられた獅子は、前後2ピース成形で内部は中空で、蓋本体から口へ通じている。獅子体部左側と手前に蔓状パーツが貼り付けられているが、欠損と被熱により詳細な意匠は不明。8は青磁袴腰香炉でJA4-9である。胎土は灰褐色を呈し、黒色微細粒を少量含む。釉調は青緑色を呈し、釉厚は全体的に約1mmを測る。体部はいわゆる袴腰状を呈し、肩部に削り出しによって横位の微隆帯が作出されている。隆帯上の釉は薄く、素地が透けて見え、白線状のアクセントとなっている。隆帯直下の削り込みは深く、器厚は約2mmと薄い。口縁部は大きく外反し、屈曲部外側の釉は厚く、頸部上端の釉上器形は丸味を持っているが、素地器形はL字状に外折する。肩部隆帯下には脚から続く縦位方向の隆帯が接続する。脚は内側付け根付近に直径約2mmを測る孔が穿たれている。接地部は平坦に整形され、無釉である。9は青磁天目台である。胎土は灰白色、釉調は深緑色を呈す。底部平面形は円形を呈し、バタ底と推定される。器台部は円筒形を呈する。底部脇から鐔状の体部がハの字状に拡がり端部でやや外反する。10は建窯の製品と推定される天目碗でTA-1である。胎土は暗茶褐色を呈し、白色微細粒を含む。釉調は外面暗褐色～黒褐色、内面黒褐色を呈し、釉厚は全体的に約0.5mmを測るが、見込みは約2mmと厚く、底部上釉際も釉が溜まり膨らみを呈している。また全体的に貫入が認められ、内面には黒色を呈する筋状の変化が放射状に入り、外面には放射状に拡がる縮緬状襷が認められる。高台内のケズリは浅く、やや兜巾状の膨らみを有する。畳付は内側に向けて斜方向に削られ、接地面は内端部にある。体部は高台脇に稜を一段有し、ほぼ直線状に開く。口縁部外面は稜を介してほぼ直立し、口唇部でやや外反する。内面はやや膨らみを有して外傾し、断面は三角形状を呈す。

11～16は朝鮮王朝陶磁の陶器碗でTA6-1である。全て被熱している。11はいわゆる蕎麦茶碗である。胎土は灰褐色を呈し、白色微砂粒を含む。釉調は海松色（暗灰黄緑）を呈す。底部は緩やかな兜巾状に整形されている。体部はハの字状に開き、口縁部がやや肥厚する。また口縁内側がケズリによる稜を一段有す。12はいわゆる御本手である。胎土は淡褐色を呈す。底部には左回転の渦巻き状整形痕が認められる。底部を除き施釉されているが、釉調は被熱のため不明である。露胎部は丁寧に平滑に整形されている。1630年代以降の和館窯の製品か？13は砂目積みの白磁碗である。胎土は灰白色を呈し、やや軟質である。釉は透明釉が器面全体に施されており、畳付に砂目溶着痕が認められる。見込みには10箇所目の砂目痕が認められる。16世紀の慶尚南道の製品か？14はいわゆる斗々屋茶碗である。胎土は橙褐色から灰褐色を呈し、白色微細粒を少量含む。見込みには砂目痕が10箇所認められ、表面は研磨されている。釉は全面施釉され、畳付にも砂目痕が認められる。高台断面は逆台形を呈し、畳付外端はやや丸味を有す。高台内には「の」の字状整形痕と放射状のヒビ割れが認められる。内体部は見込み周囲に沈線が巡り、内底部には逆「の」の字状整形痕が認められる。15はいわゆる蕎麦茶碗である。胎土は暗褐色を呈す。底部は兜巾状に整形されている。胎部は高台脇に稜を有しハの字状に立ち上がり上部でやや外反する。釉は器面全面に施され、畳付には砂目溶着痕が認められる。見込みには5箇所目の砂目溶着痕が認められる。16は象嵌筒碗である。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。釉調はやや青みがかかった灰褐色を呈し、全体に貫入がはいっている。底部脇圏線と口縁部帯文が白土象嵌で施され、黒色象嵌によって鳥？が描かれている。17はベトナム産の甕でTA7-15である。茶道具としての用途は水指である。著しく被熱し、釉は再溶し気泡痕が認められる。胎土は灰白色を呈し、やや軟質である。器面全体に白濁釉が施されている。口唇部は外側が削られ、断面三角形を呈する。肩部には横方向の橋状把手が貼り付けられ、位置関係から4箇所と考えられる。また頸部には蓮弁浮文が巡っている。18はドイツ塩釉炆器水注（嘴付ジャグ：シュナベルカンネ）の胴部及び注口部片でTA8-27である。16世紀後葉～17世紀前葉のレーレンもしくはヴェスターヴァルトのヤン・メンニッケン工房の製品と推定される（長久 2019）。胎土は暗灰茶褐色を呈し極めて硬質である。内面には約5mm間隔の細かなロクロ目が認められる。胴部残存部は球体状を呈し、最大径部に横位の隆帯・沈線を組み合わせた文様帯が巡る。胴下半部は縦位の沈線によって区



画され、花卉文様などが印刻されている。上半部にはすだれ状の貼付文が認められる。注口部基部には王冠状の装飾を持つ人面装飾が施されている。外面は茶褐色を呈する鉄釉、内面には透明釉が施されている。陰刻、沈線部分は青色顔料で埋められ、注口人面部分は上方から流し掛けされている。

19～31は肥前磁器である。19は高台無釉の青磁碗でJB-1-bである。釉全体に貫入が認められる。20は高台無釉の青磁掛け分け碗でJB-1-bである。高台は細身の台形を呈し、豊付外縁は面取りされている。体部は腰が張って立ち上がり、胴部には縦位の集合沈線（しのぎ）が3単位施されている。青磁釉は淡緑色を呈し、高台脇から口縁部内側まで施され、口縁部内側から内底部までは透明釉が施されている。21～23は染付碗でJB-1-aである。21の底部は兜巾状に張出し、豊付には耐火砂が溶着している。体部には一重網目文が描かれ、網目内二方に松葉が描かれている。22は高台内中央が円形状に釉剥ぎされている。高台脇にケズリによる2段の面が形成されている。文様は体部一面に七宝繫ぎ文が描かれている。23は高台内がドーナツ状に削られて、若干凹状を呈している。高台は細身で豊付外縁が施釉後に削られている。体部には葡萄が染付され、見込みには二重圏線内に意匠不明の文様が描かれている。24は染付碗でJB-1-cである。豊付は丁寧に丸味を帯びて整形されている。体部には松が、見込みには二重圏線内に兎が描かれ、高台内には「大明成」銘が書かれている。25は染付皿でJB-2-aである。体部に推定5単位の凹みが設けられ、それに沿って口縁部が波状を呈する。口唇部には口鏽が施されている。見込み文様の詳細は不明である。26は染付皿でJB-2-aである。見込み側面は型打ち成形によって捻花状の浮文を形成している。口唇部は面取りされ、口鏽が施されている。見込みには柳、月？が描かれている。27は白磁皿でJB-2-aである。体部は型打ち成形によって菊花を形成している。28、29は染付鉢でJB-5-fの底部片である。28の釉には細かい貫入が認められる。体部には岩、植物などが、見込みには二重圏線内に植物が描かれ、高台内に「宣徳年製」銘が書かれている。29は見込み周囲に市松文様を埋めた帯文による区画帯を設け、両側に植物文が描かれ、裏文様には唐草と蝶が描かれている。高台内には「宣徳年製」銘が書かれている。30は端反形環でJB-6-bである。高台外側のケズリは浅く滑らかに体部へ移行する。体部外面は高台脇と口縁部に二重圏線が染付されているのみで、見込みに菊花文が描かれている。高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。31は仏飯器でJB-8-cである。体部はハの

字状に立ち上がり、蓮弁状の模様が染付されている。

32～46は陶器である。32はいわゆる肥前産呉器手碗でTB-1-aである。豊付はシャープに削られている。33は瀬戸・美濃産沓茶碗でTC-1-anである。胎土は淡褐色を呈し、緻密である。釉は黄瀬戸釉と考えられるが、被熱のため現色をとどめていない。高台内には右回転の渦巻き状整形痕が認められる。34は瀬戸・美濃産天目でTC-1-aである。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。底部は浅い円錐状に削られている。35は産地不明の碗でTZ-1である。胎土は灰褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。釉は豊付けを除き施されているが、被熱のため釉調は不明である。36は瀬戸・美濃産練り込め碗でTC-1-aである。黄白色の素地に茶褐色の素地が練り込まれている。37、38は瀬戸・美濃産灰釉皿でTC-2-yである。37の底部はほぼ平底状を呈し、見込みに3箇所が目跡が認められる。釉は器面全体に施した後、底部を拭き取っている。38は逆台形状の高台を有し、底部無釉。見込み残存部には4箇所が目跡が認められるが、その配置から5箇所あったと推定される。39、40は肥前産刷毛目平鉢でTB-2-gである。39は見込みに6箇所の砂胎土目痕が認められる。見込みに白泥を渦巻き状に施し、鉄、緑で植物を描いている。豊付は二次的に研磨され、平滑である。40は豊付、見込みに6箇所の胎土目痕が認められる。底部を除き白泥が施され、見込みは渦巻き状に拭き取って。また口縁部には波状の刷毛目が認められる。見込みには斜格子状の鉄絵文様が描かれている。高台内に墨書が認められるが、詳細は不明である。41は瀬戸・美濃産鉄釉瓶でTC-10である。底部は平底で糸切り痕を残す。体部下部に2条の沈線が、中位に2条の波状沈線が巡っている。被熱している。42は瀬戸・美濃産鉄釉茶入れでTC-26である。底部は平底で糸切り痕を残すが、アーチ状の削り込みが施されている。体部には3条の沈線があり、両側2条は逆ハの字状に開く。被熱している。43は丹波産の播鉢でTK-29である。外面全体にナデ整形痕が、下半部には指頭圧痕が認められる。見込み周囲には重ね焼き時の陶片痕が認められる。内体部下半はかなり摩耗している。また底部が円形状に欠損しているが、その形状から二次加工の可能性はある。44は備前産播鉢でTE-29である。底部は平底で、右回転の糸切り痕が認められる。播り目は1節12条で、左回りの放射状に施されている。45は備前産の瓶でTE-10-bである。体部外面には鉄泥が施されている。体部下半と底部に、長さ約4cmを測る直線状の沈線が施されている。被熱している。46は瀬戸・美濃産鉄釉澆瓶でTC-28である。胎土は灰褐色を呈し、硬質

である。底部を除き茶褐色の鉄釉が施され、さらに体部上半に暗茶褐色の鉄釉が流し掛けされている。摘まみは中空で上部中央に穿孔が認められる。また摘まみ周囲に6箇所が目跡が認められる。内底部周辺に白色に石化した物質が付着している。

47～61は土器である。47～59はかわらけである。47はDZ-2-kである。胎土は淡褐色を呈し、やや疎である。底部は張出し、粗い糸切り痕が認められる。48～58はDZ-2-aである。48は右回転で、体部はS字状に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口唇部には著しい灯心痕が付着している。49は離れ糸切りである。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部内側が肥厚する。50は胎土に金雲母を少量含む。右回転の糸切り痕が認められる。口唇部には灯心痕が付着している。51は右回転、体部はやや内湾気味に立ち上がる。灯心痕は口縁部ほぼ全周に付着。52は左回転の糸切り痕が認められ、胎土には金雲母を少量含む。灯心痕は口縁部約半周に付着。53は左回転の糸切り痕が認められる。また内底部には「の」の字方向の渦巻き状整形痕が認められる。灯心痕は口縁部ほぼ全周に付着。54は左回転の糸切り痕が認められる。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部内側が玉縁状に肥厚する。口縁部約半周に灯心痕が付着する。55は左回転の糸切り痕が認められる。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部内側がやや肥厚する。口縁部約半周に灯心痕が付着する。56は左回転の糸切り痕が認められる。体部はやや波打ちながら立ち上がる。内底部には「の」の字方向の渦巻き状整形痕が認められる。口縁部には部分的に灯心痕が付着する。57は胎土に金雲母を少量含む。底部には左回転の糸切り痕が認められる。内底部には同心円状の整形痕が認められる。口縁部には著しい灯心痕が認められる。58は体部に金雲母を少量含む。底部には左回転の糸切り痕が認められる。体部はほぼ直線的に開き、口縁部でやや内湾し、玉縁状に肥厚する。口縁部ほぼ全周で灯心痕の付着が認められる。59は上製かわらけでDZ-2-dである。底部から体部下半にかけて特に丁寧に磨かれている。底部にはうち曇痕が認められる。60は輪積み整形の塩壺でDZ-51-aである。胎土は淡褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。二重角枠内「ミなど藤左衛門」銘が刻印されている。61は釜でDD-2011である。底部を欠損しているが、割れ口の状態から二次加工が施されたことが窺われる。体部上半には茶色絵の具で柳葉状の文様が巡っている。

62は軒丸瓦である。瓦当文様は無剣梅鉢文Bで、花卉断面形はなだらかな台形状を呈す。

63は円盤状銅製品である。断面形はドーム状を呈し、

表面に刷毛目状の文様が施されている。用途不明。

64は釜である。断面形は長方形を呈する。

#### SP311 (II - 106 図)

1は輪積み整形の塩壺でDZ-51-aである。体部には縦位の稜を有し、緩やかな8面体を呈す。体部上位に二重角枠内「ミなど藤左衛門」銘が刻印されている。

#### SK333 (II - 106 図)

1は肥前産砂目積み灰釉皿でTB-2-bである。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。体部外形は波打ちながら開き、見込み周囲に一段を有する。2は丹波産播鉢でTK-29である。口縁部断面は三角形を呈し、外側に一条の隆帯が、内側に一条の沈線が巡る。3～6はかわらけでDZ-2-aである。右回転の糸切り痕が認められる。口縁部ほぼ全周に灯心痕が付着する。3～5の底径は比較的広く、体部はやや外反して立ち上がる。3、5の見込みには同心円状の、4には逆「の」の字方向の渦巻き状整形痕が認められる。6の胎土は暗橙褐色を呈し、比較的硬質である。体部は外反して立ち上がり、中位に稜を有す。7は古寛永通宝である。

#### SK357 (II - 107 図)

1は肥前産染付碗でJB-1-gである。草花文が描かれている。2は肥前産京焼風陶器碗でTB-1-bである。高台内に「柴」が刻印されている。3は海鼠瓦である。表面縁辺は面取りされ、2条の沈線が施されている。また1側面中央に浅い切り欠きが認められる(実測図左辺)。4は新寛永通宝である。

#### SK364 (II - 107 図)

1～3はかわらけでDZ-2-aである。1は離れ糸切り、2、3は右回転の糸切り痕を有す。いずれも見込みには逆「の」の字方向の渦巻き状整形痕が認められ、口唇部には著しい灯心痕が付着している。

#### SK365 (II - 108 図)

1はかわらけでDZ-2-aである。底部には右回転の糸切り痕が認められる。体部は丸味を持って立ち上がり、中位で外反する。口縁部には著しい灯心痕が付着する。

#### SK368 (II - 108 図)

1は瀬戸・美濃産白天目碗でTC-1-bである。胎土は灰白色を呈し、器面全体に鉄分による黒斑が認められる。高台脇と体部下半にケズリによる一段を有す。内体部中

位で外曲して稜を有し、口唇部にかけてS字状に立ち上がる。2は瀬戸・美濃産鉄釉碗でTC-1-ahである。胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を含む。体部は緩やかに丸味を持って立ち上がり、上部で一段稜を有し内曲する。口唇部は玉縁状に若干肥厚する。3は瀬戸・美濃産鉄釉皿でTC-2-zである。胎土は黄白色を呈し、やや軟質である。釉は焼成不良のため白濁している。見込みには円錐ピンによる目跡が認められる。4は瀬戸・美濃産長石釉丸皿でTC-2-cである。釉は器面全体に施されている。体部下半にケズリ痕が顕著に認められる。底部及び見込みに円錐ピン痕が認められる。5は瀬戸・美濃産灰釉輪花皿でTC-2である。胎土は黄白色を呈す。高台はやや内傾し、断面形は三角形を呈す。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部で外反し、口唇部が短く立ち上がる。口唇部には数箇所の括れが施され、輪花を形成する。見込み周囲と口縁部外反部に沈線が施されている。高台内及び見込みに円錐ピン痕が認められる。6～8はかわらけでDZ-2-aである。胎土は暗橙褐色を呈し、金雲母微細粒を含む。底部には離れ糸切り痕が認められる。体部は外反して立ち上がる。口縁部には著しい灯心痕が付着している。9はキセルの雁首である。火皿は深く、わずかに補強帯が認められる。10、11は渡来銭で、10は熙寧元宝、11は元豊通宝である。

SK481 (II - 108 図)

1、2はかわらけでDZ-2-aである。底部には右回転の糸切り痕が認められる。体部は緩やかな丸味を持って立ち上がり、上半で外反する。見込み中央が凹んでいる。

SE516 (II - 109 図)

1は鉄製の錠前であるが、錆の進行が激しく詳細は不明である。2は小柄の柄部である。片面に紗綾形文が陰刻されている。

SE526 (II - 109 図)

1は平瓦である。側縁に亀甲形の刻印が認められる。

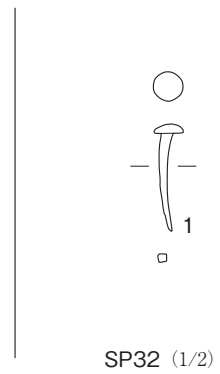
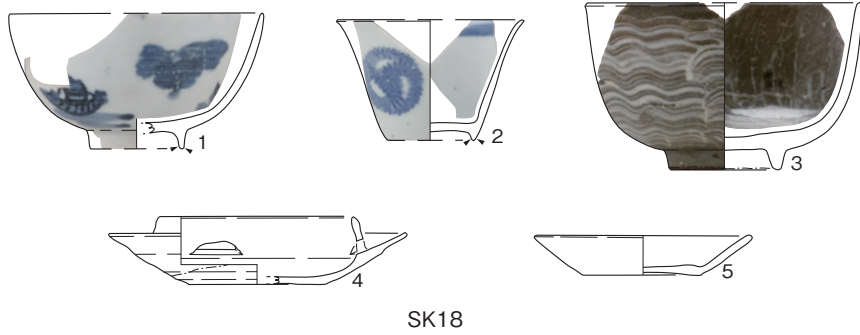
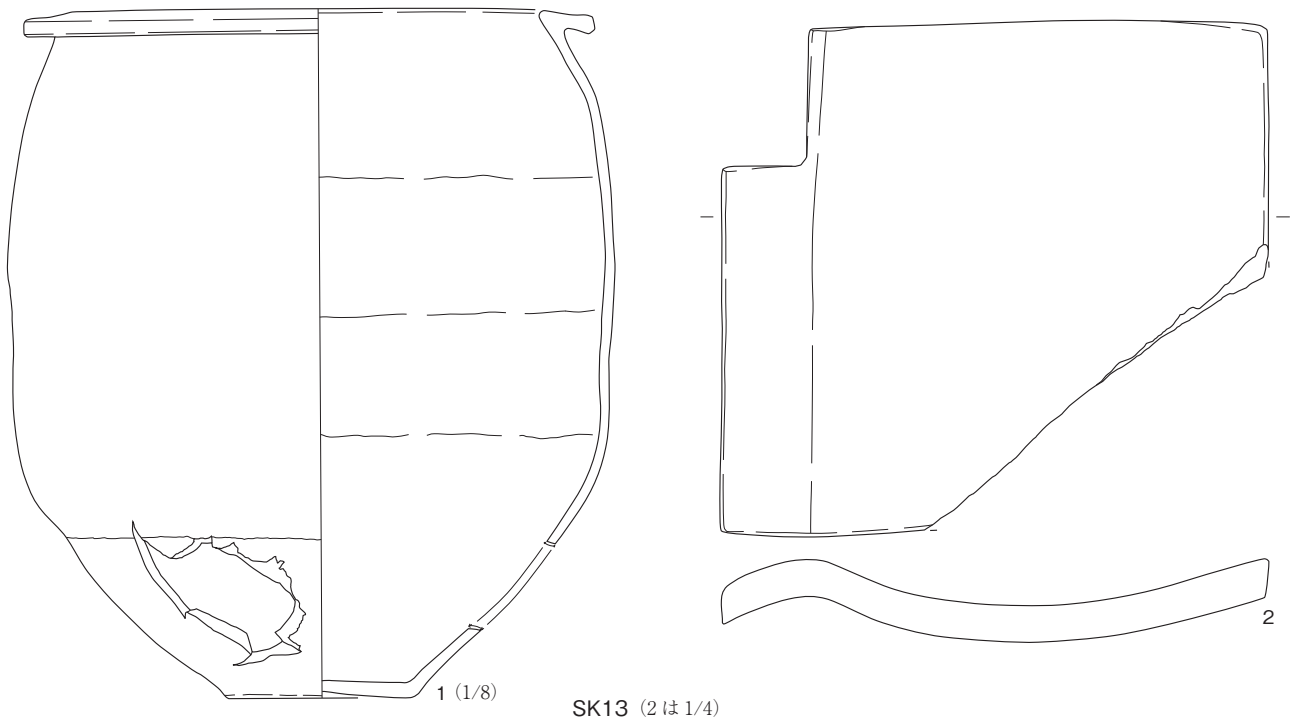
遺構外 (II - 109、110 図)

1はA面より出土した平瓦である。側縁に一重隅丸長方形枠に「石垣」銘の刻印が認められる。2は鬨斗瓦である。中心飾りは円形で、子葉先端は二又を呈す。中央部に二次穿孔が施されている。3は新寛永通宝である。4はA面より出土した渡来銭で、2枚が張り付いている。そのうち1枚は元豊通宝、もう1枚は著しい摩耗のため判読不能である。5はA面より出土した銭貨である。寛

永通宝と考えられるが、腐蝕が著しく詳細は不明。6、7はA面より出土した銅製の火箸である。6の基部は饅頭形を呈し、先端は平坦に成形されている。7の基部は太鼓形を呈し、その直下に2条の沈線が印刻されている。8はA面より出土した骨角製の筭である。断面形は方形を呈し、1辺に集合斜行沈線が印刻されている。9はA面SP32直上より出土した手水鉢(つくばい)と考えられる石製品である。自然石を利用して、上部を平坦に成形し隅丸長方形の水鉢部を削り抜いている。水鉢部裏側が張り出した形状の自然石で、張出部以外は著しく被熱していることから、火災に伴って掘り起こされ廃棄されたと考えられる。



II-69 図 SK3、SB11 出土遺物



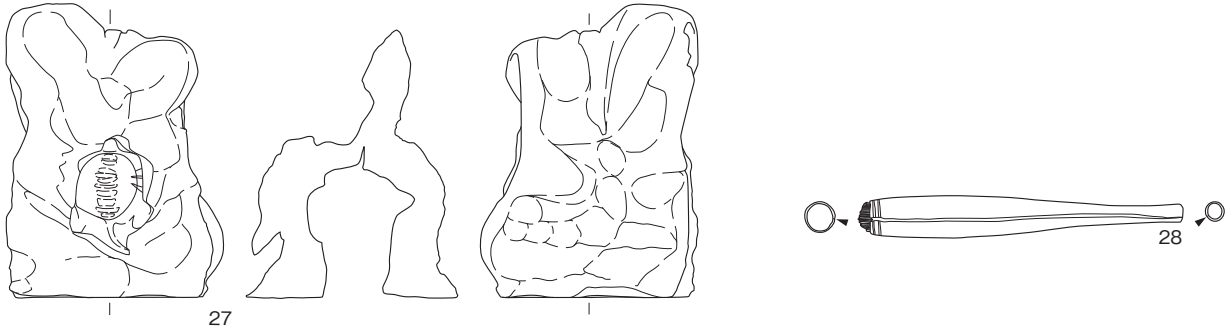
II-70 図 SK13、SK18、SP32、SK37 (1) 出土遺物



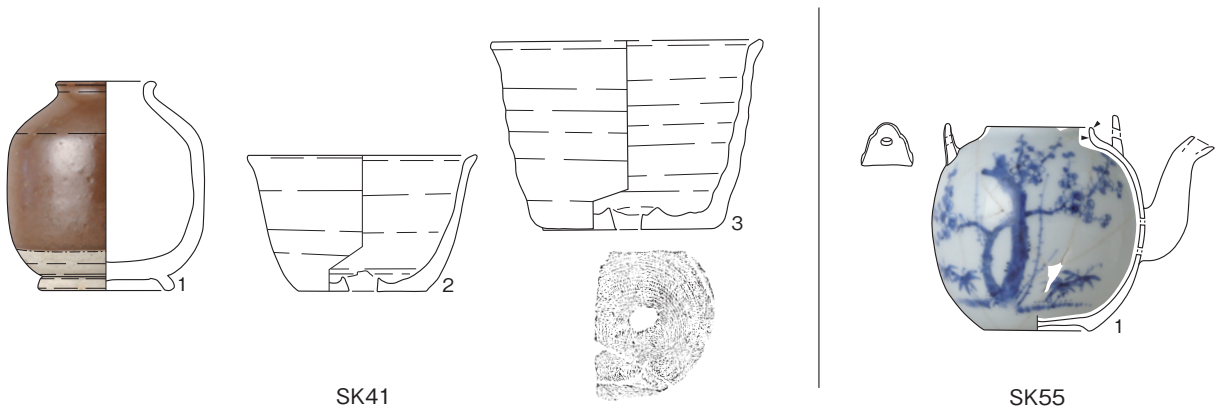
II-71 図 SK37 出土遺物 (2)



II-72 図 SK37 出土遺物 (3)

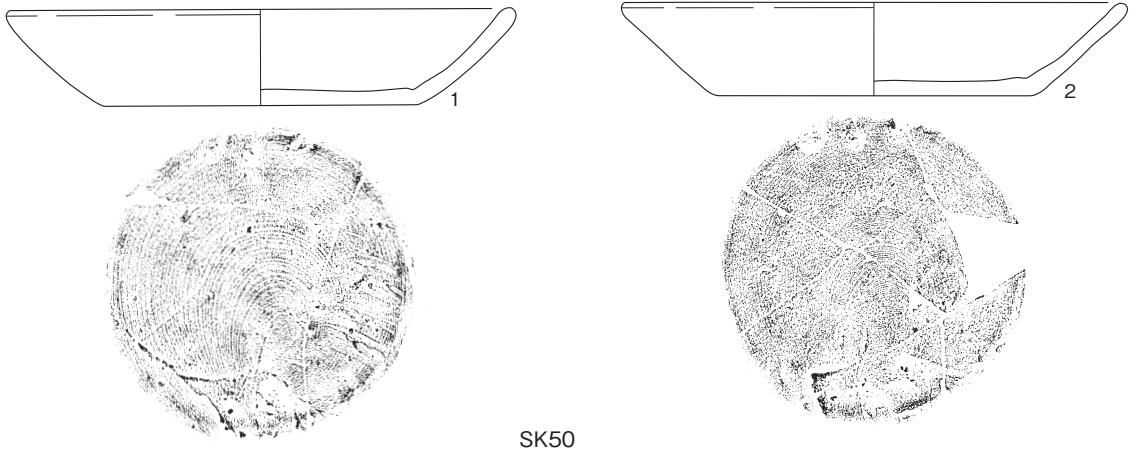


SK37 (4) (28は1/2)

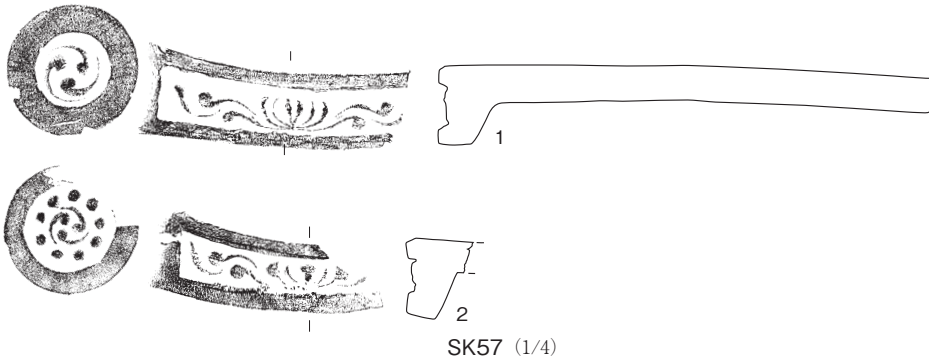


SK41

SK55



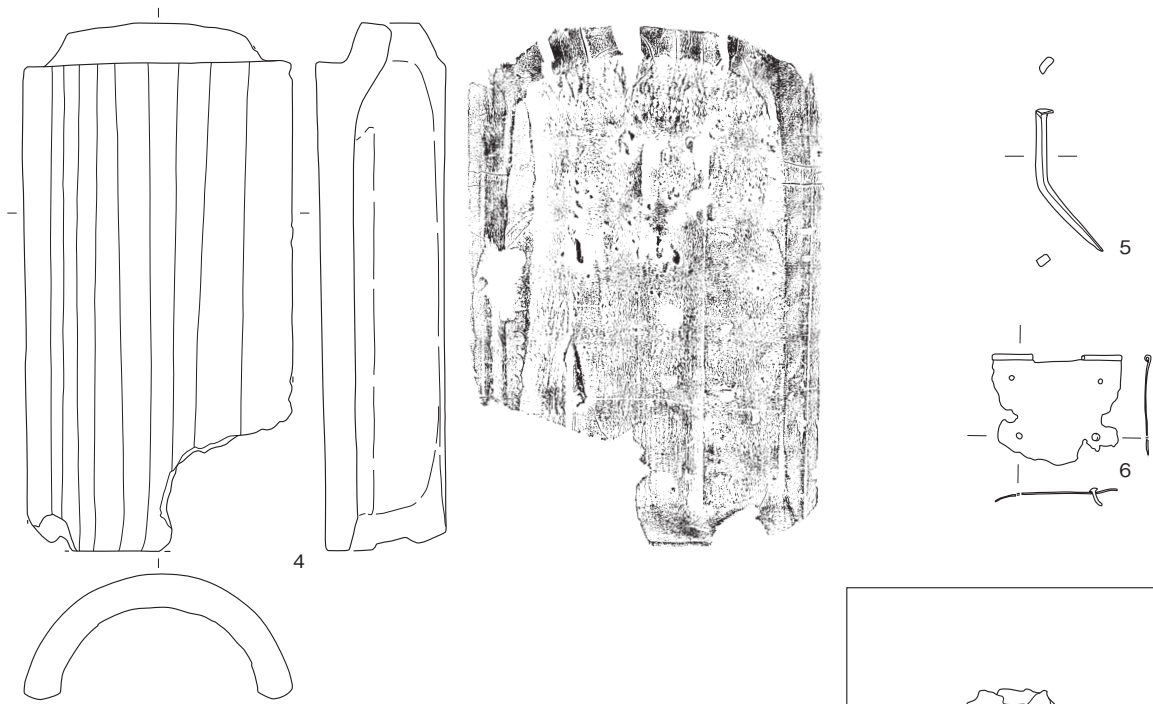
SK50



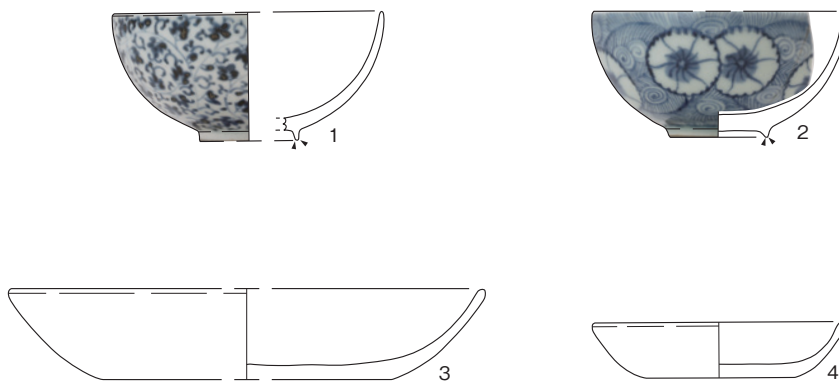
SK57 (1/4)

II-73 図 SK37 (4)、SK41、SK50、SK55、SK57 出土遺物

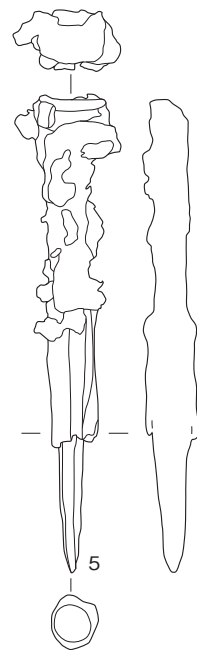




SE76 (4は1/4、5～6は1/2)



SK84 (5は1/2)

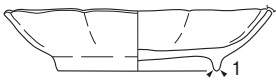
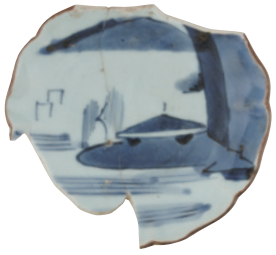
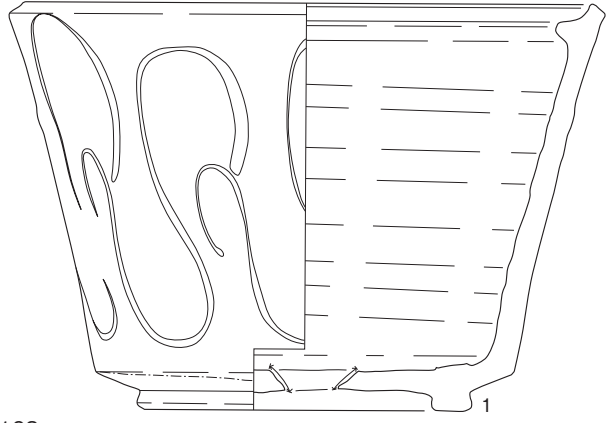


II-74 図 SE76、SK84 出土遺物

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



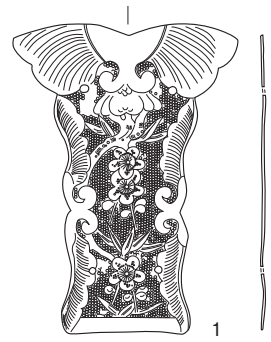
SK108



SP109



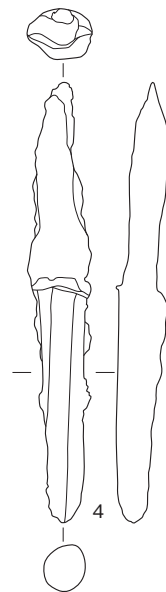
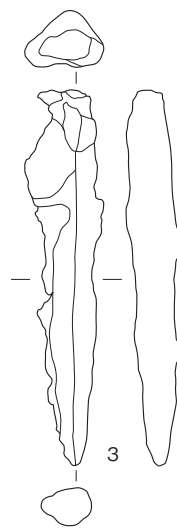
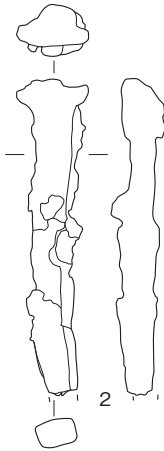
SK114 (1/2)



SP130 (1/2)

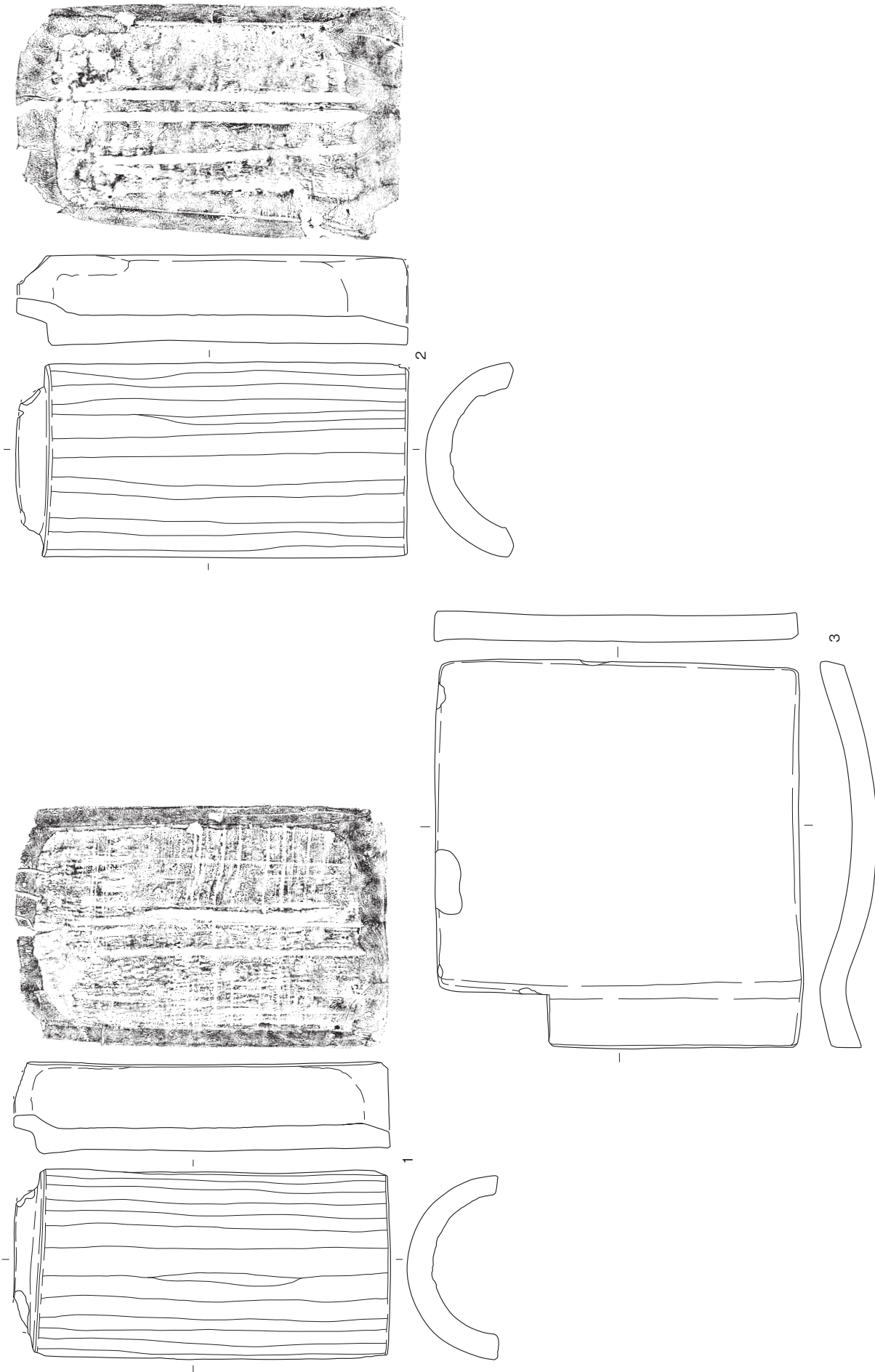


SK141 (1/2)



SK164 (1/2)

II-75 図 SK108、SP109、SK114、SK130、SK141、SK164 出土遺物

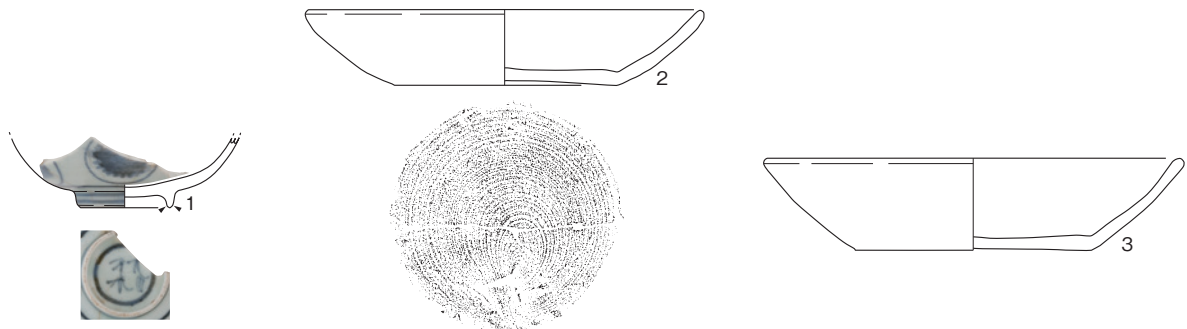


(1/4)

II-76 図 SE165 出土遺物



SK166

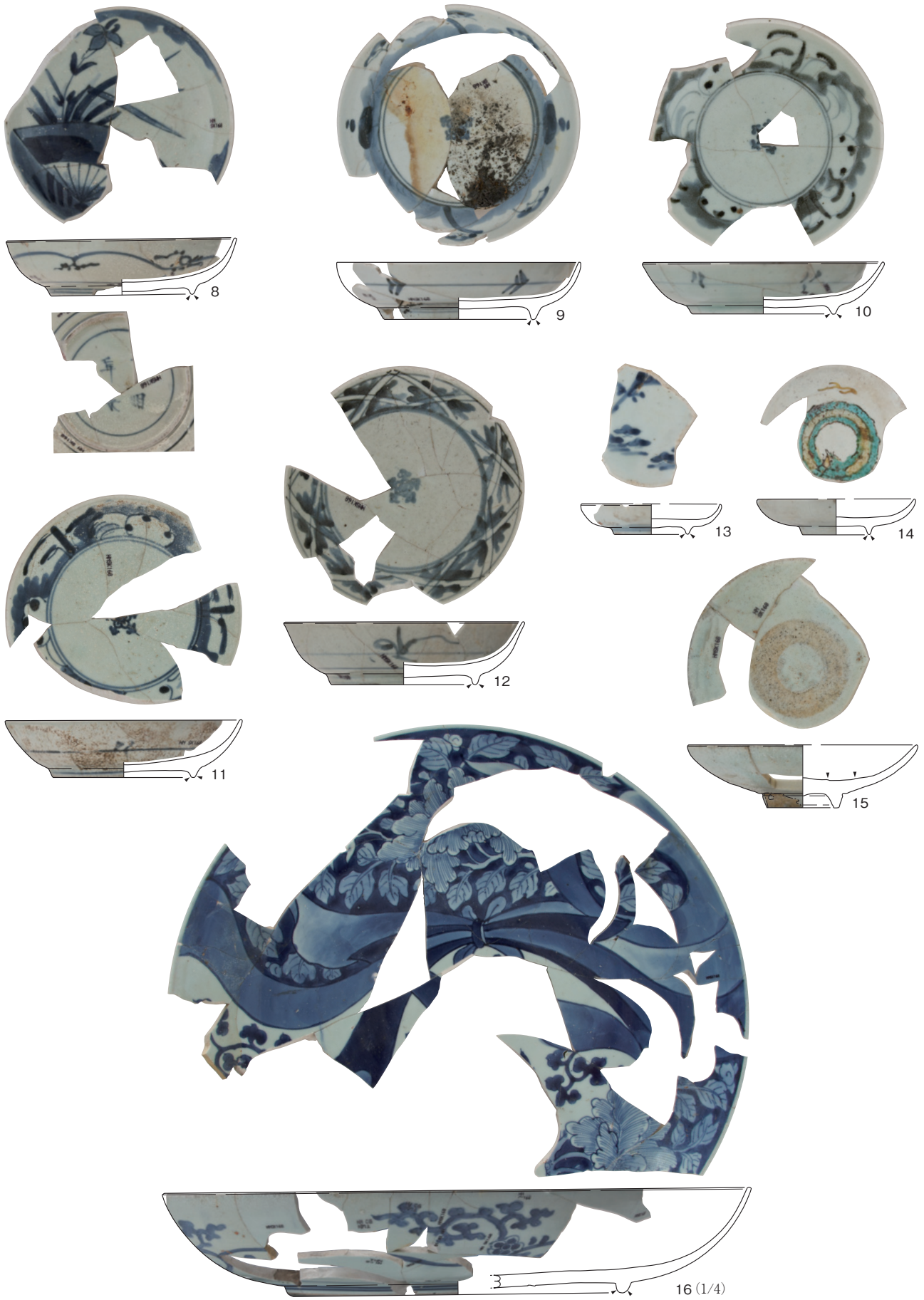


SK167

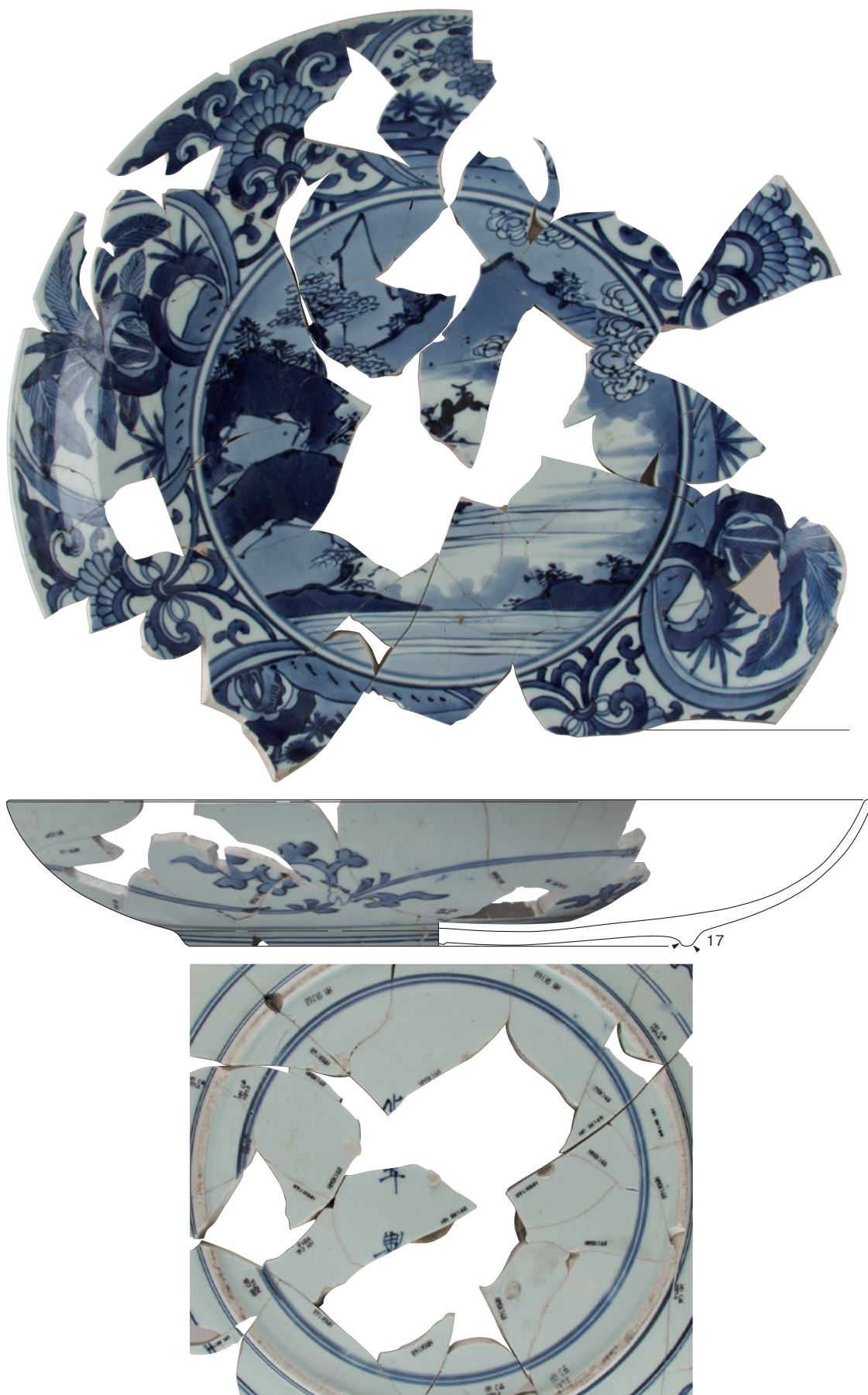
II-77 図 SK166、SK167 出土遺物



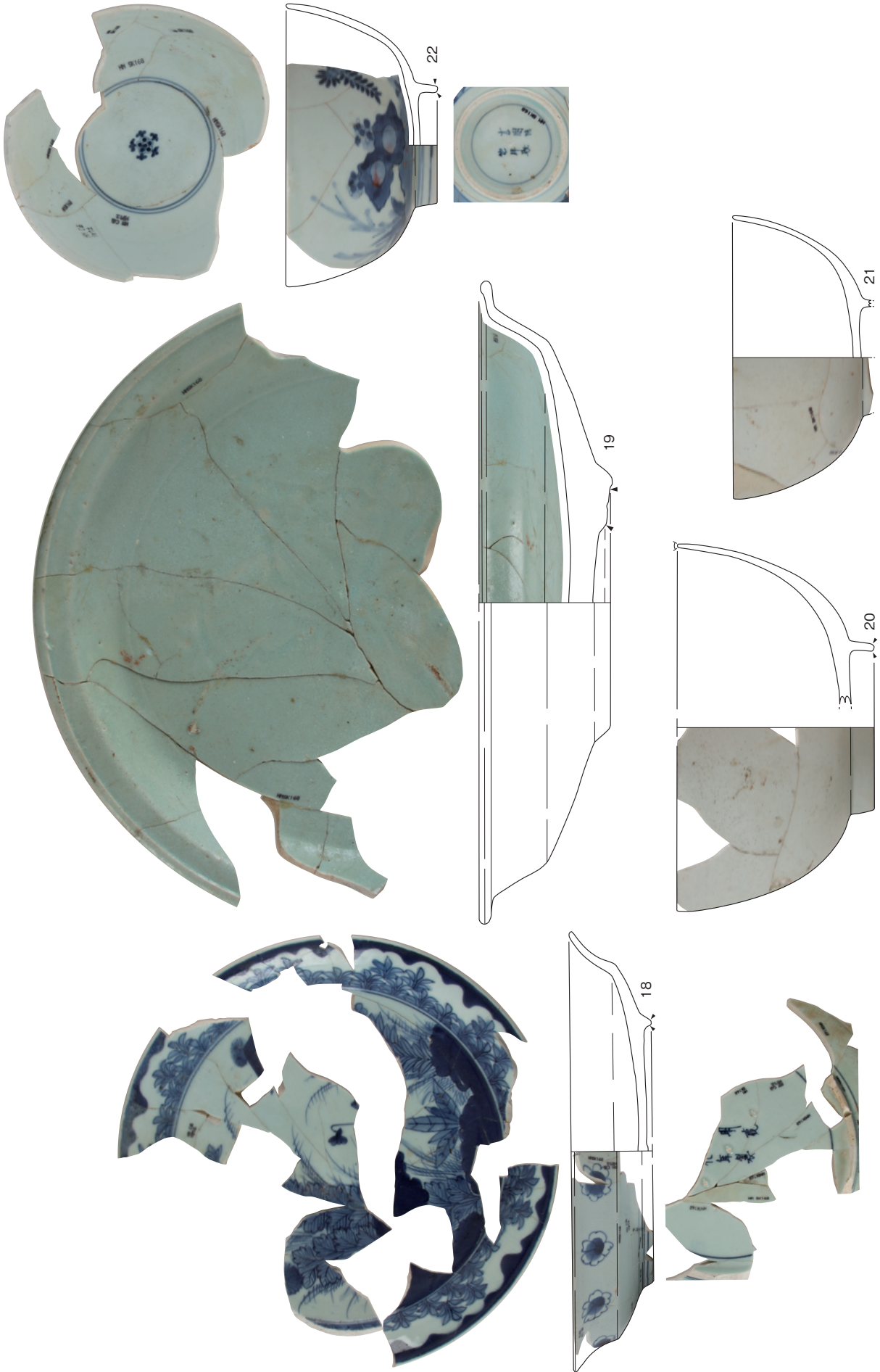
II-78 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (1)



II-79 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (2)

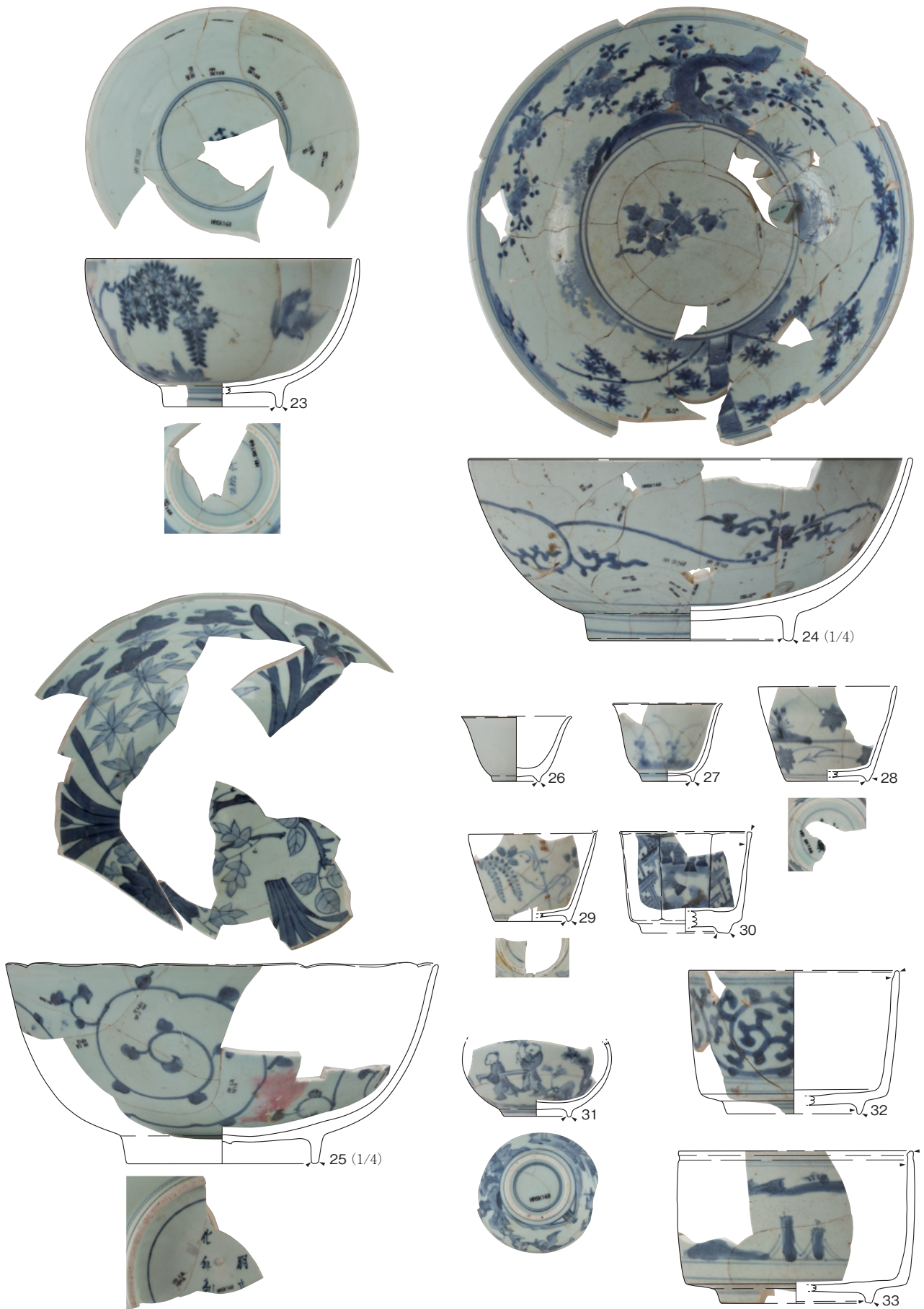


II-80 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (3)

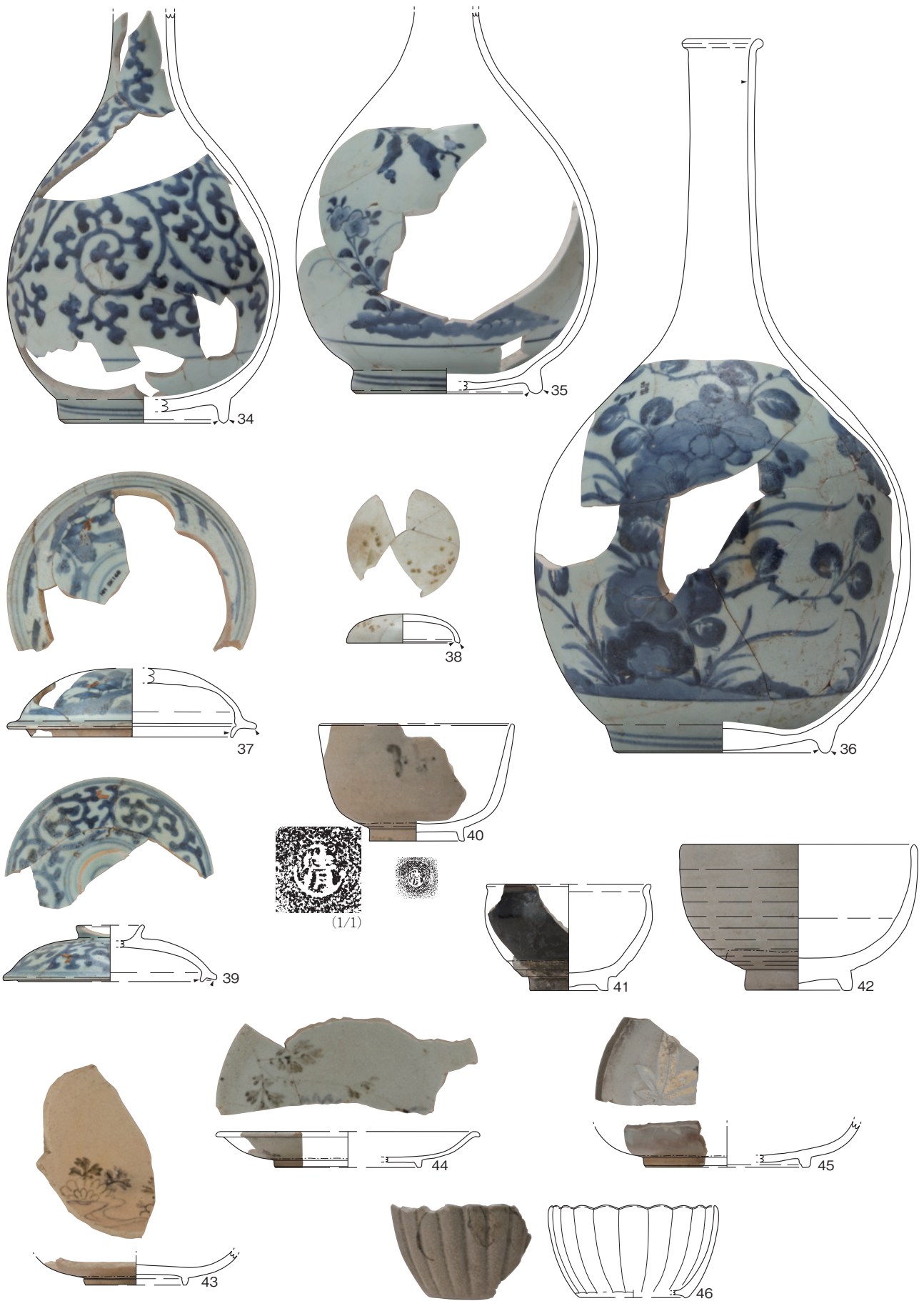


II-81 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (4)

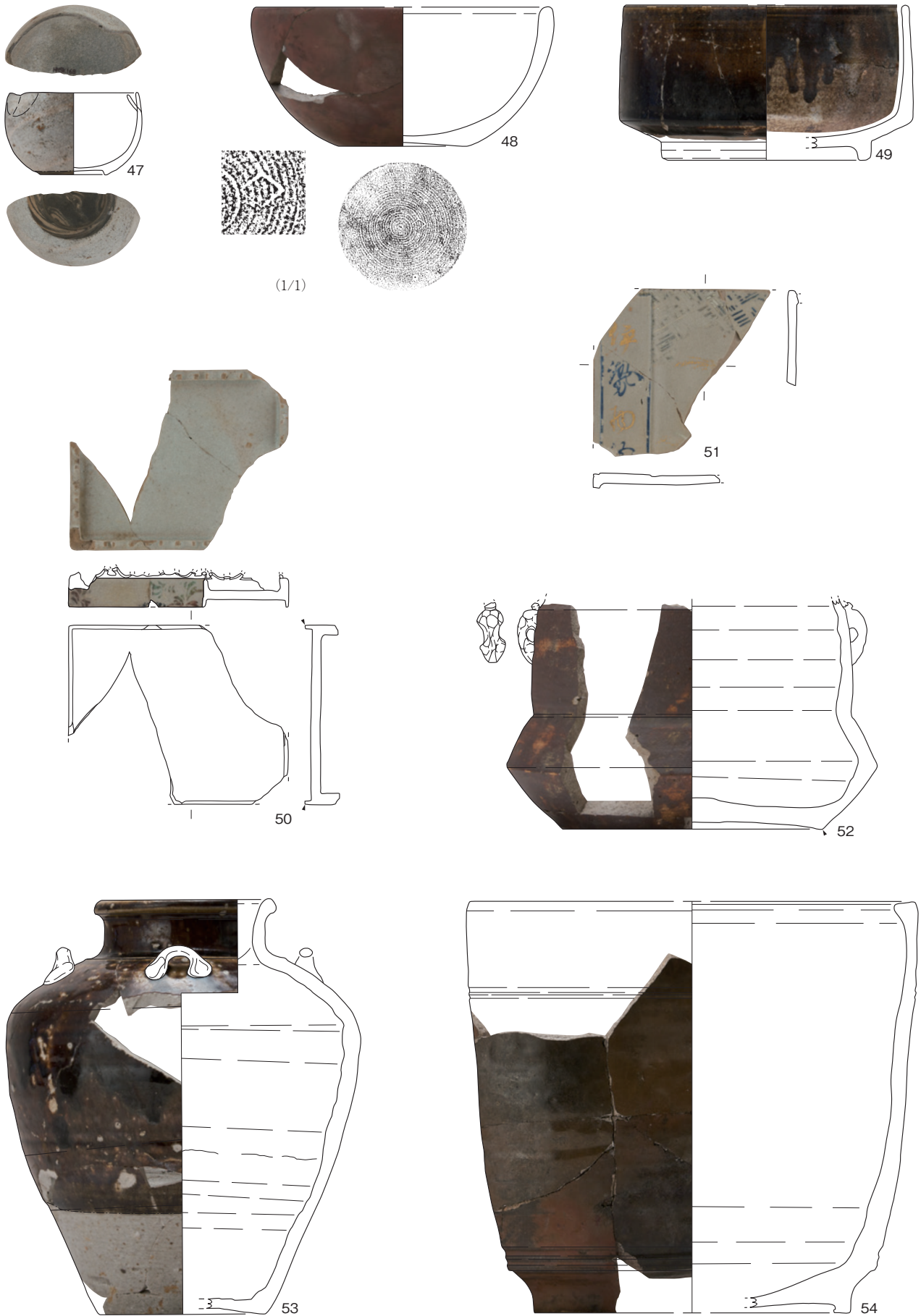




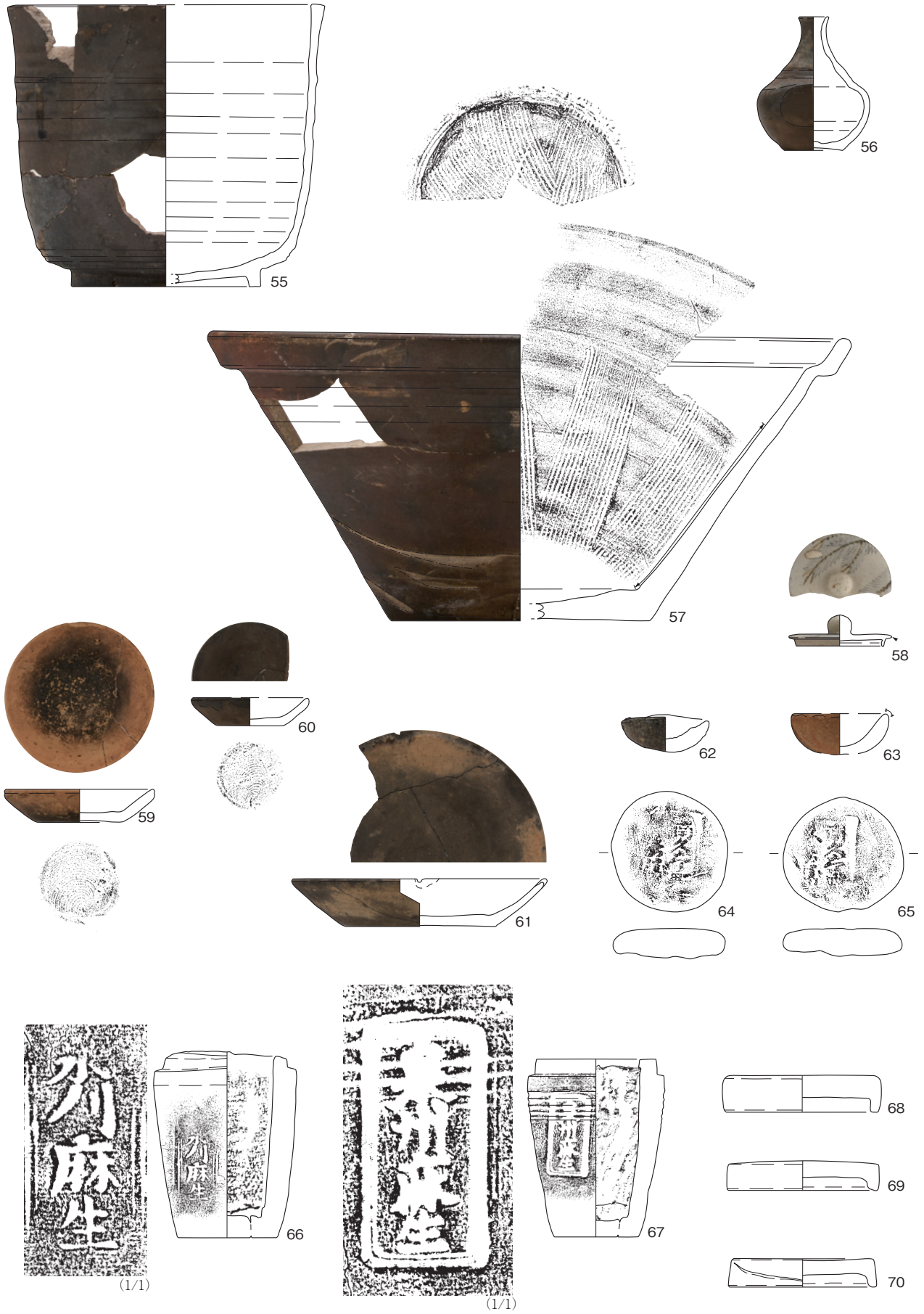
II-82 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (5)



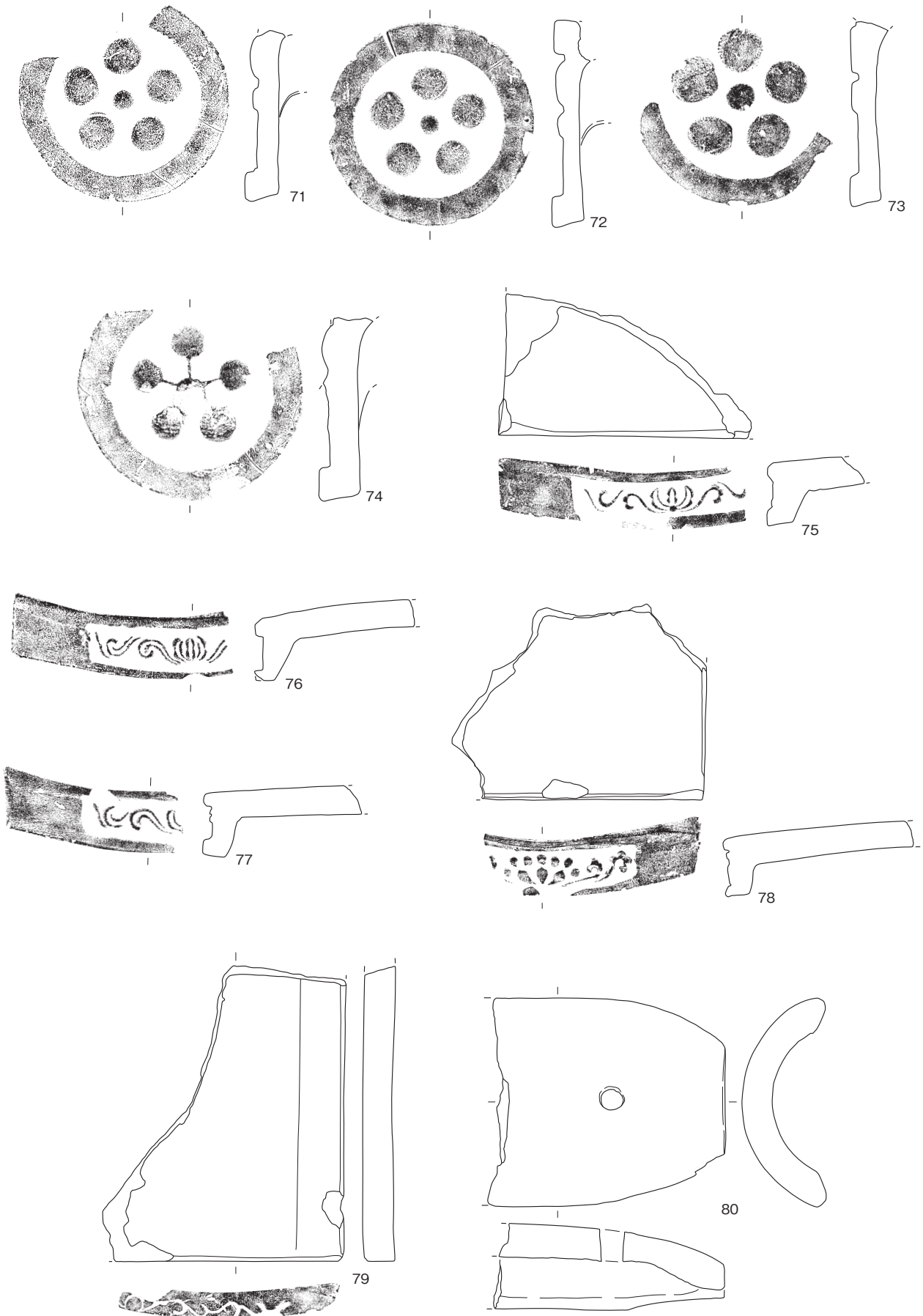
II-83 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (6)



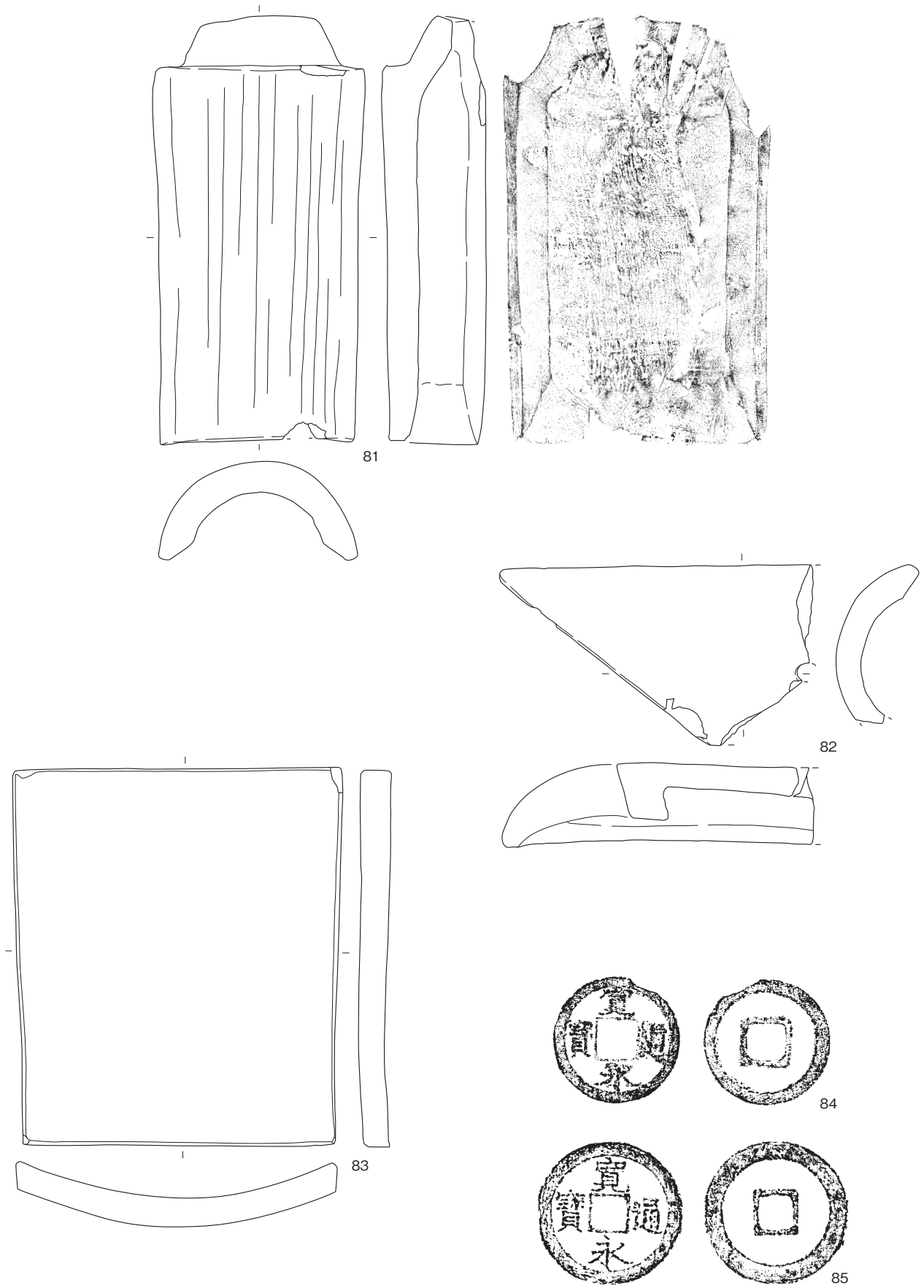
II-84 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (7)



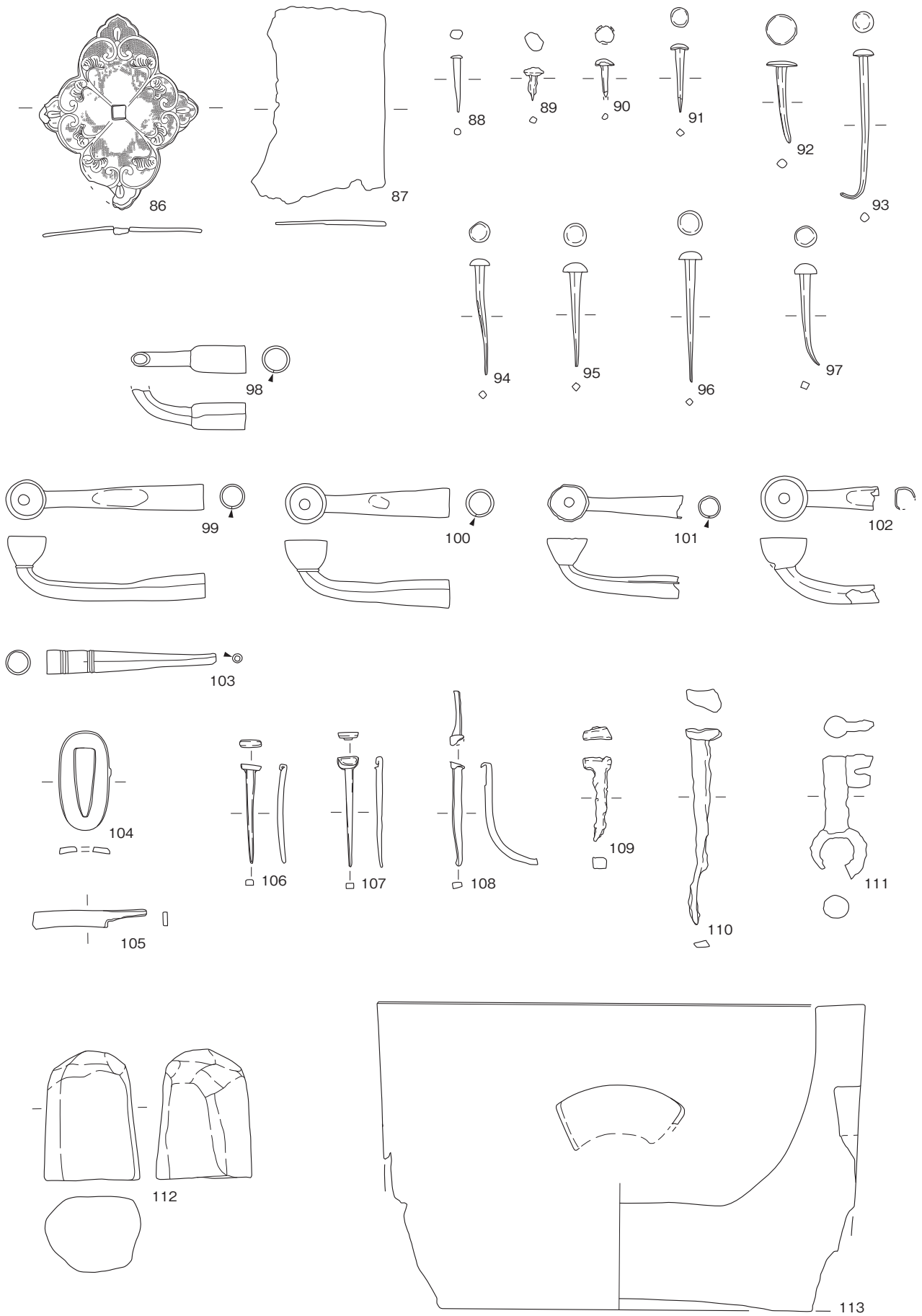
II-85 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (8)



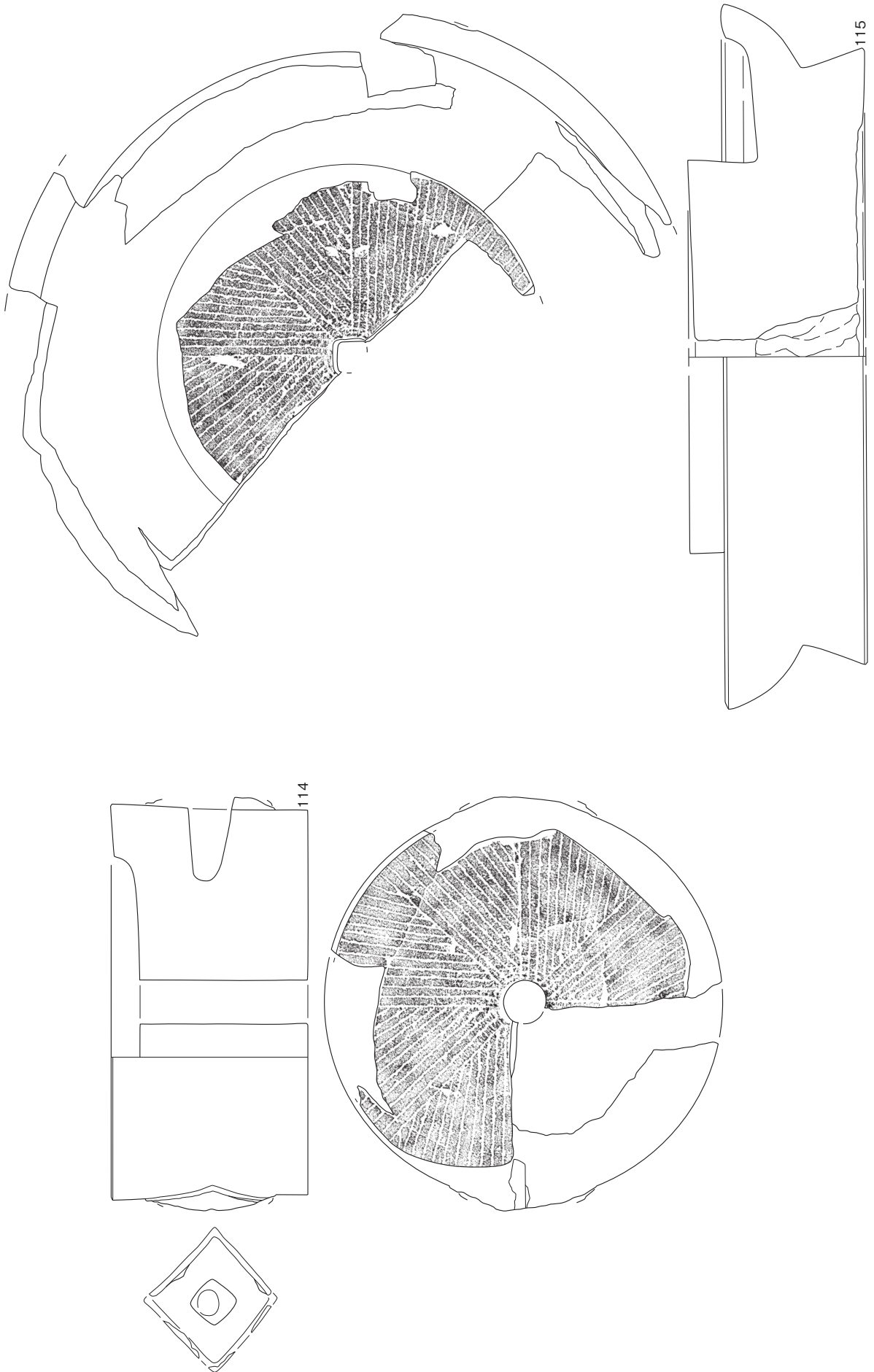
II-86 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (9) (1/4)



II-87 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (10) (81～83は1/4、84～85は1/1)

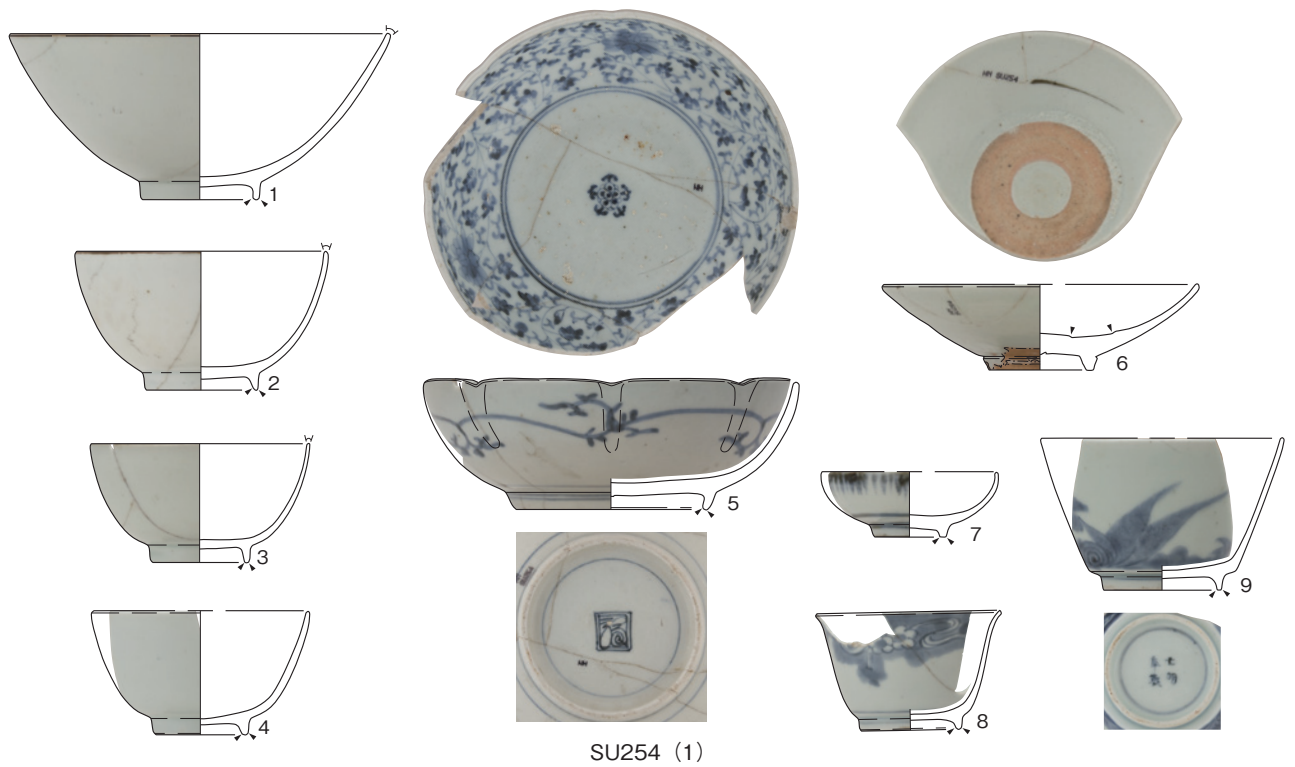
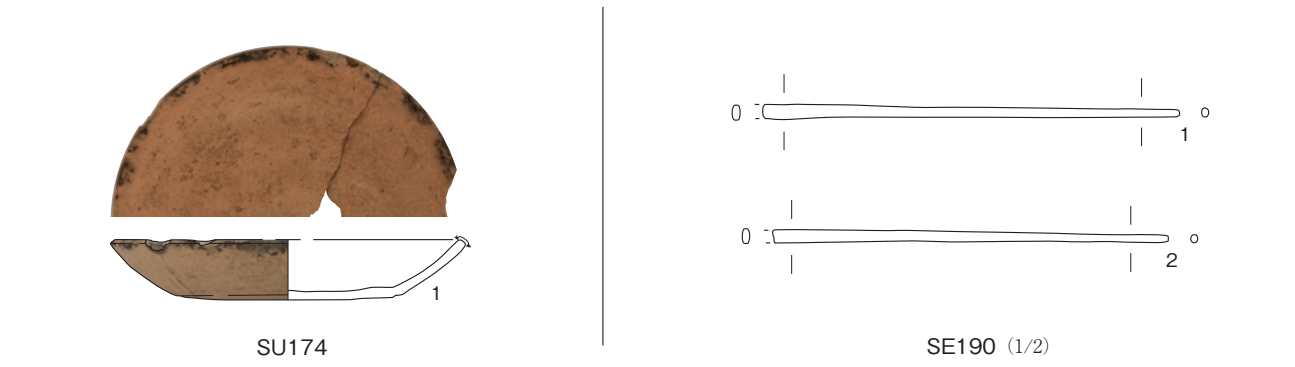
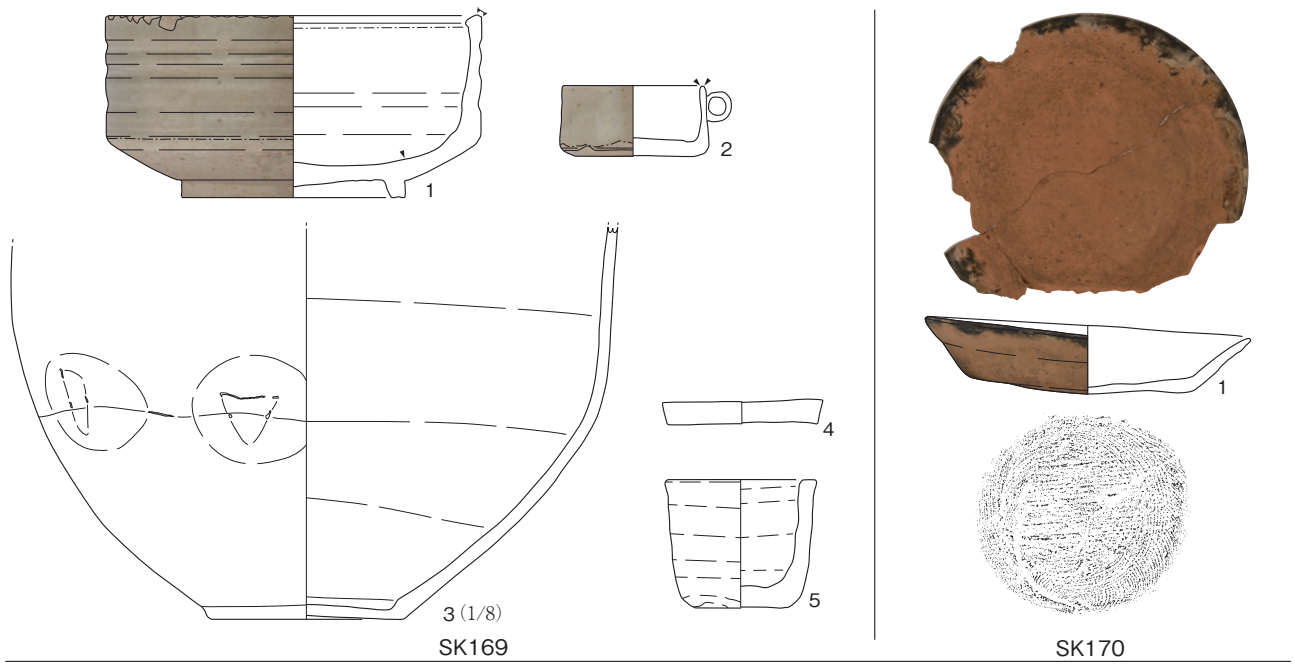


II-88 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (11) (86~111は1/2)



II-89 図 SK168+C 面焼土出土遺物 (12)

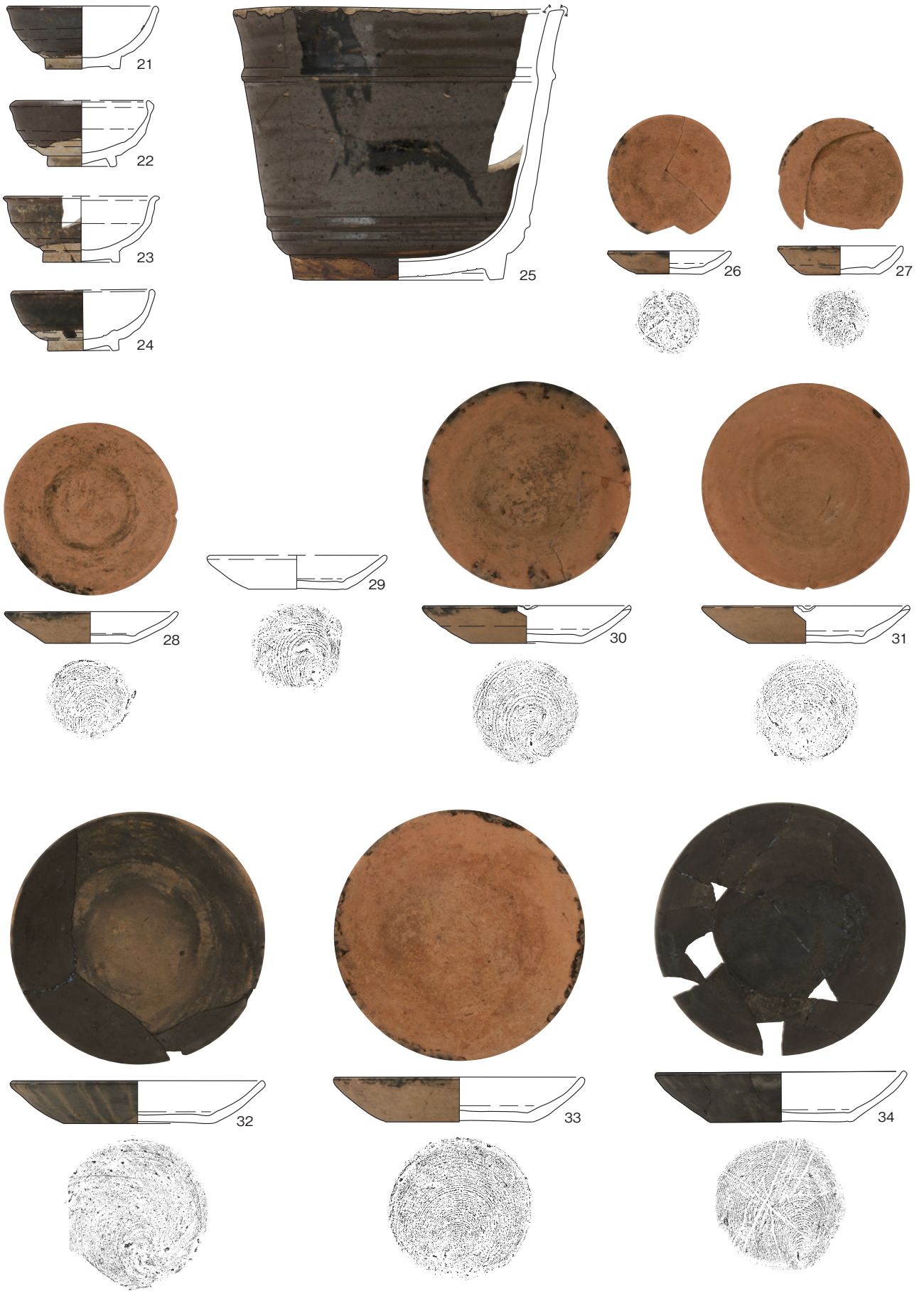




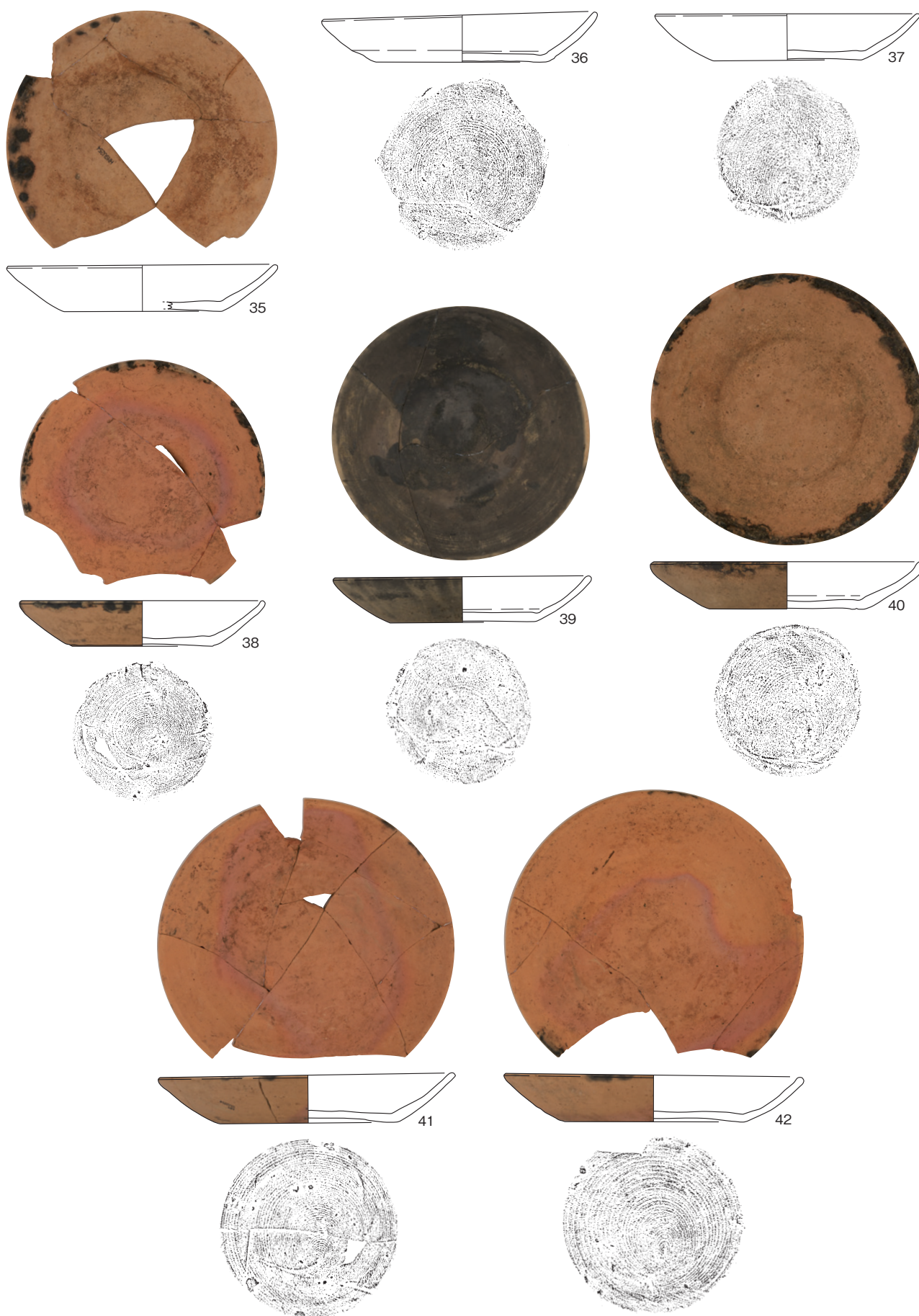
II-90 図 SK169、SK170、SU174、SE190、SU254 (1) 出土遺物



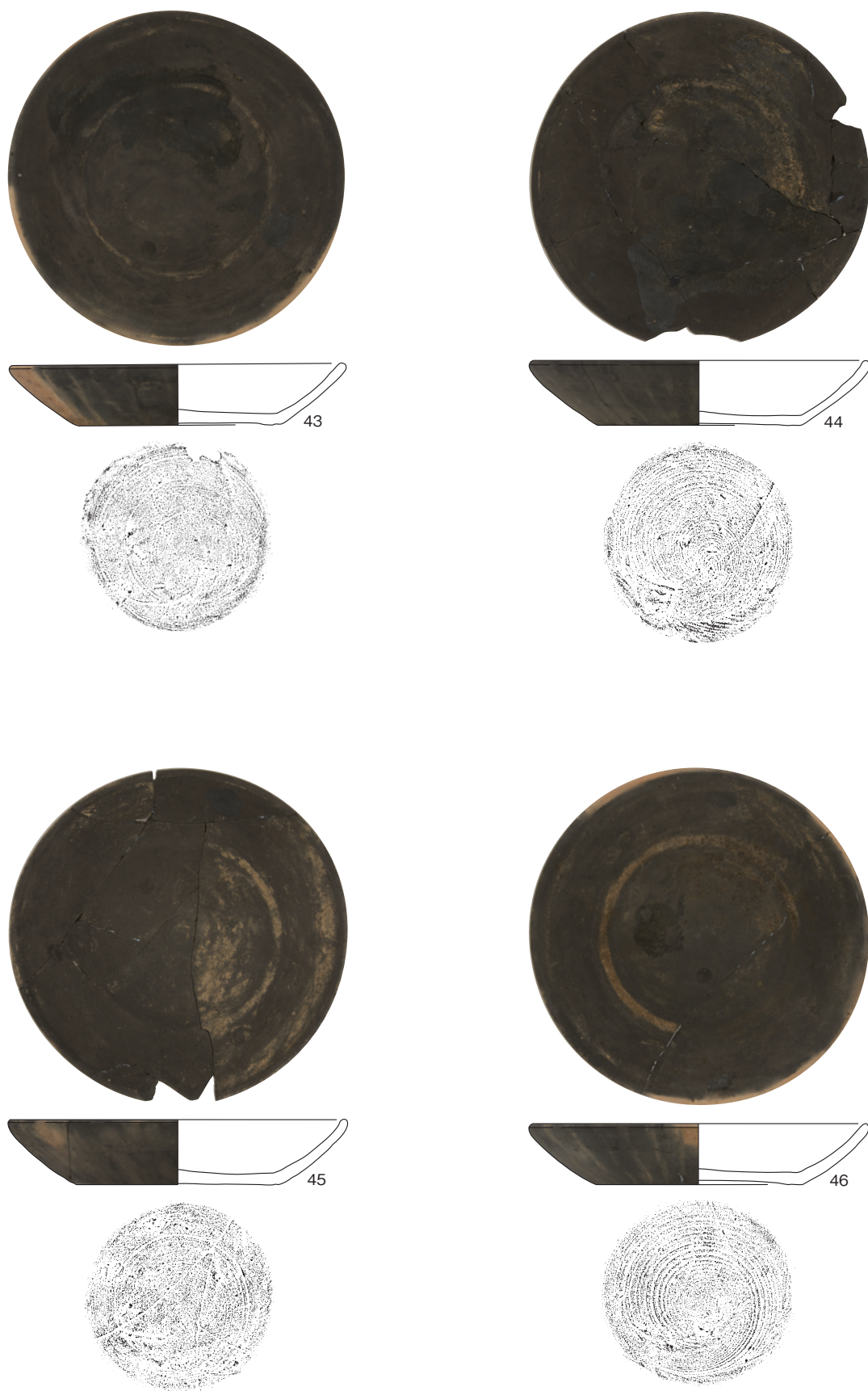
II-91 図 SU254 出土遺物 (2)



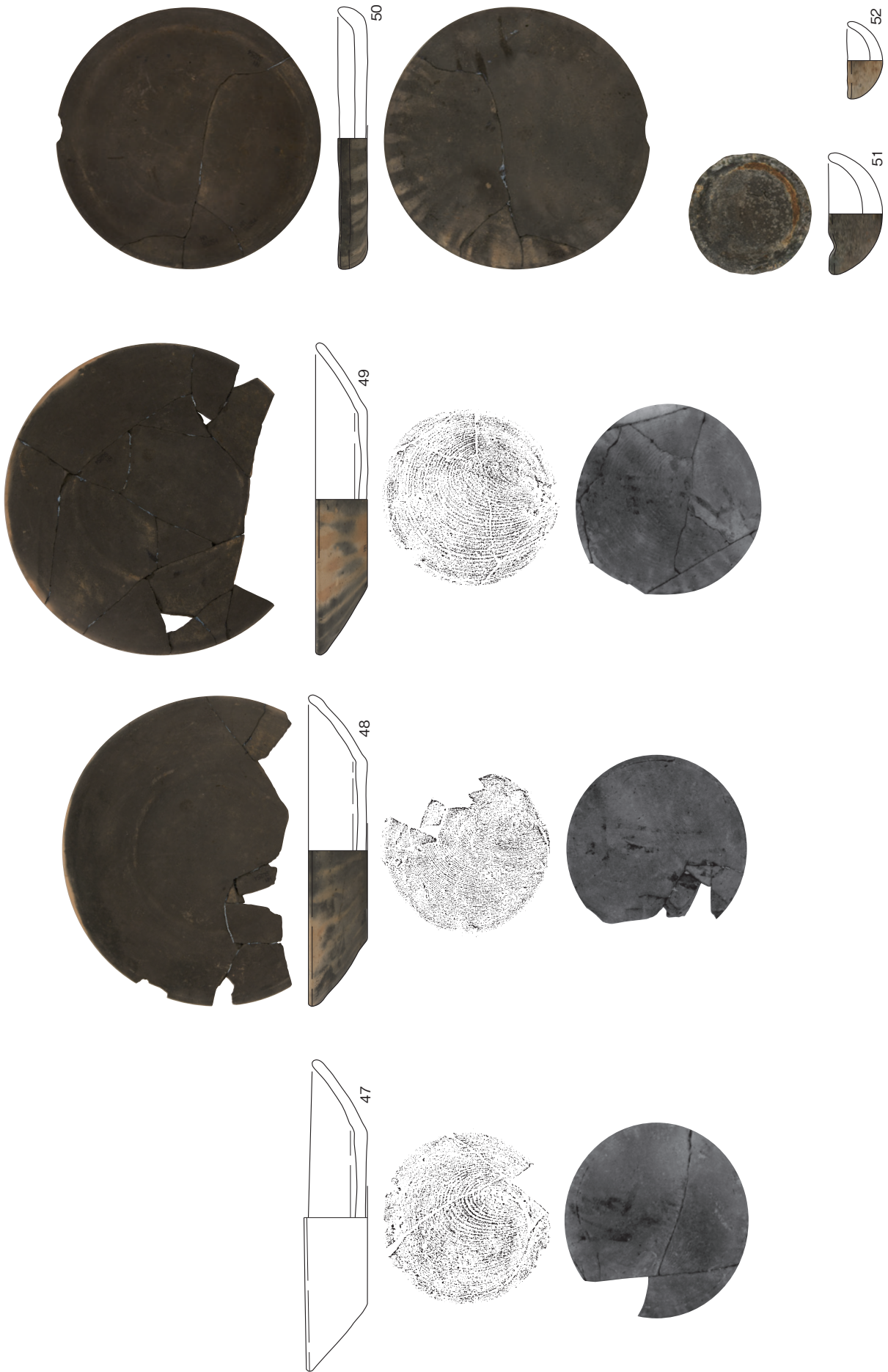
II-92 図 SU254 (3) 出土遺物



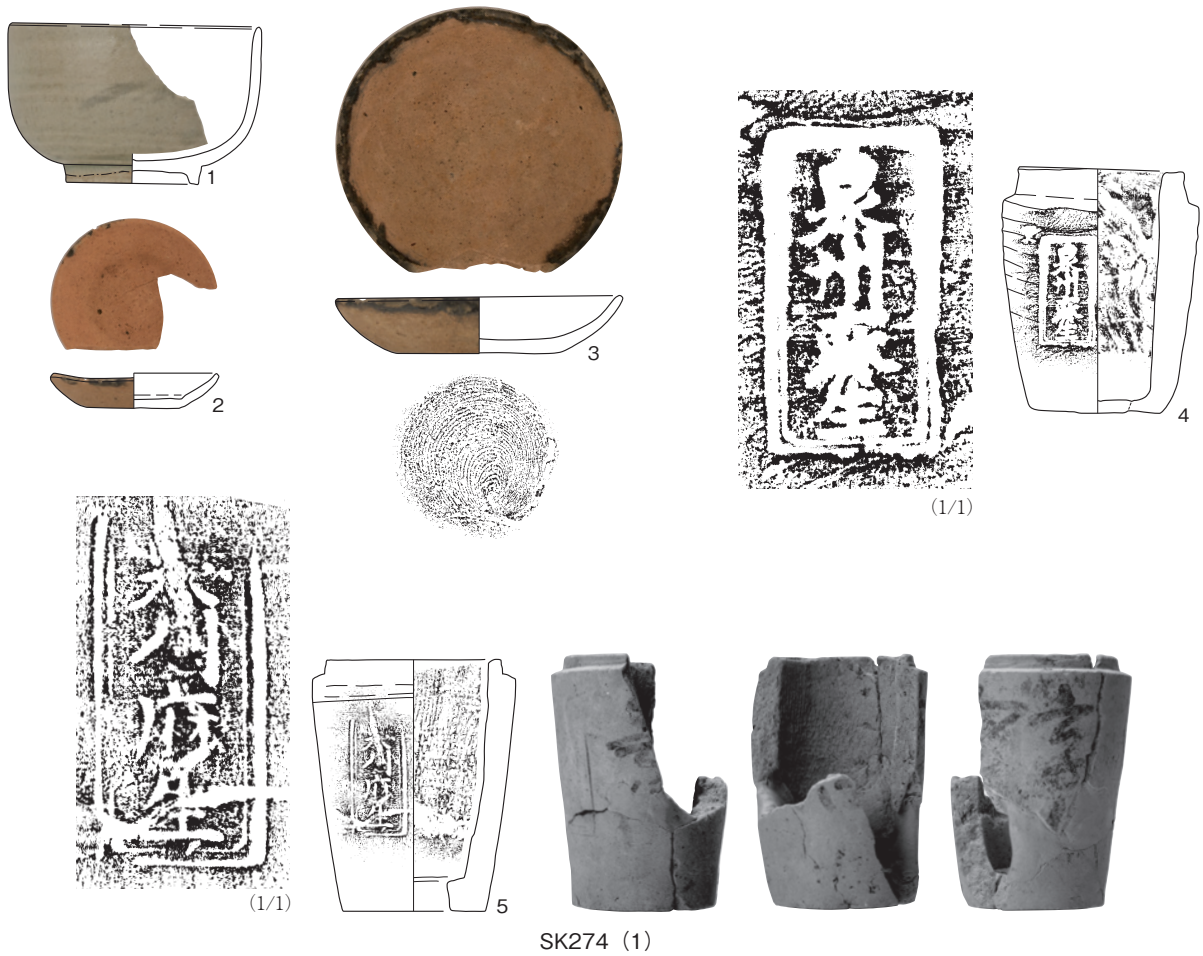
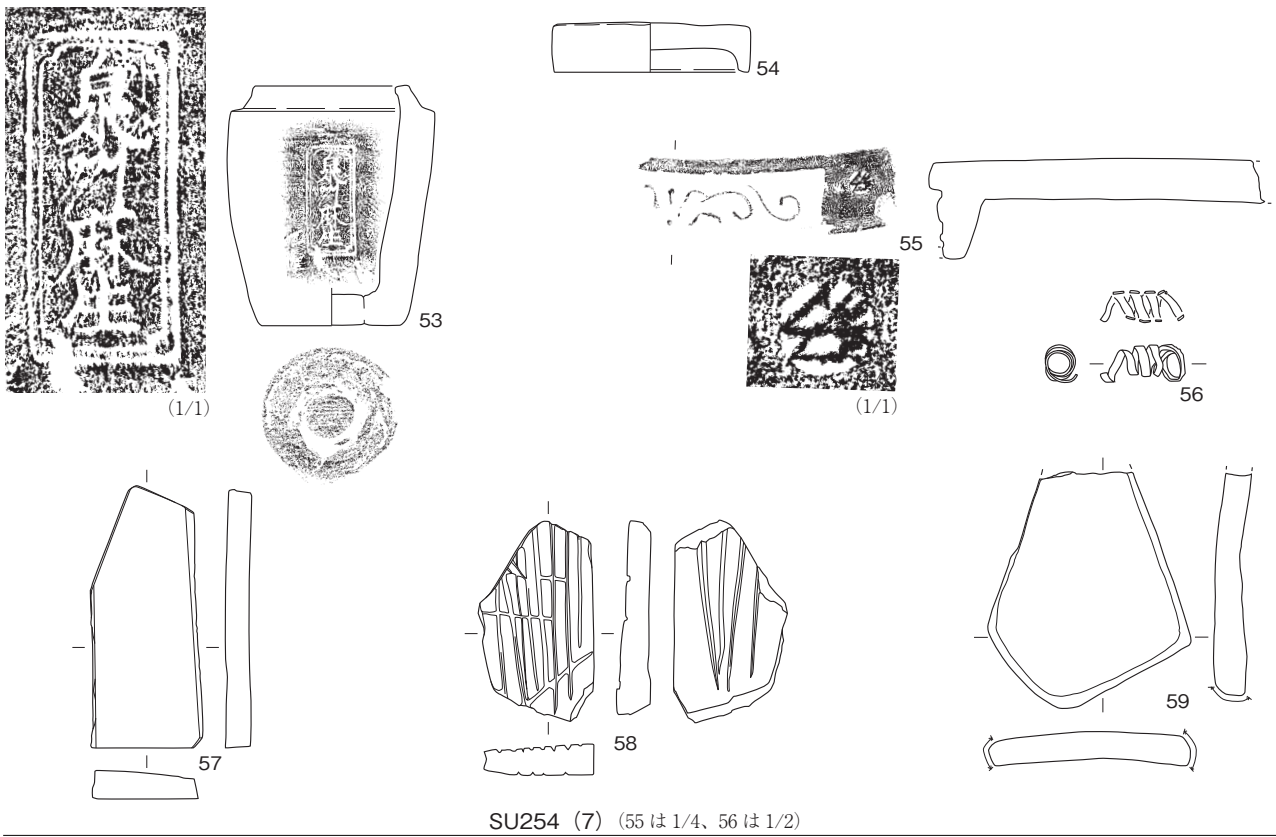
II-93 図 SU254 (4) 出土遺物



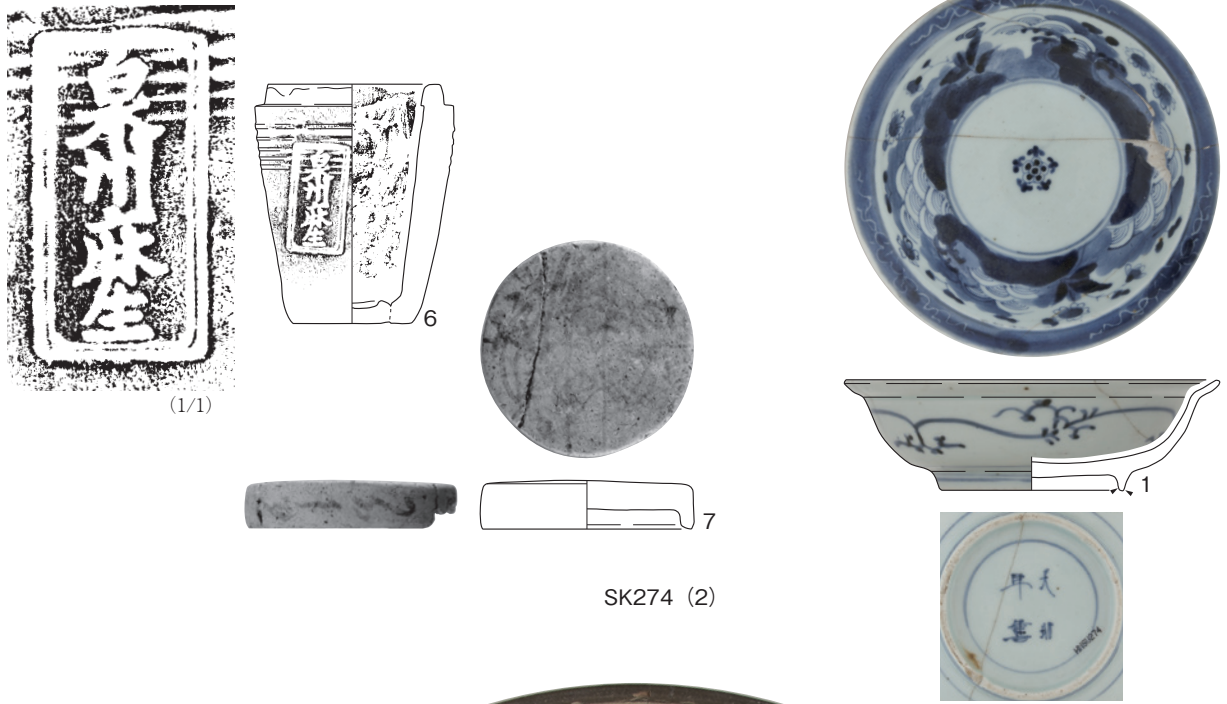
II-94 図 SU254 出土遺物 (5)



II-95 図 SU254 出土遺物 (6)

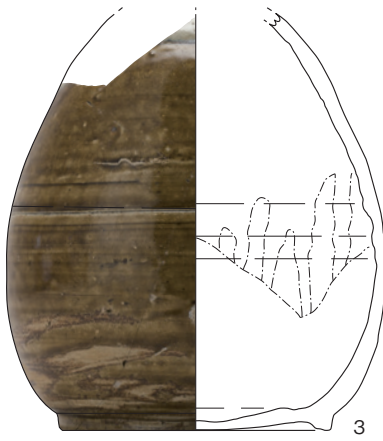


II-96 図 SU254 (7)、SK274 (1) 出土遺物

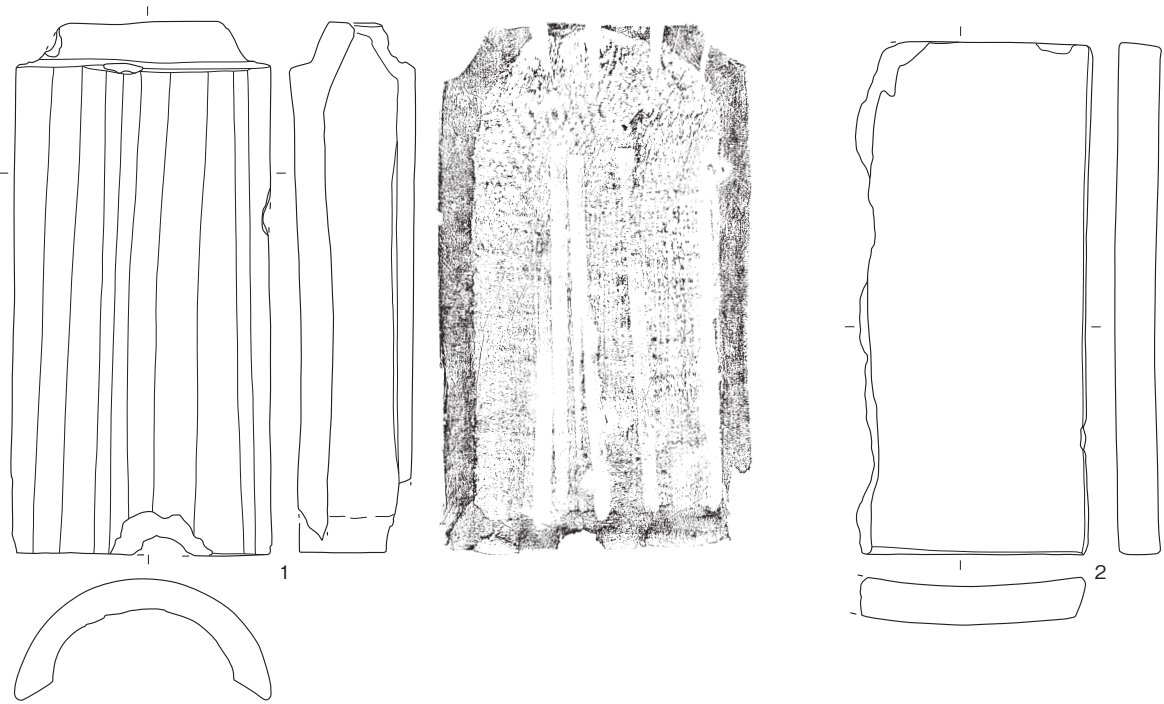


II-97 図 SK274 (2)、SU254+SK274 (1) 出土遺物

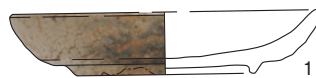




SU254+SK274 (2)

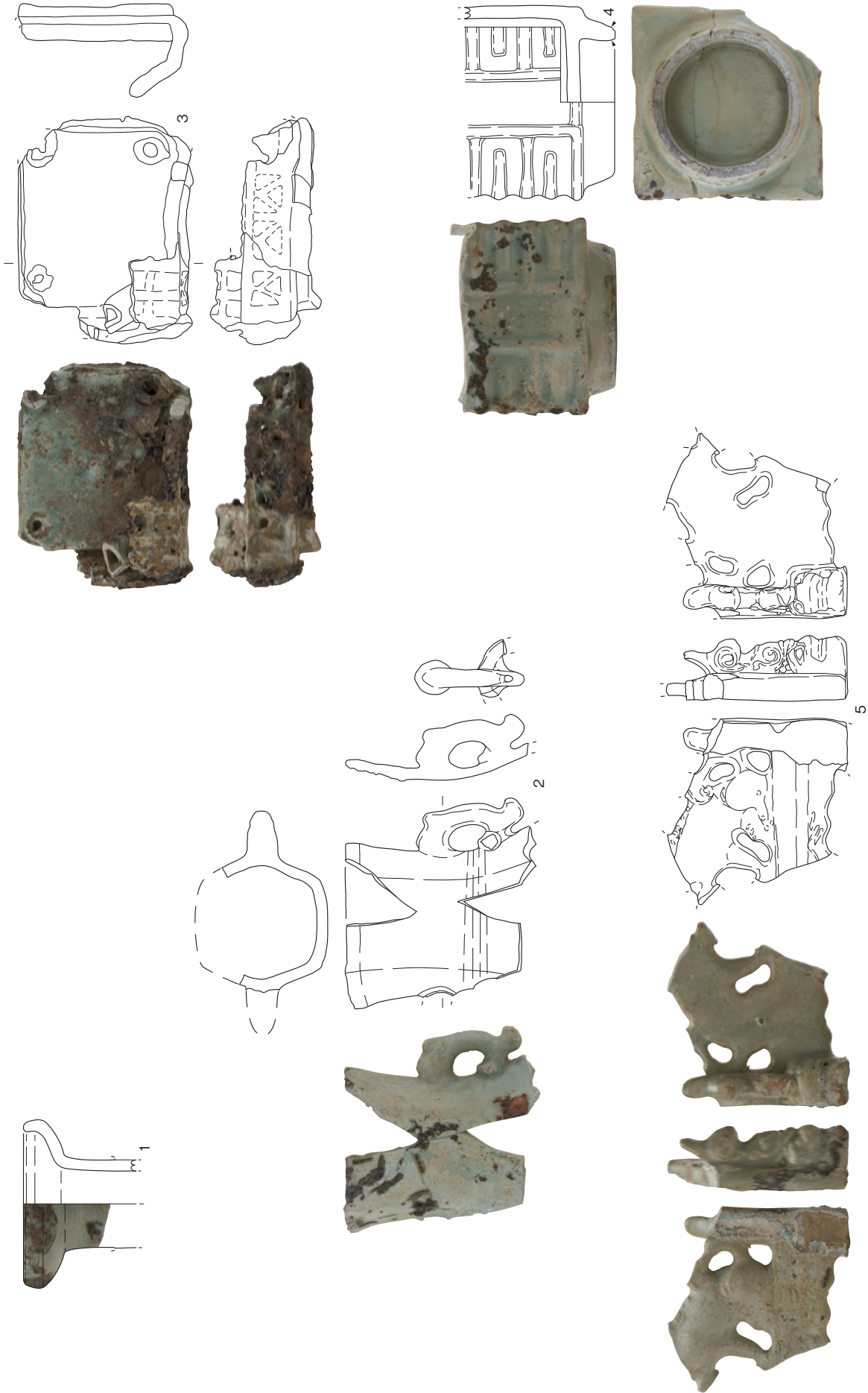


SL272 (1/4)



SK275

II-98 図 SU254+SK274 (2)、SU272、SK275 出土遺物



II-99 図 SK299 出土遺物 (1)



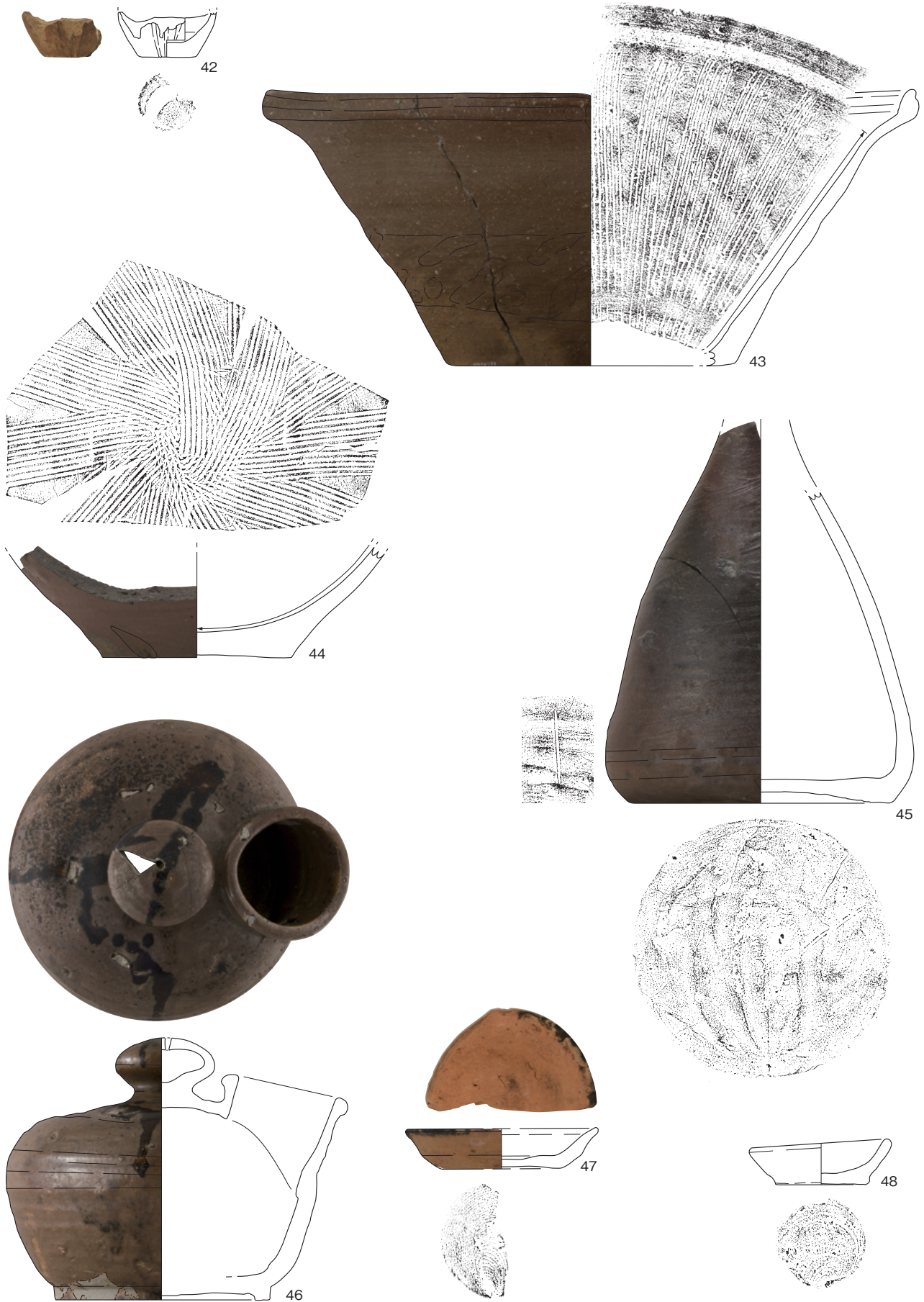
II-100 図 SK299 出土遺物 (2)



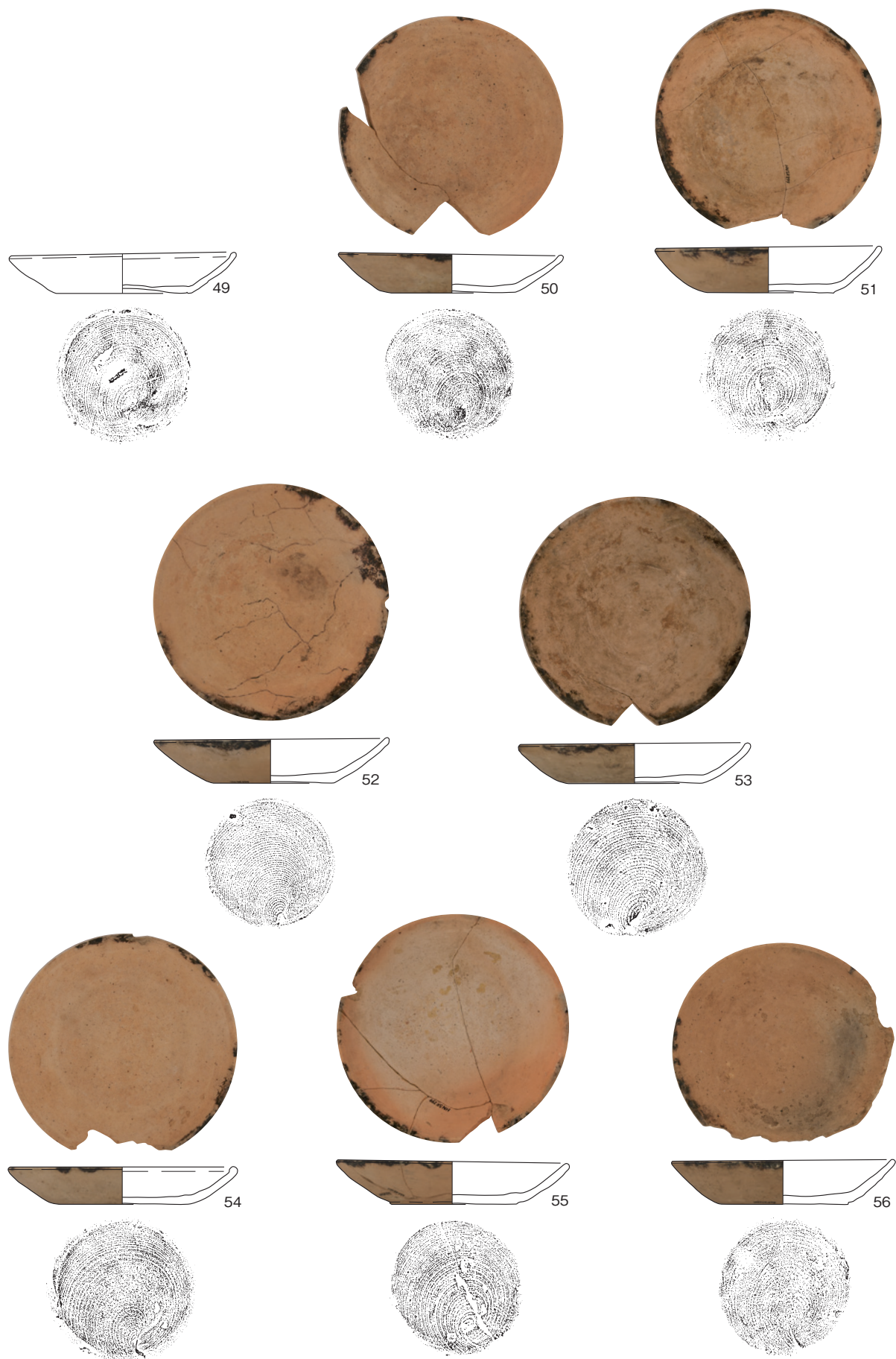
II-101 図 SK299 出土遺物 (3)



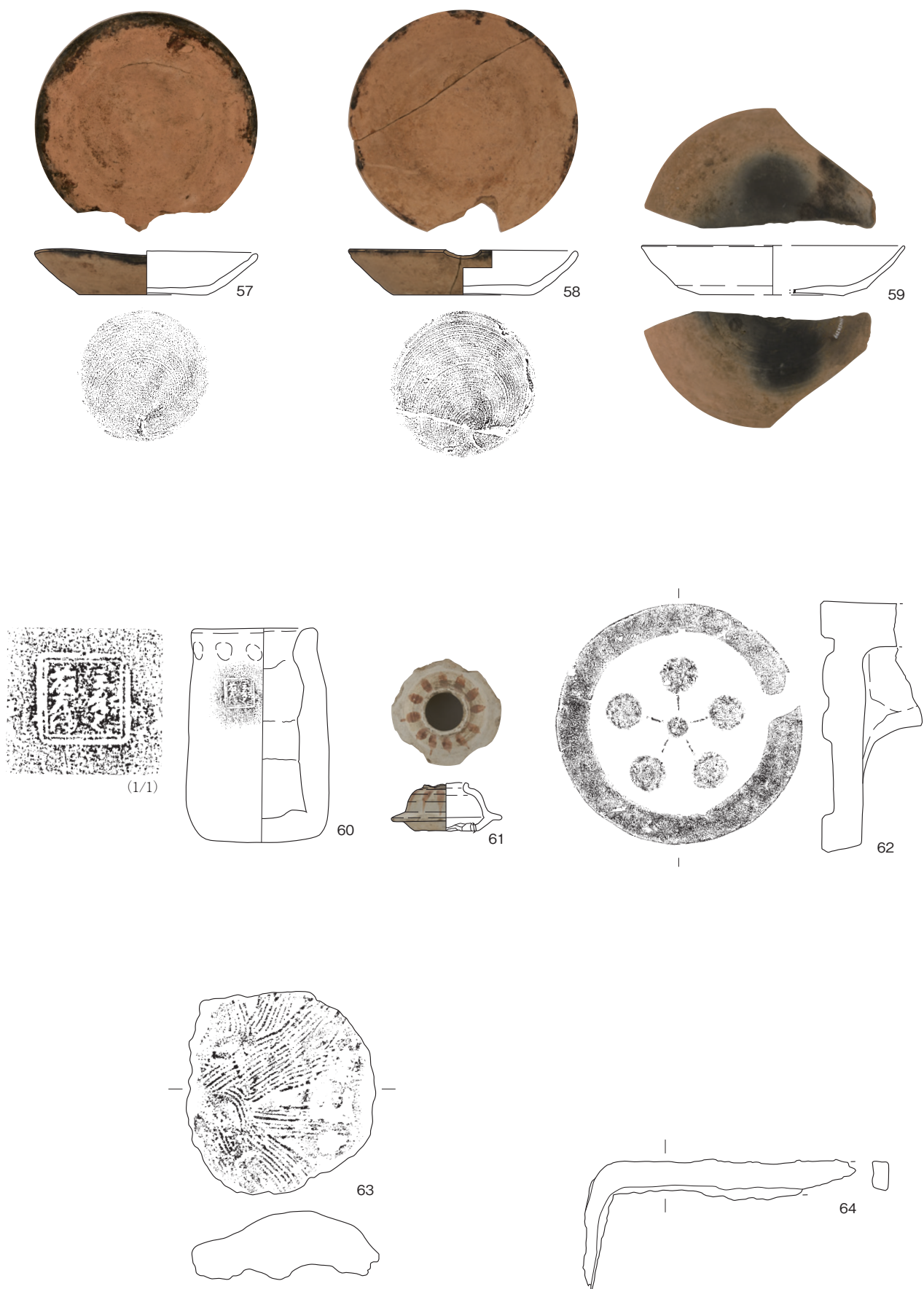
II-102 図 SK299 出土遺物 (4)



II-103 図 SK299 出土遺物 (5)

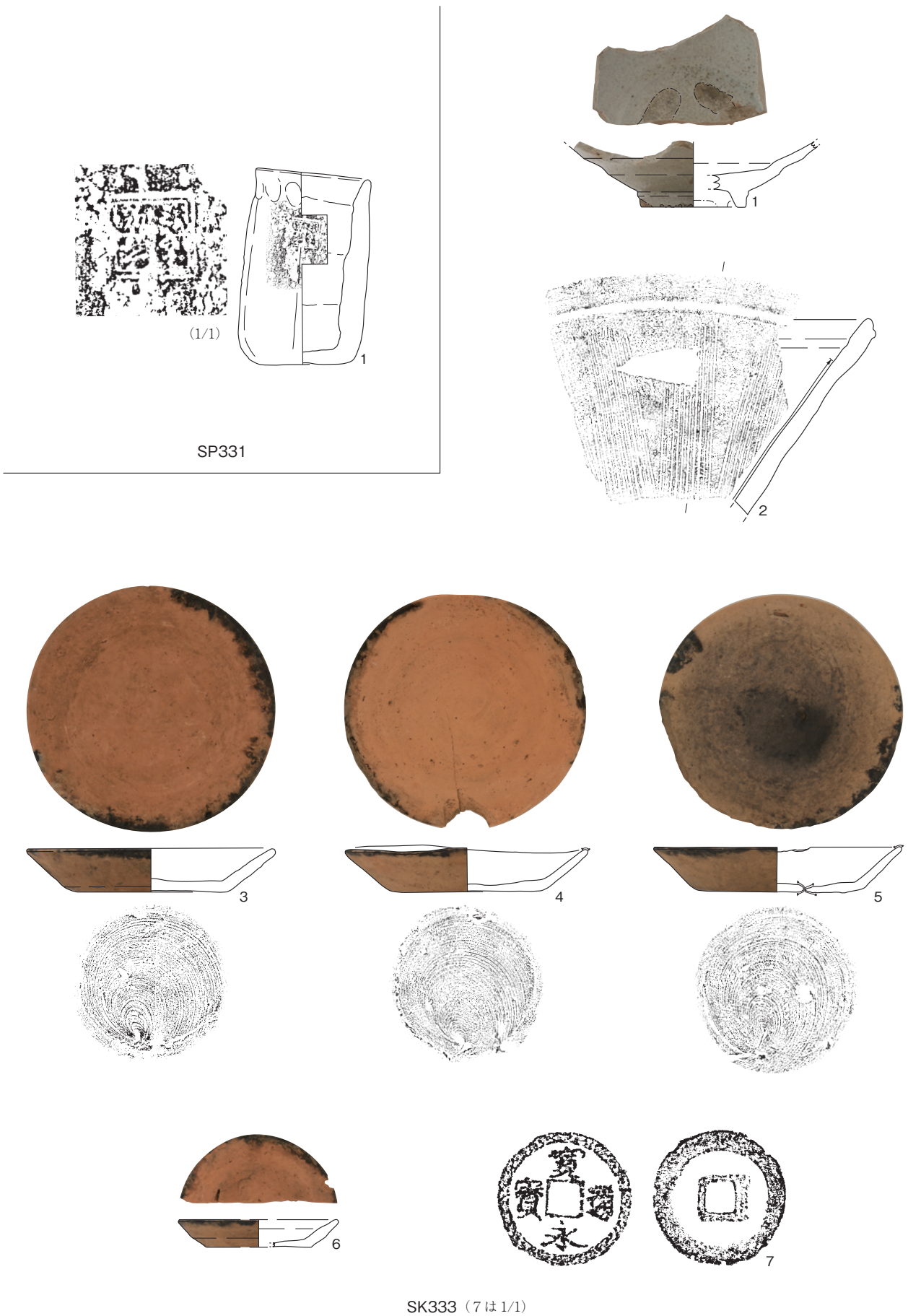


II-104 図 SK299 出土遺物 (6)

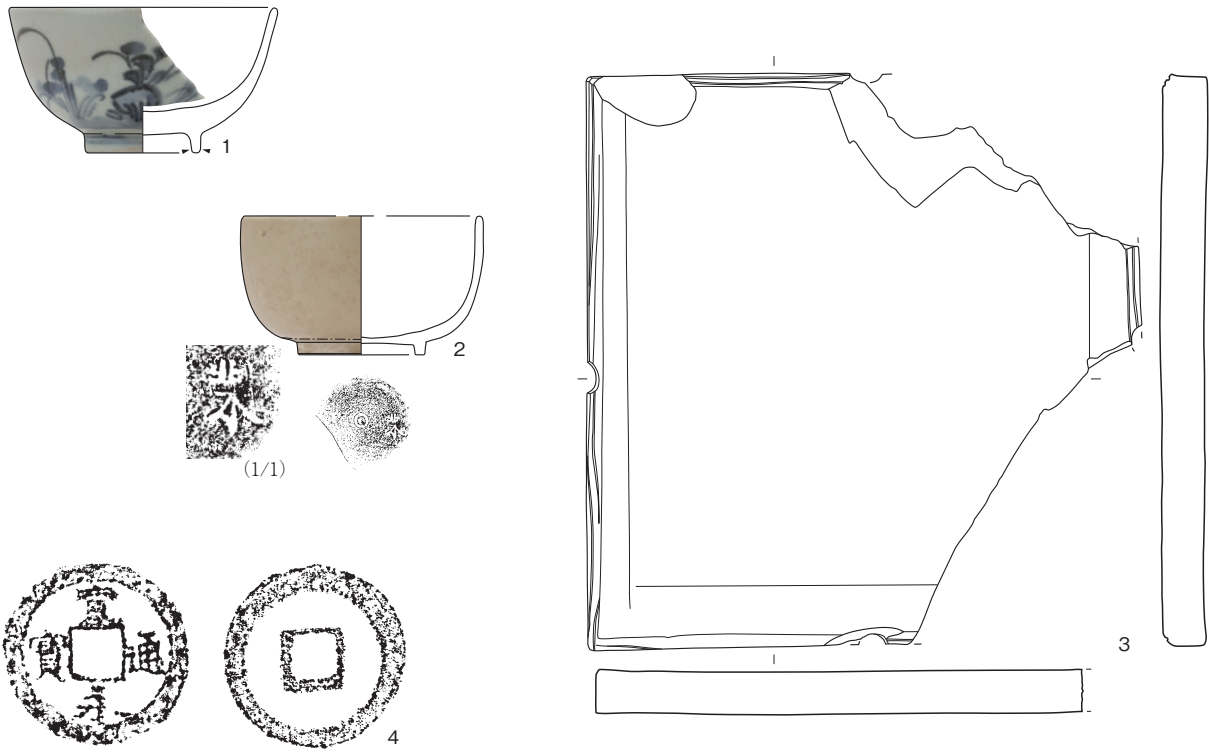


II-105 図 SK299 出土遺物 (7) (62は1/4、63～64は1/2)

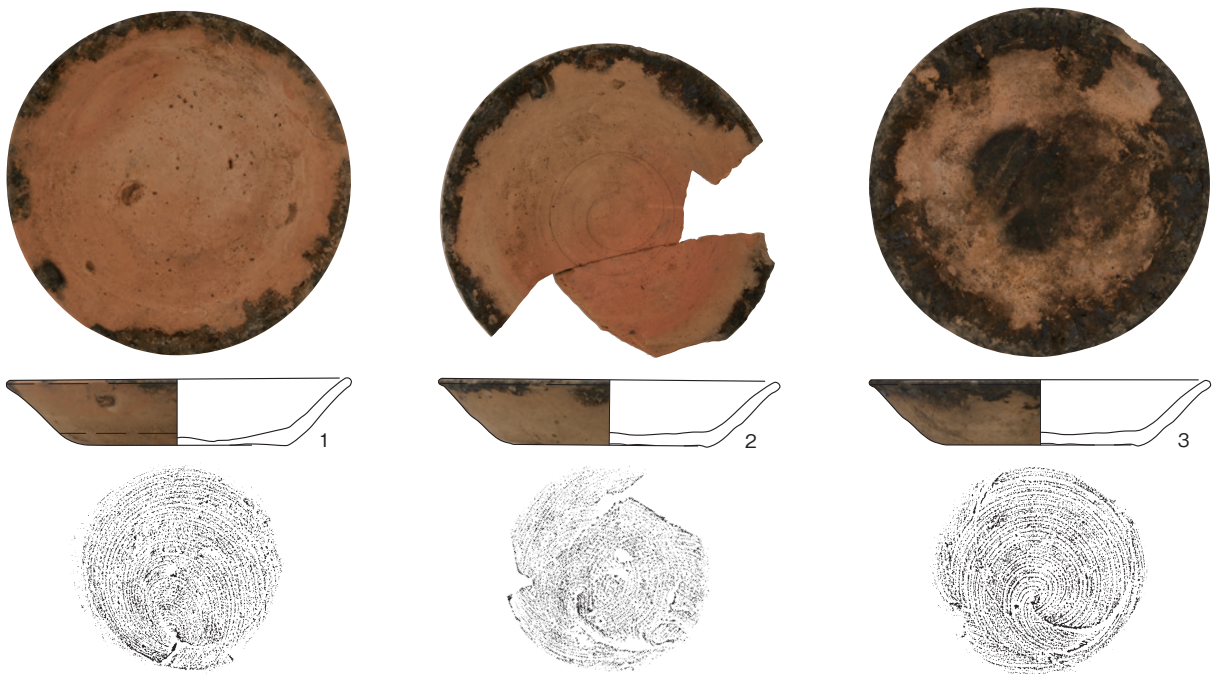




II-106 図 SP331、SK333 出土遺物

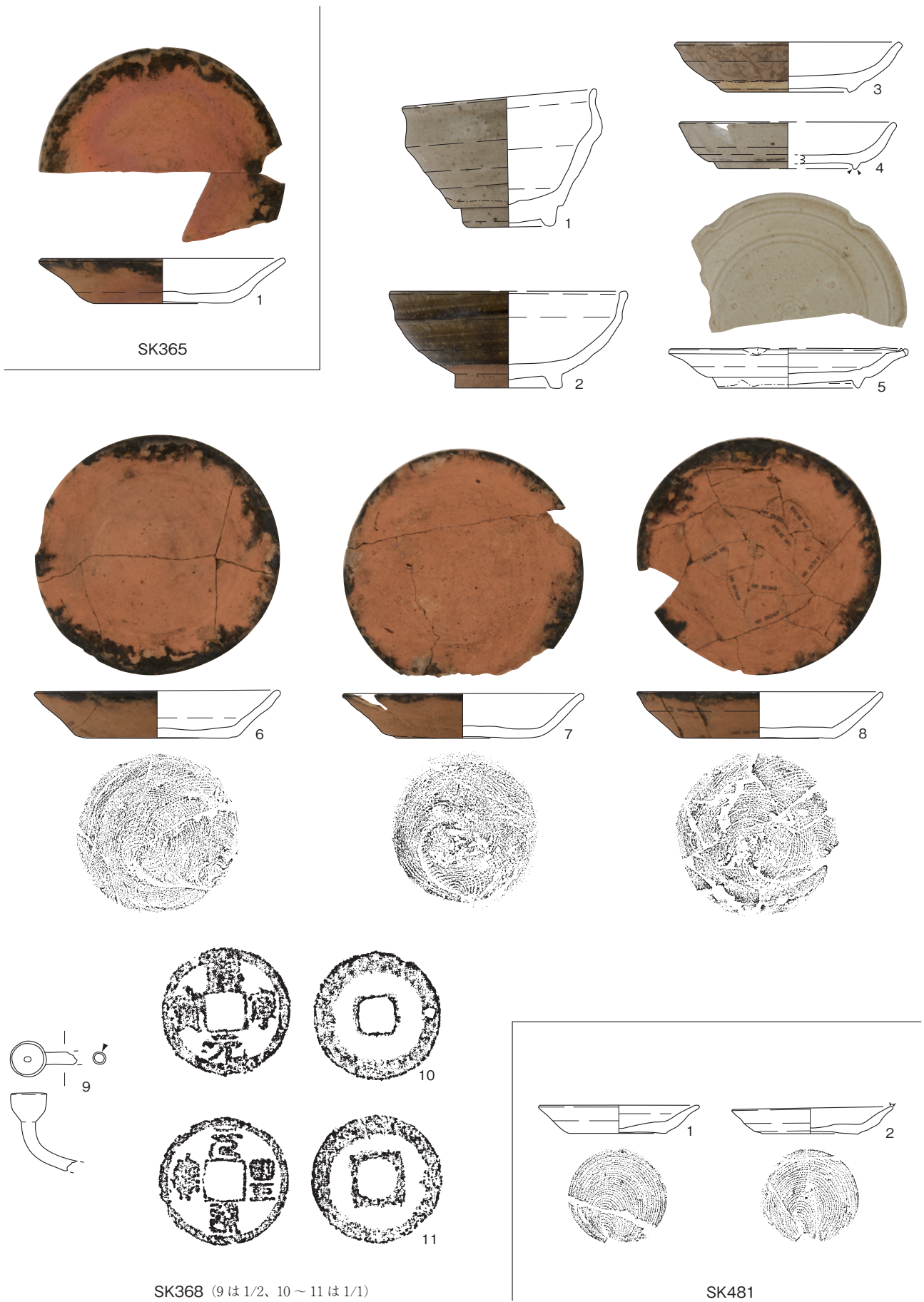


SK357 (4は1/1、5は1/4)

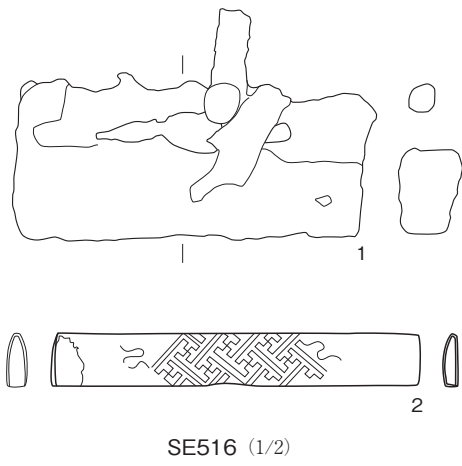


SK364

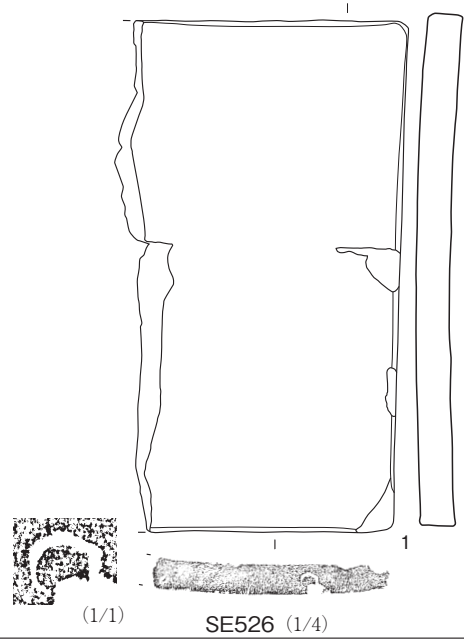
II-107 図 SK357、SK364 出土遺物



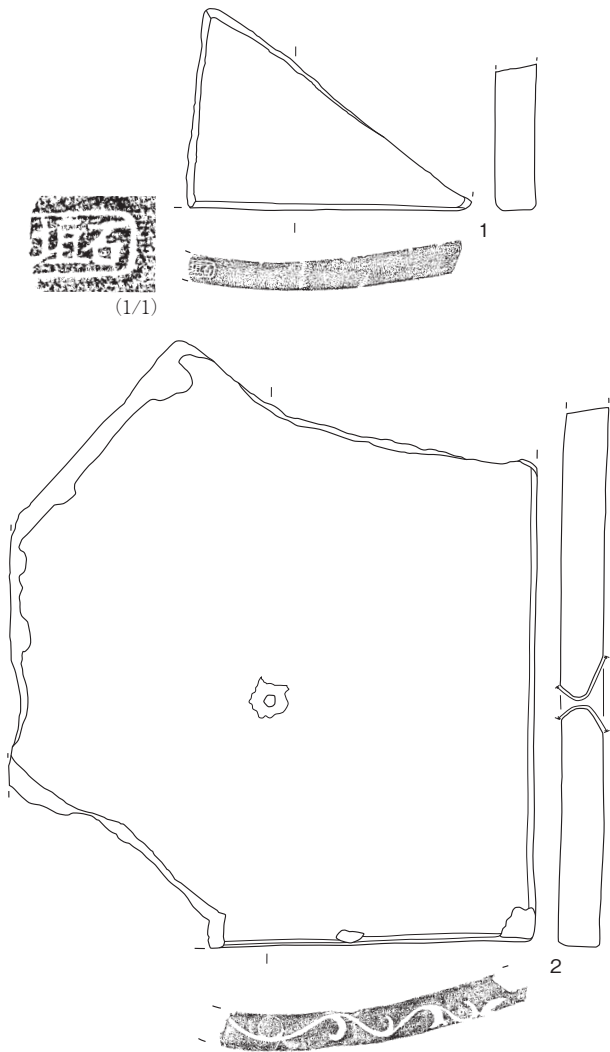
II-108 図 SK365、SK368、SK481 出土遺物



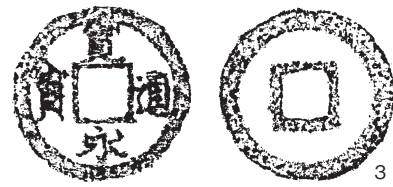
SE516 (1/2)



SE526 (1/4)



遺構外(1) (1~2は1/4, 3~5は1/1, 6~7は1/2)



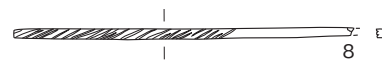
3



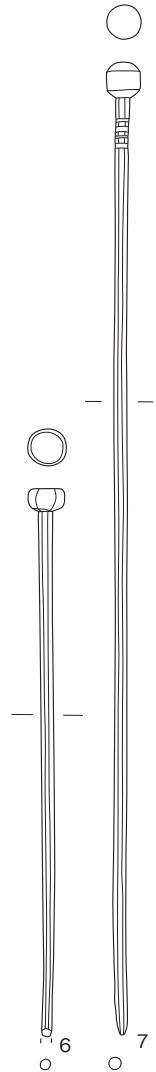
4



5



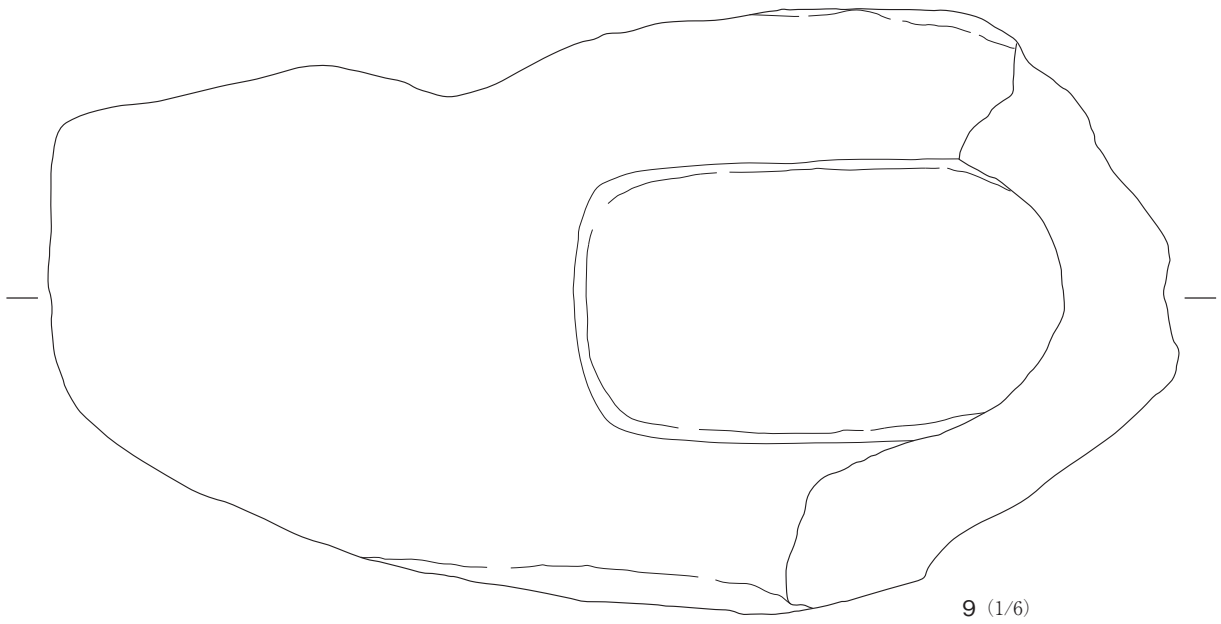
8



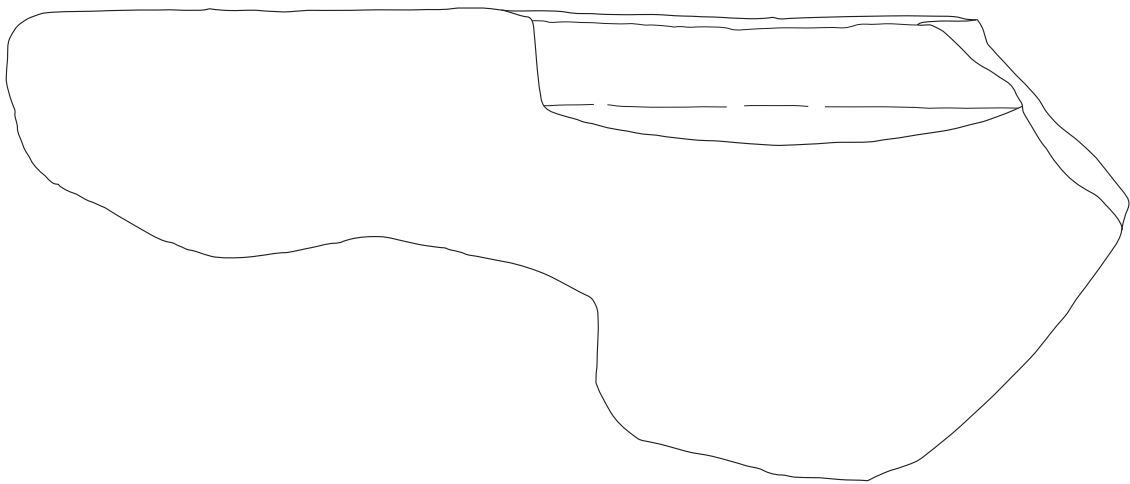
6

7

II-109図 SE516、SE526、遺構外(1)出土遺物



9 (1/6)



II-110図 遺構外出土遺物(2)









遺構名	胎質・産地		TQ		TTS		TZ (生産地不明)																								
	器種	小分類	合計	他	合計	他	1	2	4	5	6	9	10	15	16	17	20	21 (軟質施釉)	22	25	27	29	31	33 (脚)			34 (土瓶)			他	小計
							合計	他	a	b	c	d	e	f	g	i	k	l	n												
SK168+C面焼土			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

遺構名	胎質・産地		TZ (生産地不明)		陶器	
	器種	小分類	合計	他	合計	
					53	合計
SK168+C面焼土			0	0	0	56
合計			0	0	0	56

遺構名	胎質・産地		DD (京都・信楽系土器)		DZ (生産地不明)		5 (鉢)										21 (植木鉢)			24			31 (小鉢)										
	器種	小分類	合計	他	合計	他	6	9	15	a	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	
							合計	他	小計	a	d	他	小計	a	d	他	小計	a	d	他	小計	a	d	他	小計	a	d	他	小計	a	d	他	小計
SK168+C面焼土			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

遺構名	胎質・産地		DZ (生産地不明)		38 (押受け皿)		43		44 (ひょうそく)		45		46		47 (ほうろく)		48 (七輪)		49		51 (盥童)				
	器種	小分類	合計	他	合計	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	
																									合計
SK168+C面焼土			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

遺構名	胎質・産地		DZ (生産地不明)		52 (燗台)		54		63		00 (蓋)			
	器種	小分類	合計	他	合計	他	小計	a	b	c	d	e	f	g
SK168+C面焼土			1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計			1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

II 看護職員等宿舍1号棟地点の調査

遺構名	胎質・産地 器種	DZ(生産地不明)										土器 合計	備考		
		00(産)													
		小分類	j	k	l	o	他	小計	他	小計	他				
SK168+C面焼土			0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	14	14	160
	合計		0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	14	14	160

## 第V章 古墳時代の遺構と遺物

### 第1節 遺構

古墳前期の竪穴住居址6軒、後期の竪穴住居址1軒が検出された。ほとんどの遺構が江戸時代の削平によって遺存状況は悪いが、SI1001のみ江戸時代遺構との重複がなく、良好な状態で遺存していた。

#### SI1001 (II-112～117図)

G7・G8・H8グリッドに位置する竪穴住居址である。平面形は隅丸方形を呈し、南西・北東4.7m、南東・北西5.1mの規模を有する。近世の遺構による攪乱を免れ、全周が遺存していた。確認面からの深さは北東角付近が最も深く30cm程度である。

床面は暗褐色土を含んだロームブロックを固めた貼床で、全周に壁溝が検出された。壁溝の深さは床面から10～15cm程度である。床面からは主柱穴4本に加え、炉から壁寄りと炉を挟んで正対する壁付近に主柱穴に比し浅い柱穴が検出されている。また北西南東軸主柱穴間に径10cm、深さ10cmの小ピットが検出されている。主柱穴の補助的な小ピットの可能性が考えられる。

住居中央から北西寄りに炉が検出されている(II-113図)。炉の平面形はやや不整形であるが北西・南東に長い長軸90cm、短軸50cmの楕円状を呈している。最深部は約5cmで炉床部は赤化し堅くしまっている。炉の中央付近に枕石と思われる自然石が出土している。

住居址の覆土はレンズ状堆積を呈し、褐色～暗褐色土であり、床面・壁に近づくにつれローム粒、ロームブロックを多く含む。

遺物は948点出土しており、中央付近上層に多い。また破片も大形で近接する位置で接合する個体も多く、廃棄場の様相を呈している(II-114～116図)。

#### SI1002 (II-118～121図)

G9グリッドに位置する竪穴住居址である。西側、北側が江戸時代以降の攪乱によって破壊され、遺存状態は良くない。また東側は調査区域外に及び、全体像の約1/4を調査したにすぎず、規模など詳細は不明である。壁は南側コーナー付近のみ確認され、その形状から平面形は隅丸方形を呈すると推定される。床面はほぼ全面に暗茶褐色土を用いた貼床が形成され、床面北西端で地床炉が検出された。平面形は不整楕円形を呈し、炉床は比較的広範囲で著しく被熱している。柱穴は確認されな

かった。

遺物はほとんど出土していない。

#### SI1003 (II-122図)

H5・H6・I5・I6グリッドに位置する竪穴住居址である。江戸時代の削平により床面まで破壊され、貼床構成土と壁溝、土坑のみ遺存していた。西側に重複するSI1005より新しい。壁溝の状況より平面形は1辺約500cmを測る隅丸方形を呈すると推定される。遺存する貼床を精査したところ、北壁付近でわずかに貼床面が確認された。南側コーナーで検出された土坑は、覆土下部に焼土が堆積し、上部より台付甕脚部(II-141図1)が出土した。

遺物は小片が十数点出土したにすぎない。

#### SI1005 (II-123～125図)

H5・H6・I5・I6グリッドに位置する竪穴住居址である。江戸時代の遺構、削平によってかなり破壊され、遺存状況は悪い。また約1/3が調査区域外に及ぶ。東側でSI1003と重複し、それより古い。残存部の形状から、平面形は1辺約550cmを測る隅丸方形を呈すると推定される。貼床は北方向へわずかに傾斜し、部分的にしまりが強い箇所が存在する。壁溝、柱穴は確認されなかった。炉址は調査区際で検出された。平面形は楕円形を呈すると推定され、覆土全体に焼土が含まれていた。掘方は壁から約50cm内側で約20cm下り、1辺約450cmを測る隅丸方形の掘方が存在する。

遺物は、炉址南側周辺から小片が多量に出土した。

#### SI1006 (II-126～129図)

F5・6グリッドに位置する竪穴住居址である。江戸時代の開発により上部、東部は削平され、西側床面が残存しているにすぎない。残存部の状況から平面形は1辺約450cmを測る隅丸方形と推定され、壁際には壁溝が巡っている。床面ほぼ中央で炉址が検出された。平面形は楕円形を呈し、覆土には多量の焼土が含まれていた。また北西角の小穴は本遺構の柱穴と考えられるが、共伴する小穴は確認されなかった。掘方は壁面より約40cm内側で約20cm下り、SI1005同様の形状を呈す。掘方坑底面から3箇所の被熱痕が検出された。全て掘方埋土にパックされていること、壁際にも存在していることから、本遺構より古い遺構と判断され、遺物が伴っていないので断定はできないが、SF555の存在から屋外炉の炉床面の

可能性が考えられる。

遺物は図示した器台脚部（II - 141 図1）など少量出土している。

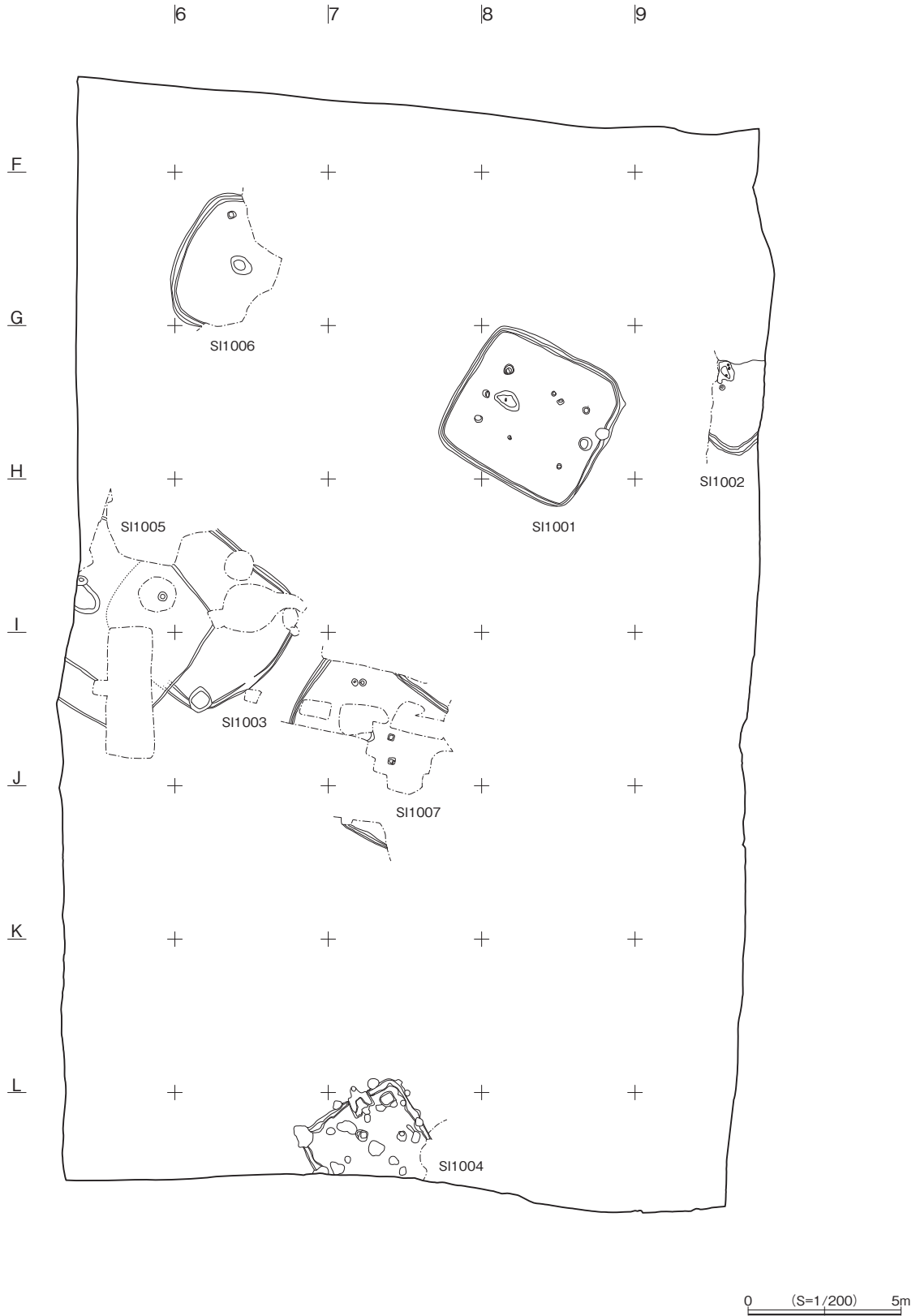
#### SI1007（II 130～132 図）

I6・I7・J7 グリッドに位置する竪穴住居址である。江戸時代の遺構、削平によって大きく破壊され、床面約1/2が残存するにすぎない。平面形は1辺約500cmを測る（隅丸）方形を呈すると推定される。壁際には幅約20cmを測る壁溝が存在する。床面より小穴が数基確認されたが、各々の位置、規模より確実に本遺構の柱穴と判断できるものはない。炉址も確認されていない。貼床は遺存範囲全面にて確認され、暗褐色土で形成されていた。またSI1005、SI1006と同様に壁際より約20cm内側で一段下がっていることが確認された。

遺物は土器小片が数十点出土している。

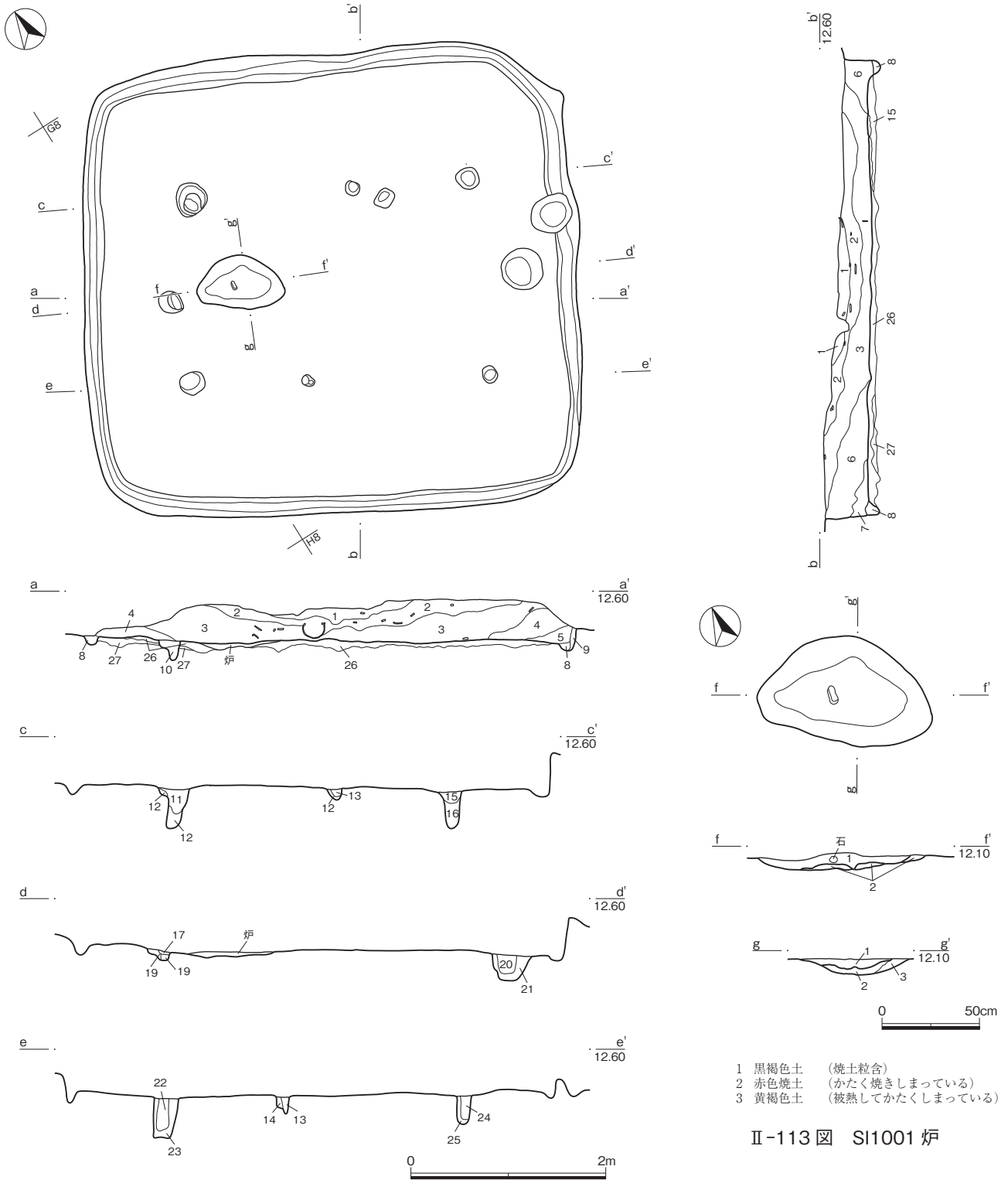
#### SI1004（II - 133～137 図）

K7・L6・L7 グリッドに位置する竪穴住居址である。南側は調査区域外に及び未調査である。北壁に竈を有する住居で、平面形は1辺約370cmを測る方形を呈す。江戸時代の削平を受け壁はほとんど遺存していないが、調査範囲内では竈位置を除き壁溝が巡る。北東角付近に東西50cm、南北40cm、床面からの深さ35cmを測る長方形土坑が存在する。床面からは多数の小穴が検出されたが、確実に本遺構の柱穴と判断できるものは無い。竈は北壁東よりに位置する。両袖及び壁際で灰褐色粘土による躯体が確認された。また先端には煙道の痕跡が確認されている。焚口手前床面直上から横位に潰れた状態で長胴甕（II - 142 図3）と甌（同図4）が出土した。



II-111 図 古墳時代遺構配置図

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査

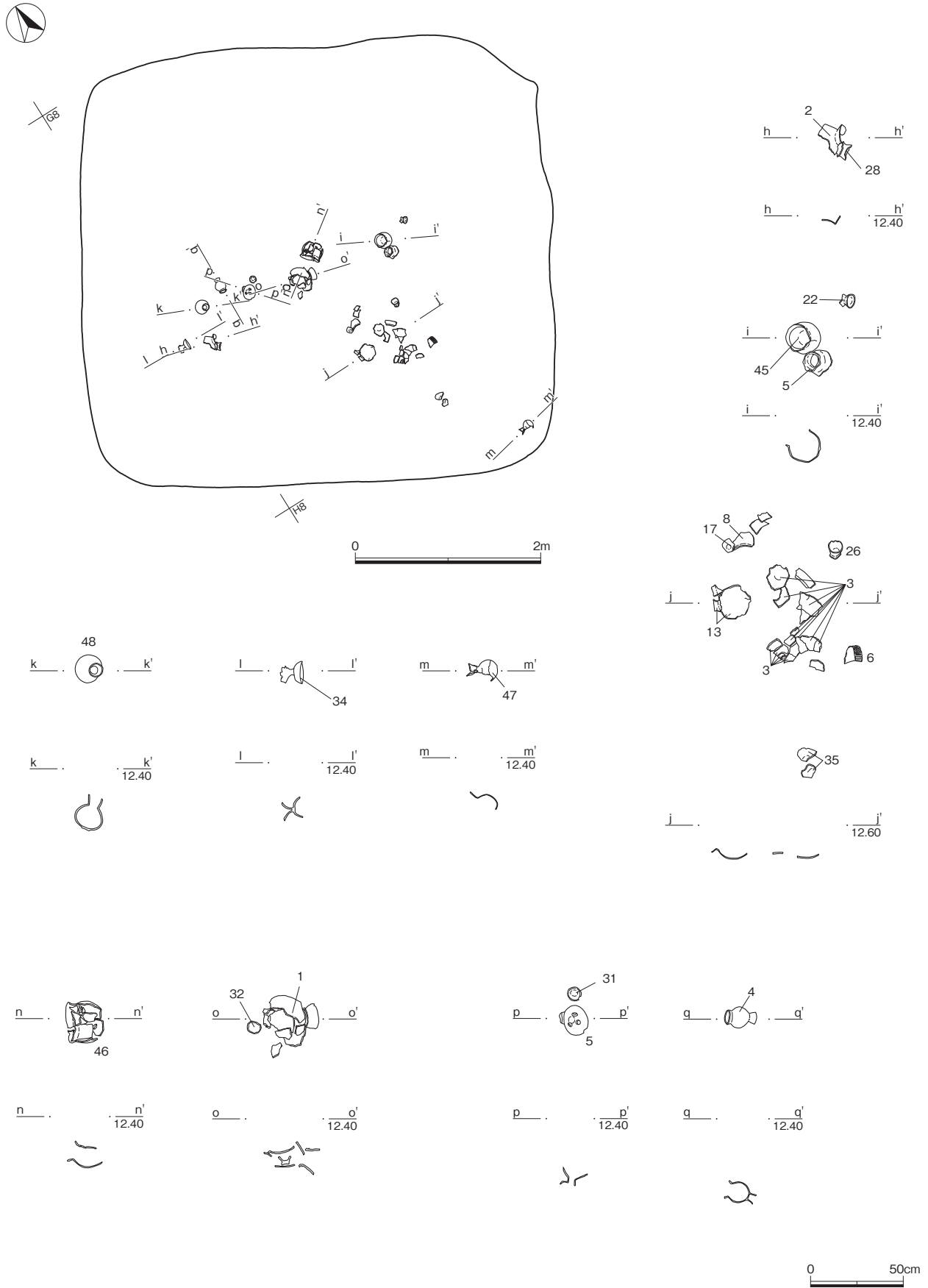


- 1 黒褐色土 (焼土粒含)
- 2 赤色焼土 (かたく焼きしまっている)
- 3 黄褐色土 (被熱してかたくしまっている)

II-113 図 SI1001 炉

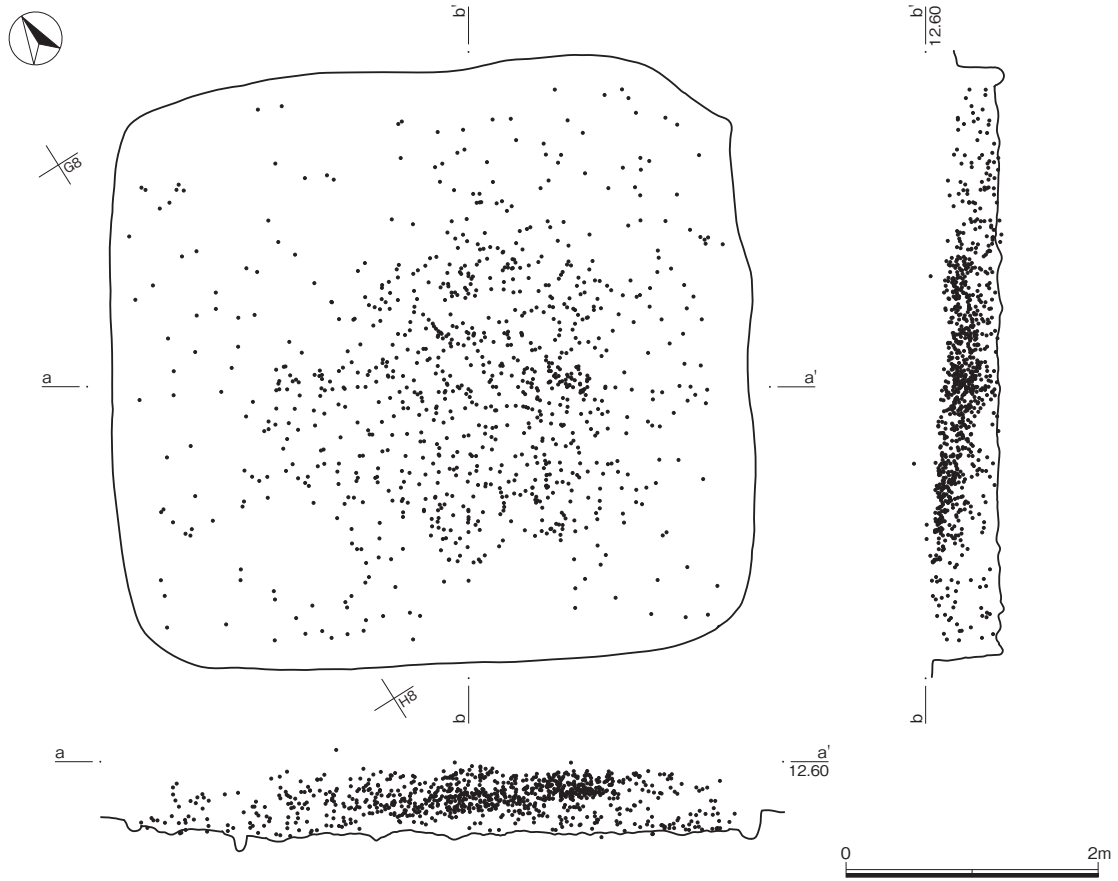
- |                             |                           |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 (焼土粒多含)              | 15 黒褐色土 (ローム粒含)           |
| 2 褐色土                       | 16 褐色土 (しまり弱)             |
| 3 茶褐色土 (ローム粒多含)             | 17 黒褐色土 (焼土粒含)            |
| 4 暗褐色土 (しまり強)               | 18 茶褐色土 (ロームブロック含)        |
| 5 褐色土 (粘性・しまり強)             | 19 茶褐色土 (しまり強)            |
| 6 茶褐色土 (ロームブロック多含)          | 20 黄褐色土 (ローム粒含)           |
| 7 暗褐色土 (しまり強)               | 21 明褐色土 (ロームブロック多含)       |
| 8 褐色土 (ロームブロック多含、粘性・しまり強)   | 22 黒褐色土 (ローム粒多含、粘性強、しまり弱) |
| 9 黄褐色土 (ロームブロック多含、粘性・しまり強)  | 23 明褐色土 (ロームブロック多含)       |
| 10 黒褐色土 (焼土粒含)              | 24 暗褐色土                   |
| 11 黒褐色土 (ローム粒含、しまり弱)        | 25 褐色土 (しまり強)             |
| 12 黄褐色土 (しまり強)              | 26 茶褐色土 (しまり強)            |
| 13 明褐色土                     | 27 茶褐色土                   |
| 14 明褐色土 (ロームブロック多含、粘性・しまり強) |                           |

II-112 図 SI1001 平面図・断面図、炉平面図断面図

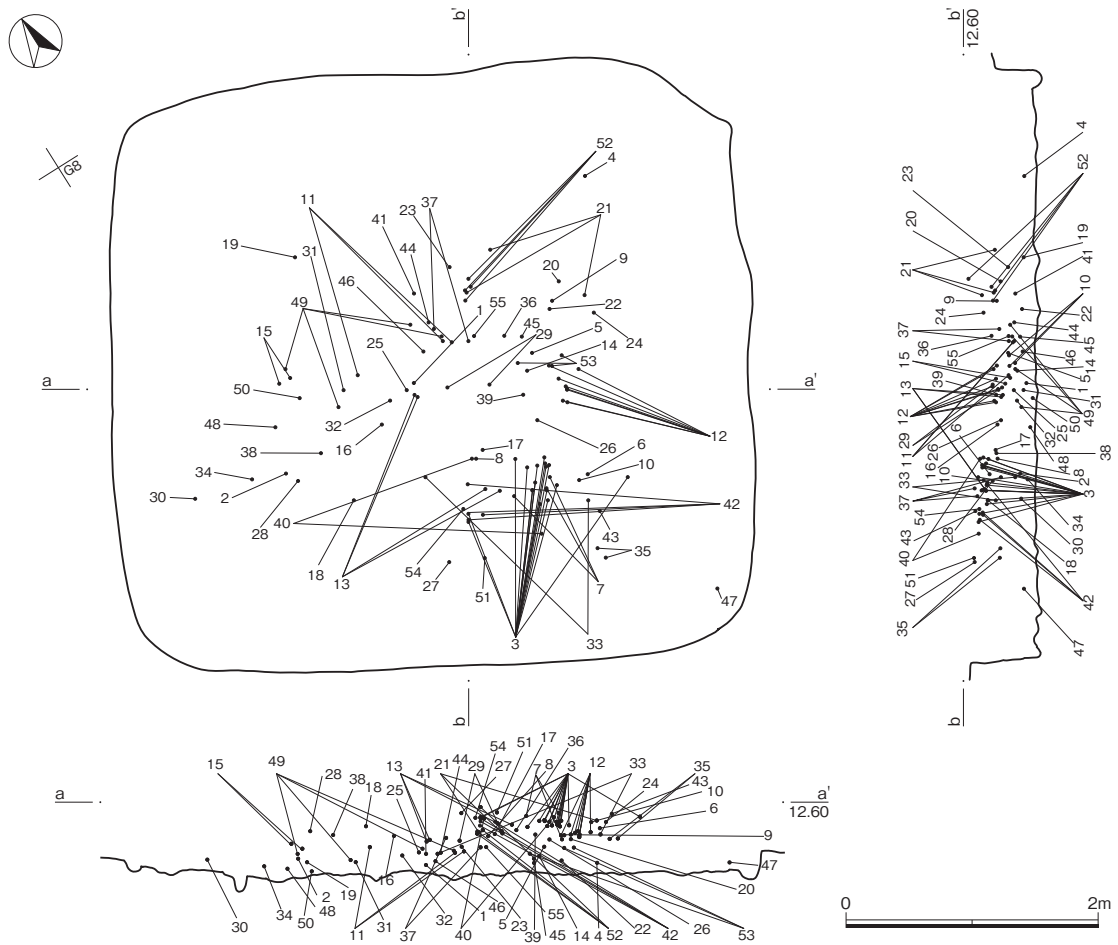


II-114 図 S11001 遺物出土図

II 看護職員等宿舍1号棟地点の調査

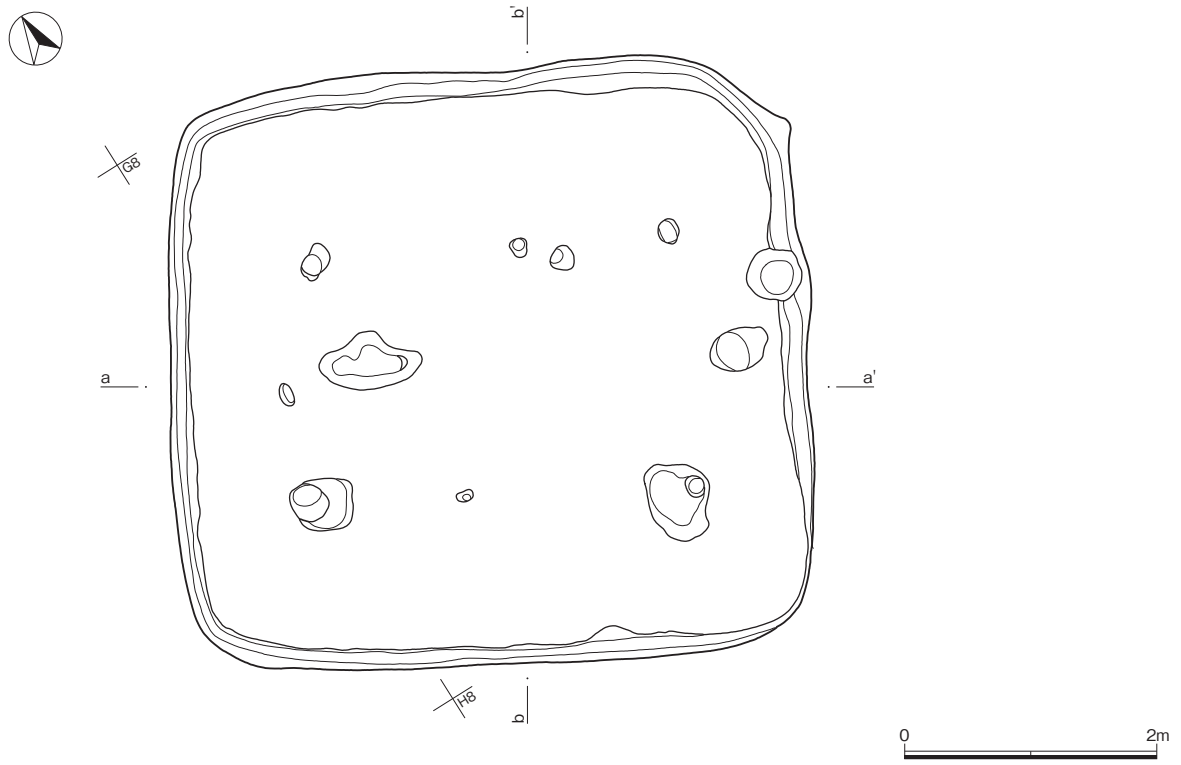


II-115 図 SI1001 遺物分布図



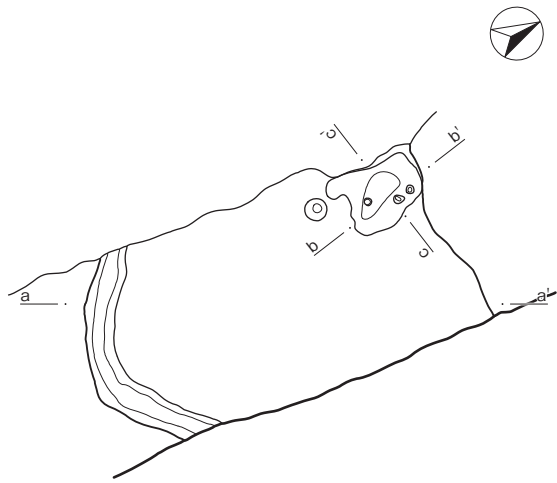
II-116 図 SI1001 掲載遺物分布図



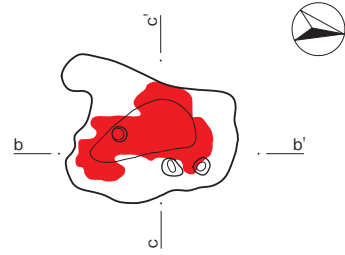


II-117 図 SI1001 掘方平面図

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



16.0



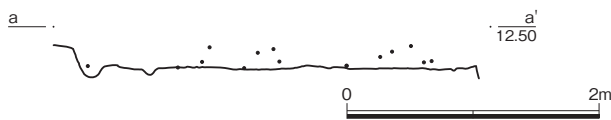
- 1 茶褐色土 (ロームブロック含、しまり強)
- 2 明褐色土 (ロームブロック含、しまり強)
- 3 黒褐色土 (ローム粒含、粘性強)
- 4 明茶褐色土 (ロームブロック含、しまり強)

- 1 黒褐色土 (焼土微粒含、粘性弱、しまり強)
- 2 茶褐色土 (ロームブロック・焼土粒含、粘性弱、しまりやや強)
- 3 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒少含、粘性やや弱、しまりやや強)
- 4 焼土層 (粘性なし、しまり強)

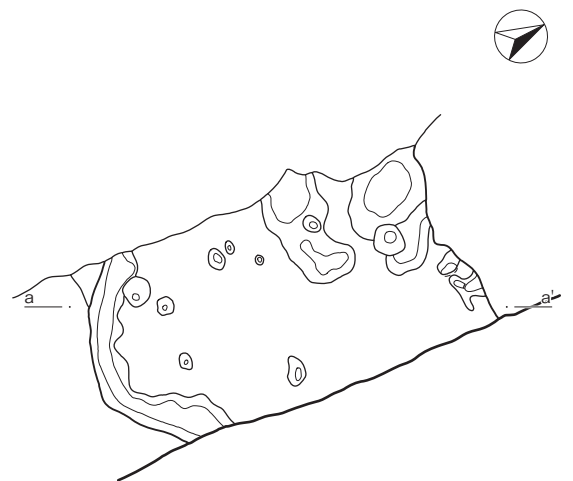


II-118 図 SI1002

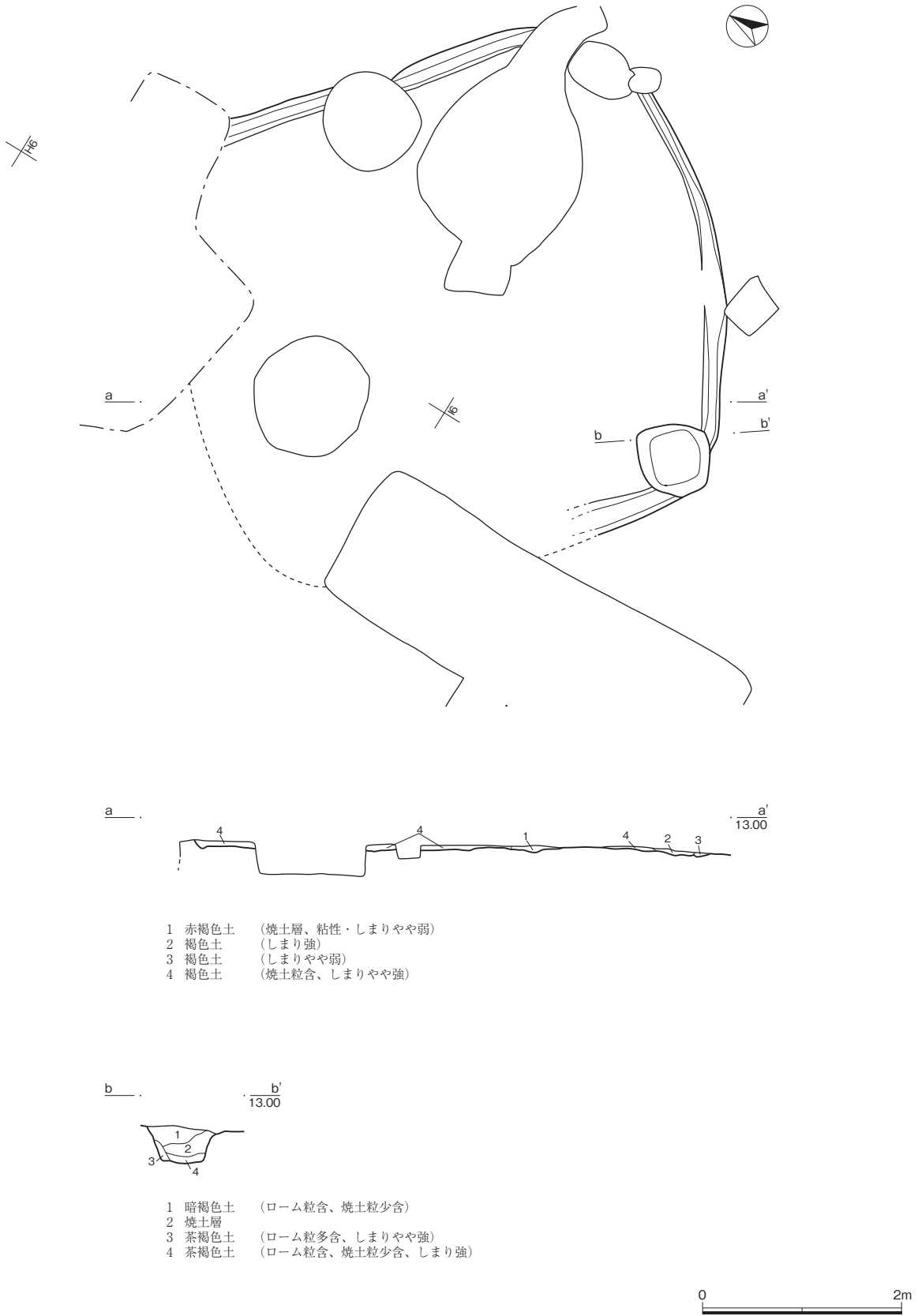
II-119 図 SI1002 炉



II-120 図 SI1002 遺物分布図

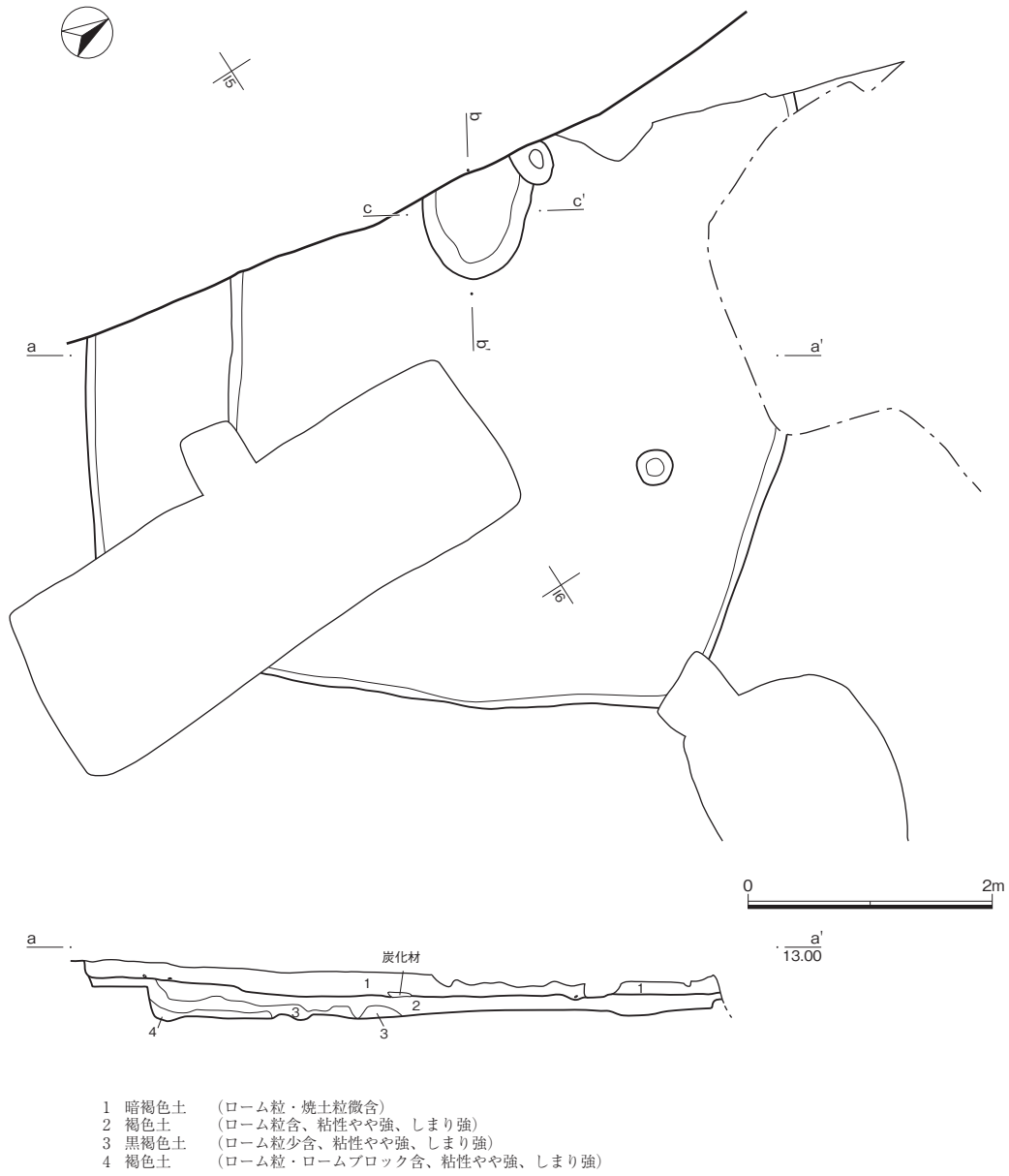


II-121 図 SI1002 掘方

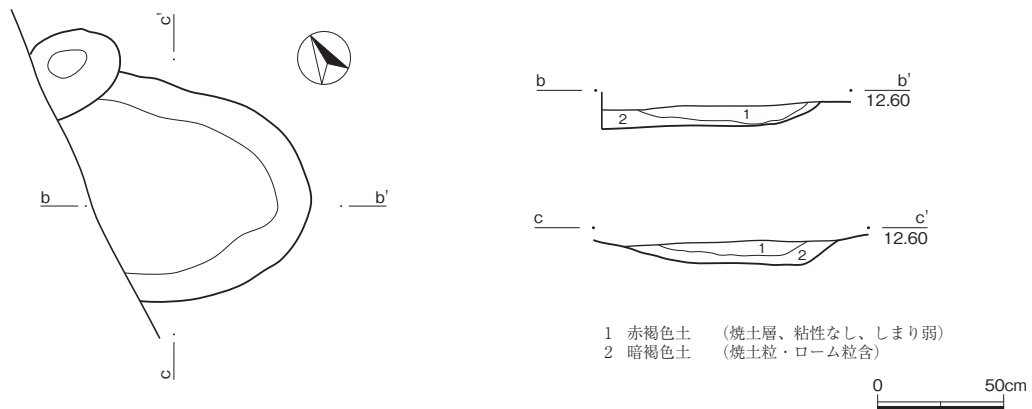


II-122 図 SI1003

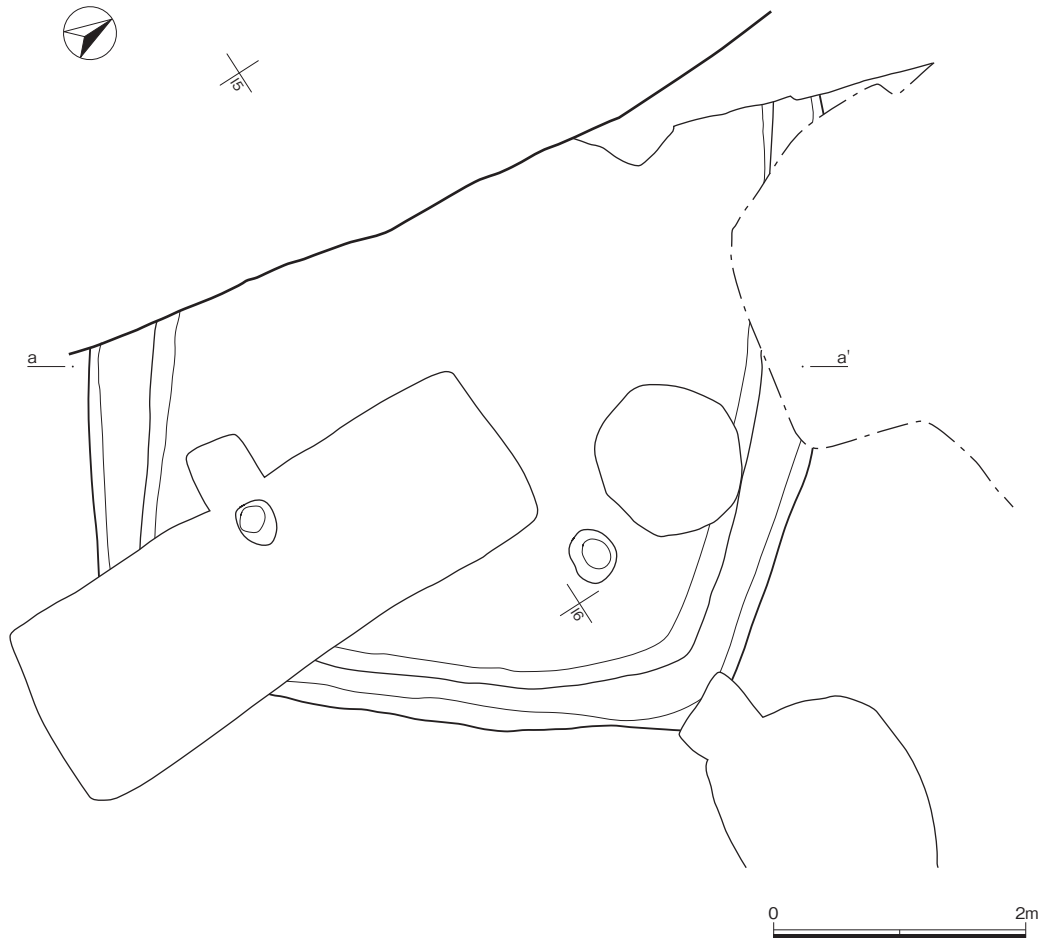
II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



II-123 図 SI1005

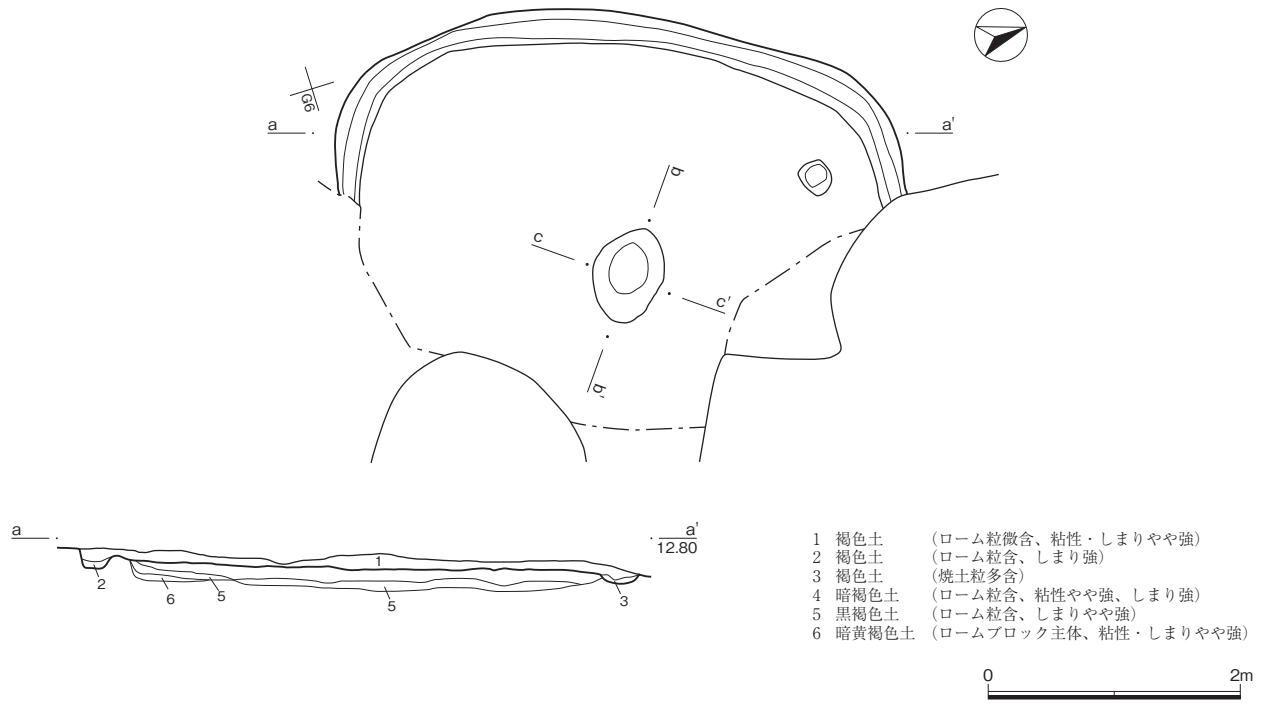


II-124 図 SI1005 炉

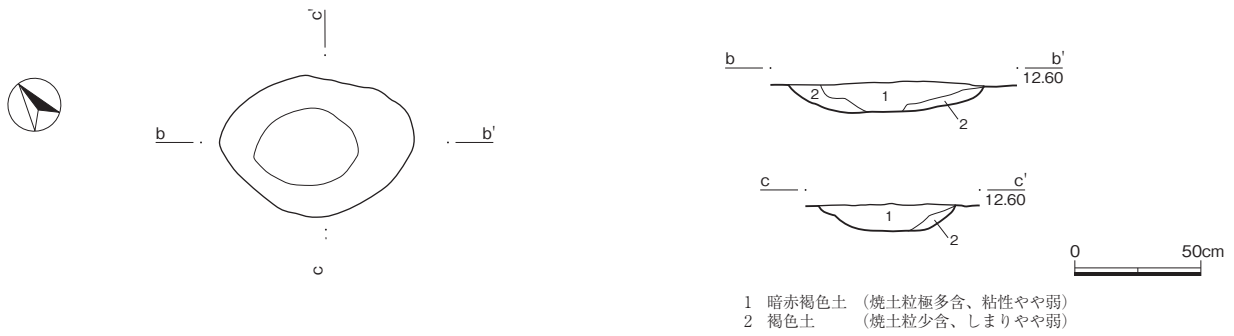


II-125 図 SI1005 掘方

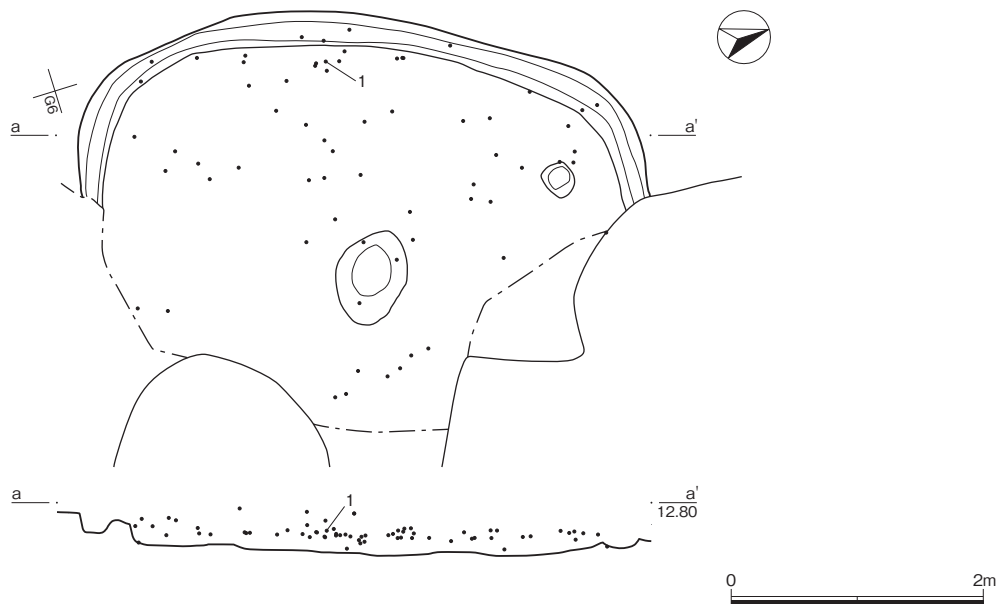
II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



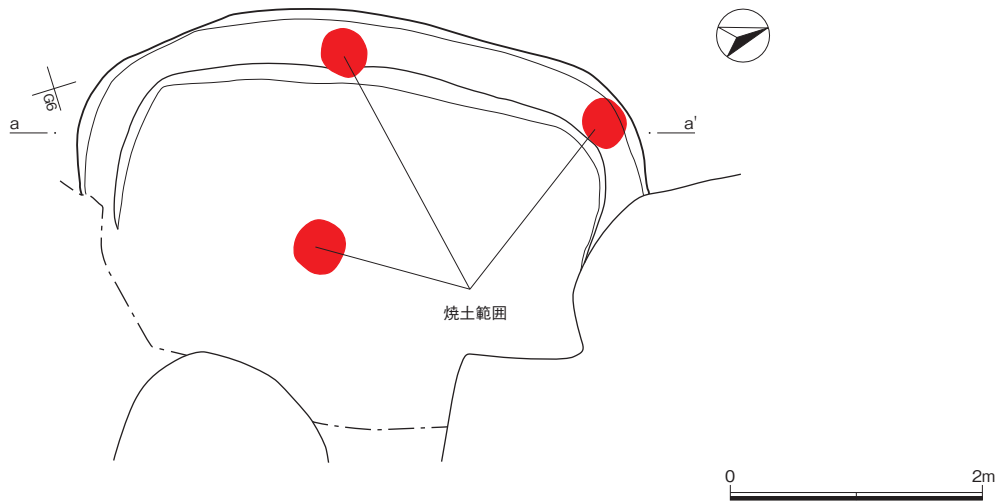
II-126 図 SI1006



II-127 図 SI1006 炉

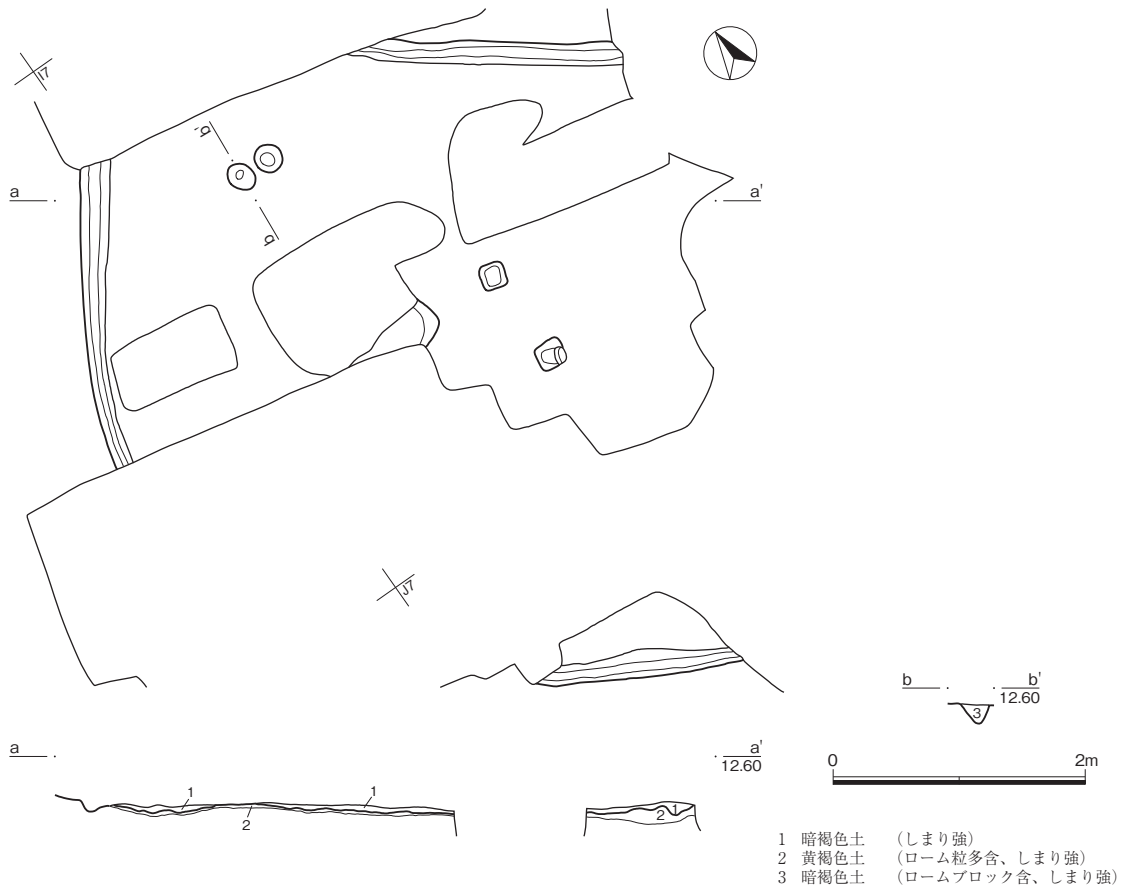


II-128 図 SI1006 遺物分布図

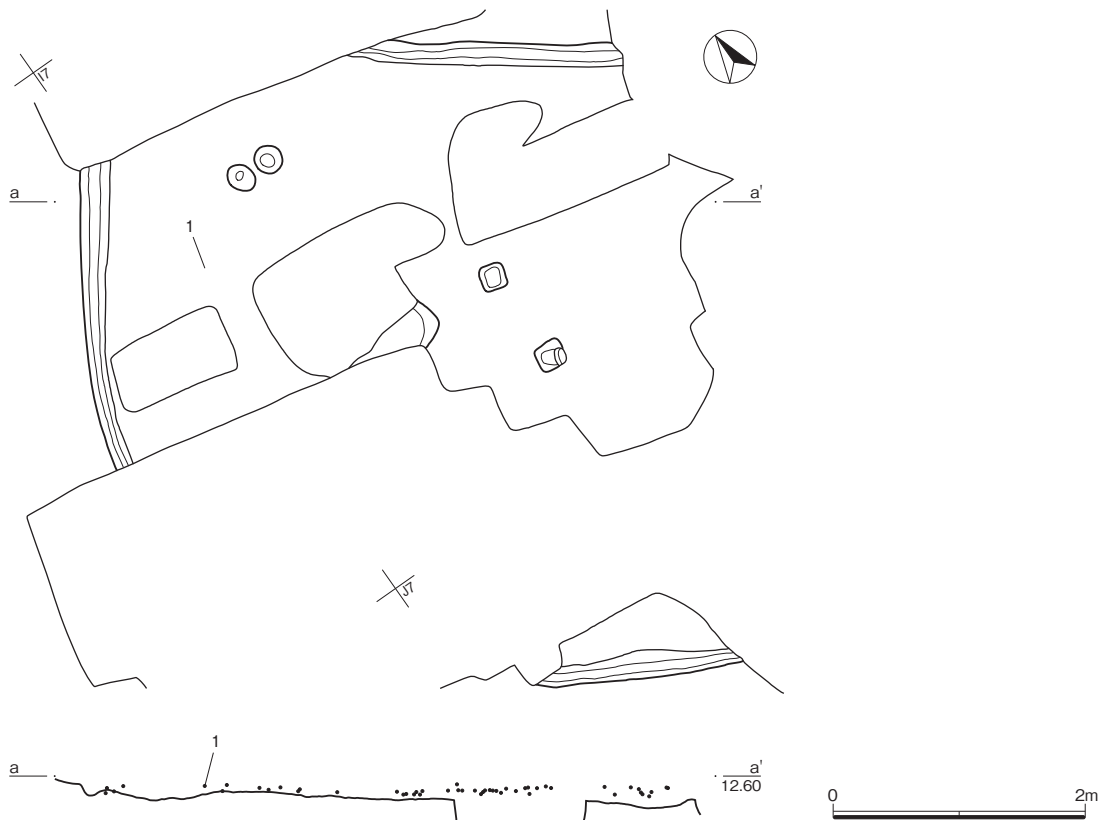


II-129 図 SI1006 掘方

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査

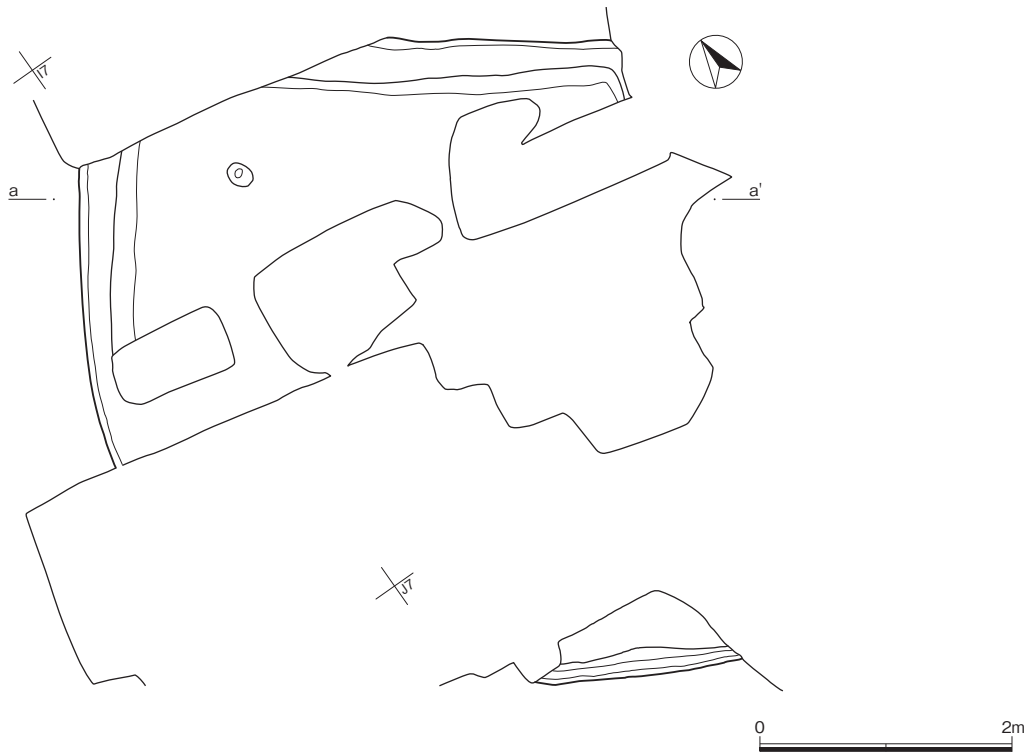


II-130 図 SI1007



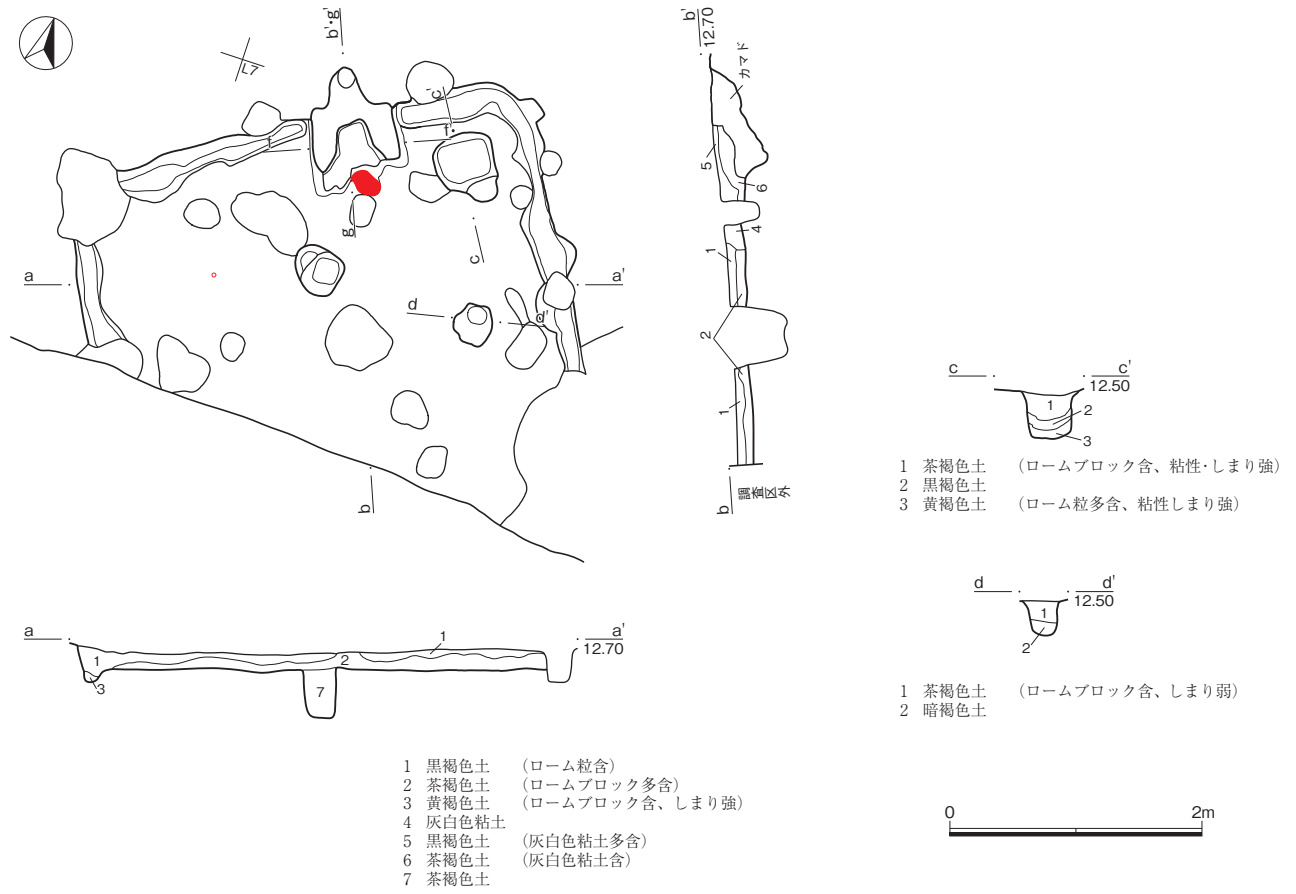
II-131 図 SI1007 遺物分布図



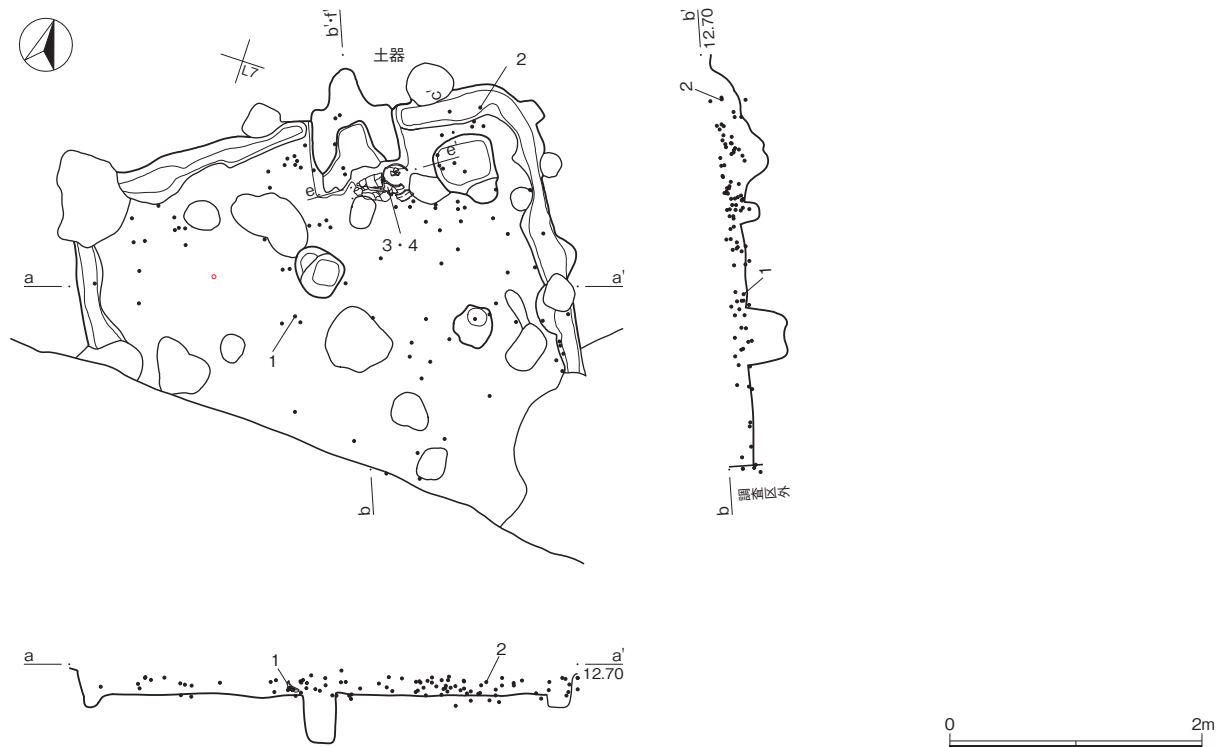


II-132 図 SI1007 掘方

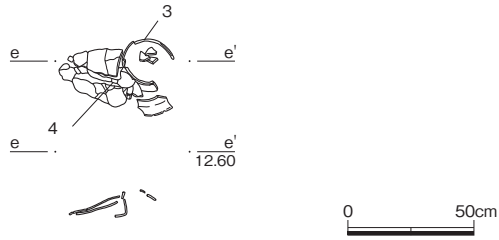
II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



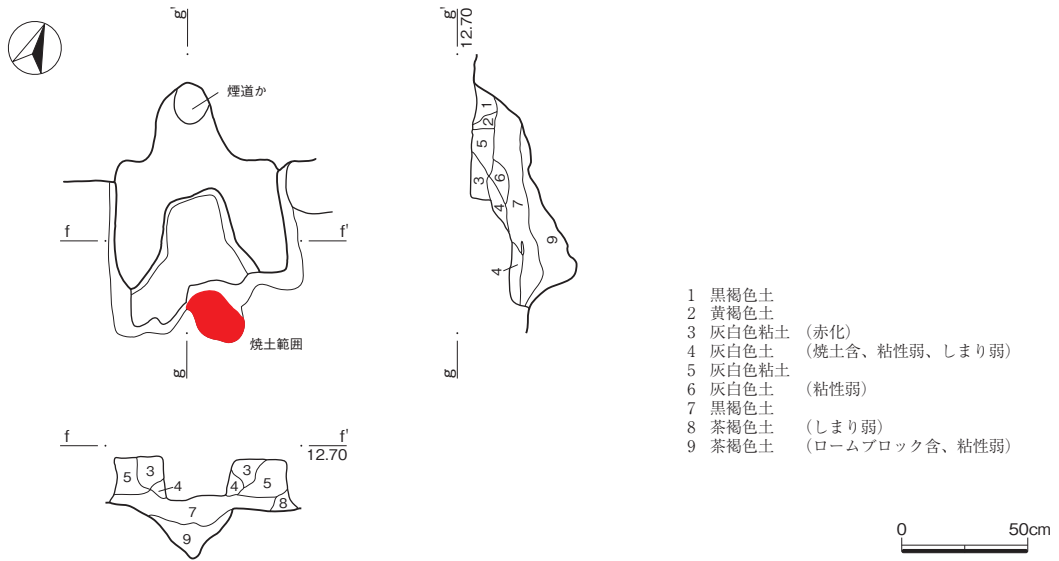
II-133 図 SI1004



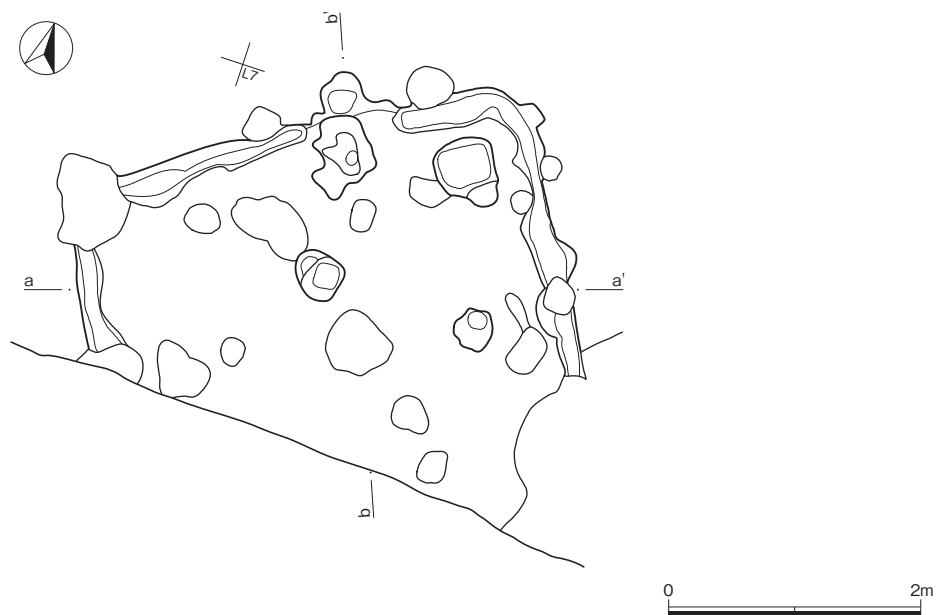
II-134 図 SI1004 遺物分布図



II-135 図 SI1004 遺物出土図



II-136 図 SI1004 カマド



II-137 図 SI1004 掘方

## 第2節 遺物

### SI1001 (II-138～140 図)

1～11は壺である。1は底部のみ欠損している。口径は15.2cm、頸部径は10.1cm、最大径は28.4cmである。色調は淡褐色で、外面全体と口縁部内面に赤彩が付されている。しかし遺存するものはわずかである。胎土には、直径1～5mmの砂礫を含む。球状の胴部に短い頸部、直線的に外側に開く口縁部をもつ。口唇部は面取りがされている。輪積み成形で、頸部内面に輪積み痕が残る。また頸部の突帯は貼付で、内面の屈曲は稜をなしている。調整は、口縁部は縦位から横位のハケメ調整を行なった後に、ミガキが施されている。また口縁部から胴部上半にかけて黒班がある。頸部の突帯には工具の先端を刺突するようにして斜位の刻目が施されている。

2は胴部上半より下が欠損している。口径は13.5cm、頸部径は8.2cmである。色調は淡褐色で、外面全体に赤彩が付されている。胎土には直径1～2mmの白色砂礫をやや多く含む。球状の胴部に短い頸部、続いて外反する口縁部をもつ。口縁部は直線的に外側に開き、口唇部は丸く作られている。輪積み成形で、頸部内面では粘土が厚く盛り上っている。調整は、ハケメ調整を行なった後に、縦位のミガキが施されている。また頸部には横ナデが施されている。内面はハケメ調整後にナデが施されている。3、4は胴部より上が欠損している。3の胴部最大径は29.6cm、底部径は7.8cmである。色調は淡褐色で、外面全体には赤彩が付されている。また底部内面の一部にも付着痕がみられる。焼成は良好である。胎土は精良で、石英と黒雲母、赤色酸化土粒、微砂粒、直径1～6mmの砂礫を含む。球状の胴部をと平底状の底部をもつ。底部はやや外反ぎみに立ち上がり、胴部下半でゆるい稜をもっている。輪積み成形で、胴部下半の稜線を境として成形帯の変換が見られるが明瞭ではない。調整は横位のハケメ調整を行なった後に、胴部外面では縦位のミガキが施されている。内面はナデが施されている。そのほか胴部外面下位に黒班がみとめられる。4の最大径は11.7cm、底部径は3.2cmである。色調は淡赤褐色で、外面の肩部と胴部下半に赤彩が付されている。焼成は良好である。胎土は精良で、長石と石英、微砂粒を含む。球状の胴部と浅い立ち上がりをもつ上げ底状の底部をもつ。胴部下半では稜をもつ。輪積み成形で、器厚が概して薄い。調整は、外面全体を横位のハケメで調整した後、縦位のミガキが施される。施文は、櫛歯状工具によって、胴部上半から下半に向かって羽状列点文、条線文、列点文、波状文、条線文、波状文、列点文の順に施されてい

る。そして焼成前に胴部下半に直径5mmの穿孔を行っている。そのほか胴部下半に黒班が2点確認できる。

5は頸部片である。頸部径は10.0cmである。色調は赤褐色である。胎土には直径1mmほどの砂礫を微量に含む。頸部は垂直ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。輪積み成形で、頸部内面には稜がある。調整は、外面では縦位のハケメ調整を行なった後に、縦位のミガキを施している。また頸部には横ナデが施されている。内面は横位のハケメ調整の後に横位・斜位のミガキが施されている。6は口縁部片である。推定口径は18.6cmである。色調は淡赤褐色で、内外面に赤彩が付されている。焼成は良好である。胎土は精良で、石英と微砂粒を含み、直径5mmほどの砂礫をやや多く含む。口縁部はいわゆる複合口縁で、外面に2条の網目状撚糸文が施されている。さらにその上には3条の棒状浮文を付している。この棒状浮文の先端部には5つの刻み目が施されている。調整は、頸部外面では縦位のハケメ調整を行なった後、縦位のミガキが施されている。7は胴部片である。色調は暗赤褐色で、带状貼付文の上面と波線文の部分のみ赤彩が付されている。焼成は良好で、胎土には石英や微砂粒を多く含む、直径3mmほどの砂礫を微量に含む。胴部上半に付された貼付文は、断面形が凹状で、ややいびつに横走する。調整は、縦位と斜位のハケメ調整を行なった後、带状貼付文及び波線文の間にさらに横位のハケメを施している。横位のハケメより下位には工具の角を刺突することで波線文を描いている。8～11は底部片である。8の底部径は3.5cmである。色調は淡褐色で、外面の底面以外は赤彩が付されている。焼成は普通である。胎土には、直径1～2mmの砂礫を少量含む。上げ底状の底部をもつ。輪積み成形で底部の立ち上がりはゆるい。調整は、底面より上2cmほどまでは縦位のミガキが施されている。また底面もミガキが施されている。内面は横位のハケメ調整が行なわれている。9の推定底部径は9.0cmである。色調は淡赤褐色で、焼成は悪い。胎土には、石英と赤色酸化土粒、微砂粒、直径1～3mmの砂礫を微量含む。輪積み成形で、明瞭な立ち上がりをもつ平底状の底部をもつ。調整は、外面は縦位のハケメ調整が行なわれ、縦位のミガキが施されている。内面はナデが行なわれている。底面は磨耗が激しく、調整については不明である。10の底部径は8.8cmである。色調は淡暗褐色である。胎土には、石英と微砂粒、直径1～3mmの砂礫を微量含む。明瞭な立ち上がりをもたない平底をもつ。輪積み成形で円盤状の粘土板を据え置き、さらにその上に一層の粘土を載せてから積み上げている。調整は、外面は底部付近でナデ調整が行なわれ、次に縦位のミガ

キが施されている。内面は一定方向のナデが施され、底部ではハケメ調整の次にミガキが施されている。11の底部径は9.5cmである。色調は淡褐色である。胎土には、長石と黒雲母、赤色酸化土粒を微量含み、微砂粒と直径2mmほどの砂礫を含む。明瞭な立ち上がりをもつ平底と球状の胴部をもつ。輪積み成形で、円盤状の粘土板を据え置き、さらにその上に一層粘土を載せてから積み上げている。調整は、縦位のハケメ調整が行なわれた後に、縦位のミガキが胴部に限り施されている。内面は横位のハケメ調整が行なわれた後に一部ナデが施されている。底面はケズリが行なわれた後のナデが施されている。

12～33は台付甕である。12～18は甕の口縁部から胴部までの破片である。12の口径は16.3cm、頸部径は14.3cm、最大径は22.6cmである。色調は淡褐色である。外面に煤が一部付着している。胎土には、石英と長石、赤色酸化土粒を含み、微砂粒と直径1～5mmの砂礫をやや多く含む。中位がややせり出した球状の胴部と外反する口縁部をもつ。口縁部はやや垂直ぎみに外に開き、口唇部はやや尖っている。輪積み成形で、頸部接合は上部の粘土のはみ出しが顕著である。調整は、外面は横位のハケメ調整が行なわれ、その後に口縁部はナデが施されている。内面は、横位のハケメ調整が施されている。13の口径は15.8cm、推定最大径は19.5cmである。色調は明赤褐色で、焼成は良好である。胴部上半に一部煤が付着している。胎土には、直径1mほどの砂礫を多量に含む。球状の胴部と外反する口縁部をもつ。口唇部は面取りがされている。輪積み成形で、頸部接合部まで積み上げた後に、一度胴部の外面にハケメ調整を行ない、それから口縁部を被せている。口唇部は面取りを行なっているがやや甘い仕上げとなっている。調整は、ハケメ調整が行なわれている。内面は、ハケメ調整の後にケズリが行なわれている。14の口径は18.2cm、最大径は25.6cmである。出土した甕の中では比較的大形で、中位に最大径を持つ球状の胴部と、直線的に外に開く口縁部をもつ。口唇部は丸く仕上げられている。色調は明褐色で、焼成は普通である。胎土には赤色酸化土粒を少量、雲母と白色砂粒を微量含む。輪積み成形で、内面に4～5cmの成形帯の痕跡が認められる。口縁部は内傾接合である。調整は、板状工具を主体に使用し、外面では縦位のハケで整えた後に胴部の中位から下位までを横位のハケで調整している。口縁部も同様である。内面は口縁部では外面と連動しているが、胴部では簡便に斜位のハケで整えている。15の口径は18.3cm、胴部最大径は25.0cmである。16と同様に比較的大形の甕で、中位に最大径をもつ胴部と、直立ぎみからやや外に開く口縁

部をもつ。口唇部はナデで面取りが施されているが、やや丸みをもたせている。色調は淡暗褐色で、焼成は普通である。胎土には赤色酸化土粒がやや多く含み、長石・石英が微量に、雲母が極めて微量に含む。輪積み痕や割れ口から6～6.5cmの成形帯が認められる。口縁部の内面にはゆるい稜が作られ、胴部上部内面には指頭圧痕がよく残る。調整は板状工具が主体で、外面では胴部を中心にやや斜位のハケ調整を行い、その次に口縁部に縦位にハケ調整を施している。内面は口縁部では横位のハケ調整を行い、胴部では横位のナデを施している。16の推定口径は17.2cm、推定最大径は21.3cmである。色調は淡褐色である。胴部から口縁部にかけて煤が付着している。胎土には、長石と石英、微少砂粒、直径1mmほどの砂礫を含む。球状の胴部と内湾する口縁部をもち、全体的に丸みを帯びる。口唇部は面取りがされている。輪積み成形で、痕跡が頸部内面に残っている。調整は、外面はハケメ調整を、頸部に斜位に行い、続いて胴部と口縁部に横位のハケメ調整を行なっている。内面は、胴部では横位のナデ、口縁部では横位のハケメ調整を行なった後にナデが行なわれている。17の口径は15.4cmである。色調は明褐色である。胎土には、石英と赤色酸化土、直径2～3mmの砂礫を多く含む。球状の胴部と大きく外反する口縁部をもつ。口唇部は丸く仕上げられている。輪積み成形で、頸部の屈曲は強いが稜をなしていない。口縁部は頸部に被せるようにして接合している。調整は、外面は縦位のハケメ調整後にその上を横位のハケメ調整を行ない、さらに胴部上半の一部に縦位のミガキを施されている。また口縁部にはナデが施されている。内面は横位のハケメ調整が行なわれている。18の口径は13.9cmである。色調は暗褐色で、焼成は悪い。胎土には、微少砂粒を多く含み、直径1mmほどの砂礫を微量含む。球状の胴部と直立ぎみの口縁部をもつ。口唇部は面取りがされている。輪積み成形で、痕跡が頸部内面に残っている。頸部は屈曲し稜をもつ。調整は、外面は斜位のハケメ調整を行い、口縁部ではその次に横ナデを施している。内面も横位のハケ調整が行なわれているが、頸部より下部には横位のミガキが施されている。

19～33は台付甕の脚部片である。19の脚部径11.5cmである。色調は淡暗褐色である。一部に煤の付着がみられる。胎土には、赤色酸化土粒と微砂粒、直径6mmほどの砂礫を含む。内湾する脚部と丸底をもつ。成形は体部と脚部を別々に作り、その後に両者の接合箇所を外面から粘土を貼付けて接合している。このため、脚部から底部にいたる箇所が粘土が膨れ上がっているように見える。端部は面取りによって平滑に仕上げられてい

る。調整は、外面はハケメ調整が、脚部下部で横位に、続いて脚部中位で縦位に、そして最後に底部との接続部で縦位に行なわれている。とくに接続部でのハケメ調整時に粘土が押し出されている。おそらく貼り付けた粘土が乾く前に調整作業を行なった結果であると考えられる。20の脚端部径は11.9cmである。色調は淡褐色で、焼成は良好である。胎土には石英と長石、赤色酸化土粒、微砂粒、直径3mmほどの砂礫を含む。ハの字状に開く脚部と比較的小さい底部をもつ。成形は体部と脚部を別で作り、その後両者を接合する際に外面から粘土を貼り付けている。粘土紐は幅2cmほどである。また端部は面取りによって平滑に仕上げられている。調整は、外面は斜位のハケメ調整が行なわれ、さらに指によるナデが、中位では斜位に、端部では横位に施されている。内面は指によるナデが主体で、外面と同様である。また内外面ともに輪積み痕が残り、脚部内面の接続部付近に黒斑がある。21の脚端部径は8.4cmである。色調は明褐色で、焼成は悪い。胎土には、微少砂粒を多く含み、雲母と直径1mmの砂礫を少量含む。やや内湾ぎみの脚部をもつ。成形は、脚台部上面は大きくへこませ、その上に粘土を被せることで底部を作り出している。このため脚部内面に粘土が押し出されている。脚部と底部との外面上の接合部は、上から下へと粘土を貼り付けることで接合を行なっている。端部は面取りによって平滑に仕上げられている。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行ない、裾部では横位のナデを施している。内面はケズリと丁寧なナデによって調整が行なわれている。22の脚端部径は8.0cmである。色調は灰明褐色で、焼成は悪い。胎土には、赤色酸化土砂と微砂粒を含む。ハの字状に開かれた脚部と丸底をもつ。底部と比較して脚部はやや小ぶりである。成形は、脚部と接合部を一体的に作り上げ、その上に粘土を貼り付ける形で内底部を成形している。このため接合部外面には粘土の被覆が見受けられない。端部は内外面に向かっての粘土のはみ出しが顕著である。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後、ナデが施されている。内面はナデが施されている。23の脚端部径は9.7cmである。色調は淡褐色である。胎土は精良で、赤色酸化土粒と微砂粒、直径1.5mmほどの砂礫を含む。台形状に開く脚部をもつ。成形は、脚部上部に粘土を充填して底部を成形していたと考えられる。端部は内外面ともに粘土のはみ出しが顕著である。調整は、外面は縦位・斜位のハケメ調整後に、縦位のミガキが施されている。強く調整を行なったようで、脚部上部には圧痕が巡っている。内面は横位のナデが施されている。

24の脚端部径は8.9cmである。色調は淡褐色である。

胎土は精良で、赤色酸化土粒と微砂粒、直径4mmほどの砂礫を含む。台形状に開く脚部をもつ。成形は、脚部上部に粘土を充填して底部を成形していたと考えられる。端部は内外面ともに粘土のはみ出しが顕著である。調整は、外面は縦位・斜位のハケメ調整後に、縦位のミガキが施されている。

25の色調は灰明褐色である。脚部の一部に煤の付着がみられる。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒を少量含み、直径4mmほどの砂礫を含む。ハの字状に開く脚部をもつ。成形は、脚部と接合部を一体で作成し、脚部上部に粘土を貼付けることで底面を成形している。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後に、接合部付近を指による横位のナデによって整えている。内面は横位のハケメ調整を行なった後、ケズリを施している。26の脚端部径は8.9cmである。色調は淡褐色である。胎土には、長石と石英、微砂粒、直径1～6mmの砂礫を多く含む。内湾ぎみに開いた脚部と底部をもつ。成形は、脚部と底部を接合した後に、外面に粘土を巻きつけている。脚部内面の上部には粘土がせり出している。調整は、外面では脚部全体をナデによって調整した後に、脚部と底部の接合面上の粘土を縦位のハケメ調整を施している。内面は縦位のケズリを行い、次に端部のみナデを施している。底部上面はナデで調整している。27の色調は、外面は明褐色で、内面は淡赤褐色である。胎土には、微砂粒と直径1～4mmの砂礫を含む。直立に近い台形状の脚部をもつ。成形は、まず脚部を作り上げ、上部をハケメ調整をしている。またこの段階で上部中央に穴を設けて稜を作る。そして脚部がある程度乾いたところで底部を被せ、粘土を巻き上げている。そのため、脚部上面に割れ口はみられない。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行い、内面は横位のハケメ調整後に縦位のナデを施している。28の色調は明褐色で、焼成は悪い。脚部内面に煤が付着している。胎土には、長石と赤色酸化土粒、微砂粒、直径1～4mmの砂礫を含む。ハの字状に開く脚部をもつ。成形は、脚部から接合部まで一体として作り上げ、その後底部を上から被せている。また脚部内面上部に補強を目的としてさらに粘土を貼り付けている。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なっている。内面は粘土の貼り付け後にナデを行なっているが、粗雑な仕上げとなっている。底部はナデを施している。29の脚端部径は8.7cmである。色調は暗褐色である。胎土には、赤色酸化土粒と微砂粒、直径1～3mmの砂礫を多く含む。やや内湾ぎみに開き、中位で屈曲する脚部をもつ。成形は、脚部を作り上げ、その後中央に穿孔を設けている。端部は面取りがなされている。

調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後、下部のみ横位のナデを施している。内面はハケメ調整が行なわれ、次に横位のナデが裾部のみ施されている。30の脚端部径6.6cmである。色調は赤褐色である。胎土には、石英と雲母、赤色酸化土粒、微砂粒を含む。ハの字状に開く脚部をもつ。成形は、脚部から底部までを一体として作り上げている。脚部内面には輪積み痕を残し、端部は内面で粘土のはみ出しが顕著である。調整は、斜位のハケメ調整を行なった後に、縦位のミガキが施されている。内面は横位のハケメ調整を行なった後に、横位のナデを施している。31の脚端部径は7.3cmである。色調は淡赤褐色で、胎土には長石と石英、微砂粒、1～2.5mmの砂礫を含む。台形状に開く脚部をもつ。成形は、脚部から接合部までを一体として作り上げ、その後に底部を脚部上面に貼り付けている。調整は、外面は横位のナデを行なった後、縦位のナデを施している。内面は縦位のナデを行なった後に、横位のナデを施している。32の色調は淡赤褐色である。外面には煤が一部付着している。胎土には、微砂粒と直径1mmほどの砂礫を含む。ハの字状に開く脚部をもつ。成形は、脚部から接合部までを一体として作り上げた後に底部を脚部上面に貼り付けている。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後、ナデを施している。内面と底部上部はナデで調整されている。33の色調は淡褐色である。胎土には、長石と石英、微砂粒、直径1～2mmの砂礫を含む。比較的砂質といえる。成形は、底部と脚部上部を一体で作っている。このため、脚部上部内面に粘土のせり出しはみられない。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後に、一部を残してナデを施している。内面はケズリが行なわれた後に指によるナデを施し、底部内面ではナデによって調整を施している。

34～44は高坏である。34の口径は11.7cmである。色調は淡褐色で、脚部の一部は明褐色である。焼成は良好である。胎土には、石英と雲母、微砂粒を含み、直径1mmほどの砂礫を少量含む。大きくハの字状に開く脚部と、稜をもつ底部をもつ。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口唇部は丸い。成形は脚部と坏身を別にして作っている。まず脚部から底面までを成形し、ここである程度の乾燥期間を設けてから、坏身の成形を行っている。脚部には2段の透孔があり、上段は2、下段は4孔ある。調整は、外面は縦位のミガキが、杯身から脚部に向かって施されている。次に口縁部に横位のナデを施している。坏身の内面も同様に縦位のミガキが施されている。脚部の内面はハケメ調整をらせん状に行なっている。ただし奥側までは至らず、ケズリが施されている。35

～37は高坏の坏部片である。35の口径は14.0cmある。色調は赤褐色で、内外面に赤彩が付されている。焼成は良好である。胎土には、長石と赤色酸化土粒、直径1～3mmの砂礫を含む。ハの字状に開く口縁部と稜のある底部をもつ。口唇部は横位のナデによって丸く仕上げられている。調整は、外面はミガキが稜線を越えて施されている。なお、砂礫の流れから、上位から下位に向けてのミガキであることがわかる。内面は口縁部に横位のナデ調整を行なった後に、縦位のミガキが施されている。また坏身内面には黒班がみられる。36の色調は赤褐色で、赤彩が内外面に付されている。胎土には、長石と雲母、微砂粒、直径1mmほどの砂礫を含む。ハの字状に大きく開いた坏身で、底部に稜をもつ。成形は、脚部と接合部を一体として筒状に作り、その後に上面に粘土を貼り付けて坏身を作っている。このため、底部の粘土は脚部内面に向かってせり出している。調整は、外面は稜をナデで調整を行ない、次にハケメ調整を行う。そして縦位のミガキを施している。内面も縦位のミガキが施されている。37の色調は淡褐色で、内外面に赤彩が付されていた痕跡を残す。焼成は良好である。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、黒雲母、微砂粒、直径1～3mmの砂礫を含む。ハの字状に大きく開いた坏身をもつ。成形は、35と同様に、脚部と接合部を一体として作り、その後に坏身を作っている。調整は、外面は縦位のミガキを施した後に、脚接合部に横位のナデが施されている。内面も縦位のミガキが施されている。38～44は高坏の脚部片である。38の色調は赤褐色で、焼成は悪い。胎土には、長石と微砂粒、直径1～2mmの砂礫を含む。開きが直立に近い脚部をもつ。成形は、脚部と接合部を一体として作り、その上に坏身を作ったようである。しかし脚部中心に孔はなく、脚部上部の粘土は厚い。また脚部の透孔は、器面観察から、内面から外面に向かって工具で開けられた可能性がある。透孔の配置は一段3方である。調整は、外面は横位のナデを行なった後に、縦位のミガキを施している。内面は横位のハケメ調整を行なった後に、縦位のミガキを施している。39の推定脚端部径は11.1cmである。色調は淡褐色である。胎土には、長石と赤色酸化土粒、微砂粒、直径1～2mmの砂礫を少量含む。ハの字状に大きく開いた脚部をもつ。成形は、脚部と坏身を別々に作り、その後に貼り合わせたものと考えられる。透孔の配置は一段3方である。端部は面取りが施されている。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後に、縦位のミガキを施している。内面はハケメ調整が行なわれているが、粘土粒が多く残り、全体的に粗雑な仕上げとなっている。また外面の一部に黒班が

みとめられる。40の推定脚端部径は10.7cmである。色調は淡褐色である。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒、直径1.5mmの砂礫を少量含む。ハの字状に大きく開く短い脚部をもつ。成形は、脚部を作り、そこに粘土盤を置いて坏身を作り上げている。透孔の配置は一段4方である。端部は面取りが施されている。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後に、縦位のミガキを施している。また接合部ではその後に横位のナデを施している。内面は横位のハケメ調整を下部にのみ行なっている。底部には求心方向にミガキを施している。41の推定脚端部径は11.6cmである。色調は明褐色である。胎土には、長石と石英を少量含む、微砂粒と直径1mmほどの砂礫を多く含む。ハの字状に大きく開く脚部をもち、脚端部径に比べ接合部径が狭いものである。成形は、脚部と底部に明確な境がみられないため、一体として作られた可能性がある。また脚部内面にはしぼり目が残っている。透孔の配置は一段3方である。端部は面取りが施されている。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後、縦位のミガキを施している。42の色調は淡赤褐色で、焼成は良好である。胎土は精良で、赤色酸化土粒と黒雲母、微砂粒を含む。ハの字状に大きく開く脚部をもち、脚端部径に比べ接合部径は狭い。成形は、脚部を筒状に作り、別に作った坏身と接合したものと考えられる。また脚部上半には絞り目がみられる。透孔の配置は、一段3方である。形状は不整形である。調整は、外面は縦位のミガキが施されている。内面は横位のハケメ調整を行なっている。43の色調は赤褐色である。全体に煤が付着している。胎土には、長石と石英、微砂粒、直径1～4mmの砂礫を含む。ハの字状に大きく開く脚部をもつ。成形は脚部を坏身の底部に挿入する技法を用いたと考えられる。脚部の透孔は、器面観察から内面から外面に向かって工具によって開けられたと考えられる。透孔の配置は二段4方で、各段の透孔が交差するように配されている。調整は、外面は縦位のミガキを施した後に、並行する6条の沈線文を脚柱に施文している。内面は横位のケズリを行なった後にミガキを施している。底面もミガキを施している。44の脚端部径は9.4cmである。色調は淡褐色である。胎土には直径1mmほどの砂礫を含む。大きくハの字状に開く脚部をもつ。成形は、脚部と坏身の一体となって作り上げた可能性がある。脚部内面には絞り目がみられる。調整は、外面は縦位のミガキを施した後に、端部ではナデが施されている。内面も端部に横位のナデが施されている。底部はナデが施されている。

45、46は広口壺である。45の口径は15.4cm、最大

径は17.7cm、底部径は5.8cm、器高は15.0cmである。色調は淡褐色で、焼成は良好である。胎土には長石と石英、微砂粒、直径1～2mmの砂礫を少量含む。立ち上がりがわずかな平底と球体状の胴部をもち、直線的に開く口縁部をもつ。胴部の最大径はやや上位に位置する。口唇部は尖っている。輪積み成形で、胴部に2箇所の輪積み痕が残っている。いずれも内傾接合である。また底部は二重構造になっており、薄い器厚を補強している。調整は、外面は横位のハケメ調整を行なった後、縦位のミガキを施している。内面は横位のハケメ調整を行なっている。口縁部内面のみ、横位のハケメ調整後に一部縦位のミガキを施している。また、胴部下半に黒班がみられ、底部には焼成後に穿孔が施されている。46の口径は16.4cm、最大径は19.3cm、底部径は6.9cm、器高は19.6cmである。色調は淡褐色である。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒、直径1～3mmの砂礫を含む。立ち上がりのある底部と球体状の胴部、そしてゆるく外反する口縁部をもつ。口唇部はやや丸みを帯びている。輪積み成形で、底部は粘土を円盤状にして据え置いて作り、そこから体部まで一体として作り上げている。胴部下半に接合痕が残っている。頸部内面には稜はなく、ゆるやかに開く。調整は、外面は斜位のハケメ調整を行なった後に、ミガキが施されている。その順序は、頸部で横位のミガキを施した後、胴部に斜位、そして胴部から底部にかけて縦位のミガキを施している。口縁部は横位のハケメ調整を2段に分けて行なった結果、微妙な屈曲を形成している。また底部のみさらにケズリで調整している。内面は、胴部は横位のナデを行なった後に、縦位のミガキが施されている。口縁部は横位のハケメ調整を行なった後に口唇部をナデで仕上げている。

47は小形壺である。口径は9.8cm、最大径は12.6cm、底部径は6.0cm、器高は14.2cmである。色調は暗褐色で、焼成は悪い。底部には煤が付着している。胎土には、石英と雲母、微砂粒を含む。ゆるやかに立ち上がる底部と球体状の胴部、直線的に外側に開く口縁部をもつ。口唇部はやや丸みを帯びている。輪積み成形で、底部は粘土を円盤状にして据え置いてさらにその上に粘土を重ねてから体部まで一体として作っている。胴部と口縁部の境に輪積み痕が残っている。頸部内面にはゆるやかな稜が作られている。調整は、外面はハケメ調整を行なった後に、ケズリを施している。ハケメ調整は、口縁部では横位に行ない、胴部では縦位に行なっている。ケズリの順序は、口縁部で縦位、胴部で斜位に施した後に、胴部では横位に続いて胴部下半で横位・斜位に施して、最後に頸部の接続部を横位のナデを施している。そして口縁部



はハケメ調整前に横位のナデを行なっている。内面は横位のハケメ調整が施されている。口縁部は横位のナデが施されている。

48 はひさご形壺である。口径は 7.6cm、最大径は 14.1cm、底部径は 5.1cm、器高は 18.1cm である。色調は淡褐色で、焼成は良好である。胎土は精良で、雲母と微砂粒、直径 1～2mm の砂礫を含む。ゆるく立ち上がる上げ底状の底部と、下半にゆるい稜をもつ無花果状の胴部、そしてやや内湾してから直立気味になる口縁部をもつ。輪積み成形で、内面にその痕跡を残さない。しかし底部から胴部までの成形後、一度半乾燥させた後に口縁部を接合している。この接合方法は、口縁部を胴部に被せるようにするもので、接合面が内側にせり出し、鋭角な稜を作り出している。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後に、縦位のミガキを施している。ハケメ調整は口縁部では横位に、次に頸部に向かって縦位に調整を行ない、胴部も同様に縦位に整然と調整を行なっている。ミガキは、口縁部ではやや幅広に、そして胴部ではここでも整然と縦位に施している点で特徴をもつ。また頸部にはハケメ調整の痕跡を多く残し、また頸部接続部には工具による軽い押圧がみられる。内面は、口縁部に縦位のミガキが施されている。口唇部は全体が均一に磨耗している。また底部及び胴部下半に黒班がみとめられる。

49 は特殊器台である。推定口径は 21.0cm、脚端部径は 14.8cm である。色調は淡褐色で、焼成は良好である。内外面の受部の数箇所に煤が付着している。胎土には、長石と石英、微砂粒を含み、赤色酸化土粒と直径 1～3mm の砂礫を少量含む。ハの字状に開く脚部と底部に稜をもつ器受部、大きく開いた口縁部、そして帯状に文様が施された口唇部をもつ。成形は、脚部から底部までを作り、そこで休止してから器受部の立ち上がりを作っていることが、断面から観察できる。口唇部の端面は上下につまみ上げられ、帯状を呈している。この帯状端部は口唇部と別途で貼り付けている可能性がある。器受部と脚部には透孔が設けられている。器受部は一段 6 方と考えられ、脚部は一段 3 方である。なお、いずれの透孔も内面調整後にあけられたものである。調整は、外面は縦位のハケメ調整を全体的に行なった後、横位のケズリによって稜を作っている。さらに縦位のミガキを全体的に施している。脚端部はナデによって丸く仕上げられている。帯状端部には工具斜位の刺突文が施文されている。器受部内面は縦位のミガキが施され、脚部内面は斜位のハケメ調整を行なった後、上部では横位のケズリが施されている。裾部では横位のナデが施されている。また脚

裾部外面に一部黒班がみとめられる。

50～55 は小形土器である。50～53 は完形品あるいはそれに近い。50 は小形台付甕である。口径は 8.8cm、最大径は 10.9cm、底部径は 6.9cm、脚接合部径は 3.6cm、器高は 16.0cm である。色調は赤褐色である。胴部の 3/4 及び口縁部全体に煤が付着している。胎土には石英と長石、微砂粒を含む。ハの字状の脚部とやや縦に長い胴部、そしてゆるい屈曲によって外反する口縁部をもつ。脚の端部の内側には粘土がはみ出し、胴部の最大径はやや上位に位置する。口唇部は面取りがされている。輪積み成形で、脚部と底部を一体として完成させた後に、さらにその上から積み上げを行なっている。胴部下半部に輪積み痕が残されており、割れ目となっている。頸部内面には稜が作られ、脚部端部ははみ出しが顕著である。調整は、肩部から胴部かけて斜位のハケメ調整を行なった後、縦位のミガキを施している。そして次に脚部ではケズリと縦位のミガキを施している。口唇部はナデが施され、また内面の口縁部では横位のナデが施され、脚部と肩部には指頭圧痕が残されている。そのほか、胴部に黒班がみとめられる。51 の口径は 4.3cm、頸部径は 4.4cm、最大径は 5.0cm、底部径は 3.4cm、器高は 5.5cm である。色調は淡褐色で、焼成は良好である。外面の一部に煤の付着がみられる。胎土は精良で、長石と微砂粒を少量含む。平底とややふくらみをもつ長い胴部、若干外反する口縁部をもつ。頸部内面でゆるやかな稜が作られている。口唇部はナデによってやや丸みをもたせて仕上げられている。調整は、外面は横位のハケメ調整を口縁部で行なった後、全体に縦位のミガキを施している。底面はケズリを行なっている。内面は口縁部では外面同様に横位のハケメ調整を行ない、胴部内面は横位のナデが施されている。また外面胴部・口縁部の一部には黒班がみとめられる。52 の推定口径は 10.6cm、推定頸部径は 9.1cm、最大径は 10.4cm、底部径は 2.3cm、器高は 7.6cm である。色調は淡暗褐色である。胎土には、長石と石英、微砂粒を少量含む、赤色酸化土粒と直径 1mm ほどの砂礫を多く含む。上げ底と大きく膨らんだ球体状の胴部、若干外反する口縁部をもつ。輪積み成形で、頸部内面に輪積み痕が残る。頸部は外傾ぎみに成形してから頸部面を含めて一度外面を板状工具でハケメ調整を行なった後に口縁部を接続している。頸部内面は屈曲し、稜を作り出している。口唇部はナデによって丸く仕上げられている。調整は、外面は口縁部から胴部上半にかけては斜位のハケメ調整を行ない、下半では横位のハケメ調整、そして底部付近では横位のケズリが行なわれている。その後全体的に縦位のミガキが施されている。また底面は

回転させるようにケズリを行なっている。内面は口縁部では横位のハケメ調整を行なった後に、縦位のミガキを施し、胴部ではナデが施されている。53の推定口径は7.2cm、最大径は7.6cm、底部径は3.4cm、器高は4.8cmである。色調は暗褐色である。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒、直径1～3mmの砂礫を含む。底部から内湾気味に立ち上がり体部をもつ。口唇部はナデによって丸く仕上げられている。調整は、外面は輪積み痕がよく残り、その上に縦位のミガキを施し、また底部と胴部の結合部には指頭圧痕が残る。順序は押捺の後にミガキを施している。内面はナデを行なった後に斜位のミガキを施している。外面よりもよく整えられている感がある。

54、55は底部から胴部にかけての破片である。54の推定最大径は6.8cm、底部径は3.5cmである。色調は淡褐色で、焼成は良好である。胎土は精良で、長石と微砂粒、直径1mmほどの砂礫を少量含む。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後、ナデで整えている。底部はケズリを施した後にナデを施している。内面は、ナデで整えている。また底面から胴部下半にかけて黒班がみとめられる。55の推定底部径は4.6cmである。色調は赤褐色である。胎土には長石と微砂粒、1～2mmの砂礫を含む。形状は碗形と考えられる。輪積み成形で、粘土を円盤状に置き、さらにその上に粘土を被せてから胴部を作り上げている。調整は、外面は横位のナデを施している。内面も同様にナデを施している。

SI1003 (II - 141 図)

1は台付甕の脚部片である。脚端部径は10.9cmである。色調は淡赤褐色で、焼成は良好である。底部に煤の付着がみられる。胎土には、長石と微砂粒、直径1～7mmの砂礫を含む。内湾する脚部をもつ。成形は、脚部と体部を別に作り、接合する際は外面接合部に粘土を貼り付けたと考えられる。脚端部は内側に粘土がせり出している。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後に裾部で横位のナデが施されている。また端部でもナデを施して平面に整えている。底面ではナデを施している。内面はナデを行なっている。

SI1005 (II - 141 図)

1は台付甕であり、口縁部から胴部までの破片である。推定口径は15.2cm、推定最大径は17.8cmである。色調は褐色である。外面の胴部上半に幅広く煤の付着がみられる。胎土には、石英と赤色酸化土粒、直径1mmほどの砂礫を含む。最大径を中位にもつ胴部とゆるやかに外

反する口縁部をもつ。口唇部は丸く仕上げられている。輪積み成形で、胴部中位と頸部接合部箇所輪積み痕が残る。頸部の接合は、胴部内面に粘土を被せるようにして行なっている。調整は、外面は口縁部に横位のナデを行なった後、胴部に横位のハケメ調整を行なっている。胴部下半では斜位のハケメ調整となっている。内面は胴部に横位のケズリを行なった後に、口縁部から頸部、胴部との接合部を中心に、横位のハケメ調整を行なっている。また口唇部側面に布を巻きつけた棒状工具による刻目が、器面に対して正方向に工具を押し当てるようにして施されている。2は台付甕の脚部片である。脚端部径は10.6cmである。色調は赤褐色である。脚部内面に煤の付着が一部みられる。胎土には、長石と石英、赤色酸化土砂、微砂粒、直径1～2mmの砂礫を含む。内湾する脚部をもつ。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なっている。また端部でもナデを施して平滑に整えている。内面はナデを施している。3は高坏の坏部片である。色調は淡褐色で、坏部の内外面に赤彩が付されている。焼成は良好である。坏部内面にまだらに煤の付着がみられる。胎土は精良で、長石と雲母、微砂粒、直径1mmほどの砂礫を少量含む。成形は、脚部から坏部までを一体として作り上げ、その後に粘土を上から充填して坏部の底部を作ったものと考えられる。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後に、縦位のミガキを施している。内面はミガキが施されている。

SI1006 (II - 141 図)

1は高坏の脚部片である。脚端部径は13.1cmである。色調は赤褐色で、焼成は良好である。胎土は精良で、長石と赤色酸化土粒、微砂粒を含む。ハの字状に大きく開く脚部をもつ。成形は、脚部と坏部を別に作り、接合する際は外面接合部に粘土を貼り付けたと考えられる。脚部には透穴が施されている。透孔の配置は一段3方である。脚端部は面取りがなされ、平滑に仕上げられているが、ハケメ調整痕も残っている。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後、さらにその上から縦位のミガキを施している。また透孔の縁もミガキを施している。内面はナデを行なった後、脚部下半に横位のハケメ調整を行なっている。なお、穿孔と器面調整との順序関係は、内外面の調整を行なった後に穿孔を施し、最後に穿孔の縁にミガキを施していることがわかる。

SI1007 (II - 141 図)

1は壺の胴部片である。色調は淡褐色で無文帯には赤彩が付されている。焼成は良好で、胎土は精良である。

また橙色土粒を多く含み、長石と雲母を微量に含む。緩やかな肩部をもつ。輪積み成形で3.5～4cmの粘土帯が内面から観察できる。外面の調整は、全体に縦位のミガキを施し、胴部下半近くでさらに横位のミガキを施している。内面は剥離が激しく明瞭ではないが、輪積み痕が残っている。文様は、山形状の沈線区画を胴部上半に二条施し、この間を単節RLの原体で羽状縄文を表現している。沈線区画を施す際の回転方向は、沈線同士の先後関係から左から右の反時計回りであると推定される。頸部近くでは、S字状結節の羽状縄文が横走しているが、下位の縄文帯は施文後、ミガキによって磨り消されている。

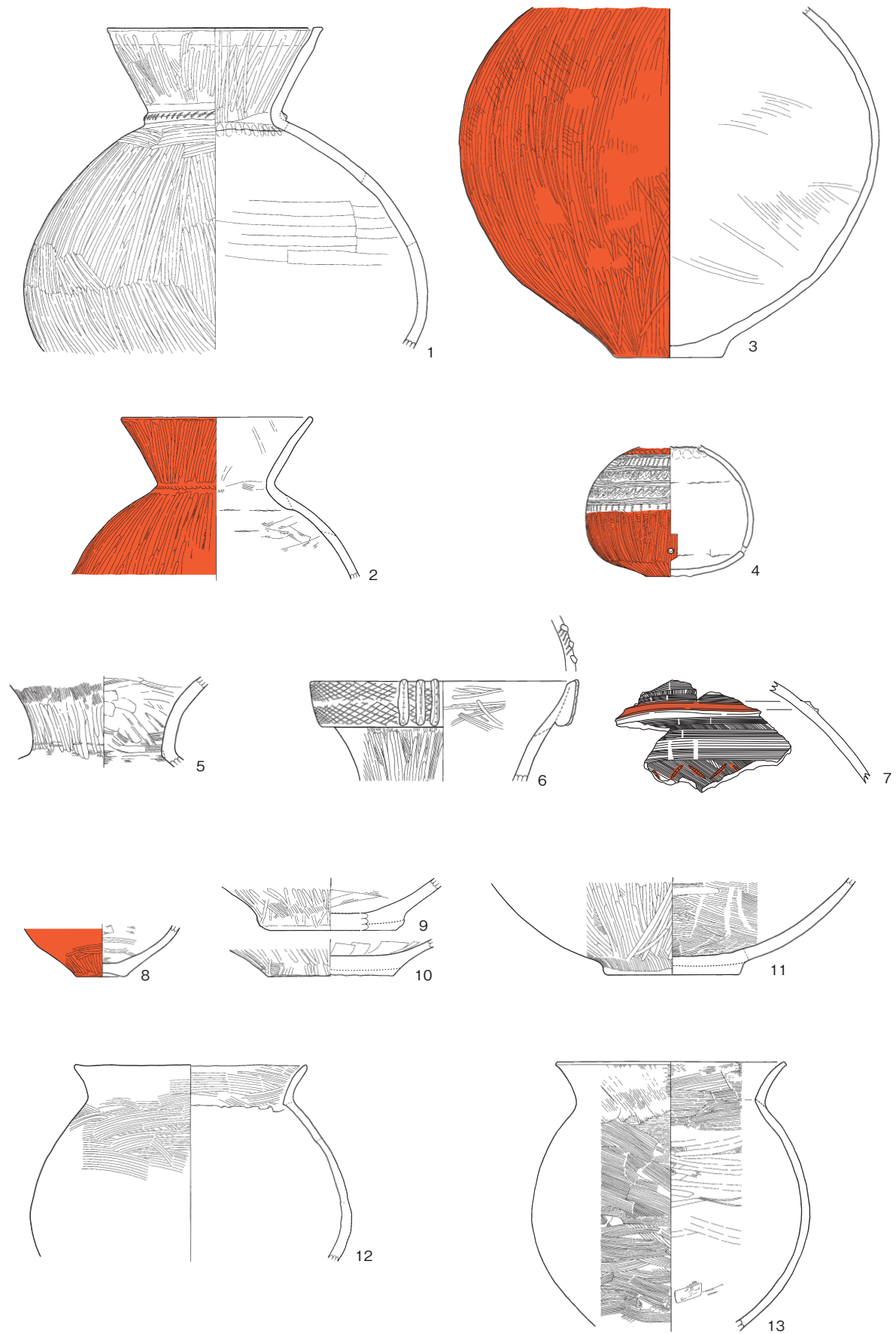
#### 遺構外 (II - 141 図)

1は遺構外出土の高坏である。脚端部径は10.6cmである。色調は淡褐色で、焼成は良好である。坏部内面に煤の付着が一部みられる。胎土は精良で、長石と石英、雲母、赤色酸化土粒を含む。内湾する脚部と下位に稜をもつ坏部をもつ。成形は、脚部から坏部までを一体として筒状に作り、次に内底部を脚接合部に充填している。坏部の稜は、坏部の底部までを成形後、粘土を被せるようにして作り出している。脚部の穿孔は、器面観察から、外面から内面に向かって工具を差し込むことであけることができる。透孔の配置は一段3方である。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後、さらにその上に縦位のミガキを施している。坏部内面はナデを行なった後に、縦位のミガキを施している。脚部内面はケズリを行なった後に縦位のナデ、さらに裾部では横位のナデが施されている。

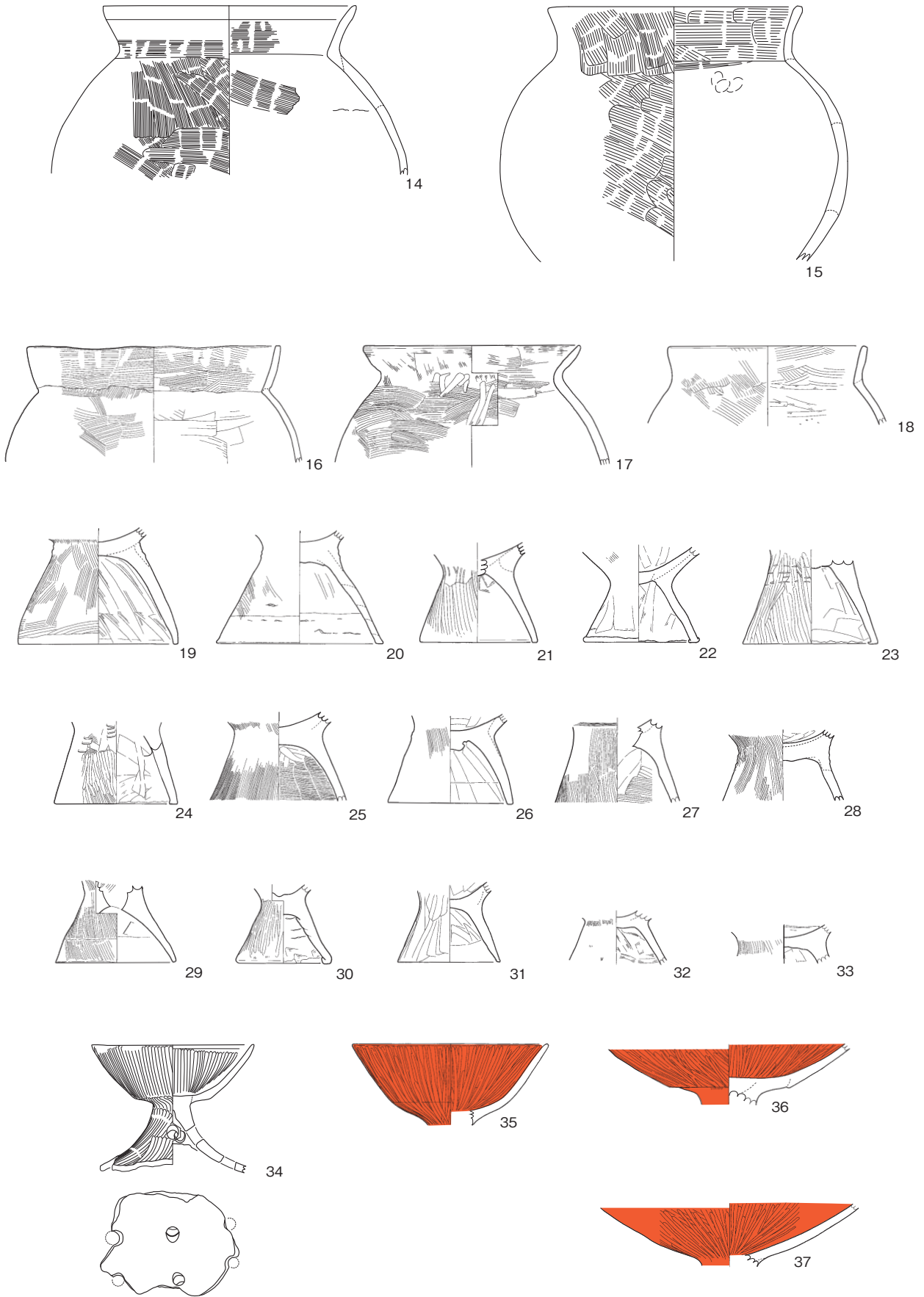
#### SI1004 (II - 142 図)

1は須恵器の坏である。口径は9.8cm、最大径は11.8cm、推定底部径は3.7cm、器高は4.1cmである。色調は暗灰褐色で焼成は良好である。胎土は精良で、長石と微砂粒を含む。器形は径の狭い底部と低く立ち上がる体部、短くなった返しに内傾ぎみの口縁部をもつ。輪積み成形でロクロを使用し、切り離しはケズリで行なわれている。調整はロクロ回転による調整後、底部を横位のケズリを施している。2は比企型坏である。口径は13.9cm、最大径は14.2cm、器高は4.8cmである。色調は褐色で、内面全体と外面の口縁部に赤彩が付されている。焼成は良好である。胎土には、長石と微砂粒、直径1～3mmの砂礫を多く含む。底部から丸くゆるやかに立ち上がり、やや直立気味となる体部、また内面に沈線をもつ口唇部をもつ。口縁部の垂直に立ち上がる箇所

に輪積み痕が残っている。口唇端部はナデによって丸く仕上げられている。調整は、外面は体部上半では横位のケズリを行い、体部下半では斜位のケズリを行なっている。ケズリの方向は向かって左方向に進んでいく。内面は横位のナデ、底面ではナデを施している。また底部外面に直径9cmほどの黒班がみとめられる。3は長胴甕で、口縁部から胴部上半までの破片である。口径は23.2cm、胴部最大径は19.0cmである。色調は淡褐色で、焼成は良好である。胴部は二次焼成による剥離がみられる。外面に一部煤の付着がみられる。胎土には、長石と石英、黒色雲母、微砂粒、直径1mmほどの砂礫を含む。やや上位で最大径をもつ長胴と大きく外反する口縁部をもつ。輪積み成形で、5cmほどの成形帯が内面で認められる。胴部の器厚は6mmほどに対して頸部は9mmと厚く成形されている。頸部内面に稜は作られず、弧を描いて外反している。口唇部はナデによって丸く仕上げられている。調整は、外面は口縁部で横位のハケメ調整を行ない、その後に胴部を斜位の強いケズリを施している。その方向は下位から上位に向かって行われている。4は長胴形の甕と考えられる。口径は22.6cm、胴部最大径は18.2cm、器高は32.6cmである。色調は明褐色で、焼成は良好である。胴部下半には二次焼成による剥離がみられる。胎土には、長石と微砂粒、直径1mmほどの砂礫を含む。底抜け状の孔部と中位に最大径をもつ長胴部、やや直立気味から大きく外反する口縁部をもつ。輪積み成形で、5～10cmほどの成形帯が内面で認められる。胴部の器厚は5mmに対して孔部付近では4mmとなっている。頸部にて接合痕がみられる。口唇部はナデにより丸く仕上げられている。調整は、外面は口縁部で横位のハケメ調整を行ない、その後に胴部を斜位のケズリを施している。その方向は下から上に向かって行なわれている。そしてさらにその上から逆位で斜位のケズリを施している。最後に胴部下半で縦位のケズリを施している。また口縁部内面に黒班が一部みとめられる。

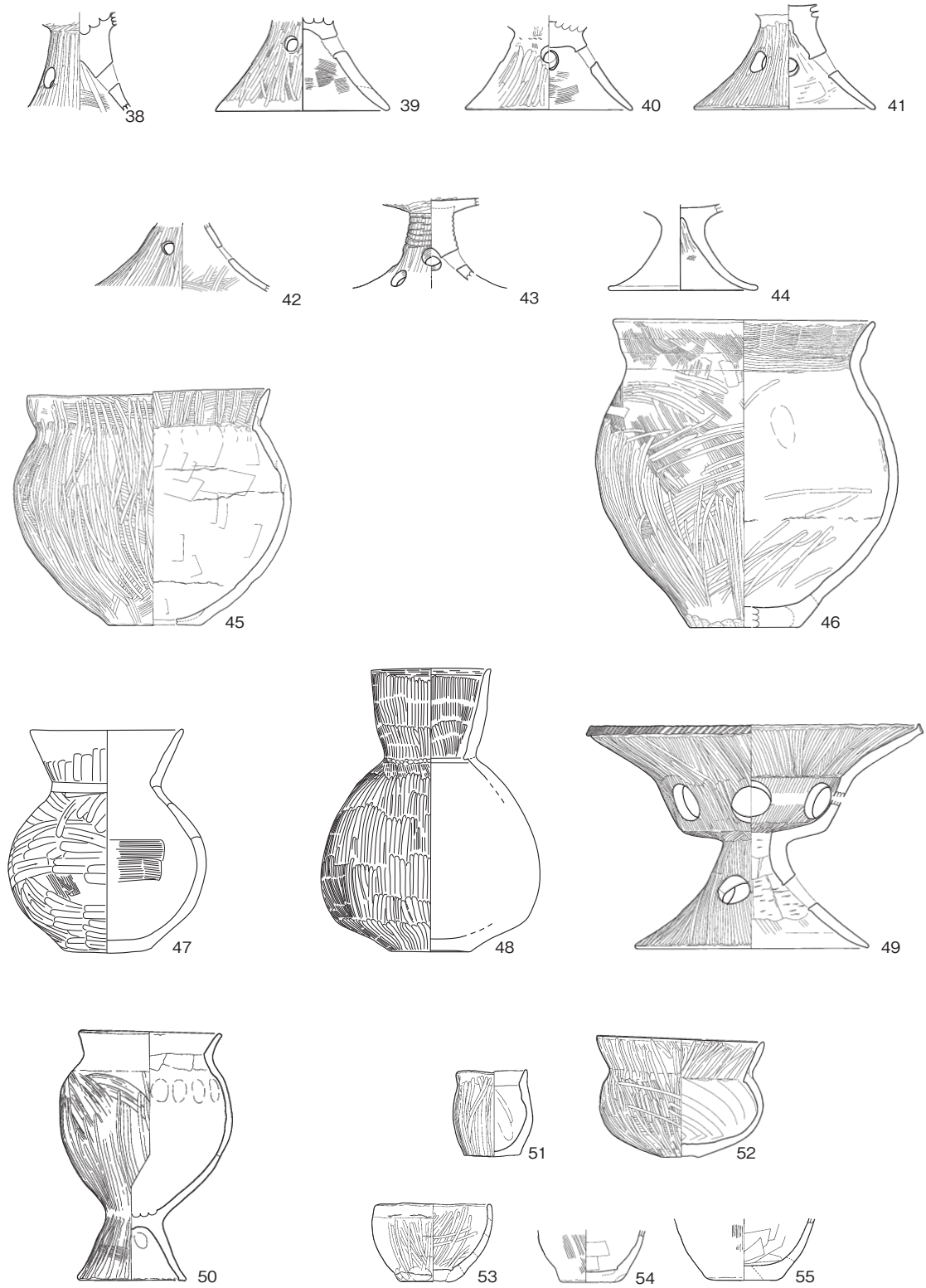


II-138 図 SI1001(1)

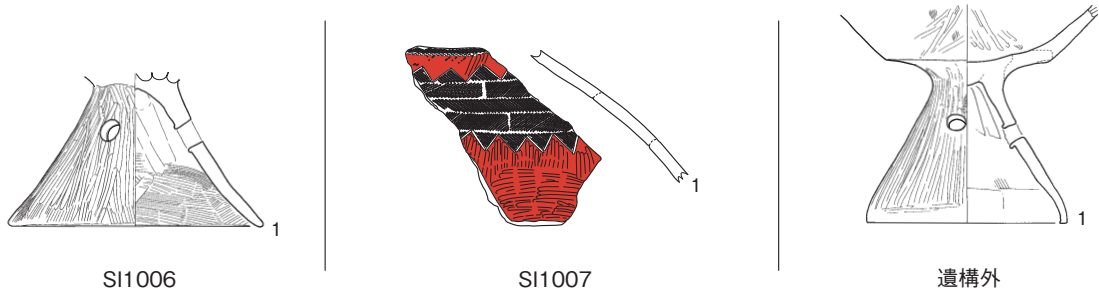
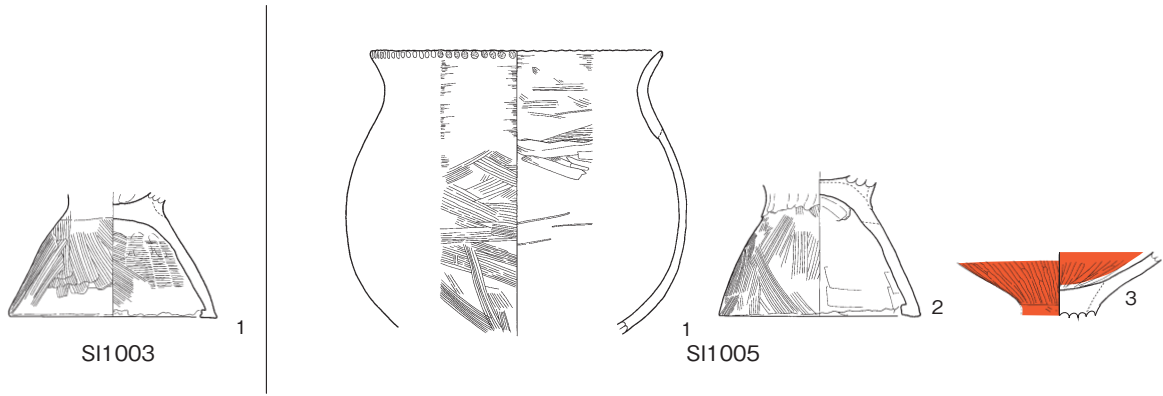


II-139 図 SI1001(2)

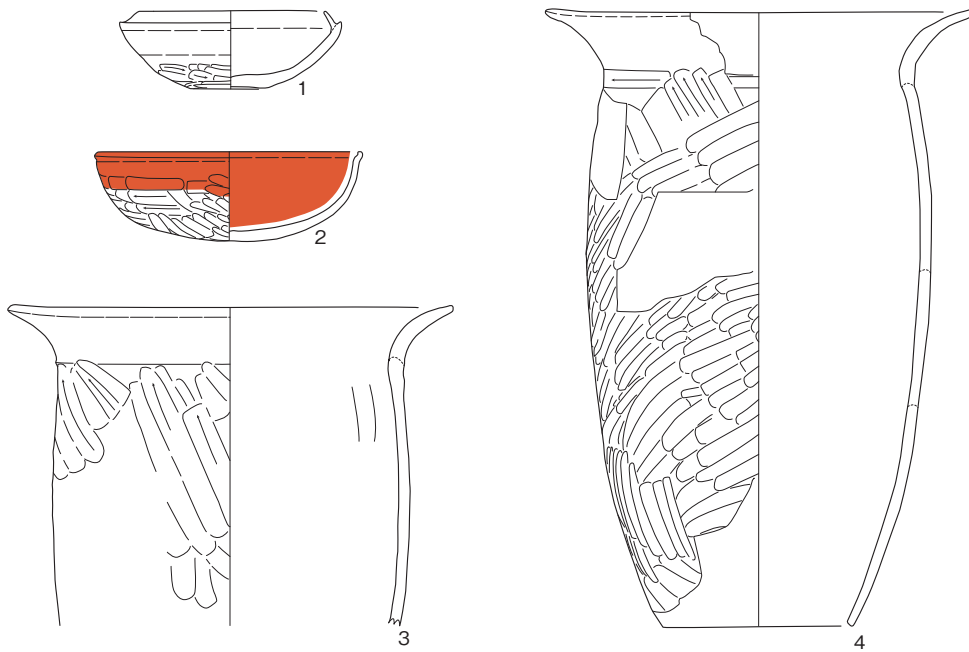
II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



II-140 図 SI1001(3)



II-141 図 SI1003、SI1005、SI1006、SI1007、遺構外出土遺物



II-142 図 SI1004 出土遺物

## 第VI章 縄文時代の遺構と遺物

本調査区内では早期末葉の炉穴が1基検出されたのみである。しかし、江戸時代遺構の覆土には、前期土器が含まれていることから、周辺に概期の集落が存在したことを窺わせている。実際、2008年に実施した看護師宿舎Ⅲ期地点では、縄文時代前期竪穴住居址1軒、早期竪穴住居址1軒、炉穴9基など23基の遺構が検出された(東京大学埋蔵文化財調査室 2012)。

### SF555 (II - 144 図)

#### 遺構

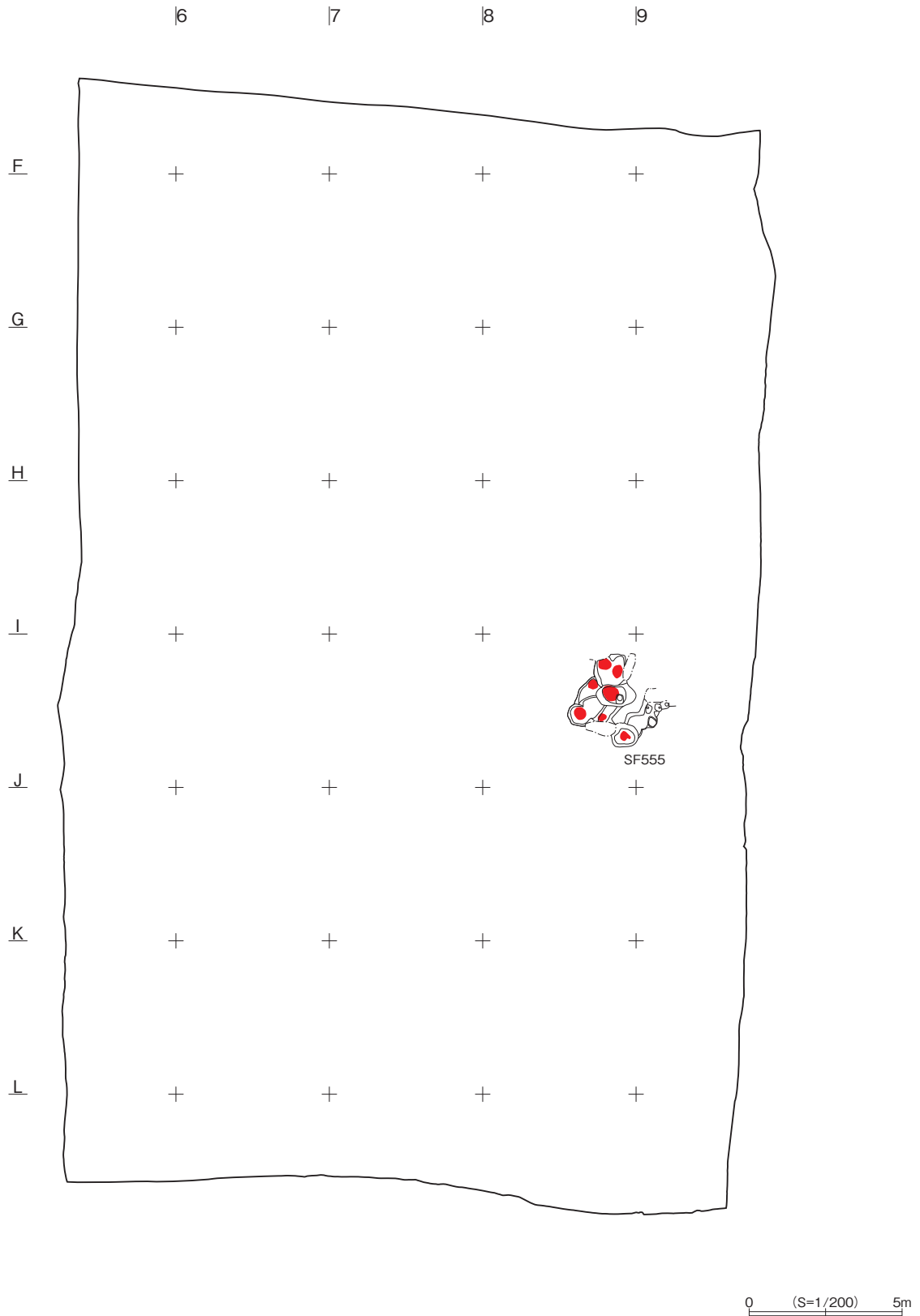
I8・9グリッドに位置する遺構である。その不整形から炉穴と考えられる。被熱炉床は7箇所確認され、複数回にわたって作り替えられたことが判る。南東部の炉床直上から、図示した土器片が出土したが、それ以外に遺物は出土していない。

#### 遺物 (II - 145 図)

1～3は同一個体片で深鉢形土器である。遺存部分は少ないが砲弾形を呈すると思われる。胎土は赤褐色～黒色を呈し、焼成は良好であるが下部破片である3は、赤化し内部は脆弱化し剥離が見られる。口縁は緩やかな波状を呈し、口縁から胴部にかけて平行する6条の沈線によって区画され、隆帯状になっている。この隆帯および口唇部には絡条体による斜位の圧痕が見られ、絡条体は長さ3cm以上、太さ5mmである。絡条体には密に0段撚り紐rをs巻きされている。この絡条体が施文された隆帯下部では、一部施文がV字状になっている。外面下半部には板状工具による縦位の擦痕が認められ、内面は貝殻条痕および板状工具での横位のナデが認められる。補修孔を有する。

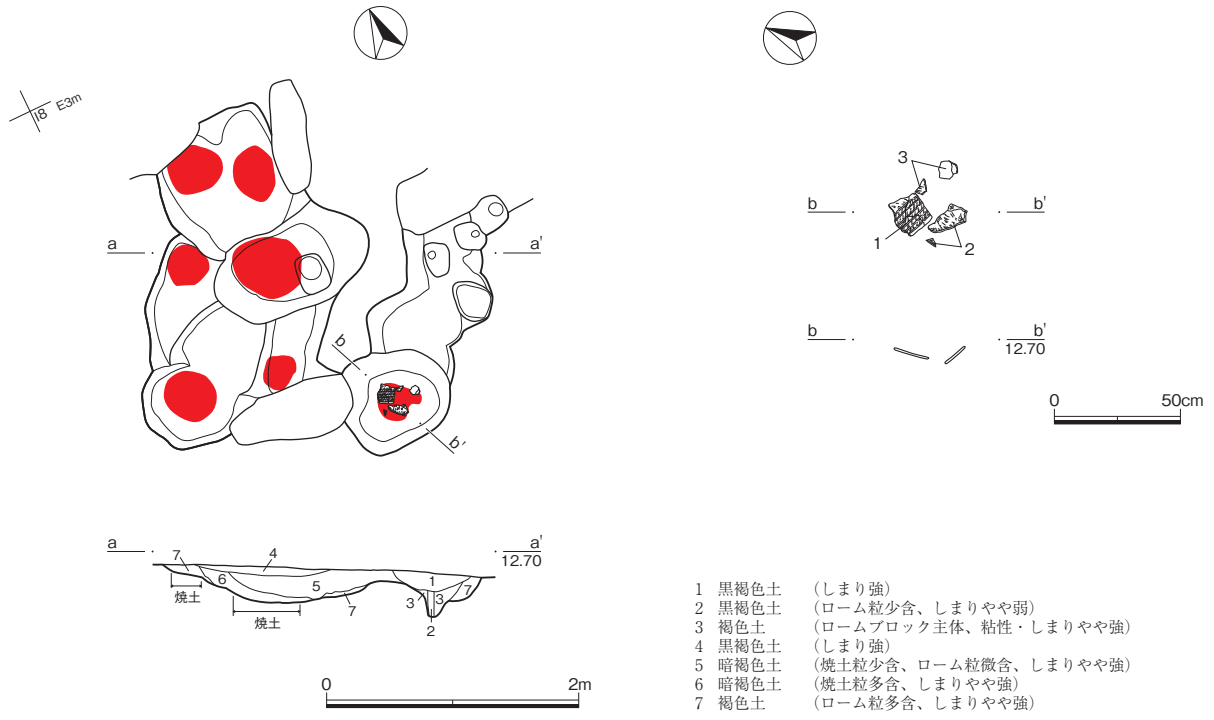
この土器は埼玉県富士見市氷川前遺跡5号住居跡(富士見市教育委員会 1997)出土土器に酷似しており、類例は未だ少ないようであるが、茅山上層式以降打越式以前の時期と推測されている。



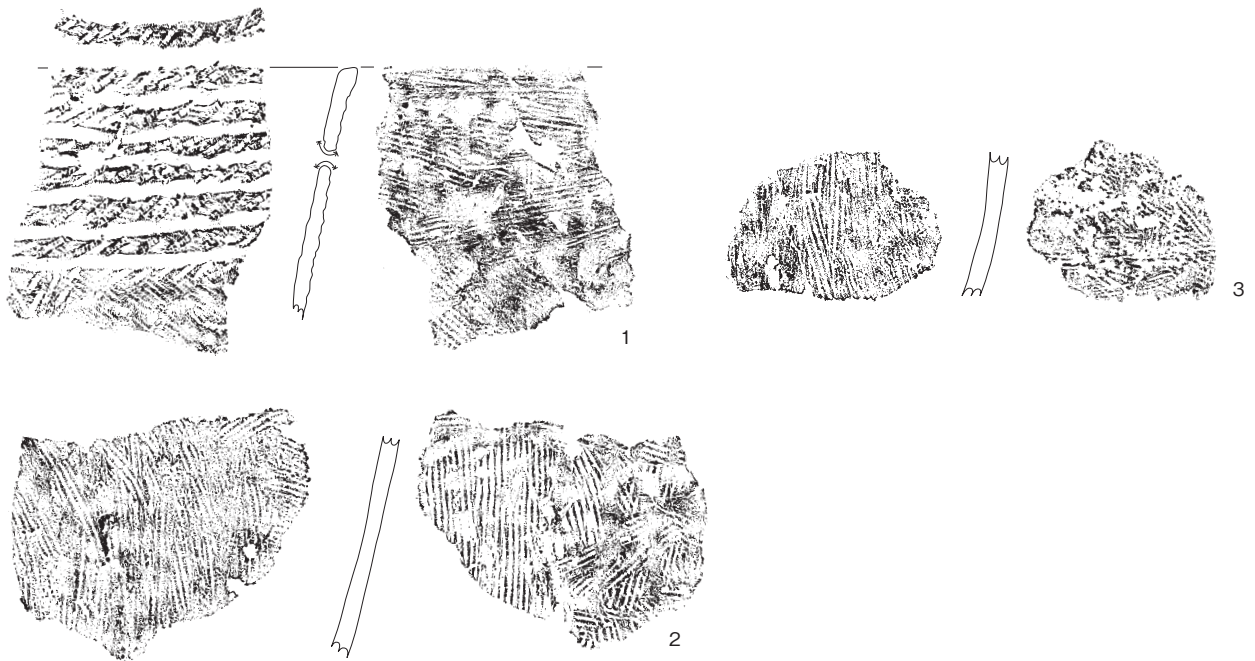


II-143 図 縄文時代遺構配置図

II 看護職員等宿舎1号棟地点の調査



II-144 図 SF555



II-145 図 SF555出土遺物(S=1/4)

## 第Ⅶ章 看護職員等宿舎1号棟地点出土の動物遺体

### はじめに

医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟地点より出土した動物遺体について報告をおこなう。これらの資料のほとんどは、現場にて肉眼で確認のできたものを任意に採集したものが主体である。以下、本地点出土の動物遺体の概要を述べる。

### 1 分析方法

分析方法は以下のとおりである。なお、脊椎動物の同定作業には、筆者所蔵標本を用いた。また、松井（2008）、西本（2002・2003・2005～2009）なども参考にした。さらに、鳥類は松岡他（2009）を参考にした。

#### (1) 貝類遺体

貝種組成は最小個体数で表している。なお、計数方法は以下のとおりである。

まず、巻貝類は殻高が2分の1以上残存している資料を計数対象とした。しかし、アワビ類など殻口部分が広くそれによって形状が笠・皿形の巻貝類は、殻頂部分が残存している資料を計数対象とした。また、イボキサゴは、殻高が低いため滑層部分の残存しているものを計数の対象とした。

二枚貝類は、殻頂部分の残存している資料を計数対象とし、それらを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数した。そして、そのうち多いほうを最小個体数とした。以上の計数対象以外の資料は、「破片」として一括して扱った。さらに、ハマグリは、殻長50mm未満を「中小型」、以上を「大型」として一部分類をおこなった。

なお、各サンプルの分類群内において、計数対象資料が残存せず、「破片」のみである場合は、一括して1個体として計数をおこなった。

#### (2) 魚類

魚類遺体の分析方法は樋泉（1999）に準拠する。具体的には、綱より下位まで同定可能な部位である主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・擬鎖骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨を中心に抽出して「同定対象資料」とし、それ以外の綱より下位まで同定することが難しい部位は「同定対象外資料」とした。また、「同定対象資料」の内、同定するための特徴的な部分が欠損しているために同定することのできなかった資料は「同定不可」と記載した。

なお、組成は破片数で提示する。

#### (3) 鳥類・哺乳類

同定作業をおこなうにあたって、綱より下位の同定が困難な部位は「同定対象外資料」として対象からはずした。また、同定対象資料において、長骨の端部などの同定の決め手となりうる部分が欠損しているものに関しては「同定不可」と記載した。なお、組成は破片数で提示する。

### 2 分析結果

分析の結果、本地点から出土した動物遺体は42群であった。種名を第1表に示す。以下、貝類、魚類、鳥類、哺乳類のカテゴリーごとに詳細を概観する。なお、左記のカテゴリーのほかに、SK299（18世紀初頭 [1703年]：C面）よりサンゴ類が1点出土している。

#### (1) 貝類（第2表）

##### (1)-1 調査地点全体の概要

同定された貝類遺体は、18種14105個体であった。最も多いのは、ヤマトシジミで13151個体含まれており、全体の93.24%を占める。次いで、ハマグリが多く710個体含まれており全体の5.03%、さらにマガキも多く126個体含まれており0.89%をそれぞれ占める。その他に、サザエ（32個体・0.23%）、シオフキガイ（27個体・0.19%）、アサリ（16個体・0.11%）、イボキサゴ、ミルクイ（各9個体・0.06%）、アカガイ（7個体・0.05%）、オオタニシ（5個体・0.04%）、サルボウガイ、ウネナシトマヤ（各3個体・0.02%）、アワビ類、アカニシ（各2個体・0.01%）、イボウミニナ、ホタテガイ、ナミマガシワ（各1個体・0.01%）が含まれていた。

しかし、本報告で分析に用いた貝類遺体の9割がSK356のものであり、そのため、本遺構の組成が大きく調査地点全体の組成に影響している。なお、SK368（～17世紀末 [～1682年]：D面）においても天箱で1箱分の貝類遺体が出土している。期間の都合上、整理が完了できなかった。内容物を観察したところ、遺構廃絶時期を同じくするSK356と同様にヤマトシジミが9割近くを占めていた。次いでハマグリが多く、さらにサザエも多く含まれていた。そのほかに、マダカアワビ、アカガイ、サルボウガイ、シオフキガイ、アサリなどが数点含まれていた。なお、ハマグリは大型のもので構成され

ている。

(1) - 2 遺構別

① SK37 (19世紀中頃：A面)

13種229個体が出土した。最も多いのはハマグリで159個体出土し、全体の69.4%を占める。次いでサザエが多く23個体出土し、10.0%を占める。その他に、ヤマトシジミ(14個体・6.1%)、マガキ、アサリ(各10個体・4.4%)、アカガイ、サルボウガイ(各3個体・1.3%)、クロアワビ、イボキサゴ、ホタテガイ、ナミマガシワ(各1個体・0.4%)、マダカアワビ(破片・0.4%)が出土している。ハマグリは、中小型の方が同種全体の82%を占めていて大型よりも多い。

イボキサゴは近世において食品として流通していなかった種類であり、且つ1点と少ない。おそらく、生息域を同じくするハマグリやアサリなどを採集した際に混入したものと推測される。サルボウガイに関しても、数量が3個体と少ないことから同様の可能性が推測される。なお、マガキ左殻の内1点が、サルボウガイ片に付着している。ナミマガシワは管見の限りでは、マガキに伴って出土することが多い種であることから、マガキと共に持ち込まれたものと推測される。ホタテガイは、右殻1点が出土するのみで外側が被熱している。貝鍋として使用された可能性が推測される。

アカガイの右殻1点に人為的と推測される穿孔がある。その穿孔は、外側から内側へ向かって穿かれている。

なお、アワビ類とホタテガイは本遺構からのみ出土している。

② SK167 (17世紀末～18世紀初頭 [1682～1703年]: C面)

6種528個体が出土した。最も多いのはヤマトシジミで506個体出土し、全体の95.8%を占める。次いでハマグリが多く16個体出土し、3.0%を占める。その他に、アカガイ(3個体・0.6%)、イボキサゴ、サザエ、サルボウガイ(各1個体・0.2%)が出土している。ハマグリは、大型の方が同種全体の88%を占めていて中小型よりも多い。

イボキサゴとサルボウガイは、SK037のものと同様に、ハマグリを採集した際に混入したものと推測される。

③ SK168 (18世紀初頭 [1703年]: C面)

5群5個体が出土した。不明巻貝、アカガイ、ミルクイ、ハマグリ [大型] はそれぞれ破片資料、ヤマトシジミは左殻1点が出土している。

④ SU254 (～18世紀初頭 [～1703年]: C面)

ハマグリ [大型] の右殻1点が出土している。

⑤ SU274 (17世紀末～18世紀初頭 [1682～1703年]: C面)

6種34個体が出土した。最も多いのはハマグリで10個体出土し、全体の29.4%を占める。次いでサザエ、ミルクイ、アサリが多くそれぞれ7個体出土し、20.6%を占める。その他に、ヤマトシジミ(2個体・5.9%)とアカガイ(1個体・2.9%)が出土している。ハマグリは、大型の方が同種全体の70%を占めていて中小型よりも多い。

⑥ SK299 (18世紀初頭 [1703年]: C面)

3種4個体が出土している。内訳は、サザエ(殻・2個体)、アカニシ(1個体)、ミルクイ(左1点)である。

⑦ SK356 (～17世紀末 [～1682年]: D面)

本遺構からは大量の貝類遺体が出土している、具体的に天箱で13箱が現場より取り上げられてきている。その内、ほぼ半分の6箱分に関して整理をおこなった。

結果、8種13191個体が同定された。最も多いのはヤマトシジミで12635個体含まれており、全体の95.8%を占める。次いで、ハマグリが多く517個体含まれており、3.9%を占める。その他に、シオフキガイ(24個体・0.2%)イボキサゴ(7個体・0.1%)、オオタニシ(5個体・0.04%)、イボウミニナ、アカニシ(各1個体・0.01%)、サルボウガイ(破片資料・0.01%)が含まれている。ハマグリは、ほぼ大型のもので構成されている。

イボキサゴとイボウミニナは、食品として流通しているとは考えにくい種であり、生息域を同じくするハマグリを採集した際に混入したものと推測される。また、サルボウガイとシオフキガイも量が少なく同様の可能性が推測される。

本遺構から出土したヤマトシジミをはじめとする二枚貝類において、腹縁部に人為的なものと推定される剥離や欠損が見られた。おそらく、剥き身作業に伴ってつけられたものと推定される。

⑧ SE526 (～17世紀末 [～1682年]: D面)

ヤマトシジミの右殻1点が出土している。

⑨ 盛土C(17世紀末～18世紀初頭[1682～1703年]:C面)

4種139個体が出土した。最も多いのはマガキで117

個体出土し、全体の84.2%を占める。次いで、ハマグリが多く16個体出土し、11.5%を占める。その他に、シオフキガイとウネナシトマヤがそれぞれ3個体(2.2%)出土している。ハマグリは、大型のもののみである。

ウネナシトマヤは食用ではなく、マガキに着生している種であることから、マガキと共に持ち込まれたものと推測される。また、シオフキガイは、生息域を同じくするハマグリを採集した際に混入したものであることが推測される。

## (2) 魚類 (第3表)

### (2) - 1 調査地点全体の概要

同定された魚類遺体は、17群161点であった(同定資料)。同定資料以外に、同定不可とした資料が5点、同定対象外とした資料が12点以上含まれていた。

さて、同定資料のうち、アジ亜科の稜鱗とタイ型の歯は、他の魚種ではないもしくは同定されない部位である上、一尾あたりの点数が多い。そのため、以下の組成分析から除いた。同定資料から以上の部位を除いた131点で組成を算出した。

最も多いのはタイ科で46点含まれており、全体の35.1%を占める。次いで、キス属とカレイ科が多く各16点含まれており、各12.2%を占める。さらにアジ亜科(14点・10.7%)とニシン科(10点・7.6%)が比較的多い。その他に、サバ属(7点・5.3%)、ホウボウ科(5点・3.8%)、フサカサゴ科、スズキ属(各3点・2.3%)、コチ科、ウミタナゴ属(各2点・1.5%)、タラ科、サヨリ科、アマダイ属、ブリ属、カツオ(各1点・0.85%)が含まれていた。

タイ科で科より下位まで同定できたものは、マダイ亜科もしくはマダイであった。アジ亜科は、マアジのみであった。一方、スズキ属は尾椎のみで、種まで同定できるものはなかった。カレイ科は、ほとんどのものがイシガレイ標本に近似していたが、SK167より出土した右前鰓蓋骨のみアカガレイの標本に近似している。

### (2) - 2 遺構別

#### ① SK37 (19世紀中頃：A面)

11群55点(+a)が出土した。その内、同定対象外とした資料には大量の鱗が含まれていた。同定不可とした資料は椎骨1点であった。また、アジ亜科の稜鱗も8点含まれていた。これらの資料を除いた44点で組成を算出した。

最も多いのはタイ科で12点出土し、全体の27.3%を占める。次いで、ニシン科が多く9点出土し、20.5%を

占める。さらにキス属(8点・18.2%)も比較的多い。その他に、アジ亜科、ホウボウ科(各3点・6.8%)、コチ科、ウミタナゴ属、ヒラメ(各2点・4.5%)、サヨリ科、アマダイ属、カレイ科(各1点・2.3%)が出土した。

タイ科で科より下位まで同定できた部位は主上顎骨2点で、ともにマダイ亜科であった。タイ科は比較的小型のもので占められている。

アジ亜科では、亜科より下位まで同定できる部位は尾椎2点で、ともにマアジであった。

ホウボウ科の尾椎3点は、ホウボウ標本のものに近似していた。

カレイ科の尾椎1点は、イシガレイ標本のものに近似していた。

タイ科の尾椎には、切断面が観察された。

#### ② SK167 (17世紀末～18世紀初頭 [1682～1703年]：C面)

6群60点(+a)が出土した。その内、同定対象外とした資料には大量の鱗が含まれていた。同定不可とした資料は右前鰓蓋骨と椎骨各1点であった。また、タイ型の歯も15点含まれていた。これらの資料を除いた41点で組成を算出した。

最も多いのはカレイ科で15点出土し、全体の36.6%を占める。次いで、タイ科が多く11点出土し、26.8%を占める。さらにキス属(8点・19.5%)も比較的多い。その他に、サバ属(5点・12.2%)、ブリ属、アジ亜科(各1点・2.4%)が出土した。

タイ科で科より下位まで同定できた部位は9点で、これらはマダイ亜科もしくはマダイのものであった。なお、マダイの前頭骨は、矢上方向に正中線上に切断されており、左側が残存している。また、出土部位にも偏りがみられ、頭部(頭蓋骨、内臓骨、肩帯・腰帯)のみである。

アジ亜科では、亜科より下位まで同定できる部位はなかった。

カレイ科は、右前鰓蓋骨1点のみがアカガレイの標本に近似しているほかは、すべて、イシガレイ標本のものに近似していた。なお、角骨左右ともに関節部分内面に縦位の切痕がみられる。

アカガレイに近似する右前鰓蓋骨は、外側に縦に孔が並んでいる。その孔は比較的大きく、その点でイシガレイ標本のものとは異なる。報告者の手元にあるカレイ科の標本は、ムシガレイ、イシガレイ、マガレイ、マコガレイ、ババガレイ、メイタガレイ、マツカワの7種であるが、いずれの標本ともその特徴に一致するものはなかった。しかし、カレイ科自体種類が多く、なかにはソ

ウハチやヒレグロなど同様に前鰓蓋骨の外側に孔が並んでいるものがあることから断定は難しい。今後、引き続き調査を進める必要がある。さて、この資料が、アカガレイのものであると仮定した場合、国元から持ち込まれた可能性が高い。アカガレイは、日本海側を中心に生息しており、太平洋側では現在の福島県以北とされている。現在でも石川県近江町市場などでアカガレイの干物が売られており、地元で親しまれている種でもある。

サバ属の腹椎2点ともに、右側面上部が矢上方向に切断されている。また、内1点が体軸に対して横位に切断され後側が残存している。

③ SU274 (17世紀末～18世紀初頭 [1682～1703年]: C面)

3群8点が出土した。その内、5点を同定対象外とした。同定できた資料は、カツオの左歯骨と角骨各1点で同一個体のもの、タラ科とタイ科でともに腹椎が1点であった。なお、タイ科の腹椎は、両側面前縁及び後縁に切断面を有している。

④ SK356 (～17世紀末 [～1682年]: D面)

タイ科の尾椎が1点出土している。なお小型である。

⑤ SK368 (～17世紀末 [～1682年]: D面)

7群54点(+a)が出土した。その内、同定対象外とした資料には、大量の鱗が含まれていた。同定不可とした資料は椎骨2点であった。また、アジ亜科の稜鱗6点とタイ型の臼歯1点も含まれていた。これらの資料を除いた42点で組成を算出した。

最も多いのはタイ科で21点出土し、全体の50.0%を占める。次いで、アジ亜科が多く10点出土し、23.8%を占める。その他に、フサカサゴ科、スズキ属(各3点・7.1%)、ホウボウ科、サバ属(各2点・4.8%)、ニシン科(1点・2.4%)が出土した。

タイ科で科より下位まで同定できた部位は5点で、これらはマダイ亜科もしくはマダイのものであった。なお、マダイの前頭骨3点は、すべて矢上方向に正中線上に切断されている。その内2点が左側、1点が右側、それぞれ残存していた。タイ科は椎骨をサイズで、小型、中小型、中型の3つに分けられた。その内、尾椎で中小型1点と中型2点に両側面後縁に切断面がみられた。また、腹椎1点にも左側面に切断面がみられた。下した際に付いたものと推定される。

スズキ属の尾椎は小型である。

(3) 鳥類 (第4表)

(3) - 1. 調査地点全体の概要

鳥類遺体は、3群31点であった。その内、同定不可とした資料が3点、同定対象外とした資料が13点含まれていた。以下、これらの資料を除いた「同定資料」15点で組成を算出した。

最も多いのはカモ亜科で11点含まれており、全体の73.3%を占める。その他に、キジ科3点(20.0%)とガン族?1点(6.7%)が含まれていた。

(3) - 2. 遺構別

① SK37 (19世紀中頃: A面)

キジの右足根中足骨1点のみが出土した。

② SK167 (17世紀末～18世紀初頭 [1682～1703年]: C面)

1亜科12点が出土した。内訳は、カモ亜科7点と同定対象外とした資料が5点である。

カモ亜科は最小で2羽分の上肢(翼)部分で構成されている。同定対象外とした資料も、部位が不明であった2点を除き、前肢(翼)部分であり、サイズや形状からもカモ亜科の資料と同一個体のものと推測される。

③ SK368 (～17世紀末 [～1682年]: D面)

3群18点が出土した。その内、同定不可とした資料が3点、同定対象外とした資料が8点含まれていた。以下、これらの資料を除いた「同定資料」7点で組成を算出した。

最も多いのはカモ亜科で4点出土し、全体の57.1%を占める。その他に、キジ科2点(28.6%)とガン族?1点(6.7%)が出土した。

(4) 哺乳類 (第5表)

哺乳類遺体は、3群23点であった。その内、同定不可とした資料が1点含まれていた。以下、この資料を除いた「同定資料」22点で組成を算出した。

最も多いのは、ネズミ類で16点出土し、全体の72.2%を占める。その他に、ニホンジカ4点(18.2%)と大型家畜(ウシも含む)2点(9.1%)が含まれていた。

出土遺構は、ネズミ類がSK368(～17世紀末 [～1682年]:D面)、ニホンジカがSK168(18世紀初頭 [1703年]:C面)、ウシは盛土C(17世紀末～18世紀初頭 [1682～1703年]:C面)、大型家畜はSB002(近代:A面)となっている。

ネズミ類は、最小個体数で4体分である。左上腕骨1

点以外は後肢部分である。害獣として駆除されたものと想定されるが、左右各1点の寛骨において共に坐骨部分に切痕がみられる。なお、ネズミ類が出土したSK368からは、同定不可とした肩甲骨が1点出土している。体部の破片であるが、サイズからイヌなどの中型の哺乳類のものである。

ニホンジカはすべて、角片であり被熱により白色化している。細工に用いられたもので火災の際に被熱したものと推定される。

ウシは腰椎が1点出土している。

大型家畜は肋骨部分であり、両端が切断されている。近代面から出土であることから、西洋料理における出汁に用いられたものと推定され、そのため、ウシのものである可能性が高い。

## まとめ（第6表）

SK37とSB2の2基以外は、1703年以前の遺構であった。19世紀中頃の遺構であるSK37のハマグリは殻長50mm未満の中小型であるのに対して、1703年以前の各遺構から出土しているものはいずれも殻長50mm以上の大型のものが主体であった。管見の限りではあるが、17世紀代のハマグリは大型のものが主体である傾向がある。例えば、千代田区一橋徳川家屋敷跡の分析でも同様の傾向が抽出された（阿部2018）。

また、大量にヤマトシジミが出土する遺構がSK356をはじめ、SK368、SK165の3基確認された。その内、SK356とSK368の廃絶時期は1682年以前と同じである。SK165のみ1682年から1703年である。同様にヤマトシジミが大量に出土している遺構は、本遺跡において17世紀代に集中しており、医学部教育研究棟地点の分析では、将軍御成などの特別な場で供されたものである可能性を指摘した（阿部2020）。SK356出土のヤマトシジミを観察したところ、剥き身に際して付いたことが想定される腹縁部の破損が観察された。保存用に加工するために剥き身をおこなった可能性は捨てきれないが、大量のヤマトシジミを剥くという丁寧且つかなりの時間と手間のかかる作業をおこなっていることから、特別な場で供されたものである可能性が高い。ヤマトシジミ自体、『黑白精味集』（延享3年（1746年）成立）によれば上物とされている。さらにマダイのものと推定されるタイ科がこれらの遺構において多く含まれていることやカモ亜科がふくまれることからその可能性が高いものと考えられる。

## 謝辞

SK167のカレイ科右前鰓蓋骨の種を検証するにあたって、大江文雄氏に多くの種類のカレイ科前鰓蓋骨の写真データを提供していただいた。また、畑山智史氏にもさまざまなご助力をいただいた。芳名を記して謝意に代えたい。

## 【参考文献】

- 阿部常樹 2018「動物遺体分析」『東京都千代田区一橋徳川家屋敷跡』株式会社CELほか  
 2020「医学部教育研究棟地点出土の動物遺体」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室  
 樋泉岳二 1999「魚類」西本豊弘・松井章編『考古学と動物学』同成社  
 西本豊弘 2002「哺乳動物骨格図集（1）」『動物考古学』第19号 動物考古学研究会  
 2003「哺乳動物骨格図集（2）」『動物考古学』第20号 動物考古学研究会  
 2005「動物骨格図集（3）」『動物考古学』第22号 動物考古学研究会  
 2006「動物骨格図集（4）」『動物考古学』第23号 動物考古学研究会  
 2007「動物骨格図集（5）」『動物考古学』第24号 動物考古学研究会  
 2008「動物骨格図集（6）」『動物考古学』第25号 動物考古学研究会  
 2009「動物骨格図集（7）」『動物考古学』第29号 動物考古学研究会  
 松井章 2008『動物考古学』京都大学学術出版会  
 松岡廣繁（総指揮）・安部みき子編 2009『鳥の骨探』株式会社エヌ・ティー・エス

第1表 医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟地点出土動物遺体種名表

刺胞動物門 Phylum Cnidaria	属種不明 gen. et sp. indet.
花虫綱 Class Anthozoa	カサゴ目 Order Scorpaeniformes
目科属種不明 ordo indet	フサカサゴ科 Family Scorpaenidae
軟体動物門 Phylum MOLLUSCA	属種不明 gen. et sp. indet.
腹足綱 Class Gastropoda	ホウボウ科 Family Triglidae
古腹足目 Order Vetigastropoda	属種不明 gen. et sp. indet.
ミミガイ科 Family Haliotidae	コチ科 Family Platycephalidae
マダカアワビ <i>Haliotis (Nordotis) madaka</i>	属種不明 gen. et sp. indet.
クロアワビ <i>Haliotis (Nordotis) discus discus</i>	スズキ目 Order Perciformes
ニシキウズガイ科 Family Trochidae	スズキ科 Family Serranidae
イボキサゴ <i>Umbonium moniliferum</i>	スズキ属 <i>Lateolabrax</i> sp.
サザエ科 Family Turbinidae	キス科 Family Sillaginidae
サザエ <i>Turbo (Batillus) cornutus</i>	キス属 <i>Sillago</i> sp.
盤足目 Order Discopoda	キツネアマダイ科 Family Malacanthidae
タニシ科 Family Vivipariidae	アマダイ属 <i>Branchiostegus</i> sp.
オオタニシ <i>Cipangopaludina japonica</i>	アジ科 Family Carangidae
ウミニナ科 Family Batillariidae	ブリモドキ亜科 Subfamily Naucratinae
イボウミニナ <i>Batillaria zonalis</i>	ブリ属 <i>Seriola</i> sp.
新腹足目 Order Neogastropoda	アジ亜科 Subfamily Carangidae
アケキガイ科 Family Muricidae	マアジ <i>Trachurus japonicus</i>
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	タイ科 Family Sparidae
二枚貝綱 Class Bivalvia	マダイ亜科 Subfamily Pagrinae
フネガイ目 Order Arcoida	マダイ <i>Pagrus major</i>
フネガイ科 Family Arcidae	ウミタナゴ科 Family Embiotocidae
アカガイ <i>Anadara (Scapharca) broughtonii</i>	ウミタナゴ属 <i>Ditrema</i> sp.
サルボウガイ <i>Scapharca kagoshimensis</i>	サバ科 Family Scombridae
イタヤガイ目 Order Pectinoidea	カツオ <i>Katsuwonus pelamis</i>
イタヤガイ科 Family Pectinidae	サバ属 <i>Scomber</i> sp.
ホタテガイ <i>Patinopecten yessoensis</i>	カレイ目 Order Pleuronectiformes
カキ目 Order Ostreoida	ヒラメ科 Family Paralichthyidae
ナミマガシワ科 Family Anomiidae	ヒラメ <i>Paralichthys olivacea</i>
ナミマガシワ <i>Anomia chinensis</i>	カレイ科 Family Pleuronectidae
イタボガキ科 Family Ostreidae	属種不明 gen. et sp. indet.
マガキ <i>Crassostrea gigas</i>	鳥綱 Class Aves
マルスダレガイ目 Order Veneroida	キジ目 Order Galliformes
バカガイ科 Family Mactridae	キジ科 Family Phasianidae
シオフキガイ <i>Mactra veneriformis</i>	キジ <i>Phasianus versicolor</i>
ミルクイ <i>Tresus keenae</i>	属種不明 gen. et sp. indet.
フナガタガイ科 Family Trapezidae	カモ目 Order Anseriformes
ウネナシトマヤガイ <i>Trapezium liratum</i>	カモ科 Family Anatidae
シジミ科 Family Cobalidae	ガン族 Tribe Anserini
ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i>	属種不明 gen. et sp. indet.
マルスダレガイ科 Family Veneridae	カモ亜科 Subfamily Anatinae
アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	属種不明 gen. et sp. indet.
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	哺乳綱 Class Mammalia
脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA	齧歯目 Order Rodentia
硬骨魚綱 Class Osteichthyes	ネズミ科 Family Muridae
ニシン目 Order Clupeiformes	属種不明 gen. et sp. indet.
ニシン科 Family Clupeidae	偶蹄目 Order Artiodactyla
タラ目 Order Gadiformes	シカ科 Family Cervidae
タラ科 Family Gadidae	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
属種不明 gen. et sp. indet.	ウシ科 Family Bovidae
メダカ目 Order Cyprinodontiformes	ウシ <i>Bos taurus</i>
サヨリ科 Family Hemiramphidae	



第2表 医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点出土土員類遺体組成表

遺構	マ ダ カ ア ワ ビ	ク ロ ア ワ ビ	イ ボ キ サ ゴ	サ ザ エ		オ オ タ ニ シ	イ ボ ウ ニ ナ	ア カ ニ シ	不 明 巻 貝	ア カ ガ イ		サ ル ボ ウ ガ イ		ホ タ テ ガ イ	ナ ミ マ ガ シ ワ	マ ガ キ		シ オ フ キ ガ イ		ニ ル ク イ		ウ ネ ナ シ ト マ ヤ		ヤ マ ト シ ジ ニ		ア サ リ		ハ マ グ リ		ハ マ グ リ 「 中 小 」		ハ マ グ リ 「 大 」		合 計 ( M N I )			
				左	右					左	右	左	右			左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右		左	右	左
SK037	F	1	1	23	10					3	3	3	2	1	1	9	10					14		8	9	10			100	131	26	28	229				
SK167		1	1							3	1	F									484	1	505					2	2	14	12	528					
SK168									F												1									F	5	5					
SU254																															1	1	1				
SU274				7	3					1	1										6	7	1	7	3			3	2	7	6	34					
SK299				2																	1											4	4				
SK356			7																				12618	8	12627							487	517	13191			
SE526																									1							1	1				
盛土C																																	139				
全体	F	1	9	32	14	5	1	2	F	7	5	3	2	1	1	126	76	27	25	8	9	3	1	3	1	13119	9	13142	16	13	487	517	105	135	63	58	
MNI	1	1	9	32		5	1	2	F	7	7	3	1	1	1	126	76	27	27	9	9	3	3	3	1	13151	9	710	16							14105	

F:破片のみ(計数対象資料なし)

第3表 医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点出土魚類遺体組成表(1)

遺構	種類	部位	左右	数	備考
SK037	ニシン科	腹椎		2	
SK037	ニシン科	尾椎		7	
SK037	サヨリ科	尾椎		1	
SK037	ホウボウ科	尾椎		3	ホウボウ標本に近似。
SK037	コチ科	前鰓蓋骨	左	1	
SK037	コチ科?	副蝶形骨		1	
SK037	キス属	腹椎		3	
SK037	キス属	尾椎		5	
SK037	アマダイ属	歯骨	左	1	
SK037	アジ亜科	主上顎骨	左	1	
SK037	アジ亜科	稜鱗		8	
SK037	マアジ	尾椎		2	
SK037	マダイ亜科	主上顎骨	左	1	同遺構出土の右のものとはサイズが異なる。
SK037	マダイ亜科	主上顎骨	右	1	同遺構出土の左のものとはサイズが異なる。
SK037	マダイ亜科	歯骨	右	1	
SK037	タイ科	角骨	左	1	小型。
SK037	タイ科	腹椎		4	小型。
SK037	タイ科	尾椎		2	切断面あり。
SK037	タイ型	尾椎		2	小型。
SK037	ウミタナゴ属	尾椎		2	
SK037	カレイ科	尾椎		1	小型。イシガレイ標本に近似。
SK037	ヒラメ	尾椎		1	
SK037	ヒラメ	腹椎		1	
SK037	同定不可	椎骨		1	破片資料。
SK037	同定対象外	鱗		◎	
SK037	同定対象外			○	
SK167	キス属	歯骨	左	1	
SK167	キス属	舌顎骨	右	1	
SK167	キス属	腹椎		5	
SK167	キス属	尾椎		1	
SK167	ブリ属	歯骨	右	1	
SK167	アジ亜科	方骨	左	1	小型。
SK167	マダイ	前頭骨		1	矢上方向に正中線上で切断されている。左側が残存。
SK167	マダイ亜科	前上顎骨	左	2	
SK167	マダイ亜科	主上顎骨	左	1	
SK167	マダイ亜科	歯骨	左	1	
SK167	タイ科	角骨	左	2	
SK167	タイ科	舌顎骨	左	1	
SK167	タイ科	方骨	左	1	
SK167	タイ科	口蓋骨	左	1	同遺構出土の右のものとはサイズが異なる。
SK167	タイ科	口蓋骨	右	1	同遺構出土の左のものとはサイズが異なる。
SK167	タイ型	犬歯		5	
SK167	タイ型	臼歯		10	
SK167	サバ属	歯骨	右	1	
SK167	サバ属	腹椎		2	共に右側面上部が矢上方向に切断。また、一点、体軸に対して横位に切断され後側が残存。
SK167	サバ属	尾椎		2	より後ろの方。
SK167	カレイ科	前上顎骨	左	2	イシガレイ標本近似
SK167	カレイ科	主上顎骨	右	2	属より下位では明確な分類できず。比較的、イシガレイ標本に似る。
SK167	カレイ科	歯骨	左	1	イシガレイ標本近似
SK167	カレイ科	歯骨	右	1	イシガレイ標本近似
SK167	カレイ科	角骨	右	1	イシガレイ標本近似。関節部分内面に縦位の切痕有り。
SK167	カレイ科	角骨	左	1	イシガレイ標本近似。関節部分内面に縦位の切痕有り。

第3表 医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点出土魚類遺体組成表(2)

遺構	種類	部位	左右	数	備 考
SK167	カレイ科	方骨	左	1	イシガレイ標本近似
SK167	カレイ科	尾椎		5	イシガレイ標本近似
SK167	カレイ科	前鰓蓋骨	右	1	アカガレイ標本近似
SK167	同定不可	前鰓蓋骨	右	1	
SK167	同定不可	椎骨		1	椎体端部。切断面を有する。
SK167	同定対象外	鱗		◎	
SK167	同定対象外			◎	
SK274	タラ科	腹椎		1	
SU274	タイ科	腹椎		1	両側面前縁及び後縁に切断面を有する。
SU274	カツオ	歯骨+角骨	左	1	
SK274	同定対象外			5	
SK356	タイ科	尾椎		1	小型。
SK368	ニシン科	腹椎		1	
SK368	フサカサゴ科	尾椎		2	1点小型。
SK368	フサカサゴ科	方骨	左	1	小型。
SK368	ホウボウ科	角骨	左	1	
SK368	ホウボウ科	腹椎		1	第3。
SK368	アジ亜科	角骨	右	1	
SK368	アジ亜科	主上顎骨	右	1	
SK368	アジ亜科	前上顎骨	右	1	
SK368	マアジ	腹椎		6	
SK368	マアジ	尾椎		1	
SK368	アジ亜科	稜鱗		6	
SK368	スズキ属	尾椎		3	小型。
SK368	マダイ	前頭骨		3	矢上方向に正中線上で切断されている。左側2点、右側1点がそれぞれ残存。
SK368	マダイ亜科	前上顎骨	右	1	
SK368	マダイ亜科	歯骨	右	1	
SK368	タイ科	角骨	左	1	小型。
SK368	タイ科	舌顎骨	左	1	
SK368	タイ科	前鰓蓋骨	左	2	
SK368	タイ科	主鰓蓋骨	左	1	
SK368	タイ科	腹椎		1	小型。
SK368	タイ科	腹椎		1	左側面に切断面。
SK368	タイ科	尾椎		6	中小型。内1点両側面後縁に切断面を有する
SK368	タイ科	尾椎		3	中型。内2点両側面後縁に切断面を有する
SK368	タイ型	臼歯		1	
SK368	サバ属	腹椎		2	
SK368	同定対象外	犬歯		1	
SK368	同定不可	椎骨		2	破片資料。
SK368	同定対象外	鱗		◎	
SK368	同定対象外			◎	

II 看護職員等宿舍1号棟地点の調査

第4表 医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点出土鳥類遺体組成表

遺構	種類	部位	左右	数	備考
SK037	キジ	足根中足骨	右	1	遠位及び趾爪部分欠損。
SK167	カモ亜科	橈骨	左	2	
SK167	カモ亜科	尺骨	左	2	
SK167	カモ亜科	手根中手骨	右	1	
SK167	カモ亜科	手根中手骨	左	2	
SK167	同定対象外	小翼節骨		1	
SK167	同定対象外	大指基節骨		1	
SK167	同定対象外	大指末節骨		1	
SK167	同定対象外	—		2	
SK368	キジ科	足根中足骨	左	1	♀。遠位欠損。
SK368	キジ科?	足根中足骨	右	1	幼鳥。遠位欠損。近位端は化石化の途上の為、未形成。
SK368	カモ亜科	尺骨	左	1	
SK368	カモ亜科	手根中手骨	左	1	極小サイズ。
SK368	カモ亜科	上腕骨	左	2	
SK368	ガン亜科?	鳥口骨	右	1	遠位部分のみ残存。
SK368	同定不可	足根中足骨	左	1	骨幹部分。
SK368	同定不可	足根中足骨		1	骨幹部分。
SK368	同定不可	大腿骨	左	1	両骨端欠損。ニワトリ?
SK368	同定対象外	尾椎		1	
SK368	同定対象外	趾骨		6	
SK368	同定対象外	—		1	

第5表 医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点I期出土哺乳類遺体組成表

遺構	種類	部位	左右	数	備考
SB002	大型家畜	肋骨		1	ウシ?両端に切断面を有する。
SK037	同定不可	歯		1	小片。
SK168	ニホンジカ	角		4	破片資料。すべて被熱し白色化している。1点は、先端部分。
SK368	ネズミ科	寛骨	右	2	内1点の坐骨部分に横位の切痕が2条見られる。
SK368	ネズミ科	寛骨	左	4	内1点の坐骨部分に横位の切痕が4条見られる。他1点の腸骨に切痕が1条見られる。
SK368	ネズミ科	上腕骨	左	1	近位端部が化石化の途上により未癒合、欠損。
SK368	ネズミ科	大腿骨	右	3	完存。但し、3点全て化石化の途上により遠位端部が未癒合。内、2点は遠位端部が残存。
SK368	ネズミ科	大腿骨	左	3	完存。但し、3点全て化石化の途上により遠位端部が未癒合、欠損。
SK368	ネズミ科	脛骨	右	1	
SK368	ネズミ科	脛骨	左	1	
SK368	ネズミ科	踵骨	右	1	
SK368	同定不可	肩甲骨		1	体部破片。中型?
盛土C	ウシ	腰椎		1	正中線上で切断。右半分が残存。

第6表 医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟地点出土動物遺体一覧

遺構	時期	面	貝類	魚類	鳥類	哺乳類
SB002	近代	A				大型家畜(1)
SK037	19C中	A	ハマグリ(159)、サザエ(23)、ヤマトシジミ(14)、マガキ、アサリ(各10)、アカガイ、サルボウガイ(各3)、クロアワビ、イボキサゴ、ホタテガイ、ナミマガシワ(各1)、マダカアワビ(破片)	タイ科(12)、ニシン科(9)、キス属(8)、アジ亜科、ホウボウ科(3)、コチ科、ウミタナゴ属、ヒラメ(各2)、サヨリ科、アマダイ属、カレイ科(各1)	キジ(1)	
SK168	【火】1703	C	不明巻貝、アカガイ、ミルクイ、ハマグリ(破片)、ヤマトシジミ(1)			ニホンジカ(4)
SU254	～1703	C	ハマグリ(1)			
SK167	1682～1703	C	ヤマトシジミ(506)、ハマグリ(16)、アカガイ(3)、イボキサゴ、サザエ、サルボウガイ(各1)	カレイ科(15)、タイ科(11)、キス属(8)、サバ属(5)、ブリ属、アジ亜科(各1)	カモ亜科(7)	
SU274	1682～1703	C	ハマグリ(10)、サザエ、ミルクイ、アサリ(各7)、ヤマトシジミ(2)、アカガイ(1)	タラ科、タイ科、カツオ(各1)		
盛土C	1682～1703	C	マガキ(117)、ハマグリ(16)、シオフキガイ、ウネナシトマヤ(各3)			ウシ(1)
SK299	【火】1682	D	サザエ(2)、アカニシ、ミルクイ(各1)			
SK356	～1682	D	ヤマトシジミ(12635)、ハマグリ(517)、シオフキガイ(24)イボキサゴ(7)、オオタニシ(5)、イボウミニナ、アカニシ、サルボウガイ(各1)	タイ科(1)		
SK368	～1682	D	未整理	タイ科(21)、アジ亜科(10)、フサカサゴ科、スズキ属(各3)、ホウボウ科、サバ属(各2)、ニシン科(1)	カモ亜科(4)、キジ科(2)、ガン族?(1)	ネズミ科(16)
SE526	～1682	D	ヤマトシジミ(1)			

PL.1 貝類遺体 (1)



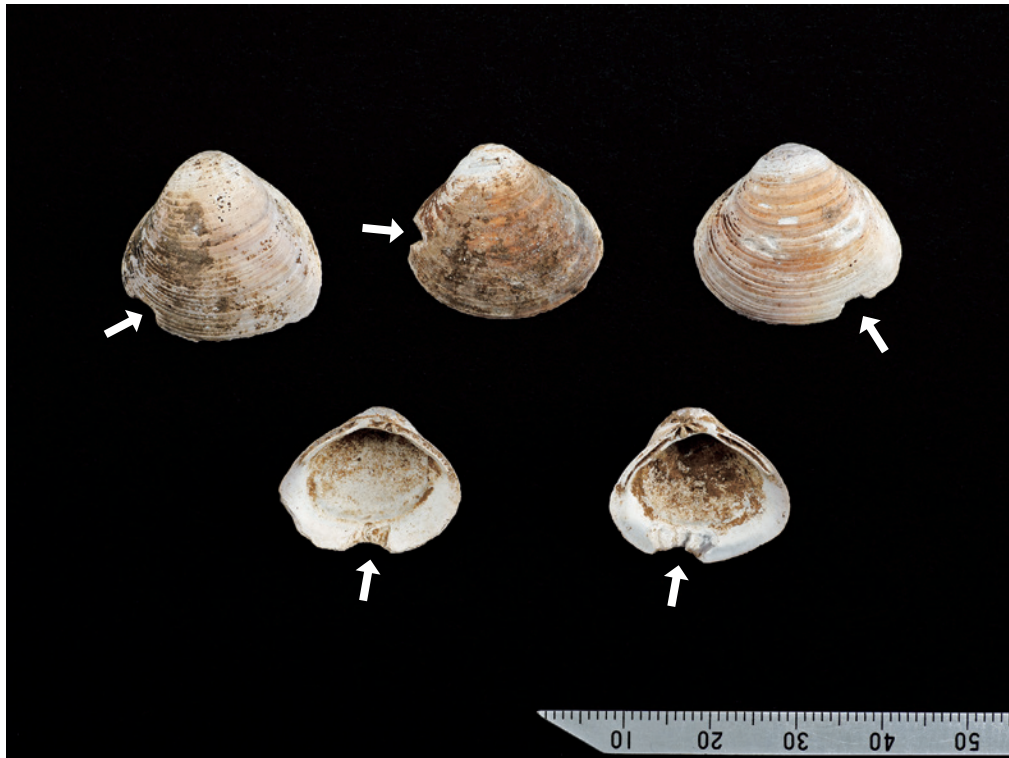
1. クロアワビ 2. マダカアワビ 3. サザエ 4. アカニシ 5. アカガイ (左)  
6. ホタテガイ (右) 7. ミルクイ (右)  
※1・3・5~7:SK037, 2:SK368, 4:SK356

PL.2 貝類遺体 (2)※サンゴ類含む



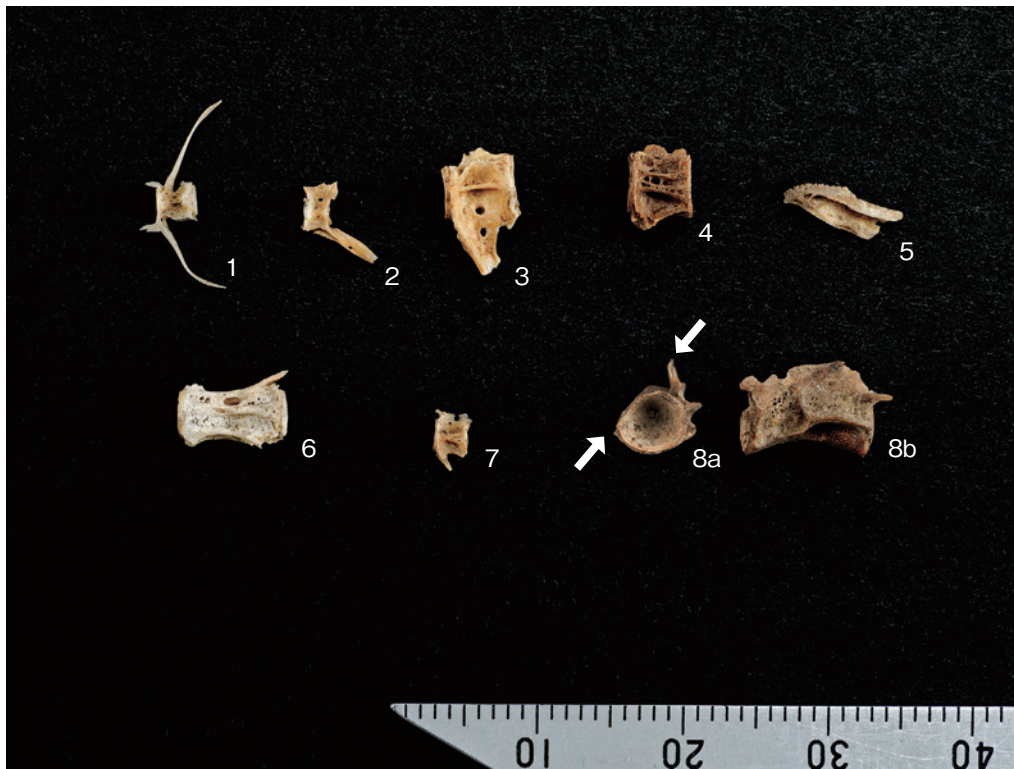
1. サンゴ類 2. イボキサゴ 3. イボウミナ 4. オオタニシ 5. サルボウガイ片に付着したマ  
ガキ 6. ナミマガシワ 7. ハマグリ 8. アサリ 9. シオフキガイ  
※1:SK299, 2~4・7・9:SK356, 5・6・8:SK037 ※全て二枚貝類は左殻

PL.3 人為的な破損のみられるヤマトシジミ



※→: 破損箇所 ※全てSK356より出土

PL.4 魚類遺体 (1)



1. ニシン科 尾椎 2. サヨリ科 尾椎 3. フサカサゴ科 尾椎 4. スズキ属 尾椎 5. キス属 左歯骨 6. マアジ 尾椎 7. ウミタナゴ科 尾椎 8. サバ属 腹椎 (a. 正面観, b. 左側面観)  
 →←: 切断面  
 ※1・2・6・7:SK37, 3・4:SK368, 5・8:SK167

PL.5 魚類遺体 (2)



1. タラ科 腹椎 2. ホウボウ科 左角骨 3. コチ科 左前鰓蓋骨 4. アマダイ属 左歯骨  
 5. プリ属 左歯骨 6. マダイ 前頭骨 7. カツオ 左歯骨+角骨 8. ヒラメ 尾椎  
 9. カレイ科 右前鰓蓋骨  
 ※ 1・7 : SU274, 2 : SK368, 3・4・8 : SK037, 5・6・9b : SK167, 9a : アカガレイ現生標本

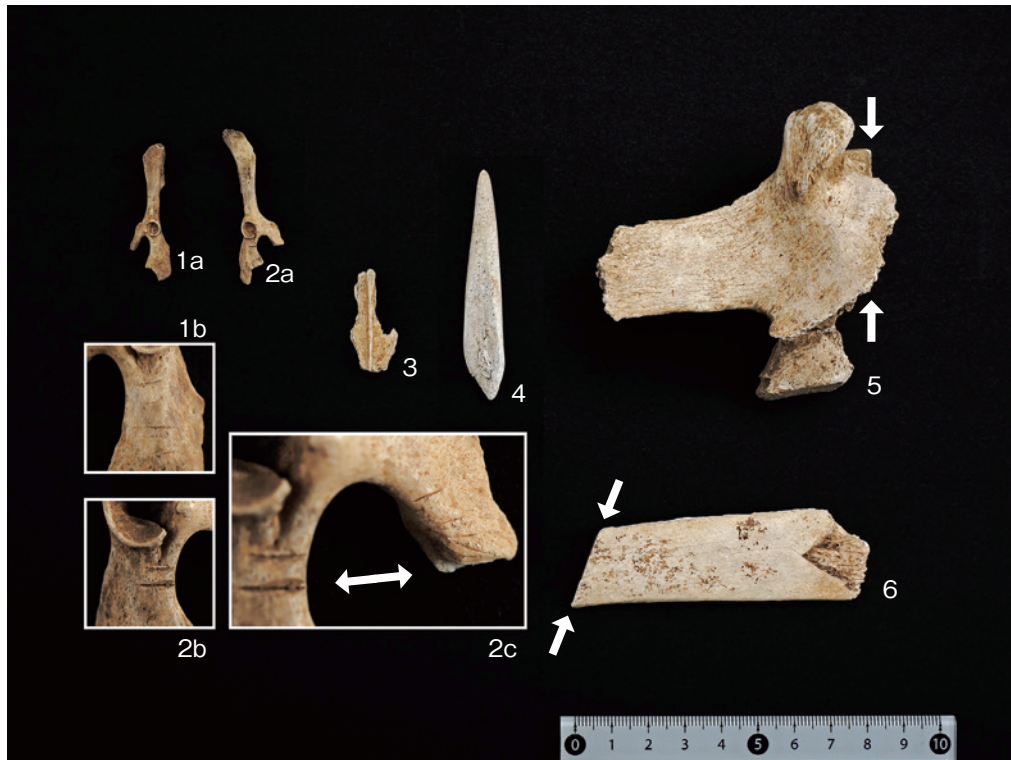
PL.6 鳥類遺体



1. キジ 右足根中足骨 2. カモ亜科 左上腕骨 3・4. カモ亜科 左手根中手骨 5. ガン族?  
 右鳥口骨  
 ※ 1 : SK037, 2・4・5 : SK368, 3 : SK167



PL.7 哺乳類遺体



1・2. ネズミ科 寛骨 (1:左, 2:右, b・cは切痕及び切断痕部分拡大),  
 3. 同定不可 肩甲骨, 4. ニホンジカ 角 (※被熱により白色化), 5. ウシ 腰椎 6. 大型家畜 肋骨  
 ※1～3:SK368, 4:SK168, 5:盛土C ※→←:切断面, ⇔:切断・切痕対応部分

## 第Ⅷ章 まとめ

本地点の調査では、江戸時代富山藩上屋敷に関する資料、古墳時代前期および後期の集落、縄文時代早期末葉の炉穴が検出された。以下にその概要と成果についてまとめたい。

### 江戸時代

本地点以前に実施された附属病院敷地内発掘調査で対象となった江戸時代遺跡は、加賀藩邸、大聖寺藩邸が主体で、富山藩邸に関しては中央診療棟地点で検出された2号組石以北が該当したのみである。2号組石以北は調査範囲も狭く、かつ多くの攪乱により遺存状況が悪く断片的な情報しか得ることができなかった。本地点も調査対象区域の半分以上が東第一病棟建設による攪乱を受けていたが、南側の植樹帯区域は比較的良好な状態で遺存していた。これも根津谷を望む緩斜面を利用した盛土造成による藩邸開発の結果といえよう。

各節でも述べたように、3枚の遺構面が確認された。年代順に振り返ると、緩斜面を削平し平準化させ土地利用をスタートさせたD面段階では、藩邸北東部という立地もあり、調査区北東側には大形採土坑の分布が認められた。その一つであるSK299最上層から瓦礫整理焼土層が確認され、本層序から多量の貿易陶磁が出土した。青磁花入、青磁硯屏、青磁香炉、青磁天目台、天目、朝鮮王朝陶器碗、水指、水注など茶道具の一括廃棄資料で、17世紀の大名茶の湯を知る良好な資料が得られた。調査区中央には藩邸内地境施設で南北に区画され、その南には長方形土坑が多く分布する区域となっていた。Kライン南側では多数のピットが検出されたが建物を復元できる遺構は認められなかった。

C面では調査区全域で砂粒を含む硬化面が検出され、本調査区全体が空閑地であったことを知ることができた。また6ライン以西の本遺構面直上には焼土層の拡がり確認された。焼土層中に含まれる陶磁器類の年代観から元禄16(1703)年の藩邸全焼火災に比定することができる。本硬化面は、2012年に実施した入院棟Ⅱ期地点1次調査でも確認され、藩邸東域に拡がっていることが確認でき、富山藩邸の変遷を考える上でのキー層と位置づけられる。

A・B面では多くの礎石が検出された。礎石覆土に焼土が含まれる遺構が一定量存在する。富山藩邸は文政8

年に火災に見舞われており、その後に建設された建物と考えられる。また火災以降の藩邸を描いた絵図からおおむね長局区域に比定されるが、絵図と一致する礎石列は確認されていない。火災を下限とする遺構としてⅡ-110図に掲載した手水鉢があり、周辺に分布する植栽痕、人工泉水と推定される漆喰遺構から、火災以前は庭園として機能していたことが推測される。平成26(2014)年～27(2015)年にかけて実施した入院棟Ⅱ期地点3次調査では、調査区北東部で重複著しい多量の植栽痕群、四阿跡と推定される礎石列、飛石跡と推定されるピット列などが確認された(東京大学埋蔵文化財調査室2017)。攪乱の影響が少なく江戸時代を通した盛土がほぼ遺存していた東端部では、文政8(1825)年もしくは弘化3(1846)年の火災に比定される被熱面下であり、本地点と合わせ火災以前の藩邸内庭園の範囲と景観を復元する手掛かりである。

### 古墳時代

本地点では、古墳時代前期の竪穴住居址6軒、後期竪穴住居址1軒が検出された。現在までの本郷キャンパス内調査で検出された古墳時代後期竪穴住居址は、中央診療棟地点2軒、入院棟A地点1軒、第2中央診療棟地点1軒、入院棟Ⅱ期地点2軒が確認されている。確認された住居址は、病院地区内を根津谷方向へ蛇行して開く埋積谷の北斜面に散見される。それに対し古墳時代前期から中期に比定される竪穴住居址は臨床試験棟地点5軒、看護職員等宿舎3号棟地点7軒、同Ⅲ期地点15軒、ドナルド・マクドナルド・ハウス地点2軒、基幹整備(流域⑧)地点3軒、東京都下水道工事地点1軒、クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期地点5軒、国際科学イノベーション統括棟地点6軒と本地点を合わせると48軒の住居址が病院地区東半に集中して分布していることが確認でき、古墳時代前期から中期にかけてかなり大規模な集落が形成されていたことが確認された。さらに古墳時代初頭から前期の住居址は本地点、臨床試験棟地点、基幹整備地点、東京都下水道地点など、埋積谷の存在が予想される調査区南側の切通状構内道路北側を集落域の中心とし、この範囲より南側、埋積谷南側に位置する入院棟A地点、看護職員等宿舎3号棟地点、看護師宿舎Ⅲ期地点では、前期から中期にかけての住居址が集中し、前期から中期にかけて集落域の中心が南方へ展開したこ

とが窺われる。

またクリニカルリサーチセンター A 棟 I 期地点では住居址分布域の西方に古墳跡と推定される円形ないし方形の溝が数基検出されたが、住居址と重複する遺構はなく、本集落に伴う墓域と判断される。詳細な分析は今後の課題であるが、計画的な集落域と墓域のすみ分けに基づいた集落形成が行われていたことが推察される。

## 縄文時代

本地点では、早期末葉の炉穴 (SF555) が 1 基検出された。また詳細な検証はできなかったものの、SI1006 貼床下で検出された炉跡や、K ライン南側に拡がるピット群の一部が縄文時代に帰属する可能性がある。本地点周辺では、看護師宿舎Ⅲ期地点にて、竪穴住居址 2 軒 (早期、前期)、陥し穴 (T ピット) 1 基、炉穴 9 基など、総計 23 基の遺構が検出された。早期末から前期にかけての段階の遺構集中は、本郷構内では本地点周辺以外に類例がなく、看護師宿舎Ⅲ期地点の詳細報告が期待される。

江戸時代富山藩邸、古墳時代前期集落、縄文時代早期末遺構など、本地点では新たな知見が多く得られた。本報告を嚆矢とし、今後の周辺調査地点報告での更なる発展に期待したい。



### Ⅲ 臨床試験棟地点



遺構一覧表

古墳時代遺構

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SI	01	ローム	R3-T4	Ⅲ-17~21	Ⅲ-32
SI	02	ローム	Q4-R5	Ⅲ-22~25	Ⅲ-32
SI	03	ローム	O3-P4	Ⅲ-26、27、31	
SI	04	ローム	O3-Q4	Ⅲ-26~31	Ⅲ-32
SI	05	ローム	P4-P5	Ⅲ-26、27、31	

近世遺構

SK	1	A	S5		
SK	2	ローム	P3-P4	Ⅲ-9	Ⅲ-12
SK	3	D	S4		
SU	4	A	Q4-R4	Ⅲ-6	Ⅲ-12
SP	5	A	R4		
SP	6	A	R4		
SE	7	A	R3-R4	Ⅲ-4	
SP	9	D	S4		
SL	10	A	Q4-R5	Ⅲ-5	Ⅲ-12
SU	11	A	Q3-Q4	Ⅲ-6	
SU	12				
SU	13	ローム	N1-O1	Ⅲ-10	Ⅲ-12
SP	14	ローム	N1-O1		
SP	15	ローム	N1-O1		
SP	16	ローム	O1		
SP	17	ローム	O1		
SP	18	ローム	O1		
SK	19	D	S5		
SX	20	D	S5-T5		
SX	21	D	S4		
SX	22	D	S4		
SX	23	D	R4-S4		
SP	24	D	S5		
SP	25	D	S5		
SP	26	D	S5		
SK	27	D	T5		
SK	28	D	T5		
SP	29	D	S3		
SP	30	D	S3		
SP	31	D	S3		
SP	32	D	S3		
SP	33	D	S3		
SP	34	D	S3		
SP	35	D	S3-S4		
SP	36	D	S4		
SP	37	D	S4		
SP	38	D	S5		
SP	39	D	S4		
SP	41	D	R3-S3		
SK	45	D	R3		
SK	46	D	R3		

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SP	49	D	R4		
SP	50	D	R4		
SP	51	D	R4		
SP	52	D	R4		
SP	53	D	R4-R5		
SK	55	D	R3-R4		
SK	56	D	Q3-R3		
SK	57	D	R4		
SK	58	D	P3-Q4		
SK	59	D	P4-Q4		
SK	60	D	P4-Q5		
SP	61	D	S4		
SP	62	D	Q3		
SK	63	D	P4		
SD	64	D	P3-Q5		
SK	65	D	P3-P4		
SK	66	D	P4		
SP	67	D	Q4		
SP	68	D	S5		
SP	69	D	R5		
SP	70	D	R4-S5		
SP	71	D	S5		
SP	73	D	Q4		
SP	74	D	Q4		
SX	75	D	R4		
SK	76	D	P3		
SK	77	D	P4		
SK	78	D	Q5		
SK	79	D	Q4-R5		
SP	80	D	P4		
SP	81	D	P4		
SK	82	D	R4-R5		
SK	83	D	P3-P4		
SX	84	D	R5		
SX	85	D	Q5		
SP	86	D	Q4		
SP	87	D	Q4		
SP	88	D	Q5		
SP	89	D	Q4		
SK	91	ローム	P4-Q4	Ⅲ-11	Ⅲ-13~15
SK	92	D	R3-R4		
SE	93	D	Q3-R3	Ⅲ-8	
SK	94	D	O4-P5		
SP	95	D	P3		
SK	96	D	P3-Q3		
SK	97	D			
SX	98	D	R4-R5		
SP	99	D	P5		

## 第 I 章 調査の経緯と概要

### 第 1 節 調査に到る経緯

東京大学医学部附属病院では、老朽化した諸施設の立替による大規模再開発を計画している。病院地区を含む本郷キャンパス全体では、1983 年度より諸建物の新営計画が相次ぎ、各建物の建築に先だって実施した埋蔵文化財発掘調査によって、当初の予想を遙かに越えて江戸時代の遺構、遺物が遺存していることが確認された。その結果を受けて本郷キャンパス全域が、文京区 No.47 本郷台遺跡群として登録された。附属病院地区でも 1984 年から 1987 年にかけて調査を実施した中央診療棟地点、設備管理棟地点、給水設備棟地点において、大聖寺藩前田家上屋敷、富山藩前田家上屋敷、榊原家中屋敷に関する膨大な量の遺構・遺物が確認されるとともに、病院地区の東半は旧石神井川が開析した根津谷に向う緩斜面上に立地するため、江戸時代を通し大規模な盛土造成が行われたことが確認され、その結果、江戸時代以前の自然堆積層、遺構が比較的良好な状態で遺存していることも明らかになった。

1993 年、病院再開発基幹事業の一つである入院棟新営計画が具体化した。中央診療棟東側の空き地が建設地として計画されており、建設地にかかる MRI-CT 棟を移設する必要があった。移設地として北病棟（現、中央棟北）の東側空き地が選択された。概所は江戸時代には富山藩前田家上屋敷内に該当し、近接する中央診療棟地点の成果から、それに伴う遺構、遺物が遺存していることが予想されたため、附属病院より埋蔵文化財の遺存状況の確認を依頼された調査室は、これを受けて 1993 年 7 月 27 日に遺構遺存状況の確認を目的として試掘調査を実施した。

建設予定地点の西半は北病棟建設時における基礎根切りによって現表下約 5.5m は攪乱を受けており、埋蔵文化財遺存の可能性は極めて低いと予想された。そのため比較的良好な遺存状況が期待される東部平坦部に 2 × 2m の試掘坑を南北に 2 箇所設定し、試掘調査を実施した。その結果、北病棟建設時の基礎根切りを受けていない東半では、最低 2 枚の江戸時代生活面と古墳時代竪穴住居址が確認され、大学施設部と協議の結果、看護職員等宿舎 1 号棟地点（以下、1 号棟地点）の調査終了後の 1994 年 1 月 18 日より、建設地点 400m<sup>2</sup>を対象に事前調査を行うことで合意した。

### 第 2 節 調査の方法と経過

発掘調査は、1 月 18 日より重機による表土掘削を開始した。それと平行して 1 号棟地点調査時に設置した既知座標点から座標移動を行い、調査区内に日本測地系に即した 5m グリッドを設定した。各グリッドは 1 号棟地点の延長で、北西角を基準杭とし、東西方向に算用数字、南北方向に英大文字を付した。よって本調査区内北西端には O2 グリッド杭が位置し、日本測地系による座標値は、 $X = -32285.00\text{m}$ 、 $Y = -5750.00\text{m}$ である（Ⅲ-1 図）。

表土掘削の結果、4 ライン以西は北病棟建設時基礎根切りと近代に埋設された病院内下水本管による攪乱を受け、遺存状況は極めて悪い状態であった。また東側も R ライン以北は、下水本管に接続する枝管などの攪乱を受け、江戸期の盛土層は断片的にしか残っていなかった。

表土掘削後、第 1 遺構面の遺構調査を行い、2 月 7 日に終了した。また遺構分布が希薄な北側から随時、人力掘削によって第 2 遺構面まで掘り下げ、残存状況の確認を行った結果、1 号棟地点で確認された C 面に比定される硬化面が、Q4、R5、S5 グリッドで確認されたのみであった。遺構はなく、硬化面範囲を記録して 2 月 4 日に終了した。2 月 7 日からローム面までの掘削と遺構確認を開始し、9 日より遺構調査を進めた。ローム面上では江戸時代の遺構が比較的密に分布し、それに切られて古墳時代竪穴住居址が数軒確認され、江戸時代遺構の調査が終了した区域から、順次住居址の調査を行い、3 月 12 日に全ての調査を終了した。

### 第 3 節 基本層序

本地点では、2 枚の遺構面と上位遺構面上に堆積した盛土層を確認した（Ⅲ-2 図）。上位遺構面は砂質土による硬化面で構成されていることと表面レベルの比較から 1 号棟地点の C 面に比定され、遺構面名称は 1 号棟地点に準拠することとした。よって硬化面状に形成された盛土（3、4 層）で確認された遺構は、A 面帰属と位置づけられる。

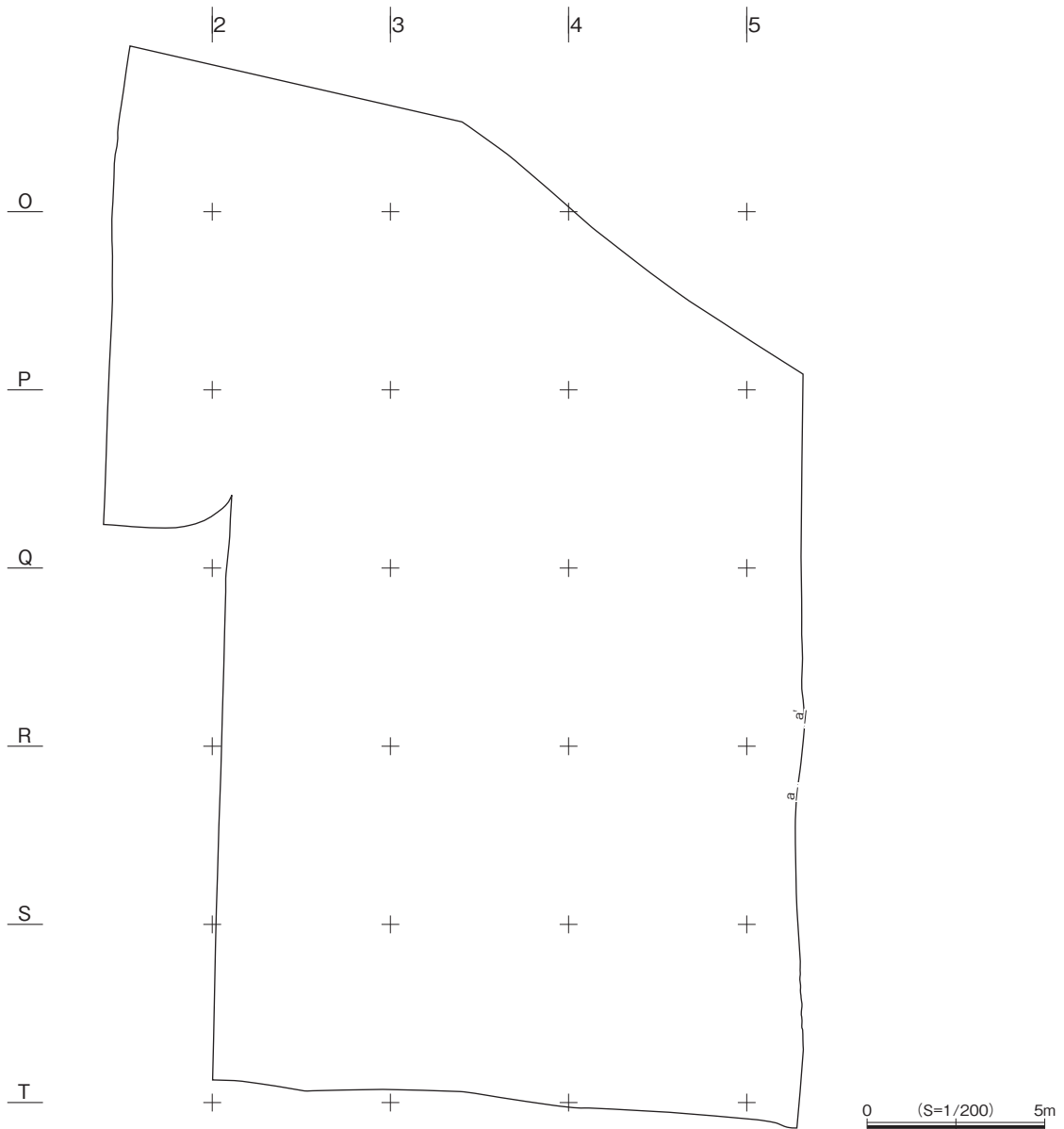
1 号棟地点 A 面形成土に比定される盛土層は、地表下約 1m より確認されたが、種々の攪乱によって、4 ライン以東 R ライン以北の調査区北東部と、R ライン以南 5 ライン以東の調査区南東部で確認された。C 面は現表下約 140cm、標高 13.6 ~ 13.7m にある。1 号棟地点同様に、



砂利を含む褐色土で形成されていた（5層）。しかし A 面形成土と同様に断片的に残存しているのみで、帰属する遺構は確認されなかった。C 面下は、ローム粒を含む暗褐色土を基調とする盛土層が堆積し（6～8層）、C 面下約 60cm に、ローム層を切土整地された 1 号棟地点 D 面に相当する遺構面がある。平均標高は 13.1m である。1 号棟地点同様、本遺構面から検出された古墳時代堅穴住居址の多くが床面付近まで削平され、緩斜面の平準化を目的とした藩邸初期開発段階の切土造成事業によって削平されたことが確認された。

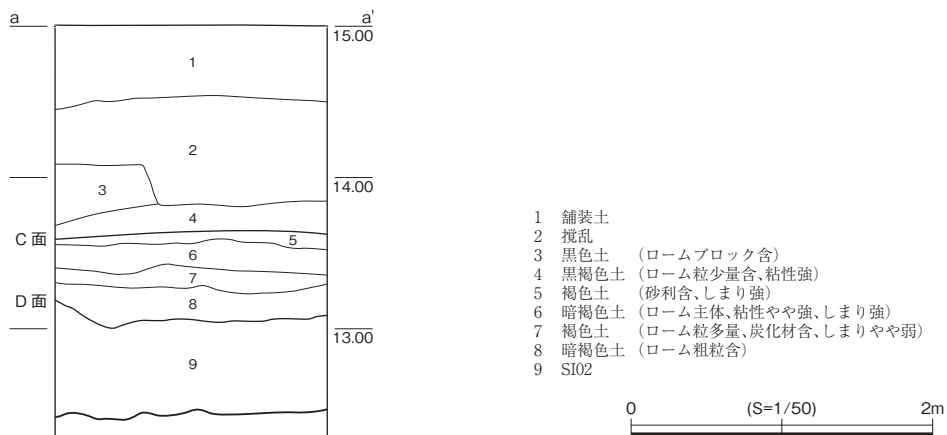
1 号棟地点西壁断面の観察から、C 面標高は南に向かって極緩やかに上がっていることが確認され、若干標高が高い本地点の C 面、D 面はそれに続くと考えられ、藩邸東部で広範囲な平準化造成事業が行われていたことが確認される。

III 臨床試験棟地点の調査



III-1 図 グリッド・基本土層ポイント位置図

A 面



III-2 図 基本土層図 (東壁)

## 第II章 江戸時代の遺構と遺物

### 第1節 A面の遺構

病院内下水本管および枝線によって著しく攪乱を受け、遺存状況は良好ではない。土坑1基、半地下室2基、井戸1基、甕埋設遺構1基、ピット2基が確認された。攪乱の影響はあるが、基本的に遺構密度が低いエリアと考えられる(Ⅲ-3図)。

#### SE7(Ⅲ-4図)

R3グリッドに位置する井戸である。掘方平面形は楕円形を呈し、長軸190cm、短軸142cmを測る。断面観察の結果、覆土の相違より直径90cmを測る井戸側を確認した。木質の痕跡は認められなかった。

遺物は陶磁器類が10数点出土したにすぎない。

#### SL10(Ⅲ-5図)

Q5グリッド杭周辺に位置する甕埋設遺構である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸98cm、短軸88cm、確認面からの深さ40cmを測る。坑底は直径55cmを測る円形を呈し、壁はやや開き気味に立ち上がる。坑底上約20cmにテラス状の平坦面が巡り確認面へと立ち上がる。坑底直上から埋設された常滑産大甕の胴下半部が出土した。甕内覆土2層は、灰白色砂質石化ブロックを多量に含み、甕内底部にも同様の石化物質が付着していた。その様相より便槽と推定される。また2層上より口縁部片を含む同一個体破片が出土したことから、近代以降の削平に伴って甕上半部が破壊され、覆土内に散乱したと推定される。甕の胴下半部には直径約10cmを測る欠損箇所があるが、その部分には補修のために漆喰が充填されていたが、漆喰は掘方壁面にまで達していたことから、埋設時に補修されたことが窺われる。

埋設甕以外の遺物は数点である。

#### SU4(Ⅲ-6図)

Q4・R4グリッドに位置する遺構である。重複するSU11より新しい。平面形は長方形を呈し、長辺334cm、短辺116cm、確認面からの深さ228cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、上部は盛土のためか凹凸が認められる。SU11と重複する西壁北側壁際坑底から3基のピットが確認された。ピット間は芯々で北から54cm、65cmを測り、ピット西側で覆土の立ち上がりが確認されたことより、SU11覆土に対する土留めとして

施工されたと考えられる。覆土は東西方向の断面観察ではほぼ水平に堆積しているが、南北方向では北から南に向けて傾斜していることが確認され、遺構北側から埋め戻されたことが窺われる。

また覆土の大半がローム土であることから、短期間に埋め戻された様相を呈している。

遺物は18世紀前半の陶磁器類が数十点出土している。

#### SU11(Ⅲ-6図)

Q3・Q4グリッドに位置する遺構である。重複するSU4より古い。平面形はL字形を呈し、東西長約260cm、南北長約300cm、短辺120～130cm、確認面からの深さ270cmを測る。覆土の堆積は下方と上方で差異が認められ、下方は炭化材を含む暗灰褐色土主体土が南側から流れ込んでいるが、上方はローム埋土を互層とした版築状堆積を呈し、しまりが強い。隣接するSU4構築との関連も考えられる。

遺物は18世紀前半の陶磁器類が数十点出土している。

### 第2節 D面(ローム面)の遺構

病院下水本管の攪乱によって、ほぼ4ライン以東が調査対象となる。溝1基、井戸1基、土坑26基、ピット41基、地下室2基、性格不明遺構8基が検出された(Ⅲ-7図)。4ライン以東に植栽痕と推定される不整円形土坑が分布する傾向が認められ、おおむねその西側に方形土坑が分布する。方形土坑の主軸方位は方眼北から6～8°東傾する。

植栽痕は隣接する入院棟Ⅱ期地点F1・F2N区4～5面にかけて多数検出されており、一連の庭園区域の可能性はある。

#### SE93(Ⅲ-8図)

Q3・R3グリッドに位置する井戸である。平面形は不整円形を呈し、直径160～175cmを測る。断面形はロート状を呈し、確認面下約100cmでほぼ垂直に変化し、直径は95cmを測る。埋土は確認面下約200cmまでロームブロック主体土が堆積していることから、比較的短期間に埋め戻されたことが推定される。覆土の観察から井戸側を有していないことが確認される。

遺物は出土していない。

SK2 (Ⅲ-9 図)

Q2・R2 グリッドに位置する遺構である。攪乱によって、上部が大きく削平されており、立川ロームⅦ層上面で確認された。平面形は長方形を呈し、南北 325cm、東西最大 150cm、確認面からの深さ最大 90cm を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、比較的丁寧な整形が施されているのに対し、坑底は壁際にかけて緩やかなカーブを描き、凹凸も認められる。覆土は全体的にしまりがあり、中位に炭化材を多量に含む層 (3、4、7 層) が堆積している。

遺物は炭化材含有層より、かわらけを主体とした陶磁器類がコンテナ 1/2 出土。出土遺物の年代観から (17 世紀末～18 世紀前葉)、A 面もしくは C 面に帰属する遺構と考えられる。

SU13 (Ⅲ-10 図)

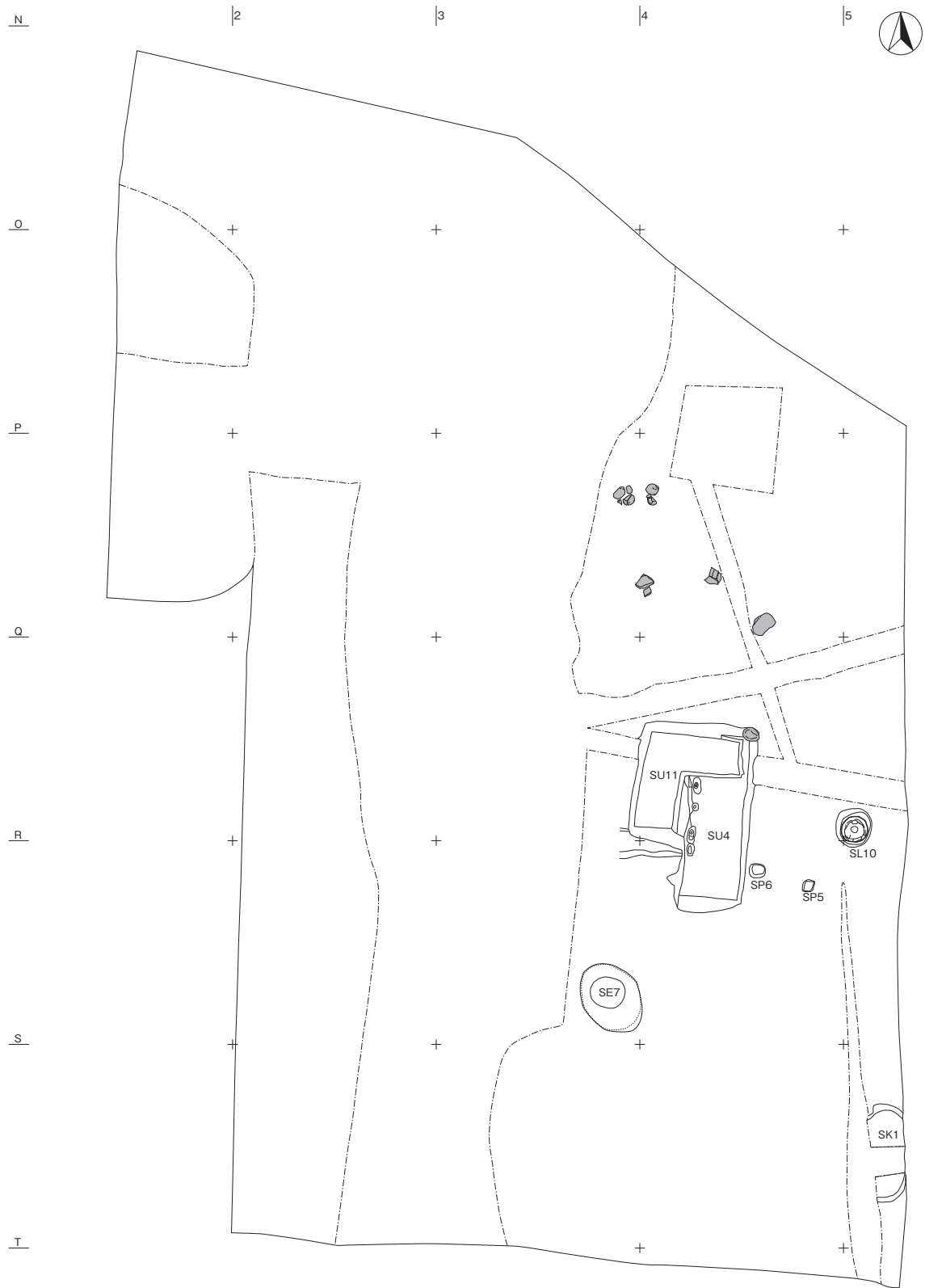
N1 グリッド、調査区北西部に位置する遺構で、西側は調査区外に及ぶ。北側と上部は攪乱によって破壊され、ローム面で確認された。調査範囲内の形状から、平面形は方形ないし長方形と推定される。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、調査区内では室部に繋がる横坑、壁施設などは確認されなかった。床面は確認面下約 250cm にあり、壁面、床面ともに比較的丁寧な整形が施されている。覆土には、炭化材を含む粘土質層 (1、3 層) が認められるが、遺物量は少ない。

遺物は 17 世紀末から 18 世紀前葉に比定される陶磁器類がコンテナ約 1/3 出土しており、A 面もしくは C 面に帰属する遺構と考えられる。

SK91 (Ⅲ-11 図)

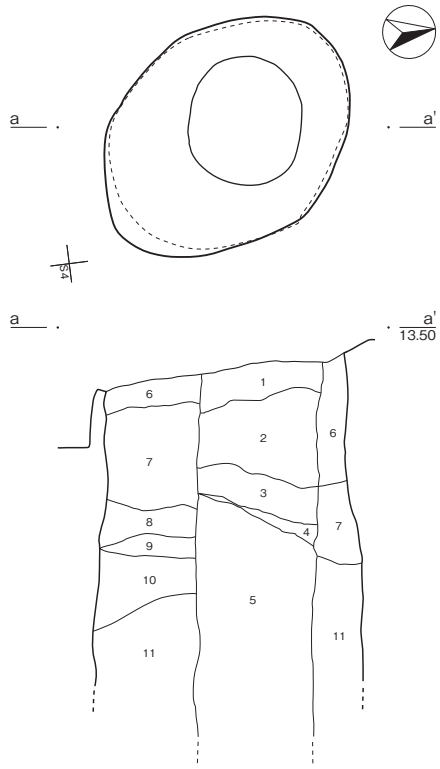
P4・Q4 グリッドに位置する遺構で、C 面削平範囲にありローム面で確認された。平面形は 1 辺 105～115cm を測る略正方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は確認面下約 180cm と深い。覆土は北から南へ傾斜し、2、3 層は炭化材を含む暗灰褐色土が埋積し、遺物の多くはここから出土している。

遺物は 17 世紀末～18 世紀前葉に比定される陶磁器類がコンテナ 2 箱出土しており、A 面もしくは C 面に帰属する遺構と考えられる。



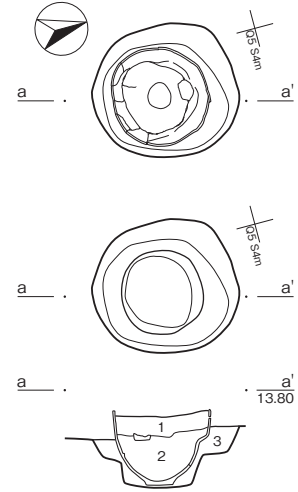
III-3 図 A 面遺構配置図 (S=1/150)

III 臨床試験棟地点の調査



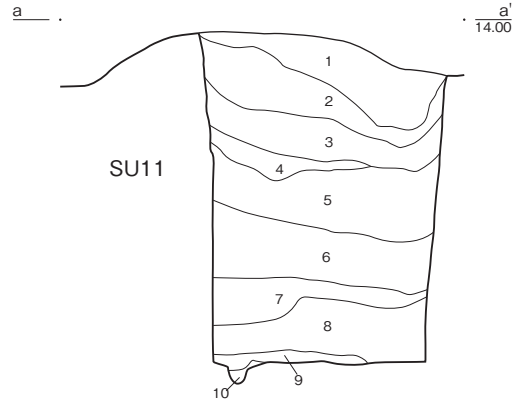
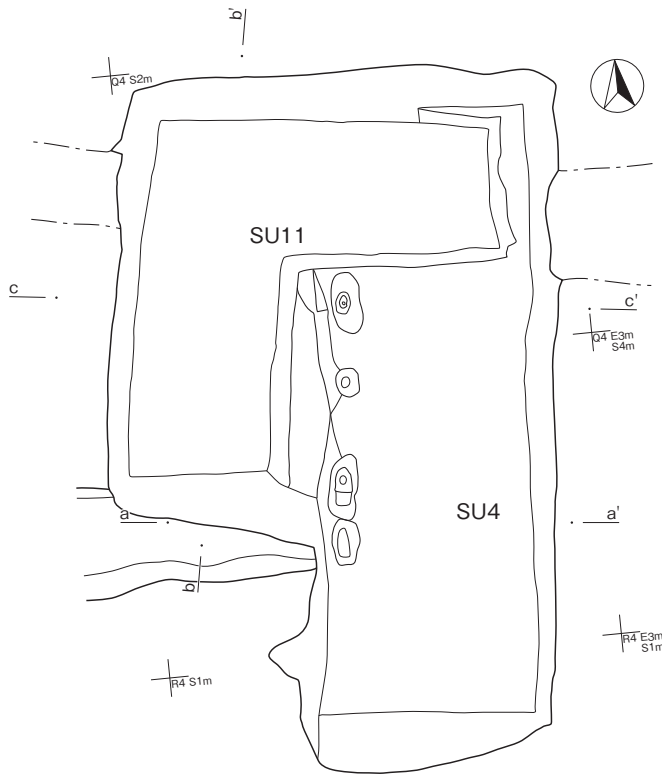
- 1 褐色土 (ローム粒少含)
- 2 暗褐色土 (ローム粒少含)
- 3 暗黄褐色土 (ロームの埋土、しまりやや強)
- 4 暗褐色土 (しまりやや弱)
- 5 暗黄褐色土 (粘性やや強、しまりやや弱)
- 6 褐色土 (ローム粒含、しまりやや強)
- 7 褐色土 (ロームブロック極多含)
- 8 褐色土 (ローム粒少含、しまり強)
- 9 褐色土 (ロームブロック極多含、しまり強)
- 10 褐色土 (ロームブロック多含、粘性やや強、しまり強)
- 11 暗黄褐色土 (ロームブロック主体、粘性やや強、しまり強)

III-4図 SE7

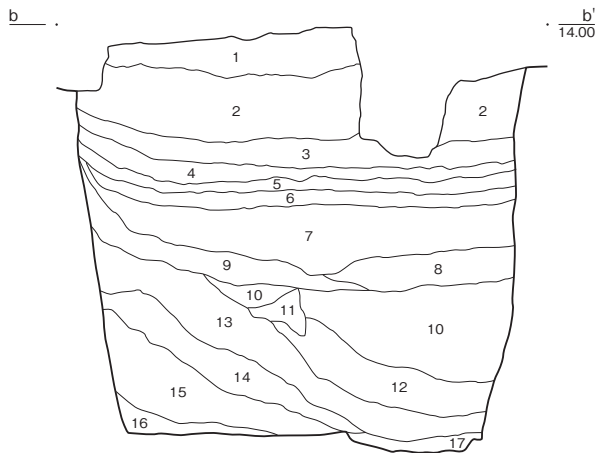


- 1 暗褐色土 (ローム粒・炭化物粒微含、粘性・しまりやや弱)
- 2 暗褐色土 (灰白色砂質状石化ブロック多含、粘性・しまり弱)
- 3 暗褐色土 (ロームブロック多含)

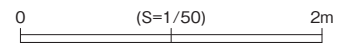
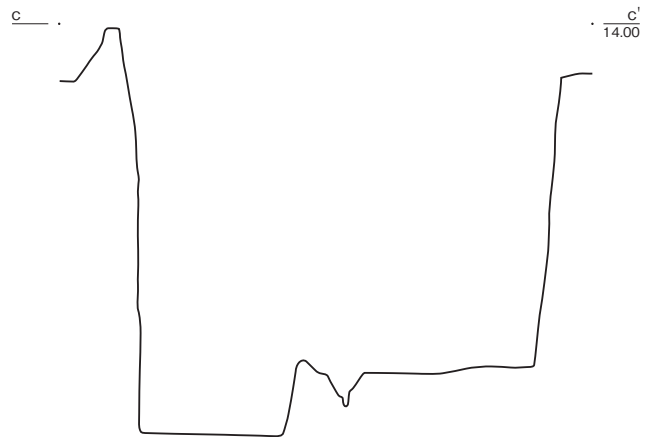
III-5図 SL10



- SU4
- 1 暗黄褐色土 (ロームの埋土、粘性やや強、しまり強)
  - 2 暗褐色土 (ローム粒多含、しまりやや強)
  - 3 暗褐色土 (ローム粒・炭化材多含、しまり強)
  - 4 暗褐色土 (ローム粒多含、しまりやや強)
  - 5 暗黄褐色土 (ロームの埋土、粘性・しまりやや強)
  - 6 褐色土 (ロームの埋土、粘性・しまりやや強)
  - 7 暗茶褐色土 (ローム粒多含、少円礫少含)
  - 8 暗褐色土 (7層より暗い、ローム粒多含)
  - 9 暗褐色土 (ロームブロック多含、しまり強)
  - 10 暗褐色土 (粘土ブロック含、粘性やや強、しまりやや弱)



- SU11
- 1 暗褐色土 (ローム粒含、粘性やや弱、しまり強)
  - 2 褐色土 (ロームブロック多含、しまり強)
  - 3 暗褐色土 (ローム粒含、しまり強)
  - 4 暗黄褐色土 (ロームの埋土、しまり強)
  - 5 暗褐色土 (ローム粒少含、しまり強)
  - 6 暗黄褐色土 (ロームの埋土、しまり強)
  - 7 暗褐色土 (ローム粒含、少円礫少含、しまりやや強)
  - 8 褐色土 (ロームブロック含、しまりやや強)
  - 9 暗褐色土 (ロームブロック多含)
  - 10 暗褐色土 (ローム粒含、炭化物粒・焼土粒微含)
  - 11 褐色土 (ロームブロック多含、しまり強)
  - 12 褐色土 (ローム粒・粘土粒少含、粘性やや強、しまりやや弱)
  - 13 暗灰茶褐色土 (炭化材・灰色粘土ブロック多含、粘性強、しまりやや弱)
  - 14 暗灰茶褐色土 (灰色粘土ブロック含、ローム粒少含、粘性やや強、しまりやや弱)
  - 15 暗灰褐色土 (粘性やや強、しまりやや弱)
  - 16 暗灰褐色土 (炭化材多含、粘性強、しまりやや弱)
  - 17 暗黄褐色土 (ロームの埋土、粘性やや強、しまり強)



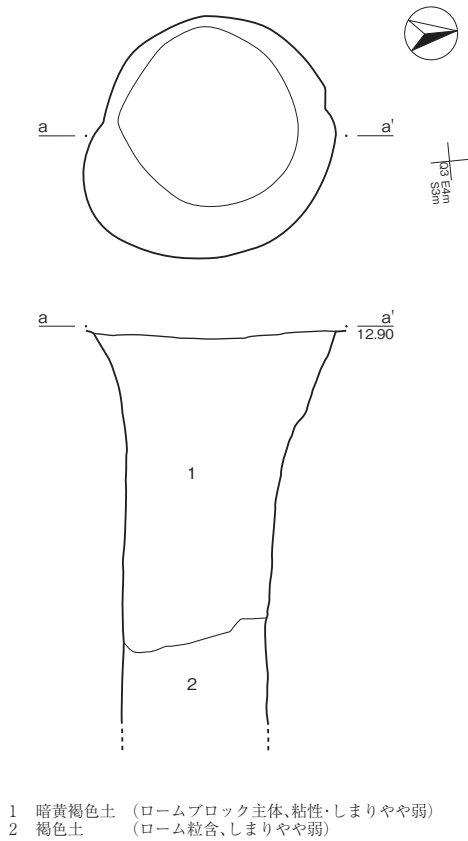
III-6図 SU4・SU11

Ⅲ 臨床試験棟地点の調査

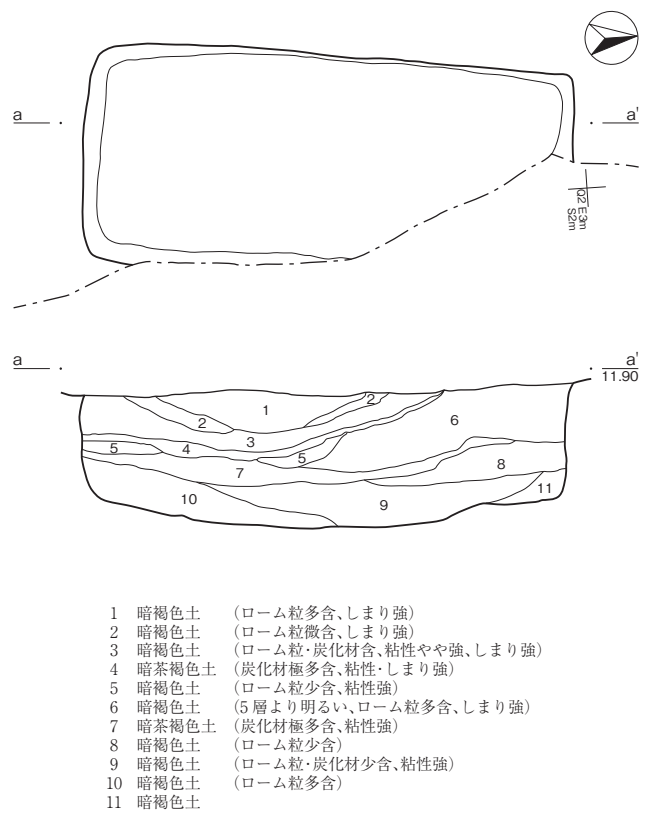


Ⅲ-7 図 D 面 (ローム面) 遺構配置図 (S=1/150)

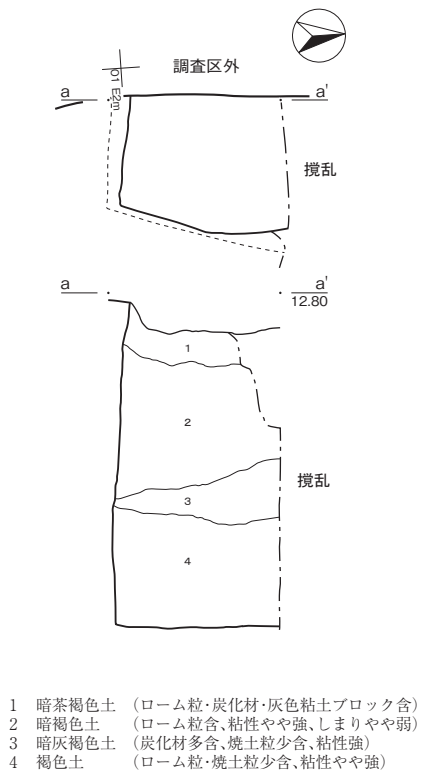




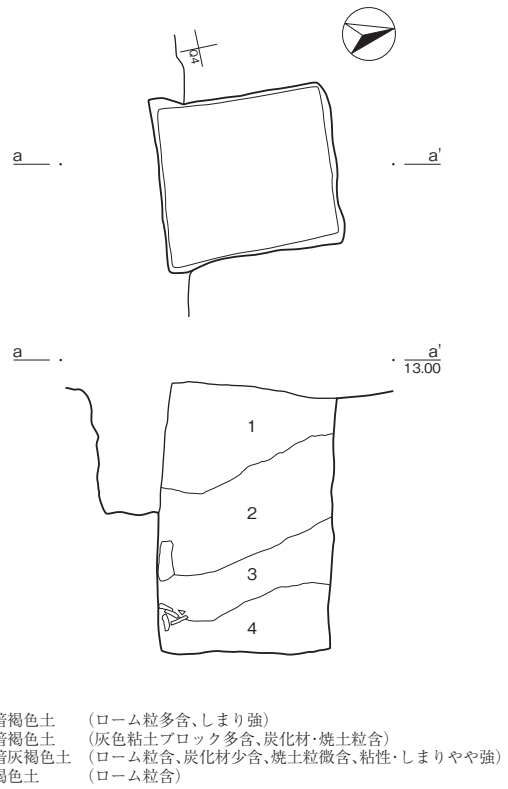
III-8図 SE93



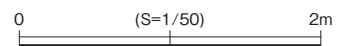
III-9図 SK2



III-10図 SU13



III-11図 SK91



### 第3節 遺物

#### SK2 (Ⅲ-12 図)

1 は肥前産染付猪口で JB-7-b である。外面一面に牡丹唐草文、見込みに複弁を有する手描き五弁花文、高台内に二重角枠内渦福銘が描かれている。2 は肥前産打刷毛目丸碗で TB-1-g である。胎土は暗茶褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。畳付以外に透明釉が施されている。外面には円形状の白泥文様を散らし、内面一面に打刷毛目が施されている。3～5 はかわらけで DZ-2-b である。3 はほぼ器面全面にタール状物質が付着している。4 は口縁部全周に灯心痕が認められる。5 は離れ糸切り痕が認められる。6 は板作り成形の塩壺で DZ-51 である。胎土は橙褐色を呈し、銀雲母微粒を少量含む。刻印は斜めに押され「泉川麻」までしか読み取れない。

#### SU4 (Ⅲ-12 図)

1 はキセルの雁首である。接合痕は側面に認められる。

#### SL10 (Ⅲ-12 図)

1 は常滑産大甕で TG-15 である。体部中位に陶片溶着痕があり、胴部はその位置でクランク状に撓んでいる。胴部下半に直径約 30cm を測る円形の二次穿孔が認められる。本製品は検出状況から厠の便槽として使用されていたと考えられる。

#### SU13 (Ⅲ-12 図)

1 は肥前産染付輪花皿で JB-2-e である。体部から口唇部にかけて型打ち成形によって輪花を形成している。口唇部には口錆が施されている。見込みには牡丹が、裏文様には線書きの如意頭唐草文が描かれ、高台内には「大明年製」銘が書かれている。2 は京都・信楽産平碗で TD-1-h である。胎土は灰白色を呈し、硬質である。高台断面は長方形を呈し、畳付外側が面取りされている。3 は軒平瓦である。瓦当文様は江戸式で、中心飾り I、唐草 H、子葉 a で構成されている。4 は軒丸瓦である。瓦当文様は星梅鉢文を呈す。

#### SU91 (Ⅲ-13～15 図)

1～7 は肥前磁器である。1 は染付碗で JB-1-e である。外面文様はコンニャク印判で松を描き、その他は手描きで描かれている。2 は染付四寸皿で JB-2-e である。口唇部には口錆が施されている。文様は見込みに松、内側面に梅、竹を描き、裏文様には縁取りを有する白抜き如意頭唐草文が描かれている。高台内遺存部に「成」「製」

銘が認められ、「大明年製」もしくは「太明年製」銘と考えられる。3 は染付三寸皿で JB-2-e である。見込みには唐草と秋草をあしらった反物が描かれ、裏文様には縁取りを有する白抜き如意頭唐草文が描かれている。高台内には「大明年製」銘が書かれている。4 は染付八寸皿で JB-2-e である。口縁部はやや外反し輪花を形成する。高台内にはハリ支え痕が3箇所認められる。見込みには霊芝文、宝珠文を描き、内側面には龍、松葉が交互に3箇所描かれている。裏文様には縁取りを有する如意頭唐草文が描かれ、高台には○×文が巡っている。高台内には二重角枠内に渦福銘が書かれている。5 は口径 37cm を測る大皿で JB-3-b である。高台内残存部に2箇所のハリ支え痕が認められる。見込み文様は二重圏線による区画帯を越えて、竹葉、梅花、雲形文で埋めている。裏文様には柳、竹葉が描かれている。高台内には二重圏線が巡り、中央に二重角枠内渦福銘が書かれている。6 は口径 37.5cm を測る大皿で JB-3-b である。口縁部はやや外反し、輪花を形成する。器面全体は青灰色を呈する。高台内残存部に2箇所ハリ支え痕が認められる。見込み文様は雲形区画内に松竹梅が描かれ、その間を牡丹文で埋めている。口縁部には四方禰で埋めた帯文が巡る。裏文様は唐花唐草文が描かれ、高台脇に蓮弁文が描かれている。高台には二重圏線が巡り、残存部に「製」字銘が認められる。7 は染付皿で JB-2 である。底部は蛇ノ目凹形高台を呈し、体部は高台から直接ハの字状に立ち上がる。見込みには梅を描き、内側面には七宝文が巡る。裏文様は梅、鳥が描かれている。高台内には二重角枠内渦福銘が書かれている。類似成形資料に入院棟 A 地点 C2 層 699 があるが、699 は蛇ノ目部は施釉され、畳付が露胎を呈している点で異なり、品質的にも南川原様式に比定される 699 と比較して文様表現が粗放である。8 は京都・信楽産丸碗で TD-1 である。胎土は黄灰白色を呈し、硬質である。釉は畳付を除き施されている。9 は瀬戸・美濃産灰釉丸碗で TC-1-c である。胎土は灰褐色を呈し、白色微粒を含む。10 は京都・信楽産呉須絵丸碗で TD-1-c である。胎土は白色を呈し、硬質である。釉は薄く掛けられ全体的に細かい貫入が入っている。胴部下半に薔薇状の呉須絵が描かれている。11 は京都・信楽産平碗で TD-1-h である。胎土は黄白色を呈し、硬質である。高台断面は長方形を呈し、畳付外端は面取りされている。12 は風炉で DZ-31-h である。口縁部内縁及び開口部外縁に著しい敲打痕が認められる。13、14 はかわらけで DZ-2-b である。底部には離れ糸切り痕が認められる。15 は板作り成形の塩壺蓋で DZ-00-c である。胎土は橙褐色を呈し、金雲母を多量に含む。内面には布

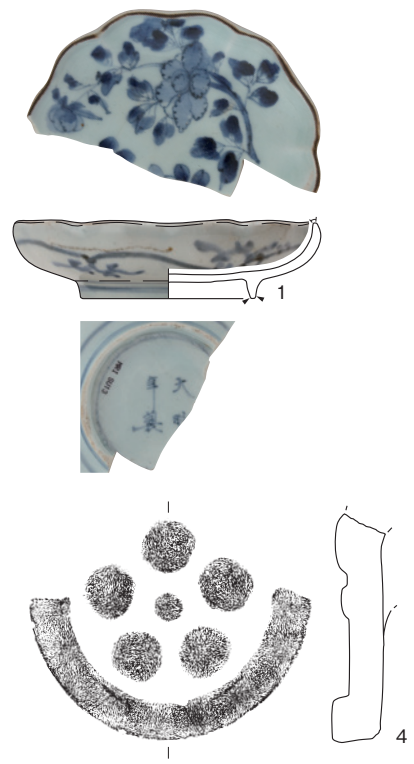
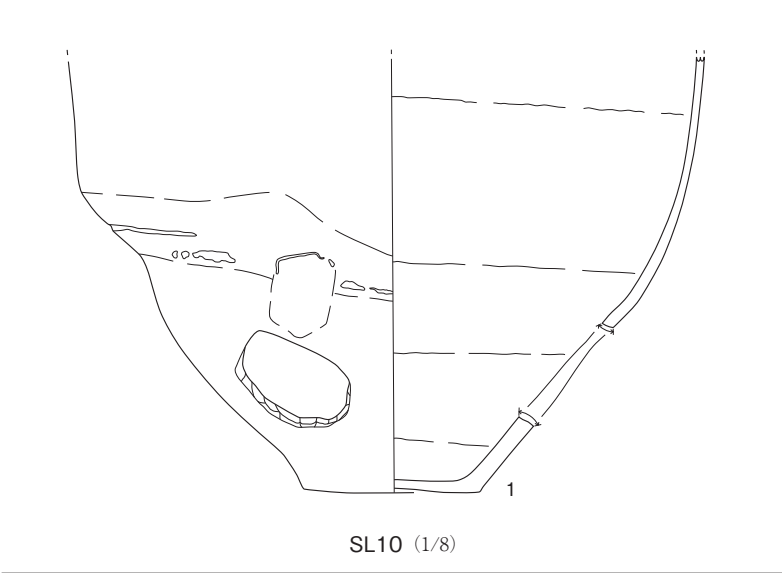
目圧痕が認められる。16は丸瓦である。裏面凹部には布目圧痕と横位の線状痕が認められる。

C層（Ⅲ－15図）

1は頁岩製の砥石である。表裏両面が使用面で、左右側面には切断時の線状痕が認められる。2、3は渡来銭である。2は開元通宝、3は天禧通宝である。4はキセルの吸口で肩を有す。

遺構外（Ⅲ－15図）

1は軒棧瓦片である。軒部右手に一重角枠に「清」銘が刻印されている。



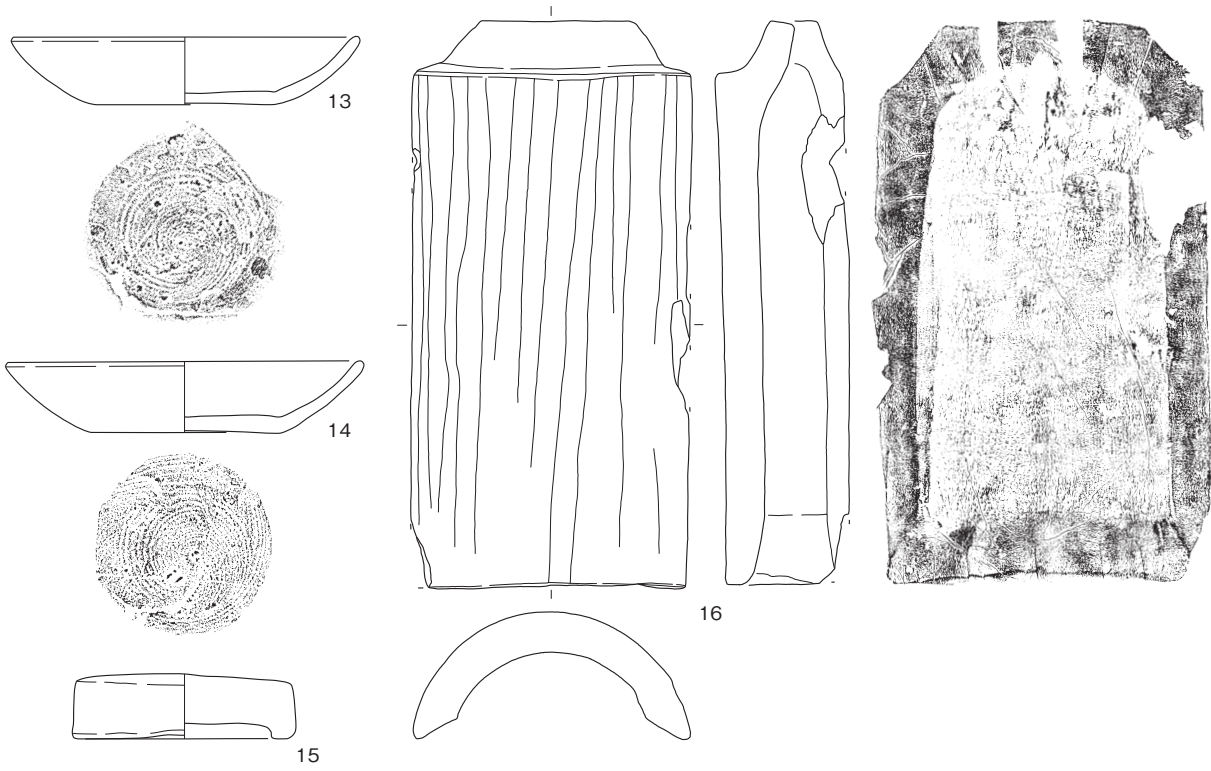
III-12 図 SK2、SU4、SL10、SU13 出土遺物



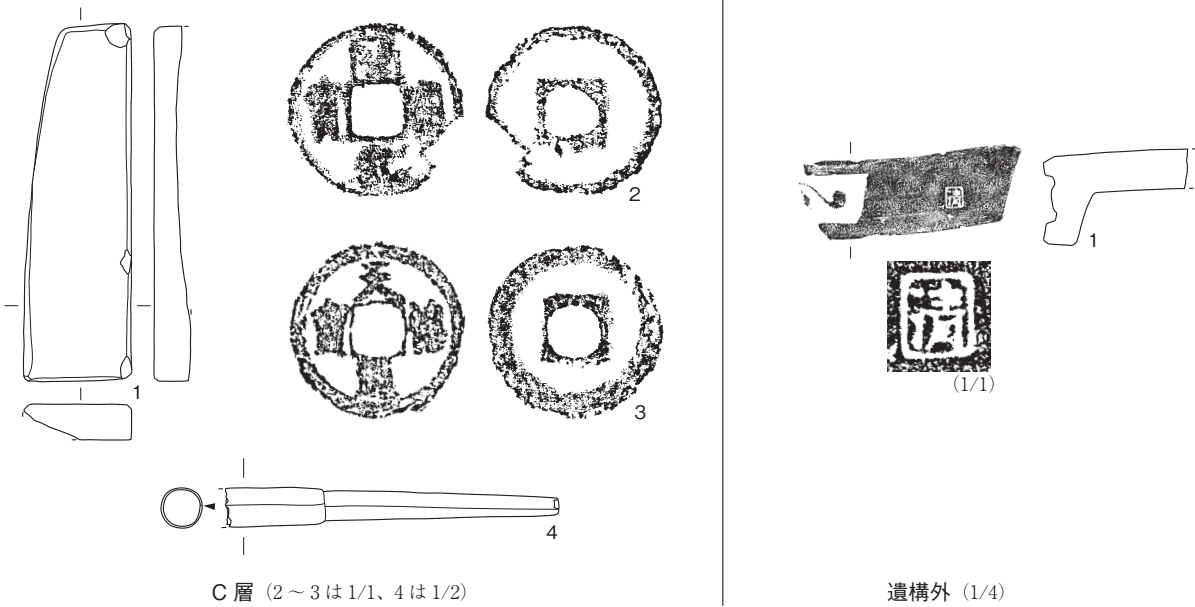
III-13 図 SK91 出土遺物 (1)



Ⅲ-14 図 SK91 出土遺物 (2)



SK91 (3) (16は1/4)



C層 (2~3は1/1, 4は1/2)

遺構外 (1/4)

III-15 図 SK91 (3)、C層、遺構外出土遺物

## 第Ⅲ章 古墳時代の遺構と遺物

### 第1節 遺構

古墳時代の遺構は、前期に比定される竪穴住居址が5軒検出された(Ⅲ-16図)。いずれも近世以降の攪乱の影響を強く受け、遺存状況は悪い。

#### SI01 (Ⅲ-17～21図)

R3・R4・S3・S4・T3・T4グリッドに位置する竪穴住居址である。西側コーナーと上部は近世以降の攪乱を受け、壁溝、柱穴、炉のみが残存していた。平面形は隅丸方形を呈し、1辺約700cmを測る。主軸方向角はN-42°-Eを示す。柱穴は北側コーナーを除き3基が残存していた。平面形は楕円形を呈し、長軸60～75cm、短軸50～60cm、坑底標高12.2～12.5cmを測る。a-a'ライン上の2基で柱痕が認められた(Ⅲ-17図)。覆土は床面検出範囲で約15cm残存し、床面直上及び床面上約10cm付近に遺物が分布していた(Ⅲ-18、19図)。炉は炉床のみ残存し、長軸65cm、短軸55cmを測る不整形を呈している(Ⅲ-20図)。また被熱痕跡は約10cmに及び、頻繁に使用されていたことが窺われる。貼床は比較的しまりが強く、厚さは約5cmを測る。壁溝は幅約25cm、深さ10cmを測り、溝底は凹凸が著しい。掘方はほぼ平坦で、西壁より約80cm内側でそれに平行する溝と、南壁ほぼ中央に接続し約80cm内側で直角に折れる溝が検出された(Ⅲ-21図)。周囲の攪乱が著しく断定はできないが、重複する住居址壁溝の可能性もある。

#### SI02 (Ⅲ-22～25図)

Q4・Q5・R4・R5に位置する竪穴住居址である。西側は調査区外に及び詳細は不明であるが、調査範囲内の形状から隅丸方形を呈すると考えられる。壁、柱穴、炉の位置関係から1辺400～450cm前後の規模と推定される。主軸方向角はN-32°-Eを示す。壁高は幅約15cm、深さ約10cmを測る。貼床は調査区全域で認められたが、壁から約50cmの範囲でしまりが弱い。b-b'ラインにかかるピットが本遺構に伴う柱穴と考えられ(Ⅲ-22図)、南壁寄りに柱痕が確認された。炉は調査区際に位置する。2層上に薄く炭化物層が確認され、そこが最終的な炉床と推定される(Ⅲ-23図)。掘方は凹凸が著しく、壁際にテラス状平坦部が形成されている(Ⅲ-25図)。遺物は、床面直上から覆土中にかけて分布し

(Ⅲ-24図)、図示した台付甕以外はほぼ小片である(Ⅲ-32図)。

#### SI03 (Ⅲ-26～31図)

O3・O4・P3・P4グリッドに位置する竪穴住居址である。北側は調査区外に及び西側は攪乱を受けて消失しているため、詳細は不明である。南側に重複するSI04より新しい。平面形は隅丸方形と考えられ、調査区内での残存最大長は約500cmを測る。主軸方向角はN-16°-Wを示す。覆土は南方向からの流入で、ローム粒を含む暗～黒褐色土を基調とする。壁溝は幅25～30cm、深さ15cmを測る。また南コーナー北側で壁溝内ピットが確認され、土器片が約10点出土した。貼床は、確認面下約50cmで検出され、厚さ約10cmを測り全体的にしまりが強い。攪乱西側で検出されたピットが本住居址の柱穴と考えられる。平面形は略円形を呈し、床面からの深さ約90cmを測る。覆土はローム土が主体で、西側に柱痕が認められる。掘方は全体的に凹凸が著しい(Ⅲ-31図)。遺物は覆土中から小片が出土しているのみである。

#### SI04 (Ⅲ-26～31図)

O3・O4・P3・P4・Q3・Q4グリッドに位置する竪穴住居址である。西側は病院下水本管掘方攪乱によって、北側は重複するSI03によって削平されている。また東側で重複するSI05は本遺構より古い。平面形は隅丸方形を呈し、残存部で1辺920cmを測る。主軸方向角は、N-40°-Eを示す。覆土は、ほぼ水平堆積を呈し、壁際で緩やかに傾斜する(Ⅲ-26図)。また炉の南側床面上約10cmに厚さ約5cmを測る硬化範囲が確認された。炉が隣接して2基検出されたことも合わせて建替の可能性もある。床面は厚さ5～10cmの黄褐色土で貼床が形成され、全体的にしまりが強い。炉は中央やや北寄り2基隣接して検出された。いずれも平面形は不整形を呈し、炉床は著しく焼土化している(Ⅲ-28図)。本住居址の主柱穴にはpit4、pit5が比定される。平面形は不整楕円形を呈し、長軸約80cm、短軸約50～60cm、床面からの深さはpit4で100cmを測る。また東側にテラスを有する点で共通する。pit4では柱痕が確認され、柱痕内堆積土に焼土層が確認された(Ⅲ-29図2層)。壁溝は幅約30cm、床面からの深さ約10cmを測り、東壁構内で3基のピットが確認された。東壁際から貯蔵穴と



考えられる方形土坑が2基検出された（Ⅲ-26、29 図土坑1、土坑2）。土坑1は長辺100cm、短辺80cm、床面からの深さ60cmを測る。土坑2は長辺70cm、短辺60cm、床面からの深さ50cmを測る。2層には焼土粒を多量に含み、4層はしまりが非常に強くほぼ水平堆積を呈している。覆土中位よりほぼ完形の埴（Ⅲ-32 図14）、4層上より口縁部を欠損した埴（Ⅲ-32 図15）が出土した（Ⅲ-30 図）。掘方は南コーナー付近で凹凸が認められるが、全体的には比較的平坦である。また東壁際で数条の溝が確認された。本住居址以前の遺構の可能性もあるが、詳細は不明である。

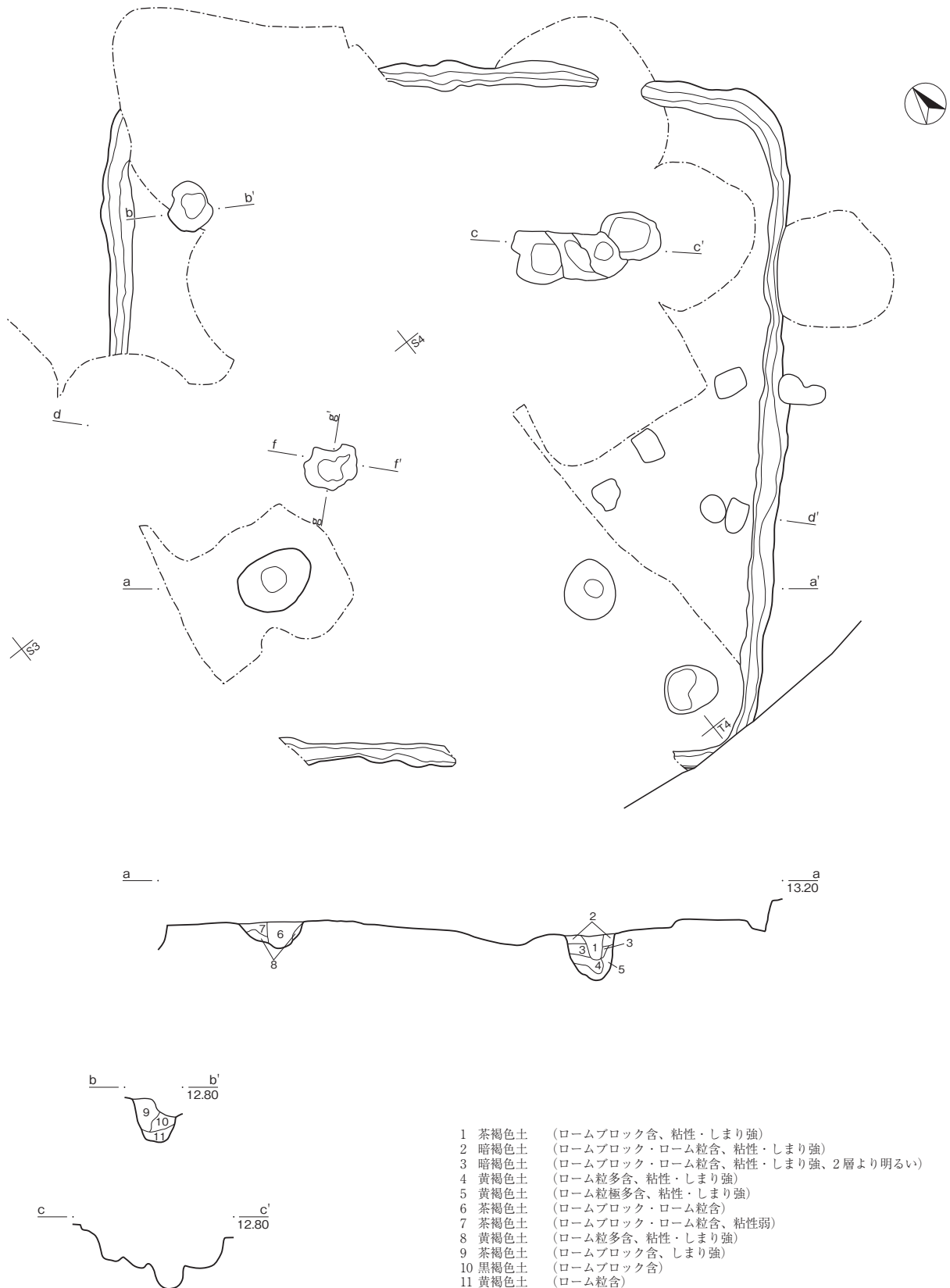
遺物は小片を中心に多量に出土したが、特に北東壁際床面直上からほぼ完形の壺が横位に潰れた状態で出土し（Ⅲ-32 図1）、それに重なり合うように広口壺（Ⅲ-32 図11）が出土（Ⅲ-30 図）、また炉東側より勾玉（Ⅲ-32 図16）が1点出土したことが特筆される。

#### SI05（Ⅲ-26～31 図）

P4・P5 グリッドに位置する竪穴住居址である。北側は攪乱に、西側はSI04によって削平され、1/4程度の遺存状況である。また江戸時代の開発によって残存範囲はほぼ中央を横走る攪乱溝北側では床面も削平され、南側も数cmの覆土が残るのみであった。平面形は隅丸方形を呈し、南北最大残存長320cmを測る。主軸方向角は推定N-30°-Eを示す。残存部では全面的に明瞭な貼床が確認された（Ⅲ-26 図26層）。遺構範囲内で検出されたピットはいずれも江戸時代に帰属し、本遺構に伴う柱穴および炉は確認されなかった。掘方はほぼ平坦である。



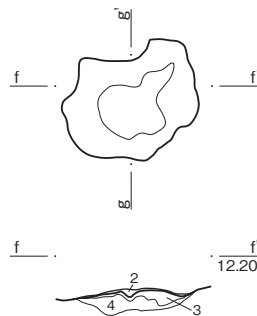
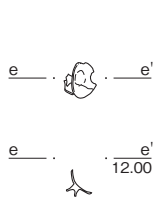
Ⅲ-16 図 古墳時代遺構配置図 (S=1/150)



III-17 図 SI01



III-18 図 SI01 遺物分布図



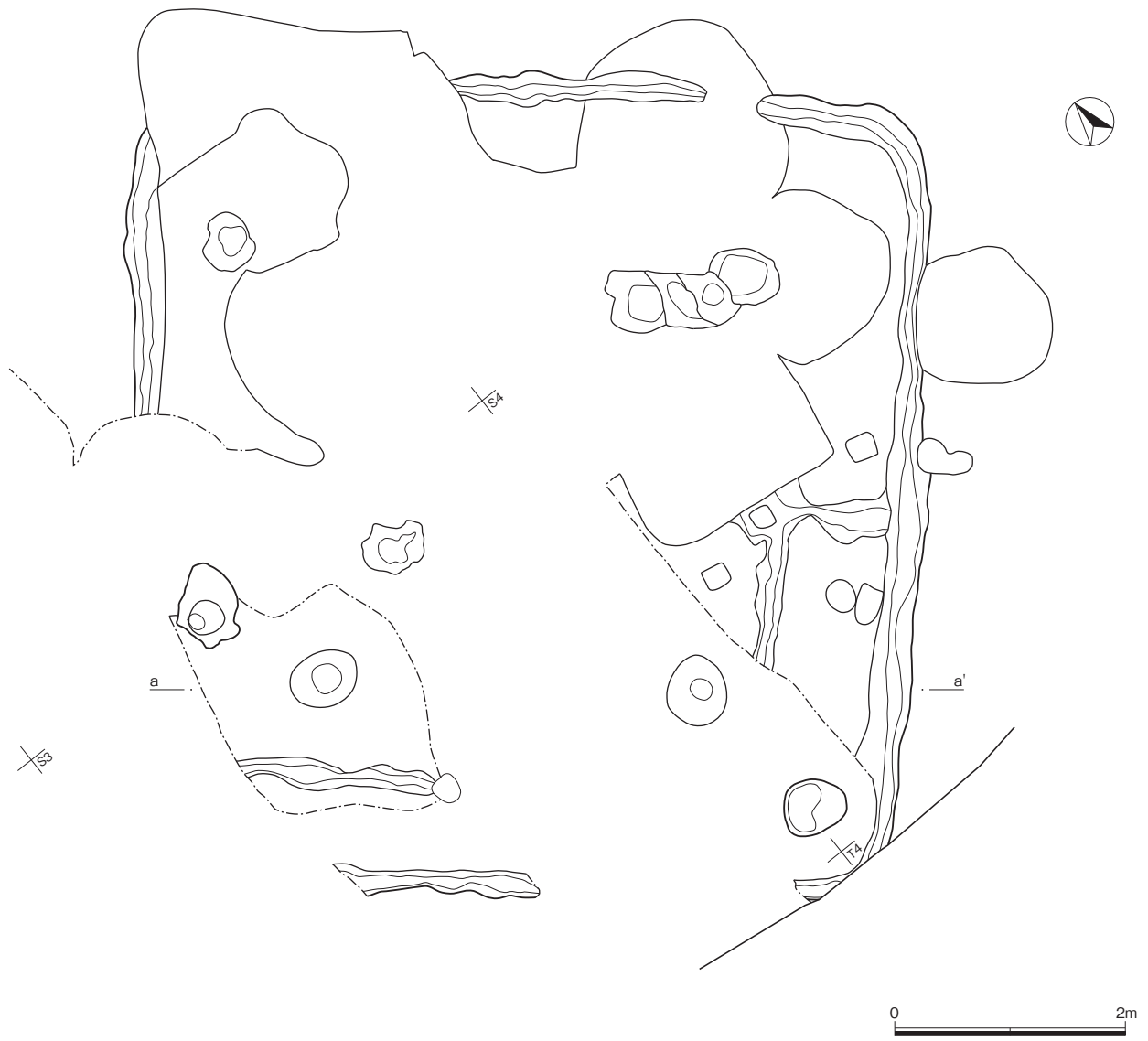
- 1 黒褐色土 (焼土)
- 2 赤褐色土 (被熱、焼土含、粘性・しまり弱)
- 3 明褐色土 (被熱、焼土含、粘性・しまり強)
- 4 黄褐色土 (ローム粒多含、粘性・しまり強)

0 50cm

0 50cm

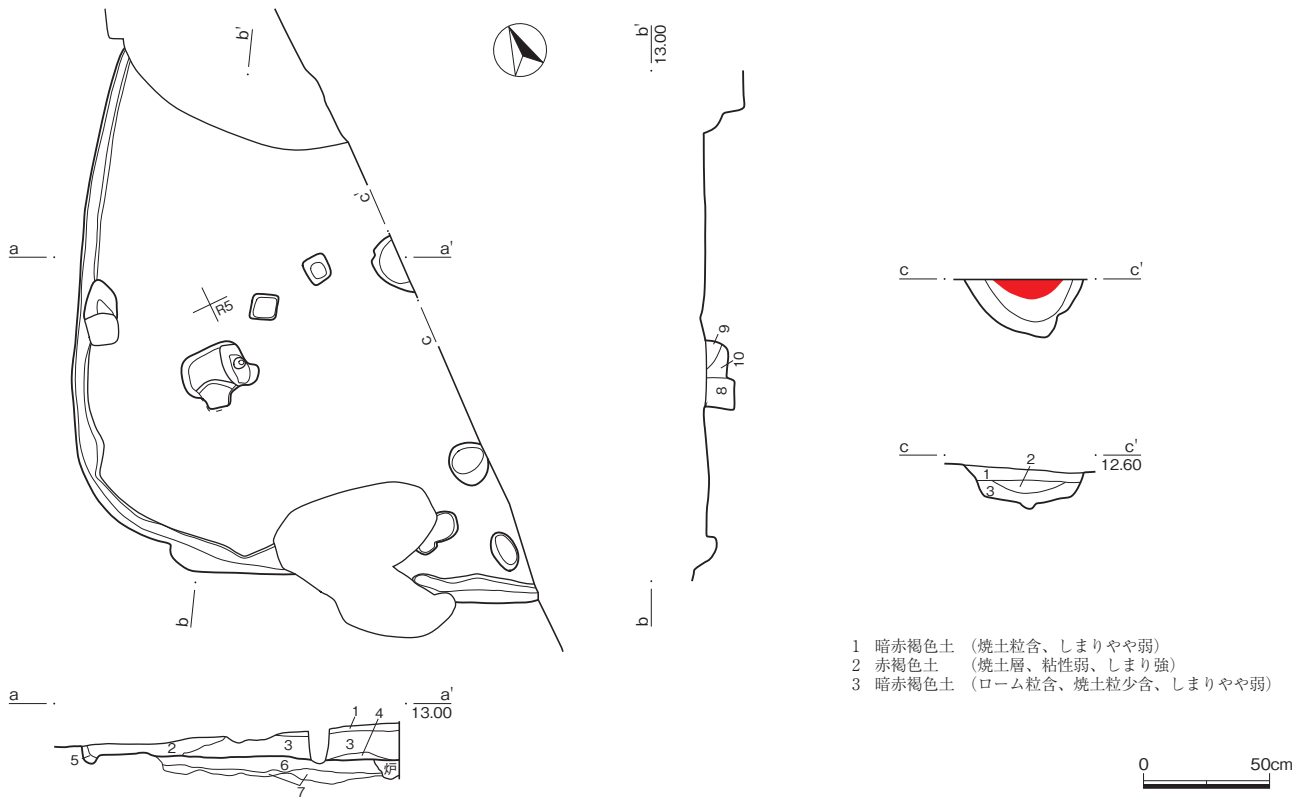
III-19 図 SI01 遺物出土状況

III-20 図 SI01 炉



Ⅲ-21 図 SI01 掘方

III 臨床試験棟地点の調査

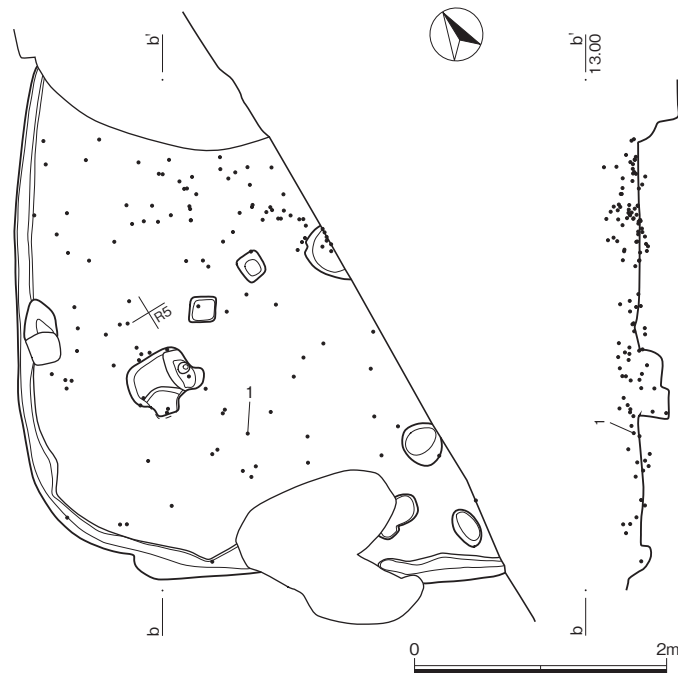


- 1 黒褐色土 (しまりやや弱)
- 2 暗褐色土 (ローム粒少含、焼土粒微含)
- 3 褐色土 (ローム粒含)
- 4 褐色土 (炭化物含、粘性やや強)
- 5 褐色土 (ローム粒含、しまりやや弱)
- 6 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒少含、しまりやや強)
- 7 暗黄褐色土 (ローム埋土、しまりやや弱)
- 8 暗褐色土 (ローム粒含、しまりやや弱)
- 9 褐色土 (ロームブロック・ローム粒含)
- 10 褐色土 (ローム粒極多含)



III-22 図 SI02

III-23 図 SI02 炉



III-24 図 SI02 遺物分布図



Ⅲ-25 図 SI02 掘方



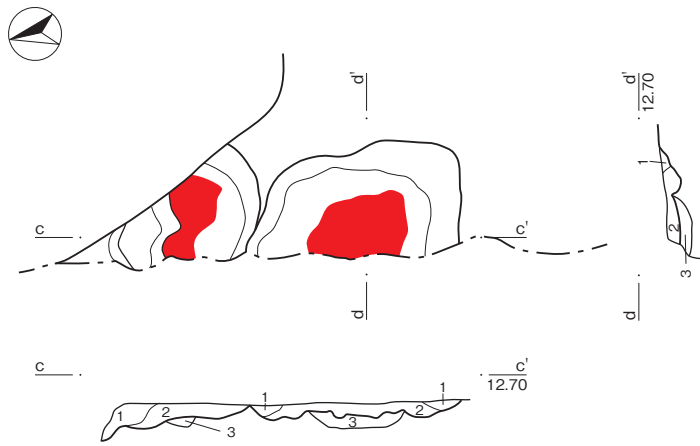
III-26 図 SI03・SI04・SI05 (1)



SI03	1 黒褐色土 (しまりやや強)	14 褐色土 (ローム粒含)
	2 暗褐色土 (ローム粒含、しまりやや弱)	15 暗褐色土
	3 暗褐色土 (ローム粒多含、ロームブロック含)	16 暗褐色土 (ローム粒多含、しまりやや強)
	4 黒褐色土 (ロームブロック・ローム粒含、しまり弱)	17 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック含、しまり弱)
	5 暗褐色土 (ローム粒多含、しまり弱)	18 褐色土 (しまりやや強)
	6 褐色土 (ローム粒極多含、しまりやや弱)	19 暗褐色土 (ロームブロック含)
	7 黒褐色土 (ローム粒多含、しまり弱)	20 黒褐色土 (しまりやや弱)
	8 暗黄褐色土 (しまり弱)	21 暗褐色土 (しまりやや弱)
	9 暗黄褐色土 (しまりやや弱)	22 黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、しまり強、貼床)
	10 黄褐色土 (ローム多含、暗褐色土含、しまり強)	SI05
SI04	11 暗褐色土 (ローム粒含、しまりやや弱)	23 暗褐色土 (ローム粒微含)
	12 暗褐色土 (ローム粒微含)	24 褐色土 (しまりやや弱)
	13 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒多含、しまり強)	25 暗黄褐色土
		26 暗褐色土 (ロームブロック多含、しまり強)



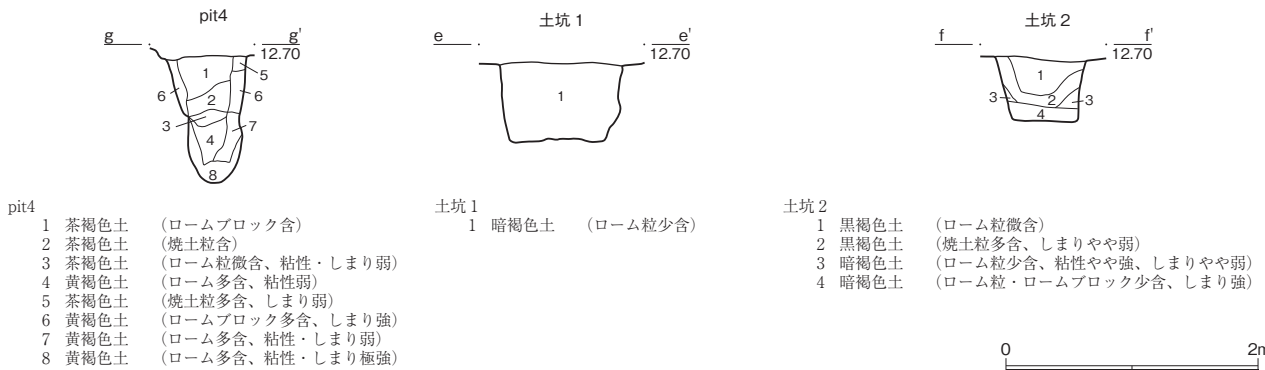
Ⅲ-27 図 SI03・SI04・SI05 (2)



- SI04 炉
- 1 黒褐色土 (ローム粒含)
  - 2 黒褐色土 (焼土粒多含)
  - 3 焼土



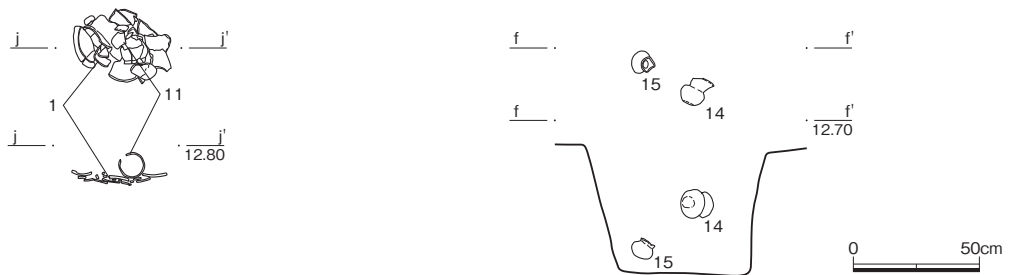
Ⅲ-28 図 SI04 炉



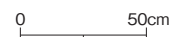
- pit4
- 1 茶褐色土 (ロームブロック含)
  - 2 茶褐色土 (焼土粒含)
  - 3 茶褐色土 (ローム粒微含、粘性・しまり弱)
  - 4 黄褐色土 (ローム多含、粘性弱)
  - 5 茶褐色土 (焼土粒多含、しまり弱)
  - 6 黄褐色土 (ロームブロック多含、しまり強)
  - 7 黄褐色土 (ローム多含、粘性・しまり弱)
  - 8 黄褐色土 (ローム多含、粘性・しまり極強)
- 土坑1
- 1 暗褐色土 (ローム粒少含)
- 土坑2
- 1 黒褐色土 (ローム粒微含)
  - 2 黒褐色土 (焼土粒多含、しまりやや弱)
  - 3 暗褐色土 (ローム粒少含、粘性やや強、しまりやや弱)
  - 4 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少含、しまり強)

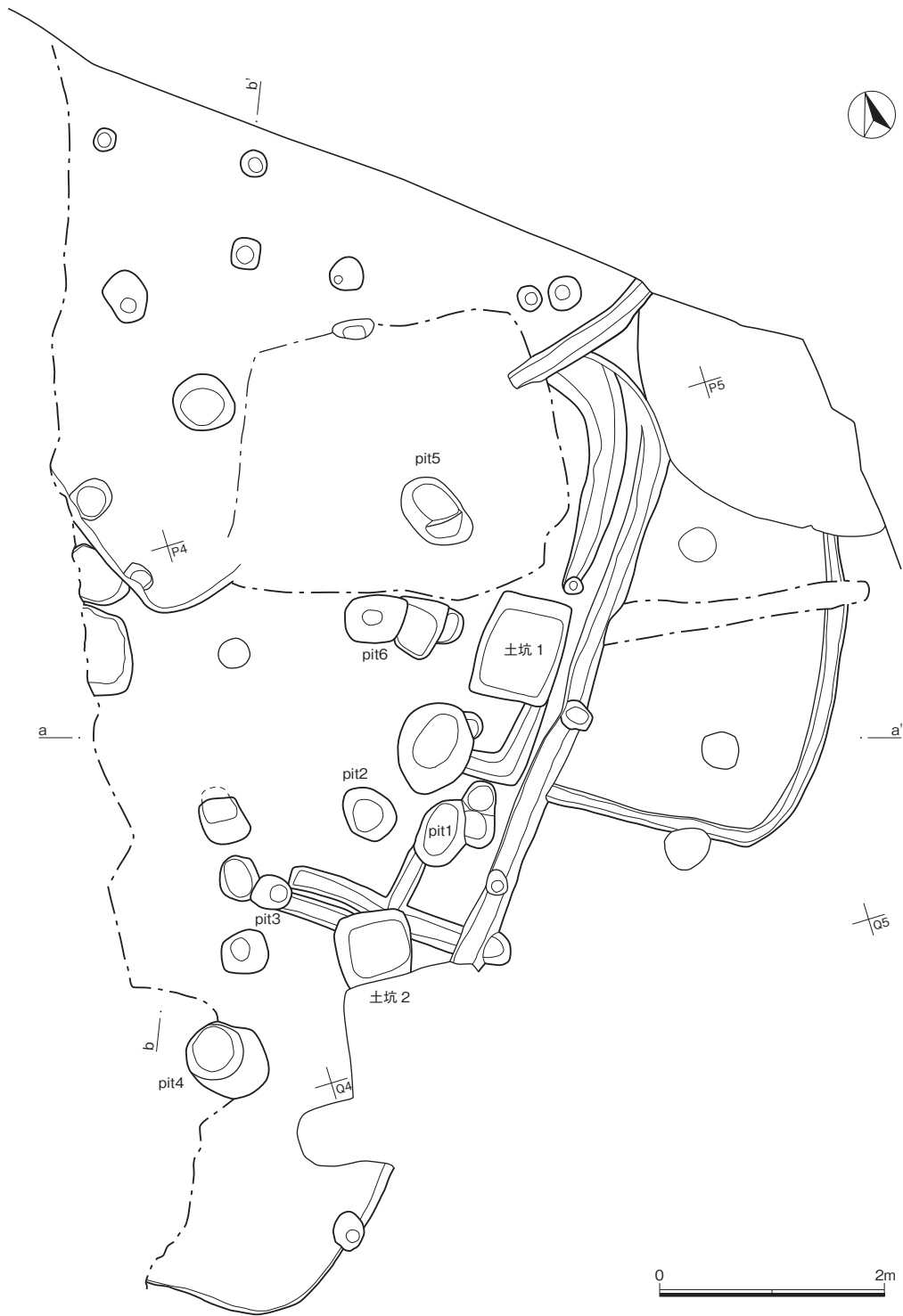


Ⅲ-29 図 SI04 土坑1・2、pit2、pit4、pit6



Ⅲ-30 図 SI04 遺物出土状況





Ⅲ-31 図 SI03・SI04・SI05 掘方

## 第2節 遺物

## SI01 (Ⅲ-32 図)

1、2はS字状口縁甕の口縁部片である。1の色調は淡褐色である。胎土は精良で、長石と石英、黒雲母、金雲母、微砂粒、直径1～3mmの砂礫を含む。稜が明瞭で口唇部に厚みがある。調整は、外面は口縁部に横位のナデを施した後、胴部上半に斜位と縦位のハケメ調整を交互に行なっている。内面は横位のナデを施している。2の色調は淡灰褐色である。胎土は精良で、石英と金雲母、微砂粒を含む。稜が明瞭な口縁部をもつ。成形は、胴部までを成形した後、口縁部下半を内傾接合し、さらに湾曲させながら口縁部上半を積み上げている。口唇部は丸く仕上げられている。調整は、外面は口唇部及び口縁部を横位のナデによって整えた後、斜位のハケメ調整と交差するようにナデを交互に施している。

3は台付甕の脚部片である。推定脚端部径は8.4cmである。色調は淡赤褐色である。外面の脚端部と接合部にそれぞれ煤の付着がみられる。胎土には、長石と石英、微砂粒、直径1～3mmの砂礫を含む。下位で内湾ぎみに開く脚部をもつ。脚端部は面取りが行なわれていて、内側に粘土がせり出している。底部を含めた甕部の成形を行なった後に脚接合部に粘土を巻きつけ、そこから脚部の成形を行なうか、あるいは甕部と脚部を別に作り、最後に脚接合部に粘土を貼り付ける場合が想定される。調整は、外面は斜位のハケメ調整を行なっている。内面も同様の手法によるが底部内面ではナデが施されている。

4、5は高坏である。4は脚部の一部が欠損している。口径は13.9cmである。色調は赤褐色である。胎土には、直径2～3mmの砂礫を多く含む。ハの字状に開き、接合部付近で直立する脚部と、稜のある底部、そして大きく開く坏部をもつ。成形は、坏部と脚部を一体として作り上げたと考えられる。口唇部はやや外反し、端部は丸く仕上げられている。調整は、外面は縦位のケズリを行なった後に、横位のミガキを施している。ケズリの方向は、口縁部から底部、脚部に向かって行なわれている。ミガキには規則性がなく、調整の単位は把握できない。体部の内面は横位のハケメ調整を行なった後、斜位のミガキを施している。口唇部は内外面ともに指による横位のナデが施されている。また底面は縦位のケズリを行なった後に、縦位のミガキを施している。脚部内面はハケメ調整を求心状に行なっている。

5は高坏の脚接合部片である。色調は赤褐色である。胎土には、長石と石英、微砂粒、直径1mmほどの砂礫

を含む。成形は、脚部から内底部までを成形し、次に坏部を作るといった工程を取っている。このため、脚接合部外面に粘土を貼り付けるなどの行為を必要としない。脚部内面にはしぼりの痕跡がみられる。調整は、外面は縦位のミガキを施した後、脚接合部のみ横位のミガキを施している。内底部はナデが施されている。

6、7は小形器台である。6の口径は9.2cmである。色調は淡黄褐色で、受部内面に赤彩が付されている。胎土には、微砂粒と直径1～6mmの砂礫を多く含む。ハの字状に開き接合部付近で直立する脚部と、稜を持たずゆるやかに開く器受部をもつ。口縁部はゆるく外反し、2条の突帯がめぐる。口唇部は工具によるナデによって稜がつくられている。透孔の配置は、一段3方である。調整は、器受部の稜付近は板状工具による横位のハケメ調整を行ない、下半部では縦位のハケメ調整を行なっている。脚接合部から脚部までは縦位のミガキを施している。受部内面は縦位のミガキを施し、口唇部は内外面ともに指による横位のナデを施している。脚部内面は横位のハケメ調整を行なっている。7は脚部片である。色調は淡褐色で、焼成は良好である。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、黄白色粘土粒、微砂粒、直径1～5mmの砂礫を含む。ハの字状に開き接合部付近で直立する脚部をもつ。脚部と器受部の一体となった成形が考えられる。底部には穿孔が施されている。調整は、外面は縦位のケズリを行なった後、丹念に横位のミガキを施しており、光沢が著しい。受部内面も丹念な縦位のミガキが施されている。脚部内面は横位のケズリが行なわれている。

## SI02 (Ⅲ-32 図)

1は台付甕で、口縁部から胴部上半までの破片である。推定口径は18.8cm、最大径は21.7cmである。色調は淡赤褐色である。外面の胴部から頸部にかけて煤の付着がみられる。胎土には、長石と赤色酸化土粒、黄白色粘土粒、直径1～2mmの砂礫を多く含む。最大径を中位にもつやや胴長な球体状の胴部と、弧を描くように外反する口縁部をもつ。輪積み成形で、胴部下半から上半に立ち上がる箇所と、頸部接合面で輪積み痕が残っている。頸部の接合は、胴部に対して内傾接合を行なっているため、内面に被せた粘土が浮き出ている。口唇部はナデによって丸く仕上げた後、工具によって刻目を施している。また刻みの施文方向については、正位からみて左上方向から行なわれている。調整は、外面は口縁部に指による横位のナデを施した後、ハケメ調整を行なっている。頸部から胴部上半までは縦位、胴部上半から下半にかけては横位のハケメ調整である。両者の順序関係は、二次焼成

による劣化によって判別は困難である。内面は、口縁部では内外面ともに指による横位のナデが施されている。

SI04 (Ⅲ-32図)

1、2は壺である。1は口縁部から胴部までの破片である。口径は15.6cm、頸部径は8.3cm、最大径は25.1cmである。色調は淡赤褐色で、焼成は良好である。胴部下半と内面の一部に煤の付着がみられる。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒、直径1～5mmの砂礫を含む。最大径を中位にもつ球体状になる胴部と、ハの字状に大きく開く折り返し口縁部をもつ。底部から胴部下半、胴部下半から上半、胴部上半から肩部に接続する箇所が輪積み痕が残っている。肩部から頸部の接続は内傾接合で粘土のはみ出しが認められる。口縁部外面には幅2cmほどの粘土帯をさらに重ねている。この口縁部の取り付けは、口縁部から頸部にかけての外面のハケメ調整を行なった後である。また口唇部は横位のナデによって平滑に仕上げられ、断面が凹状になっている。調整は、外面はハケメ調整を口縁部から頸部にかけては縦位、胴部は斜位と横位を交互に、そして胴部下半から底部付近では縦位に行なっている。その次にミガキを、頸部と胴部上半では縦位に、胴部下半から底部にかけては横位に施しているが、調整箇所はややまばらである。また口縁部は横位のナデが施されている。内面は胴部を横位のナデを行なった後、口縁部から頸部にかけて横位のハケメ調整を行ない、頸部には横位のミガキを施している。また胴部の中位と口縁部内面に黒班が認められる。2は壺の底部片である。推定底部径は5.9cmである。色調は赤褐色である。胎土は砂質で、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒を多く含む。調整はナデが施されたものと考えられる。

3はS字状口縁甕の口縁部片である。推定口径は14.6cmで、色調は暗褐色・褐色、焼成は普通である。やや胴長の胴部が推定され、口縁部はやや厚みがあり、先端部が短くやや上向きになっている。胎土には雲母が多く含み、白色土粒と長石を含む。胴部上半には輪積みの痕跡が明瞭に残り、口縁部は内傾接合していることが見て取れる。胴部上半の内面の輪積み痕の周囲には指頭圧痕が多く残る。調整は板状工具を主体的に用いており、外面は斜位のハケ調整を駆使して交差するようにこれを施し、さらに胴部上位では横位のハケ調整を施している。口縁部はナデによって丁寧に調整されていることがうかがえる。

4は甕の口縁部から胴部までの破片である。推定口径は14.1cm、最大径は16.9cmである。色調は淡褐色である。

外面胴部と内面口縁部の一部に煤の付着がみられる。胎土には、石英と雲母、赤色酸化土粒、微砂粒を含む。中位に最大径をもつ球体状の胴部とハの字状に開く口縁部をもつ。成形は、内傾接合を基本としており、胴部と口縁部の境に輪積み痕が残っている。頸部内面はゆるい稜が認められる。口唇部は工具によって鋭角に仕上げられている。調整は、外面では口縁部を横位のナデによって整え、次に口唇部にさらに横位のナデを加える。その後、胴部に横位のハケメ調整を行ない、頸部に斜位のハケメ調整を施している。内面では横位のナデを基本とする。

5、6は台付甕の脚部片である。5の脚端部径は8.4cmである。色調は淡赤褐色である。外面に一部煤の付着がみられる。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒、直径1mmほどの砂礫を含む。台形状に開く脚部をもつ。成形は、脚部から底部までを一体として作り、そこから胴部の成形を行なっていると思われる。底部は脚部を筒状に成形した後に、上から充填したものと考えられる。端部は工具によって面取りがなされている。調整は、縦位のハケメ調整を行なった後、裾部のみ指による横位のナデを施している。内面は底部から上半部にかけて指による横位のナデを施し、下半部で横位のナデを施している。6の推定脚端部径は8.1cmである。色調は淡褐色で、焼成は良好である。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒、直径1～4mmの砂礫を含む。台形状に開く脚部をもつ。成形は、脚部と甕部を別で作り、脚部は上部にくぼみを作り、そこに底部が充填されるような成形手法を取ったと考えられる。脚端部は面取りによって平滑に仕上げられている。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後、指によるナデによって器面を整えている。内面は横位のナデを行なった後、斜位のナデをさらに施している。

7～10は高坏の脚部片である。7は柱状の脚部で、端部は大きく開く。また両者の間には段差が設けられている。色調は明褐色で焼成は普通である。胎土には赤色酸化土粒が少量、雲母が微量含む。調整は、外面は縦位のミガキが施されている。内面はさほど丁寧に仕上げしておらず、脚部は横位のケズリの痕跡が見て取れる。端部付近では横位のナデが施されている。8の色調は淡赤褐色で、焼成は良好である。外面の一部に煤の付着がみられる。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒、直径1mmほどの砂礫を含む。ややハの字状に開く脚部をもつ。脚部には透孔があげられており、器面観察から、外面から内面に向かって工具で開けられたものと考えられる。透孔の配置は、一段3方である。調整は、外面は縦位のハケメ調整を行なった後、縦位のミガキを施して

いる。内面は正位で半時計回りのナデが行なわれており、坏部内面はミガキが施されている。9の色調は淡赤褐色で、焼成は良好である。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、微砂粒を含む。ハの字状に開き、接合部付近で直立気味になる脚部をもつ。脚部では絞り込みによる成形が行なわれている。脚部には透孔が開けられている。透孔の配置は、一段3方である。調整は、外面は縦位のミガキが緻密に施されている。内面は絞り痕がよく残り、その上にナデを施している。10の色調は赤褐色で、外面に赤彩が付されている。焼成は良好である。胎土には、長石と粘土粒、微砂粒、直径1mmほどの砂礫を少量含む。ハの字状に大きく開く脚部をもつ。調整は、外面は縦位のミガキを施している。内面は横位のハケメ調整を行なった後、横位のナデが施される。

11は小形甕である。口径は8.8cm、最大径は10.0cm、底部径は3.0cm、器高は10.5cmである。色調は淡褐色で、胴部外面に赤彩の痕跡が残る。焼成は良好である。胎土は精良で、長石と石英、赤色酸化土粒、黒雲母、微砂粒、直径1～6mmの砂礫を含む。径の狭い底部と中位に最大径をもちゆるやかにすぼまる胴部、5の字状屈曲が形骸化した口縁部をもつ。頸部は内傾接合で、内面に稜を作っている。口縁部はややすぼまるようにして内傾する。口唇部はナデによって丸く仕上げられている。調整は、外面は胴部上半に斜位のハケメ調整を行なった後、中位に横位のハケメ調整を行なっている。そして下半部では縦位の強いミガキを施している。頸部においては、斜位のハケメを交差するようにして調整している。口縁部は横位のナデを上下二段に分けて行い、中位にわずかな稜を形成している。底面はケズリによって平坦に整えられている。内面は、胴部は横位のナデによって整えられ、口縁部は斜位のハケメ調整を行なった後、外面同様に横位のナデを施している。また外面胴部下半に黒班がみとめられる。

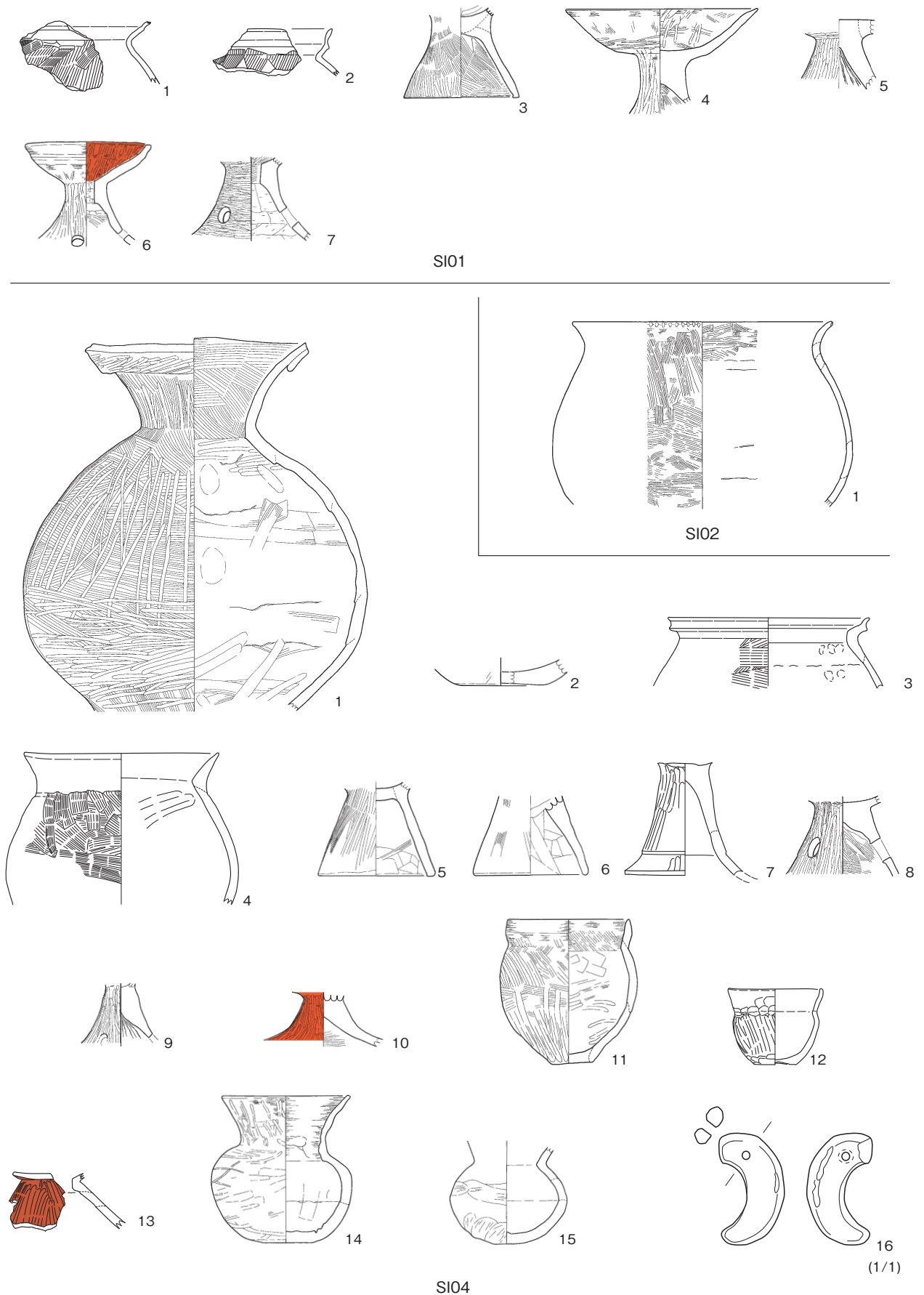
12は小形埴である。口径は7.0cm、頸部径は6.0cm、胴部最大径は6.3cm、底部径は3.0cm、器高は5.6cmである。色調は淡褐色で、外面に赤彩が付されている。焼成は良好である。胎土は精良で、石英と赤色酸化土粒、微砂粒を含む。上げ底状の底部と最大径を上位にもつやや胴長の胴部とハの字状に開き、口唇部付近で直立気味になる口縁部をもつ。輪積み成形で、頸部内面に輪積み痕が残っている。口縁部は内傾接合で、内面に稜が認められる。口唇部は面取りがされている。調整は、外面は口縁部に横位のナデ調整を行なった後、胴部に縦位のハケメ調整を行なう。さらにその上に縦位のミガキを施し、最後に底部を横位のケズリ、頸部接合部を指による押捺

で整えている。また底面もケズリによって上げ底状に成形している。内面は口縁部を横位のハケメ調整を行なった後、底部も斜位のハケメ調整、そして胴部にナデによって整えている。

13は小形器台である。ハの字状に開く脚部と浅く立ち上がる器受部をもつ。色調は淡褐色で、外面及び器受部の内面にはその上に赤彩が施されている。焼成は良好で、極めて硬質な焼き具合となっている。胎土は全体的に精良で、黒色土粒を含み、赤色酸化土粒を微量含む。こうした精緻さがある反面、内面に輪積み痕を多く残す。調整は、外面に縦位にミガキを施している。内面はさほど調整はされておらず、ハケ成形の痕跡が残っている。

14、15は小形壺である。14の口径は9.2cm、頸部径は6.2cm、胴部最大径は10.3cm、底部径は3.5cm、器高は10.8cmである。色調は茶褐色で、焼成は良好である。胎土には長石と石英、赤色酸化土粒、直径1mmほどの砂礫を多く含む。平底と上位に最大径をもつ球体状の胴部、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。内面に粘土輪積み痕を多くの残し、胴部中位に一段の接合痕が認められる。また口縁部接合は胴部との間で内傾接合を行っており、稜が認められる。口唇部は丸く仕上げられている。調整は、外面では頸部は斜位のハケメ調整を行なった後、口縁部では横位のナデを施し、さらに口縁部から頸部にかけて縦位のミガキを施している。胴部は横位のケズリで器面を整えた後、横位のミガキを施している。底部はケズリによって整えられている。内面では、底面から胴部にかけては未調整の部分が多く、簡単にケズリによって整えられたと思われる。頸部から口縁部にかけては横位のナデが施されている。また外面の頸部から胴部にかけて薄い黒班が一部認められる。15の頸部径は5.3cm、最大径は8.6cmである。色調は暗褐色である。胎土には、長石と石英、赤色酸化土粒、直径1mmほどの砂礫を多く含む。丸底と最大径を中位にもつ球体状の胴部、ハの字状に開く口縁部をもつ。胴部中位に接合痕が残っている。頸部内面には鋭角な稜を形成している。調整は、外面では全体的にナデによって器面を整え、さらに胴部下半から底面にかけては横位のケズリによって丸みを出させている。その方向は正位からみて時計回りを基本とする。内面では、底部から胴部下半については求心方向のケズリが施されている。また外面胴部中位の一部に薄い黒班が認められる。

16は滑石製の勾玉である。長さ2.0cm、中央幅0.4cmであり、一方向から穿孔を施している。片面の表面はよく研磨されているのに対し、もう一方の片面はやや粗雑に仕上げられている。



III-32 図 SI01、SI02、SI04 出土遺物

## 第IV章 おわりに

本地点の調査対象面積は400㎡であったが、北病棟基礎根切り、病院下水本管および枝管の攪乱によって対象面積の半分以上が調査対象から外れ、結果的に狭小な調査となった。

A面比定遺構は、近代以降の削平の影響を受け、礎石など掘削深度の浅い遺構は認められず、半地下室、便槽、井戸が確認された程度で、空間構成の復元には到らなかった。

D面では、前節で述べたように、4ライン以東に植栽痕と推定される不整形土坑が分布する傾向が認められ、おおむねその西側に方形土坑が分布する。方形土坑の主軸方向角は方眼北から6～8°東傾する傾向が窺え、1号棟地点よりは東傾率が低いものの、方眼北から東傾する状況は類似しており、藩邸内東側の空間構成が広範囲にわたり一貫していたことを窺わせる。植栽痕は隣接する入院棟Ⅱ期地点F1・F2N区4～5面にかけて多数検出されており、一連の庭園区域の可能性もある。富山藩邸全景図は、19世紀代の絵図面が残るのみで、それ以前の様相を捉えることはできないが、享和元（1801）年から文政8（1825）年の火災以前に比定される御殿図でも全景図同様、表門から北方向に御殿が展開しており、御殿東側は空閑地であった可能性が高い。全景図に観られる御殿東側の空閑地は書院庭と考えられており（小松2015）、本地点で検出された植栽痕群も藩邸庭園に関わる遺構と推定される。

古墳時代の遺構は、前期の竪穴住居址が5軒検出された。江戸期の削平によって遺存状況は良好ではないが、SI03～05の重複に観られるように、かなり密に集落が展開していたことが推定される。この状況は現在までに、1号棟地点を始め、クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期地点、国際科学イノベーション統括棟地点、入院棟Ⅱ期地点、看護職員等宿舎3号棟地点、看護師宿舎Ⅲ期地点など本地点周辺調査地点でも確認され、医学部附属病院地区東側、即ち 弥生門から池之端へ続く谷筋と第2中央診療棟地点から入院棟A地点を通り、区営池之端住宅（ペラカーサ池之端）へ続く埋積谷に挟まれた舌状台地縁辺部に古墳時代前期から中期にかけて大規模集落が形成されていたことが確認される。今後各調査地点の分析を通じた情報集積に期待したい。





#### IV 看護職員等宿舎 3 号棟地点 (1)



遺構一覽表

近世遺構

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SX	1	A~B	A 5-E5	IV-5	IV-40~44
SK	2	A	C3-D4	IV-6	IV-45~59
SD	3	C	C2-D3	IV-7	
SD	3-2	D	C2-C3		
SU	4	D	B3	IV-8	IV-59
SD	5	D	A3-B3	IV-10	
SX	6	D	C2-D2	IV-9	
SX	7	D	B3	IV-11	
SK	8	D	B2		
SK	9	D	B2		
SD	10	D	B3-C3	IV-12	
SK	11	B	C2-D3	IV-13	IV-59
SP	13	D	C2		
SP	14	D	C2		
SX	15	B	E2-E3	IV-14	IV-59
SP	16	D	B3		
SK	18	D	D2	IV-9	
SK	19	D	C2		
SK	20	D	B2		
SK	22	A	C3	IV-15	
SP	24	A	D3		
SP	25	A	E3		
SK	26	A	E3		
SK	27	A	E3		
SK	28	A	E3		
SK	30	A	E3		
SK	31	A	E3		
SK	32	A	E4		
SK	33	A	E4		
SK	34	A	E4		
SK	37	D	E3		
SK	38-1	A	E4-E5	IV-19	IV-60
SK	38-2	A	E4-E5	IV-19	
SK	39	C-D	B5		
SK	41	A	D2	IV-16	
SK	42	D	C3-C4		
SK	43	D	A3-B3	IV-17	
SK	44	D	C2-C3	IV-18	
SP	45	D	A3-B3	IV-20	
SK	46	D	A3-B4	IV-21	
SK	47	D	C2		
SP	48	D	C3	IV-22	
SP	49	A	C3		
SD	52	D	C3	IV-23	
SK	53	A	C3	IV-24	

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SB	55	D	A3-C3	IV-27	
SK	56	D	B3		
SP	57	D	C3	IV-25	
SK	61	C-D	A5		
SB	62	C-D	B5		
SK	63	A	B5		
SK	64	C-D	B5		
SE	67	C-D	C4	IV-28	
SU	69	A	C3	IV-26	
SP	72	C-D	A5		
SK	73	A	E4		
SU	74	A	E5	IV-19	
SK	75	A	E4-E5	IV-19	
SK	76	A	B5-C5	IV-29	IV-60
SU	78	C-D	D5-E5	IV-30	IV-60
SD	80	C-D	C5-E5	IV-31	
SP	82	C-D	B5		
SK	83	C-D	D5		
SK	84	C-D	C5-D5	IV-32	IV-61
SK	85	C-D	C4-D5		
SK	87	C-D	C5		
SP	89	C-D	B5		
SU	90	C-D	B5-C5	IV-29	
SU	91	C-D	C5	IV-29	IV-61
SK	92	C-D	D5	IV-33	
SB	93	C-D	C5-D5	IV-34	
SK	94	C-D	C5-D5	IV-29	
SB	95	C-D	C5-D5	IV-35	IV-61
SU	96	C~D	C4-D4	IV-36	
SK	97	C-D	C4		
SP	98	C-D	D5		
SP	100	C-D	C5		
SP	101	C-D	C5		
SB	102	C-D	C4-D4	IV-37	
SP	104	C	D4	IV-38	
SP	105	C	D3-D4	IV-38	
SP	106	C	D4	IV-38	
SK	108	D	B3		
SK	110	D	A3		
SK	111	D	A3		
SK	112	D	A3		
SK	113	D	B3		
SK	117	D	F3		
SK	118	D	F2-F3		
SP	120	D	E2-F3		

## IV 看護職員等宿舎3号棟地点の調査

種別	No.	確認面	grid	遺構図版	遺物図版
SK	121	C	E2		
SK	122	C	D2		
SP	123	C	D2		
SK	124-1	C	E2		
SP	124-2	C	E2		
SK	125	C	E2		
SK	126	C	E2		
SK	127	C	E2		
SK	128	C	E3		
SK	129	C	E3		
SK	130	C	E2		
SK	131-1	D	E3		
SP	131-2	D	E3		
SP	132	D	D3		
SK	133	D	E2		
SK	134	D	E2		
SK	135	D	D2		
SK	136	D	D2		
SK	137	D	D3		
SK	138	D	D3		
SP	139	D	D3		
SK	141	D	F3		
SP	142	D	F3		
SK	143	D	F2		
SK	144	D	F2		
SK	145	D	E2		
SP	147	D	E2		
SU	150	C-D	B4	IV-39	
SK	151	D	E2		
SP	153	D	A3		
SP	154	D	A3		
SP	155	D	A3		
SP	156	D	A3		
SP	157	D	A3		
SP	158	D	A3		
SB	162	B	E2-E3	IV-14	
SK	171	D	F3		
SP	174	D	F2		
SP	175	D	F2		

## 第 I 章 調査の経緯と概要

### 第 1 節 調査に至る経緯

医学部附属病院では病院地区の基幹整備を 1984 年以來継続的に行なっており、今回の調査は看護婦宿舎建設に伴うものである。調査地点は東京都遺跡地図文京区 No.47 本郷台遺跡群内に位置し、周知の遺跡として認識されており、建設工事に先立って遺跡の遺存状態に応じて埋蔵文化財の調査を実施する必要がある。東京大学附属病院から依頼を受けた東京大学埋蔵文化財調査室では、これを受け平成 8 (1996) 年 11 月 7 日から翌 9 (1997) 年 1 月 31 日まで対象面積約 525m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。

### 第 2 節 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

発掘調査時は建築工事を行う範囲に平面直角座標系 (日本測地系) 第 IX 系を基準としたグリッドを 5 m 毎に設定したが、平成 23 (2011) 年に本郷構内の遺跡全体に共通グリッドを設定した際、本調査地点についても補正を行なった。それにより本報告では、現在の世界測地系に基づき補正、再配置を実施している (詳細は東京大学構内遺跡調査研究年報 10 参照)。A1 の座標は世界測地系に換算して  $X = -31974.784$ 、 $Y = -6020.375$  であり、グリッド南北軸は  $N-2^{\circ} 35' 21'' -E$  と東へ振っている。グリッドは調査区北西隅を基準点として、西から東へ A ~ F のアルファベット、北から南へ 1 ~ 6 の数字を組み合わせ、各グリッドの名称は 5m 四方楯の北西角を交点とする英数字で表している。

#### (2) 調査の経過

発掘調査は平成 8 (1996) 年 11 月 7 日より調査区西側から調査を開始、調査対象面まで重機により近代以降の盛土層を機械掘削し、それが終了した場所から随時、人力による近代以前の盛土層 (SX01\_1 層) の掘削、遺構確認、調査を実施した。翌 9 (1997) 年、調査区内の江戸時代の最終遺構面の全体写真撮影終了後、調査区北東隅で検出された遺構 (SX15) の東側立ち上がりを確認するために、調査区北東部分を東側へ幅約 250 ~ 300cm、長さ (南北) 約 1150cm の範囲で重機により拡幅掘削を行い、SX15 の東側立ち上りを人力により確認調査したほか、拡幅部分で確認されたその他の遺構に

ついても発掘調査を実施した。なお拡幅部分の調査と平行して、江戸時代以前の遺構の人力による調査を実施し、その後、拡幅した部分を含め同年 1 月 31 日に発掘調査を終了した。

### 第 3 節 確認面と遺構の概要

本地点は隣接する入院棟 A 地点、入院棟 II 期地点、台東区 No.75 茅町二丁目遺跡 (池之端 1 丁目 5-1) で確認されている根津谷の方へ開く埋積谷が調査区南側に伸びていることが想定される地点であり、調査地点全体がその埋積谷に向かって北から南へ緩やかに傾斜している緩斜面に位置している。そのような自然地形の影響を受けてか、本地点の遺構や確認面は南北でその様相を大きく異にする。遺構確認面は地山 (D 面、関東ローム層上) を含め 4 面 (A ~ D 面) 確認されているが、A ~ C 面はいずれも局所的な確認にとどまる (IV-1 ~ 4 図)。

D 面からは主として江戸時代と古墳時代の遺構が確認されるが、江戸時代の遺構には 2 種類のもが含まれている。すなわち地山上で検出される遺構と、近代以降、地山まで削平されていて、確認面が地山上となった遺構である。確認された遺構数は 60 基で、それらはすべて調査区中央の SK2 以北で確認される。遺構の種別をみると溝と植栽、小ピットが中心であり、建築遺構や大形遺構は確認されない。なお検出された遺構からは出土遺物もなく遺構の年代比定も困難であるが、後述する上位の C 面の様相から D 面検出遺構の多くは、富山藩が本地点を貸与される以前の遺構である可能性が高い。

C 面は SD3 東側のみに南北方向の帯状に、D 面直上に厚さ 2cm 程の薄い硬化面として検出される。後述する SX1 の坑底でも C 面に対応すると思われる硬化面を部分的に確認している。C 面で確認された遺構数は 15 基と少ない。遺構の種別をみると SD3 以外は D 面と同じく植栽、小ピットが中心であり、建築遺構や大形遺構は確認されない。唯一遺構主軸が確認でき、遺物が出土している SD3 は D 面の遺構よりもグリッド軸に対する主軸の振りが弱く、最下層からは 17 世紀前半代の様相を呈す遺物が出土している。C 面は富山藩が本地点を加賀藩から貸与された寛永 16 (1639) 年からまもなく構築された生活面である可能性がある。

B 面も C 面と同じく非常に局所的に検出された面であり、SK2 の北東部分での検出にとどまり、確認され

た遺構もSK3の凹地を埋めたと思われるSK11とSX15とSB162の3基のみである。

A面はSK2の北、東側で局所的に確認された面であり、後述するSX1\_1層に覆われていた事が確認されている。確認された遺構数は23遺構と少ない。遺構の種別をみると階段状に切土した段切り状遺構SX1や、採土坑SK2、植栽痕など比較的大形の遺構が確認され、主軸方向角が確認できる遺構をみると、ほぼグリッド軸と同じである。

なおSX1の坑底で検出された遺構、SK2の南側立ち上がり付近で検出された遺構は全てローム面(D面)での検出であった。ただしSX1の坑底ではC面が局所的に検出されており、本来はSX1の坑底で検出された遺構はC面またはD面で検出される遺構であったと推測される。またSX1の坑底で検出されたSD80は、SK2南側立ち上がり付近で検出された遺構と重複し、そのいずれよりも新であることから、SX1の坑底で検出される遺構、SK2の南側立ち上がり付近で検出された遺構をいずれもC-D面の遺構として27基掲載した。

## 第II章 江戸時代の遺構と遺物

### 第1節 遺構

#### SX1 (IV-5図)

A～B5、C～E・4～5グリッドに位置する関東ローム層（地山）を段切りした東西方向に伸びる大形遺構である。坑底ではC面に比定される面が確認されており、SX1がC面より上位面で確認される遺構として確認面をA～B面とした。東側は近代以降に、北側はSK2、西側はSK38などに攪乱され全体像は不明であるが、少なくとも3段の切り土が確認されるが、切り土した幅、各段の高さとも一定しない。東西方向に伸びる雛段状の部分に沿うように2箇所石組が検出された（石組Ⅰ、Ⅱ）。石組Ⅰは方形の切石の上に間知石を僅かにずらして重ねた状態で、石組Ⅱは方形の切石と丸石が数個東西方向に並んで1段分検出された。

SX1の出土遺物の大半は、本遺構と本遺構北側に位置するSX2最上層の凹地を埋めるように堆積していた灰色土層から出土したものであり、それらは東大編年Ⅷd期に比定され、これが本遺構の下限として押さえられる。またSX1石組Ⅰにパックされる形で検出されたSU78からは少量ではあるが17世紀後半代から18世紀の早い段階に比定される遺物が出土しており、SU78の出土遺物の年代が本遺構の上限に近いと推定される。

安政5（1858）年以降を描いたとされる絵図面には、本調査地点と比定される位置に青緑色で示された東西方向に伸びる土手状のものが描かれている。絵図面の土手状の部分はアーチ形に表現されており、SX1も部分的ではあるが切り土部分が同じくアーチ形に検出されている。また本遺構をパックしていた灰色土層からは1860年代を中心とする遺物が出土していることから、この絵図面に青緑色で描かれた部分がSX1の最終的な状況を表したものである可能性は高い。

#### SK2 (IV-6図)

C～E・3～5グリッドに位置する大形土坑である。南側に隣接するSX1より新である。北側、および中央部分は大きく攪乱されていた。残存規模は東西720cm、南北716cm、確認面からの深さは374～436cmを測り、最も深い部分ではいわゆる本郷礫層まで掘削した状況が確認された。壁面は坑底からほぼ垂直に、確認面から深さ200cmのあたりでハの字形に開き気味に立ち上がる。坑底は中央から北側が全体より50cm下まで粗く掘削さ

れた状況が確認され、その部分は前述した本郷礫層が坑底で検出される状況であったことから、この土坑の構築時の掘削目的がローム土あるいは礫層の採取であった可能性もある。覆土の堆積状況をみると複数回の掘削と埋め戻しが繰り返し行われた状況が看取され、掘り方や断面形状から掘り方自体を変えるような掘削が最低2回は行われた事が判る。すなわち当初はローム土や礫の採土を目的とした採土坑として掘削されたが、その無作為に掘削された採土坑を平面方形、断面箱形になるように成形しているのが再掘削1回目、その後、ローム土や鉋屑などを多く含む覆土（殿舎の解体あるいは建築に伴う廃土か）で埋め、再び掘り方の四方を拡大掘削しているのが再掘削2回目である。その後も掘削と埋め戻しが繰り返され、最終的にはSX1と同時に完全に埋め戻され、本地点が平坦にされている様子が確認される。

SK2は本地点で最も遺物が多く出土した遺構であり、覆土の堆積状況から3つに分けて層位上げ（1～6層を1層、1層中のカワラケが集中して出土した部分をかわらけ溜まり、8層以下を下層として層位上げ）を実施した。1層からの出土遺物が最も多く、東大編年Ⅷc～Ⅷd期に比定される陶磁器類が出土している。

#### SD3 (IV-7図)

C～D・2～3グリッド内に南北にのびる溝状遺構である。主軸方向角はN-6°-Eでグリッド南北軸より僅かに東にふる。北側は調査区外、南側は攪乱され、残存規模は長さ（南北）約660cm、幅（東西）約4352cm、確認面からの深さは約250cmを測る。坑底、壁面は非常に平坦に整形され、溝の断面形は坑底が平らないわゆる箱葉研形を呈す。ただし立ち上がり付近は真っ直ぐに立ち上がらず、括れを有す。東西それぞれの立ち上がり傾きが変化する辺りで、覆土の堆積状況も変化している状況がうかがえる。すなわち坑底から西側立ち上がりが変化する辺りまではほぼ水平に堆積し（14層以下）、それより上位は東西両方向から埋められた状況（4～13層）が確認される。さらにその上位、東側立ち上がりが変化するあたりでは大きなレンズ状の堆積が確認（1～3層）できる。覆土自体はどの層もローム粒やローム粗粒を比較的多く含むものであり、焼土や炭化物、遺物などの混入物もごく少なく、最下層の覆土にはいわゆるラミナが確認されたが、他層では確認されなかった。なおA層、B層としているものは本地点の生活面A面、B面の構

築層である。遺物採り上げに際しても層位の堆積状況が変化する部分で層位上げを実施、結果、遺物量は少ないが、3層より下位からは初期伊万里や手づくねのカワラケを含む17世紀前半代の様相を呈す陶磁器類が出土し、SK3をパックするB層からは丹波系播鉢や瀬戸・美濃系播鉢など17世紀後葉から18世紀前葉頃の遺物が出土している。

以上のことからSD3は、富山藩が本地点を加賀藩から貸与された寛永16(1639)年からほどなく構築され、B面構築時の17世紀後葉から18世紀前葉頃に完全に埋められたと判断される。また覆土中には流水の痕跡が認められないことから、水路として利用された溝ではなく、地境を意識した空堀のようなものの可能性もある。

#### SU4 (IV-8 図)

B3グリッドに位置する地下室である。北側は調査区外、東側は攪乱されるが、残存する開口部は方形を呈し、規模は東西約230cm、南北約76cm、確認面からの深さは約144cmを測る。東側には1段分のテラスを有すが、この部分の覆土堆積状況を見ると本遺構と重複する別遺構であった可能性もある。坑底、壁面には工具痕による凹凸が残存する。出土遺物は少ないが、その様相から18世紀代に廃絶した遺構と推測される。

#### SD5 (IV-10 図)

A～B3グリッドに位置する東西方向に伸びる溝である。重複するSX7より旧、SB55より新である。西側は調査区外、東側はA面SK2で攪乱され、残存規模は長さ(東西)約846cm、幅(南北)約50cm、確認面からの深さは14～30cmを測り、東側ほど深い。主軸方向角はE-9°-Sで東西グリッド軸より南へふる。bライン付近で確認された南北に並んだ丸石はSD5の凹みに落ち込んだ状態で検出され、本遺構に伴うものかは判断できなかった。

出土遺物は瀬戸・美濃系長石釉皿やかわらけ破片などが少量出土している。

#### SX6・SK18 (IV-9 図)

C～D2グリッドに位置する。北側は調査区外、両遺構は重複しており、SK18が新である。また両遺構南側にはSK41、SK47が位置しているが、SK18はSK41より旧であり、SX6はSK47より旧であることを確認している。SX6の残存規模は東西約390cm、南北約208cm、確認面からの深さは約70cmを測り、平面形は歪な半円形を呈す。SK18の残存規模は東西約96cm、南北約

248cm、確認面からの深さは約78cmを測り、平面形は細長い溝状を呈す。両遺構ともに壁、坑底は比較的平坦に整形されている。覆土堆積状況を見るとSX6は掘削と埋め戻しが複数回行われた可能性もある。

出土遺物は両遺構ともに少ないが、SX6からは瀬戸・美濃系陶器の長石釉施釉皿や輪積の塩壺の破片などの17世紀代に比定される遺物が出土している。

#### SX7 (IV-11 図)

B3グリッドに位置する。東側は大きく攪乱され、残存規模は東西約130cm、南北約204cm、確認面からの深さは約24cmを測る。覆土にはロームブロックを多く含み、坑底の凹凸が著しい。覆土や掘り方などからは植栽痕の可能性が高い。

出土遺物は丹波系播鉢や土師器片が少量している。

#### SD10 (IV-12 図)

B～C3グリッドに位置する溝状遺構であり、北側へ弧を描くように東西に伸びる。SP16、SK44、SP48と重複しており、いずれより旧である。残存規模は東西238cm、幅42～65cm、確認面からの深さは24cmを測り、断面形はU字状を呈す。坑底、壁は凹凸が目立つ。本遺構南側にも同時に埋め土された事が確認されているSD52という溝状遺構があるが、掘り方形状や断面形など異なる点が多い。ただ両遺構はほぼ直交し、元々は1遺構であったか、あるいは両遺構で1つの機能を果たしていた可能性もある。

#### SK11 (IV-13 図)

C～D・2～3グリッドに位置する遺構である。トレンチにより中央部を大きく欠くが、規模は東西250cm、南北478cmを測り、平面形は長方形を呈す。主軸方向角はN-8°-Eでグリッド南北軸より東にふる。確認面からの深さは北側が約170cm、南側が約54cmで、南北方向の断面形状が三角形を呈す、特殊な形状で確認されている。掘り方壁面は断面と立ち上がり付近のみの確認にとどまるが、比較的丁寧に整形され、ローム主体の覆土ではほぼ一度に埋め戻されている。

出土遺物は細片のみであるが、17世紀代に比定される瀬戸・美濃系陶器皿やかわらけなどが僅かに出土している。

#### SX15・SB162 (IV-14 図)

E2グリッドに位置する遺構である。両遺構は重複しており、SX15が新である。ともに北側は攪乱されており、



SX15の残存規模は東西約376cm、南北約340cm、確認面からの深さは約56cmを測る。断面形は逆台形を呈す。確認できた北東隅部分がすでに西側へ曲がり始めており、本来の平面形は方形を呈す遺構か。残存部分の主軸方向角はN-15°-Eで南北グリッド軸より東にふる。断面観察から本遺構の構築状況が明らかとなった。すなわち掘方掘削後、坑底、壁面を平らに整形、掘方全体に径1cm大の玉砂利をやや多く含む暗褐色土(9層)を貼り、その上にローム土と白色シルト質粘土を混在させた明黄褐色土(8層)を貼り、坑底から立ち上がり壁面中程まで漆喰を敷き(7層)、さらにその上に明灰白色粘土(6層)を貼った後、坑底にこぶし大~5cm大の礫を敷き詰めて構築されたものであることが確認された。なお西壁には8層に伴う玉砂利が集中的に検出されたり、6層の粘土を貼る前に南から北方向に斜めに板目状の傷のような痕跡が付けられている状況が確認された。立ち上がりは西南の3方向で確認されているが、前述したような立ち上がりの状況が確認されたのは西壁のみである。6層の粘土は坑底より壁面の方がやや厚く貼られる。SX15は最終的には人為的に埋め戻されており(1~5層)、その覆土中には水が溜まったり、流れたりしたような痕跡は認められなかった。

出土遺物は埋め戻し土(1~5層)とそれ以下の構築土(6~9層)で層位上げを行ったが、ともに遺物は少なく、細片が多いが、層位による時期差はなく、初期伊万里碗や、かわらけの破片などが出土しており、17世紀中から後半代の遺構に比定される。

SB162は南北方向に柱穴が2基並んで検出されている。前述したように北は攪乱され、東は調査区外、西はSX15に切られ、南側には伸びない。北側の柱穴のみが東側にテラス状の貼り出しを有し、この貼り出し部分と南側の柱穴の間尺を測ると180cmを測る(cライン)。確認面からの深さも貼り出し部分と南側柱穴の深さはどちらも約30cmを測る。北側柱穴の覆土堆積状況をみると柱穴2基が東西に重複している状況にもみえることから、北側の柱穴は以前あった深い柱穴をやや東側に浅く作り替えがなされた可能性もある。

SB162からは出土遺物は確認されなかった。

#### SK22 (IV-15 図)

C3グリッドに位置する遺構である。西、南側は攪乱され、残存規模は東西116cm、南北90cm、確認面からの深さは32~60cmを測る。平面形は歪な方形を呈す。覆土の堆積状況や掘り方から本来は2遺構であった可能性がある。

#### SK38-1・SK38-2・SU74・SK75 (IV-19 図)

E4~5グリッドに位置する調査区南東隅で検出されている遺構群で、東、南側は調査区外まで広がる。3遺構は重複しており、新旧はSK38-1が最も新で、次いでSK38-2、SU74とSK75の順に旧である。

SK38-1は残存規模東西約164cm以上、南北約520cm、確認面からの深さは約88cmを測る。壁の凹凸は著しく、坑底からSK38-2、SU74、SK75が検出されている。覆土の状況などからSK38-2という円形土坑が埋没後にSK38-1やSK75という植栽が行われた遺構と判断される。

SK38-2は残存規模東西約164cm以上、南北約260cm、確認面からの深さは約20~60cmを測り、平面形は円形と推測される。壁面には工具痕が認められる。出土遺物はSK38一括とSK38-2から出土しており、ともに瀬戸・美濃系の磁器碗、陽刻磁器皿、寿文皿などの19世紀前半代の遺物が出土しており、一部に肥前系磁器の高台断面が三角形を呈す鉢や、京都・信楽系陶器平碗などの17世紀後半代の遺物も含む。

SU74とSK75は重複し、SU74が新である。SU74は安全上の問題から確認面から約96cmまでの掘削にとどめた。残存規模は東西100cm、南北88cm、平面が隅丸方形を呈す地下室か。出土遺物は少ないが、肥前系磁器半球形碗や瀬戸・美濃系陶器五合徳利などが出土しており、18世紀後半代に廃絶した可能性がある。

SK75は残存する平面形は不整形、規模は東西116cm、南北210cm、確認面からの深さは20cmを測る。出土遺物は瀬戸・美濃系陶器の浸け掛けされた2合半徳利や1升徳利破片が出土している。

#### SK41 (IV-16 図)

D2グリッドに位置する遺構である。SK18と重複しており、SK18より新である。残存する平面形は北西部が欠けた円形を呈し、規模は直径198cm、確認面からの深さは82cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底から1段テラスを有し立ち上がる。覆土はローム粒や粗粒を多く含むものである。

出土遺物は認められなかった。

#### SK43 (IV-17 図)

B3グリッドに位置する遺構である。SD5と重複しており、SD5より新である。平面形は南側が少し飛び出す歪な方形を呈し、残存規模は東西約80cm、南北約70cm、確認面からの深さは60cmを測る。断面形は箱形を呈し、壁、坑底は僅かに凹凸を有す。

遺物は出土しなかった。

#### SK44 (IV-18 図)

C2～3グリッドに位置する遺構である。SK47、SP48と重複しており、いずれよりも新である。平面形は南北が僅かに長い円形を呈し、東西約194cm、南北約214cm、確認面からの深さは60cmを測る。坑底は比較的平滑であるが、南側にやや浅いピットを有す。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、壁面の凹凸は顕著である。覆土の堆積状況を見ると、ローム粒や粗粒を多く含む層による埋戻しと、掘削を数回繰り返している様子が観察されるが、出土遺物はなく、遺構の正確は不明である。

#### SP45 (IV-20 図)

A～B3グリッドに位置する。残存する平面形は南西隅が一部突出した方形を呈し、規模は長軸(南北)86～114cm、短軸(東西)86cm、確認面からの深さは6cmを測る。覆土はローム主体で、坑底には上面が平坦に整形された丸石2個が東西方向に並べられ、その周囲に歪な方形の割石がまばらに確認されたが、それらは荷重のためか掘り方を超えて地面に潜り込んでいる状況であった。SP45の南側に位置するSD5の北側立ち上がりでも丸石が3個並んで検出されており、これらは特に掘り方を持たずSD5に落ち込むような状態で検出されたものである。SP45からの距離は180cmであり、仕様されてる石の形状も似ていることから、SP45と並ぶ柱穴が存在した可能性もある。

出土遺物は認められなかった。

#### SK46 (IV-21 図)

A～B・3～4グリッドに位置する遺構である。SB55と重複しており、SB55より新である。残存する平面形は不整形を呈し、規模は東西約194cm、南北約108cm以上、確認面からの深さは約42cmを測る。壁、坑底は複数の根穴が確認され、坑底中央にはドーナツ状の凹凸を有することから、植栽痕と判断される。

出土遺物には細片であるが手づくねのかわらけと、土師器が確認された。

#### SP48 (IV-22 図)

C3グリッドに位置する。SK44と重複し、SK44より旧である。残存する平面形は楕円形を呈し、規模は長軸(南北)80m、短軸(東西)58m、確認面からの深さは64mを測り、断面形はU字形を呈す。

出土遺物は認められなかった。

#### SD52 (IV-23 図)

C3グリッドに位置する。残存規模は南北約272cm、東西約48cm、深さ28cmを測る。主軸方向角はN-15°-Eでグリッド南北軸より東にふれる。本遺構北側に位置する東西方向にのびるSD10とは主軸がほぼ直交しており、両遺構で1つの機能を果たしていた可能性もある。

出土遺物は認められなかった。

#### SK53 (IV-24 図)

C3グリッドに位置する遺構である。SK22とSD52と重複しており、いずれよりも旧である。残存する平面形は方形を呈し、規模は東西68cm、南北約72cm、確認面からの深さは約29cmを測る。覆土にローム粒や粗粒をやや多く含み、壁、坑底は凹凸を有することから植栽痕の可能性もある。

出土遺物は認められなかった。

#### SB55 (IV-27 図)

A～C3グリッド位置する布掘り基礎遺構と思われる。西側は調査区外、東はA面SK2に攪乱される。またSD5、SK56、SK46と重複し、いずれよりも旧である。残存規模は東西約808cm、南北約50～70cm、確認面からの深さはピットがない部分では約30cm、ピット部分では約70cmを測る。主軸方向角はE-3°-Sでグリッド東西軸よりわずかに南へふる。

掘り方形状は東西で大きく異なる。すなわち東側は溝幅が一定せず、ピット状部分の掘り方もごく浅く、ピット間の距離も180cm前後を測る。比して西側は溝状部分、ピット部分の掘り方断面形がU字形を呈し、幅もほぼ一定、ピット間の距離が90cm前後を測る。1つの遺構内で掘り方の様相が異なるのは、本遺構下位に江戸時代以前の住居址が確認されており、その覆土の状況に対応して掘削方法を変えたためか、あるいは東西で構築時期に差があるが、埋まった状況が同時であったとも考えられる。

出土遺物は認められなかった。

#### SP57 (IV-25 図)

C3グリッドに位置する。平面形は長軸(東西)約140cm、短軸(南北)約64cmの長楕円形プランの中に一辺約46cmの方形のプランを有す。確認面からの深さは最も深い方形プランの部分で約96cmを測る。覆土堆積状況から6層は掘り方覆土、1～2層は柱の抜き取り穴の凹みが埋められた覆土、3～5層はしまりがやや弱

く、残存した柱が腐食した痕跡と判断される。

出土遺物は認められなかった。

#### SE67 (IV - 28 図)

C4 グリッドに位置する井戸である。遺構形態は2重構造を呈す。すなわち東西約230cm、南北約206cmの長方形の掘り方を構築し、その中央に直径約106cmの円形の井戸側を設置した構造が確認された。調査は安全上の理由から確認面下約630cmにて中止したが、井戸側内側の覆土4層付近から幅約6cm前後のタガの痕跡が約20～26cm前後間隔で数段確認され、さらにその下、TP - 6.7m付近からは木製の井戸側が残存している状況が確認された。なおタガの痕跡が確認された付近からは、周囲の地山が本郷砂礫層に変化している。

長方形の掘方覆土はローム粒やブロックを主体とする覆土が充填されていることが確認された。井戸側内の埋め戻し土の断面観察では水成層(4層)が確認されており、廃絶後、完全に埋め戻される間にしばらく開口期間があったことがうかがわれる。

遺物は僅かであるが、肥前系磁器の高台内蛇ノ目釉剥鉢、肥前系陶器刷毛目鉢、瀬戸・美濃系搦鉢など18世紀前半に比定されるものが出土している。

#### SU69 (IV - 26 図)

C3 グリッドに位置するSK2の北西隅坑底付近から検出された遺構である。坑底部分と西、南壁わずかに残る程度で開口部形状は不明であるが、西、南壁面がやや内傾しながら坑底からほぼ垂直に立ち上がる状況から地下室と判断した。覆土中には天井崩落土と思われる大きなロームブロックを含む層(2層)も確認されている。残存する坑底は東西約108cm以上、南北約60cm以上、深さ252cmを測る。壁面、坑底ともに平坦に整形されるが、坑底はすでにいわゆる本郷砂層まで到達している状況であった。

出土遺物は認められなかった。

#### SK76・SU90・SU91・SK94 (IV - 29 図)

SK76、SU90はB5～C5グリッド、SU91、SK94はC5～D5グリッドに位置する。いずれも南側は調査区外となっている。SK76はA面、他はすべてC-D面を確認面とする遺構である。

SK76は中央を攪乱されるが、残存規模は長軸(東西)約312cm、短軸(短軸)276cm以上、確認面からの深さ約70cmを測り、平面形は不整形円形を呈す。断面形はやや歪な箱形を呈し、坑底、壁面は比較的平坦に整形さ

れている。出土遺物は少ないが、瀬戸・美濃系磁器碗や三彩土瓶などがあり、19世紀代に廃絶したと思われる。

SK94はSX01の坑底より検出された遺構である。残存規模は東西約660cm、南北178cm以上、確認面からの深さは約44～62cmを測る。平面形は不整形を呈し、坑底、壁面ともにやや凹凸が目立つ。植栽痕あるいは土取穴か。

出土遺物は認められなかった。

SU90、SU91は上部が削平されているが、形態や規模などから地下室と推測され、主軸方向角は異なり、SU90は主軸方向角はE-2°-Nでグリッド東西軸よりわずかに北へふれ、SU91はほぼ同軸である。

SU90は前述したSK76の坑底から検出され、残存規模は東西約180cm、南北108cm以上、深さ74cmを測る。断面形は箱形を呈し、壁、坑底とも丁寧に整形されている。残存する覆土の様子から数回にわたる埋め戻しと掘削が行われたと思われる。

出土遺物は検出されなかった。

SU91はSK94の坑底から検出され、掘り方を二重に有す。外側掘り方は東西210cm、南北90cm以上、内側掘り方は外側掘り方の確認面から約90cm下位で検出され、東西約190cm、南北約70cmの方形掘り方が確認されている。断面形も上位が緩やかな袋形、坑底付近は箱形を呈す。坑底全体にローム粒を多く含むしまりの強い21層が貼られている。また直径30cm強の円形の掘り込みが坑底北東隅方向に伸びているのが確認されているが、性格は不明である。

出土遺物は瀬戸・美濃系陶器灰釉薄掛け碗破片と遺物図版で示した肥前系京焼風陶器皿が出土しているのみである。18世紀代の早い段階に廃絶した遺構か。

#### SU78 (IV - 30 図)

D～E5グリッドに位置し、A～B面に帰属するSX1の坑底で検出された地下室である。主軸方向角はE-10°-Sでグリッド東西軸より南へふる。開口部形状はやや歪な長方形を呈し、残存規模は東西約142cm、南北約110cm、確認面から坑底までの深さは約174cmを測る。室部は西から北方向に拡がり、東西約210cm、南北約190cmを測り、坑底から約50cm上位でアーチ形の天井部を有す状況が確認できた。坑底、壁面は比較的平滑に調整されている。覆土は入口から室部へ流れ込む状況が確認され、中には焼土粒を多く含む層も確認され、出土遺物の一部は被熱している状況も確認された。

出土遺物はあまり多くないが、肥前系磁器の南川原窯指標の皿や、肥前系陶器の渦刷毛丸形碗、京焼風陶

器碗など東大編年Ⅳ期に比定されるものが出土している。なお本遺構出土遺物が看護職員等宿舍1号棟地点のSK168と遺構間接合している。SK168は元禄16(1703)年の火災の一括廃棄遺構とされており、SU78出土遺物の様相を考慮すると、SU78で確認された焼土層も元禄16年の火災に伴うものである可能性が高い。

#### SD80 (Ⅳ-31 図)

C～E5グリッドに位置する東西方向に伸びる溝状遺構であり、主軸方向角はほぼグリッド東西軸と同軸である。A～B面に帰属するSX1の坑底で検出され、残存規模は長さ(東西)874cm、幅(南北)62～80cm、確認面からの深さは西側立ち上がり付近で最大138cm、浅い部分では34cmを測り、断面形はU字形を呈す。坑底、壁面は比較的平坦に整形されている。

出土遺物は瓦片のみである。

#### SK84 (Ⅳ-32 図)

C～D5グリッドに位置する遺構である。A～B面に帰属するSX1の坑底で検出され、平面形は楕円形を呈し、残存規模は長軸(東西)100cm、短軸(南北)88cm、確認面からの深さは26cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。

遺物は少ないが、瀬戸・美濃系陶器の五合徳利や二合半徳利破片、こね鉢など18世紀後半代に比定される遺物が出土している。

#### SK92 (Ⅳ-33 図)

D5グリッドに位置する遺構である。主軸方向角はE-10°-Sでグリッド東西軸より南へふる。A～B面に帰属するSX1の坑底で、2基の方形土坑が重複しているような状況で検出されたが、覆土の堆積状況から同時に埋まったことが確認された。残存規模は東西約222cm、南北約86～100cm、確認面からの深さは6～16cmを測る。壁、坑底は凹凸を有す。

SK92の覆土は焼土粒を多く含んでいたが、被熱した遺物は確認されず、瀬戸・美濃系陶器の五合徳利破片や、肥前系磁器の仏飯器破片が出土したのみである。

#### SB93 (Ⅳ-34 図)

C～D5グリッドに位置する。A～B面に帰属するSX1の坑底で、礎石を伴う柱穴が東西方向に2基確認される。主軸方向角はE-9°-Nでグリッド東西軸より北へふる。ともにやや歪な円形の掘方に方形の切石が据え

られている。2基の柱穴の間尺は約90cmを測る。

出土遺物は認められなかった。

#### SB95 (Ⅳ-35 図)

C～D5グリッドに位置する布掘り基礎である。A面で検出されたSK2の南側立ち上がり付近で検出され、SD80、SK85と重複し、SD80より旧、SK85より新である。主軸方向角はE-2°-Nでグリッド東西軸より僅かに北へふる。残存する平面形は長方形を呈し、東西両端の坑底に1基ずつ方形の柱穴が検出される。規模は長軸(東西)約232cm、短軸(南北)約84cm、確認面からの深さは中央部分が約76cm、両端柱穴部分が約100cmを測る。断面形は箱形を呈し、壁面、坑底は平坦に整形される。坑底柱穴は東西で掘り方規模が異なる事から、西側の大きい方が本柱で、東側が支柱の可能性もある。

出土遺物は遺物図版で示した景德鎮窯系磁器の水注と軒椽瓦破片のみである。18世紀代に比定される遺構か。

#### SU96 (Ⅳ-36 図)

C～D4グリッドに位置し、A面に帰属するSK2の南側坑底付近で検出された遺構である。SB102と重複し、SU96が旧である。SK2によって大きく削平されており、残存規模は東西約280cm、南北約64cm、確認面からの深さは約84cmを測る。平面形は方形、断面形は箱形を呈し、壁面、坑底ともに比較的平坦に整形されている。規模や形状から地下室と判断されるが、南側坑底の立ち上がり際に東西方向に3基、それら3基の柱穴より少し西側にずらし、深さもやや浅い位置に同じく3基の柱穴が確認されている。作り替えが行われた痕跡か。

出土遺物は認められなかった。

#### SB102 (Ⅳ-37 図)

C～D4グリッドに位置する、A面のSK2の南側坑底付近で検出された遺構である。SK97、SU96と重複し、新旧はSK97より旧、SU96より新である。SK2で大きく削平され、残存する平面形は長方形を呈す。長軸(東西)約220cm、短軸(南北)約60cm、確認面からの深さは約50cmを測る。主軸方向角はE-7°-Sでグリッド東西軸より南へふる。東側坑底には一辺約40cm四方、確認面からの深さ約68cmを測る、方形の柱穴が1基確認された。坑底、壁面は比較的丁寧に整形され、平坦にされている。掘方などを考慮すると西側に隣接するSU96と類似した柱穴を伴う地下室か、柱穴を伴う土坑であった可能性もある。

出土遺物は認められなかった。

SP104、SP105、SP106 (IV - 38 図)

D3～4グリッドに南北方向に伸びる柱穴列で、遺構の主軸方向角はグリッド軸にほぼ等しい。SP104とSP106は重複し、SP104が新である。残存規模はSP104、SP106は一辺約34cm、確認面からの深さはSP104が約50cm、SP106は約32cmを測る。平面形はともに方形を呈す。SP106が他2基の柱穴列筋より少し西側に位置することを考えると、柱筋を東へずらしSP106をSP104に作り替えた可能性もある。SP105は東西28cm、南北は約42cm、確認面からの深さ約18cmを測る。平面形は南北に長い長方形を呈す。

出土遺物は認められなかった。

SU150 (IV - 39 図)

B4グリッドに位置する地下室である。攪乱の下で検出されたため本来の開口部の形状、規模は不明であるが、残存する平面形は方形を呈し、規模は一辺約86cm、確認面から坑底までの深さは196cmを測り、坑底は一辺が約128cm四方の隅丸方形を呈す。また断面形はフラスコ形を呈す。坑底中央には長軸(南北)約60cm、短軸(東西)約38cm、坑底からの深さ約50cmの土坑を有す。

出土遺物には瀬戸・美濃系磁器端反碗や、いわゆる馬ノ目皿、行平鍋などの19世紀前半段階のものと、肥前系磁器半球形碗、肥前系のいわゆる京焼風陶器碗、瀬戸・美濃系陶器播鉢などの18世紀前半代のものと、大きく2段階の様相を呈すものがほぼ同率含まれる。これだけの深さの遺構が開口したままの状態とは考えにくく、18世紀前半代に廃絶された遺構か。



2

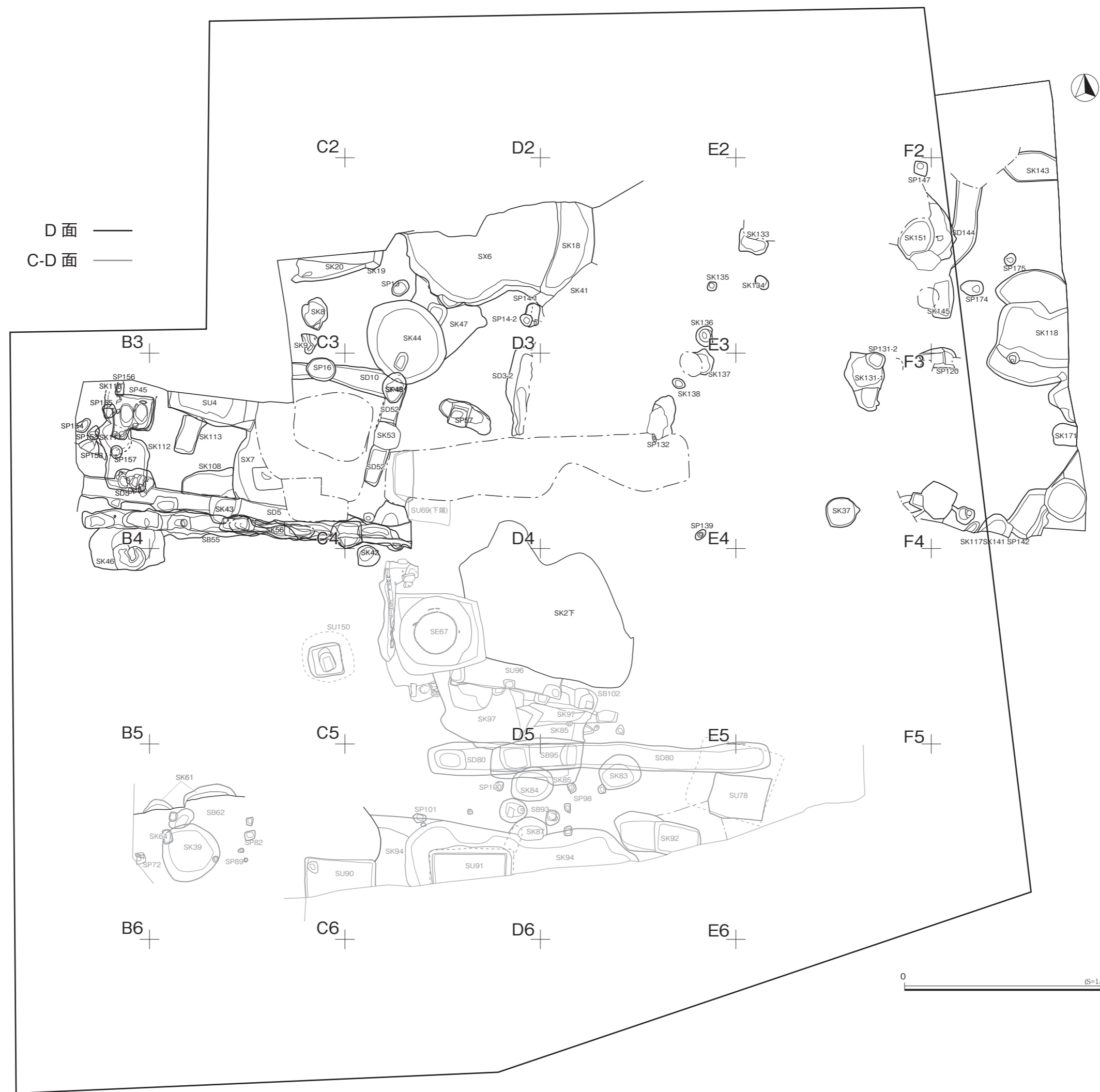
D面 ———  
C-D面 ———

3

4

5

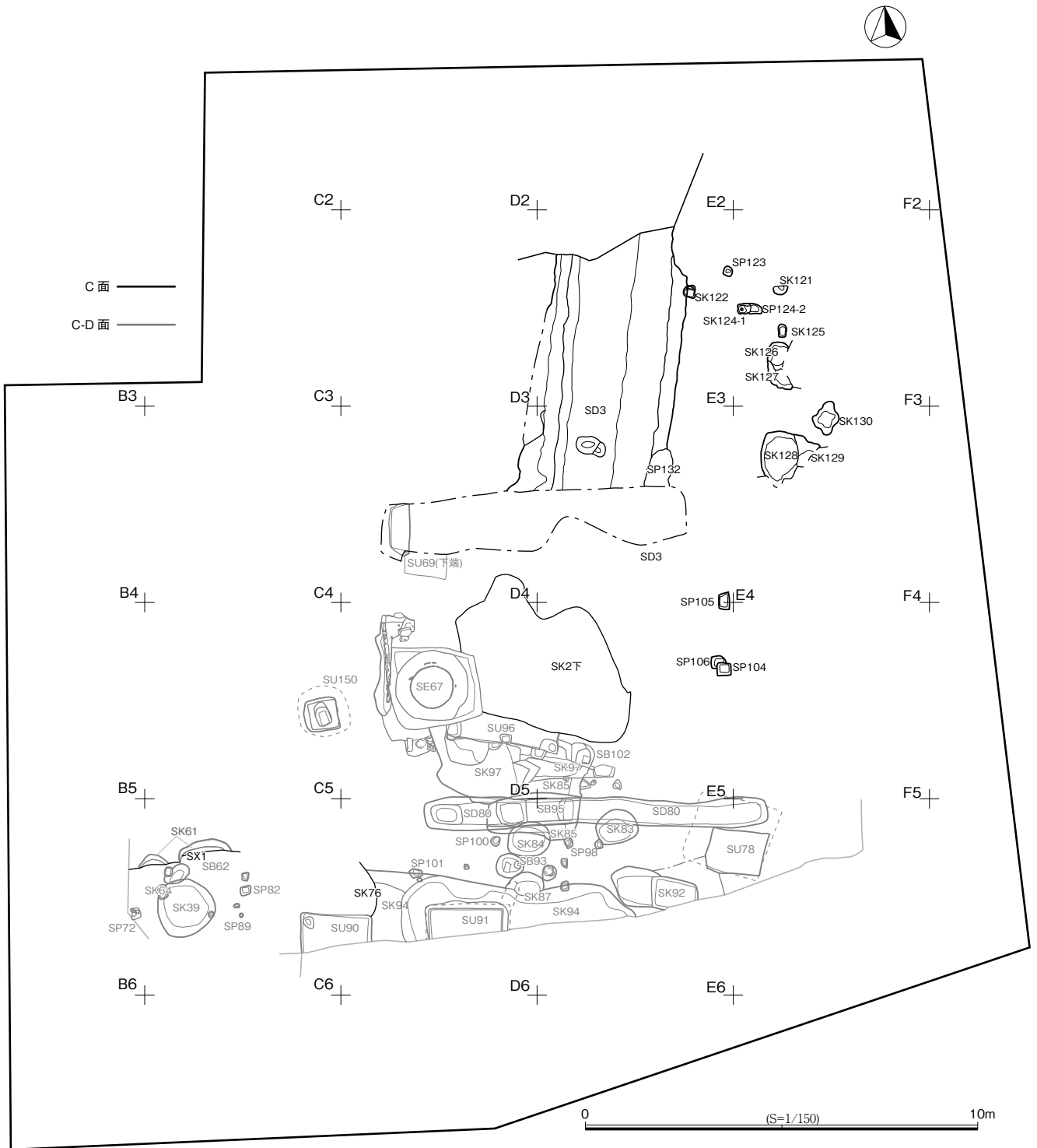
6



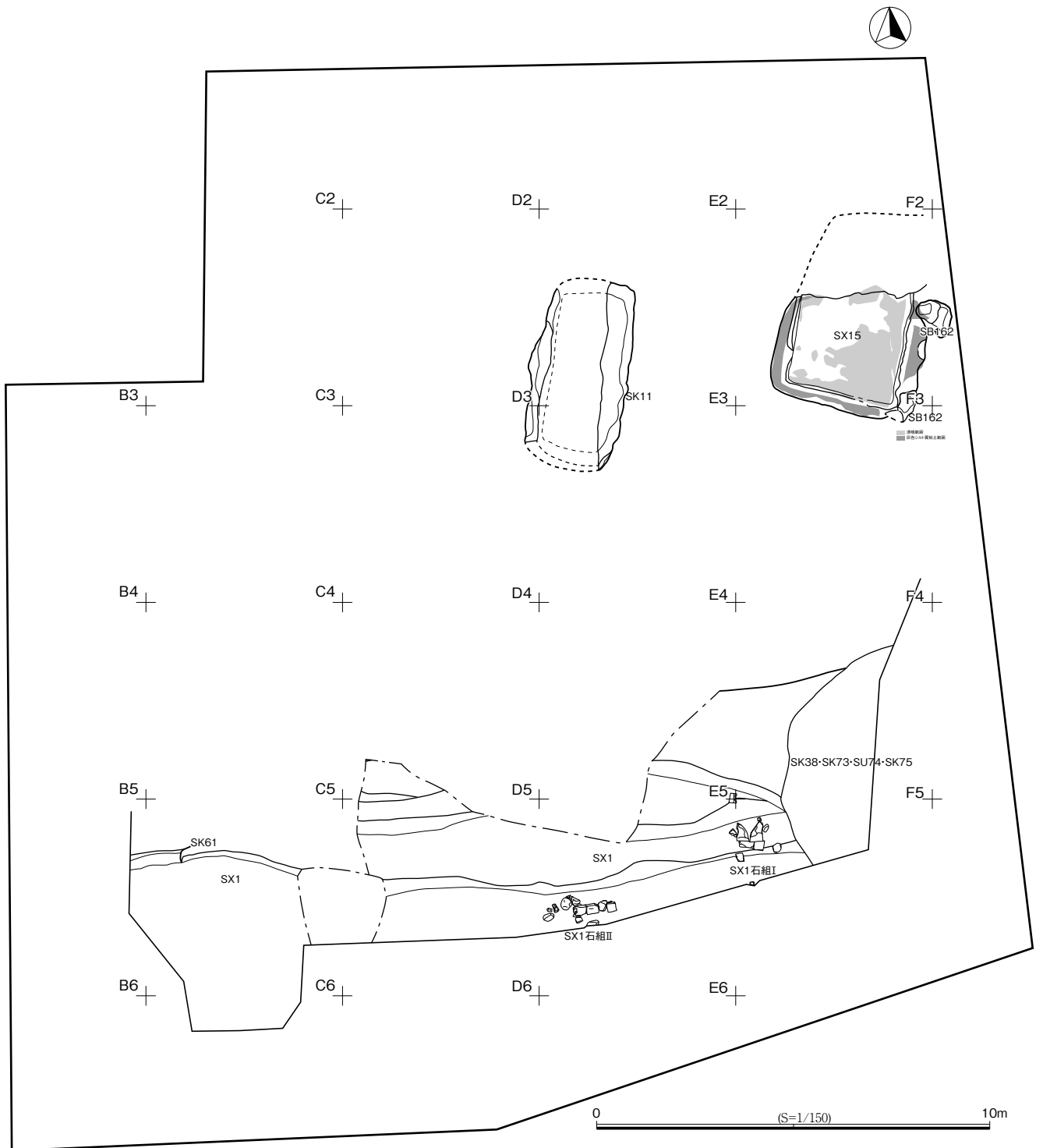
IV-1 图 D面·C-D面



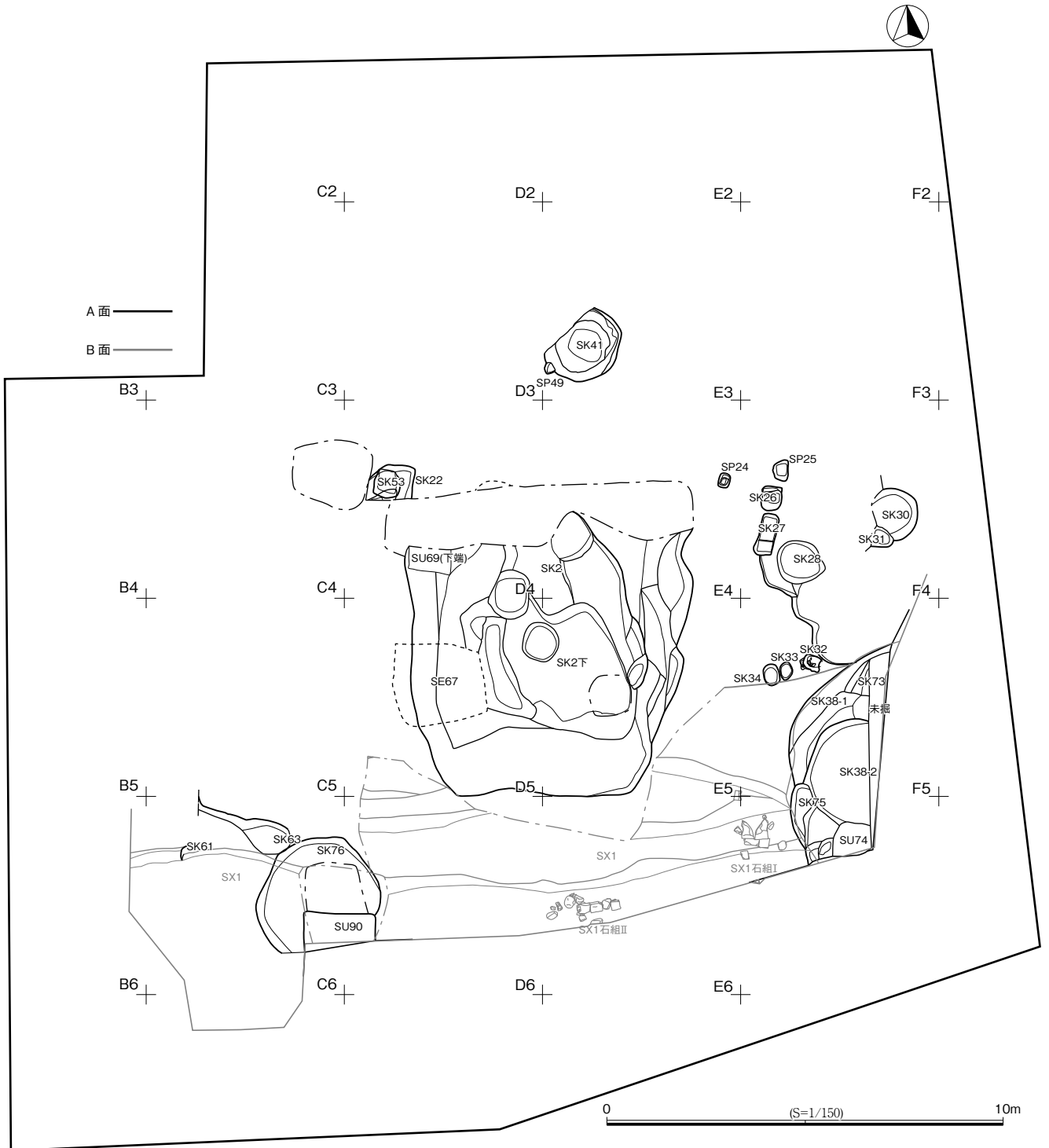




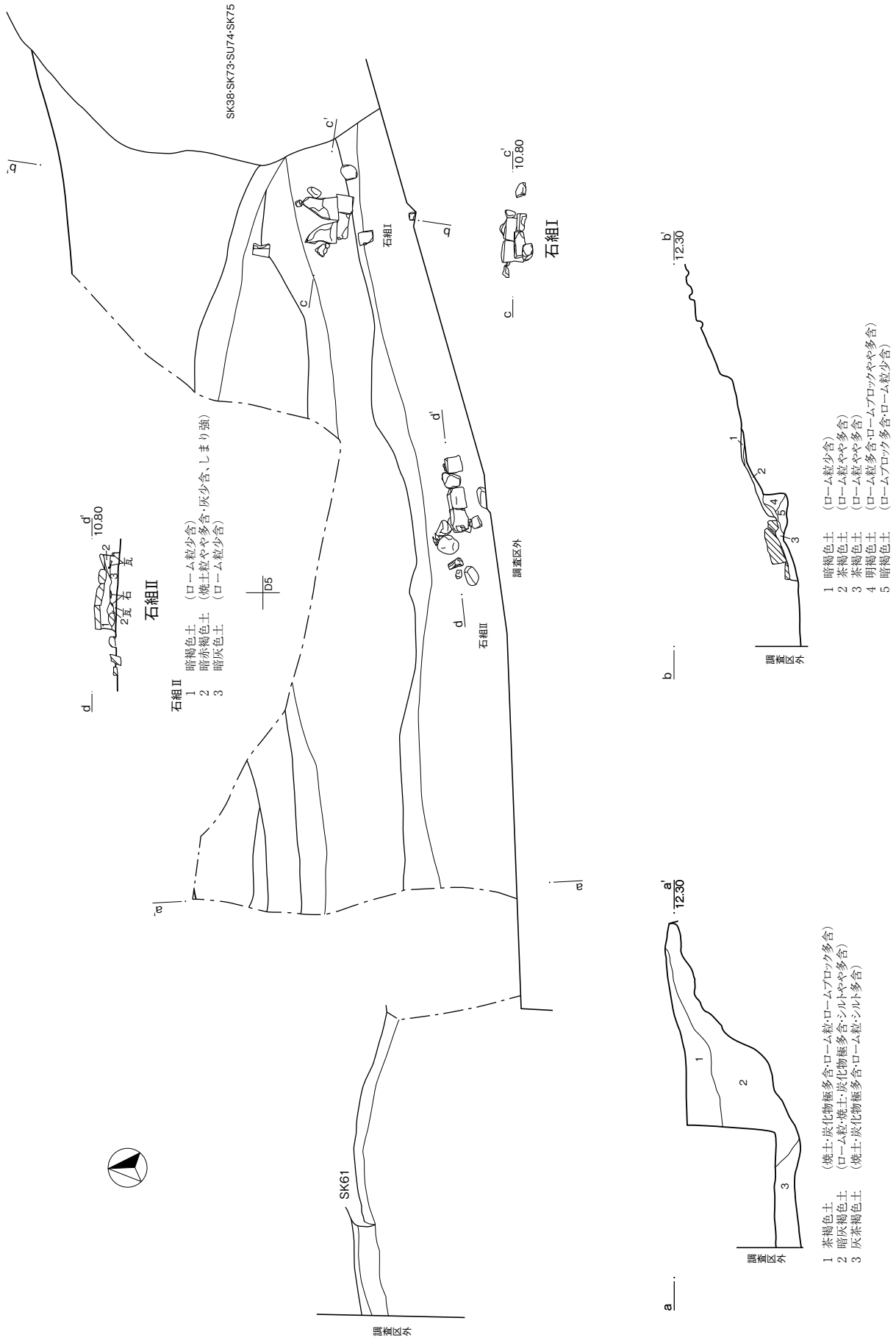
IV-2 図 C面・C-D面



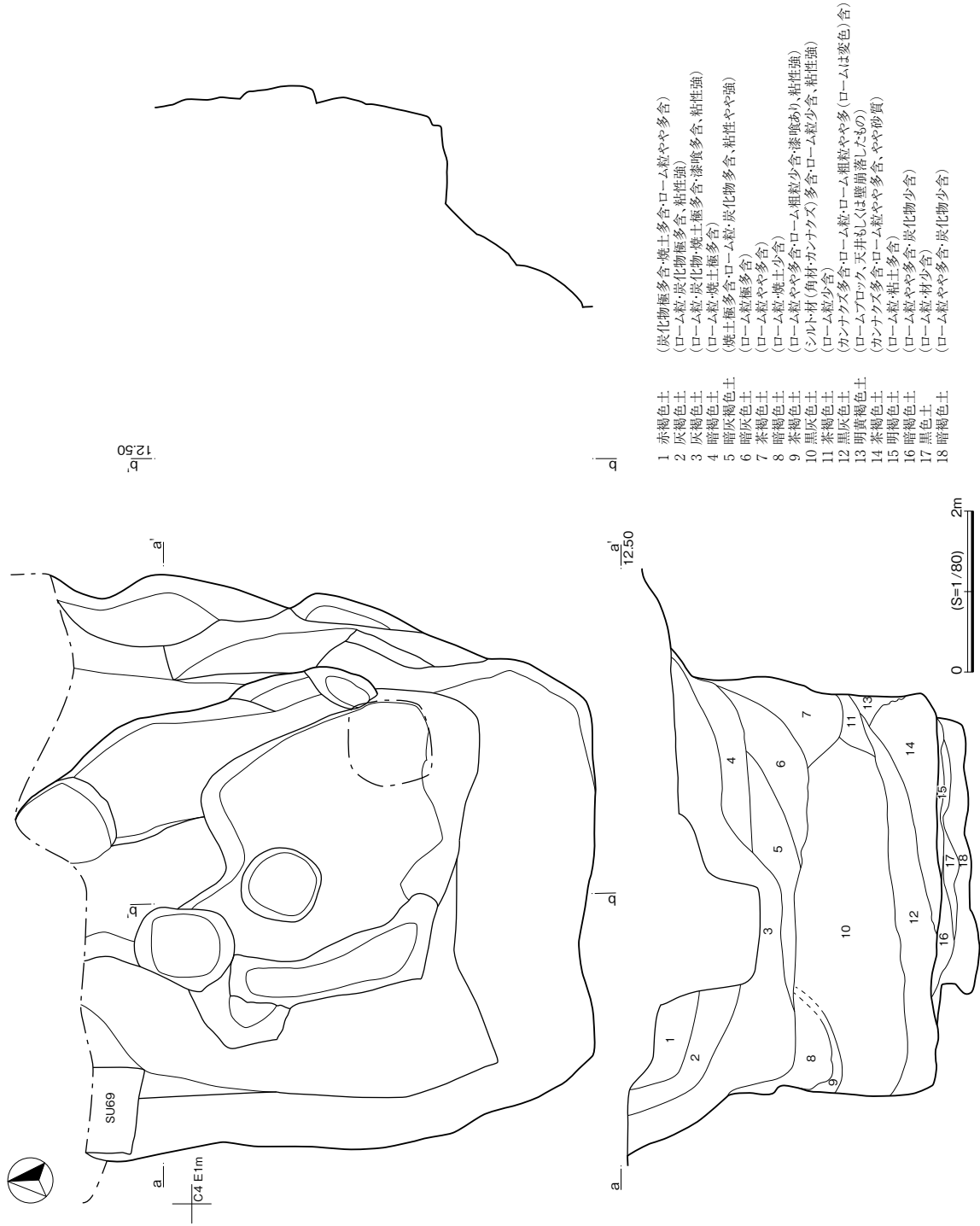
IV-3 図 B 面



IV-4 図 A面



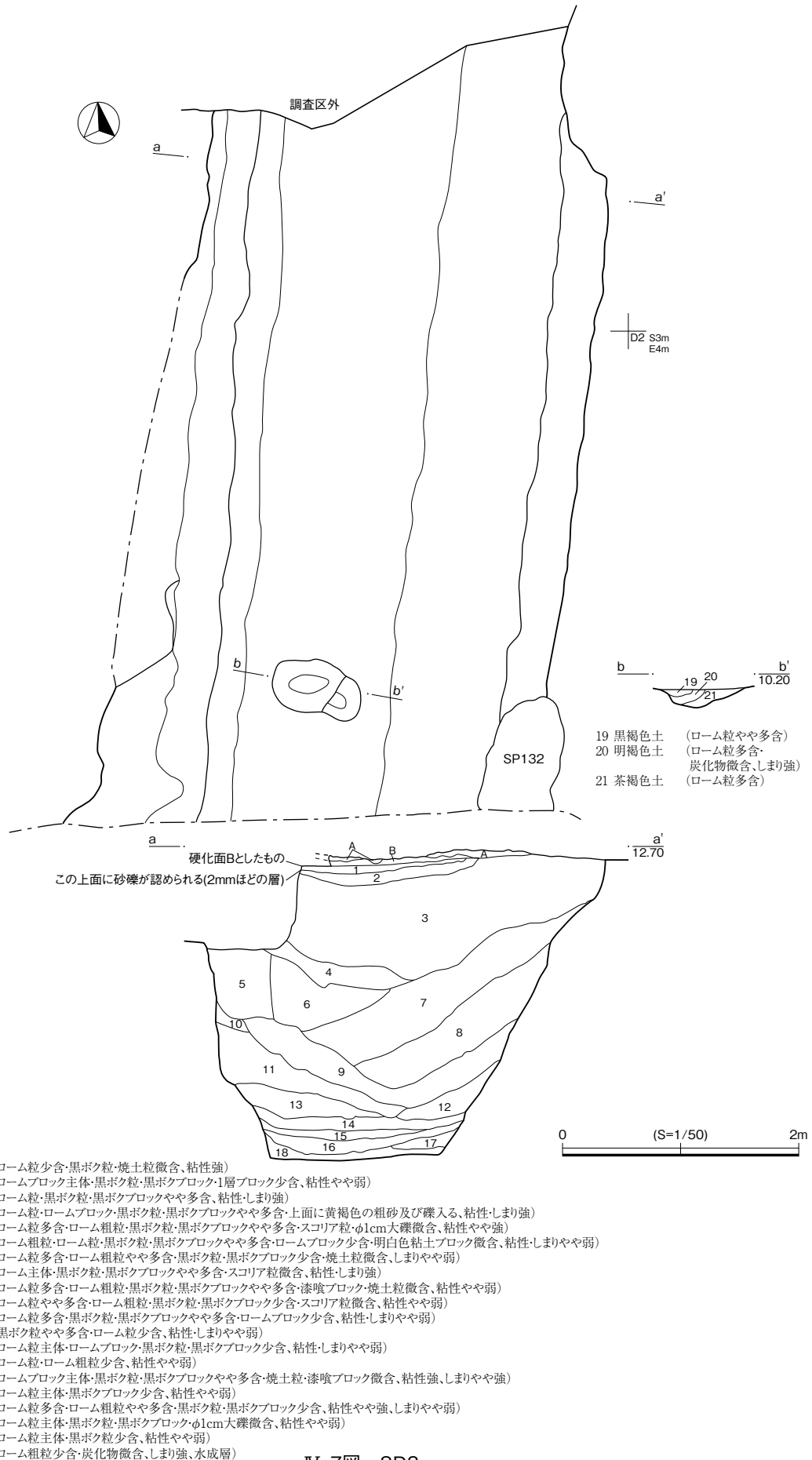
IV-5図 SX1



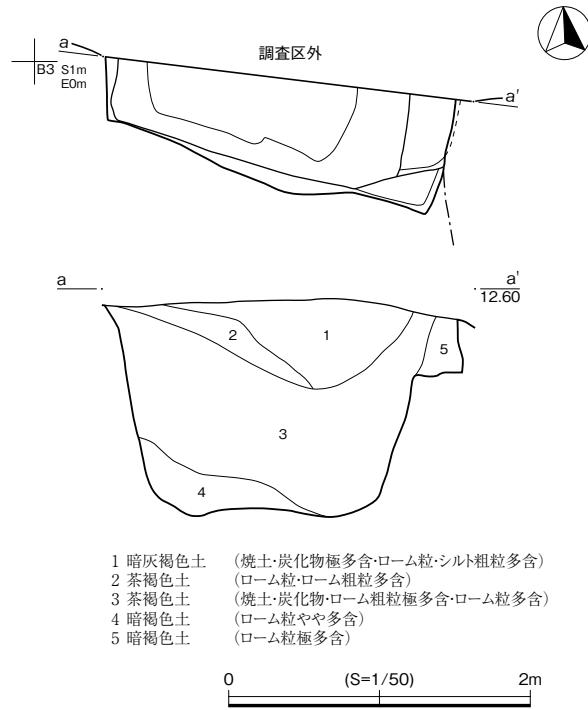
- |          |                                  |
|----------|----------------------------------|
| 1 赤褐色土   | (炭化物極多含・焼土多含・ローム粒やや多含)           |
| 2 灰褐色土   | (ローム粒・炭化物極多含・粘性強)                |
| 3 灰褐色土   | (ローム粒・炭化物・焼土極多含・漆喰多含・粘性強)        |
| 4 暗褐色土   | (ローム粒・焼土極多含)                     |
| 5 暗灰褐色土  | (焼土極多含・ローム粒・炭化物多含・粘性やや強)         |
| 6 暗灰色土   | (ローム粒やや多含)                       |
| 7 茶褐色土   | (ローム粒・焼土少含)                      |
| 8 暗褐色土   | (ローム粒やや多含・ローム粗粒少含・漆喰あり・粘性強)      |
| 9 茶褐色土   | (ローム粒やや多含・ローム粗粒少含・粘性強)           |
| 10 黒灰色土  | (シルト材(角材・カンナクス)多含・ローム粒少含・粘性強)    |
| 11 茶褐色土  | (ローム粒少含)                         |
| 12 黒灰色土  | (カンナクス多含・ローム粒・ローム粗粒やや多(ロームは変色)含) |
| 13 明黄褐色土 | (ロームブロック・天井もしくは壁前落したものの)         |
| 14 茶褐色土  | (カンナクス多含・ローム粒やや多含・やや砂質)          |
| 15 明褐色土  | (ローム粒・粘土多含)                      |
| 16 暗褐色土  | (ローム粒やや多含・炭化物少含)                 |
| 17 黒色土   | (ローム粒・材少含)                       |
| 18 暗褐色土  | (ローム粒やや多含・炭化物少含)                 |

IV-6 図 SK2

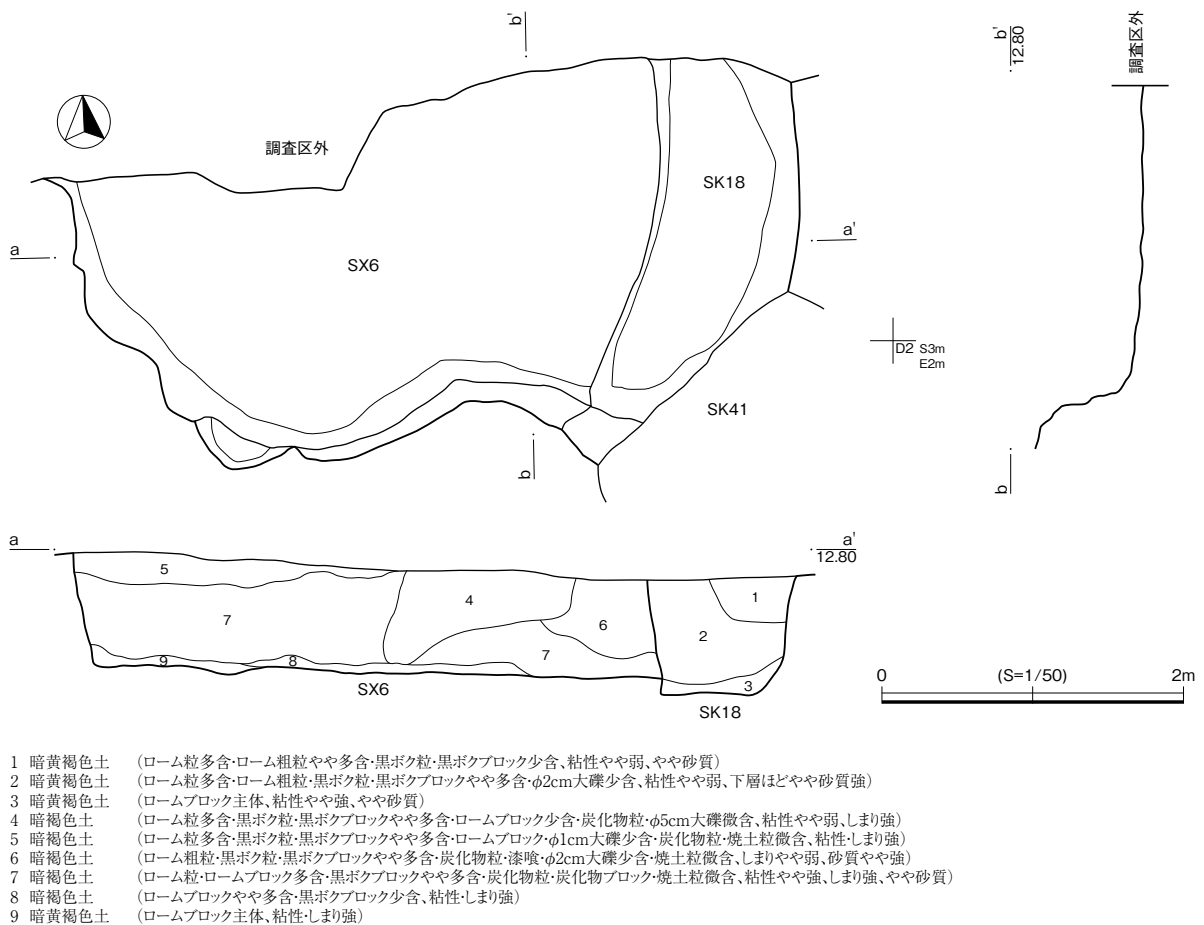
IV 看護職員等宿舎3号棟地点の調査



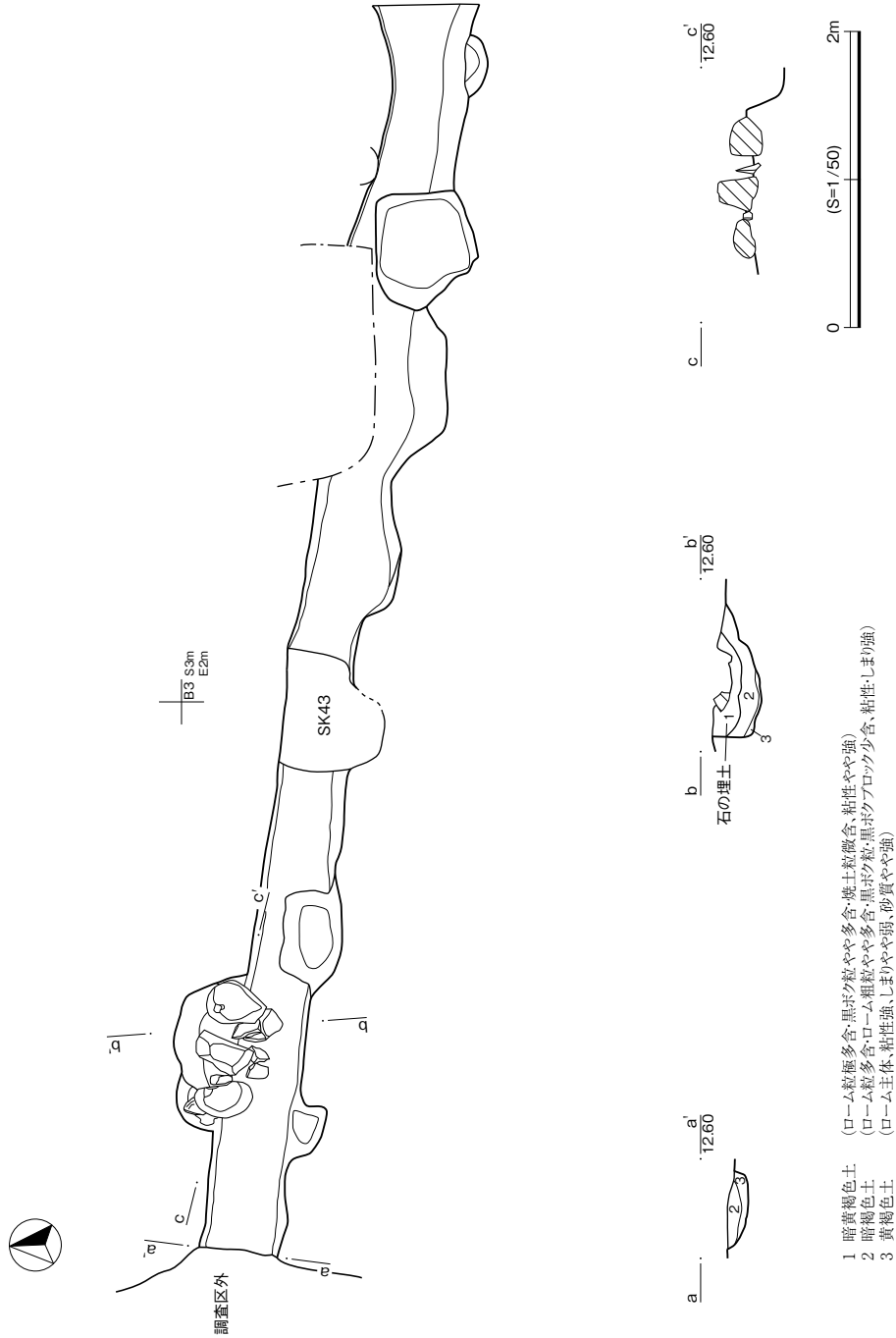
IV-7図 SD3



IV-8図 SU4

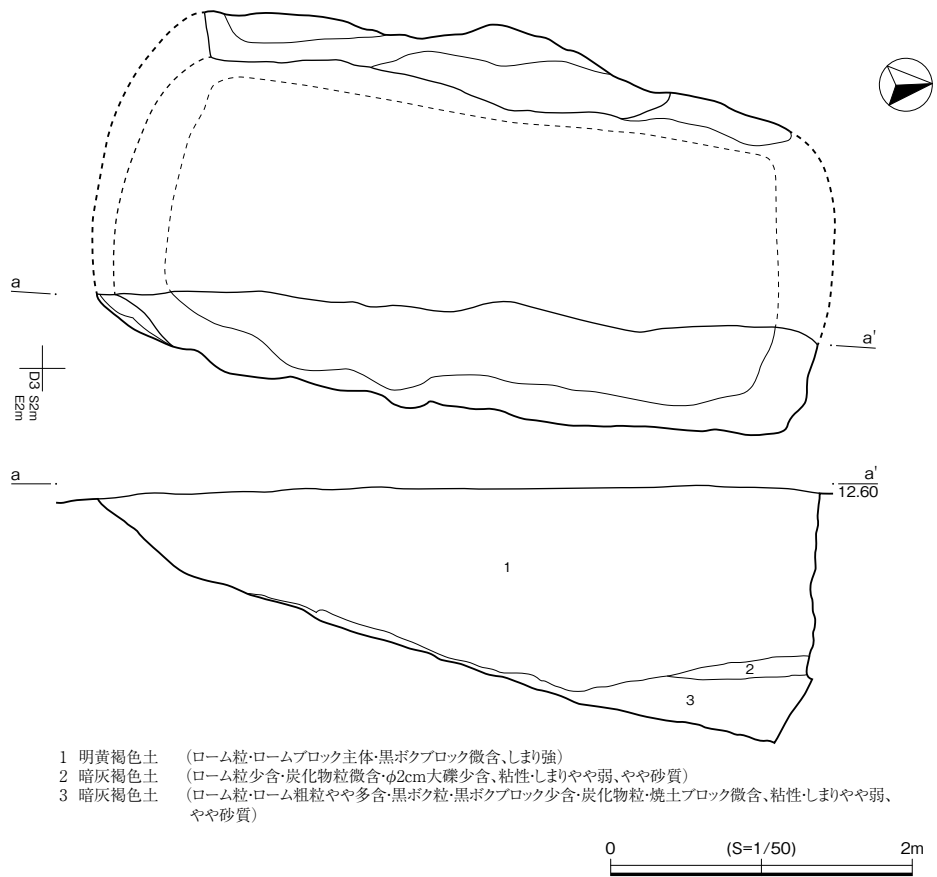
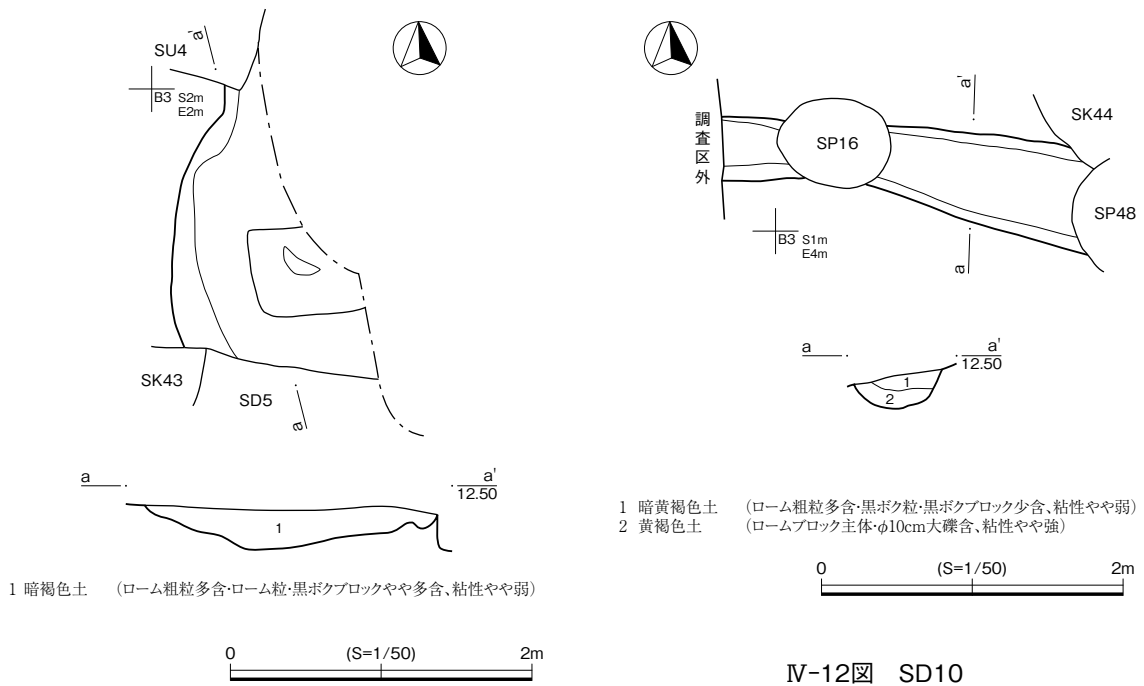


IV-9図 SX6・SK18

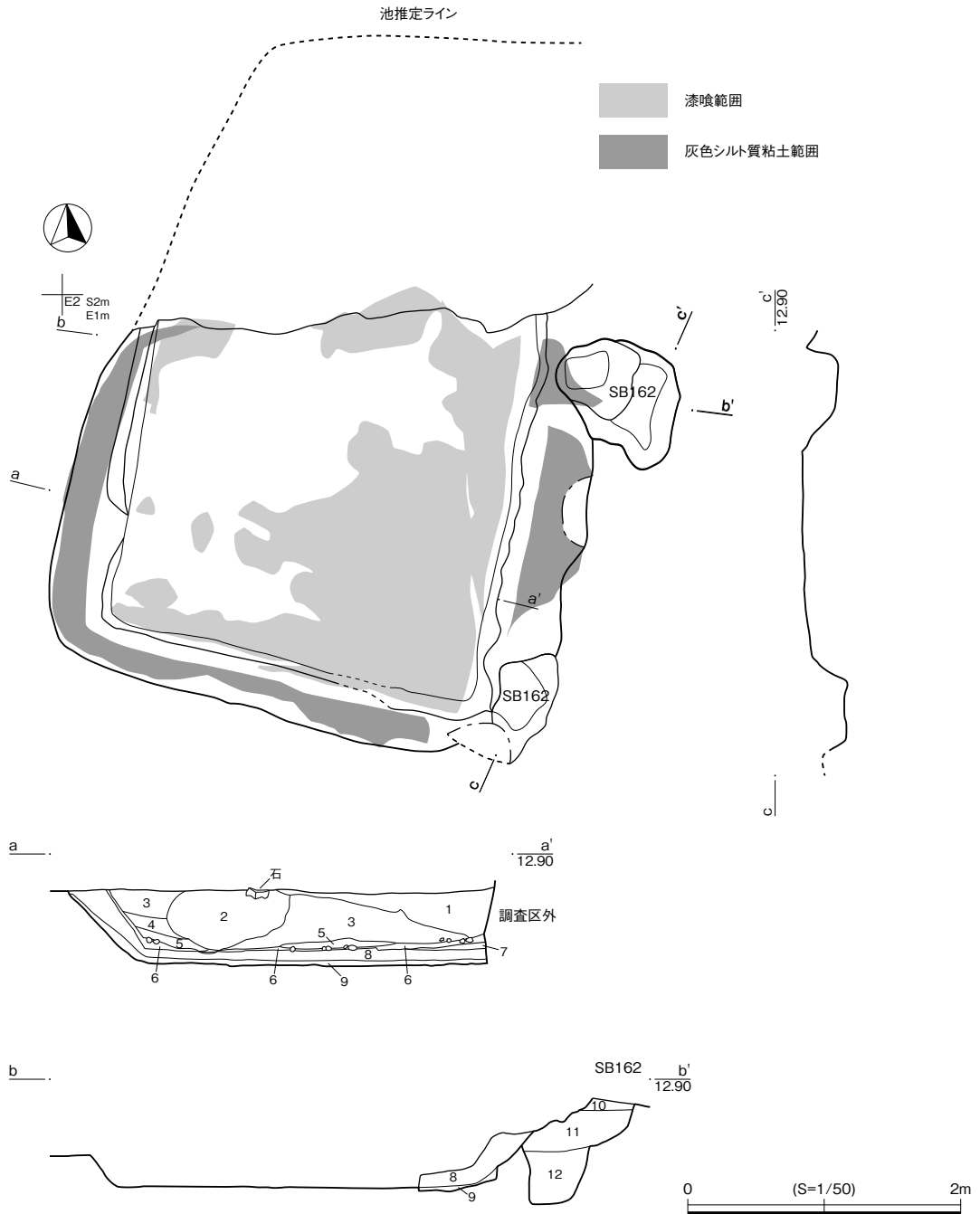


IV-10 図 SD5



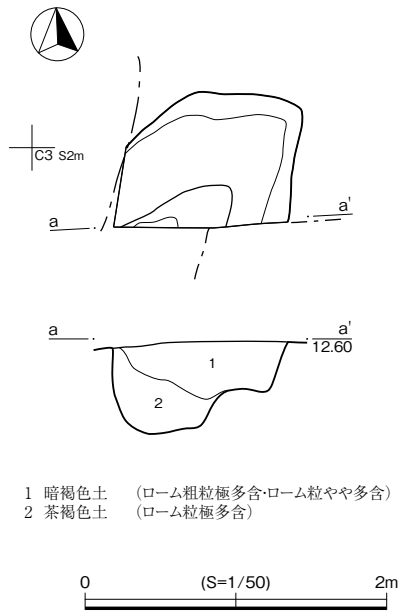


IV 看護職員等宿舎3号棟地点の調査

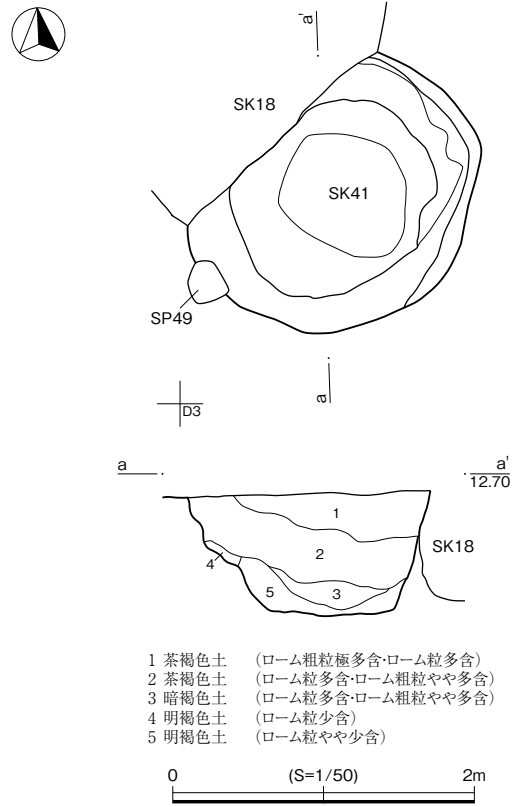


- |         |   |
|---------|---|
| 1 暗黄褐色土 | (ローム粗粒多含・ロームブロックやや多含・黒ボクブロック・焼土粒・炭化物粒微含、粘性・しまり強)          |
| 2 暗灰色土  | (ローム粗粒・黒ボク粒・黒ボクブロック少含・焼土粒・炭化物ブロック・φ0.5cm大小石微含、粘性やや強、しまり強) |
| 3 黄褐色土  | (ローム粗粒・黒ボクブロックやや多含・ロームブロック少含・焼土粒・炭化物粒微含、粘性しまり強、やや砂質)      |
| 4 黄褐色土  | (ローム粗粒多含・黒ボク粒・黒ボクブロック少含・焼土粒微含、粘性しまり強、砂質やや強)               |
| 5 明黄褐色土 | (ローム主体・灰色シルト質粘土少含・焼土粒微含、粘性しまり強、坑底の石はこの土でバック)              |
| 6 明灰白色土 | (明灰白色粘土極多含・漆喰ブロック微含、粘性極強、しまり強)                            |
| 7 白灰色土  | (漆喰主体、しまり極強)  |
| 8 明黄褐色土 | (ローム粗粒主体・7層ブロック多含・スコリア粒少含・炭化物粒・黒ボク粒微含、粘性極強)               |
| 9 暗褐色土  | (φ1cm大礫多含・ローム粒・黒ボク粒・黒ボクブロックやや多含・焼土粒・炭化物粒微含、粘性しまり強)        |
| 10 暗褐色土 | (ローム粒・灰白色粘土ブロックやや多含、粘性やや弱)                                |
| 11 黒褐色土 | (ローム粒やや多含・灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロック少含・焼土粒微含)                       |
| 12 褐色土  | (ローム粒・ローム粗粒やや多含・黒ボク粒・黒ボクブロック・φ1cm大礫少含・焼土粒微含、しまりやや弱)       |

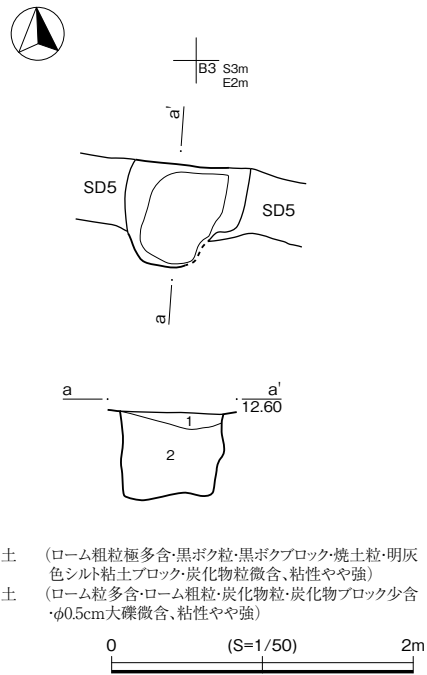
IV-14図 SX15・SB162



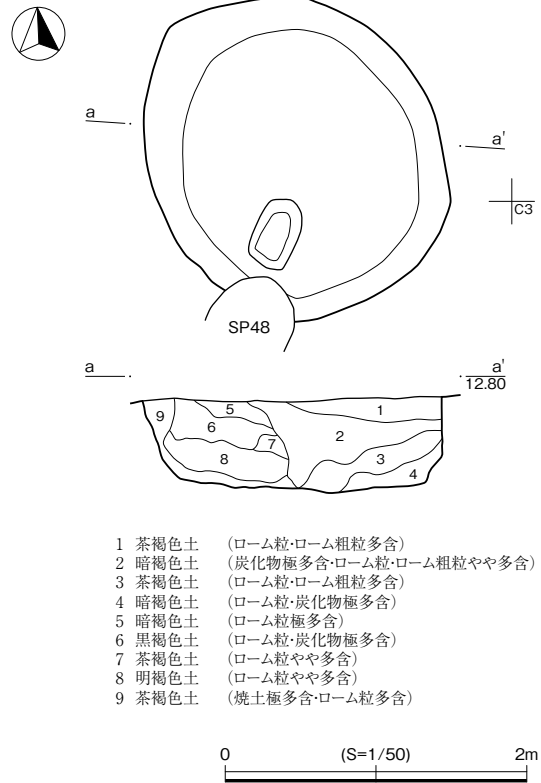
IV-15図 SK22



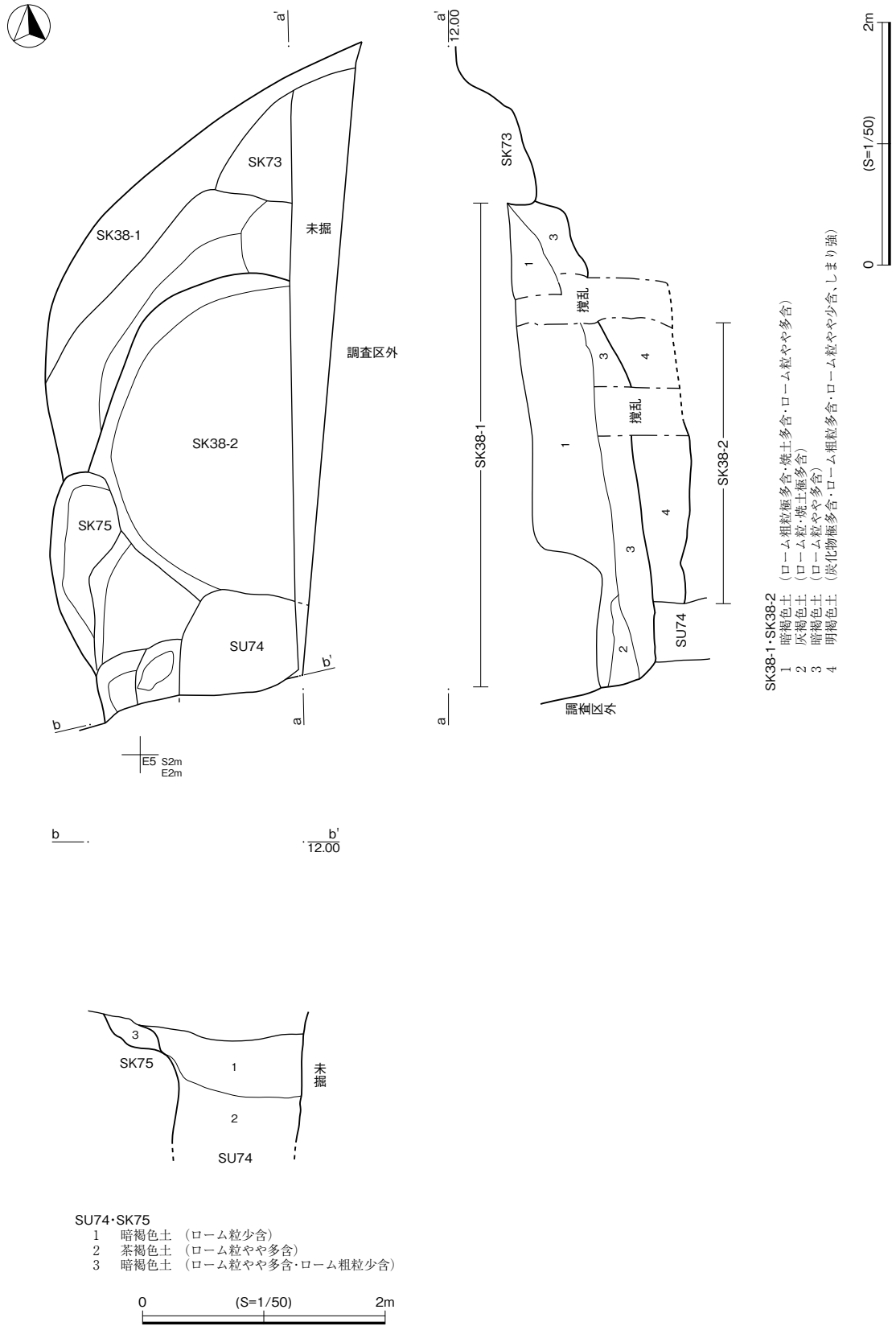
IV-16図 SK41



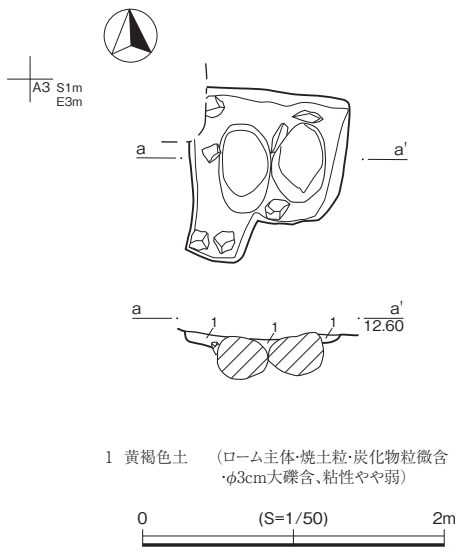
IV-17図 SK43



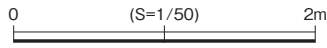
IV-18図 SK44



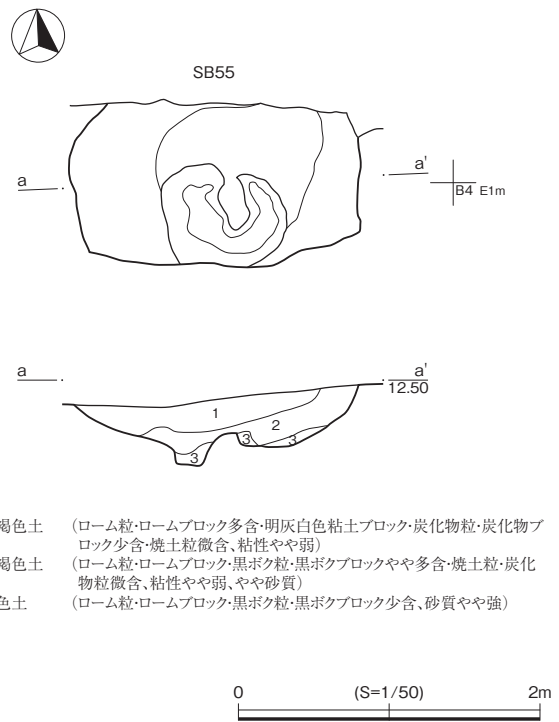
IV-19図 SK38-1・SK38-2・SU74・SK75



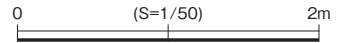
1 黄褐色土 (ローム主体・焼土粒・炭化物粒微含・φ3cm大礫含、粘性やや弱)



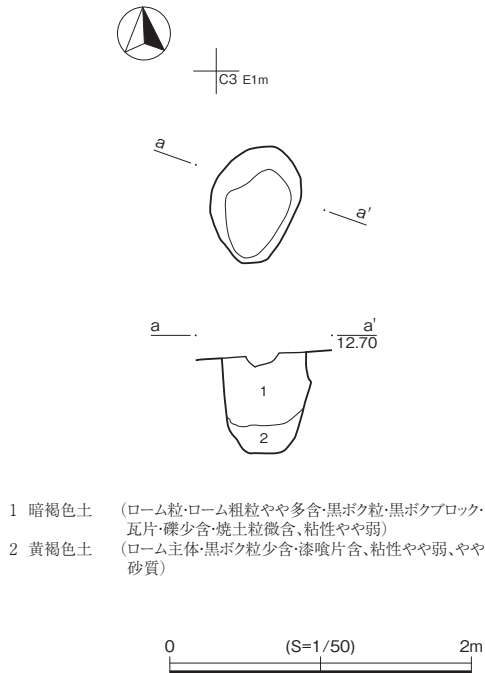
IV-20図 SP45



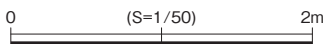
1 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含・明灰白色粘土ブロック・炭化物粒・炭化物ブロック少含・焼土粒微含、粘性やや弱)  
 2 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック・黒ボク粒・黒ボクブロックやや多含・焼土粒・炭化物粒微含、粘性やや弱、やや砂質)  
 3 褐色土 (ローム粒・ロームブロック・黒ボク粒・黒ボクブロック少含、砂質やや強)



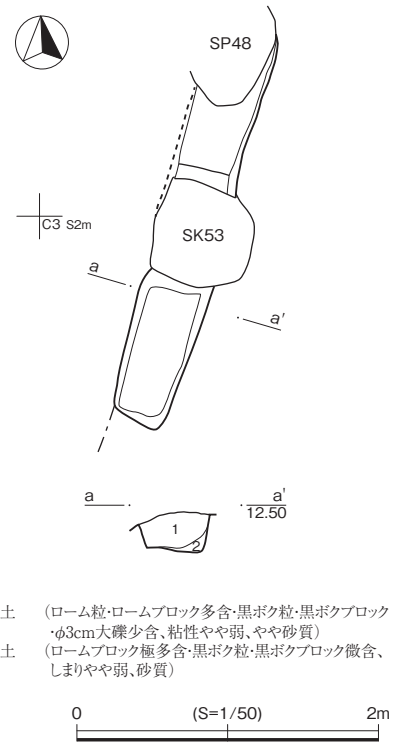
IV-21図 SK46



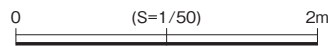
1 暗褐色土 (ローム粒・ローム粗粒やや多含・黒ボク粒・黒ボクブロック・瓦片・礫少含・焼土粒微含、粘性やや弱)  
 2 黄褐色土 (ローム主体・黒ボク粒少含・漆喰片含、粘性やや弱、やや砂質)



IV-22図 SP48

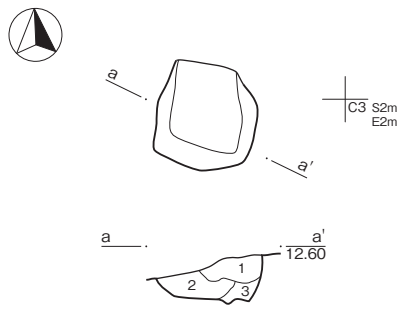


1 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含・黒ボク粒・黒ボクブロック・φ3cm大礫少含、粘性やや弱、やや砂質)  
 2 暗褐色土 (ロームブロック極多含・黒ボク粒・黒ボクブロック微含、しまりやや弱、砂質)

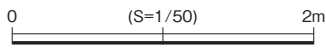


IV-23図 SD52

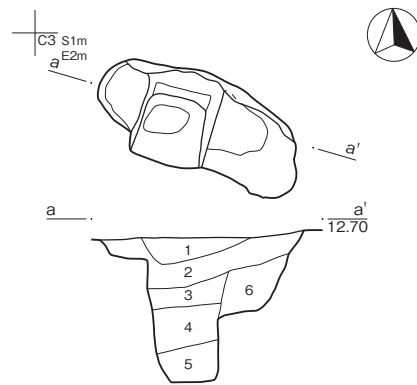
IV 看護職員等宿舎3号棟地点の調査



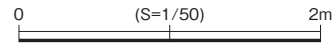
- 1 暗黄褐色土 (ローム粒やや多含・ロームブロック少含・炭化物粒・黒ボク粒・黒ボクブロック微含、粘性やや弱、やや砂質)
- 2 明黄褐色土 (ローム主体・黒ボクブロック微含、粘性・しまり強)
- 3 暗褐色土 (ローム粒・黒ボク粒・黒ボクブロックやや多含・ロームブロック・炭化物粒微含、粘性やや弱、やや砂質)



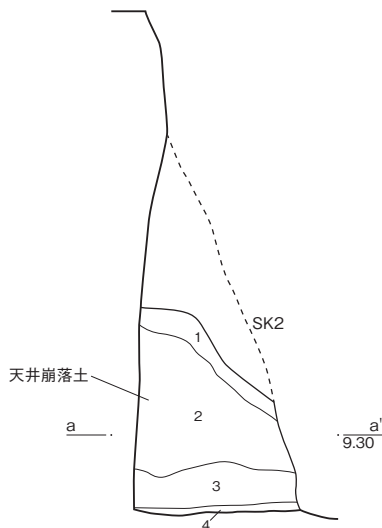
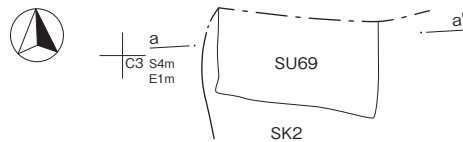
IV-24図 SK53



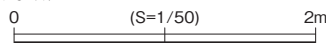
- 1 明灰色土 (ローム粒・ロームブロック・黒ボク粒・黒ボクブロック少含・炭化物粒・焼土粒微含、粘性・しまり強)
- 2 暗黄褐色土 (ローム粒・ローム粗粒多含・黒ボク粒・黒ボクブロック・φ3cm大礫少含・炭化物粒・スコリア粒微含、粘性やや強、しまり強)
- 3 暗褐色土 (ローム粒・ローム粗粒やや多含・黒ボク粒・黒ボクブロック少含・φ3cm大礫微含、粘性・しまりやや弱)
- 4 暗褐色土 (ローム粒多含・ローム粗粒やや多含・黒ボク粒・黒ボクブロック・φ2cm大礫少含、粘性・しまりやや弱)
- 5 黄褐色土 (ロームブロック主体・黒ボク粒・黒ボクブロック微含、しまりやや弱)
- 6 黄褐色土 (ローム粒極多含・ローム粗粒やや多含・黒ボク粒・黒ボクブロック微含、粘性やや弱)



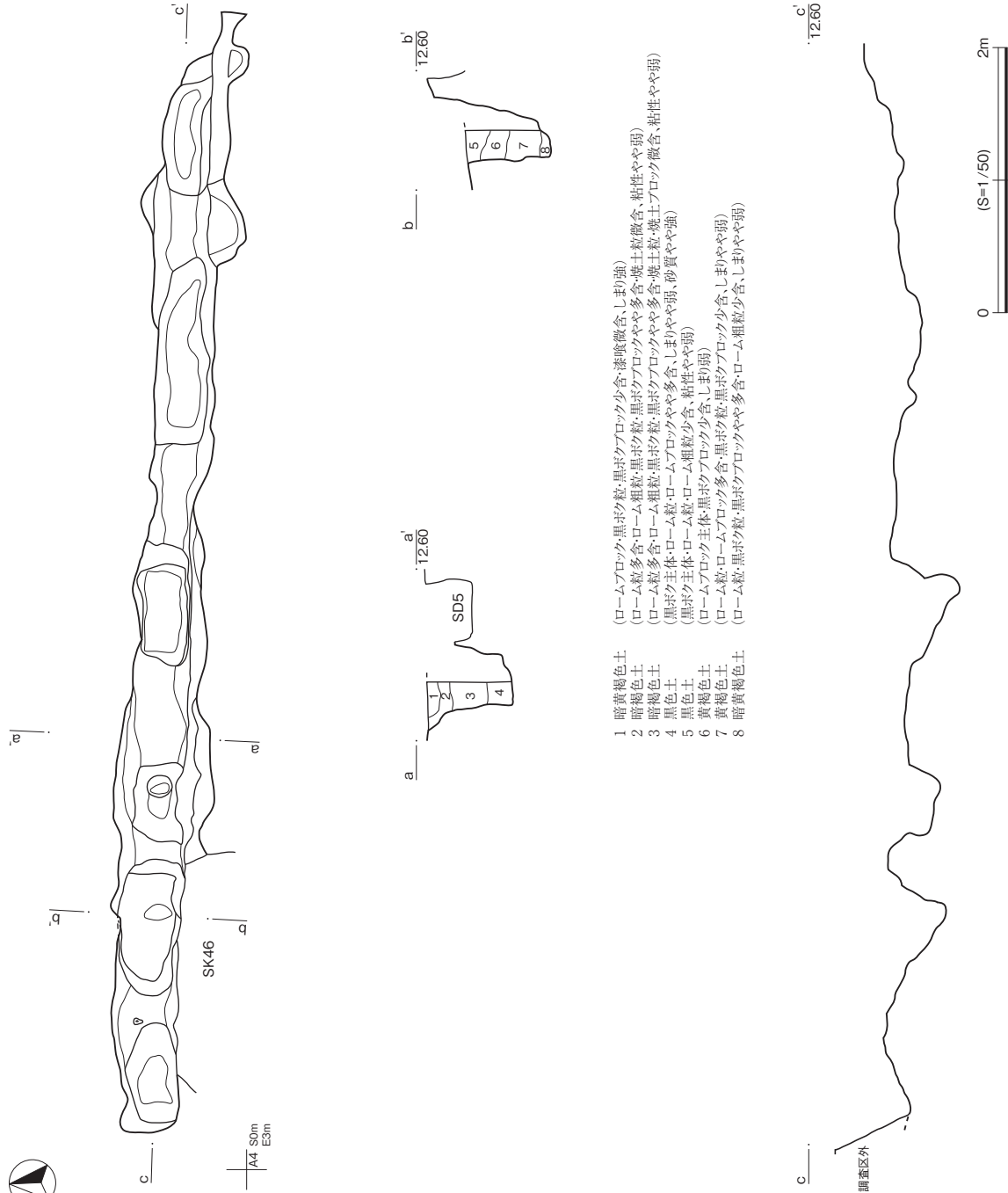
IV-25図 SP57



- 1 暗褐色土 (ローム粒やや多含・炭化物少含)
- 2 明褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、天井崩落土)
- 3 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロックやや多含・炭化物少含)
- 4 明褐色土 (ローム粒多含)

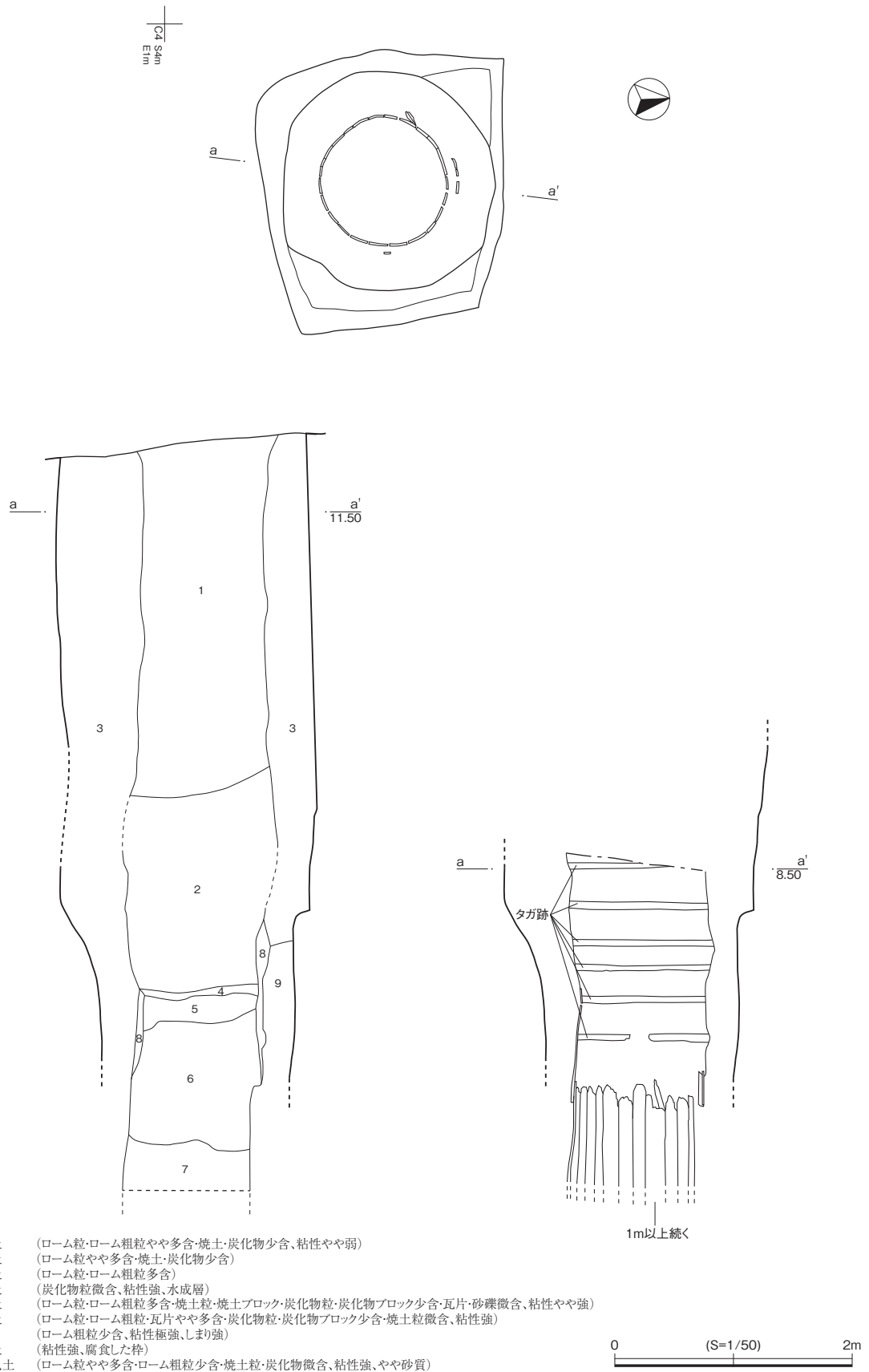


IV-26図 SU69



IV-27 図 SB55

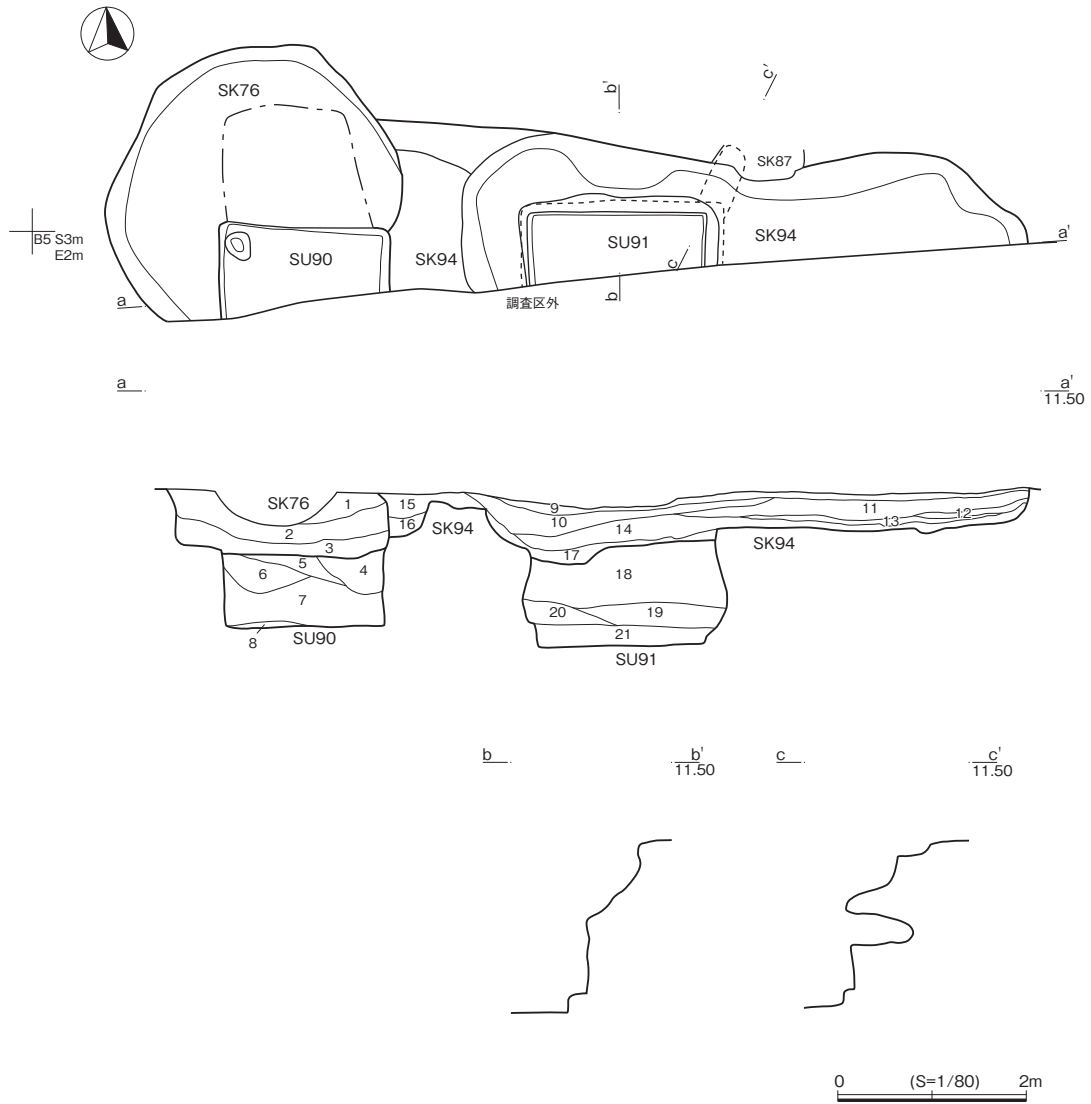
IV 看護職員等宿舎3号棟地点の調査



- |         |  |
|---------|--|
| 1 暗褐色土  | (ローム粒・ローム粗粒やや多含・焼土・炭化物少含、粘性やや弱)                        |
| 2 茶褐色土  | (ローム粒やや多含・焼土・炭化物少含)                                    |
| 3 明褐色土  | (ローム粒・ローム粗粒多含)   |
| 4 暗褐色土  | (炭化物粒微含、粘性強、水成層)                                       |
| 5 暗褐色土  | (ローム粒・ローム粗粒多含・焼土粒・焼土ブロック・炭化物粒・炭化物ブロック少含・瓦片・砂礫微含、粘性やや強) |
| 6 暗褐色土  | (ローム粒・ローム粗粒・瓦片やや多含・炭化物粒・炭化物ブロック少含・焼土粒微含、粘性強)           |
| 7 黒色土   | (ローム粗粒少含、粘性極強、しまり強)                                    |
| 8 暗褐色土  | (粘性強、腐食した埴)  |
| 9 暗黄褐色土 | (ローム粒やや多含・ローム粗粒少含・焼土粒・炭化物微含、粘性強、やや砂質)                  |

IV-28図 SE67

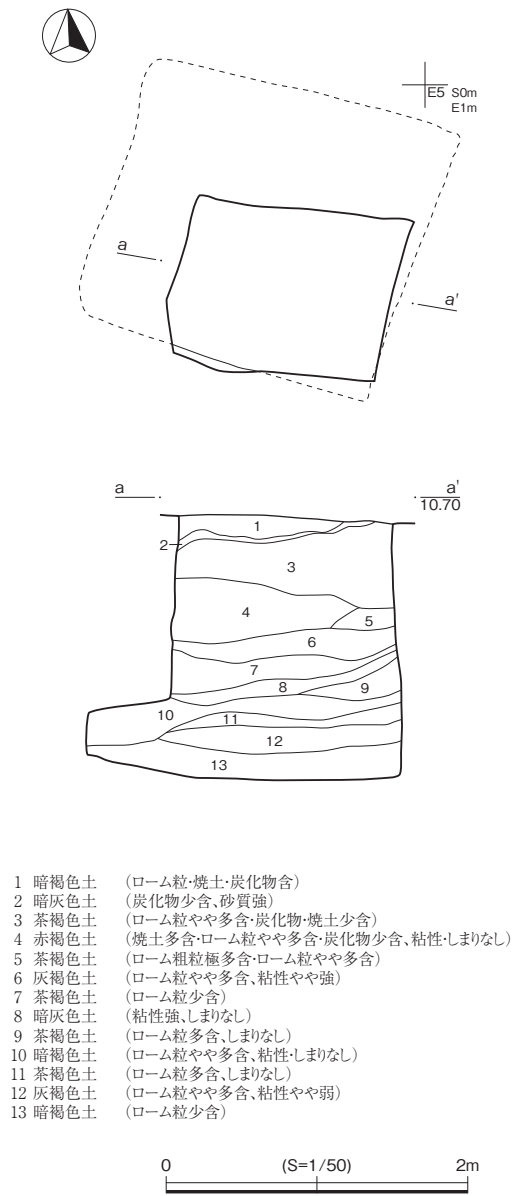




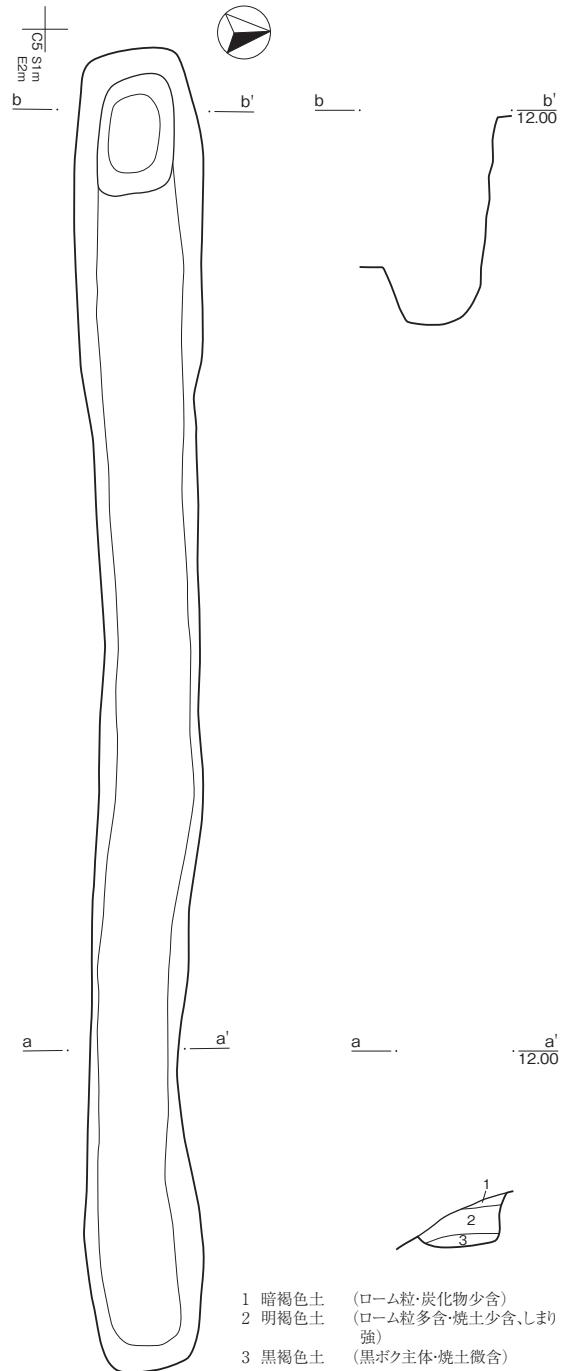
- |                             |                                 |
|-----------------------------|---------------------------------|
| 1 茶褐色土 (ローム粒やや多含)           | 12 暗褐色土 (炭化物やや多含・ローム粒少含)        |
| 2 暗灰色土 (炭化物・焼土少含、粘性やや強)     | 13 明褐色土 (ローム粒多含・ローム粗粒やや多含、しまり強) |
| 3 暗褐色土 (ローム粒・炭化物・焼土少含)      | 14 暗灰色土 (シルト多含・炭化物少含)           |
| 4 明褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含)     | 15 暗褐色土 (ローム粒・焼土・炭化物少含)         |
| 5 灰褐色土 (ローム粒少含、粘性やや強)       | 16 茶褐色土 (ローム粒やや多含、やや砂質)         |
| 6 暗褐色土 (ローム粒少含)             | 17 明褐色土 (ローム粒多含・ローム粗粒やや多含)      |
| 7 暗褐色土 (ローム粒やや多含・炭化物・焼土少含)  | 18 茶褐色土 (ローム粒・ローム粗粒やや多含・焼土少含)   |
| 8 明茶褐色土 (ローム粒やや多含)          | 19 明褐色土 (ローム粒多含)                |
| 9 茶褐色土 (ローム粒やや多含)           | 20 灰褐色土 (ローム粒やや多含、粘性やや強)        |
| 10 暗褐色土 (ローム粒・炭化物少含、やや砂質)   | 21 明褐色土 (ローム粒多含、しまりやや強) 盛土か?    |
| 11 茶褐色土 (ローム粒やや多含・焼土・炭化物少含) |                                 |

IV-29図 SK76・SU90・SU91・SK94

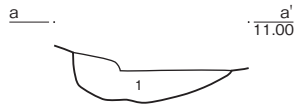
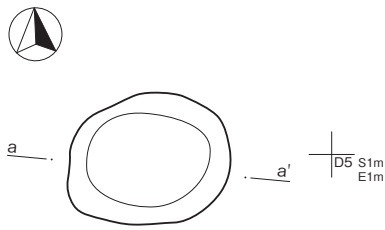
IV 看護職員等宿舎3号棟地点の調査



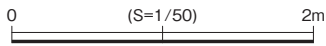
IV-30 図 SU78



IV-31 図 SD80



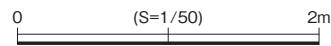
- 1 灰褐色土 (ローム粒やや多含・焼土・炭化物少含、粘性強、しまりなし)



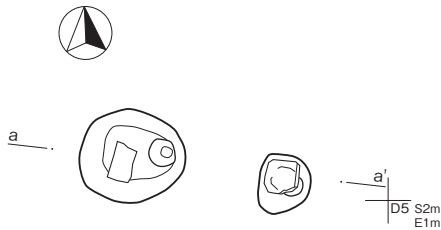
IV-32図 SK84



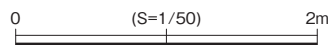
- 1 赤褐色土 (焼土・炭化物多含)  
2 茶褐色土 (ローム粒・炭化物やや多含)



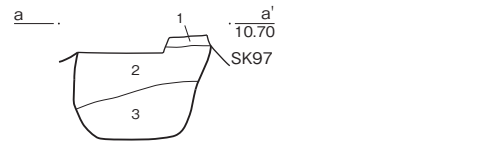
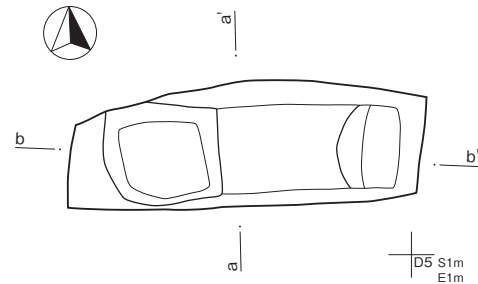
IV-33図 SK92



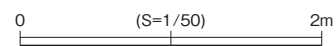
- 1 茶褐色土 (ローム粒やや多含・炭化物・焼土少含)  
2 明褐色土 (ローム粒多含)



IV-34図 SB93

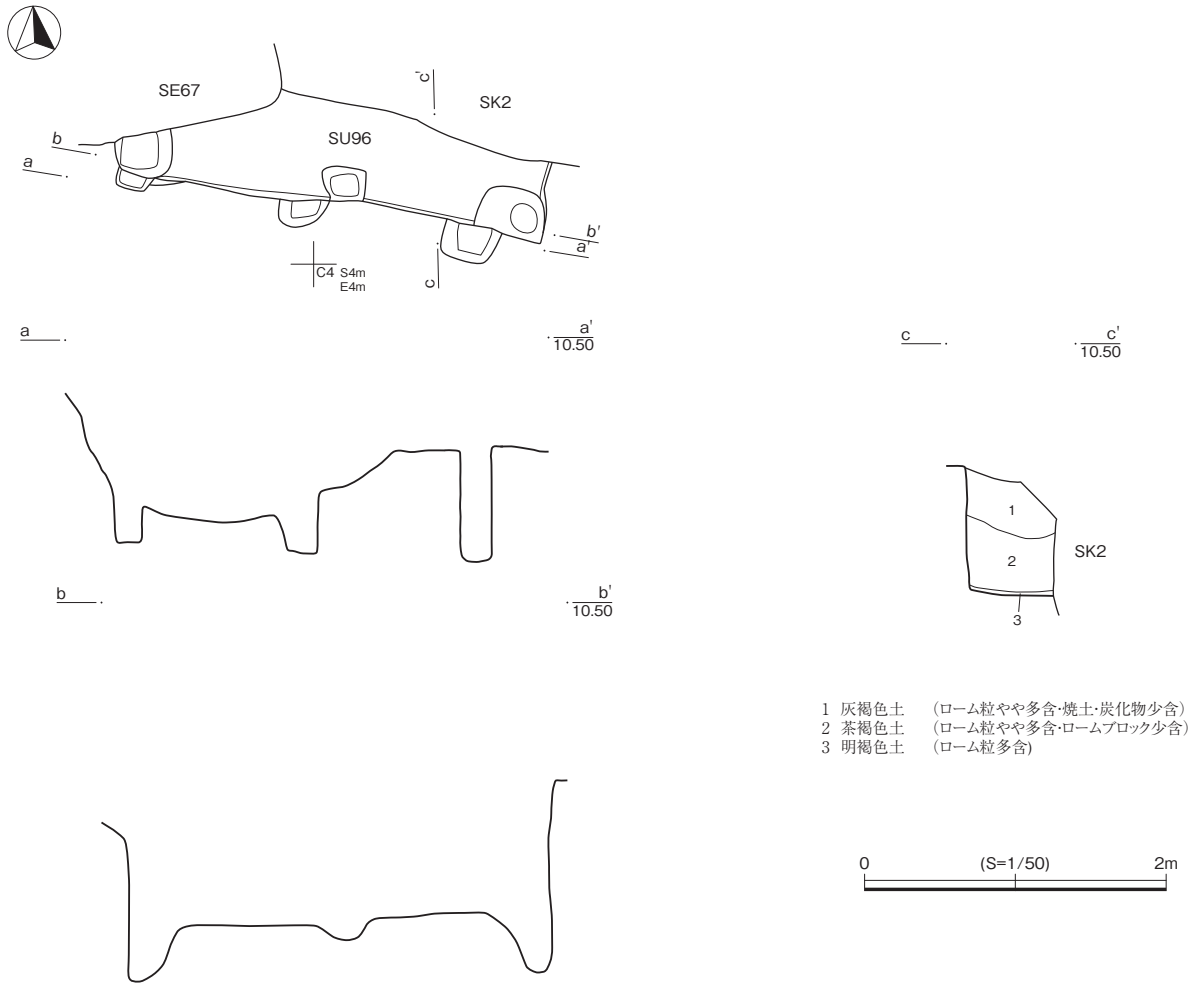


- 1 茶褐色土 (ローム粒やや多含)  
2 明褐色土 (ローム粒多含・ロームブロックやや多含)  
3 茶褐色土 (ローム粒多含・ローム粗粒やや多含)  
4 茶褐色土 (ローム粒やや多含)  
5 暗褐色土 (ローム粒4層より少含)  
6 明褐色土 (ローム粒多含・ローム粗粒やや多含、しまり強)

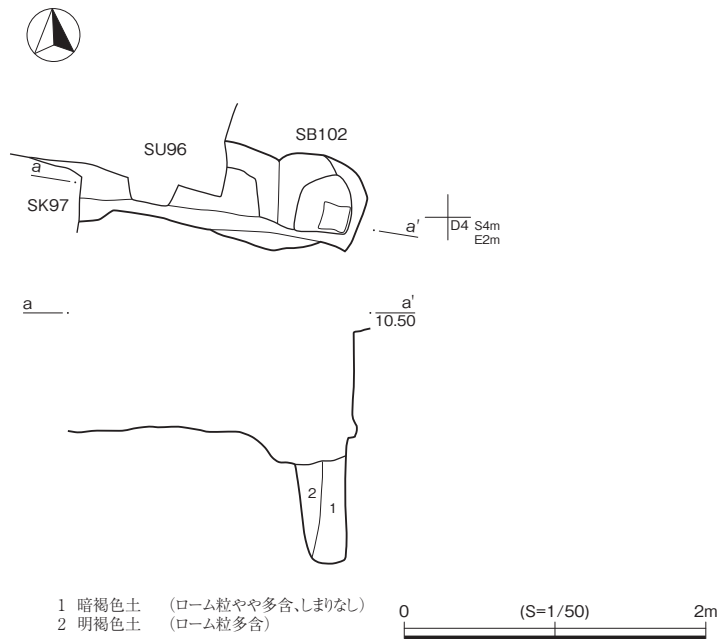


IV-35図 SB95

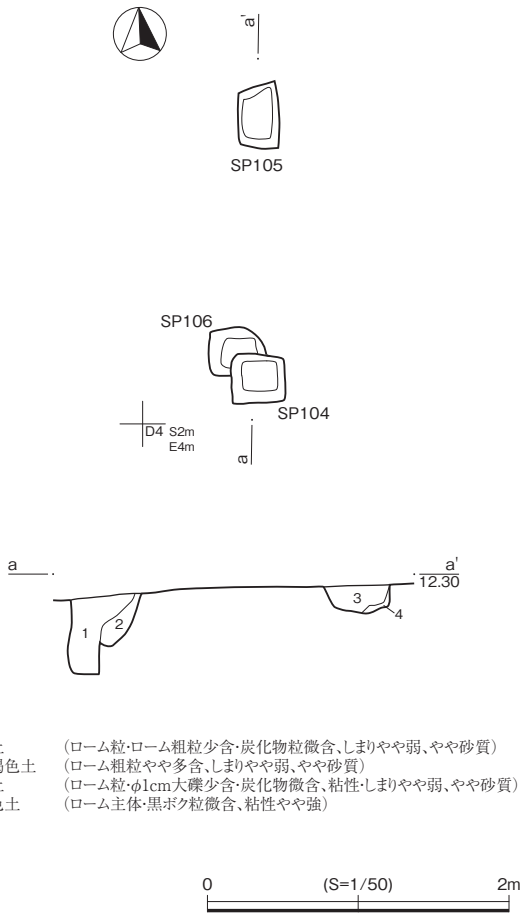
IV 看護職員等宿舎3号棟地点の調査



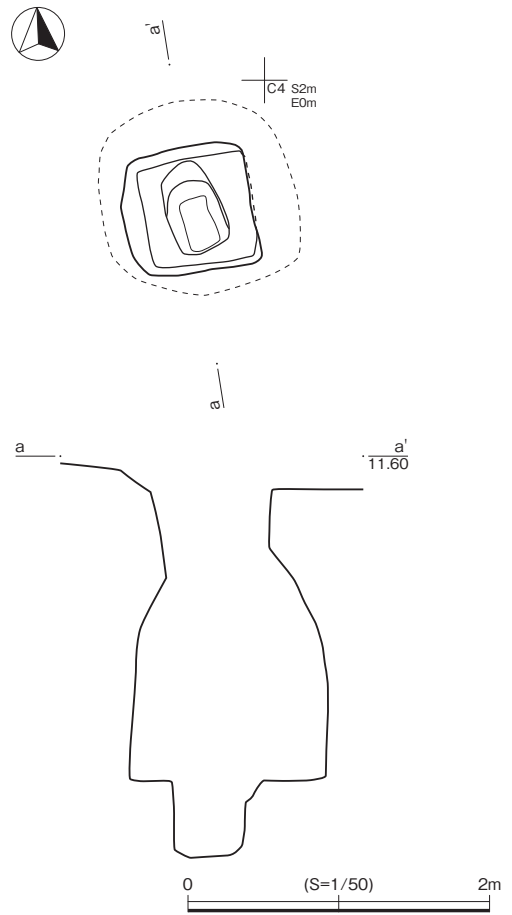
IV-36図 SU96



IV-37図 SB102



IV-38図 SP104・SP105・SP106



IV-39図 SU150

## 第2節 遺物

### SX1 (IV-40～44図)

**磁器** (1～21) SX1の出土遺物はの大半は、SX1のひな壇状部分を覆うように堆積していた灰色土層(SX1\_1層)から出土したものである。最小個体数は163点を数え、胎質では陶器が半数を占め、うち半数は瀬戸・美濃系陶器瓶である。陶器瓶の底部や釘書きには「○」に「平」の釘書きや墨書が施されたものが目立つ。また「○」に「平」の墨書とともに「近江屋」という屋号と思われる墨書が底部脇に記載されたものもある。陶器について多い磁器は瀬戸・美濃系磁器が中心であり、いわゆる湯呑碗、丸碗、木型打込皿などを含む。遺物の出土様相からSX1\_1層の出土遺物は東大編年Ⅷd期に比定され、これが本遺構の下限と考えられる。

6～10、15、17、19～21は肥前系(JB)、1～5、11～14、16、18は瀬戸・美濃系(JC)磁器である。1～6は染付碗である。1は広東碗でJC-1-c。器高は低く、やや小振りな後発的な特徴を有すものである。呉須の発色は鈍く、やや青黒い。2～5は端反形碗でJC-1-d。5、6は口径も小さく、器高も低い後発的な特徴を有す。2、3の見込みには崩れた「寿」字が書かれている。6はいわゆる湯呑碗でJB-1-o。口径は小さく、やや内湾気味である。畳付脇は面取りが施されている。外面の絵付は白土染付によるものであり、呉須の発色は悪く青黒い。7～11は染付皿である。7～10は蛇ノ目凹形高台の高台高が高い染付皿でJB-2-i。いずれも体部は型打成形され、口縁部は緩やかな輪花にされている。7、9、10の高台内にはチャツ痕とアルミナ砂が看取される。10には口鏽がみられる。11は口縁部がわずかに外反する蛇ノ目高台を有す皿でJC-2-c。蛇ノ目高台は畳付の内側が外側より低くなるように成形されている。コバルトによる絵付が施されるが、畳付以外に施された透明釉は全体的に青味をおび、高台内には圈線が1本と角枠銘がある。12～14は坏である。12、13は器壁が極めて薄く、口縁部が外反する坏でJC-6-d。見込みには12は金彩と色絵、13はいわゆる江戸絵付といわれる呉須に鉛ガラスを混ぜて描かれた絵付が施される。13の内面には赤字で楕円に「イセ万」と書かれている。屋号か。14は白磁で、見込みに木型打込された丸形坏でJC-6-e。いわゆる寿文坏で、口鏽が施される。15は蛇ノ目凹形高台を有す染付猪口でJB-7-a。高台内にはチャツ痕とアルミナ砂がみられる。絵付の呉須は青黒く、ムラが目立つ。16、17は香炉・火入れで、底部は高台状に削り込まれ、高台内は無釉である。高台周囲に3足が

貼付られるが、完全に浮いている。16は白磁でJC-9。3足の表面には縦位の細かいしのぎが施されている。17は白土染付が施されたものでJB-9-g。口縁部3箇所は浅いU字状にえぐられている。白土は内面の無釉部分にもおよぶ。18は染付蓮華でJC-20。手づくねで、平面形はナスの形に成形され、内面の染付はその形を生かし「一富士二鷹三茄子」が染付されている。19～21は染付が施された蓋である。19は端反形碗(JB-1-n)の蓋で、口縁部内側をめぐる四方襷紋は墨弾きによるものである。20はJB-1の蓋、21は蓋物の(JB-13)蓋である。21の受け部にはアルミナ砂が厚く残る。

**陶器** (22～41) 22は瀬戸・美濃系広東碗でTC-1-j。いわゆる太白手で、内外面に青黒い染付が施される。23、24は瀬戸・美濃系皿・平鉢である。23はいわゆる太白手でTC-2-h。畳付以外は施釉され、内外面に染付が施される。24は灰釉摺絵皿でTC-2-e。削り出し高台で、高台脇は鋭角に削り込まれるが、内側はアーチ形にナデ調整されている。畳付には熔着痕が残る。25は瀬戸・美濃系のいわゆる石皿でTC-3-c。見込みには円形の目跡が7箇所残る。無釉である高台内は墨書が確認できる。26～29は瀬戸・美濃系灰釉瓶で、26～28は灰釉浸け掛けの容量が2合半のものでTC-10-c、29は容量が1升のものでTC-10-dに分類される。いずれの瓶も頸部が短く、口縁部が完全に折り返され、胴部は寸胴形を呈す後発的な特徴を有す。また胴部には点刻の釘書きが施され、判読可能な26は「いせや」、27、28は○に「平」と読める。また27、28は釘書きと同じ○に「平」の墨書が底部に確認できる。なお27は底部脇にも横書きの墨書が残るが判読できない。30、31は瀬戸・美濃系灰釉壺でTC-15-f。ともに削り出しで輪高台を有し、紐状の耳が肩部に付くタイプのもので、30は1箇所のみ残存、31は二耳壺である。30は口唇部と蓋受けが合わせ口となる部分以外は内面まで施釉される。SK2と遺構間接合している。32は瀬戸・美濃系灰釉片口鉢でTC-23-c。体部は直線的にハの字に開き、口縁部はわずかに外反する。見込みには楕円形の熔着痕が2箇所残存する。33、34は土瓶で、33はTZ-34、34はTZ-34-gに分類される。33は少なくとも2箇所に鉄で文字や絵付が施される。直径1cmほどの漉し孔が3個ある。34は器面に細かな貫入のある灰釉土瓶で、直径4～5mmほどの漉し孔が4個ある。35は京都・信楽系油受け皿でTD-40-b。受け部にはU字形のスリットが1箇所ある。36～41は蓋である。36は三彩が施された急須(TZ-16)の蓋である。空気孔が1箇所ある。37は瀬戸・美濃系灰釉壺(TZ-15)の蓋である。細い紐状

の把手が貼り付けられている。38は瀬戸・美濃系のいわゆる汁次(TC-27-b)の蓋である。39はトビガンナのある行平鍋(TZ-42-c)の蓋である。蓋裏には透明釉が施釉される。SK2と遺構間接合している。40はうのふ釉が施釉された土瓶(TZ-34k)蓋である。41はいわゆる青土瓶(TZ-34-a)蓋である。

**土器**(42～47) 42はロクロ成形された無印の塩壺でDZ-51-w。底部には左回転糸切り痕が認められる。43、44は瓦質の植木鉢でDZ-21-b。ロクロ成形されたもので、底部には左回転糸切り痕がある。43は口縁部外側が黒色化している。意図的に施されたものか。45は土師質丸火鉢でDZ-31-a。底部には直径1cm強、高さ数ミリの足が2足残る。底部脇のみが強くミガキ調整されている。口縁部内外面には敲打痕が、内面にはススが付着する。46、47は塩壺蓋で、46はDZ-00-d、47はDZ-00-gに分類される。47の表面には布圧痕や手掌のシワのようなものが残る。また全体に赤色化している。

**人形・玩具**(48～54) 48～54は碁石状製品でDQ\_4004\_Hに分類される。胎土はいずれもにぶい褐色を呈するが、52のみが白色粘土が混和した状態が観察される。

**瓦製品**(55～60) 瓦分類は加藤氏の分類(1990 加藤)に拠っている。本地点からは富山藩の家紋である丁子梅鉢文の瓦が鬼瓦、軒丸瓦、軒棧瓦と3種類出土している。丁子梅鉢文鬼瓦は、本郷構内の遺跡内での出土は初めてである。また、軒棧瓦は、加賀藩の家紋である幼剣梅鉢文の入っている瓦の出土例は無く、家紋棧瓦葺きの建物は富山藩邸のみであったと考えられる。軒棧瓦の軒丸部に丁子梅鉢文のある軒平部は「江戸式」ではなく「江戸式」を簡略化したような文様で独自性が感じられる。

55～60は瓦である。55～57は軒丸瓦である。いずれも筒部は欠損しており瓦当部のみである。55の瓦当文様は巴文と連珠の間に圏線がめぐらない連珠三つ巴文Cである。周辺に14個の珠文が巡る。56の瓦当文様は富山藩の家紋である丁子梅鉢文である。梅鉢の花弁の断面が稜線がなく丸みのある丁子梅鉢文Cである。梅鉢の花弁が径3.4cmと大振りになっているが、中央部は1.6cmと小振りである。表面はやや光沢のある黒色である。57の瓦当文様は幼剣梅鉢文Bである。梅鉢の花弁の断面形がなだらかな台形のものである。瓦当径15.4cmである。梅鉢の花弁が径2.7cm、中央部は2.1cmと差が小さい。58は軒棧瓦。瓦当文様の軒平部は江戸式で中心飾りは中央は分割線が無く、脇は重線になるもの。唐草文は単線で巻き込み先端が肥大化し円盤状のもの。子葉は内側にくびれが2箇所見られ上端の長いもの。

「江戸式」ⅢKjに分類される。軒丸部は連珠三つ巴文で周辺に10個の珠文が巡る。長さは棧部切れ込みの始まりまで残存しており19cm残存。幅は26.5cm。表面には全面に雲母が見られる。59は棧瓦である。山型部欠損。2箇所切れ込みを持つ。平部切れ込み幅3cm、長さ3.8cmである。棧部切れ込み長さは7.4cm残存。切れ込みの深いタイプである。裏面には6本1条の条線が2条、波状に引かれている。棧瓦の裏面に条線が付けられるのは、19世紀以降とされている。60は丸瓦である。裏面には布袋痕、4本の棒状圧痕が付く。玉縁は2.5cmと短い。弧になっている断面の接地面が下の面と平らになっており19世紀中葉以降の傾向を示す。

**金属製品**(61～63) 61は新寛永通寶四文銭十一波である。地金の色調は黄色である。62は煙管の雁首である。脂返しは小さく、火皿は碗形を呈す。地金の色調は赤銅色である。63は鉄製品であるが器種は不明。一端が強く内側に折り曲げられている。

#### SK2(Ⅳ-45～59図)

本遺構は覆土の堆積状況から層位毎に遺物の取り上げをおこなった。1～22は1層、23～49はカワラケ溜まり、50～52は下層、53～117は一括出土遺物である。層位上げした中でもっとも遺物が多く出土したのは最上層の1層からであり、染付にコバルトが使用されたものを含むこと、いわゆる湯呑碗(JB-1-o)、寿文皿(JC-2-d)、八角鉢(JB-5-f)などを含むことから東大編年Ⅷc～Ⅷd期に比定される資料である。カワラケ溜まりからは27～42のDZ-2-bがまとまって確認され、それ以外の遺物はごく少なく、瀬戸・美濃系磁器を含まない。下層はもっとも遺物量が少なく陶磁器は図化できなかったが、カワラケ溜まり同様、瀬戸・美濃系磁器を含まず、小振りの肥前系筒形磁器碗(JB-1-l)、頸部がまだ比較的長く、胴部に線刻された釘書きをもつ瀬戸・美濃系徳利(TC-10)、透明釉が施釉された脚付油受け皿(DZ-40-a)が含まれるなど、1層よりは古く18世紀後半に比定される資料である。本遺構南側立ち上がり付近に比較的多くの18世紀代の遺構が検出されており、下層の遺物はそれらの遺構の遺物が混入した可能性もある。

**磁器**(1～12、23、53～70) 1～4、6～8、11、55、62、63は瀬戸・美濃系(JC)、他は肥前系磁器(JB)である。8が白磁、60が青磁染付、67が青磁、ほかは全て染付が施されている。

1～6、57～63は碗である。1～4、6、63は端反碗でJC-1-d。1の見込みと口縁部内側の絵付はダミと毛彫りによるものであり、呉須はコバルトが使用されて

いる。3は焼継痕が確認され、2次的な火熱を受けている。高台内には赤で「山善/横山」の文字が書かれる。4、6は器高も低く、口径も小さい端反碗でも後発的な特徴を有すものである。4は1と同じく、染付と毛彫りで絵付が施されたものであり、染付はコバルトが使用されている。5、62はいわゆる湯呑碗で5はJB-1-o、62はJC-1-eに分類される。5の高台内には「厚貞制」という銘と赤字で「キ」の文字が書かれている。この赤字の存在から、残存部にその痕跡はないが、焼継が施されていた可能性がある。62の絵付は毛彫りにコバルトが塗り埋められ、染付部分が少し盛り上がっている。57は丸碗でJB-1-e。口径に比して高台径が小さく、また器高に比して高台高が非常に低い。口径、文様などから53が本品の蓋と推定される。58はいわゆる広東碗でJB-1-m。器高が低く、広東碗の中でも後出的な様相を呈す。59、61はいわゆる小丸碗でJB-1-j。ともに小丸碗の中でも矮小化が進んだ後出的な様相を呈す。60は筒形碗でJB-1-l。高台平面形が正円より歪なものとなっている。見込みには二重圏線とひどく崩れたコンニャク印判五弁花文が描かれている。

7、65、66は坏である。7、65丸形坏でJB-6-a。7の染付にはコバルトが使用されている。65の絵付は丁寧で、高台内には染付角椀銘が書かれている。66は端反形坏でJB-6-b。体部外面に線彫りの釘書きが施される。8、23、64は皿・平鉢である。8は木型打込成形されたいわゆる寿文皿でJC-2-d。23、64は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた皿で23はJB-2-l、64はJB-2-mに分類される。ともに胎土は薄い灰色を呈し、全体的に器壁が厚い。呉須もやや黒ずむ。蛇ノ目釉剥ぎ部分には輪状の直重ね痕が残る。見込みには崩れたコンニャク印判五弁花が施される。64の畳付にはアルミナ砂が付着している。9、10は鉢で、9がJB-5-b、10はいわゆる八角鉢でJB-5-eに分類される。9は口唇部が平らに整形されている。高台内には圏線が1本と崩れた「乾」と思われる銘がある。10の体部は型打成形された際の凹凸が顕著であり、また蛇ノ目凹形高台状を呈す高台脇にも幅3mmほどの縦位のケズリが残る。11は蓮華でJC-20。型作りされたもので、畳付は無釉である。細長い柄の先端断面は三角形を呈し、その部分を挟むように小さな孔が2箇所穿孔されている。この2つの孔は別作りの柄を三角形空洞部分に差し込み、止めていたものであろう。12、53～56は蓋である。12は端反碗（JB-1-n）蓋で、摘み内は角椀銘、蓋裏には「成化年中製」銘がある。53、54は丸碗の蓋である。53は57の蓋であり、摘み内には一重圏線に「成化年製」銘が書かれている。54の摘み内

には一重圏線に崩れた「乾」と思われる銘が書かれている。55は丸碗（JC-1-a）の蓋。56は蓋物の蓋で、紐状の把手が1つ付く。67は蛇ノ目高台を有する香炉・火入れでJB-9-f。底部内面にはハマと思われる痕跡が確認され、高台の釉が拭き取られた部分には熔着痕が認められる。68は丸碗形の蓋物でJB-13-a。染付にはコバルトが使用されている。69は御神酒徳利でJB-11。胴部の向かい合う位置に梅花と竹が絵付けされている。70は爛徳利でJB-4。染付にはコバルトが使用されている。内面も透明釉が施釉されている。

陶器（13～19、24～26、71～96） 13、14、16、74、75は京都・信楽系陶器（TD）、15、24～26、71～73、77～92は瀬戸・美濃系陶器（TC）、17～19、76、93～96は産地不明陶器（TZ）である。

13～15、71～74は碗である。13は平碗でTD-1-h。高台内には墨書が書かれる。「書」か。14は腰が張った鉄釉丸碗でTD-1-c。畳付脇には面取りが施される。口縁部は鉄釉の上に灰釉が浸け掛けされる。15、71は灰釉薄掛け碗でTC-1-c。ともに器高がかなり低い1-cの中でも後出的な要素をもつものである。71の高台内には墨書が書かれている。72、73はいわゆる拳骨茶碗でTC-1-q。高台は削り出しされたものである。74は端反碗でTD-1-g。胎土は黄色味がかった白色を呈し、やや粗い。畳付脇は面取りされる。16、91は油受け皿である。16は灰釉脚付油受け皿でTD-40-a。底部無釉である。91は錆釉油受け皿でTC-40-c。受け部にはU字状のスリットが1箇所ある。底部釉は拭き取られ、輪状の熔着痕が残る。76、77は皿である。76は軟質施釉陶器の型皿でTZ-2。口縁部はへら状のもので輪花にされるが、輪花の間隔や深さが一定しない。胎土は淡い橙褐色を呈し、やや粗い。内面全体に陽刻、その上に緑釉と褐釉が施釉され、畳付には緑釉が施釉され、いわゆる交趾風の意匠が施されている。高台内の釉は拭き取られている。源内焼か。77は輪高台を有す型皿でTC-2-i。平面形は四方を押され隅丸方形を呈すものであろう。畳付以外施釉されている。17、18、92～96は蓋である。17は急須、18、94～96は土瓶、92は蓋物、93は合子の蓋である。17の胎土にはぶい橙褐色を呈し、緻密なものである。基本的には無釉であるが、摘みの付け根部分に白釉が1滴やや厚く垂らされている。型打成形で、外面に幾何学的な文様が施される。摘み部分は型打ち後、削り出され、縦位のしのぎが施される。18は鉄釉土瓶の蓋である。18の摘み上面は小さく調整され、花卉状を呈す。94は糸目土瓶の、95は三彩土瓶の蓋である。96はいわゆる青土瓶の蓋である。摘み上面は小さく調



整され、花卉状を呈す。93の合子蓋は、受け部以外は内側まで含めて施釉されている。19はいわゆる青土瓶でTZ-34-a。口唇部から内面は無釉である。鉄砲口を有し、直径5mmほどの漉し孔が縦位に2箇所穿孔される。24、87、88は壺・甕である。24は水甕でTC-15-c。内底部には不整形の目跡が4箇所やや盛り上がった形で残る。釉が流し掛けされるが、畳付から高台内は無釉である。高台まで流れた釉は拭き取られるが雑で、その部分は熔着している。高台内中央には直径1cm強の浅く打ち欠いた痕が認められるが、穿孔しかけてやめたのか。87は二耳壺でTC-15-f。肩の相対する位置に紐状把手が2個付いている。88はいわゆる赤津半胴でTC-15-a。口唇部には目跡が2個残る。底部中央には内側から打ち欠き、2次的に穿孔した痕跡が認められる。25、26、78～86は瓶である。25、26、78～82は二合半の徳利である。79は底部釉が拭き取られたものでTC-10-a、他は釉が浸け掛けされたものでTC-10-cに分類される。82以外は体部に点刻の釘書きを有し、25、78は山に「加」、79は○に「上?」、26、80、81はカギ山（あるいは二つ山）に「半」と刻まれている。25、26は胴部に熔着痕が認められる。両者とも口縁部が完全に折り返され、胴部につく形態のものであるが、26は頸部がほぼなく、胴部最大径も肩部にあり、さらに後出的な様相を呈すものである。79も25と同じく、体部が寸胴形に近く、頸部がやや長い、他の二合半徳利よりも前出的な器形の特徴を有す。78、81は口唇部に熔着痕が残る。80の底部には小さな粘土塊が付着する。83は灰釉五合徳利でTC-10-d。底部釉は拭き取られるが、熔着痕が認められる。体部には線刻釘書きで二つ山に「半」と刻まれている。84～86は灰釉一升徳利でTC-10-e。いずれも底部釉は拭き取られる。また底部に84、85は回転糸切り痕が部分的に、86は右回転の糸切り痕がほぼ全部残る。86は肩部より下方に縦位のナデ調整痕が認められる。75は灰釉端反坏でTD-6。畳付脇は面取りされる。89、90は植木鉢でTC-21。89の内面底部に輪状の窯道具痕が残る。90の畳付の相対する位置にアーチ状のスリットが2箇所ある。

土器（27～43、97～100、106） 27～43、97、98、100はかわらけである。27～42はDZ-2-bに分類される。27～40は口径が18.6cm～20.6cmの間に、器高が3.6cm～4.1cmの間の法量に、41、42もこれらよりはやや小さいが口径が17cm、器高が3.2cm～3.3cmの法量におさまるものであり、何らかの目的で同法量のかわらけを揃え、それがまとめて廃棄された可能性が高い。また法量だけでなく見込みと体部立ち上がり境付近

に段を有する（鋭角か鈍角かの違いはあり）という形態的な特徴も共通している。胎土も27、29、30にはぶい橙色を、ほかは橙褐色を呈す。ただしこのような規格性がうかがえる一方で、胎土、底部の糸切り痕、器壁の調整などにはいくつかのタイプもあるようである。すなわち27～31、33、39は底部に左回転の糸切り痕を有し、見込みには同心円状の細かい調整痕が認められる。32、35、36、38は底部に左回転の離し糸切り痕を有し、見込みも同心円状に調整されるが、その中央は同心円を消すように撫でられ、わずかにくぼむ。34、37、40～42の底部に観察される糸切り痕も離し糸切り痕と推定されるが、糸切りが粗くナデ調整されたことで回転方向は不明である。見込みには同心円状の細かい調整痕が認められるが、中央がくぼむ状況はみられない。以上のような状況から、かわらけ溜りから出土したDZ-2-bは、概ね同法量で、一見似通った皿を数箇所から購入した可能性も考えられる。なお実測したものをはじめ、本遺構かわらけ溜りから出土したかわらけは接合率が高く、しかも灯芯痕や2次的な火熱を受けた痕跡などもないことから、複数回使用されることなく、欠損する前に廃棄されたものと推測される。43はいわゆる上製かわらけでDZ-2-dに分類される。底部には二次的な穿孔が確認される。97、100は透明釉が施釉されたものでDZ-2-hに分類される。97、100は口縁部全体にススが付着する。また100には敲打痕も確認される。98は型作りでDZ-2。型作りで平面形が梅花形を呈す。外面には透明釉、内面には白化粧され透明釉が施釉された痕跡をとどめる。99、106は透明釉が施釉された油受け皿で、99がDZ-40-b、106がDZ-40-aに分類される。99の底部には左回転糸切り痕がある。106の受け部のU字状のスリットはごく浅いものである。底部は無釉で、反時計回りに削り込まれている。101はサナである。胎土はにぶい橙色を呈し、外面はナデ調整される。受け部にはアーチ状のスリットが4箇所あり、2次的な火熱を受け、白色化している。102はロクロ成形無印の塩壺でDZ-51-w。局所的に2次的な火熱を受ける。104、105は塩壺蓋でDZ-00-g。105は手で押されたような痕跡をとどめ、全体に2次的な火熱を受ける。107、108は3足を有す土師質丸火鉢でDZ-31-a。ともに胎土はにぶい橙色を呈し、外面はナデ調整される。108の口縁部には敲打痕と、その内側にはススが局所的に付着している。

ミニチュア・玩具（20、103） 20は泥面子・芥子面でDZ-4006-M。胎土は橙褐色を呈し、黒色粒子の含有物がやや目立つ。表面には僅かにキラが認められる。外面のモチーフは流水と紅葉でいわゆる竜田川か。103は碁

石状製品でDQ-4004-H。胎土は橙褐色を呈す。

瓦 (44～46、109) 44～46、109は瓦である。44は軒棧瓦である。瓦当文様の軒平部は「江戸式」を簡略化したような文様である。中心飾りには分割線はあるが脇文様が無い。唐草は単線で巻き込み先端が肥大化し巻き込みがほとんど見られなくなるLである。子葉は内側にくびれが2箇所見られ上端の長いjである。いずれの文様も大振りて空間が少なく、全体が詰まった感じがする。瓦当文様は富山藩の家紋である丁子梅鉢文である。梅鉢の花弁の断面が稜線がなく丸みのある丁子梅鉢文Cである。表面はやや光沢のある黒色である。45は丸瓦である。裏面には布袋痕、2本の棒状圧痕が付く。玉縁は2.3cmと短い。弧になっている断面の接地面が下の面に対し斜めになっている。外面はケズリによる成形痕が残る。46は丁子梅鉢文の鬼瓦である。裏面には大きな龍頭が付く。上部のみ残存しており全体は不明。109は平瓦である。幅23cm、長さ27.5cm。表面に黒色の付着物がみられる。

金属 (21、22、47～49、110～112) 21は棒状の一端が鉤状にされたものである。地金は黄色。火箸か。22は鉄の角釘である。47、48は地金が赤銅色を呈す襖の引手と思われる。47は環状長方形を呈す胴部1つと、それをはめ込む平面形が隅切り長方形を呈す薄い鏝のようなパーツ2つの計3つから成る。胴部長辺1箇所に溶接された痕跡と、短辺には小さな釘穴が2箇所確認できる。鏝のようなパーツの一方のみに縁に唐草の点刻が刻まれている。48は調査時は47とは別々に出土したが、47の胴部の短辺のごく緩い凸部と、48の短辺上下にあるごく浅い凹みが一致することから、本来は48も47のパーツの一つで、襖の引手奥の正面にみえるいわゆる鏡板の可能性が高い。裏は無紋だが、正面は47と同じく点刻で竹と松が刻まれている。49は煙管の吸口である。地金は赤銅色を呈す。110～112は鉄製品である。110はいわゆる頭巻釘と思われる。頭部を除き全体にサビと同化した材のような痕跡をとどめる。111は断面が方形を呈し、端部の一方が環状を呈す棒状製品である。112は細い柄に、先端が括れた刃が直角にのびる鍛造の鉄製品である。柄と刃には溶接の痕跡は認められない。刃の少し括れたあたりから切っ先にのみ、湾曲面とは反対側の面に片刃らしきものが確認される。また同面に、ヘラ状のもので横位に凹まされた痕跡が数本確認される。

木製品 (113～116) 113は桁目の1枚板を使用した大ヘラか。柄に近い方の材の側面は斜めに削り落とされている。114、116は建築物の構造材か。114は、ほぼ

同じ幅の溝状の凹みが2本の平行して確認されることから、鴨居の端材とも考えられる。116は小口に板目がみられる直方体の部材である。中央に長方形の孔が1箇穿孔されている。穿孔された面の一方は孔を挟み斜めに削られた痕と浅いU字状に削られた痕が確認されるが、もう一方の面は平坦にされ、穿孔部あたりに釘穴が1箇所ある。なお釘穴は穿孔がない側面の一方にも縦位に2箇所確認される。115は桶・樽の蓋か。桁目板が円形加工される。断面方形の釘が1つ残存する。

石製品 (50～52、117) 50、51、117は硯、52は砥石である。石材質は硯は全て粘板岩、砥石は流紋岩である。硯はいずれも平面形が長方形の長方硯の形態を呈し、丘（あるいは陸）と呼称される墨を磨る部分が摩滅し、浅くくぼむ。51、117は硯陰（あるいは硯背）と呼称される硯の背面にも丘状の浅い凹みが作られており、石の裏表が使用された事がうかがわれる。52は材質から判断すると中砥か。石材はやや赤みを帯びる。本来は細長い直方体であったと思われるが、裏表面使用され、欠損側は両面ともくぼむ。

#### SU4 (IV-59 図)

1は京都・信楽系陶器半球碗でTD-1-b。畳付脇が小さく面取りされている。2、3は煙管で、2は雁首、3は吸口である。1遺構から検出されており、本来は1つの煙管であった可能性もある。ともに地金は赤銅色を呈し、2の中程には敲打痕が1箇所確認される。

#### SK11 (IV-59 図)

1はかわらけでDZ-2-a。胎土はにぶい橙色を呈し、底部には左回転の糸切り痕がある。口縁部には灯芯痕が3箇所確認される。

#### SX15 (IV-59 図)

1は肥前系磁器の底部無釉碗でJB-1-b。青磁で、やや大きめの貫入がみられる。2はかわらけでDZ-2-a。胎土は橙褐色を呈し、内外面ともナデ調整される。底部には右回転の回転糸切り痕を有す。口縁部1箇所に灯芯痕が付着する。

#### SX38 (IV-60 図)

1は瀬戸・美濃系磁器の染付御神酒徳利でJC-11-b。染付にはコバルトが使用されている。2はロクロ成形無印の塩壺でDZ-51-w。底部の糸切り痕は撫で消されている。二次的な火熱を受け、白色化している。

SK76 (IV-60 図)

1 は丸瓦である。裏面には布袋痕、3本の棒状圧痕が付く。玉縁は2.0cmと短い。弧になっている断面の接地面が下の面と平らになっている。外面はケズリによる成形痕が残る。

SU78 (IV-60 図)

1 は肥前系磁器染付皿で JB-2-d。型打ち成形され、体部は緩やかな輪花形を呈す。口唇部は内傾するように平らに削られ、口錆が施される。高台内には目跡3箇所と、二重角枠に渦福銘が確認できる。2 は肥前系陶器碗で TB-1-d。胎土は橙褐色を呈し、内外面に白土による渦刷毛目が施される。3 は瀬戸・美濃系陶器錆釉挿鉢で TC-29。総釉掛けされ、底部釉は粗く拭き取られている。底部内外面に長楕円形の目跡がそれぞれ3箇所残る。また底部には右回転の糸切り痕がある。

SK84 (IV-61 図)

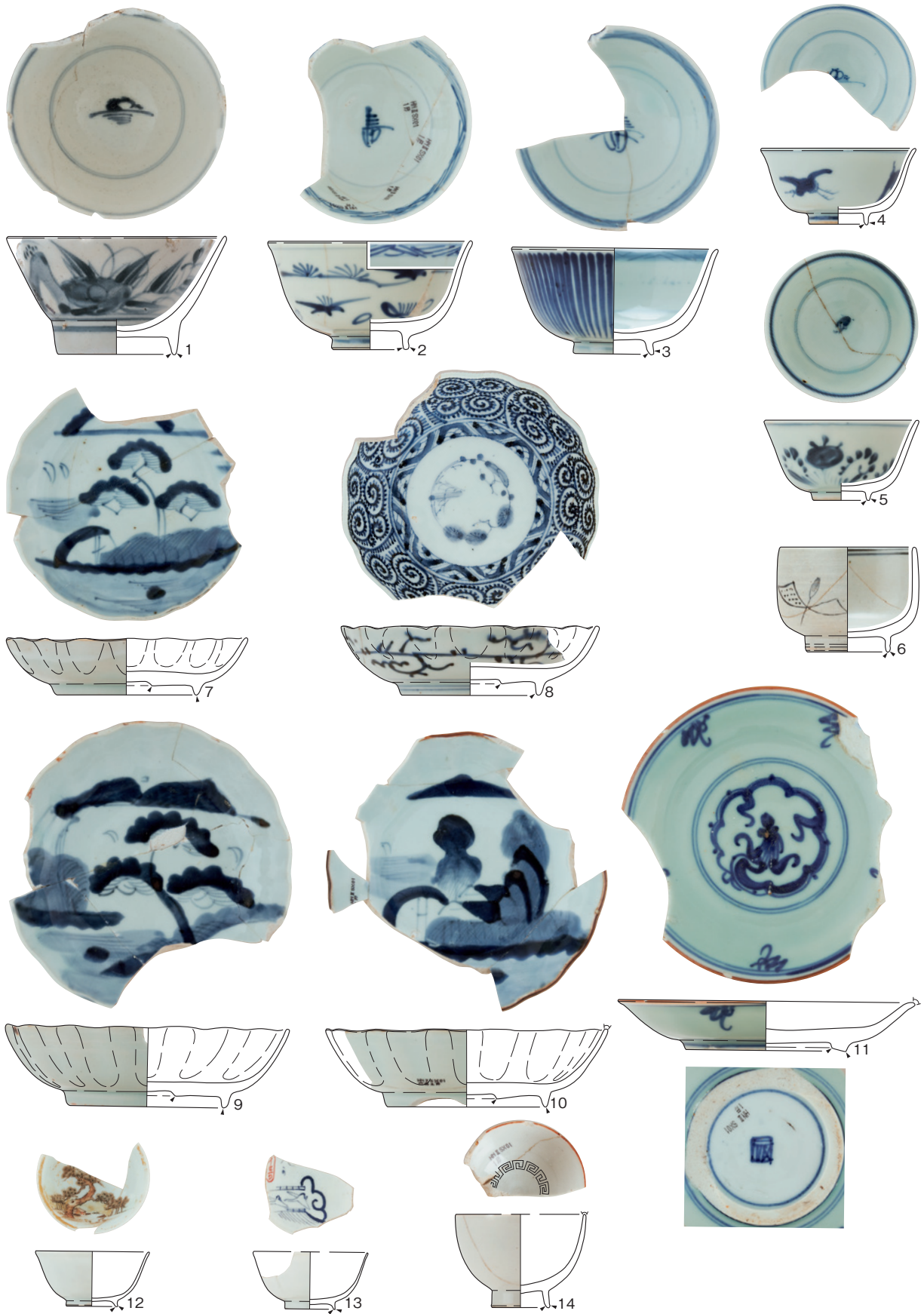
1 は瀬戸・美濃系灰釉五合徳利で TC-10-d。底部は粗くナデ調整され、わずかに糸切り痕がある。また釉も粗く拭きとられている。胴部には点刻の釘書きがある。

SU91 (IV-61 図)

1 は肥前系のいわゆる京焼風陶器皿・平鉢で TB-2-c。見込みには黒ずんだ呉須で山水文が描かれてる。高台内中央に円圏と、その外側に「水？」の刻印と記号のような彫りこみが施されている。

SB95 (IV-61 図)

1 は景德鎮窯系青花の水注で JA1-27。形作りで、体部2パーツと片口部分の計3パーツを貼り合わせ、高台は削り出されている。体部外面には羽毛状の陽刻がみられる事から鳥をモチーフとした水注か。内外面施釉され、底部内面には窯体内での降灰と思われる黒点が多く認められる。図面では判りにくいですが、呉須は底部付近の圏線のほかに片口や胴部にもわずかに確認されることから、本品は陽刻の上にさらに呉須による装飾が施されていたと思われる。



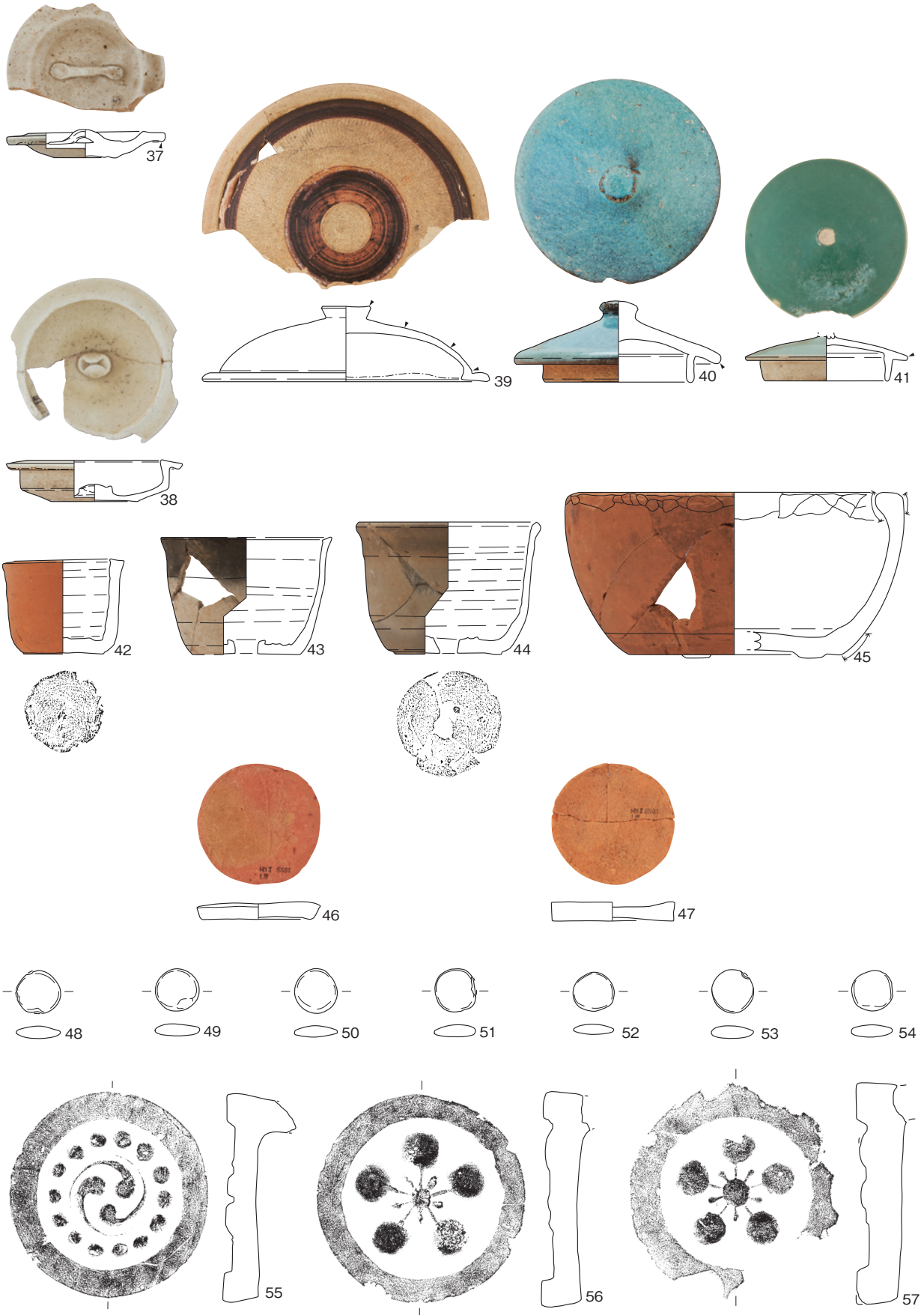
IV-40 図 SX1 (1) 出土遺物



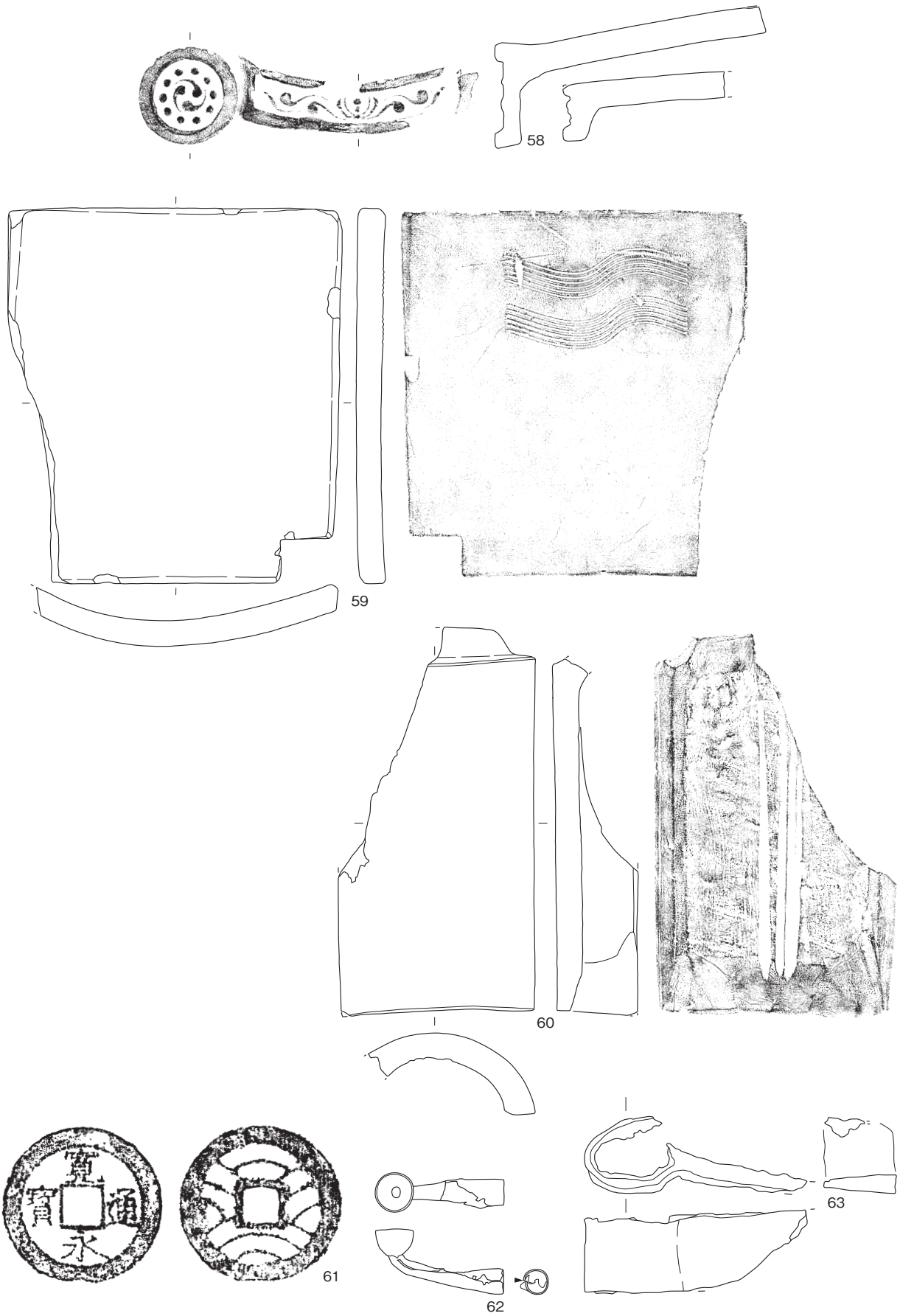
IV-41 図 SX1 (2) 出土遺物



IV-42 図 SX1 (3) 出土遺物

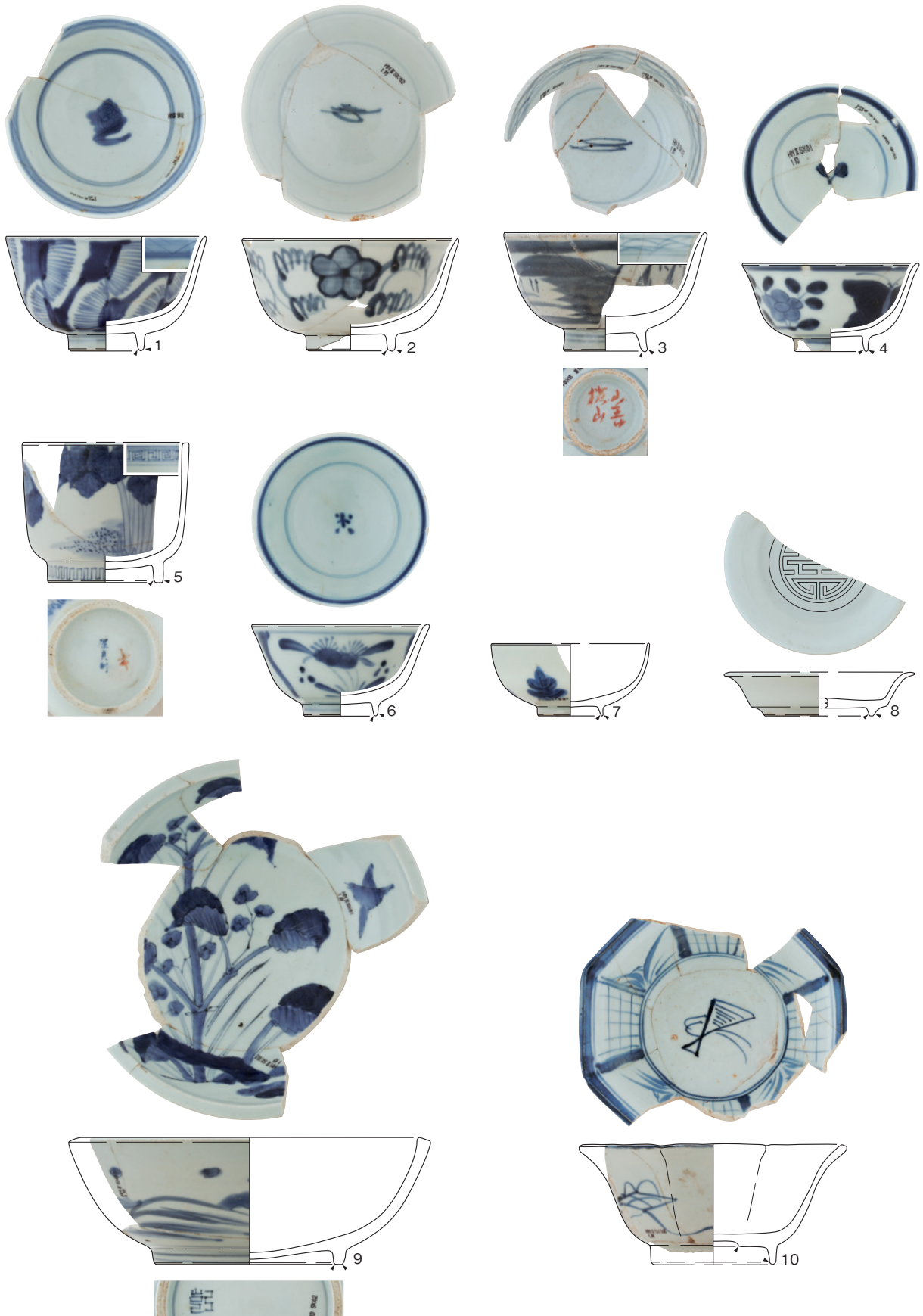


IV-43 図 SX1 (4) 出土遺物 (55～57は1/4)



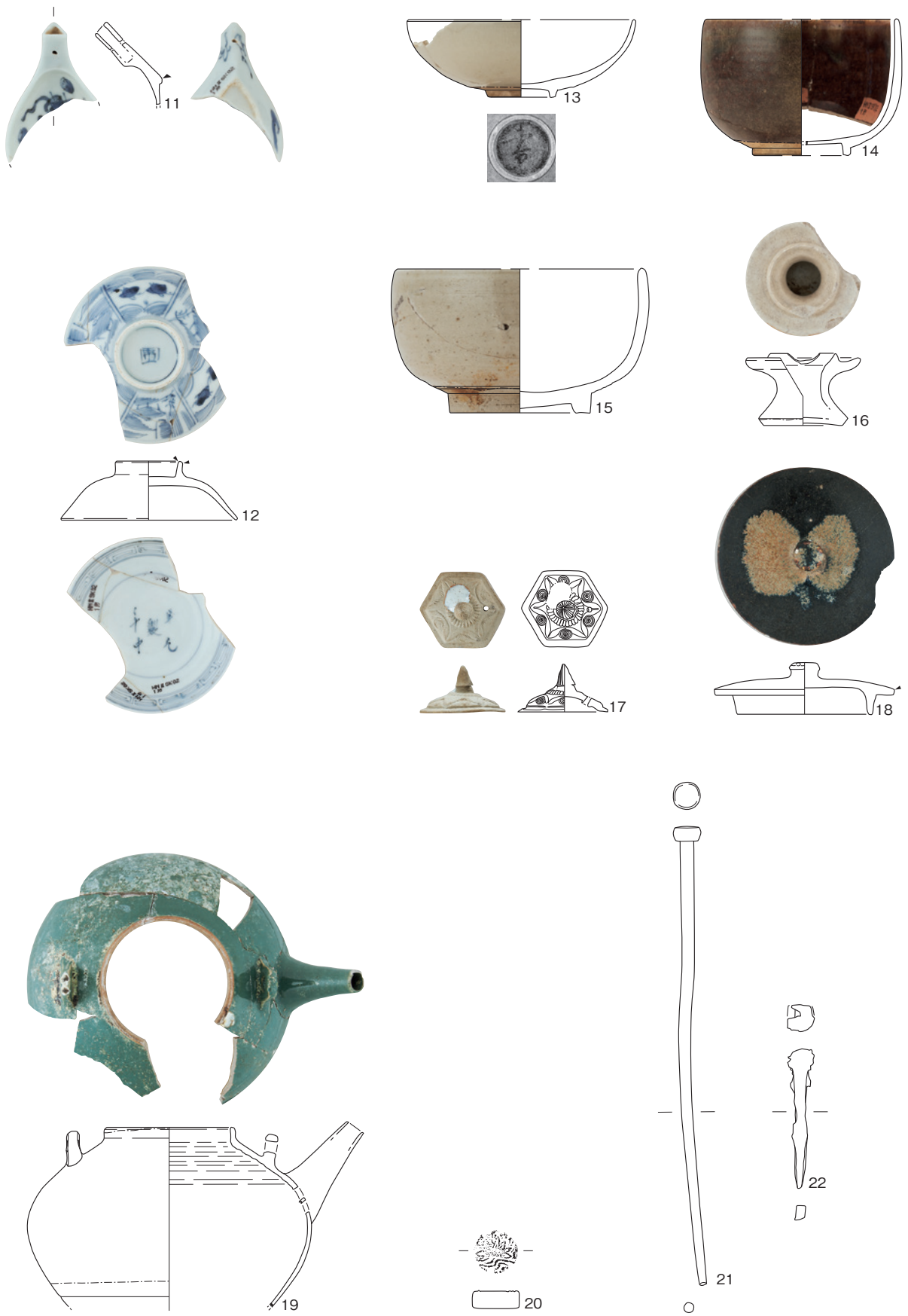
IV-44 図 SX1 (5) 出土遺物 (58～60は1/4、61は1/1、62・63は1/2)





IV-45 図 SK2 (1) 出土遺物

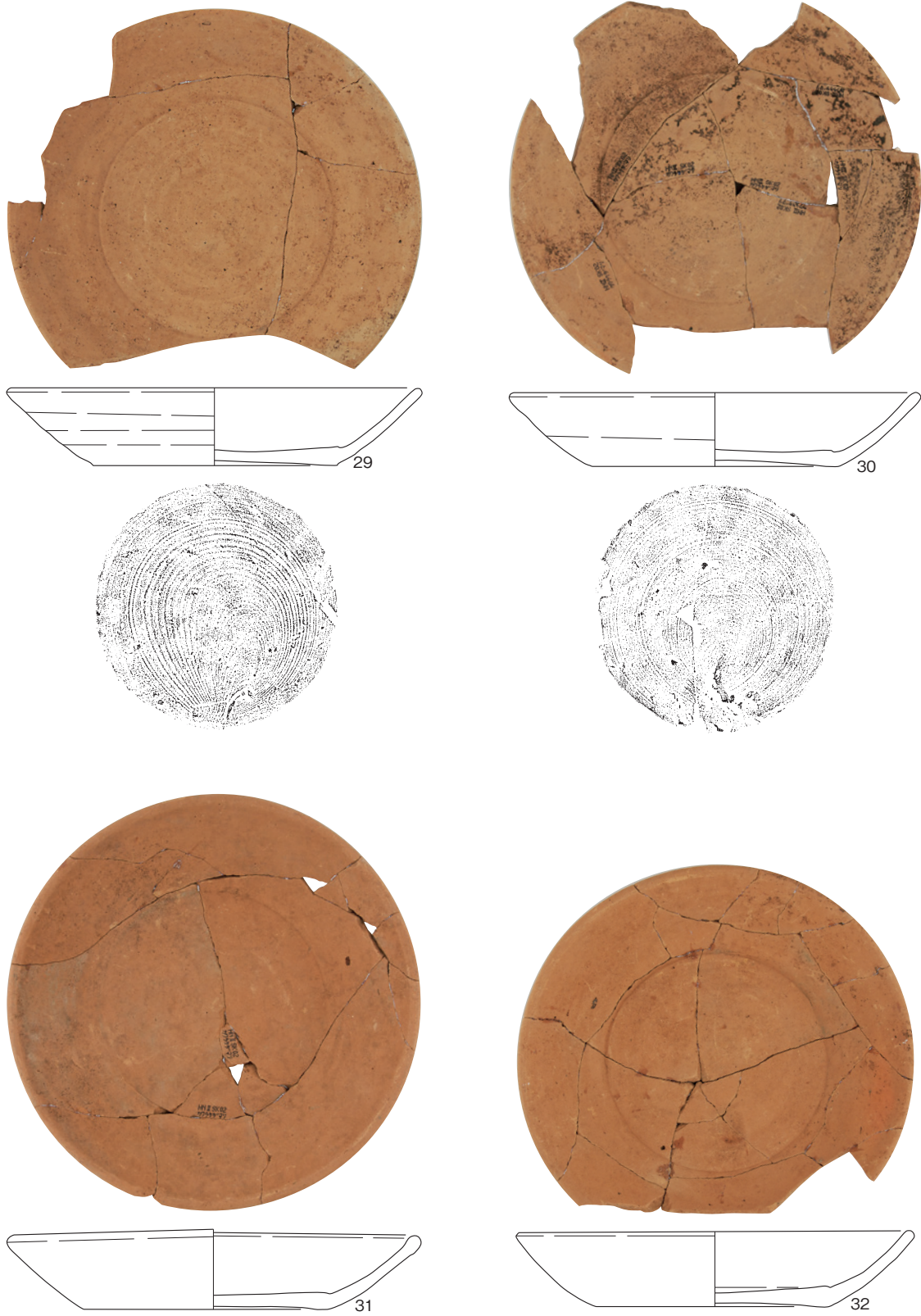
IV 看護職員等宿舎3号棟地点の調査



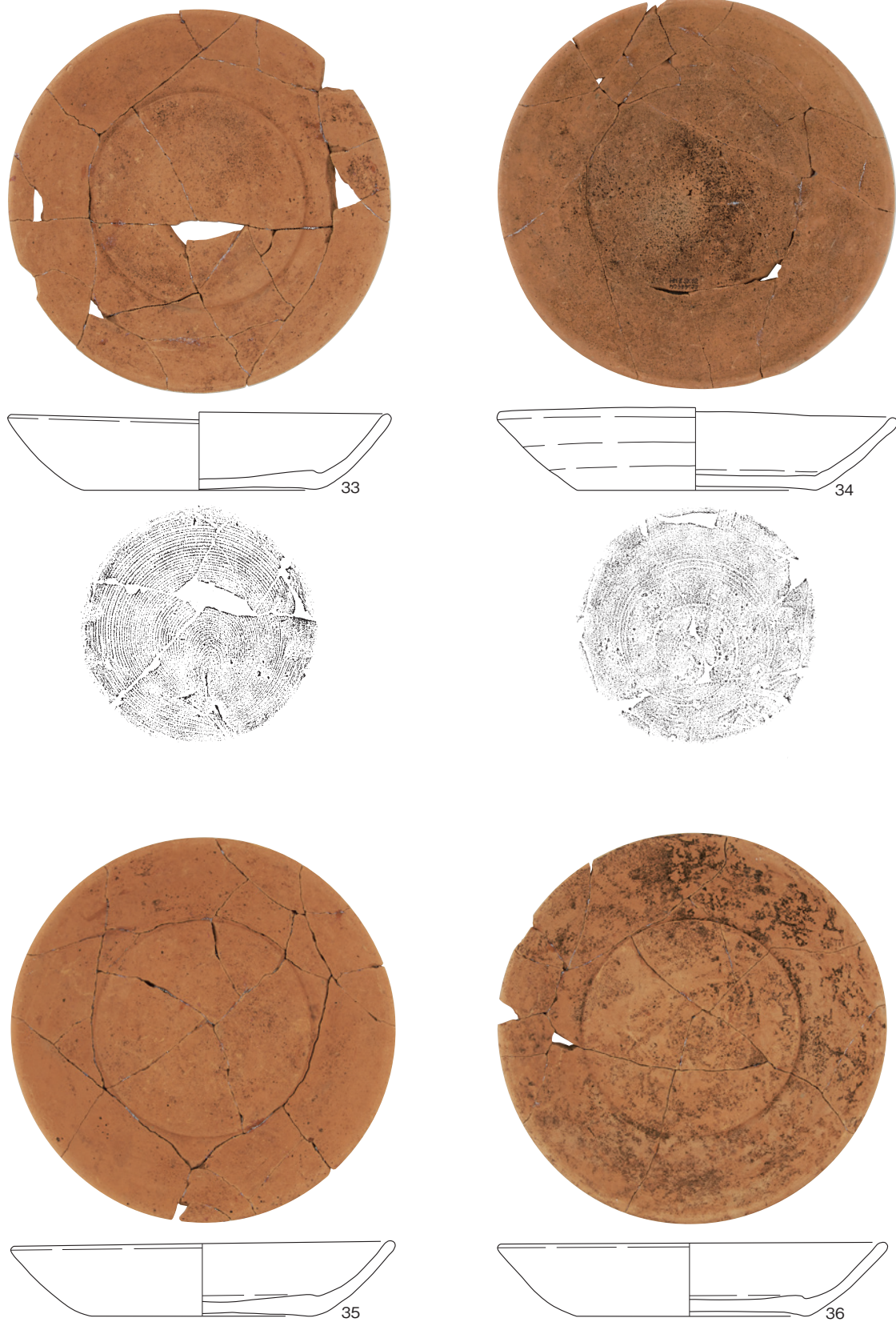
IV-46 図 SK2 (2) 出土遺物 (21・22は1/2)



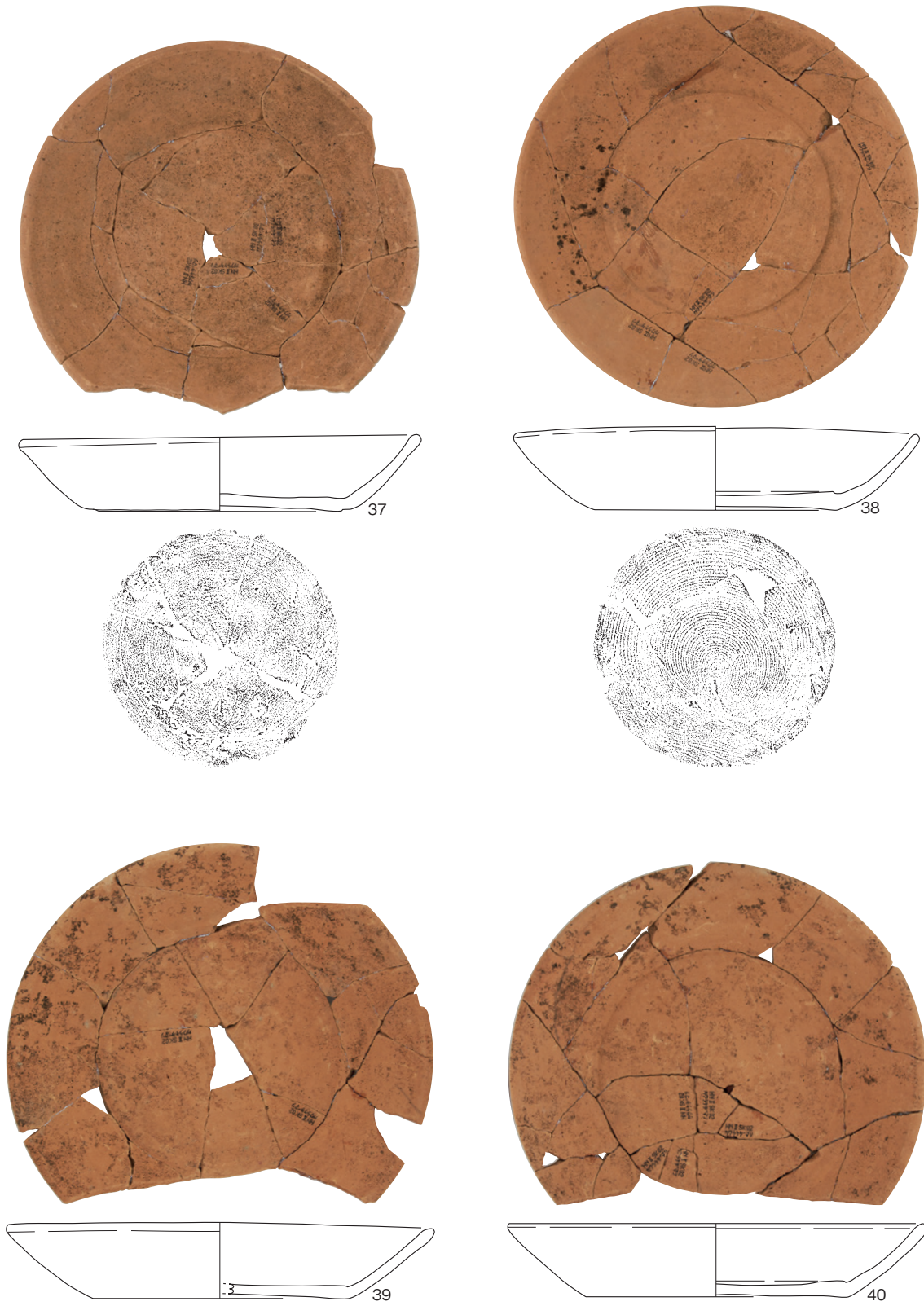
IV-47 図 SK2 (3) 出土遺物



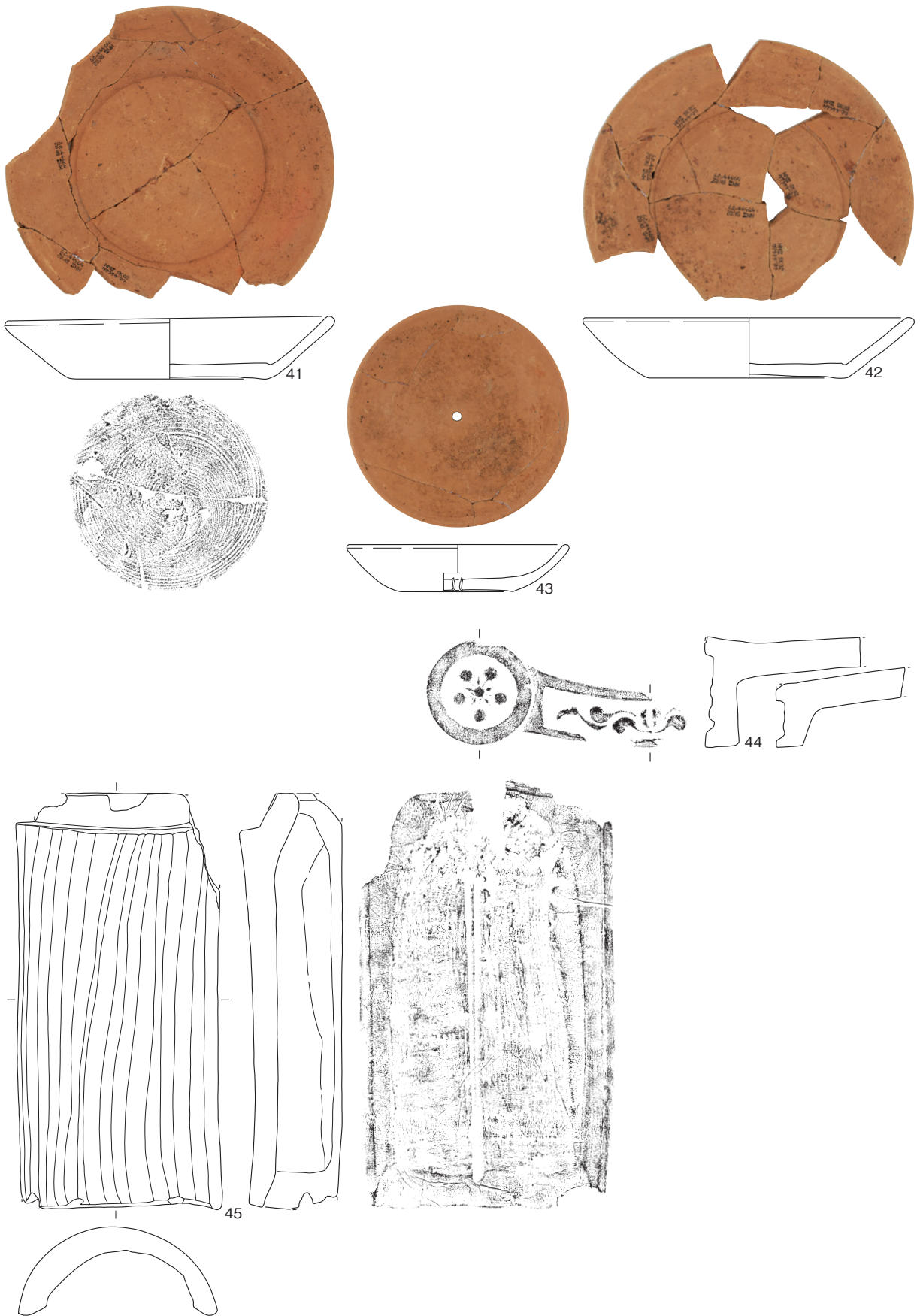
IV-48 図 SK2 (4) 出土遺物



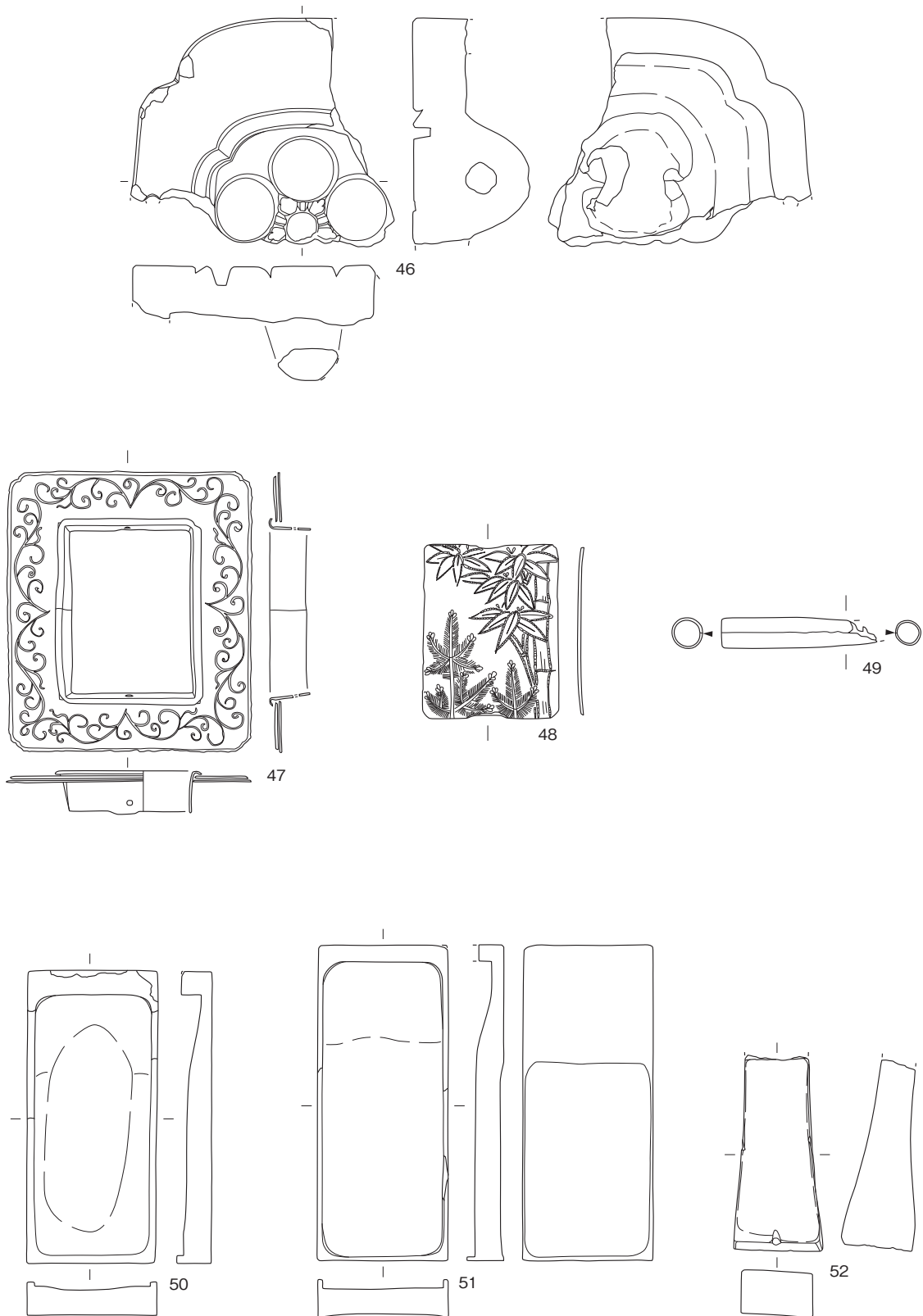
IV-49 図 SK2 (5) 出土遺物



IV-50 図 SK2 (6) 出土遺物

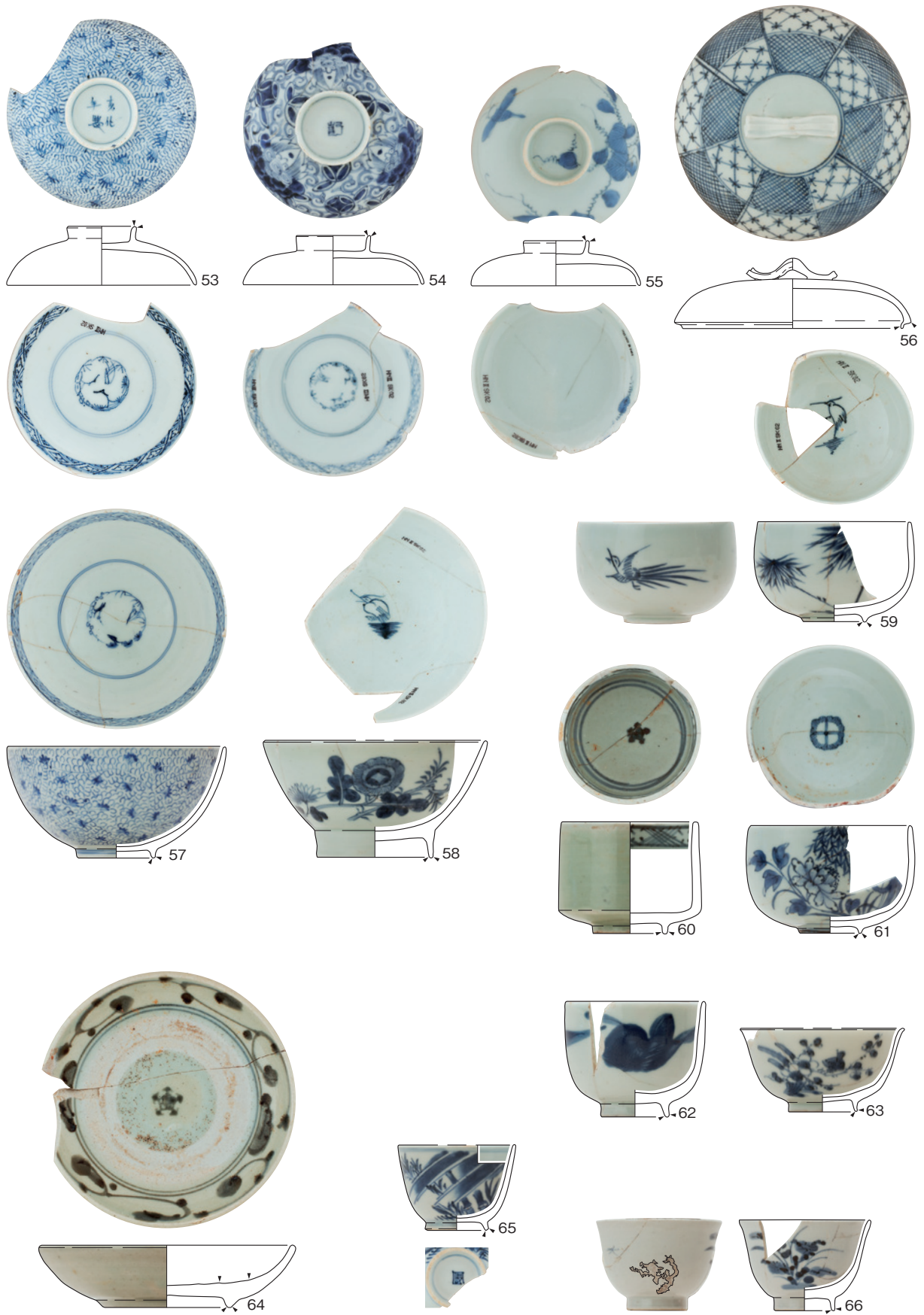


IV-51 図 SK2 (7) 出土遺物 (44・45は1/4)



IV-52 図 SK2 (8) 出土遺物 (46は1/4、47～49は1/2)

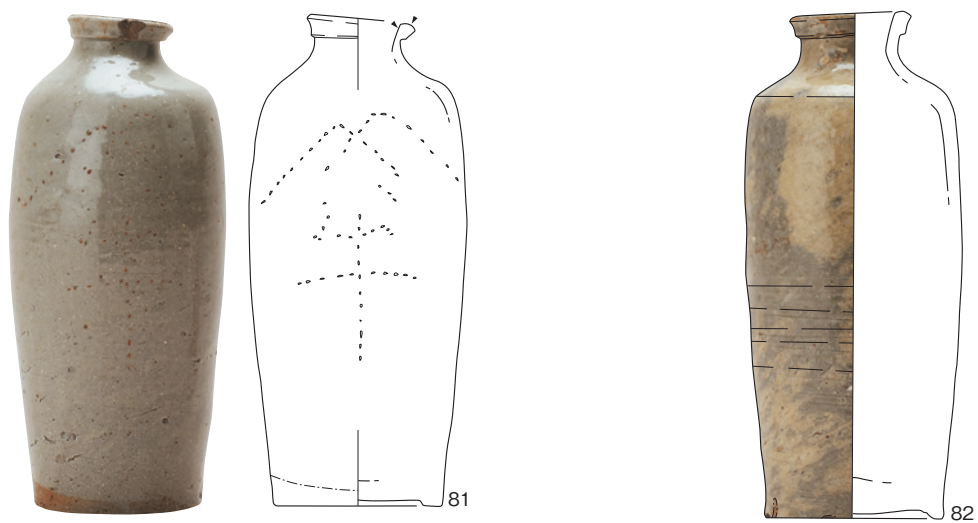




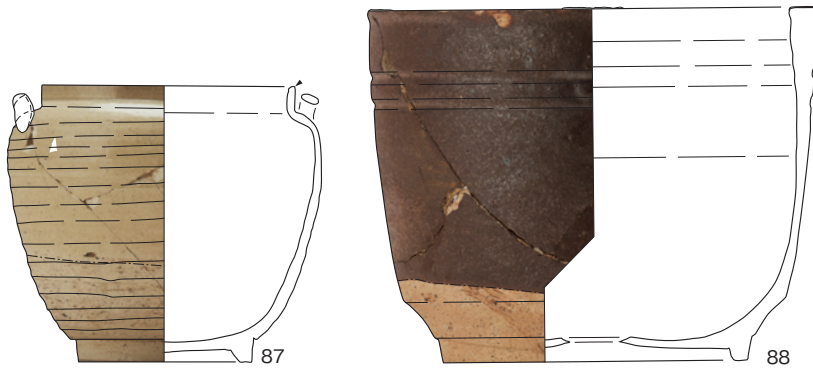
IV-53 図 SK2 (9) 出土遺物



IV-54 図 SK2 (10) 出土遺物



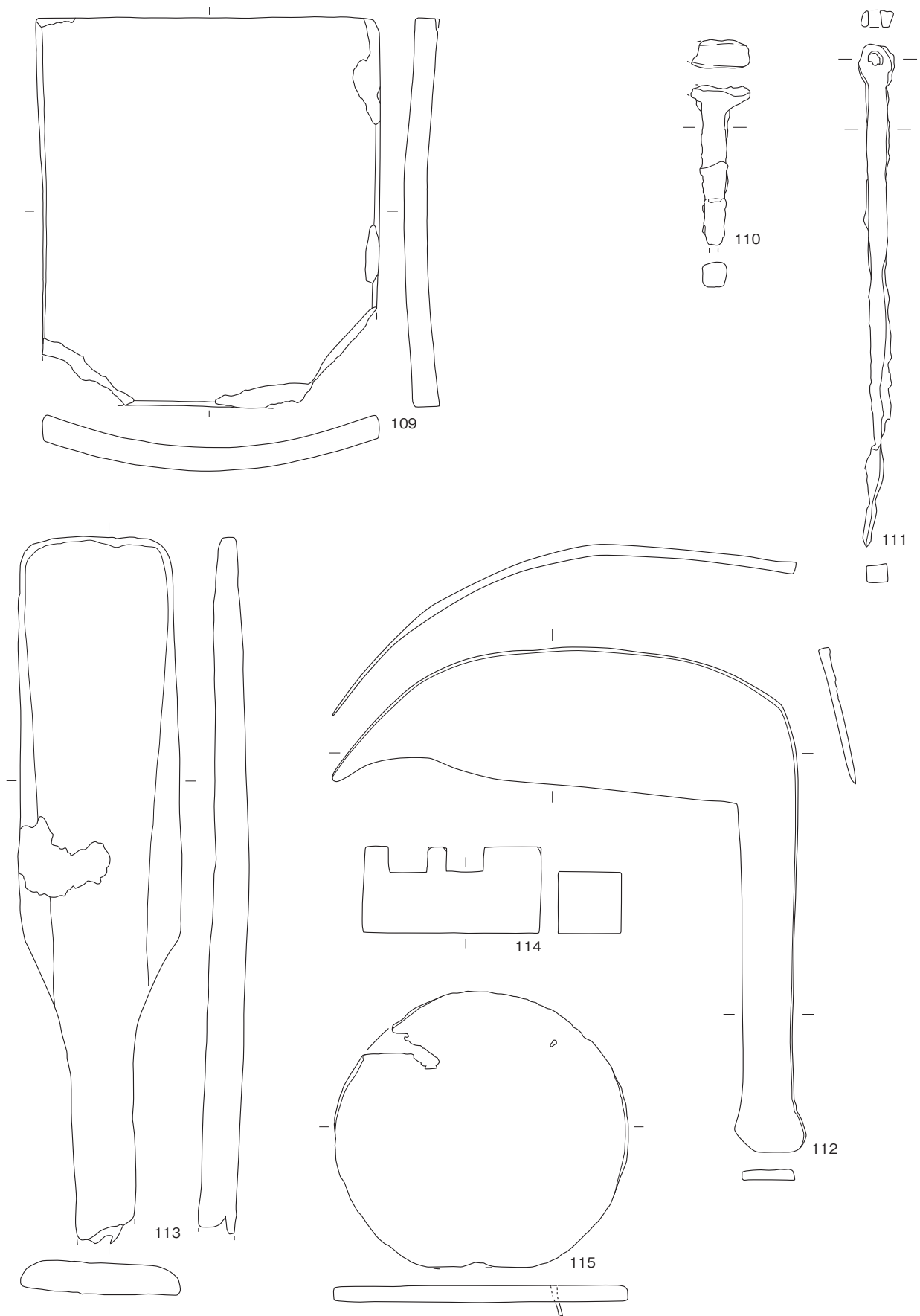
IV-55 図 SK2 (11) 出土遺物



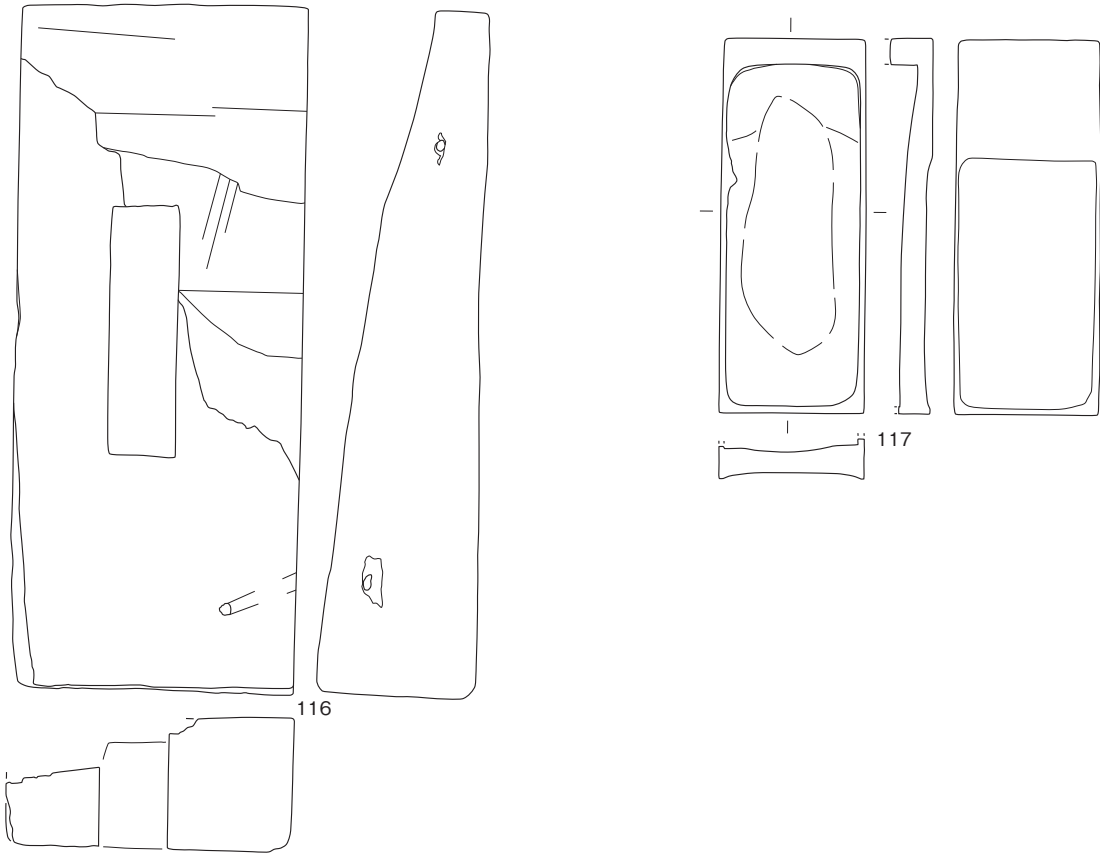
IV-56 図 SK2 (12) 出土遺物



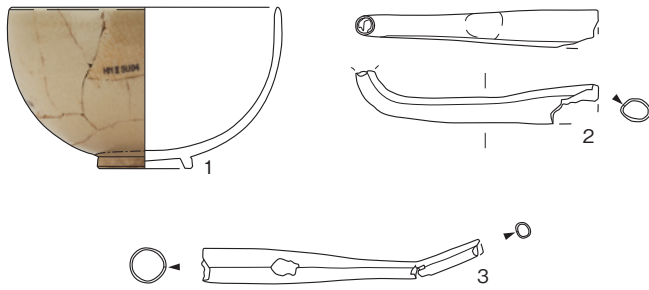
IV-57 図 SK2 (13) 出土遺物



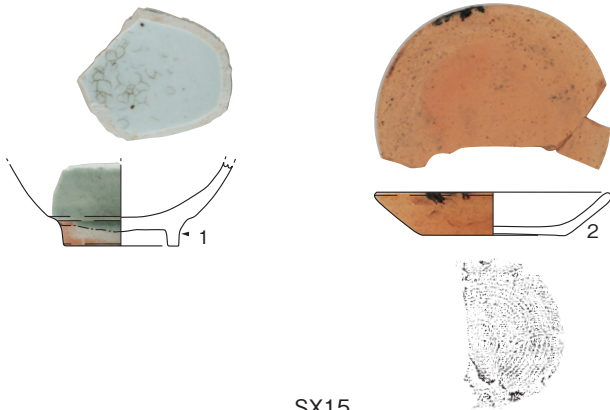
IV-58 図 SK2 (14) 出土遺物 (109は1/4、110～112は1/2)



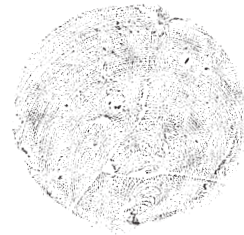
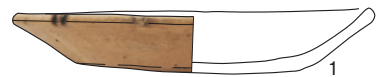
SK2 (15)



SU4 (2・3は1/2)

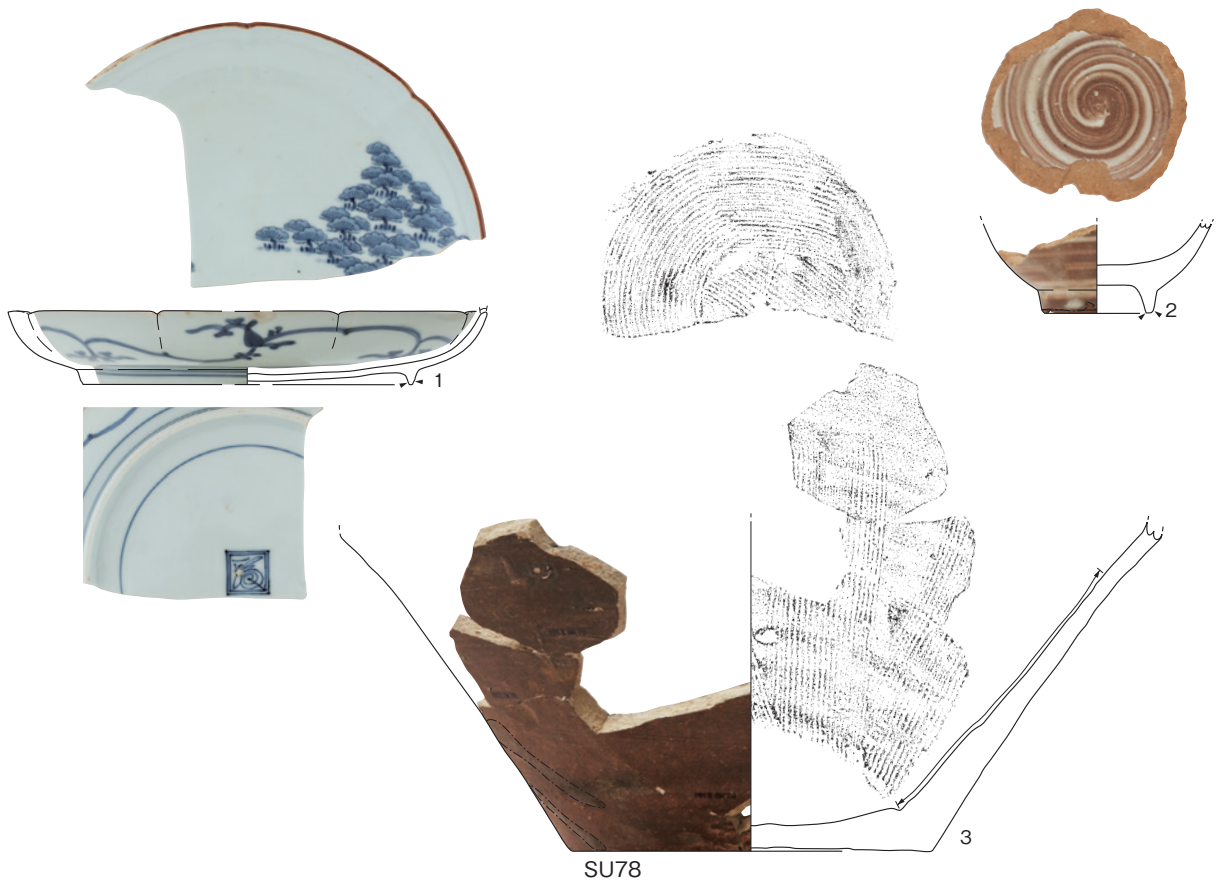
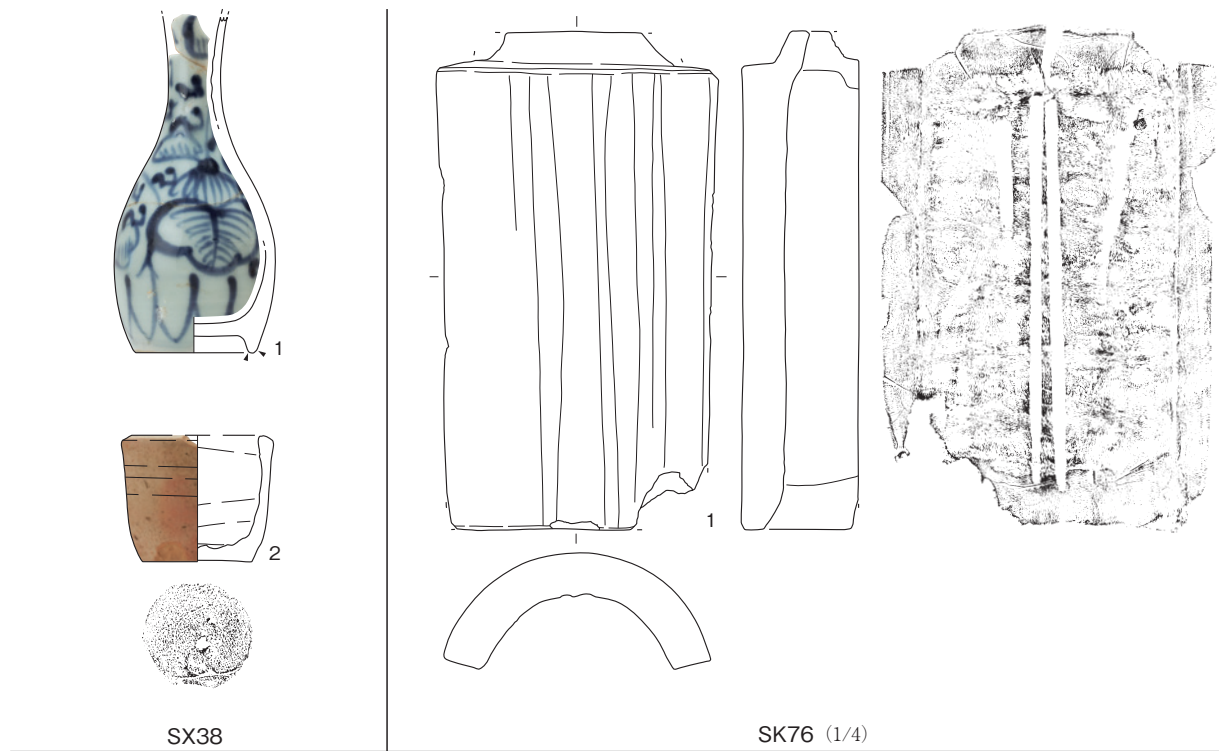


SX15



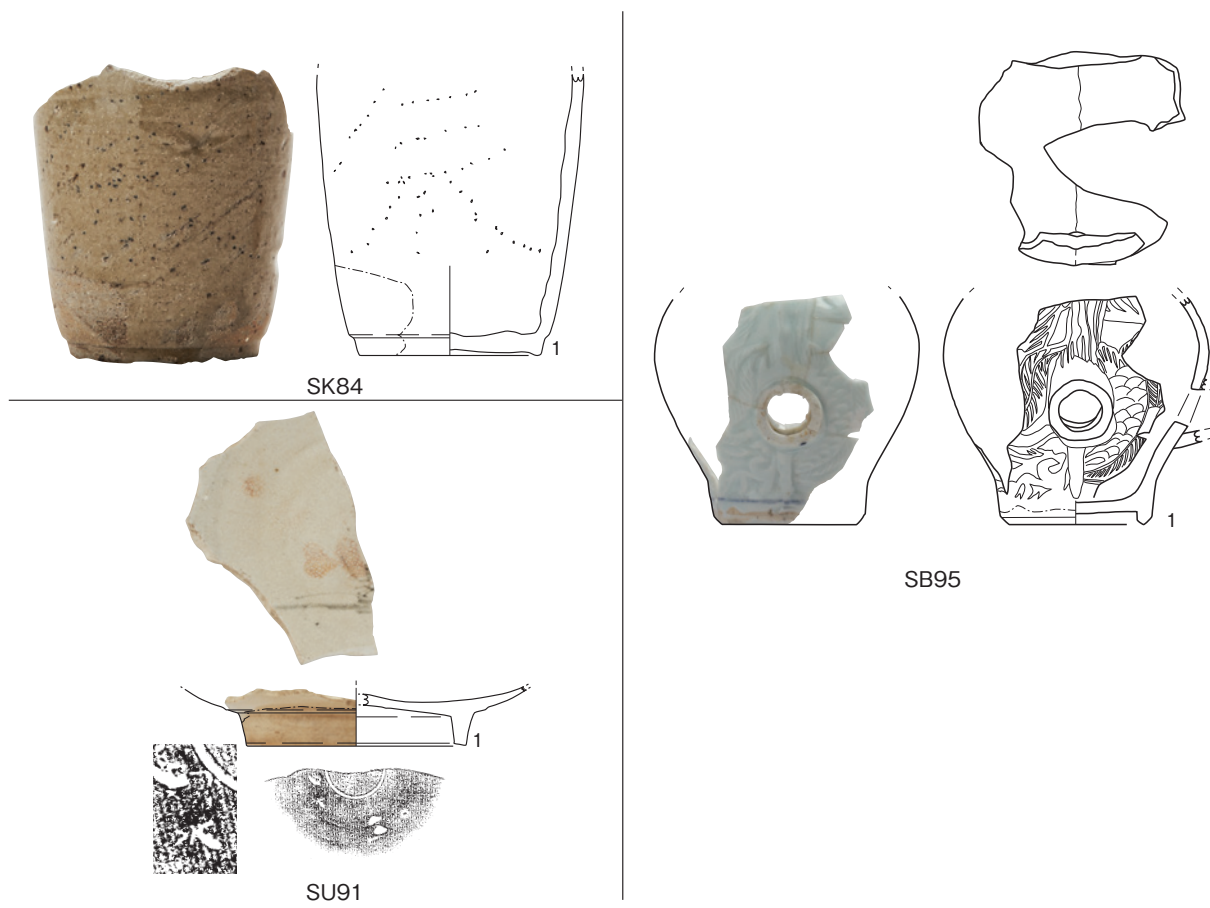
SK11

IV-59 図 SK2 (15)、SU4、SK11、SX15 出土遺物



IV-60 図 SX38、SK76、SU78 出土遺物





IV-61 図 SK84、SU91、SB95 出土遺物

主要遺構出土磁器・陶器・土器組成表

※カウント基準を満たす副体資料はないが、破片資料が存在しているとき「0」で示した。

段階	胎質・産地 JA1 (景徳鎮窯系)															胎質・産地 JA9 他															胎質・産地 JA8 JA9 他															胎質・産地 JA6 JA8 JA9 他															胎質・産地 JA3 JA4															胎質・産地 JA2															胎質・産地 JA1 (景徳鎮窯系)															胎質・産地 JA1 (景徳鎮窯系)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
	器種	1	2	3	5	6	9	10	13	15	2	3	6	3	他	器種	18	器種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999
器種	1	2	3	5	6	9	10	13	15	2	3	6	3	他	18	器種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										







IV 看護職員等宿舎3号棟地点の調査

遺構名	胎質・産地 器種 小分類	DZ (生産地不明)						土器 合計	総計
		00 (蓋)			他				
		k	l	o	他	小計	合計		
SX1					3	20	20	163	
SK2					2	21	21	209	
合計		0	0	0	5	41	41	372	

## 第Ⅲ章 看護職員等宿舍3号棟地点出土の動物遺体

### はじめに

医学部附属病院看護職員等宿舍3号棟地点からは、26群の動物遺体が出土している(表1)。これらの資料は、すべて現場にて肉眼で確認のできたもののみを任意に採集したものである。その為、遺構内に包含されていた時の組成を反映していないことが想定されることから、地点全体の動物遺体の出土傾向の詳細な議論は避け、分類群ごとの出土傾向の概観と遺体個々の観察結果を記載するにとどめる。なお、遺構ごとの動物遺体全体の出土傾向は、表12にまとめた。

### 1. 貝類遺体

#### (1) 貝種組成(表2, 図1)

##### ①計数方法

貝種組成は最小個体数で表している。なお、計数方法は以下のとおりである。巻貝類は殻柱が2分の1以上、アワビ類は殻頂部分が残存している資料を計数対象としている。二枚貝類は、殻頂部分が残存している資料を計数対象とした。それを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数し、そのうち多いほうを最小個体数としている。以上の計数対象以外の資料は、「破片」として一括して扱っている。各遺構の分類群内において、計数対象資料が残存せず、「破片」のみである場合は、一括して1個体として計算をおこなっている。

なお、形態からヤマトシジミとマシジミと区別しづらゐものが混在していることから、「種」までの同定はおこなわず、「シジミガイ属」とした。

##### ②分析結果(表2, 図1)

以上の方法で計数した結果、本調査地点において出土した貝類遺体は11群95個体であった。ハマグリが最も多く(35個体・36.8%)、次いでシジミガイ属(21個体・22.1%)、サザエ(12個体・12.6%)が出土しており、以上の3群以外に出土率が10個体または、10%を超えるものはない。なお、SK2・1層から出土しているサザエの殻は有棘型である。つまり、このサザエは、波の荒い外洋に面した場所で採集されたものである可能性が推測される。それ以外は、いずれも殻柱しか残存していない為、棘の有無は不明である。また、5%以上出土している遺構は、SX1とSK2の2基の遺構である。以下に2基の遺構それぞれの出土傾向を示す。

SX1 本遺構からは6群13個体の貝類遺体が出土した。ハマグリとシジミガイ属が最も多く、4個体ずつ出土している。その他にサザエが2個体(殻1蓋2)、バイが1個体、そして破片資料のみであるがアワビ類とアカガイが出土している。

SK2 本遺構からは10群67個体の貝類遺体が出土した。ハマグリが26個体38.8%で最も多く、次いでシジミガイ属が13個体19.4%、サザエが8個体11.9%出土しており、以上の3群以外に10%を超えるものはない。その他には、アワビ類(6個体9.0%)、アカニシ(5個体7.5%)、アカガイ(4個体6.0%)、アサリ(3個体4.5%)、ボウシュウボラ、マガキ(各1個体1.5%)が出土している。

#### (2) 主要貝類のサイズ分析

##### ①分析方法

可能なものすべての貝類について、計測作業をおこなった。計測方法は、阿部(2006)に基づく。特に二枚貝類の計測定義は以下のとおりである。

##### ・計測法A-2

前・後側歯の外側端部(アカガイ類などにおいては鉸歯の両端)を結んだ線を基準軸とする。

殻長: 基準軸に直交する2本の直線によって殻を挟んだ時のその幅。

殻高: 基準軸に対して平行な2本の直線によって殻を挟んだ時のその幅。

##### ・計測法B(註5)

殻の前後(横軸)で最も長い箇所を基準軸とする。

殻長: 殻の前後(横軸)で最も長いところの幅(基準軸上の殻の幅)。つまり、「最大長」である。

殻高: 基準軸に対して平行な2本の直線によって殻を挟んだ時のその幅。

歯間(鉸歯)長: 前・後側歯の外側端部を計測点としたその間の長さ。アカガイ類など主歯及び左右の後側歯が一体となっているもの(鉸歯)は、その長さ。

外靱帯溝長: 外靱帯溝は、後背縁において殻頂部からその中ほどにかけての靱帯の付着している溝を指す。外靱帯溝長はその部分の長さ。

二枚貝類に関して、シジミガイ属、アカガイに関しては計測法 A-2、ハマグリ、アサリに関しては計測法 B によって計測を行なっている。SK2 出土のハマグリとシジミガイ属は、記述統計量とヒストグラムによってサイズ組成の傾向を示した(表 4・5, 図 2・3)。さらに、SK2 に関してのみ、以下でハマグリ、シジミガイ属、アサリのサイズ組成の傾向を概観する。

## ②ハマグリ of 殻長の推定 (表 3)

サイズの分析を行うに際して、破損が激しく、各遺構内において、主要部位である殻長をほとんど計測できないこともあることから、回帰・相関分析を用いて比較的残存状況のよい外靱帯溝長からの殻長の推定を試みた。以下に分析結果を述べ、導出された推定式を提示する。

分析の結果、ダービンワトソン比が、1.88 で多次関数よりも 2 に近いことから、1 次関数による回帰がサイズ推定に有効であると判断された。また、決定係数をみると、0.99 と非常に高く、この式の精度が非常に高いことが確認された。さらに、分散分析の結果をみても共に 1% 水準で有意であった。したがって、この式によって、外靱帯溝長から殻長を推定することが、非常に有効であることが示された。なお、導出された式は、以下のとおりである。

$$y = 3.27x + 5.53 \quad (y: \text{殻長}, x: \text{外靱帯溝長})$$

分析結果の表及びグラフにおいて、実際に計測した殻長のデータは“計測値”、以上の式により推定した殻長のデータを“推定値”としている。

## ③分析結果 - SK2 出土のハマグリ・シジミガイ属・アサリの殻長について -

### ・ハマグリ (表 4・図 3)

SK2 のハマグリ of 殻長の平均値は、計測値が 64.2mm、推定値が 53.6mm である。ヒストグラムの形状は、共に多峰型である。特に、計測値では殻長 75mm 以上 80mm 未満、推定値では殻長 60mm 以上 65mm 未満に大きなピークがみられる。変動係数は計測値が 25%、推定値が 37% であり、サイズにばらつきがあることが示されている。以上の結果、殻長 50mm 以上の「大型」のサイズのものが主体であるものの、サイズにバラエティがある上、主要なサイズが定まらないことが示された。この結果は発掘調査における資料の採集の仕方によるところが大きいと思われる。仮にこれらの結果が、遺構内に包含されていた時のサイズ組成を反映して

いるとするならば、殻長 50mm 以上の「大型」のものが主体であったことから、焼ハマグリなど 1 個体で 1 つの料理として成立するようなものに用いられた可能性が高く、また、サイズのバラエティがあることから、採集された時期もしくは場所の異なるものが混在しているものと想定される。

### ・シジミガイ属 (表 5・図 3)

SK2 のシジミガイ属 of 殻長の平均値は、21.0mm である。ヒストグラムの形状は、殻長 18mm 以上から 20mm 未満と 24mm 以上から 26mm 未満の 2 箇所ピークを持つ双峰型である。しかし、分析に用いることのできた資料数が 9 点と少ないことから、詳細な分析及び考察は控え、データを提示するにとどめたい。

### ・アサリ (表 6)

SK2 においてアサリは 1 個体のみ計測することができた。殻長 89.1mm と非常に大形である。しかし、計測することのできなかった 3 点はいずれも殻長 30mm 程の小型のものである。

## 2. 魚類遺体 (表 7)

### (1) 分析方法

魚類遺体の分析方法は樋泉 (2003) に基づく。資料から主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨を抽出して「同定用資料」とし、それ以外の部位は「同定対象外資料」とする。しかし、分類群によって、「同定用資料」以外に同定可能な特徴的な部位を有するものは、それらも適宜、同定に用いる。また、本報告で同定できなかったものに関しては、標本がなかったことなどの要因から同定するに至らなかったものを「未同定」、残存状況が悪く、同定することが不可能であったものは「同定不可」とする。

### (2) 分析結果

魚類遺体は、4 群 13 点が出土している。なお、軟骨魚綱は含まれていなかった。SX1・1 層と SD3? からタラ科の腹椎がそれぞれ 1 点出土しているほかは、すべて SK2 から出土している。

SK2 からは 3 群 11 点出土している。最も多いのがタイ科及びマダイ亜科で 3 点出土している。次いでスズキ属及びスズキが 2 点、マグロ属が 1 点出土している。その他の資料は、「未同定」が 2 点、「同定対象外」が 3 点である。なお、「未同定」とされた資料の内、カワラケ溜りから出土した左擬鎖骨は、大形で骨質も非常に厚手である。この資料は、中央部で切断されており、下半分



のみ残存しているものである。カジキマグロ類のものと推測される。発掘調査時の資料の採集方法の問題もあるが、全体的に大形の魚類が多い。また、マグロ属以外の、タイ科、スズキ、タラ科は、江戸時代において「上」ものとされていた種類である。

### 3. 鳥類遺体 (表8)

#### (1) 分析方法

同定作業をおこなうにあたって、椎骨や趾骨など同定困難な部位は「同定対象外資料」として対象からはずした。また、同定対象部位において、長骨における端部など、同定の決め手となりうる部分が欠損しているものに関しては「同定不可」としている。

計測方法は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター(2005)を参考にした。

#### (2) 分析結果

鳥類遺体は、7群19点が出土している。SU150から、カラス科の左尺骨が1点出土しているほかは、すべてSK2より出土している。SK2において、カモ類とハト科が2点出土しているほかは、ニワトリ、キジ科、フクロウ科が1点ずつ出土している。そのほかには、「同定不可」が8点、「同定対象外」が1点である。出土したすべての鳥類が食物残滓であるかは不明であるが、少なくともニワトリ左尺骨や、カモ類右尺骨にはそれぞれ刀傷や切断面を有することからその可能性は高い。なお、キジ科左橈骨は、小形のニワトリである可能性も想定される。

### 4. 哺乳類遺体 (表9～11)

#### (1) 分析方法

哺乳類の計測定義はDriesch(1976)及び茂原(1986)に基づいている。

四肢骨骨端の閉鎖時期を基準にイヌの年齢の推定をおこなっている。なお、四肢骨骨端の閉鎖時期による推定は浅利(2003)を基準とする。

#### (2) 分析結果

哺乳類遺体は、4群98点が出土している。なお、最小では11体、最大では16体分出土している。イヌが最も多く81点で5から8体分、次いでネコが10点で2から3体分、ウシもしくはウシ/ウマが5点で2から4体分、ウサギ類右肩甲骨が1点出土している。その他に、不明

家畜四肢骨・骨幹部分がSK38より1点出土している。

#### ①イヌ

イヌは、SX1、SK2、SK3、表土の4箇所から出土している。

まず、左大腿骨において、SX1・1層、SK2一括、SK2・1層から出土したものが接合したことから、それに関連するイヌ遺体1体分がSX1とSK2の両方の遺構に分かれて含まれていることが示された(資料A)。資料Aは、SK2より腰椎、右寛骨、左大腿骨、左脛骨、右第2～3中足骨が出土し、それ以外のほとんどの部位は、SX1より出土している。体高は、左橈骨と右脛骨の全長から山内忠平(1958)の推定式(橈骨：Ⅱ式、脛骨Ⅲ式)によって算出した結果、45cmと推定される(表11)。なお、長谷部言人(1952)のサイズ分類では、中大型にあたる。しかし、端部が未癒合であるなど骨化が完了していないことから、成長途上の個体であることを考慮に入れる必要がある。なお、四肢骨の骨端の閉鎖時期から成長の程度を推定すると、生後6ヵ月以上9ヵ月未満であったことが推測される。

SX1は、資料A以外のイヌ資料は含まれていない。それに対して、SK2には、もう1体分含まれる。右大腿骨、左右脛骨からなる資料で、骨端の閉鎖時期から生後3ヵ月未満と推測される資料である(資料C)。その他に、資料Aのものである可能性の高い肋骨24点、腰椎1点が出土している。

その他の場所からは、SK3から軸椎が1点、表土から頭蓋骨、左上腕骨が1点ずつ出土している。いずれも骨化の完了していない幼・若獣のものである。

以上から、本地点から出土したイヌ遺体はいずれも、骨化の完了していない幼・若獣のものであることが示された。

#### ②ネコ

ネコはSK2とSD3?から出土している。いずれも骨化が完了していることから成獣である。

#### ③ウシ・ウシ/ウマ

SX1から4点出土しているほかは、SK2周辺からウシ/ウマの腰椎が1点出土するのみである。いずれも鋸によってつけられた切断面を有する。

SX1より出土した左上腕骨遠位部分と左尺骨近位部分は、同一個体である。この2つの資料を繋げると、その上腕骨切断面と尺骨肘頭部分切断面が一致する。これらの切断面は、上腕骨遠位端部を切断する際に付いたもの

と推測され、このことは、加工直前において、上腕骨部分と橈・尺骨部分に分かれておらず、前肢の関節部分(肘)がまだ付いた状態であったことを物語っている。加工痕の分類は、久保(1999)の定義によると「切断」で、特に残存状況の良い上腕骨における切断面は、1方向から刃を入れて切断したB類にあたる。切断は、外側から歯を入れて、内側に向かって行なわれている。尺骨遠位に残る切断面を観察すると、上腕骨と同様に外側から内側に向かって切断が行なわれている。このことから、上腕骨と橈・尺骨をそれぞれ関節部分から切り離す際の切断方向は、同じであったことが推測される。

なお、SX1より出土した左上腕骨は、西中川ら(1991)の推定式(I式)より体高120.9cmのウシのものであることが推定される。この体高は、明治33年(1900)の改良前の和牛の原型をとどめているとされている見島牛とほぼ同じである(宇田川1971)。

#### 【参考文献】

- 浅利昌男 2003 『新・犬と猫の解剖セミナー—基礎と臨床—』  
株式会社インターズー
- 阿部常樹(2006)「貝類遺体のサイズに関する計測方法」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室(p.438-444)
- 宇田川竜男 1971 『標準原色図鑑全集第18巻 飼鳥・家畜』  
保育社
- 久保和士 1999 『動物と人間の考古学』真陽社
- 茂原信夫 1986 『東京大学総合研究資料館所蔵 長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ』東京大学総合研究資料館
- 樋泉岳二 2003 「明石町遺跡の魚類遺体群」『東京都中央区明石町遺跡』明石町遺跡調査会(p.172-180)
- 長谷部言人 1952 「犬骨」『吉胡貝塚』文化財保護委員会(p.145-150)
- 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2005 『埋蔵文化財ニュース120 環境考古学5 鳥類骨格図譜』
- 西中川駿・他 1991 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』(平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書)
- 山内忠平 1958 「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第7号, 鹿児島大学農学部(p.125-131)
- Driesch (1976) A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University.

表1 医学部附属病院看護職員等宿舍3号棟地点出土動物遺体種名表

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA	
腹足綱 Class Gastropoda	
古腹足目 Order Vetigastropoda	
ミミガイ科 Family Haliotidae	
メガイアワビ <i>Haliotis (Nordotis) gigantea</i>	
クロアワビ <i>Haliotis (Nordotis) discus discus</i>	
サザエ科 Family Turbinidae	
サザエ <i>Turbo (Batillus) cornutus</i>	
盤足目 Order Discopoda	
フジツガイ科 Family Ranellidae	
ボウシュウボラ <i>Charonia lampas sauliae</i>	
新腹足目 Order Neogastropoda	
アクキガイ科 Family Muricidae	
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	
エゾバイ科 Family Buccinidae	
バイ <i>Babyronia japonica</i>	
二枚貝綱 Class Bivalvia	
フネガイ目 Order Arcoida	
フネガイ科 Family Arcidae	
アカガイ <i>Anadara (Scapharca) broughtonii</i>	
カキ目 Order Ostreoida	
イタボガキ科 Family Ostreidae	
マガキ <i>Crassostrea gigas</i>	
マルスダレガイ目 Order Veneroida	
シジミガイ科 Family Cobicalidae	
シジミガイ属 <i>Corbicula sp.</i>	
マルスダレガイ科 Family Veneridae	
アサリ <i>Tapes (Ruditapes) philippinarum</i>	
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	
脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA	
硬骨魚綱 Class Osteiithyes	
タラ目 Order Gadiformes	
タラ科 Family Gadidae	
属種不明 gen. et sp. indet.	
スズキ目 Order Perciformes	
スズキ科 Family Serranidae	
	スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>
	タイ科 Family Sparidae
	マダイ亜科 Subfamily Pagrinae
	属種不明 gen. et sp. indet.
	サバ科 Family Scombridae
	マグロ属 <i>Thunnus sp.</i>
	鳥綱 Class Aves
	カモ目 Order Anseriformes
	カモ科 Family Anatidae
	カモ亜科 Subfamily Anatinae
	ガン族 Anserini spp.
	カモ族 Anatini spp.
	キジ目 Order Galliformes
	キジ科 Family Phasianidae
	ニワトリ <i>Gallus gallus var. domesticus</i>
	属種不明 gen. et sp. indet.
	ハト目 Order Columbiformes
	ハト科 Family Columbidae
	属種不明 gen. et sp. indet.
	フクロウ目 Order Strigiformes
	フクロウ科 Family Strigidae
	属種不明 gen. et sp. indet.
	スズメ目 Order Passeriformes
	カラス科 Family Corvidae
	カラス属 <i>Corvus sp.</i>
	哺乳綱 Class Mammalia
	ウサギ目 Order Lagomorpha
	ウサギ科 Family Leporidae
	ウサギ類 <i>Lepus sp.</i>
	食肉目 Order Carnivora
	イヌ科 Family Canidae
	イヌ <i>Canis familiaris</i>
	ネコ科 Family Felidae
	ネコ <i>Felis catus</i>
	偶蹄目 Order Artiodactyla
	ウシ科 Family Bovidae
	ウシ <i>Bos taurus</i>

表2 出土貝類遺体一覧

遺構	採集単位	メガイ アワビ	クロア アワビ	アワビ類・種不明		サザエ	ボウシ ユウボラ	アカニシ	バイ	アカガイ		マガキ	シジミガイ属		アサリ		ハマグリ		合計	地点内 出土率	備考
				殻	蓋					左	右		左	右	左	右	左	右			
				△	○					○	○		○	○	○	○	○	○			
SX01	1層			△	1	2							3			3	4	10	10.5%	サザエ殻：殻柱のみ残存	
	1層灰色土								1										1	1.1%	
	灰色土層									○									1	1.1%	
	地山上層												1						1	1.1%	
SX01・合計				△		2			1	○			4					4	13	13.7%	
SK02	一括	1	○	5		1	5		4	3	1	7	12	2	1	9	7	40	42.1%	アワビ類破片：1個体分，マガキ：殻頂のみ残存	
	1層	1	3	○	1								1	1	1	16	12	23	24.2%	アワビ類破片：殻頂付近が欠損しているだけではほぼ1個体分の破片を含む(メガイ?殻長165mm±),サザエ:有棘,アサリ:合弁?	
	焼土層			△	1														2	2.1%	サザエ殻：殻柱のみ残存
	焼土下層				1												1	1	2	2.1%	サザエ殻：殻柱のみ残存
SK02・合計		2	3	○		8	1	5			4	1	13		3		26	67	70.5%		
SK02周辺					1														1	1.1%	
SK03										1									1	1.1%	
SD03?													1	2		2			4	4.2%	
SK38 下層																△			1	1.1%	ハマグリ：「大型」個体のもの
SK66																△			1	1.1%	ハマグリ：「大型」個体のもの
表土									1							△			2	2.1%	ハマグリ：「大型」個体のもの
不明					1			2					2						5	5.3%	サザエ殻：殻柱のみ残存
合計		2	3	2	12	1	7	2	6	1	21	3	35					95	100.0%		

○：「破片」資料のみあり，△：破片微量もしくは小型。

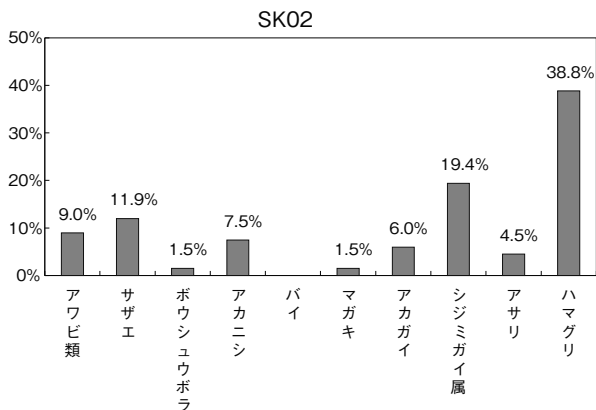
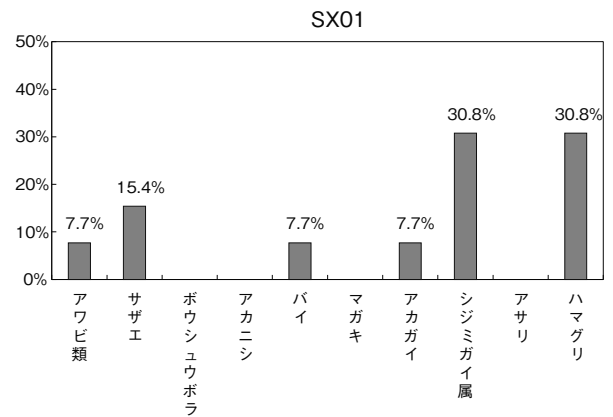
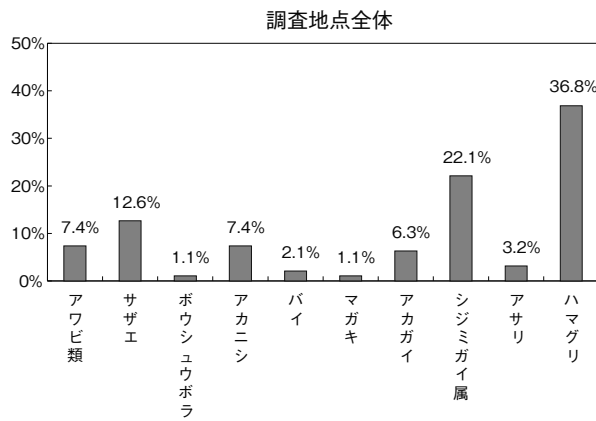
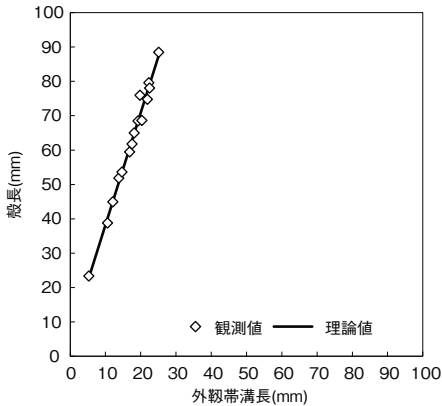


図1 出土貝類遺体組成グラフ

表3 ハマグリの子殻長と外靱帯溝長に関する回帰相関分析の結果



相関係数	0.99
決定係数	0.99
ダ・ビントソク比	1.88
関数式	$y=3.27x+5.53$

表4-1 SX1及びSD3?出土ハマグリの子殻測値(単位:mm)

遺構	左右	殻長		殻高	外靱帯溝長	
		計測値	推定値			
SX01	1層	左	38.81	40.11	31.42	10.58
			65.82		50.61	
		右		40.60	34.59	10.73
			54.10		42.74	14.86
SD03?	左		26.06	21.01	6.28	
			53.25		14.6	

表4-2 SK2出土ハマグリの子殻に関する記述統計量(値単位:mm)

SK02	全体				1層			
	殻長		殻高	外靱帯溝長	殻長		殻高	外靱帯溝長
	計測値	推定値			計測値	推定値		
サンプル数	17	25	21	25	10	12	12	12
平均値	64.20	53.64	46.33	14.72	65.79	60.36	46.39	16.77
標準偏差	15.72	19.46	11.76	5.95	19.14	18.69	13.69	5.72
分散	247.26	378.80	138.31	35.46	366.30	349.39	187.43	32.71
範囲	65.12	64.68	45.12	19.79	65.12	64.68	45.12	19.79
最小値	23.36	22.82	19.72	5.29	23.36	22.82	19.72	5.29
中央値	68.49	60.64	48.42	16.86	75.36	64.08	45.51	17.92
最大値	88.48	87.50	64.84	25.08	88.48	87.50	64.84	25.08
尖度	1.05	-1.28	-0.40	-1.28	0.72	-0.64	-0.92	-0.64
歪度	-0.93	-0.16	-0.50	-0.16	-1.15	-0.45	-0.38	-0.45
標準誤差	3.93	3.97	2.63	1.22	6.38	5.64	4.13	1.72
変動係数	0.25	0.37	0.26	0.41	0.31	0.32	0.31	0.36

	焼土下層			
	殻長		殻高	外靱帯溝長
	計測値	推定値		
サンプル数	1	1	1	1
値	53.58	53.48	41.98	14.67

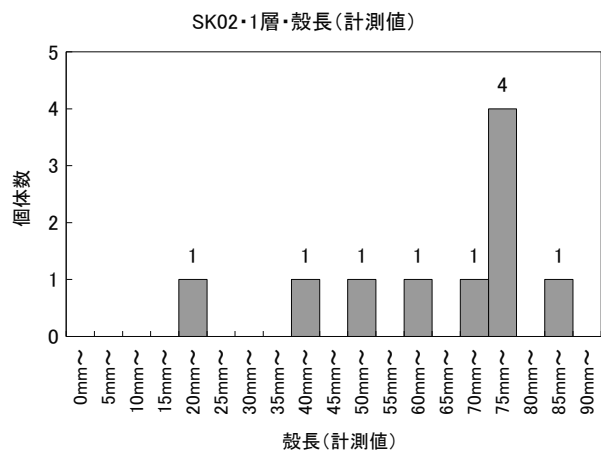
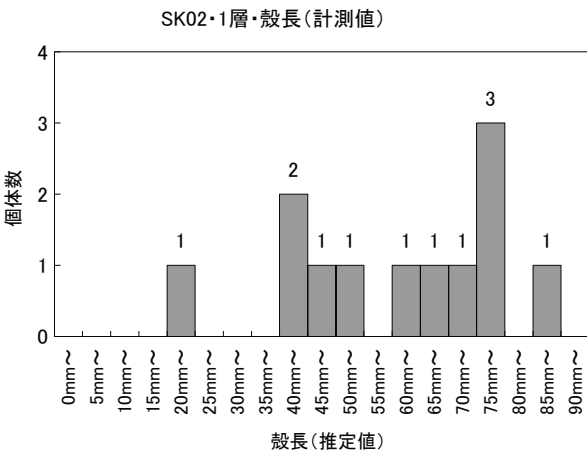
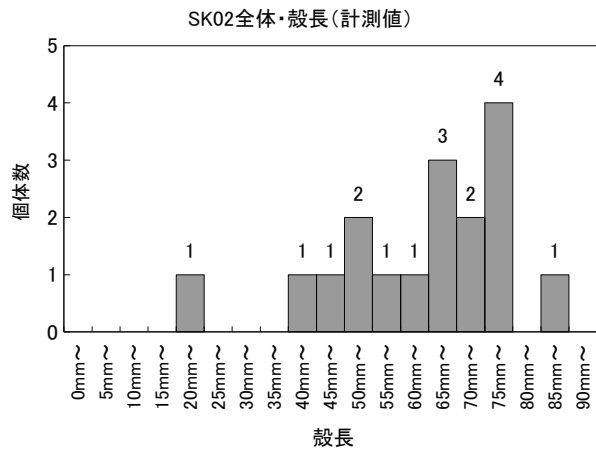
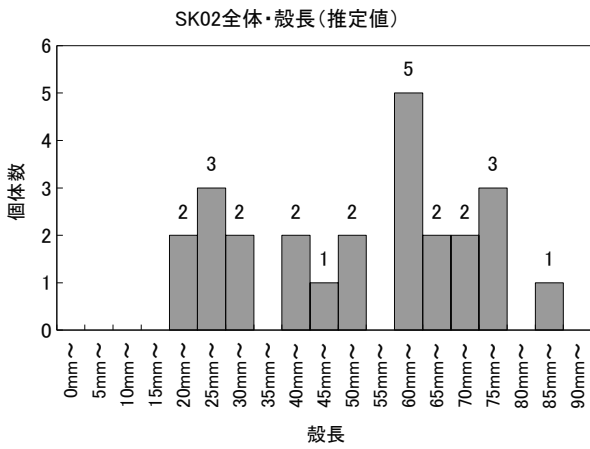


図2 SK2出土ハマグリの子殻長に関するヒストグラム

表 5-1 SX1 及び SD3 ? 出土シジミガイ属の計測値  
(単位: mm)

遺構	副	左右	殻長	殻高	歯間長
SX01	1層	右		20.15	
	地山上層	左	20.97	19.47	17.74
SD03?		左			20.83
		右			16.91

表 5-2 SK2 出土シジミガイ属のサイズに関する記述  
統計量 (値単位: mm)

	殻長	殻高	歯間長
サンプル数	9.00	8.00	10.00
平均値	21.01	19.05	17.93
標準偏差	2.55	1.67	1.88
分散	6.52	2.80	3.52
範囲	7.58	5.77	6.10
最小値	17.90	16.37	15.40
中央値	20.31	18.73	17.55
最大値	25.48	22.14	21.50
尖度	-0.76	0.18	-0.51
歪度	0.67	0.40	0.58
標準誤差	0.90	0.63	0.63
変動係数	0.13	0.09	0.11

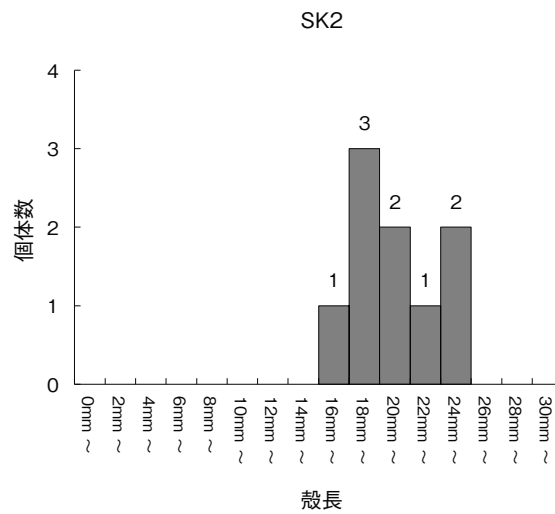


図 3 SK2 出土シジミガイ属の殻長に関するヒストグラム

表 6 ハマグリとシジミガイ属以外の貝種の計測値  
(単位: mm)

遺構	副	分類群	殻長	殻高	鉸歯長
SX01	1層灰色土	バイ		58.38	
SK02	1層	クロアワビ	144.92		
		サザエ		118.13	
		アサリ(右)	42.95	32.26	
	一括	アカガイ(左)		74.54	60.15
			90.13	71.73	59.92
			65.26	52.99	43.89
SK03	一括	アカガイ(右)	89.07	72.45	59.54

表7 出土魚類遺体一覧

遺構	取り上げ単位	分類群	部位	左右	数	備考
SX01	1層	タラ科	腹椎		1	椎体長：7.5mm
SK02	一括	タイ科	前鰓蓋骨	左	1	
				右	1	
		未同定	椎骨		1	大形魚類。アジ科？椎体長：43.2mm, 椎体横径（前端）：34.7mm
		同定対象外	—	—	3	破片資料
	カワラケ溜り	スズキ属	歯骨	右	1	
		スズキ	主鰓蓋骨	右	1	
		マグロ属	尾椎		1	
		マダイ亜科	前上顎骨	左	1	
	未同定	擬鎖骨	左	1	カジキマグロ類？中央部で鋸によるものと思われる切断痕あり。	
SD03?	一括	タラ科	腹椎		1	椎体長：6.9mm
合計 (NISP)					13	

表8 出土鳥類遺体一覧

遺構	取り上げ単位	分類群	部位	左右	数	備考	計測値(単位：mm)					
							GL	Bp	Dip	Bd	Did	Dd
SK02	一括	ガン類	手根中手骨	右	1		104.77	23.06				
		ニワトリ	尺骨	左	1	近位端付近骨幹腹側に3条の刀傷が見られる。直良ヤマドリ標本と同サイズ。	63.24	9.16	12.32		9.41	
		キジ科	橈骨	左	1	小型のニワトリ？	56.70				6.51	
		同定不可	上腕骨	右	1	両骨端が欠損の為、同定不可。中大形鳥類。						
			尺骨	右	1	両骨端が欠損の為、同定不可。中大形鳥類。						
			手根中手骨	右	1	ガン類？。近位のみ残存。						
			不明	—	1	骨幹部分小破片。						
	同定対象外	大指基節骨	右	1	ガン・カモ科のものに類似。	36.13						
	カワラケ溜り	カモ類	尺骨	右	1	カモ類。歴博コガモ標本と同サイズ。	52±	6.77				6.26
				左	1	カモ類。肘頭に切断面とその下に1条の刀傷が見られる。中型。歴博マガモ標本よりやや小。	77±	10.00				10.53
			ハト科	上腕骨	左	1	ドバト。	43.53				10.31
			橈骨	左	1		45.27				4.66	
		フクロウ科	脛足根骨	左	1	近位欠損。エゾフクロウの標本に近似。					10.20	8.09
		カラス科	上腕骨	左	1	骨幹中央から遠位にかけてが残存。骨化が完了していない。					16.32	
		同定不可	上腕骨	右	1	両骨端が欠損の為、同定不可。中形鳥類。						
			橈骨	右	1	近位端欠損。遠位端は残存するものの磨滅が激しい為、同定不可。		18.28				
	手根中手骨		左	1	両骨端が欠損の為、同定不可。ガン類？							
		不明	—	1	骨幹部分破片。							
	SU150		カラス科	尺骨	左	1	近位から骨幹中央まで欠損。					10.35
合計 (NISP)					19							

GL:最大長, Bp: 近位端最大幅, Dip: 近位端関節面最大幅, Bd: 遠位端最大幅, Did: 遠位端関節面最大幅, Dd: 遠位端最大厚

表9 出土哺乳類遺体一覧

遺構	取り上げ単位	種名	部位	左右	破片数	最大	最小	同一個体	備考	成長段階		
SX01	1層	イヌ	上顎骨	—	1	1	1	A	ほぼ歯槽周辺しか残存せず。左(×P×××4M12) 右(I××3CP××3×) ※なお、右P2歯槽は閉鎖。 下顎体部分のみ残存。(××××××××M1) 筋突起部分が欠損。(I××3CP×234M12) 右環椎異部分のみ残存。 第3～7頸椎。第6頸椎の前端を除いて、すべての椎体端部が未癒合。 ほぼ完存のものは3点。椎体骨端はいずれも未癒合。 前頭椎頭は、SK02より出土。 関節から肩甲頸付近までが残存。 関節から肩甲頸付近および後縁が残存。 遠位が欠損。近位端は、骨化が完了しておらず未癒合。骨頭のみ残存。生後10～15ヶ月以前。 両端部が欠損。 遠位端がわずかに欠損。骨端は癒合しているが、骨質が未成熟。生後6～12ヶ月以降。 滑車切痕までの近位が欠損。遠位端もわずかに欠損。骨質は未成熟。生後6～12ヶ月以降。 完存。骨端は癒合しているが、骨質が未成熟。 近位が欠損。遠位端は癒合しているが、骨質が未成熟。 完存。 坐骨と寛骨臼のみ残存。坐骨結節は未癒合の上、残存していない。 近位が欠損。遠位端は骨化が完了しておらず、未癒合である。遠位端は残存。 完存。近位は骨化が完了しておらず、未癒合。近位端そのものは残存。遠位端は癒合済み。 破片資料 共に完存。位置不明。 完存。位置不明。	生後6～9ヵ月位		
			下顎骨	左	1							
			環椎	—	1							
			頸椎	—	5							
			胸椎	—	6							
			腰椎	—	1							
			肩甲骨	左	1							
				右	1							
			上腕骨	左	1							
				右	1							
			尺骨	左	1							
				右	1							
			橈骨	左	1							
				右	1							
			第5中手骨	左	1							
		寛骨	右	1								
		大腿骨	右	1								
		脛骨	右	1								
		肋骨	—	9								
		中節骨	—	2								
末節骨	—	1										
ウシ	ウシ/ウマ	ウシ	上腕骨	左	1	1	1	B	遠位のみ残存。滑車部分の直上の骨幹に鋸によるものと推測される切断面あり。久保(1999)の分類では、形態：I d類、加工痕：切断B類。切断方向は、外側→内側。遠位端最大幅(Bd)：83.3mm、遠位端最大矢状径(Dd)：62.0mm。⇒推定(Bd, I式：西中川・他1991) 全長：295.3mm,体高：120.9cm 近位のみ残存。鉤状突起直下に鋸によるものと推測される切断面あり。久保(1999)の分類では、形態：I p類、加工痕：切断B類。切断方向は、外側→内側。また、肘頭の前方に切断面が見られる。この切断面は、左上腕骨の切断面と位置する。尺骨近位幅(DPA)：54.44mm。 近位内側部分のみ残存。骨幹断面に鋸によるものと推測される切断痕が見られる。また、その2cm程上の骨幹表面に切断面に平行する細い刀傷が見られる。	成獣		
			尺骨	左	1							
			脛骨	右	1							
		ウシ/ウマ	腰椎	—	1	1	1	1	左側椎弓及び横突起のみ残存。前方、後方、椎弓上部にそれぞれ鋸によるものと推測される切断痕が見られる。	成獣		
SK02	一括	イヌ	肋骨	—	24	1	—	A?	破片資料	—		
			腰椎	—	4						—	—
		イヌ	大腿骨	右	1	1	1	C	骨幹中央から遠位にかけての前方部分が欠損。骨化が完了しておらず両骨端が未癒合。 骨幹中央から遠位にかけての外側部分が欠損。骨化が完了しておらず両骨端が未癒合。 近位前方部分が欠損。骨化が完了しておらず両骨端が未癒合。	生後3ヶ月未満		
			脛骨	左	1							
		ネコ	下顎骨	右	1	1	1	D	完存。歯は、I1～3が脱落。なお、歯槽は開放した状態。M1前縁がやや舌側にずれ、P2後端と重なる。 腸骨寛骨臼前半分までが残存。	成獣		
			寛骨	右	1							
		イヌ	大腿骨	右	1	1	1	A?	近位から骨幹中央まで残存。なお、骨幹は前面半分が欠損。 椎体の椎頭と椎窩部分が未癒合である他はほぼ完存。	幼・若獣		
			腰椎	—	1							
		イヌ	1層	イヌ	大腿骨	左	1	—	—	A	ほぼ完存。近・遠位端共に骨化が完了しておらず、未癒合である。遠位端のみ残存。近位及び遠位がSK02・1層、骨幹中位がSK02、遠位端がSX01・1層からそれぞれ出土。生後6～9ヵ月以前。 近位端および骨幹遠位から遠位端にかけてが欠損。骨幹表面全体に食肉目(イヌ?)のものと考えられる齧り痕が見られる。 生後6～15ヵ月の間。	生後6～9ヵ月位
					脛骨	左	1					
中足骨	右			3								
カワラケ溜り	ウサギ類	肩甲骨	右	1	1	1	1	関節から肩甲頸付近までが残存。近位端最大幅(GLP)は12.9mm	成獣			
周辺	ウシ/ウマ	腰椎	—	1	1	1	1	左側椎弓及び横突起のみ残存。後方、椎弓上部にそれぞれ鋸によるものと推測される切断痕が見られる。ウシ?	成獣			
SK03	一括	イヌ	軸椎	—	1	1	1	完存。歯突起部分は癒合しているが、骨端線が見える状態。椎窩部分と後関節突起部分は未癒合でそれらの部位はない。	幼・若獣			
SD03?	一括	ネコ	肩甲骨	左	1	1	1	E	棘上窩から前縁、棘下窩から後縁がそれぞれ欠損。 完存 骨幹中央～遠位が欠損。 遠位端が欠損。 遠位が欠損。 完存 棘突起部分が欠損。	成獣		
			上腕骨	左	1							
			尺骨	左	1							
				右	1							
			橈骨	左	1							
			脛骨	右	1							
SK38	下層	不明家畜	四肢骨	—	1	1	1	骨幹の一部のみ残存。	成獣			
表土	一括	イヌ	頭蓋骨	—	1	1	1	右側前頭骨部分のみ残存。	若獣			
		イヌ	上腕骨	左	1	1	1	近位端と近位から中央の骨幹外側が欠損。遠位端は骨化が完了しておらず未癒合でさらに残存せず。	生後5ヵ月未満			
破片数					98	16	11					



表 10 イヌ及びネコの歯式及び歯冠と下顎骨の計測値  
(単位：mm)

イヌ

遺構名	部位名	左/右		I			C	P				M		
				1	2	3		1	2	3	4	1	2	3
SX01・1層	上顎骨	左	歯式	/	/	/	/	x	x	x	8	9	10	
			頬舌径								8.38	13.07	8.55	
			近遠心径								17.33	12.21	7.05	
		外側長								16.69				
		右	歯式	x	x	3	4	x	●	7	/	/	/	
			頬舌径							3.72				
	近遠心径								10.62					
	下顎骨	左	歯式	x	x	x	x	x	x	x	x	9	/	/
			頬舌径 (近 M1)										7.12	
			頬舌径 (遠 M1)										7.19	
			近遠心径										20.06	
		右	歯式	x	x	3	4	x	6	7	8	9	10	x
			頬舌径 (近 M1)						3.79	3.34	5.2	7.12	6.29	
			頬舌径 (遠 M1)									6.90		
近遠心径								6.99	8.19	10.6	20.04	9.11		

SX01・1層出土イヌ下顎骨計測値

計測箇所	計測値		備考
	左	右	
下顎骨全長 (1) (id-goc)	—	136.5	
下顎骨全長 (2) (id-mid)	—	135.4	
下顎枝幅	—	31.8	
下顎体高 (1) (M2後方)	—	—	
下顎体高 (2) (M1中央)	—	24.6	
下顎体厚 (M1中央)	11.3	10.4	
咬筋窩深	—	6.9	
全歯列長 (I1-M3)	—	93.1	歯槽部分
小白歯列長 (P1-P4)	—	36.6	歯槽部分
白歯列長	—	71.2	歯槽部分
大白歯列長 (M1-M3)	—	36.2	歯槽部分

ネコ

遺構名	部位名	左/右		I			C	P		M
				1	2	3		1	2	1
SK02	下顎骨	右	歯式	x	x	x	4	5	6	7
			頬舌径					2.46	2.8	3.24
			近遠心径					5.66	7.53	7.75

SK02 ネコ右下顎骨計測値

計測箇所	計測値
下顎骨全長(1)(id-goc)	61±
下顎骨全長(2)(id-mid)	61.6
下顎枝高	28.1
下顎枝幅	17.1
下顎体高(1)(M1後方)	10.5
下顎体高(2)(P1前方)	9.8
下顎体厚(1)(M1後方)	5.9
下顎体厚(2)(P1前方)	5.3
咬筋窩深	3.9
白歯列長	20.7

凡例：アラビア数字 (例：4)：永久歯あり， /：顎体自体が欠損， ×：歯脱落、歯槽は開放されたまま， ●：歯脱落后、歯槽が閉鎖

計測項目について：基本的に頬舌径・近遠心径を計測。上顎 P4 は近遠心径を最大長と外側長。計測定義は茂原 (1986) に基づいている。

表 11 イヌ及びネコの四肢骨計測値  
(単位：mm)

イヌ

遺構	部位	左右	全長	近位端				遠位端		骨幹中央		推定体高 (cm)	
				最大幅	最大矢状径	幅 (DPA)	切痕中央矢状径	最大幅	最大矢状径	横径	矢状径		
SX01・1層	上腕骨	右								12.9	12.6		
	尺骨	左	(157±)			23.8	13.4						
	橈骨	左	146.1	17.6	11.3			22.2	17.4	11.4	7.7	45.3	中大
		右								11.4	7.9		
	大腿骨	右						29.6		13.3	13.1		
SK02・1層	脛骨	右	161.8	31.5	32.1			21.4		12.5	11.3	45.1	中大
	大腿骨	左	(163±)										

ネコ

遺構	部位	左右	全長	近位端				遠位端		骨幹中央	
				最大幅	最大矢状径	幅 (DPA)	切痕中央矢状径	最大幅	最大矢状径	横径	矢状径
SK02	大腿骨	右		22.2							
SD03?	肩甲骨	左		13.3							
	上腕骨	左	95.6	15.5	20.2			17.7	10.6	7.0	9.2
	尺骨	左				10.7	6.3				
		右	(100+)			11.1	6.6				
脛骨	右	105.9	17.7	17.8			13.1	8.8	7.3	7.4	

表 12 出土動物遺体一覧

遺構	貝類	魚類	鳥類	哺乳類	
SX01	1層	ハマグリ (4), シジミガイ属 (3), サザエ (2), アワビ類 (片)	タラ科 (1)		イヌ (1) ※一部SK2, ウシ (1~2), ウシ/ウマ (1)
	1層灰色土	バイ (1)			
	灰色土層	アカガイ (片)			
	地山上層	シジミガイ属 (1)			
SK02	一括	シジミガイ属 (12), ハマグリ (9), サザエ, アカニシ (各5), アカガイ (4), アサリ (2), メガイアワビ, ボウシュウボラ, マガキ (各1)	タイ科 (2)	ガン類, ニワトリ, キジ科 (各1)	イヌ (2~3) ※1~2体分はSX1・1層と同一, ネコ (1~2)
	1層	ハマグリ (16), クロアワビ (3), メガイアワビ, サザエ, シジミガイ属, アサリ (各1)			イヌ (1~2) ※SX1・1層と同一
	焼土層	サザエ (1), アワビ類 (片)			
	焼土下層	サザエ (1), ハマグリ (1)			
カワラケ溜り		スズキ属+スズキ (2), マグロ属, マダイ亜科 (各1)	カモ類, ハト科 (各2), フクロウ科, カラス科 (各1)	ウサギ類 (1)	
SK02周辺	サザエ (1)			ウシ/ウマ (1)	
SK03	アカガイ (1)			イヌ (1)	
SD03?	シジミガイ属, ハマグリ (各2)	タラ科 (1)		ネコ (1)	
SK38 下層	ハマグリ (片)			不明家畜 (1)	
SK66	ハマグリ (片)				
SU150			カラス科 (1)		
表土	バイ (1), ハマグリ (片)			イヌ (2)	
不明	アカニシ, シジミガイ属 (各2), サザエ (1)				

PL.1 貝類遺体(1)



1. メガイアワビ, 2. クロアワビ, 3. サザエ, 4. アカニシ, 5. ボウシュウボラ  
1~3:SK02・1層, 4・5:SK02一括

PL.2 貝類遺体(2)



1. バイ 2. アカガイ 3. マガキ 4. シジミガイ属 5. アサリ 6. ハマグリ  
1: SX-01・1層, 2~4: SK02一括, 5・6: SK02・1層 ※2~6. 左殻

PL.3 魚類遺体



1. タラ科 腹椎 2. スズキ属 右歯骨 3. マダイ亜科 左上顎骨 4. タイ科 右前鰓蓋骨 5. マグロ属 尾椎  
 6. 未同定 椎骨 7. 未同定 左擬鎖骨  
 1: SX01・1層, 2・3・5・7: SK02・カワラケ溜まり, 4・6: SK02一括

PL.4 鳥類遺体



1. ガン族 右手根中手骨 2・3. カモ亜科 右尺骨 4. ニワトリ 左尺骨 5. キジ科 左橈骨 6. フクロウ科 左脛足根骨  
 7・8. ハト科 (7. 左上腕骨, 8. 左橈骨) 9・10. カラス科 (9. 左上腕骨, 10. 左尺骨)  
 1・4・5: SK02一括, 2・3・6~9: SK02・カワラケ溜まり, 10: SU150

PL.5 哺乳類遺体 (1)



1～6. ネコ (1. 右下顎骨, 2. 左上腕骨, 3. 左橈骨, 4. 左尺骨, 5. 右尺骨, 6. 右脛骨) 7. ウサギ類 右肩甲骨  
 8. ウシ/ウマ 腰椎 9. 不明家畜 四肢骨  
 1: SK02, 2～6: SD03?, 7: SK02・カワラケ溜まり, 8: SK02周辺 9. SK38・下層

PL.6 哺乳類遺体 (2) イヌ



1. 左上顎骨 2. 右上顎骨 3. 右下顎骨 4. 左上腕骨 5. 左尺骨 6. 左橈骨 7. 左大腿骨 8. 右脛骨 9. 右大腿骨  
 10. 左脛骨 11. 右脛骨  
 1～6・8: SX01・1層, 7: SX01・1層+SK02・1層+SK02一括, 9～11: SK02 (幼獣)

## 第IV章 まとめ

調査区全体が現地表面から2m以上まで大きく攪乱され、16本ずつ方形に組まれたコンクリートパイプが調査区全面に遺存し、さらに北側は5m以上掘削しても地山が確認できない状況下での調査であったが、江戸時代の使用面を局所的ではあるが地山を含め4面(A～D面)確認された。いずれの面も重複する遺構は少なく、またSK2という大形土坑を除けば、各遺構から出土する遺物量が非常に少ないという状況が確認出来た。明治16年測量の「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図」によると、本地点の標高は北西部で14m、南東部では12mと大きな勾配がある事が確認され、そのような地形条件下では土地利用は限られたものとなり、おのずと利用頻度も低くなったのではないだろうか。ただ遺物量は少ないが、17世紀代、18世紀代、19世紀代の遺物が出土しており、江戸時代を通して本地点が利用されたことも確認された。

利用頻度が低い中、C面ではSD3という箱薬研堀の大溝が検出され、その溝を挟み東西で遺構の検出状況が異なることも確認された。またB面ではSX15という池状遺構が検出され、本地点がある時期に庭園として利用された可能性があることが明らかとなった。最上位面のA面ではSX1という段切り状遺構と、SK2という採土坑が確認された。段切りをすることで傾斜地である本地点を有効利用しようとした一方、ある段階では斜面地上の高台部分の僅かな平場に採土坑を掘削し、採土後は芥溜りに利用する状況も確認された。

17世紀代、18世紀代は現状では藩邸の様子を描いた絵図面が見つかっておらず、遺構、遺物の検出状況などを精査していく中で、藩邸内の傾斜地がどのように利用されていたのかを解明していきたい。

## 引用・参考文献

- 愛知県陶磁資料館 1997『遺跡にみる戦国・桃山の茶道具』
- 栗野 隆 2018「加賀藩とその支藩の江戸藩邸庭園」『金沢城シンポジウム 金沢城の庭園－その歴史と特徴－』金沢城調査研究所
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房
- 江戸陶磁器土器研究グループ 1992『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅰ
- 江戸陶磁器土器研究グループ 1996『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅱ
- 大成可乃 2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）－器種（小器種）の出土状況－」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7、東京大学埋蔵文化財調査室
- 大橋康二 1992『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55、ニュー・サイエンス社
- 小川 望 2008『焼塩壺と近世の考古学』同成社
- 加藤晃・金子智 1990「御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊』東京大学遺跡調査室
- 栗三直隆 2008「富山藩の江戸屋敷」『富山市日本海文化研究所紀要』第21号
- 小松愛子 2015「文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9、東京大学埋蔵文化財調査室
- 阪口 豊 1990「東京大学の土台－本郷キャンパスの地形と地質－」『東京大学史紀要』第8号、東京大学史史料室
- 台東区文化財調査会 2005『茅町二丁目遺跡 池之端一丁目5番地（本郷台遺跡群・湯島両門町遺跡 湯島四丁目12番地）』
- 東京大学遺跡調査室 1990a『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 2 東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1990b『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997「医学部附属病院看護婦宿舍地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997「医学部附属病院MRI-CT地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999「医学部附属病院看護婦宿舍地点（Ⅱ期）発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2、別冊
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012「東京都下水道工事地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012「基幹整備（流域⑧排水）A区地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012「基幹整備（流域⑧排水）B区地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012「医学部附属病院看護師宿舍地点Ⅲ期」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012「医学部附属病院立体駐車場地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012「医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2015「医学部附属病院入院棟Ⅱ期1次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017「医学部附属病院入院棟Ⅱ期2次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017「医学部附属病院クリニカルリサーチセンター A 棟1期地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017「国際科学イノベーション総括棟新営」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019「医学部附属病院入院棟Ⅱ期3次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』11
- 長久智子 2019「近世日本におけるライン製塩釉炆器の流通と受容」『貿易陶磁研究』No.39、日本貿易陶磁研究会
- 成瀬晃司 2006「加賀本郷邸東域の開発」『江戸の大名屋敷』吉川弘文館
- 成瀬晃司 2013「罹災資料にみる大名藩邸の陶磁器諸相－天和2年・元禄16年の加賀・大聖寺・富山藩邸出土資料から－」『江戸の武家地出土の肥前磁器－罹災資料と初期色絵・鍋島・柿右衛門－』第3回近世陶磁研究会
- 成瀬晃司 2016「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟 A 地点 研究編』

東京大学埋蔵文化財調査室

- 新田二郎編 1988『吉川随筆・前田家家乗』越中資料集成3
- 原 祐一 2014「富山藩江戸藩邸の庭園を巡る」『富山の遺跡物語』富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報 No.15
- 富士見市教育委員会 1997「第2章 氷川前遺跡第15・16・17地点」『富士見市内遺跡5』
- 堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1、東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内秀樹 2013「加賀藩邸の貿易陶磁器出土様相と「蔵帳」に記された陶磁器－『加賀前田家表御納戸御道具目録帳』を中心として－」『貿易陶磁研究』No.33、日本貿易陶磁研究会
- 堀内秀樹 2016「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル－加賀藩本郷邸の出土資料の分析から－」『中近世陶磁器の考古学』第二巻、雄山閣
- 森さく子 1987「富山藩江戸屋敷の火災と再建（於前田正甫公の時代）」『富山史壇』第93号、越中史壇会



# V 考 察



## 看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点の 古墳時代遺跡調査成果と今後の展望

平石 冬馬

### 1) はじめに

東京大学本郷キャンパス構内の遺跡群（以下、本郷遺跡群と呼称）では複数の調査地点から古墳時代の遺跡が確認されている。しかし、各調査地点のほとんどが整理作業段階のものであるため、未だ全容がつかめていないのが現状である。この中で、看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点の調査成果が公表されることは、当遺跡群の古墳時代史を解明する端緒となる。

本稿ではこうした背景から、2つのポイントをもとに両地点の調査成果を総括したい。1つは古墳時代における本郷遺跡群内の集落変遷である。2つは周辺遺跡との比較である。この2点から看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点の特性を確認し、本郷遺跡群における今後の古墳時代史研究の礎としたい。

### 2) 本郷遺跡群の古墳時代集落中心域

看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点の周辺では、古墳時代前期から中期前半の住居が多く確認され、またこれより西側には、全容がつかめないが、方形周溝墓群が確認されている。この中で看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点は古墳時代初頭を中心とした集落遺跡である。一方で、当地点より谷を挟んで北側に位置する浅野地区では弥生時代後期の環濠集落と方形周溝墓が確認されている。看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点が位置する台地では弥生時代の遺跡はほとんど確認できないため、両時代の集落中心域には立地的な断絶性が認められる（1b図）。

看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点は本郷台地の東端に位置し、台地中央部より一段低い地点に位置している。HN1地点では古墳時代と考えられる住居跡が7軒確認され、このうちSI1004は古墳時代終末期の住居と考えられる。その他の住居跡は、出土遺物から古墳時代初頭を中心とした構築時期が考えられる。とくにSI1001においては床直上で有綾高坏とひさご形壺が出土し、かつ覆土の上層から有段高坏と小型丸底深鉢の破片が出土していることから、廃絶時期は古墳時代初頭に位置付けられ、その周囲にはSI1001廃絶後にも生活域が存在していたことが示唆される。また臨床試験棟地点

では4軒の住居跡が確認され、いずれも古墳時代初頭から前期の様相をもつ。

看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点の周囲からも古墳時代の遺跡は確認されている。看護職員等宿舎1号棟地点の南東、台地端部に近い医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場地点ではSI01で網目状撚糸文をもつ壺の胴部片、ハケ調整を行っている台付甕の破片、SI03では柱状高坏、有綾高坏の破片が出土している。このため、当地点も看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点と近い時期に住居が構築されていると考えられる。臨床試験棟地点の北側に隣接する基幹整備（流域⑧排水）地点でも古墳時代前期と考えられる住居跡が1軒確認されている。

以上の看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点を含めた4地点の範囲が古墳時代初頭から前期にかけての集落中心域であったと考えられる。この範囲より南側には、古墳時代前期から中期にかけての住居跡が集中している。臨床試験棟地点の南側に隣接する医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点では10軒の住居跡が確認されている。この地点の東には、中期の住居跡が集中して確認された看護職員等宿舎3号棟・医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期地点、南には中期の住居跡が2軒確認された医学部附属病院入院棟A地点が台地縁辺部にかけて広がっている。そして西側の台地中央部に近いクリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期地点では方形周溝墓が10基以上も確認されており、先述の集落との関連性が伺える。当地点では住居跡もいくつか確認されているが方形周溝墓と重複するものではなく、両遺構のすみ分けがあったことが想起される。その他、看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点より西に40mほど谷に沿って台地奥に進んだ東京都下水道地点でも1軒の住居跡が確認されている。

一方で、弥生時代の集落は看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点より谷を挟んで北側の浅野地区に位置する。当地区では新タンDEM棟地点で古墳時代前期の住居跡が1軒確認されているが、その密度は相対的に低く、弥生時代後期の環濠集落と方形周溝墓が分布する。環濠については、向ヶ丘貝塚の発掘調査で検出した溝状遺構の覆土上層から弥生時代後期後半の土器が出土し、またこの地点より西側に位置する工学部風工学実験室支障ケーブル・工学部武田先端知ビル地点では方形周溝墓が

3基以上確認されている。このため、本郷遺跡群内における古墳時代の集落中心域は、弥生時代の集落中心域と谷を隔てた別の場所で形成していくことがわかる。

以上のことから、看護職員等宿舎1号棟・臨床試験棟地点は本郷遺跡群内の古墳時代集落遺跡の中では初段階に位置し、かつ、これ以降の集落形成に深く関わりをもっていることが示唆される。次に、周辺遺跡との関係性についてみていきたい。

### 3) 周辺遺跡との比較

本郷遺跡群周辺の古墳時代集落遺跡の確認事例は少ない。同じ台地上の西方にある文京区原町東遺跡では、古墳時代初頭と考えられる集落遺跡が確認されているが、その形成時期は限られている。

一方で、本郷遺跡群から不忍池を挟んで東側に位置する上野台地では、摺鉢山古墳を始めとした多くの古墳が存在したとされる。本郷遺跡群と上野台地古墳群は直線で約600mと距離が近く、互いに認識可能な位置条件であったと推察される。

このため、本郷遺跡群内の集落形成時期と、上野台地古墳群の形成時期について若干の整理をしたい。

上野台地古墳群は、大野雲外や鳥居龍蔵によっていち早くから周知され、その後、摺鉢山古墳は東京都教育委員会によって測量調査が行われた。また、摺鉢山古墳より台地の北側に位置する表慶館古墳では刀類や鉄鏃などが出土したとされ、その副葬品の様相から後期以降の築造であると考えられる。この他に、鳥居によって摺鉢山古墳の近隣に幾つかの古墳が存在した可能性が指摘されており、上野台地は古墳時代の墓域として利用されてきたことがわかる。

この摺鉢山古墳は測量時に表採した埴輪片・須恵器片から築造時期が5世紀末と考えられ、本郷遺跡群の集落が沈静した後に築造された古墳であることが指摘できる。また、摺鉢山古墳の構造以降は、表慶館古墳などの後期に属する円墳が多く築かれたと考えられる。

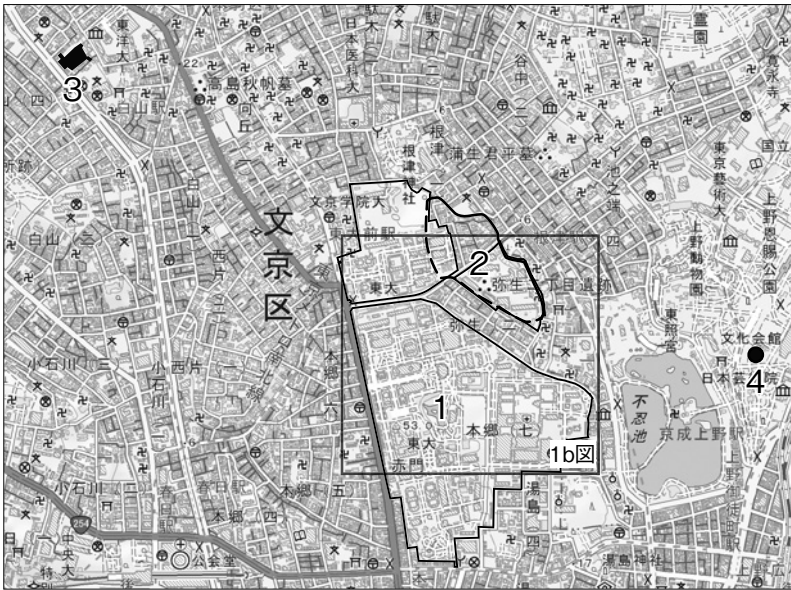
本郷遺跡群の集落形成の時期は古墳時代初頭から中期中葉にかけてであり、それ以降に住居跡が確認できるのは看護職員等宿舎1号棟地点SI1004などの古墳時代終末期以降のものである。対して、上野台古墳群の上限は中期末で、詳かではないが、その盛行する時期は古墳時代後期であると考えられる。つまり、両遺跡の形成時期には時間の隔たりがある。

### 4) 今後の展望

2つのポイントから、看護職員等宿舎1号棟・臨床試

験棟地点の特性が明らかとなった。1つは古墳時代初頭から古墳時代中期まで形成される集落中心域に位置付けられること、2つは摺鉢山古墳を中心とする上野古墳群との時間の隔たりである。

ところで、本郷遺跡群の古墳時代の墓域はどこにあるのか。詳細は今後の調査報告を待つことになるが、中期の集落中心域（医学部附属病院入院棟Ⅱ期・看護職員等宿舎3号棟・医学部附属病院看護部宿舎Ⅲ期・医学部附属病院入院棟A地点）の西側に位置するクリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期の墓域がその候補として挙げられるだろう。もちろん、集落域と墓域の時間軸上の併行関係は未整理のため結論は出ないが、当地点内の集落域と墓域が重複することなくすみ分けられていることは、両者の関連性を強くうかがわせる要素である。何故ならば、集落に隣接して群衆する墓域を形成する様相は、本郷台遺跡群においては弥生時代後期から続く集落構造でもあるからだ。問題は、この集落構造がいつ途絶え、そしてその要因となった外的因子または内的因子を明らかにすることである。



遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	本郷台遺跡群	包蔵地・集落・貝塚・その他の墓・社寺・屋敷・その他（町屋）	〔旧〕縄〔弥〕 〔古〕平〔近〕
2	弥生町遺跡群	貝塚 ※一部国史弥生二丁目遺跡	〔縄〕弥〔近〕
3	原町東遺跡	包蔵地・屋敷	〔弥〕後 〔古〕〔近〕
4	摺鉢山古墳	前方後円墳	〔古〕

1a図 周辺の古墳時代前期遺跡



28-c.向ヶ丘貝塚  
 7.新タンドム棟、19.医学部附属病院看護師等宿舍1号棟（HN）、  
 21.臨床試験棟（MRI）、23.医学部附属病院入院棟A（HW）、25.  
 医学部附属病院看護師宿舍ゴミ置き場（HND）、30.工学部風工学  
 実験室支障ケーブル、48.医学部附属病院看護師等宿舍等3号棟、61.  
 工学部武田先端知ビル、74.医学部附属病院看護師等宿舍Ⅲ期、  
 87.東京都下水道、97-1.基幹整備（流域⑧排水）A区、97-2.基幹整備  
 （流域⑧排水）B区、113.医学部附属病院入院棟Ⅱ期、125.クリニ  
 カルリサーチセンターA棟Ⅰ期

1b図 本郷台遺跡群内の弥生時代後期～古墳時代遺構検出地点

# 看護職員等宿舎 1 号棟地点からみた富山藩上屋敷

成瀬 晃司

## はじめに

看護職員等宿舎地点 1 号棟地点は、絵図との対比から江戸時代初期を除き、加賀藩の支藩富山藩江戸上屋敷内に位置することが確認できる（I-1 図）。また絵図で法面を表記した彩色部を明治 16 年の参謀本部陸軍部測量局作成「五千分一東京測量原図」（以下、参謀本部地図）の等高線に対比させると藩邸東部及び南東部の詰人長屋区域は御殿区域と標高差約 7m を示す低地部に位置し、両空間はかなりの急崖で区画されていることが判る（I-2 図）。

富山藩江戸藩邸に関する文献・絵図調査は、小松愛子による詳細な研究報告があり、本稿の文献面での引用もそれによるところが大きい（小松 2015）。本稿では発掘調査から得られた成果に小松研究の所見を合わせ、さらに周辺調査地点の成果を加えて本地点を中心とした周辺地域の景観復元を試みたい。

本地点の調査では、上部から A・B 面、C 面、D 面とした 3 枚の遺構面が確認された。A 面は B 面上に部分的に造成された整地面であることから大枠で同一段階と設定する。以下、D 面をⅠ期、C 面をⅡ期、A・B 面をⅢ期として各遺構面の状況を述べる。

## 1. 検出遺構の様相

### (1) Ⅰ期の様相

本遺構面は、関東ローム層まで削平、平準化された遺構面である。本遺構面で検出された古墳時代前期堅穴住居址が、ほぼ床面付近まで削平された状態で検出されたことから、かなり大規模な切土造成が行われたことが窺われる。本遺構面の標高は調査区北端で 12.9m、南端で 13.0m とおおむね水平に削平されている。このような初期開発によるローム層レベルまでの切土造成は近隣調査地点でも認められ、南側の臨床試験棟地点と入院棟Ⅱ期地点東端部では標高 13.0m、看護職員等宿舎 3 号棟地点（以下、3 号棟地点）、看護師宿舎Ⅲ期地点（現 5 号棟。以下、Ⅲ期地点）では標高約 12.6m、西側の国際科学イノベーション総括棟地点（以下、イノベーション地点）では約 13.8m、クリニカルリサーチセンター A 棟Ⅰ期地点（以下、CRC 地点）では約 14.0m と 1m 程度の高低差内で確認され、広範囲にわたって平準化されたこと

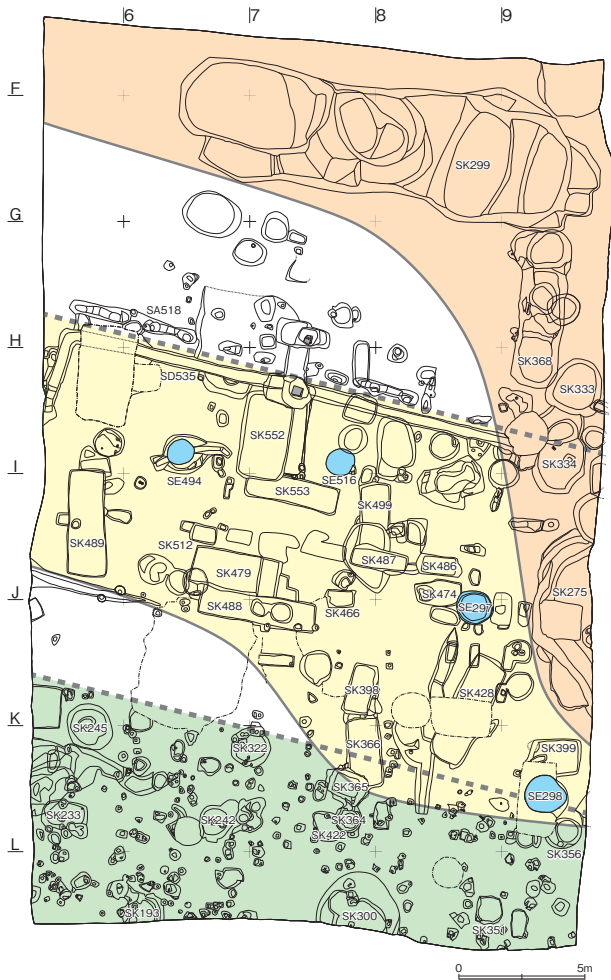
が窺われる。

これまでの中央診療棟地点、入院棟 A 地点、第 2 中央診療棟地点などの調査成果から、医学部附属病院地区南半部の旧地形は、本郷台地縁辺部東緩斜面上に位置しながらも東方の根津谷に向かう埋積谷の影響を受けた複雑な斜面形状を呈していたことが確認された。その結果、初期段階の遺構は旧地形緩斜面上に構築されたが、その後、切土・盛土を併用した造成によってひな壇状平坦面が作出され、さらに下方平坦面への大規模盛土造成によって広範囲にわたって平準化された過程が復元された。この旧地形上で行われた初期土地利用は、寛永 6（1629）年銘の木簡が出土した中央診療棟地点「池」状遺構事例などが示すように、本地に上屋敷を構えた寛永 16（1939）年の富山・大聖寺両支藩成立以前の様相と捉えられ、次段階の切土・盛土造成によるひな壇形成は、盛土層出土遺物の様相と文献記録による時代背景から、支藩成立に伴う上屋敷造営に伴う開発に関連すると考えられる（成瀬 2016）。

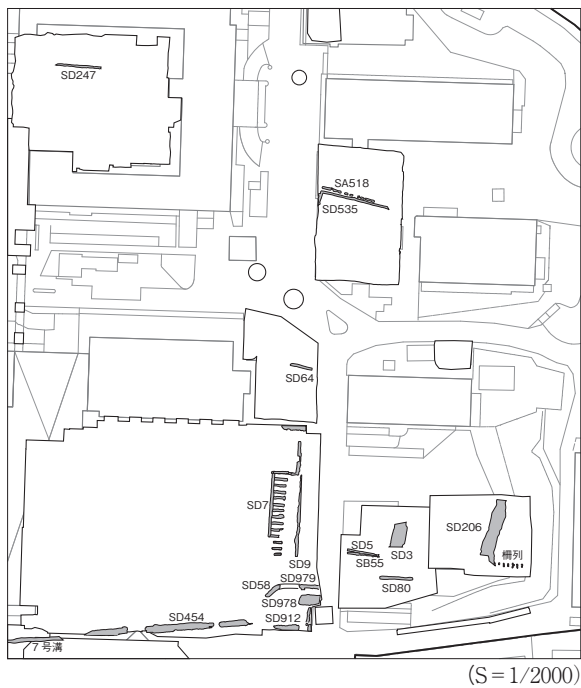
さて本地点における遺構分布は、南北方向に北から採土坑エリア、長方形土坑エリア、小穴・植栽痕エリアの 3 ブロックに区分することができる（1 図）。

北部の採土坑エリアは SA518・SD535 北側に拡がり、SK299、SK333、SK334、SK368 など採土坑と考えられる中～大規模の不定形遺構が分布する。I・J9 グリッドに位置する SK275 を含めると、調査区北縁部から東縁部北側にかけて鉤形状に拡がり、現在の台地形状との比較から、ほぼ台地縁辺部を取り巻くように分布していることが読み取れる。

中央部の長方形土坑エリアは、SD535 の南側から J ライン付近にかけて拡がる。各土坑は確認面からの深さが 50cm 程度で、SK479、SK489、SK552 では坑底に貼床と考えられるローム土が水平堆積していることなど共通点が多く、類似した用途を目的として構築されたと推定される。しかし付属施設や使用痕跡はなく現状で用途を判断するには至っていない。また 7 ライン以東では SK398、SK366、SK365、SK428、SK399 など K ライン以南にも拡がり認められる。また D 面で検出された井戸は本エリアのみに分布し、SE494 から SK516、SE297、SE298 まで長方形土坑範囲の北寄りを弓形に分布していることが読み取れる。



1図 D面空間構成概念図



2図 周辺調査地点ローム面検出境界施設遺構

南部の小穴・植栽痕エリアは、長方形土坑群の南（おおよそKライン以南）に拡がり、多数の小穴と植栽痕と考えられる円形土坑が検出された。検出された小穴には距離、方向ともに規則性は見出されないことから塀や柵列の可能性は低く、添え木を埋設するなど植栽痕との関連が想定される。

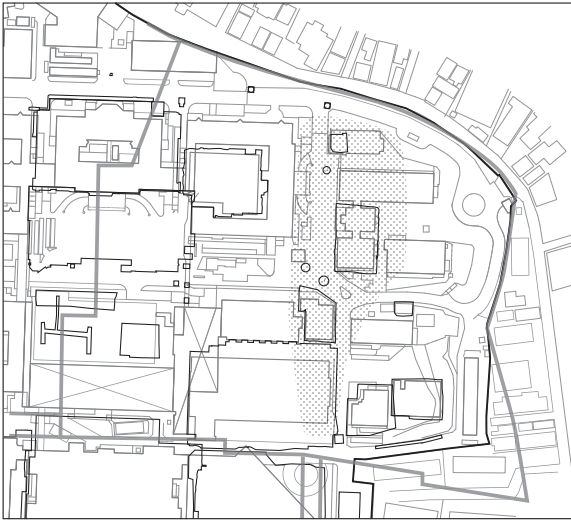
このように北から採土坑群、溝・柱穴列の区画施設を境に井戸・長方形土坑群、さらに小穴・植栽痕群が分布するが、先述したように小穴群を除き東に向けて鉤形ないし弓形の分布を示していることから、台地縁辺部の地形に応じて構築された状況が読み取れる。また長方形土坑群の軸方向角は、SD535とほぼ平行し、小穴集中区域の北限ラインもほぼそれと一致する。このように本地点の区画形成は一貫した計画に基づいて開発されたとみて良いであろう。

一方、周辺調査地点に目を向けると、埋積谷の影響を指摘した入院棟Ⅱ期地点南縁部の遺構群以外は、数度の方向差を内包しているものの本地点同様おおむね座標南北軸より東傾した主軸を有していることが窺われる。即ち17世紀前半段階では、埋積谷北側に位置する台地上東縁部は、この方向角を基準として開発されたと考えられる（2図）。

## (2) Ⅱ期の様相

I期の遺構面としたローム層削平面上に厚さ約70cmを測る盛土造成が行われた。これをC面とした。本遺構面は小円礫・黄褐色砂粒を含有し非常に締まった褐色土層（基本土層6層）で形成され、調査地点全域に拡がる。その様相から藩邸内のオープンスペースと考えられる。6ライン以西では、本遺構面直上に厚さ10～30cmにおよぶ焼土層（Ⅱ-2図基本土層5層）が堆積し、その厚さ、拡がりから大規模火災で生じた瓦礫を藩邸内で処理したことが窺われる。即ち本遺構面の下限を示し、火災を契機に更なる盛土造成が行われたことが確認された。焼土層出土陶磁器・土器類の年代観は、東大編年Ⅳb期の様相を示していることより、本火災は文献記録の元禄16（1703）年の藩邸全焼に比定することができ、本遺構面の使用期間は天和2年の藩邸全焼火災を契機とした屋敷割り改変後、即ち天和3（1683）年から元禄16年までの20年間に絞ることができる。

本遺構面では、土蔵基礎と考えられる布握り長方形礎石遺構（江戸間2×5間）、井戸、地下室、小穴列が散見され、前後の遺構面と比較して遺構密度の低さが際立っている。焼土層が6ライン付近を東限とすること、本焼土層で埋め戻されたSK168の土層堆積状況が西か



3図 II期硬化面推定範囲

ら東へ傾斜していることから（II-38図）、被災建物は本地点西方に存在したと推定される。

本地点で検出された玉砂利含有硬化層は、近隣の臨床試験棟地点、入院棟II期地点などでも確認された。本地点では北端部から南端部にかけて標高約13.4～13.5m、臨床試験棟地点では13.6m、入院棟II期地点では北端部から中央付近にかけて13.5～13.4m、さらにSD979に向けて緩やかな傾斜に変化して拡がること確認されている（2図）。またドナルドマクドナルドハウス地点でも標高約13.2mで玉砂利を含有する水平堆積層が確認されており、本硬化面に対応する可能性が指摘できる。一方、本地点南東の3号棟地点・III期地点、西側のイノベーション地点では認められず、3図に示したように藩邸北東部を中心に拡がっていたことが予想される。即ち、西側は殿舎などの建物群があり、南東部は埋積谷に向けてやや低い位置にあることが関係していると考えられる。

### （3）III期の様相

本段階はA、B面帰属遺構で構成される。A面形成層は調査区西端から8ラインにかけて確認された。A面上にも江戸時代の盛土層が一部認められたが、攪乱の影響が大きく面として把握することができなかった。B面形成層は調査区東端から8ラインにかけて確認され、8ライン付近でA面形成層と重なり、その直下に堆積する（4図）。B面形成層分布域外にあたる8ライン以西でA面形成層下に遺構が存在しないことから、A、B面は同時期に形成され、8ライン付近以西を一段高くして造成されたと考えられる。また本地点では、盛土層堆積状況からC面に続く遺構面であることが確認でき、元禄16

年火災後の藩邸再建に伴う造成と推定される。本期の遺構群は、遺構属性、遺構配置、主軸方向などから4段階の変遷を復元することができた（4図）。以下に順を追って概略する。

#### 段階① 庭園関連遺構

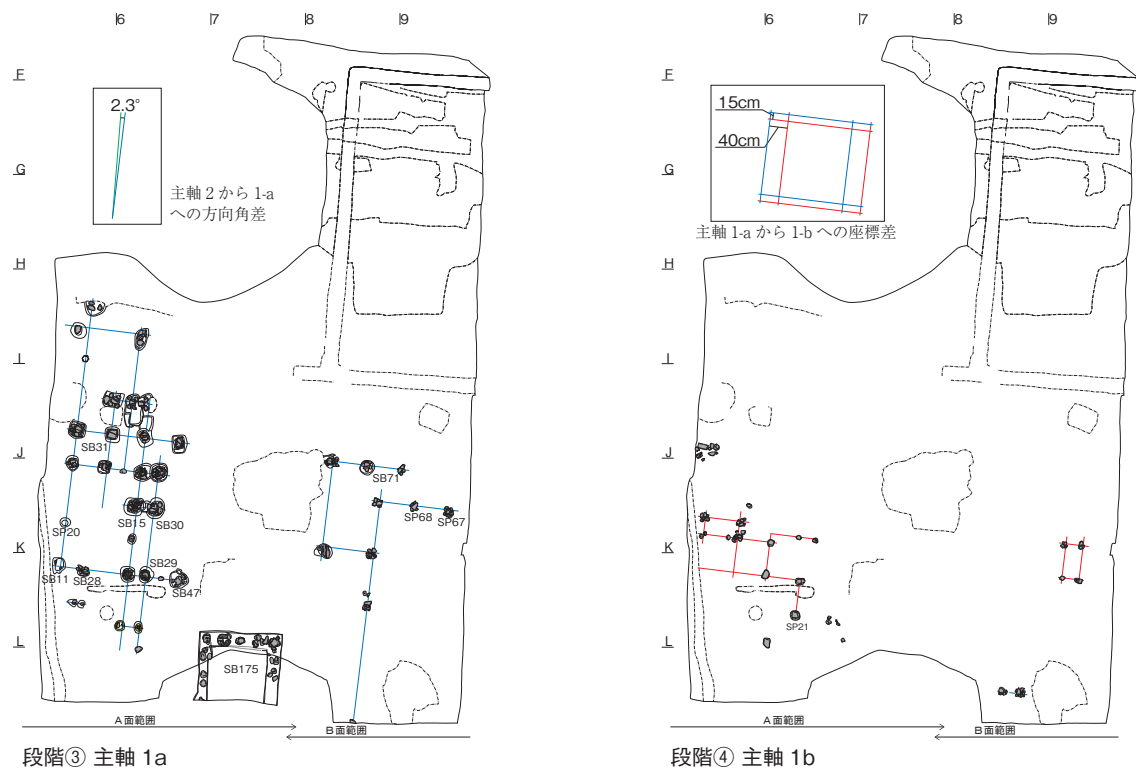
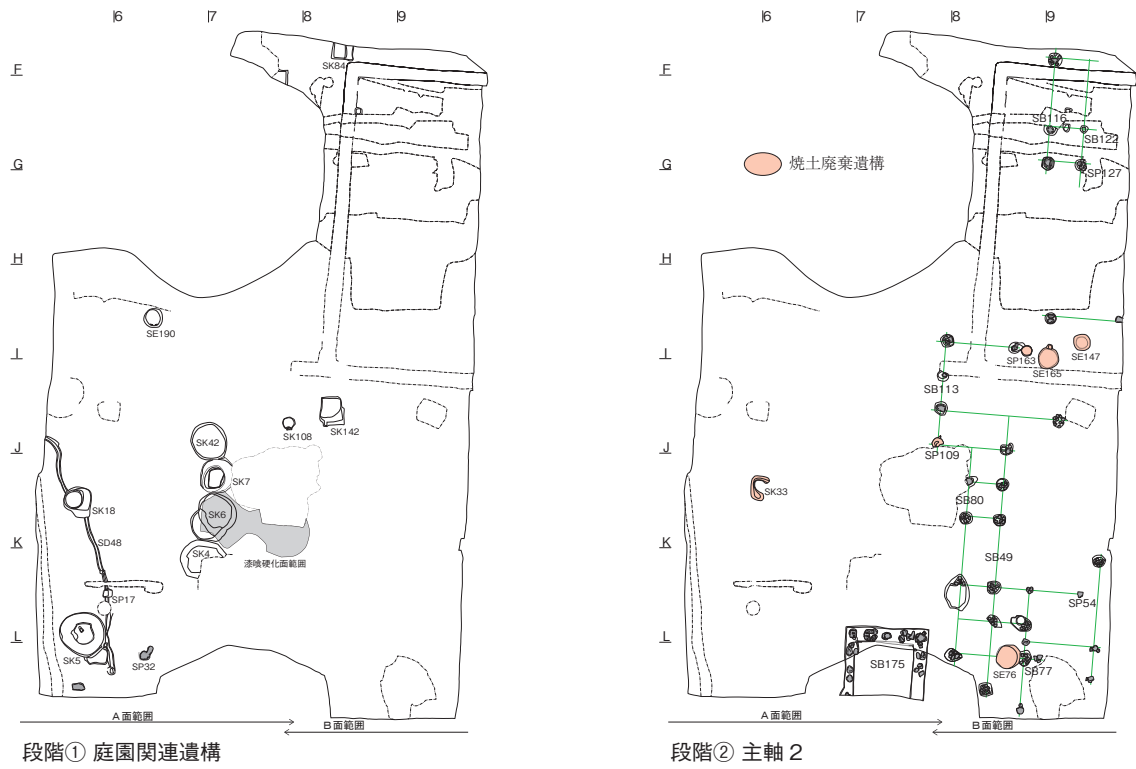
最も古い遺物組成が認められた遺構に、SK18（J5グリッド）がある。本遺構は不整円形を呈する土坑で、確認面からの深さ約180cmを測る。覆土の堆積状況より坑底には桶枠が埋設されていたと推定される。覆土中より18世紀前半の陶磁器類が出土している（II-70図）。本遺構には蛇行して南北に伸びるSD48が接続する。SD48の覆土最下層には水性堆積を示す淡褐色粘質土が堆積していることから流路として機能していたと考えられる。不規則に蛇行する形態から自然流路をイメージして構築された庭園施設と推定され、本遺構はそこに水を供給するための埋桶遺構と考えられる。SD48の西側にはSK5、東側にはSK4、SK6、SK7、SK42とした植栽痕と考えられる不整円形土坑が分布する。さらにSK6の上部から東側にかけて漆喰を貼った浅い落ち込みが認められた。攪乱によって上部が削平されほとんど原形をとどめていないが、漆喰貼付状況が入院棟A地点で検出された元禄年間の大聖寺藩庭園人工泉水SX1095、SX1138と類似し、人工泉水坑底の残骸と考えられる。本遺構はSK6埋積後に構築されており、植樹帯から泉水へと景観が移り変わったことが認められる。SD48南端東側で著しく被熱した石製手水鉢（つくばい）が横転した状態で検出された（II-110図）。水鉢用割り抜き部裏の突出部には被熱痕跡がほとんど観られず、突出部を埋設して設置されていたことが判る。

以上、本段階は植樹帯（植栽痕）、流路、人工泉水など庭園装置に関わる遺構で構成され、おおよその拡がりには8ライン付近を東限とする。SK18出土遺物より18世紀前葉には庭園としての利用が始まっていたと考えられる。手水鉢の被災年代は課題として残るが、段階③の礎石列との新旧関係から、本地点が庭園から建物区域へと変遷する様相が確認された。

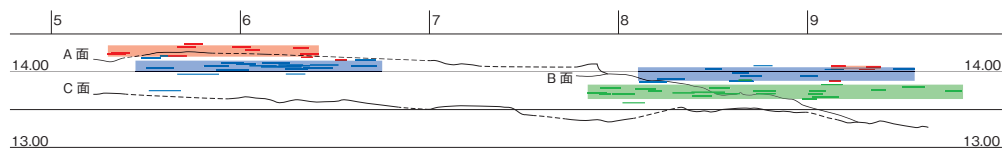
#### 段階② 主軸2

B面上で確認された礎石群を本段階とする。検出された礎石列は、江戸間1間を基準に配置されている。南北方向の方向角は47°東傾し、覆土に多量の焼土を含むSP163、SE76に切られている事例や、礎石が抜き取られた凹地に焼土が埋積した事例（SP109）から、本礎石建物群は、ある火災以前に廃絶された礎石群と推定され





4 図 A・B面主要遺構変遷



5 図 A・B面主要礎石栗石上面標高

る。元禄 16 年以降の富山藩邸大規模火災は、藩邸が全焼した文政 8 (1825) 年、「御住居向」が焼失したとされる弘化 3 (1846) 年の記録があるが、A・B 面で検出された焼土廃棄遺構は遺物出土量が少なく、年代を絞り込むことは難しい。

### 段階③ 主軸 1a

主軸 1a とした礎石群は A・B 面双方で検出されたが、7～8 ライン間には認められないことから、東西 2 群の建物が存在したといえよう。本礎石群の主軸は主軸 2 より 2.3° 東傾し、周辺の建物軸が変化したことを示している。また栗石を埋設した際に焼土粒が含まれている事例が確認され (西側礎石群の SB11、SB15、SP26、SP27、SB29、SB30、東側礎石群の SB71)、主軸 1a 建物は瓦礫整理直後に再建されたことを窺わせている。特に西側礎石群では、SB15 とその東側の SB29、SB30 などが半間間隔で設置されており、居室に隣接する廊下の可能性がある。

調査区南端に位置する SB175 は主軸 2 を示すが、礎石を固定した最上層覆土に焼土粒が多量に含まれていることから、焼失した建物の基礎を再利用し、新たに礎石を据え直して同規模建物を再建したと考えられる。

### 段階④ 主軸 1b

主軸方向角は主軸 1a と一致するが、双方の礎石位置に基づいて設定した江戸間 1 間四方メッシュに照らし合わせ北西角を基準に比較すると、東へ 40cm、南へ 15cm を測る座標差が確認された。また主軸 1a、主軸 1b とも礎石は抜き取られており、遺存する栗石が礎石直下と仮定して栗石表面標高を比較すると、主軸 1b は主軸 1a・主軸 2 より約 20cm 高い結果が得られた (5 図)。先述したように A 面上に近世期と考えられる盛土が部分的に遺存していたが、A 面を基準に遺構確認を行った結果、主軸 1b に帰属する礎石建物遺構は栗石が A 面から突出した状態で検出され、A 面上の新整地面に構築された建物基礎と推定される。明治 13～14 年作成の「東京大学医学部全図」との比較で調査区西側は空閑地に比定されることから、主軸 1b 礎石群が近世段階の富山藩邸に帰属する建物跡であることを傍証している。

## 2. Ⅲ期検出遺構と絵図の比較

A 面検出遺構の上限は、段階①に帰属する SK18 出土遺物から 18 世紀前半に比定でき、C 面が罹災した元禄 16 年火災後の藩邸再建に伴う造成面と捉えることができる。また同一遺構面で段階①～④までの変遷が確認さ

れ、段階②から③に至る過程で罹災した状況が確認できた。瓦礫整理に伴う遺構廃棄焼土層からは 19 世紀前半に比定される陶磁器類が出土しており、文献上の文政 8 年もしくは弘化 3 年の火災に比定することができる。これは、元禄 16 年の火災以降、文政 8 年の火災まで大きな変化はないという小松の見解と齟齬はなく、考古学的にも証明された。

さて富山藩江戸上屋敷を描いた絵図は、全景図 3 枚、部分図 5 枚が現存する (富山県立図書館所蔵)。全景図は「池之端東屋敷絵図」3 点のうち「同所惣絵図」、「江戸御上屋敷図」、「天保富山城本丸御殿絵図」の 3 枚で、そのうち「江戸御上屋敷図」には「安政五年調べ没未年写 直照」の添え書きがあり、安政 5 (1858) 年の様相が描かれていることが判る。小松は屋敷範囲と表御殿の間取り比較から 3 枚とも藩邸南東部の講安寺境内借地返還後の天保末から弘化火災以降を描いたと指摘する。

本稿では、年代が特定できる安政 5 年「江戸御上屋敷図」を基に調査区検出遺構との比較を試みる。調査地点を絵図面に対比させるために以下の操作を行った。

- ① 病院地区内調査で検出された明治前半の布掘り礎石建物基礎遺構 SB2 を参謀本部地図の該当建物に対比させ (6 図)、参謀本部地図に病院地区調査地点をトレース。さらに参謀本部地図に記載された別課医学教場 (富山藩邸表御殿の一部) と『東京大学医学部一覽』掲載の別課医学教場間取り図とを対比させ、建物輪郭を間取り図に合わせて補正、トレースする (6 図緑色枠)。
- ② ①で得られた別課医学教場を基準に「江戸御上屋敷図」(トレース図) の方向、縮尺を補正して、藩邸全域を調査地点に対比させる (7 図)。

以上の手順を踏まえて対比した結果、調査地点は藩邸北東部奥向き建物の一角にあたり、調査区東側は建物、西側は空閑地に対比された。絵図の記載から御居間、御納戸、御書斎、溜まり、御台子、老女席が並ぶ藩主家族の居住空間、女中詰所、作業スペースに該当する。この間取りは、明治維新後の屋敷退去時に関する「御取毀御払」などの付箋が貼り付けられた「天保富山城本丸御殿絵図」と類似し、弘化 3 年火災後の様相と観て差し支えないだろう。

しかし、調査結果から西側が空閑地となる構成は段階②が該当するが、先述したように段階②の主軸 2 礎石群の上位には段階③の主軸 1a 礎石群が重なり、主軸 1a 礎石遺構覆土には火災後の建設を窺わせる焼土含有層が認



6 図 病院地区明治初期建築遺構と参謀本部地図との対比 (S=1/2500)

別課医科教場緑枠は「東京大学医学部一覽(明治13~14年)掲載図よりトレース合成



7 図 別課医科教場を基準にした病院地区調査区と「富山藩上屋敷図」との対比

められることから、主軸2礎石群が弘化3年以降明治維新まで存在したとは考えられない。また主軸1a礎石群が帰属するA面には被熱痕跡が認められ、同様の痕跡が入院棟Ⅱ期地点北東部のA面比定遺構面からも確認されており、広範囲の火災が想定される。

これを前提として遺構変遷を整理すると、段階①は元禄16年以降～18世紀、段階②は庭園廃絶後～文政8年火災以前、段階③は文政8年火災後～弘化3年、段階④は弘化3年以降に位置づけられ、主軸1a、主軸1b建物は絵図の空閑地に比定される。今後、周辺調査地の成果を合わせ、さらに検討する必要がある。

### 3. 庭園関連遺構と上屋敷庭園

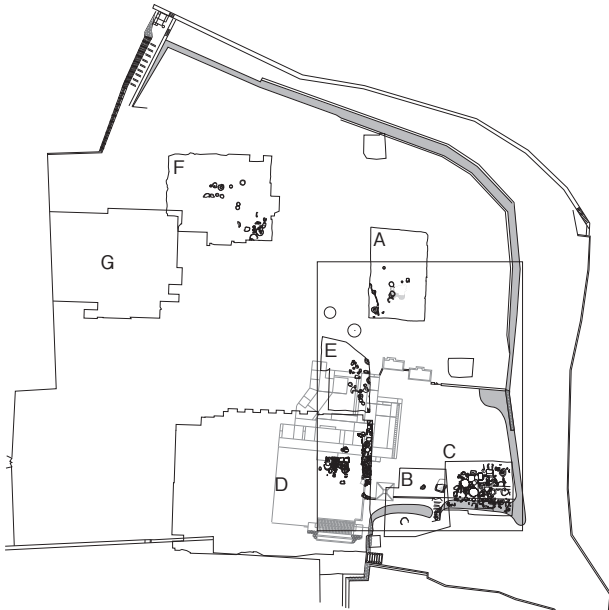
前節で述べたように、本地点ではA・B面の段階①で植栽痕、池状遺構、手水鉢などの庭園装置と考えられる遺構が検出され、元禄16年の火災以降、本地点周辺に殿舎が建設されるまでの期間、庭園として利用されていたことが確認された。

これまで実施された近隣調査地点でも庭園を想定させる植栽痕群などが検出されており、それを8図に示した。藩邸南東部台地縁辺に位置する3号棟地点(B)では、植栽痕は散在している程度だが、池と報告された漆喰貼付遺構が存在する。その東側のⅢ期地点(C)ではかなりの密度で植栽痕が検出されており、時間差を考慮しても植樹帯を形成していたと考えられる。この2地点の北西に位置する入院棟Ⅱ期地点(D)でもⅢ期地点同様夥しく重複する植栽痕群が検出された。検出された植栽痕群は、元禄16年下限の整地面と文政8年火災比定の焼土面に挟まれた遺構面に帰属し、本地点同様の存続期間が考えられる。さらに植栽痕は連続する上下2枚の遺構面で確認され、上位面には飛石遺構と考えられる礎石抜取小穴列、下位面には四阿と考えられる一間四方の礎石建物が存在し、複数回の造園改修が行われたことが窺われる(東京大学埋蔵文化財調査室2019)。臨床試験棟地点(E)ではローム面調査時に多数の植栽痕が検出された。本地点では攪乱の影響が大きく明確な帰属面を把握することができなかったが、植栽痕群の西側は方形土坑の分布域に変化し、検出された植栽痕群範囲がおおむね西端を示しているといえる。イノベーション地点(F)では調査区東半部で植栽痕群が確認された。特に南東部の一帯は覆土下部に元禄16年の火災廃棄層が確認された大形遺構(SX270)埋積後に構築され、植栽痕埋積後は礎石建物群への変遷が報告されている(東京大学埋蔵文化財調査室2017)。この様相から本地点・入院棟Ⅱ期地点同様の期間に形成されたと考えられる。一方、Fの

西半部から西側のCRC地点(G)にかけては植栽痕群が確認されていない。入院棟Ⅱ期地点西半部はローム層中に及ぶ攪乱の影響で植栽痕群の西限を確認するには至っていないが、各調査地点の様相から表門に通じるライン以東での拡がりが見られる。

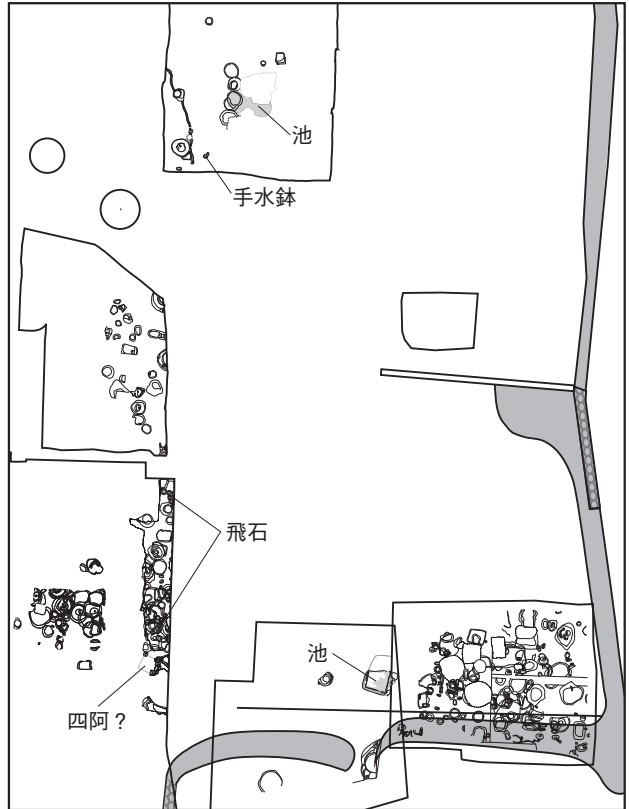
発掘調査で得られた様相は、全景図において藩邸南東部が空閑地として描かれている状況とも一致する(7図)。御殿殿舎群は表門から北上した位置に玄関(1)があり、玄関東手に書院群がL字状に配置されている。奥書院(4)は西側に縁側を有し能舞台と向かい合い、大書院(3)は東側に縁側が設けられていることから庭園を眺望する設計と理解される(9a図)。小松はこの空間を「書院庭」としている。富山藩邸御殿図には、文政8年類焼以前の様相と添え書きされた「江戸御上屋敷御殿御間統御絵図」がある(9b図)。本絵図は表門が東向きであること、能舞台が独立していない点など、火災以降の全景図と相違が認められるが、大書院が殿舎群東側に張り出し書院東側に縁側を設けている点で共通する。このように少なくとも享和元年以降は、大書院が東に面し、その前面に庭園が設置されていたと考えられる。これ以前の絵図面は確認されていないが、発掘調査で得られた所見を合わせると、元禄16年の火災以降、藩邸東部は庭園として利用されていたと考えられよう。

さて、富山藩上屋敷庭園に関して原(原2014a、b)、栗野(栗野2018)の先行研究があり、景観を知る手掛かりとして両氏共に引用している史料に、松平定信晩年の自筆日記『花月日記』がある。文化11(1814)年11月29日に富山藩上屋敷を訪れた時、「廿九日 けふハ、かねてより、ひたすらいひ給へバ、とやまのたちへ行。北のかたも行給ふ。そのよるこび給ふさまミテハ、とくにも行ましものと思ふ。何くれと心尽し給ひて、調度をはじめ、常の間、ねまなどをはじめ、書院のあたりまで、ミナ先立てミセ給ふ。高どの眺望よし。忍はずの池ハ、こゝの為にまうけしやうにて上の山などより、はるかの家々かぎりなふミゆ。書院の庭に、大なるもミの、下枝つとさし出たるハ、いとめづらし。この庭ハ小堀政一のつくりしとかいふ。(後略)」(岡野・山根2000)と、不忍池を取り込み上野の山をはじめ遙か彼方まで町並みを観ることができる景観を絶賛している。約10mを測る不忍池との標高差は、マンションの4階バルコニーからの眺望に相当し、眼前に遮蔽物がなく左手には不忍池と忍ヶ岡(上野の山)、右手には東京低地が広がるその景観の素晴らしさは想像に難しくない。両氏は松平定信の記述と上屋敷全景図の書院と書院庭の位置関係から、眼前には定信が絶賛したもみの木など趣向を



- A 看護職員等宿舎1号棟地点
- B 看護職員等宿舎3号棟地点
- C 看護師宿舎Ⅲ期地点
- D 入院棟Ⅱ期地点
- E 臨床試験棟地点
- F 国際科学イノベーション総括棟地点
- G クリニカルリサーチセンター A棟Ⅰ期地点

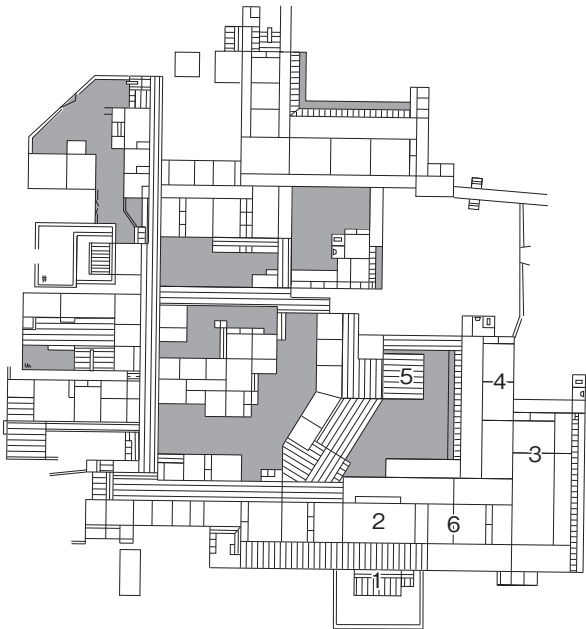
1/3000



1/1000

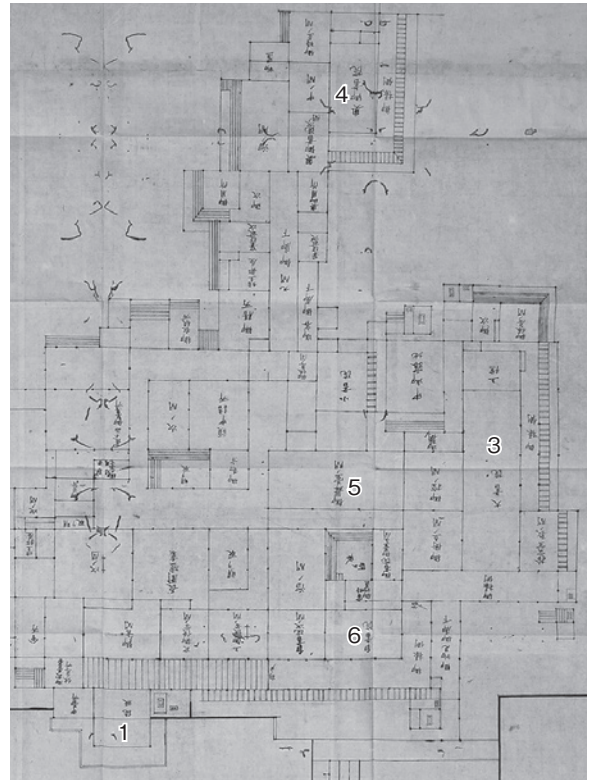
8 図 本地点・周辺調査地点で検出された庭園関連遺構

(左図：藩邸全体図、右図：部分拡大図)



a 「江戸御上屋敷図(部分)」安政5(1858)年

- 1 御玄関、2 御広間、3 大御書院、
- 4 奥御書院、5 能舞台、6 御白書院



b 「江戸御上屋敷御殿御間続御絵図(部分)」  
享和元～文政8(1801～1825)年

9 図 富山藩上屋敷表御殿の間取り

(小松 2015 を基に作成)

凝らした書院庭、その向こうに不忍池、上野の山が一体となった景観として映し出され、不忍池、忍ヶ岡を借景とした景観が連続性を演出していたと評価した。

さらに原は富山藩邸全景図の分析から、書院庭を取り巻く囲障施設が南北にはあるが東側がない点に着目し、大書院に面した不忍池、忍ヶ岡を借景するための設計であったと指摘した。一方、南北の囲障施設は藩邸内の行動圏規制としての機能を備えると同時に、原が「左右の視角は塀によって遮られる」（原 2014a）と評価したように、北側の囲障は藩邸北東部に広がる広敷関連建物、崖線際に位置する南側囲障は崖下南方に広がる下長屋（勤番武士貸長屋）と寺院墓域・町屋などの雑景観を遮蔽する役割も兼ね備えていたと推定される。

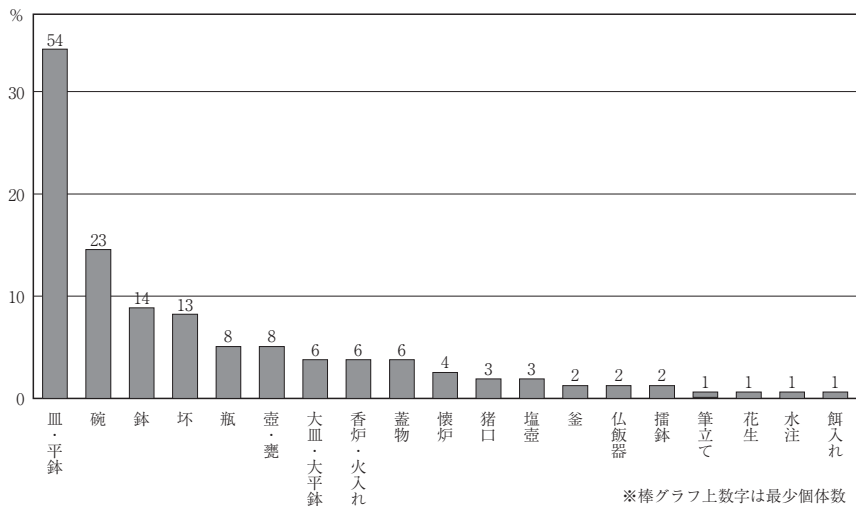
また原は、参謀本部地図より、藩邸北部から北東部にかけて崖線際を廻る標高 14m 等高線が、別課医学教場（書院）北端付近で教場方向へ約 90° 曲がり、教場手前で再び南へ約 90° 曲って南下し、教場と崖線間に緩斜面が形成されていることに着目した。この範囲は書院庭に対比され、本区域のみ標高 14m 等高線が台地内へ入り込むことから「庭園で行われた削平を示すと考えられ、14m の等高線は削平前、台地の突端を走っていたと仮定」した（原 2014a）。そこで削平前と削平後の景観変化を検討するために、参謀本部地図の標高情報を基に別課医学教場（書院）から東西方向の断面図を復元して、標高 14m 等高線が書院庭崖線を通った場合との景観比較を試みた。その結果、参謀本部地図の等高線から復元される緩斜面では、大書院から不忍池西側池畔を見渡すことができるが、標高 14m 等高線が崖線際を通る平坦地の場合、大書院からの景観は不忍池手前半分が隠れることを指摘した。この結果から不忍池全域を借景として取り込むために台地縁辺部を削平して緩斜面を形成したと推定した。池全域を借景するために崖線に向う緩斜面を造成した考え方には異論がないが、8 図に示したように、これまでの調査で植栽痕などの庭園関連遺構は、元禄 16 年火災以降の盛土面に構築されていることが明らかになり、また本地点で庭園利用が認められた元禄 16 年以降の盛土整地面、即ち A・B 面では、8 ラインを境に西側の A 面標高が約 20cm 高く、東西方向の標高差を意識して設計されていることが確認された。即ち定信が絶賛した書院からの眺望は、原が想定した自然地形の削平ではなく、標高差を演出した A・B 面形成を含む台地上の盛土造成によって築かれたと考えられる。

#### 4. 出土遺物からみた富山藩上屋敷

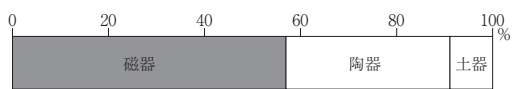
##### (1) 元禄 16 年火災資料〔SK168 + C 面焼土〕

本資料は、6 ライン以西の C 面直上に廃棄された焼土層で、焼土層確認範囲内で検出された SK168 も同一焼土層で埋め戻されていた。SK168 内では西側からの流れ込みで、調査区西壁全域で最大 40cm 厚の堆積が確認されたことから、調査区西方面で罹災した建物の瓦礫廃棄と考えられる。本藩邸詰人空間は、西側加賀藩邸境付近の上長屋、東側低地部の下長屋の東西両側に置かれた。御殿空間は両詰人空間に挟まれた台地中央部に置かれ、東側の庭園と西側の殿舎群で構成されている。天和 2 年以降、表門は大聖寺藩上屋敷東側の南北道路に接続しており、御殿空間殿舎群は表門から北へ表御殿、奥御殿と広がっていた。元禄段階の御殿殿舎群は、これまでの調査から 3 図に示した硬化面西側、かつ元禄 16 年火災資料が廃棄されたイノベーション地点 SX270 の存在から、それを北限とする区域が想定される。全景図にみられる表御殿東側の書院庭北側境界は本地点南側を東へ下の道路付近にあたることから（8 図）、本地点及び SX270 に廃棄された瓦礫は、近接する奥御殿から持ち運ばれた可能性が高い。

本焼土層出土陶磁器・土器類の最少個体数による器種組成を 10 図に示した。皿・平鉢が 34% と最も多く、それに碗（14.6%）、鉢（8.9%）、坏（8.2%）を合わせると、飲食器で約 2/3 を占める。皿・平鉢を中心とした飲食器構成は、天和 2 年の火災で被災した御殿空間所有飲食器類として評価される中央診療棟地点 L32-1、入院棟 A 地点 C2 層出土遺物と共通するが（堀内 2016）、皿・平鉢が 60% 弱を示した両遺構の組成とは隔たりがある。胎質別組成でも、磁器 57%、陶器 34%、土器 9% と磁器製品が半数以上を占めるものの、磁器製品が 9 割前後を占めた L32-1、C2 層出土資料と比較すると陶器の割合が大きいことが判る（11 図）。揃いの製品は、南川原山製品と推定される白磁 6 寸皿（Ⅱ - 78 図 3）、色絵五寸皿（Ⅱ - 78 図 7）染付猪口（Ⅱ - 82 図 29）程度で、それらも破片数から 10 個体前後のセットと推定される。また大皿（Ⅱ - 79 図 16、80 図 17、81 図 18、19）や大鉢（Ⅱ - 82 図 24、25）が一定量含まれていることから饗宴用食器類と指摘できるが、その一方で見込みにコンニャク印判五弁花文を描いた中皿（Ⅱ - 79 図 9 ~ 12）などの量産品類も含まれる。他にも香炉（Ⅱ - 84 図 49）、壺・甕（Ⅱ - 84 図 53、54、Ⅱ - 85 図 55）、播鉢（Ⅱ - 85 図 57）など生活材や、「伊勢物語」銘などの特殊器形製品（Ⅱ - 84 図 50、51）を含む嗜好的京焼系色絵陶器などが含まれ（Ⅱ - 83 図 43 ~ 46）、飲食器類組成が約 9 割を示した L32-1、C2 層とは大きく異なり、器種組成が多岐にわたっていることが窺える（成瀬 2013）。



10 図 SK168+C 面焼土出土陶磁器・土器器種組成



11 図 SK168+C 面焼土出土陶磁器・土器胎質別組成

こうした様相から、奥御殿における小規模饗宴や日常の食事などで使用された飲食器類、藩主家族もしくは上級女中所有の什器類、勤番武士・女中などが詰所、長局で使用した什器類など奥御殿という小世界の様々なシチュエーションが混在した一群と捉えられ、居間、詰所、役所、膳所、土蔵などの諸要素が集合する奥御殿が全焼し瓦礫化した廃棄パターンと位置づけることができる。

## (2) 天和2年火災資料〔SK299〕

本資料は、SK299 (D 面焼属遺構) の最上層に埋積した焼土層 (II - 58 図 1、2 層) から出土した一群である。ほぼ垂直に立ち上がる 1、2 層西側土層堆積状況から、SK299 埋積後に焼土処理を目的として掘削、廃棄された可能性が高い。下位層に焼土含有層及び被熱遺物が認められないこともそれを傍証している。本資料は、ほぼ伝世品的貿易陶磁で占められ廃棄年代を直接示す資料に乏しいが、1640～60 年代の肥前磁器を含む下層出土遺物年代観と上位遺構面 (C 面) が元禄 16 年の火災を下限とすることより、天和 2 (1682) 年の藩邸全焼火災による被災資料と位置づけられる。

1、2 層から出土した被熱遺物は、中国龍泉窯の青磁花入 (II - 99 図 1～4)、硯屏 (同図 5)、香炉 (II - 100 図 6～8)、天目台 (同図 9)、中国建窯の天目 (同図 10)、朝鮮王朝陶磁碗 (同図 11～14、II - 101 図 15、16)、ベトナムの灰釉蓮弁文水指 (II - 101 図 17)、

ドイツのライン炆器水注 (同図 18) など貿易陶磁が主体で、国産品では瀬戸・美濃灰釉碗 (II - 102 図 33)、瀬戸・美濃鉄釉花入 (同図 41)、瀬戸・美濃鉄釉茶入れ (II - 103 図 42) のほか京焼平碗などの小片が出土したにすぎない。

このように本資料は、中国、朝鮮などからの貿易陶磁を主体とし、碗、水指、香炉、花入など茶道具関連器種に特化した特徴を有することから、表御殿での儀礼で使用される唐物の茶道具、部屋飾りで構成された一群と位置づけられる。また皿、鉢、坏などの食器類、調理具、貯蔵具などの生活財が含まれていないことから、茶道具類を収蔵した場所 (土蔵) が被災し、そこで生じた瓦礫が廃棄された結果と考えられる。本資料が被災した天和 2 年の火災について、富山藩作事奉行吉川十郎右衛門長能から親子三代にわたって (慶長元年から元文 5 年) 富山藩内の事象を記録した『吉川随筆』に「二十八日未之刻本郷筋より出火折節風烈 加州様 此方様 飛州様右三御屋敷不残御類焼 殿様には上野え 御立退 (後略)」と (新田編 1988)、三藩の江戸本郷屋敷は全焼し、当時の富山藩主 2 代正甫は上野へ避難したと記されている。被災状況を窺う考古資料は本資料以外に確認されていないが、焼失した御殿殿舎群の瓦礫を一括して整理した場合、SK168 + C 面焼土資料のようにハレとケ、使用場所、使用者相などを反映した多岐にわたる器種構成を示すことは容易と考えられる。即ち本資料が茶道具類に特化した要因は、堀内が弘化年間の加賀藩邸絵図で藩邸北端部に描かれた「表御納戸役所・土蔵」の立地意図を「御殿空間からやや距離がある場所であるが、周囲に建物が少なく、火災などに配慮した位置であろうと思われる。」と指摘したように (堀内 2013)、邸内火災からの延焼を

防ぐために、周辺建物から離れて建設された御道具類専用土蔵が被災したことによると考えられる。

天和2年の火災は、富山藩が分家した寛永16(1639)年以降、初めての藩邸全焼火災で、本資料は初代藩主利治、二代藩主正甫のコレクションと位置付けられる。吉川随筆には「二十八日之火事に御屋敷不残焼失御秘蔵之御道具共不残尤御手道具も皆々焼失之由御衣服御土蔵あら物蔵此二つは残り申由也」(下線、筆者)と「御秘蔵之御道具」を焼失したことが記されている。この御道具は初代藩主利次が父利常(加賀藩3代藩主)から譲り受けた秘蔵の道具類を指し(小松 2015b)、本資料がこの「秘蔵の御道具」に該当する可能性が考えられる。

## おわりに

本稿では、看護職員等宿舎1号棟地点の調査成果に絵図、文献資料の情報を合わせ、富山藩邸の開発と空間利用、藩邸内御殿空間で使用された陶磁器類について論じた。本報告をまとめるまでに30年近くの年月が過ぎたことは、ただ猛省するところであるが、その間に富山藩邸区域に比定される附属病院北東部の調査が断続的に実施され、本地点の遺構配置を評価・復元する上で有益な情報を得ることができた。この情報がなければ18世紀以降の庭園環境の復元には至らなかった。

今後、他調査地点の遺構・遺物分析の進展に伴って藩邸構造、遺物諸相が復元され、これまでに蓄積された加賀藩邸、大聖寺藩邸との比較を通じた富山藩邸の実相に近づくことを期待したい。本稿がその第一走者としての役割を果たし、次へのバトンを繋ぐ一助になれば幸である。

## 【引用・参考文献】

- 栗野 隆 2018「加賀藩とその支藩の江戸藩邸庭園」『金沢城シンポジウム 金沢城の庭園—その歴史と特徴—』
- 大成可乃 2015「掘って、埋めて、また掘って—東京大学イノベ地点の調査成果から—」『江戸富山藩邸の調査・研究報告会』<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/P1-web.pdf>
- 追川吉生 2015「富山藩邸外郭部の土地利用状況—東京大学CRC 地点の調査概要から—」江戸富山藩邸の調査・研究報告会』<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/P1-web.pdf>
- 追川吉生 2017「大名屋敷の屋敷境—屋敷境としての堀を中心に—」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 岡嶋偉久子・山根陸宏 2000「翻刻『花月日記 松平定信自筆』(三)」『天理図書館報 ビブリア』第113号
- 栗三直隆 2008「富山藩の江戸屋敷」『富山市日本海文化研究所紀要』第21号

- 小松愛子 2015a「文献史料にみる江戸富山藩邸のくらし」『江戸富山藩邸の調査・研究報告会』<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/P1-web.pdf>
- 小松愛子 2015b「文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷」『東京大学調査研究年報』9
- 台東区文化財調査会 2005『茅町二丁目遺跡 池之端一丁目5番地(本郷台遺跡群・湯島両門町遺跡 湯島四丁目12番地)』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997「医学部附属病院看護婦宿舎地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997「医学部附属病院MRI-CT地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999「医学部附属病院看護婦宿舎地点(Ⅱ期)発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012「医学部附属病院看護師宿舎地点Ⅲ期」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2015「医学部附属病院入院棟Ⅱ期1次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017「医学部附属病院入院棟Ⅱ期2次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017「国際科学イノベーション総括棟新営」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019「医学部附属病院入院棟Ⅱ期3次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』11
- 成瀬晃司 2013「罹災資料にみる大名藩邸の陶磁器様相—天和2年・元禄16年の加賀・大聖寺・富山藩邸出土資料から—」『第3回近世陶磁研究会 江戸の武家地出土の肥前磁器—罹災資料と初期色絵・鍋島・柿右衛門—』
- 成瀬晃司 2016「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟A地点 研究編』
- 新田二郎編 1988『吉川随筆・前田家家乗』越中資料集成3
- 原 祐一 2014a「富山藩江戸藩邸の庭園を巡る」『富山の遺跡物語』富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報 No.15
- 原 祐一 2014b「富山藩邸庭園の造園と借景に関する一考察」『平成26年度日本造園学会関東支部大会事例・研究報告集』第32号
- 堀内秀樹 2013「加賀藩邸の貿易陶磁器出土様相と「蔵帳」に記された陶磁器—『加賀前田家表御納戸御道具目録帳』を中心に—」『貿易陶磁研究』No.33
- 堀内秀樹 2016「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル—加賀藩本郷邸の出土資料の分析から—」『中近世陶磁器の考古学』第二巻、雄山閣
- 森さき子 1987「富山藩江戸屋敷の火災と再建(於前田正甫公の時代)」『富山史壇』第93号



# 藩邸内斜面地における空間利用について

大成 可乃

## はじめに

文献調査や絵図面との照合から看護職員等宿舎3号棟地点(以下、3号棟地点)が位置する場所は、元和2・3(1616～1617)年以降は加賀藩下屋敷、寛永16(1639)年以降、幕末までは富山藩上屋敷であったことが明らかとなっている(詳細は第I章)。またここ数年、病院地区の調査が増加する中、文献調査も重点的に行われ、富山藩上屋敷に関する詳細な文献資料の調査、分析が行われ(小松2015)、考古学的成果との照合が可能になりつつある。

3号棟地点は、富山藩邸を調査した他の病院地区の調査地点と比較すると遺構、遺物が少ないという事が特徴として挙げられる。しかし一方で、SK2という採土坑が掘削され、最終的に芥溜り利用され、埋められる状況も確認されるなど、何かしらの空間利用の変化があったことが推測される。

そこで以下では検出された遺構、遺物の様相(分布、変遷)から本地点の空間利用の復元を行うとともに、空間利用の変化をもたらした要因についても検討してみた。

## 第1節 各面の遺構分布と遺物出土状況

3号棟地点の現在の標高は約15mを測るが、明治16年測量の「参謀本部陸軍部測量局五千分の一東京図測量原図」をみると、3号棟地点の標高は北西部では14m、南東部では12mと大きな勾配がある傾斜地であることが確認され(1図)、現在の標高に至ったのは明治16(1883)年以降であることがわかる。この傾斜は根津谷方向へ開く埋積谷の存在が影響していると考えられるが、調査する中でも地山が北から南へ傾斜している状況が確認されている(2図)。このような勾配が確認される場所で、3号棟地点では地山(D面)を含め遺構面が4面(A～D面)確認されているが、A～C面はいずれも局所的な確認にとどまる。遺構もSK2を挟んで南北でその様相を異にし、北側では大溝SD3、池状遺構SX15を除けば布掘り基礎や小ピット、植栽痕が検出され、南側では大形遺構SX1以外では、地下室や土坑などの比較的深い遺構が確認される。また遺構が多数重複する状況は、D面またはC-D面で局所的に認められ

る程度で、本地点における土地利用頻度の低さを物語る。

### D面(3図)

D面からは主として江戸時代と江戸時代以前の遺構が確認されるが、本報告では江戸時代のみを対象とする。確認された遺構数は60基で、それらは概ね東西グリッド4ラインより北側で確認される。中でも南北グリッドDラインより西側では溝、布掘り基礎などの建物址、大形土坑、地下室などが比較的密集して確認される一方、Dラインより東側では不整形の土坑や溝、小ピットなどが散見され、検出される遺構の様相が大きく異なる。

主軸方向角が確認できる遺構は限られるが、グリッド軸に対する触れが、5°未満、10°未満、15°前後の大きく3つ確認でき、D面で検出された遺構には、3つの時期差あるいは段階差のある遺構が含まれる事が想定される。

検出された遺構は遺物がないものが多く、また遺物が出土していてもごく少量で年代比定が困難なものが多い。下位面のC面で確認されたSD3からは17世紀前葉から中葉に比定される遺物が出土しており、D面はそれ以前の遺構面と考えられる。

### C面(4図)

C面はSD3東側のみに南北方向の帯状(D2～D4、E2～E3グリッド)に、D面直上に厚さ2cm程の薄い硬化面として検出される。後述するSX1の坑底でも地山上にC面に対応すると思われる硬化面を部分的に確認している。C面で確認された遺構数は15基と少なく、遺構の種別をみるとSD3以外はD面と同じく植栽、小ピットが中心である。

C面で確認される遺構の主軸方向角は、グリッド軸に対して直交ないし平行するものが中心であるが、本確認面の最も大きな遺構であるSD3は、グリッド南北軸より東へ7°振る。直交ないし平行する主軸方向角を示す遺構は全てピットであり、SD3とは時期差あるいは段階差があった可能性もある。

D面同様、遺物が出土した遺構はほぼ無く、唯一SD3の最下層から17世紀前葉から中葉に比定される遺物が少量出土している。

### C-D面(3、4図)

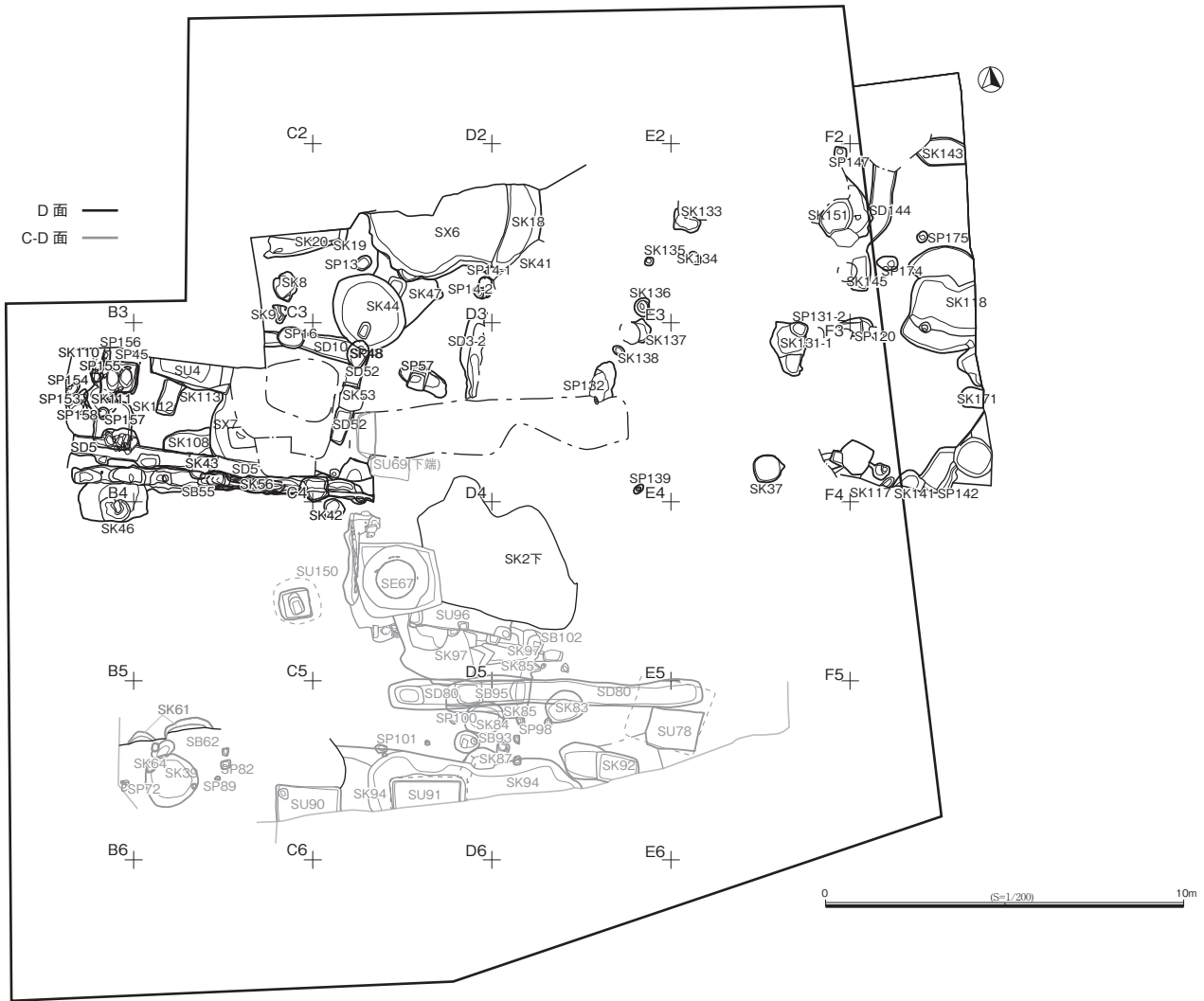
C-D面とした遺構は、SX1の坑底およびSK2の坑



1 図 明治 16 (1883) 年の調査地点 (明治 16 年測量の「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図」に加筆。赤字は当時の標高。48 が 3 号棟地点



2 図 江戸時代最終面 (写真左が北。中央の大形方形土坑が SK2)



3図 D・C-D面

底や南側立ち上がり付近で検出された遺構である。前述したようにSX1の坑底では地山とC面と対応する硬化面が局所的に検出されており、坑底で検出された遺構は、C面またはそれより下位の面で確認される遺構と判断される。またSK2の坑底から南側立ち上がり付近で検出された遺構は、いずれもSX1の坑底で検出されたSD80に切られる。以上のような重複関係からSK2の坑底から南側立ち上がり付近で検出された遺構もC-D面を確認面とする遺構と判断した。C-D面とした遺構は27基あり、それらは遺構間の重複が著しい。またSX1の坑底で検出されたSD80を境としてその南側には、地下室(SU78、SU90、SU91)などが東西に並び、それらとは少し離れた場所に不整形円の植栽痕(SK39、SK83、SK84)や小ピットが散見されるなど、他の面あるいは場所とは検出状況を異にする。

確認可能な遺構の主軸方向角をみると、SD80、SU90、

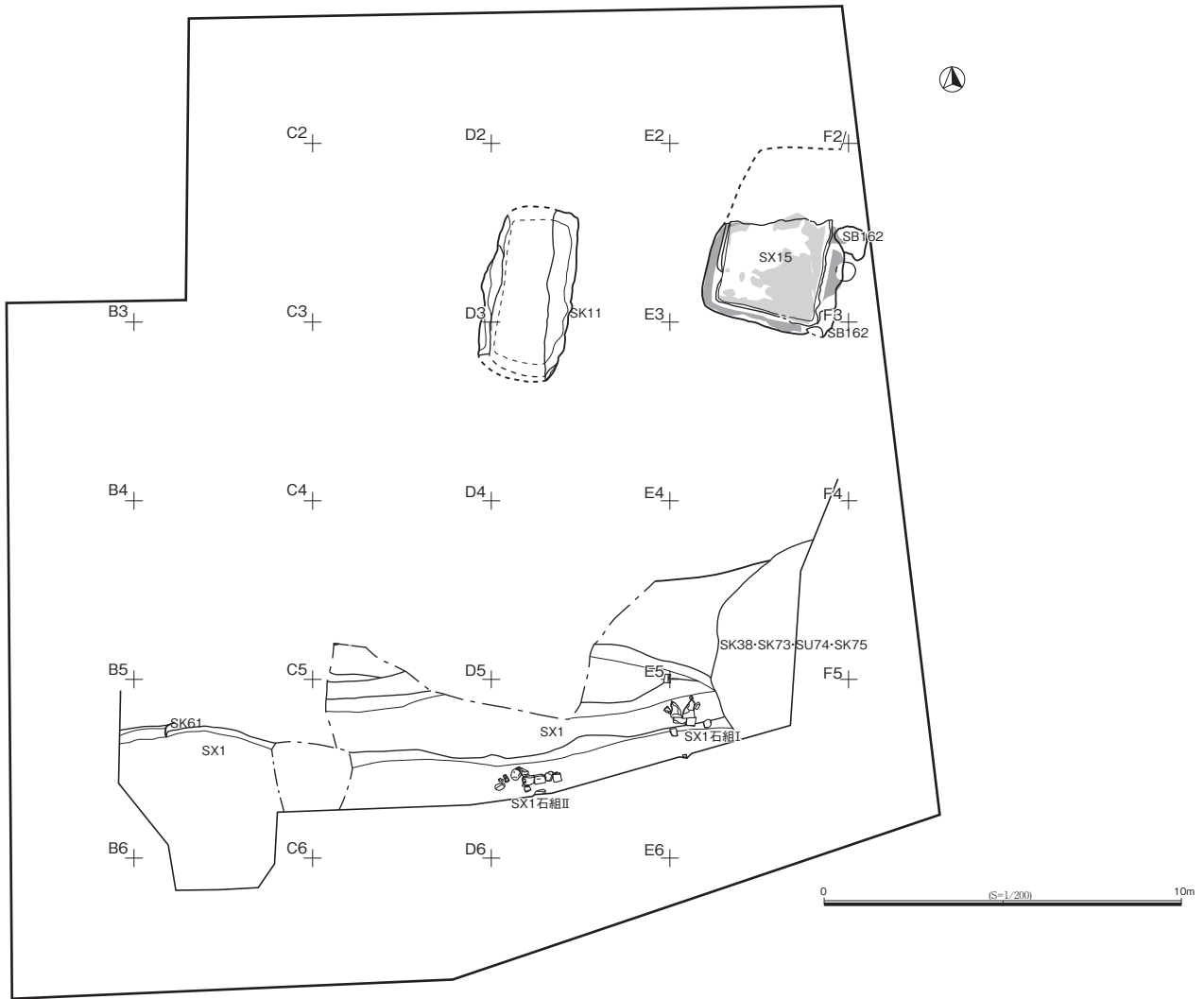
SU91はグリッド軸とほぼ同軸、SB95は東西グリッド軸より4°南へ触れ、SU78、SB93、SU150は東西グリッド軸より北へ約10°振れる事が確認され、C-D面とした遺構は大きく3つの時期差又は段階差のある遺構が含まれる事が想定される。

本面の遺構も半数以上は遺物が確認されないか、また出土していてもごく少量で年代が判然としない遺構が多い。グリッド軸に対しほぼ同軸のSU91からは18世紀代の遺物、わずかに触れるSB95からは18世紀後半の出土遺物、10°前後振れるSU78からは東大編年IV期、SU150からは18世紀前葉と19世紀前葉に比定される遺物が出土し、C-D面で確認された遺構からの出土遺物には17後葉以降、18世後半までの遺物が確認できる。

### B面 (5図)

B面もC面と同じく非常に局所的な検出面であり、SK2の北東部分のみで検出された面である。確認され





5 図 B 面

に比定される遺構面である可能性が高い。地山である D 面以外はいずれも局所的なものであり、必ずしも D 面から C 面、B 面、A 面へと時間的に変遷したとは限らず、同時並行的に存在していた可能性もある。

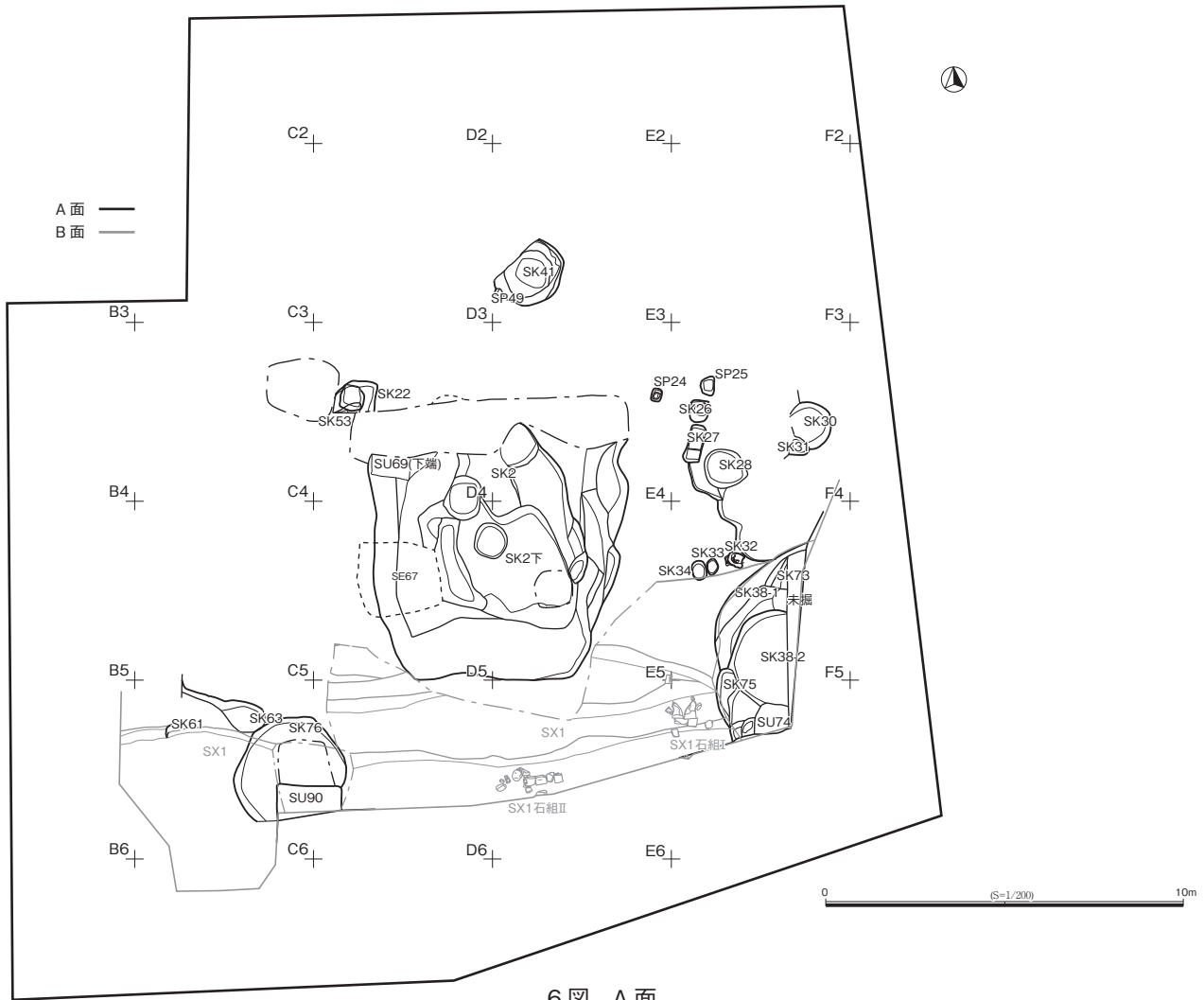
## 第 2 節 遺構の変遷

前節でも触れたように、いずれの面も局所的に確認されたものであり、また各面の中に時期差あるいは段階差が窺われる遺構が含まれていることが確認されたことから、本節では出土遺物の年代観から年代比定が可能な遺構について帰属面を確認し、本地点の年代毎の様子を整理、確認してみたい。

### 17 世紀代 (7 図)

17 世紀代に比定される遺物が出土する遺構は、D 面で確認された SX6、C 面で確認された SD3、B 面で確認された SK11、SX15、C-D 面で確認された SU78 の 5

遺構であり、SU76 以外は全て 4 ラインより北側に位置する。いずれの遺構も遺物量は少なく、また細片が中心である。SD3 は覆土下位層から初期伊万里や手づくねのカワラケなどの 17 世紀前半代の様相を呈す遺物が出土し、SX6 からは瀬戸・美濃系陶器の長石釉皿や輪積塩壺の破片などの遺物が、SK11 からは瀬戸・美濃系陶器の鉄釉丸碗や長石釉皿など、ともに 17 世紀代に比定される遺物が出土している。SX15 からは IV-59 図で提示した、いわゆる初期伊万里碗や丹波系播鉢など 17 世紀中葉から後葉に比定される遺物が出土している。SU78 からは IV-60 図で提示した肥前系磁器の南川原窯指標の染付皿や、肥前系陶器の渦刷毛丸形碗、京焼風陶器碗など東大編年 IV 期に比定される遺物が出土しており、遺物の年代観からみると 17 世紀代に比定される遺構の中では最も新しい段階の遺構である。なお SU78 は、看護職員等宿舍 1 号棟地点 (以下、1 号棟地点) の元禄



6 図 A 面

16 (1703) 年の火災一括廃棄遺構である SK168 と遺構間接合している。また SU78 の遺構覆土中にも焼土を多く含む層が確認されていることから、SU78 も 1 号棟地点 SK168 と同じく元禄 16 年の火災に伴い廃絶した遺構である可能性が高い。

SD3 と SX15 はともに 17 世紀代の遺構であることが確認されているが、SX15 は SD3 をバックする B 面上で検出された遺構であり、17 世紀代の様相には、SD3 構築前から構築後の段階と、SD3 が埋め戻され、整地後 (B 面)、SX15 や SK11 が構築される段階が想定される。SU78 は 4 ラインより南側で確認される唯一の 17 世紀代の遺構であるが、17 世紀代の最も新しい段階の遺構であり、南側は北側より少し遅れて利用が開始され、地下室が構築される居住空間として利用がされる場所であったと推定される。

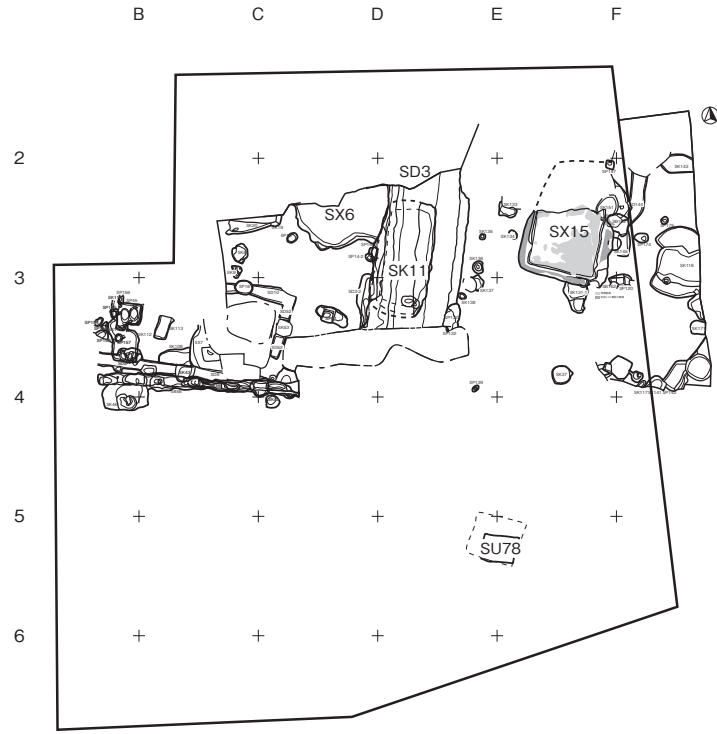
17 世紀代に比定される遺構は 1 遺構から出土する遺物量は少なく、また細片が中心であり、芥が廃棄された

というより埋土に偶然混在していたような状況である。またその様相をみても、瀬戸・美濃系陶器碗、皿やカワラケ、すり鉢、塩壺などの日常的な使用に伴うものが中心であり、特定器種の偏在や墨書や釘書きなどが施された陶磁器類も見当たらない。

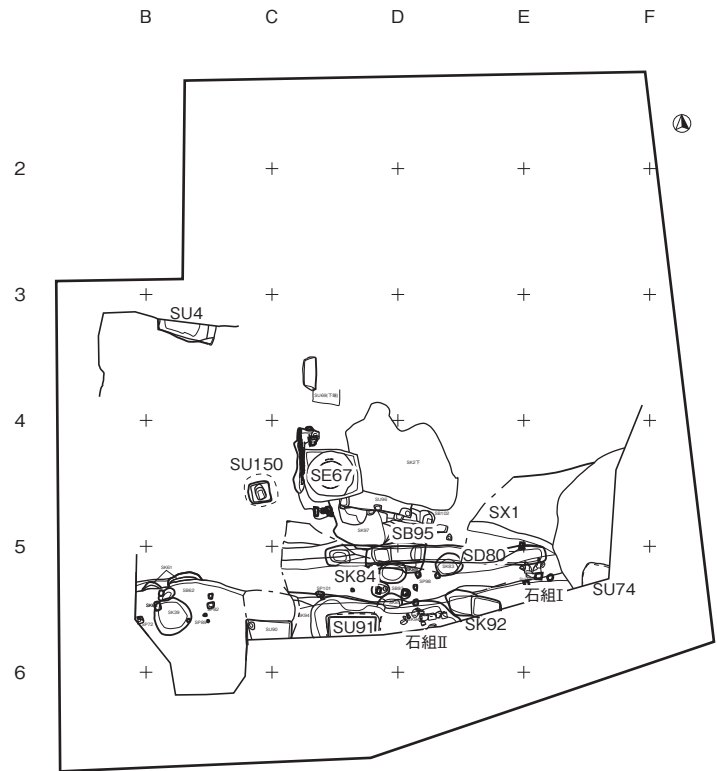
### 18 世紀代 (8 図)

18 世紀代に比定される遺物が出土する遺構は、D 面で確認された SU4、C-D 面で確認された SE67、SK84、SU91、SK92、SB95、SU150、A 面で確認された SU74 の 8 遺構であり、大半は SX1 の坑底で検出された C-D 面とした遺構である。SU4 は地山で検出された遺構であり、本来の帰属面はそれより上位である可能性が高く、SU74 は A 面の SK38-1 の坑底で検出された遺構であり、本来の帰属面は A 面より下位の遺構面である可能性が高い。

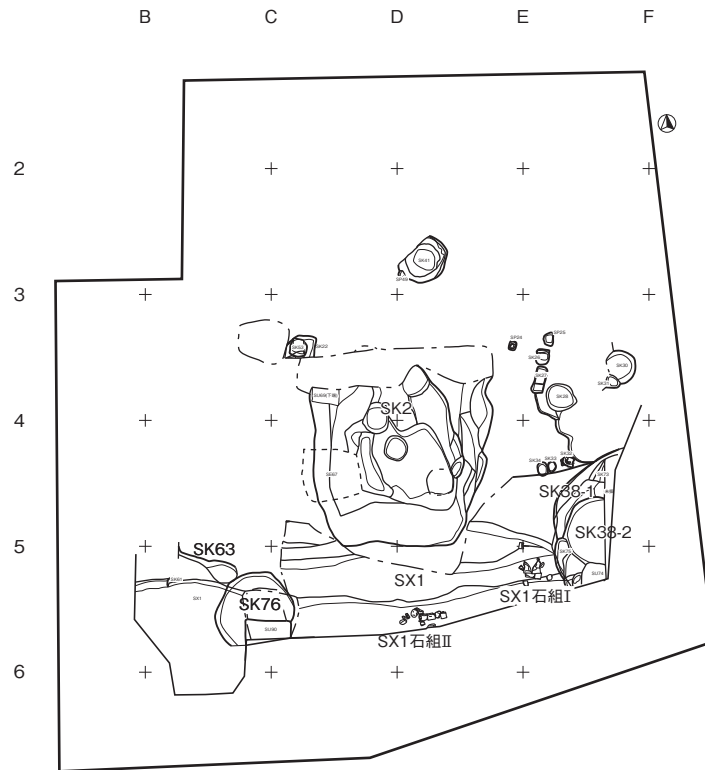
17 世紀代に比定される遺構と同じく、各遺構から出土する遺物量は少なく、また細片が中心である。SU4



7図 17世紀代 (1/300)



8図 18世紀代 (1/300)



9 図 19 世紀代 (1/300)

からは瀬戸・美濃系陶器のいわゆる腰鍔碗や鉛釉施釉の五合徳利など、SU91からは瀬戸・美濃系陶器灰釉碗などの18世紀代に比定される遺物が出土している。SE67からは肥前系磁器で見込みに陰刻があり、蛇ノ目高台を有す皿・平鉢、肥前系陶器の刷毛目が施された皿・平鉢、瀬戸・美濃系の灰釉皿や播鉢などが、SU150からは肥前系磁器半球碗、肥前系陶器京焼風碗、瀬戸・美濃系陶器瓶（二合半、五合）、瀬戸・美濃系陶器播鉢など18世紀前半代に比定される遺物が出土している。SU74からは肥前系磁器のみじん唐草が染付された半球碗、瀬戸・美濃系陶器灰釉水甕、鉛釉瓶などが、SK84からはいわゆる瀬戸・美濃系貧乏徳利などが、SK92からは瀬戸・美濃系灰釉五合徳利が、SB95からは景德鎮窯青花水注や、瀬戸・美濃系灰釉陶器瓶（二合半、五合）、堺播鉢などの18世紀後半代に比定される遺物が出土している。

17世紀代に比定される遺構と同じく18世紀代に比定される遺構も、1遺構から出土する遺物量は少なく細片が中心であり、またその様相も日常的な使用に伴うものが中心であり、特定器種の偏在や墨書や釘書きなどが施された陶磁器類も見当たらない。

### 19世紀代 (9 図)

19世紀代に比定される遺物が出土する遺構はSX1、SK2、SK38-1、SK38-2、SK63、SK76の6遺構であり、全てA面で確認された遺構であり、SK2の南側に位置

する。SX1、SK2以外は17、18世紀代の遺構と同じく遺物量は少なく、細片が中心であるが、SX1からは163点、SK2からは209点の最小個体数を数える遺物が出土している。また、その中には完形あるいは半完形品が比較的多く認められるなど、他遺構と出土状況が大きく異なり、SX1、SK2の出土遺物が他遺構と異なる要因で廃棄された事を想起させる。第II章第2節のSX1の遺物事実記載でも述べたように、SX1の出土遺物の9割以上はSX1の段切り全体を覆うように堆積していた灰色土層（SX1\_1層）から出土したものであり、本層からは瀬戸・美濃系磁器のいわゆる湯呑碗や木型打込皿など、東大編年Ⅷd期に比定される遺物が出土している。ちなみに灰色土層直下にSX1石組I、石組II、段切り部分に整地層などが局所的に確認されたが、その層中からは、出土量は少ないが瀬戸・美濃系陶器のいわゆる貧乏徳利が出土しており、石組を伴うSX1の様相は、灰色土層に覆われる段階とさほど時期差がない段階の様相を呈していると推測される。SK2からは瀬戸・美濃系磁器のいわゆる湯呑碗や寿文皿、肥前系磁器の八角鉢など、東大編年Ⅷc～Ⅷd期に比定される遺物が出土している。SK38-1、SK38-2からは瀬戸・美濃系磁器御神酒徳利やロクロ成形の塩壺などが、SK63からは瀬戸・美濃系磁器皿や硬質瓦質筒形火鉢などの細片がごく少量出土し、ともに19世紀代に比定される。なお、SK76



からは瀬戸・美濃系陶器腰鍔碗や水甕、植木鉢など18世紀後葉から19世紀前葉に比定される遺物が出土しているが、18世紀後葉に比定される遺物は、本来はSK76の坑底で検出されるSU90やSK94などのC-D面を確認面とする遺構に伴う遺物である可能性が高い。

SX1は下限がSX1を覆う灰層出土遺物の年代観から19世紀中葉、上限が坑底で検出された遺構の年代観から18世紀前葉とされる年代幅のある遺構であり、A面で確認された状況は概ね最終利用形態に近い状況であろう。またSX1坑底の遺構には重複して検出される遺構もあり、最終利用形態に至るまでの間、数度の利用状況があった事が想定できる。

以上のように19世紀に比定される遺構には、17、18世紀代に比定される遺構には認められない特徴がある。すなわち1遺構から多くの遺物が出土し、その中に完形あるいは半完形品が比較的多く認められ、特定の器種がまとまって出土する状況が確認される状況である。例えばSX1では瀬戸・美濃系陶器の二合半徳利が、SK2ではカワラケが完形ないし半完形品がまとまって出土する状況が確認されている。この事は藩邸内で本地点の空間利用がこれまでとは異なる状況となった事や、何かしらの突発的な廃棄要因があった事を想起させる。

### 第3節 本地点の空間利用

3号棟地点では近代以降の攪乱などの影響が大きく、各整地面が面的、また重層的に確認できる部分が少なく、整地面単位での空間利用の復元が困難であったが、検出面毎に遺構の様相や分布状況、各遺構から出土する遺物の様相や年代観などを検討する中で、本地点の17世紀代、18世紀代、19世紀代の空間利用をみていくと以下のような状況が明らかとなった。

17世紀代の利用は大きくは東西グリッド4ラインより北側に限定され、南側は東大編年Ⅳ期に比定されるSU78が構築されるまでは積極的な利用はなかったと思われる。ただし4ラインより南側は、近代以降の攪乱あるいは大形遺構のSK2やSX1に壊されたため、17世紀代の遺構が削平され検出されなかった可能性は勿論あるが、井戸や地下室などの深い遺構もSU78以外は検出されておらず、利用頻度は低かったのではないだろうか。東西グリッド4ラインより北側で確認される遺構には溝、不整円形土坑、池状遺構、小ピットなどがあるが、南北にのびるSD3を境として遺構の分布状況や中心となる遺構の種類も異なっている。すなわちSD3より西側には重複する溝や布掘り基礎が、東側では検出状況から植栽痕と推測される不整円形土坑が重複し、他は小

ピットが散見される状況であり、SD3を境に西側は住空間、東側は庭園のような異なる空間利用であった事が推測される。

SD3が埋め戻された後、東側は整地され(B面)池状遺構SX15が構築されるが、それ以外の遺構は検出されなかった。それまでの庭園に加え、そこに池状遺構SX15を構築し、引き続き庭園として利用した可能性はあろう。それに対し西側では、C面あるいはB面のような整地面を確認することが出来なかったが、同種の遺構が重複する例が多く、住空間としての利用は変わらず、複数回の作り替えが行われたのではないだろうか。重複して確認される溝あるいは布掘り基礎は、利用頻度の低い南側と北側の庭園を区切る塀または溝のような機能を果たしていた可能性もある。ちなみに19世紀代の絵図面には、これらの溝あるいは布掘り基礎と同じような位置に御殿空間の露地と詰人空間を分ける塀のようなものが描かれており、17世紀代の布掘り基礎や溝を踏襲した可能性もある。

18世紀代の利用は、これまで利用の見られなかった東西グリッド4ラインより南側にはほぼ限定され、確認される遺構は地下室が最も多く、他に段切り、井戸、建物基礎、土坑などが認められるなど、利用が集中するエリア、確認される遺構の種類も17世紀代とは大きく異なる。東西グリッド4ラインより南側は18世紀代に比定される遺構が重複して確認され、北側と異なり、繰り返し普請が行われるような空間利用があった事が推測される。重複関係や遺構の主軸方向角などから、大きくは3ないし4つの段階が想定される。すなわち第1段階は地下室SU78が埋められ、その後段切りSX1が構築される段階、第2段階はSX1の南端平場にSU90、SU91などの地下室が東西に配置され、その北側にはSD80が存在した段階、第3段階はSX1の南端平場にあった地下室が埋められ、SK92、SK94などの植栽が確認される段階、第4段階として植栽が埋められSX1石組Ⅰ、石組Ⅱが配石された段階である。SX1\_1層にバックされる形で検出された状況がこの第4段階である。ただ各段階は完全に前後するのではなく、重複する部分があった可能性はあろう。

東西グリッド4ラインより北側では18世紀代の遺物が出土するのはSU4のみに限られ、しかも池状遺構SX15が18世紀後葉から19世紀代に比定されたA面で覆われている状況から、このエリアは17世紀後半代にSX15を構築後は、18世紀後葉にA面で整地されるまでは大規模な普請や廃棄行為などが行われず、庭園としての利用に限定された場所であった可能性はある。

18世紀代は東西グリッド4ラインより北側は前代より引き続き庭園として利用され、南側は地下室や植栽痕が認められる住空間に変わった事が指摘できる。ただ住空間としての利用は植栽あるいは地下室が主で、建物址などは確認できない。17、18世紀代は藩邸を描いた絵図面などは未確認であり推測するしかないが、地下室や植栽が位置する北側にはSX1の段切りがあることから建物址は調査区外の南側に存在していた可能性が高い。

19世紀代の利用は、概ね東西グリッド3ラインより南側に限定され、確認される遺構は採土坑(SK2)、植栽痕(SK38-1、38-2、SK76など)、段切り状遺構(SX1)などがあり、18世紀代と利用が集中するエリアには概ね変化がないが、確認される遺構の種類は大きく異なる。前述したように18世紀代に構築されたSX1は、少しずつ利用状況を変えながら19世紀代まで引き続き利用され、最終利用状況は石組を伴う段切り部分と植栽という形態であった事が推測される。その後SX1北側に採土を目的としてSK2が掘削される。SK2は採土坑としての役割を終えた後は芥溜として複数回の廃棄と掘り返しが繰り返されたことが確認されているが、出土遺物には陶磁器土器類、瓦、金属製品、木製品、石製品など多種多様の遺物が含まれていたのは勿論、カンナ屑や漆喰などの建築関連遺物も多く含まれていた。カンナ屑や漆喰などはSK2坑底付近で多く出土しており、採土後、藩邸内の何かしらの普請作業が行われ、芥と一緒に埋戻しが始められた事が想定される。このようなSK2の存在は、19世紀代の3号棟地点が土取場として利用可能な場所であり、更には一時的な芥溜として利用することが可能な空間であった事を示している。

19世紀代は富山藩邸を描いた絵図面が5点確認されるが、安政5(1858)年シラベと書かれた「江戸御上屋敷図」と3号棟地点を照合すると、10図のようにSK2より北側は御殿空間の「御露地」の南端部、SK2より南側は詰人空間で緑の帯状に描かれた部分と「呉服御土蔵」と描かれた建物北側に近接した空閑地であることが確認できる。<sup>註(1)</sup> 調査でも19世紀代の遺構はSK2より北側にはほぼ認められず、SK2より南側にSX1やSK76やSK38-1、SK38-2などの段切りと植栽痕のみが確認される状況であり、絵図面に描かれた状況と概ね近い状況であることが判る。しかし絵図面にはSK2は描かれておらず、採土坑SK2が一時的な構築物のため表現されなかったのか、あるいはこの絵図面が描かれた頃にSK2がすでに埋められていた可能性もある。文献調査から文政8(1825)年あるいは弘化3(1846)年の火災があったことが明らかとなっているが、SK2の覆土中からは

1840年代～1860年代の遺物が出土しており、この火災後の普請のために採土坑として掘削され、その後藩邸内の芥溜として一時期機能し、絵図面が描かれたと推測される安政5(1858)年頃には、その機能を停止し、埋め戻されていたのではなかろうか。

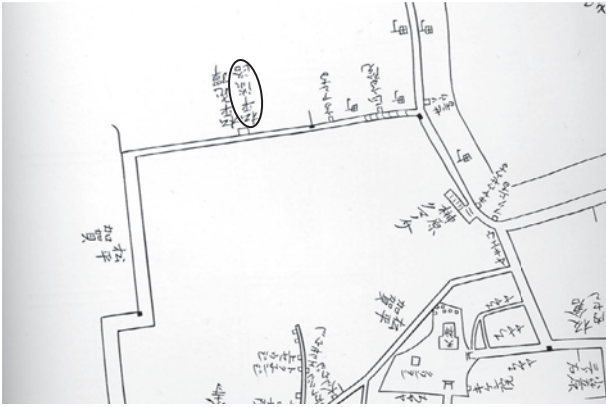
## おわりに

本地点で検出された遺構129基のうち、遺物が出土した遺構は32基で全遺構の約1/4と少なく、その上、1遺構から出土する遺物量も少なく、遺物の年代観が把握できるだけの量が出土している遺構は19基と更に限られる。このような遺物の少なさが3号棟地点の最大の特徴といえる。しかもこの遺物の少なさは17世紀、18世紀を通じて認められる傾向であり、遺物出土状況から浮かび上がる本地点の様相は芥を廃棄する行為がNGであった場所ではないかという事である。17世紀代、18世紀代は、これまでの調べでは富山藩邸内の様子を描いた絵図面などが見つかっておらず、絵図面から藩邸内の状況を伺い知ることは出来ない。しかし17世紀代、18世紀代の江戸図をみると絵図によってデフォルメの仕方は異なるが、加賀藩、大聖寺藩との位置関係は変わらず、また江戸図に描かれた富山藩藩主の名前はいずれも南側の無縁坂方向を向いており(11図)、表御門の位置や向きが変わらなかった可能性はあろう。<sup>註(2)</sup> だとすると本地点は17世紀代、18世紀代を通して表御門に比較的近く、外部から見えやすい立地にあり、大規模な普請や芥の廃棄などは行なわれにくい場所ではなかっただろうか。また本地点北側では17世紀代、18世紀代を通じて検出される遺構が池状遺構や植栽などの庭園に関連するような遺構が中心であり、建物遺構などは認められない。このような空間利用が19世紀代の絵図面にある大御書院に面した庭園(御露地)に引き継がれた可能性はあり、17世紀代、18世紀代に遺構、遺物が少ないのも理解できるのではないだろうか。しかし19世紀代、それまで廃棄行為NGであった場所に採土坑が掘削され、その後はそこに複数回の廃棄行為が行われ、暫くの期間とはいえ芥溜として利用される状況となったのは、火災で藩邸が全焼するという突発的な出来事に対応するための一時的な利用であったからこそではないだろうか。

本稿では触れる事ができなかったが、SK2のような採土坑を掘削する場所はどのような基準で選定されるのであろうか。必要としている土の種類(ローム土なのか、粘土なのか、砂なのかなど)によって、どのような場所を、どのくらいの深さまで掘削するのかが決められる事は想像に難くないが、あれだけの規模のものを無作為に



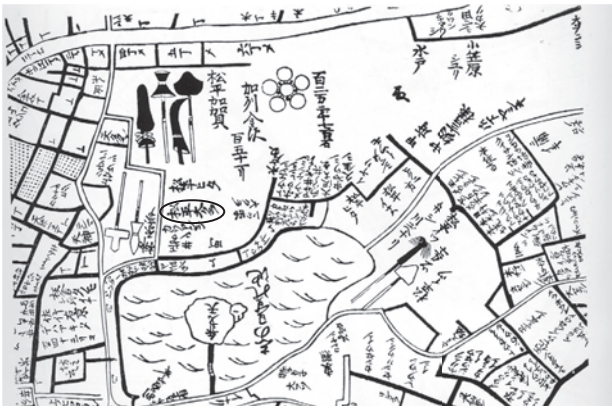
10 図 安政5(1858)年シラベ「江戸御上屋敷絵図」トレース図と3号棟地点を合成



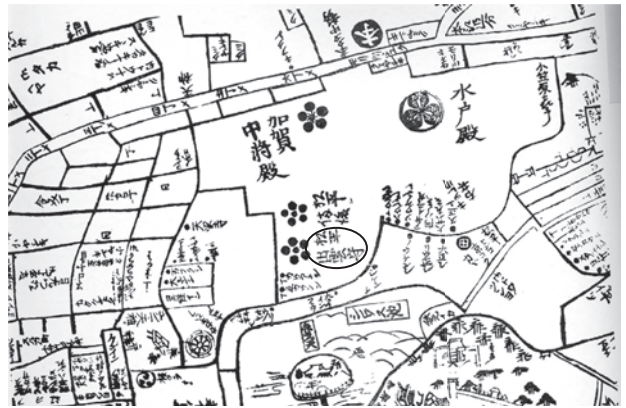
江戸外絵図寛文図三(寛文11・1671年)



江戸方角安見図乾(延宝7・1679年)



江戸図正方鑑(元禄6・1693年)



分間江戸大絵図(享保10・1725年)



分間宝暦江戸大絵図(宝暦7・1757年)



谷中本郷駒込小石川辺絵図(嘉永2年・1849年)

11図 江戸図に描かれた富山藩(○で囲った部分が富山藩)

掘削することは後処理の事を考慮しても考えにくく、藩邸内で採土する「きっかけ」と何かしらの規制があった事が推測される。3号棟地点以外の富山藩邸の発掘調査でも、規模や形状などから採土坑と推測されている遺構がいくつか確認されており<sup>註(3)</sup>、それらが空間的、あるいは年代的に遍在するのか、採土後はどのように埋め戻され、その跡地はどのように利用されたのかなど、今後、基本的な情報を整理、収集し、藩邸内の採土という行為について再考していきたい。

#### 【註】

- (1) 本絵図面の空間構成の詳細な分析が小松によって行われている。「江戸御上屋敷図」と明治16年(1883)年参謀本部陸軍部測量局1/5000東京図測量原図の等高線を重ねると(1図)、富山藩邸は本郷台地の先端地上のなかでも小高く、平場となっている標高16mから14mの部分に御殿空間が、その外側に詰人空間が配置されていると分析。また加賀藩や大聖寺藩と接する詰人空間西側は台地上の高台にあり「上長屋」と呼称し、東側は低地部分に位置し「下長屋」と呼称し、識別していたという(小松2015)。
- (2) 天和2年の火災を契機に南側の大聖寺藩邸から延びていた道が東側へ付け替えられるため、表御門の位置が東側へ動かされた可能性もあり、それに伴い表御門周辺の状況も変更された可能性はあるが、本地点では天和2年の火災層や火災に伴う遺構は見つかっておらず、当時の状況は不明である。
- (3) 本報告書の「看護職員等宿舎1号棟地点」、「医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点」、「クリニカルリサーチセンター地点」、「国際科学イノベーション総括棟地点」などの調査地点で採土坑と思われる遺構が確認されている。

#### 【参考文献】

- 小松愛子2015「文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9 東京大学埋蔵文化財調査室  
 東京大学埋蔵文化財調査室1997『東京大学構内遺跡調査研究年報』2 東京大学埋蔵文化財調査室  
 東京大学埋蔵文化財調査室2017『東京大学構内遺跡調査研究年報』10 東京大学埋蔵文化財調査室  
 堀内秀樹2005「加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する考察」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部1号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室



## 報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき いがくおふぞくびょういん かんごしょくいんとうしゅくしゃ1ごうとうちてん、りんしょうしけんとうちてん、かんごしょくいんとうしゅくしゃ3ごうとうちてん (1)	
書名	東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院 看護職員等宿舍1号棟地点、臨床試験棟地点、看護職員等宿舍3号棟地点 (1)	
副書名		
巻次		
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書	
シリーズ番号	15	
編著者名	大成可乃(編)、成瀬晃司、小林照子(編)、香取祐一、阿部常樹、大貫浩子、平石冬馬	
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内	03-5452-5103
発行年月日	令和3年3月31日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきょうだいがくほんごうこうない いせき ほんごうだいいせきて 東京大学本郷構内の遺跡 (本郷台遺跡 群) 医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟 地点	とうきょうとふんきょうくほんごう ちやうめ 東京都文京区本郷7丁目3-1	13105	47	35° 42' 45"	139° 46' 01"	1993年8月4日～ 1994年1月17日	746㎡	医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟新営に伴う事前調査
とうきょうだいがくほんごうこうない いせき ほんごうだいいせきて 東京大学本郷構内の遺跡 (本郷台遺跡 群) 医学部附属病院臨床試験棟地点	とうきょうとふんきょうくほんごう ちやうめ 東京都文京区本郷7丁目3-1	13105	47	35° 42' 43"	139° 46' 00"	1994年1月18日～ 3月12日	400㎡	医学部附属病院臨床試験棟新営に伴う事前調査
とうきょうだいがくほんごうこうない いせき ほんごうだいいせきて 東京大学本郷構内の遺跡 (本郷台遺跡 群) 医学部附属病院看護職員等宿舍3号棟 地点	とうきょうとふんきょうくほんごう ちやうめ 東京都文京区本郷7丁目3-1	13105	47	35° 42' 42"	139° 46' 01"	1996年11月5日～ 1997年1月31日	525㎡	医学部附属病院看護職員等宿舍3号棟新営に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
看護職員等宿舍1号棟地点	包蔵地、集落、大名屋敷	縄文 古墳 近世 近代	縄文：炉穴 古墳：住居址 近世：礎石建物、井戸、溝、地下室、採土坑、植栽痕、跡、土坑、小穴 近代：建築基礎、井戸、石列、土坑	縄文：土器 古墳：土器 近世：陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品 近代：陶磁器	縄文：早期末葉炉穴・土器 古墳：前期住居址5軒、後期住居址1軒 近世：富山藩邸の調査。最下面SK299焼土層から多量の貿易陶磁。元禄16年火災層一括廃棄資料。最上面で18世紀代庭園関連遺構。文政8年または弘化3年焼土層確認。19世紀代礎石建物遺構 近代：御雇外国人教師館基礎遺構
臨床試験棟地点	包蔵地、集落、大名屋敷	古墳 近世	古墳：住居址 近世：半地下室、地下室、便槽、井戸、植栽痕、土坑、小穴	古墳：土器、勾玉 近世：陶磁器、土器、金属製品、瓦、石製品	古墳：前期住居址5軒
看護職員等宿舍3号棟地点	包蔵地、集落、大名屋敷	古墳 近世	近世：段切り状遺構、採土坑、池状遺構、大形溝状遺構、地下室、井戸、植栽痕	近世：陶磁器、土器、瓦、木製品、金属製品、石製品	近世：安政5(1858)年以降を描いたとされる絵図面に青緑色で表現されたものに比定される可能性のある段切り状遺構検出。漆喰が貼付られた池状遺構を検出

要約	<p>現存する富山藩土屋敷全景図はいずれも19世紀代の様相を描いたものである。3地点の発掘調査では17～18世紀代の遺構も多く検出され、19世紀以前の藩邸東端部の様子を確認した。看護職員等宿舍3号棟地点で検出された段切り状遺構は絵図に青緑色で表現された部分に比定される可能性が高い。看護職員等宿舍1号棟地点SK299から出土した多くの貿易陶磁による茶道具一括資料は、17世紀の大名の茶の湯を知る良好な資料として重要である。</p> <p>古墳時代前期から中期にかけて多数の住居址が確認され、台地縁辺部に前期から中期の集落が展開していた可能性がある。</p>
----	--





---

---

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 15

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院

看護職員等宿舎 1 号棟地点  
臨床試験棟地点  
看護職員等宿舎 3 号棟地点 (1)

2021 年 3 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室  
東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1  
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 能登印刷株式会社

---

---





